

常呂川河口遺跡

—常呂川河口右岸掘削護岸工事に係る発掘調査報告書—

2000

北海道常呂町教育委員会



常呂川河口遺跡周辺の航空写真



1. 306号墓遺物出土状況



2. 306号墓完掘状況



1. 第VIII層石囲み炉群



2. 第VIII層出土平底押型文土器



3. 第VIII層出土平底押型文土器



1. 第Ⅶ層石囲み炉群



2. 第Ⅶ層土器出土状況



1. 第Ⅱ層出土平底押型文・櫛目文土器



2. 第Ⅱ層出土飾玉



1. 第Ⅱ層出土石棒



2. 第Ⅱ層出土骨角器



3. 第Ⅱ層出土骨角器 (側面)



4. 第Ⅱ層出土骨角器 (裏面)

序 文

常呂町は北海道の東北端に位置しています。主たる産業は農業、漁業の一次産業ですが、近年ではわが国で第三番目の面積をもつサロマ湖を訪れる観光客も増え、観光地としての側面も持っています。

また、町内には竪穴住居の総数が2,500軒以上に及ぶ「史跡常呂遺跡」をはじめに128箇所の遺跡が確認されております。町では平成3年から3年計画で各時代の住居を復原した「ところ遺跡の森」を整備、平成9、10年には研究・収蔵機能をもった埋蔵文化財センターを建設するなど貴重な埋蔵文化財の保存と活用、啓蒙・普及の推進に努めており「遺跡の町」としても知られています。

今回の発掘調査は常呂川河口右岸掘削護岸工事に伴うもので昭和63年から継続して調査を実施してまいりました。この遺跡は縄文文化・続縄文文化・擦文文化・オホーツク文化・アイヌ文化の各時期・文化にわたる大規模な遺跡であることが明らかになり、その成果の一部は「常呂川河口遺跡発掘調査報告書」(1)にまとめられています。今回の報告は先の報告書に触れられなかった下層の土器が豊富に紹介されています。特に縄文文化前期末とされる押型文と称される土器群と石囲み炉の発見はこの文化が予想以上に独自性のある社会であったことが理解できます。炉の中からは沢山の魚の骨が発見され、周辺からは動物の骨も見つかっており当時の人々の生活の様子が垣間見えるようです。さらに男性器を表現した石棒、飾り玉や骨角器などもこれまで発見例のない貴重な資料となりました。

昨年の調査ではさらに縄文文化前期(約5,000年前)の綱文式と称する土器の層が新たに確認されました。標高3mほどの低い地域ですが当時の人々にとってはかけがえのない重要な場所でありました。様々な人々が幾度となくこの場所を生活や生産活動の場として利用していたわけです。このような遺跡の発掘は地道な作業ですが地域を知る学習の場でもあります。その意味で平成6年から発掘体験の場所として活用し、昨年は小・中・高生561名が体験しました。このような事業の継続が将来、文化財の保護啓蒙につながるものと確信しているところです。

最後に調査当初から北海道教育委員会、北海道埋蔵文化財センター、東京大学名誉教授(現新潟大学教授)藤本強氏、東京大学大学院人文社会系研究科教授宇田川洋氏をはじめ関係各位から多大なご協力を頂きました。衷心より感謝申し上げます。

平成12年3月

北海道常呂町教育委員会

教育長 武田 賢一郎

例 言

1. 本書は、主に平成2年から10年にかけて実施した常呂川河口右岸掘削護岸工事に係る常呂川河口遺跡 (TK73遺跡) の緊急発掘調査の報告書である。但し、前回の報告書において触れられなかった発掘区出土遺物及び下層で確認した縄文前期末・中期・後期の包含層出土遺物についての報告を優先したため最上層の遺構については紙数の制約から最小限にとどめている。今回報告する下層の調査面積は 2,200m² であり平成4年から10年まで上層の遺構検出と並行して行ったものである。平成5年度以降の上層調査分については次回に報告する計画である。
2. 本遺跡は北海道常呂郡常呂町字常呂100-1番地先にある。遺跡の登録番号は I-16-128 である。
3. 発掘調査は網走開発建設部から委託を受けて、常呂町教育委員会が主体となって実施した。
4. 本書の執筆、編集は武田修が行った。
5. 付編の各種分析・同定については次の方々、機関に執筆を依頼した。
新美倫子 名古屋大学大学院人間情報学研究科
合地信生 斜里町立図書館
㈱パリノサーヴェイ
㈱古環境研究所
6. 遺構、遺物の写真撮影は渡部高士が行った。
7. 各種遺物の実測は恒常的な整理員である吉田義子、加藤雪江、大西信子、矢萩友子、阿部真子、小松亜佐美が行った。
8. 年度毎の調査体制
平成4年度
調査期間 平成4年4月15日～10月31日
調査担当者 武田修
調査補助員 佐々木覚
事務 田淵由美子、内海康子
作業員 白井三郎、近江谷光荣、大谷俊子、小野隆三、小野寺金夫、栗原アサ子、後藤幸三郎、佐々木由美子、竹内敦子、堀沢裕一、水野停子、矢萩友子
整理員 伊藤直枝、加藤幸恵、小林千花子、杉田弘子、鈴木和恵、高木貴美子、武田美津子、中村萬亀子、日脇京子、馬淵和恵、三浦タカ子、水野停子、矢萩友子、吉田義子

平成5年度

調査期間 平成5年4月15日～10月31日

調査担当者 武田修

調査補助員 佐々木覚

事務 田渕由美子（10月まで）、林孝子（10月から）、馬渕和恵

作業員 近江谷光荣、大谷俊子、小野寺金夫、川村武子、栗原アサ子、後藤幸三郎、
佐々木富男、佐々木由美子、竹内敦子、水野停子、室田恵美、矢萩友子

整理員 相田ゆり子、小林千花子、吉田義子

平成6年度

調査期間 平成6年4月22日～11月16日

調査担当者 武田修

調査補助員 佐々木覚、渡部高士

事務 馬渕和恵

作業員 白井三郎、遠藤篤、近江谷光荣、大谷俊子、大沼篤子、大野正男、小野寺金
夫、清永順子、工藤清、熊谷弘子、栗原アサ子、近藤正幸、後藤幸三郎、佐々
木由美子、佐藤成子、杉田弘子、高木貴美子、高野貫、竹内敦子、武田美津
子、富田すみれ、長谷川富次郎、氷室福二、深尾もと子、藤沢正一、藤田栄
司、松田ハツエ、水野停子、室田恵美、矢萩友子

整理員 伊藤直枝、遠藤篤、近江谷さゆり、加藤幸恵、加藤雪江、木村いずみ、京谷
みどり、清永順子、小林千花子、近藤正幸、坂下美津子、高木貴美子、中島
隆子、日脇京子、中村萬亀子、藤田明美、藤田栄司、前田勇三郎、矢野みど
り、矢萩友子、山内ゆり子、三好昭子、吉田義子

平成7年度

調査期間 平成7年5月9日～10月31日

調査担当者 武田修

調査員 佐々木覚

調査補助員 渡部高士

事務 馬渕和恵

作業員 白井三郎、榎並長五郎、大野正男、大谷俊子、近江谷光荣、大沼篤子、小野
寺金夫、清永順子、工藤清、熊谷弘子、後藤幸三郎、後藤譲、後藤チエ子、
佐藤成子、杉田弘子、高木貴美子、武田美津子、氷室福二、日脇京子、藤田
伊玲、藤田英司、矢野みどり、室田恵美、三好昭子

整理員 大西信子、近江谷さゆり、加藤雪江、加藤幸恵、京谷みどり、清永順子、高木貴美子、中村萬亀子、日脇京子、諸岡英子、矢野みどり、矢萩友子、吉田義子

平成8年度

調査期間 平成8年5月9日～10月31日

調査担当者 武田修

調査員 佐々木覚

調査補助員 渡部高士、井澤昭彦

事務 馬淵和恵

作業員 白井三郎、近江谷光栄、大谷俊子、大沼篤子、大野正男、清永順子、工藤清、熊谷弘子、栗原アサ子、後藤幸三郎、後藤譲、後藤チエ子、佐藤成子、佐藤美代、杉田弘子、鈴木直、高木貴美子、武田美津子、富田すみれ、氷室福二、日脇京子、藤田伊玲、三好昭子、室田恵美、矢野みどり

整理員 近江谷さゆり、大西信子、加藤幸恵、加藤雪江、木村いづみ、清永順子、仙石京子、高木貴美子、中村萬亀子、夏川悦子、根本郁代、日脇京子、諸岡英子、矢萩友子、山口美紀、吉田義子

平成9年度

調査期間 平成9年5月9日～10月31日

調査担当者 武田修

調査員 佐々木覚

調査補助員 渡部高士

事務 林尚美

作業員 阿部嘉代子、井ノ木信子、白井三郎、工藤清、近江谷光栄、大谷俊子、大沼篤子、大野正男、清永順子、熊谷弘子、栗原アサ子、後藤チエ子、後藤譲、佐々木清子、佐藤成子、佐藤美代、杉田弘子、鈴木直、高木貴美子、武田美津子、武田寿子、原田聖五、氷室福二、日脇京子、藤田伊玲、室田恵美、諸岡英子、渡辺政彦

整理員 阿部真子、大西信子、加藤幸恵、加藤雪江、中島隆子、根本郁代、日脇京子、諸岡英子、矢萩友子、山田咲子、吉田義子

平成10年度

調査期間 平成10年5月11日～10月31日

調査担当者 武田修

調査員 佐々木覚

調査補助員 渡部高士

事務 林尚美

作業員 阿部嘉代子、阿部真子、井ノ木信子、近江谷光栄、大谷俊子、大沼篤子、大野正男、清永順子、工藤清、熊谷弘子、栗原アサ子、後藤譲、後藤チエ子、佐々木清子、佐藤成子、佐藤美代、杉田弘子、高木貴美子、武田美津子、田中清子、中島隆子、西川明美、新井田智子、橋本信義、原田聖五、氷室福二、日脇京子、藤田伊玲、深尾若樹、室田恵美、諸岡英子、山根利智

整理員 吉田義子、大西信子、加藤幸恵、加藤雪江、清永順子、高岡康治、高野義人、高木貴美子、中島隆子、西川明美、根本郁代、日脇京子、藤田伊玲、矢萩友子、山田喜美子、山根利智

9. 発掘調査及び整理作業には下記の方々の指導、助言を得ました。記して感謝の意を表す
しだいです。

文化庁 坂井秀弥、奈良国立文化財研究所 浅川滋男、新潟大学文学部 藤本強、東京大
学文学部 宇田川洋、同佐藤宏之、同熊本敏朗、斜里町立知床博物館 松田功、斜里町立
図書館 合地信生、(株)田中コンサルタント 豊原熙司、紋別市立博物館 佐藤和利、北海
道教育委員会 大沼忠春、北海道埋蔵文化財センター 種市幸生、同熊谷仁、同佐藤剛、
同鈴木信、余市町水産博物館 乾芳宏、枝幸町教育委員会 高嶋孝宗、石狩市教育委員会
石橋孝夫、北網圏文化センター 太田敏量、同菅野友世、北海道開拓記念館 山田悟郎、
同赤松守雄、釧路市埋蔵文化財センター 石川朗、同高橋勇人

目 次

序	常呂町教育委員会 教育長 武 田 賢一郎	i
例 言		ii
第 I 章	調査に至る経過	1
第 II 章	遺跡の地形と基本土層	3
第 III 章	周辺の遺跡	6
第 IV 章	竪穴	9
第 V 章	ピット	31
第 VI 章	第 I 層・II 層の遺物	51
第 VII 章	第 IV 層の遺構・遺物	116
第 VIII 章	第 VI 層の遺物	121
第 IX 章	第 VII 層の遺物	123
第 X 章	第 VIII 層の遺構・遺物	130
第 XI 章	第 VIII b 層の遺物	237
第 XII 章	第 X a・X c 層の遺物	238
第 XIII 章	第 XII 層の遺構・遺物	242
第 XIV 章	まとめ	296
付 編		
付編 I	常呂川河口遺跡（縄文時代前期末～後期層）出土の動物遺存体 名古屋大学大学院人間情報学研究科 新美 倫子	301
付編 II	常呂川河口遺跡から出土した石斧の産地について 斜里町立図書館 合地 信生	308
付編 III	常呂川河口遺跡から出土した炭化材の樹種 バリノ・サーヴェイ株式会社	320
付編 IV	常呂川河口遺跡における放射性炭素年代測定 株式会社 古環境研究所	326

挿 図 目 次

<p>第1図 基本層序模式図 …………… 4</p> <p>第2図 地形模式図 …………… 5</p> <p>第3図 常呂川河口遺跡の位置と周辺の遺跡 …………… 7</p> <p>第4図 44号竪穴平面図 …………… 10</p> <p>第5図 44号竪穴カマド・床面・埋土出土土器 …………… 11</p> <p>第6図 44号竪穴埋土出土土器 …………… 12</p> <p>第7図 44号竪穴埋土出土土器 …………… 13</p> <p>第8図 45号竪穴平面図 …………… 14</p> <p>第9図 45号竪穴床面・埋土出土土器 …… 16</p> <p>第10図 45号竪穴埋土出土土器 …………… 17</p> <p>第11図 45号竪穴埋土出土土器 …………… 18</p> <p>第12図 45号竪穴埋土出土土器 …………… 19</p> <p>第13図 45号竪穴埋土出土土器 …………… 20</p> <p>第14図 45号竪穴床面・埋土出土土器 …… 21</p> <p>第15図 45 a 号・45 b 号・45 c 号竪穴平面図 …………… 23</p> <p>第16図 45 a 号竪穴埋土出土土器 …………… 24</p> <p>第17図 45 b 号竪穴埋土出土土器 …………… 25</p> <p>第18図 45 c 号竪穴埋土出土土器 …………… 26</p> <p>第19図 45号・45 a 号・45 b 号・45 c 号竪穴埋土出土土器 …………… 27</p> <p>第20図 46号竪穴平面図 …………… 29</p> <p>第21図 46号竪穴床面・埋土出土土器 …… 30</p> <p>第22図 ピット301平面図 …………… 32</p> <p>第23図 ピット301琥珀玉等出土状況図 …… 32</p> <p>第24図 ピット301床面・埋土、302埋土、303埋土、303 a 床面・埋土、311埋土、312埋土、314埋土、315埋土出土土器 …………… 33</p> <p>第25図 ピット301床面・埋土出土土器・琥珀玉 …………… 34</p> <p>第26図 ピット303・303 a ・304平面図 …… 36</p> <p>第27図 ピット302・305・305 a 平面図 …… 37</p> <p>第28図 ピット305 a 埋土出土土器 …………… 38</p> <p>第29図 ピット305埋土・305 a 埋土出土</p>	<p>石器・琥珀玉 …………… 39</p> <p>第30図 ピット306平面図 …………… 41</p> <p>第31図 ピット306床面・上部黒色土・埋土、ピット308埋土、309埋土出土土器 …………… 42</p> <p>第32図 ピット306床面・埋土出土土器 …… 43</p> <p>第33図 ピット306埋土出土土器・有孔粘土 …………… 44</p> <p>第34図 ピット308・309・309 a 平面図 …… 46</p> <p>第35図 ピット307・310・311・312平面図 …………… 46</p> <p>第36図 ピット313・314・315平面図 …………… 48</p> <p>第37図 遺構配置図 …………… 49</p> <p>第38図 発掘区出土土器〔Ⅰ・Ⅱ層〕(1) …………… 52</p> <p>第39図 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(2) …………… 53</p> <p>第40図 第Ⅰ・Ⅱ層出土有孔石錘 …………… 56</p> <p>第41図 第Ⅱ層出土有孔石錘 …………… 57</p> <p>第42図 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(3) …………… 59</p> <p>第43図 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(4) …………… 60</p> <p>第44図 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(5) …………… 61</p> <p>第45図 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(6) …………… 62</p> <p>第46図 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(7) …………… 63</p> <p>第47図 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(8) …………… 64</p> <p>第48図 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(9) …………… 65</p> <p>第49図 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(10) …………… 66</p> <p>第50図 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(11) …………… 67</p> <p>第51図 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(12) …………… 68</p> <p>第52図 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(13) …………… 69</p> <p>第53図 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(14) …………… 70</p> <p>第54図 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(15) …………… 71</p> <p>第55図 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(16) …………… 72</p> <p>第56図 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(17) …………… 73</p> <p>第57図 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(18) …………… 74</p> <p>第58図 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(19) …………… 75</p> <p>第59図 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(20) …………… 77</p> <p>第60図 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(21) …………… 78</p>
---	--

第61図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (22) …… 79	第101図	第Ⅷ層出土石器 (1) …… 127
第62図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (23) …… 81	第102図	第Ⅷ層出土石器 (2) …… 128
第63図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (24) …… 82	第103図	第Ⅷ層出土石器 (3) …… 129
第64図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (25) …… 83	第104図	第Ⅷ層1号竪穴平面図 …… 131
第65図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (26) …… 84	第105図	第Ⅷ層1号竪穴埋土出土土器 …… 132
第66図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (27) …… 85	第106図	第Ⅷ層1号竪穴埋土出土土器 …… 133
第67図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (28) …… 86	第107図	第Ⅷ層ピット1・2・3平面図 …………… 134
第68図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (29) …… 88	第108図	第Ⅷ層ピット4平面図 …… 134
第69図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (30) …… 89	第109図	第Ⅷ層2号竪穴、ピット5平面 図 …… 136
第70図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (31) …… 90	第110図	第Ⅷ層ピット6平面図 …… 137
第71図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (32) …… 91	第111図	第Ⅷ層ピット6埋土出土土器 …… 138
第72図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (33) …… 92	第112図	第Ⅷ層石囲み炉群 (1) …… 140
第73図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (34) …… 93	第113図	第Ⅷ層石囲み炉群 (2) …… 141
第74図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (35) …… 95	第114図	第Ⅷ層出土土器 (1) …… 142
第75図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (36) …… 96	第115図	第Ⅷ層出土土器 (2) …… 143
第76図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (37) …… 97	第116図	第Ⅷ層出土土器 (3) …… 144
第77図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (38) …… 98	第117図	第Ⅷ層出土土器 (4) …… 145
第78図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (39) …… 99	第118図	第Ⅷ層出土土器 (5) …… 146
第79図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (40) …… 100	第119図	第Ⅷ層出土土器 (6) …… 147
第80図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (41) …… 101	第120図	第Ⅷ層出土土器 (7) …… 148
第81図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (42) …… 102	第121図	第Ⅷ層出土土器 (8) …… 149
第82図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (43) …… 103	第122図	第Ⅷ層出土土器 (9) …… 150
第83図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (44) …… 104	第123図	第Ⅷ層出土土器 (10) …… 153
第84図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (45) …… 105	第124図	第Ⅷ層出土土器 (11) …… 154
第85図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (46) …… 106	第125図	第Ⅷ層出土土器 (12) …… 155
第86図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (47) …… 107	第126図	第Ⅷ層出土土器 (13) …… 156
第87図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (48) …… 109	第127図	第Ⅷ層出土土器 (14) …… 157
第88図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (49) …… 110	第128図	第Ⅷ層出土土器 (15) …… 158
第89図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (50) …… 111	第129図	第Ⅷ層出土土器 (16) …… 159
第90図	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (51) …… 112	第130図	第Ⅷ層出土土器 (17) …… 160
第91図	第Ⅰ・Ⅱ層出土石器 (1) …… 114	第131図	第Ⅷ層出土土器 (18) …… 161
第92図	第Ⅰ・Ⅱ層出土石器 (2) …… 115	第132図	第Ⅷ層出土土器 (19) …… 162
第93図	縄文後期集石・焼土平面図 …… 117	第133図	第Ⅷ層出土土器 (20) …… 163
第94図	第Ⅳ層出土土器 …… 119	第134図	第Ⅷ層出土土器 (21) …… 164
第95図	第Ⅳ層出土土器 …… 120	第135図	第Ⅷ層出土土器 (22) …… 165
第96図	第Ⅵ層出土土器 (1) …… 121	第136図	第Ⅷ層出土土器 (23) …… 166
第97図	第Ⅵ層出土土器 (2) …… 122	第137図	第Ⅷ層出土土器 (24) …… 167
第98図	第Ⅵ層土層図 …… 124	第138図	第Ⅷ層出土土器 (25) …… 168
第99図	第Ⅶ層出土土器 (1) …… 125		
第100図	第Ⅶ層出土土器 (2) …… 126		

第139图	第VIII層出土土器 (26)	169	第179图	第VIII層出土石器 (6)	214
第140图	第VIII層出土土器 (27)	170	第180图	第VIII層出土石器 (7)	215
第141图	第VIII層出土土器 (28)	171	第181图	第VIII層出土石器 (8)	216
第142图	第VIII層出土土器 (29)	172	第182图	第VIII層出土石器 (9)	217
第143图	第VIII層出土土器 (30)	174	第183图	第VIII層出土石器 (10)	218
第144图	第VIII層出土土器 (31)	175	第184图	第VIII層出土石器 (11)	219
第145图	第VIII層出土土器 (32)	176	第185图	第VIII層出土石器 (12)	220
第146图	第VIII層出土土器 (33)	177	第186图	第VIII層出土石器 (13)	221
第147图	第VIII層出土土器 (34)	178	第187图	第VIII層出土石器 (14)	222
第148图	第VIII層出土土器 (35)	180	第188图	第VIII層出土石器 (15)	223
第149图	第VIII層出土土器 (36)	181	第189图	第VIII層出土石器 (16)	224
第150图	第VIII層出土土器 (37)	182	第190图	第VIII層出土石器 (17)	225
第151图	第VIII層出土土器 (38)	183	第191图	第VIII層出土石器 (18)	226
第152图	第VIII層出土土器 (39)	184	第192图	第VIII層出土石器 (19)	227
第153图	第VIII層出土土器 (40)	185	第193图	第VIII層出土石器 (20)	228
第154图	第VIII層出土土器 (41)	187	第194图	第VIII層出土石器 (21)	229
第155图	第VIII層出土土器 (42)	188	第195图	第VIII層出土石器 (22) · 骨角器	230
第156图	第VIII層出土土器 (43)	189			
第157图	第VIII層出土土器 (44)	190	第196图	第VIII層出土石器 (23)	231
第158图	第VIII層出土土器 (45)	191	第197图	第VIII層出土石器 (24)	232
第159图	第VIII層出土土器 (46)	192	第198图	第VIII層出土石器 (25)	233
第160图	第VIII層出土土器 (47)	193	第199图	第VIII層出土石器 (26)	234
第161图	第VIII層出土土器 (48)	194	第200图	第VIII層出土石器 (27)	235
第162图	第VIII層出土土器 (49)	195	第201图	第Xa層烧土·遺物出土平面图	236
第163图	第VIII層出土土器 (50)	196	第202图	第VIII b層出土石器	237
第164图	第VIII層出土土器 (51)	197	第203图	第Xc層出土石器	238
第165图	第VIII層出土土器 (52)	198	第204图	第Xa層出土土器 (1)	239
第166图	第VIII層出土土器 (53)	199	第205图	第Xa層出土土器 (2)	240
第167图	第VIII層出土土器 (54)	200	第206图	第Xa·Xc層出土土器 (3)	241
第168图	第VIII層出土土器 (55)	201	第207图	第XII層石囲み炉群 (1)	243
第169图	第VIII層出土土器 (56)	202	第208图	第XII層石囲み炉群 (2)	245
第170图	第VIII層出土土器 (57)	204	第209图	第XII層出土土器 (1)	246
第171图	第VIII層出土土器 (58)	205	第210图	第XII層出土土器 (2)	247
第172图	第VIII層出土土器 (59)	206	第211图	第XII層出土土器 (3)	248
第173图	第VIII層出土土器 (60)	207	第212图	第XII層出土土器 (4)	249
第174图	第VIII層出土石器 (1)	209	第213图	第XII層出土土器 (5)	250
第175图	第VIII層出土石器 (2)	210	第214图	第XII層出土土器 (6)	251
第176图	第VIII層出土石器 (3)	211	第215图	第XII層出土土器 (7)	252
第177图	第VIII層出土石器 (4)	212	第216图	第XII層出土土器 (8)	253
第178图	第VIII層出土石器 (5)	213	第217图	第XII層出土土器 (9)	254

第218図	第Ⅻ層出土土器 (10) ……………	256	第237図	第Ⅻ層出土土器 (29) ……………	276
第219図	第Ⅻ層出土土器 (11) ……………	257	第238図	第Ⅻ層出土土器 (30) ……………	277
第220図	第Ⅻ層出土土器 (12) ……………	258	第239図	第Ⅻ層出土土器 (31) ……………	278
第221図	第Ⅻ層出土土器 (13) ……………	259	第240図	第Ⅻ層出土土器 (32) ……………	279
第222図	第Ⅻ層出土土器 (14) ……………	260	第241図	第Ⅻ層出土土器 (33) ……………	280
第223図	第Ⅻ層出土土器 (15) ……………	261	第242図	第Ⅻ層出土土器 (34) ……………	281
第224図	第Ⅻ層出土土器 (16) ……………	262	第243図	第Ⅻ層出土土器 (35) ……………	282
第225図	第Ⅻ層出土土器 (17) ……………	263	第244図	第Ⅻ層出土土器 (36) ……………	283
第226図	第Ⅻ層出土土器 (18) ……………	264	第245図	第Ⅻ層出土土器 (37) ……………	284
第227図	第Ⅻ層出土土器 (19) ……………	266	第246図	第Ⅻ層出土土器 (38) ……………	285
第228図	第Ⅻ層出土土器 (20) ……………	267	第247図	第Ⅻ層出土土器 (39) ……………	286
第229図	第Ⅻ層出土土器 (21) ……………	268	第248図	第Ⅻ層出土土器 (40) ……………	287
第230図	第Ⅻ層出土土器 (22) ……………	269	第249図	第Ⅻ層出土石器 (1) ……………	289
第231図	第Ⅻ層出土土器 (23) ……………	270	第250図	第Ⅻ層出土石器 (2) ……………	290
第232図	第Ⅻ層出土土器 (24) ……………	271	第251図	第Ⅻ層出土石器 (3) ……………	291
第233図	第Ⅻ層出土土器 (25) ……………	272	第252図	第Ⅻ層出土石器 (4) ……………	292
第234図	第Ⅻ層出土土器 (26) ……………	273	第253図	第Ⅻ層出土石器 (5) ……………	293
第235図	第Ⅻ層出土土器 (27) ……………	274	第254図	第Ⅻ層出土石器・石棒・飾玉・ 骨角器 ……………	294
第236図	第Ⅻ層出土土器 (28) ……………	275			

図 版 目 次

図版 1	44号竪穴 45号竪穴	図版 9	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (1)
図版 2	46号竪穴 46号竪穴土器出土状況	図版10	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (2)
図版 3	ピット301 ピット301遺物出土状況	図版11	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器・土製品 (3)
図版 4	ピット301床面出土土器 埋土出土石器	図版12	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (4)
図版 5	ピット303埋土出土土器 a 埋土出土土器 a・304	図版13	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (5)
図版 6	ピット306遺物出土状況 完掘状況	図版14	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (6)
図版 7	ピット306床面出土土器・石器 ピット306埋土出土土器	図版15	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (7)
図版 8	ピット306埋土出土石器・有孔粘土 第Ⅰ・Ⅱ層出土有孔石錘 第Ⅱ層出土有孔石錘	図版16	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (8)
		図版17	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (9)
		図版18	第Ⅰ・Ⅱ層出土土器 (10)
		図版19	第Ⅰ・Ⅱ層出土石器 (1)
		図版20	第Ⅰ・Ⅱ層出土石器 (2)
		図版21	第Ⅳ層出土石器
		図版22	第Ⅶ層出土石器 (1)
		図版23	第Ⅶ層出土石器 (2)
		図版24	第Ⅶ層出土石器 (3)
		図版25	第Ⅷ層 1号竪穴 第Ⅷ層 2号竪穴
		図版26	第Ⅷ層 2号竪穴内ピット 5 ピット

	6 埋土出土土器 縄文後期堂林式	図版47	第VIII層出土土器 (10)
図版27	第VIII層出土土器 (1)	図版48	第XII層石囲み炉群
図版28	第VIII層出土土器 (2)	図版49	第XII層出土土器 (1)
図版29	第VIII層出土土器 (3)	図版50	第XII層出土土器 (2)
図版30	第VIII層出土土器 (4)	図版51	第XII層土器出土状況 (H'65・66グリッド)
図版31	第VIII層石囲み炉群 第VIII層出土土器 (5)		第XII層土器出土状況 (I'57グリッド)
図版32	第VIII層出土土器 (6)	図版52	第XII層出土土器 (3)
図版33	第VIII層出土土器 (7)	図版53	第XII層出土土器 (4)
図版34	第VIII層出土土器 (8)	図版54	第XII層出土土器 (5)
図版35	第VIII層出土土器 (9)	図版55	第XII層出土土器 (6)
図版36	第VIII層出土土器 (10)	図版56	第XII層出土土器 (7)
図版37	第Xa・Xc層出土土器	図版57	第XII層出土土器 (8)
図版38	第VIII層出土土器 (1)	図版58	第XII層出土土器 (9)
図版39	第VIII層出土土器 (2)	図版59	第XII層出土土器 (10)
図版40	第VIII層出土土器 (3)	図版60	第XII層出土土器 (11)・骨角器
図版41	第VIII層出土土器 (4)	図版61	第XII層出土土器 (1)
図版42	第VIII層出土土器 (5)	図版62	第XII層出土土器 (2)
図版43	第VIII層出土土器 (6)	図版63	第XII層出土土器 (3)
図版44	第VIII層出土土器 (7)	図版64	第XII層出土土器 (4)
図版45	第VIII層出土土器 (8)	図版65	第XII層出土土器 (5)
図版46	第VIII層出土土器 (9)		

付編表図版目次

付編 I

表 1	出土動物種名	303
表 2	8層魚類出土量 (焼骨)	304
表 3	8層鳥類・哺乳類出土量 (焼骨)	305
表 4	8層遺構外出土資料 (焼骨以外)	305
表 5	12層魚類出土量 (焼骨)	306
表 6	12層鳥類・哺乳類出土量 (焼骨)	307

付編 II

表 1	タイプ I と II の青色片岩の肉眼による違い	309
表 2	芦別西ベンケ川地域に産するタイプ II - 青色片岩中のヒスイ輝石についての化学分析	313
表 3	芦別西ベンケ川地域に産するタイプ II - 青色片岩中のナトリウム角閃石についての化学分析	314
図 1	北海道からサハリンにかけての高圧変成岩 (青色片岩) の分布	310

図 2	神居古潭変成帯におけるタイプ I と II 青色片岩の産状	310
図 3	タイプ I と II 青色片岩が形成された温度圧力と変成反応	311
図 4	タイプ I と II 青色片岩中のナトリウム輝石の化学組成	315
図 5	タイプ I と II 青色片岩中のナトリウム-カルシウム角閃石の化学組成	315
写真 1	常呂川河口遺跡から出土した石斧（ヒスイ輝石の多いタイプ II - 青色片岩）の顕微鏡写真	318
写真 2	常呂川河口遺跡から出土した石斧（藍閃石の多いタイプ II - 青色片岩）の顕微鏡写真	318
写真 3	タイプ I - 青色片岩の顕微鏡写真	319

付編 III

表 1	樹種同定結果	321
図 1	炭化材 (1) トウヒ属 コナラ属コナラ亜属コナラ節 ニレ属	324
図 2	炭化材 (2) カエデ属	325

口 絵 写 真

1 (1)	常呂川河口遺跡周辺の航空写真	5 (1)	第Ⅹ層出土平底押型文・楡目文土器
2 (1)	306号墓遺物出土状況	(2)	第Ⅹ層出土飾玉
(2)	306号墓完掘状況	6 (1)	第Ⅹ層出土石棒
3 (1)	第Ⅷ層石囲み炉群	(2)	第Ⅹ層出土骨角器
(2)	第Ⅷ層出土平底押型文土器	(3)	第Ⅹ層出土骨角器 (側面)
(3)	第Ⅷ層出土平底押型文土器	(4)	第Ⅹ層出土骨角器 (裏面)
4 (1)	第Ⅹ層石囲み炉群		
(2)	第Ⅹ層土器出土状況		

第 I 章 調査に至る経過

1

常呂川は十勝、石狩、北見の分水嶺である三国山(標高1,541m)に源を發し、流路延長120km、流域面積1,930km²に及ぶ一級河川である。

常呂川流域の気候は、オホーツク海高気圧の影響を受け雨の少ない地域であるが、明治30年頃からの開拓による森林伐採の結果、河川の水量調節機能は低下し洪水が起りやすくなったと考えられている。明治31年、大正4、8、11年、昭和7、9、10、14、22、23、28、30、32、33、37、39、44、46、47、50年と相次いで記録的な洪水が発生している。毎年のように起こる洪水の治水対策は大正10年から始められ現在も嘗々と続けられている。常呂川治水の完成は地域住民の悲願でもある。

今回、緊急発掘調査の対象となった地域は昭和50年の台風6号による出水で河川の決壊、床上浸水等の被害が出たため新捷水路を設けるために工事計画が策定された。常呂川は本遺跡の付近で大きく蛇行しているため水の疎通が悪く、豪雨の時に上流部で溢水するなどの問題があり、水の流れをスムーズにするために蛇行部のショートカットを行うことを目的とされた。発掘調査中の平成4年9月、平成7年9月の集中豪雨では発掘区のほぼ全域が水に浸かり、一部は堆積土が押し流され遺構が破壊されるということもあった。昭和52年から用地内の土地買収も進められ、昭和56年には工事着手の計画であった。しかし、直前に遺跡の存在が確認され昭和56年11月4日に埋蔵文化財保護のための事前協議書が網走開発建設部から提出された。これを受けて同年11月11日～12日に北海道教育委員会、(財)北海道埋蔵文化財センター、本町教育委員会の三者で包蔵地範囲確認調査を実施した。この結果、本遺跡の主体は標高4～5mの砂丘上にあり、さらに低地域にも竪穴の存在することが判明した。本遺跡の面積は約140,000m²に及びこの内39,000m²が発掘必要区域である。時間的には縄文中期・後期・晩期、続縄文、擦文、オホーツク、アイヌ文化の各期にわたっている。砂丘上では縄文中期までの包含層は砂層を挟んで約1m50cmにも達する。これらの調査結果を踏まえて発掘調査を行うことも協議されたが、調査には莫大な経費と期間が費やされるなどの問題があり早速の実施には至らなかった。

その後、網走開発建設部で常呂川下流域の堤防整備が構じられ、本遺跡を回避するため新捷水路ルートの変更も考えられるため、工事計画以外の区域についても包蔵地範囲確認調査が必要となった。昭和57年9月2日に再度、事前協議書が提出された。このため北海道教育委員会と本町教育委員会は昭和60、61、62年の3年間で確認調査を実施した。昭和60年、61年度の調査地域は標高2～3mの常呂川の氾濫原と考えられる地域であり、全域に包含層が認められた。昭和62年の調査地域は常呂大橋下の中洲であるが包含層は認められなかった。この様な背景と

ともに常呂川下流域の堤防整備もほぼ完了したため本来の計画通りに新捷水路工事を進めるために事前の緊急発掘調査の依頼があった。しかし、調査にはかなりの歳月を要することや調査体制の問題などもあり、本町教育委員会が独自に対応することは困難であるため北海道教育委員会に調査機関の紹介を依頼したが、他に適した機関が無いとの回答があったので本町教育委員会が調査体制の充実を図り実施することになった。

新捷水路は護岸工事部分を含めると全幅120m、延長320mであるが調査を終了するには約10年間の歳月が予想される。協議者としてもそれまで事業の実施を延ばすことは困難であり、新捷水路幅80mのうちセンターから東側の幅40mから着手したいとの要望があった。しかし、この場合幅20mの護岸部が後回しになり、検出される遺構も半掘りのまま残される恐れもあるため調査については護岸部を含めて行うことにした。

2

調査グリッドは新捷水路センター杭の I P. No 1～600 を基準に 4×4 m で設定し、東西をアルファベット、南北を数字で示した。

参考文献

- 網走開発建設部 『常呂川治水史』 1987
常 呂 町 『常呂町史』 1969

第II章 遺跡の地形と基本土層

常呂地域の地形・地質は標高70～175m以上の丘陵・高位段丘、標高20～30mの中位段丘、標高5～15mの低位段丘に分けられる。¹⁾本遺跡は中位段丘から派生する常呂川に向かって伸びる標高4～5mの低位段丘と、この面よりもさらに低面の標高2～3mほどの常呂川の氾濫原に存在している。昭和63年と平成1年にはこの氾濫原と考えられる区域を調査した。この区域の地盤は層厚約30～40cmの黄褐色粘土層でありその下層は粒子の粗い砂と礫混じりの層が堆積している。黄褐色粘土層は常呂川岸の付近では層厚約3～4mに及んでいる。川岸に移行するにしが黄褐色粘土層の堆積は厚みを増すようである。昭和63年に行った包蔵地範囲確認調査では深度約3mのところから木杭が出土している。この区域では現在のどこ擦文文化期の竪穴しか発見されていないが、木杭の出土から裏付けられるように下層には他の時期の包含層も遺されている可能性がある。氾濫原と考えられるこの区域には大正年間に作られた築堤がある。盛土による築堤の上部を道路として利用していたため原地形は捉えにくいがおそらく中位段丘方面から常呂川に向かって緩く傾斜していたと思われる。一方、平成2年から調査している標高4～5mの低位段丘はトコロチャシ跡付近から西側に向かって伸びている。調査当初は柴浦第二・第一遺跡、常呂竪穴群のある新砂丘I、古砂丘と同一の海成砂丘台地と考えていたが、調査が進むにつれて様々なことが判明した。一つはこの低位段丘面が常呂川の氾濫の繰り返しによる堆積で形成されたと考えられることである。第1図の基本層序模式図に示すとおり基本的な土層は砂質土層であるが、この砂層の粒子は海成層のものよりも極めて粗く、海成層には含まれない大型の角礫を多量に含むことである。角礫混じりの砂層は特に第III層において顕著である。この砂礫層・砂層は数枚の薄い文化層と交互に堆積を繰り返す。平成8、9年の調査では縄文中期のトコロ6類・5類の下層に第Xa層の(古)トコロ6類と第VII層の平底押型文II群、平成10年の調査では第Xa層の下層にある第Xc層からも北筒式系の土器包含層、平成11年の調査ではさらに第VII層の縄文前期綱文式の包含層を確認した。

第VII層の砂礫層からは層厚約30cmの中から縄文前期中野式、シュブノツナイ式、押型文と中期のトコロ6類・5類の北筒式が満遍なく出土している。安定した遺物の出土状態をもつ第VIII層とは明らかに異なった出方をしている。第VII層は河川の氾濫等による土砂の流失等による影響で、本来は下層にある土器が上部に押し上げられ時期が逆転したものと考えられる。平成2年から調査を行っている低位面はこの様な洪水等による土砂の堆積がたえず繰り返され現在の様な地形になったものであり、そこには第2図の地形模式図に示すとおり少なくとも3回のせり出しがあったようである。

第一次形成地は第VIII層の縄文前期末の押型文から第VIII層中期のトコロ6類・5類が形成され礫、角礫を含む極めて硬質な黒色土である。層厚は薄い区域で10～15cm、厚い区域で約20～30

cm。河川の氾濫等によって西側域が削り取られている。

第二次形成地は第一次形成地を覆い、第II層～第VII層が約2～20mほど大きくせり出している。

第三次形成地には擦文期の竪穴と続縄文後北C₂・D式の生活面、オホーツク文化期の遺物包含層があるだけで、それよりも以前の時期の遺構は全く認められない。第二次形成地と第三次形成地の間は自然にできた窪みが細長く伸びており、オホーツク文化期の生活面があり土器などのほか獣骨類も散布されている。このことから第二次形成地は縄文中期後半から晩期にかけて少なくとも6回の河川堆積の後に形成された可能性がある。第三次形成地はそれ以後のものであり、砂質土は第二次形成地に比して粒子は極めて細かい。

層位ごとの時期区分は概ね次の通りである。

第I層 表土層

第II層 茶褐色砂層 縄文晩期、続縄文、擦文
オホーツク文化

第III層 褐色砂層 無遺物層

第IV層 黒色土層 縄文後期

第V層 褐色砂層 無遺物層

第VI層 黒色砂層 縄文中期後葉

第VII層 褐色砂層 遺物包含層

第VIII層 黒色土層 縄文中期中葉

第VIIIb層 黒褐色砂層 遺物包含層

第IX層 褐色砂層 無遺物層

第X層 明褐色砂層 無遺物層

第Xa層 黒褐色砂層 縄文中期前葉

第Xc層 黒褐色砂層 //

第XI層 褐色砂層 無遺物層

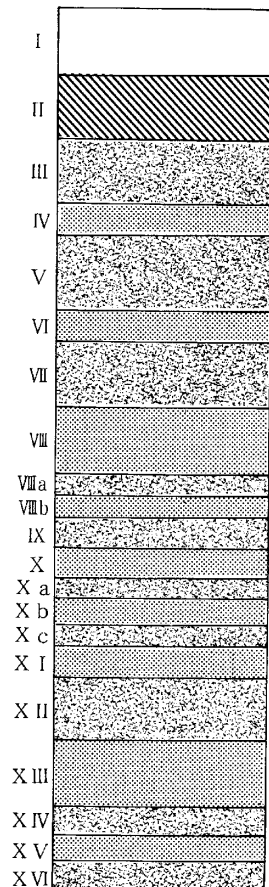
第XII層 黒色砂層 縄文前期末

第XIII層 褐色砂層 無遺物層

第XIV層 黒色砂層 無遺物層

第XV層 明褐色砂層 無遺物層

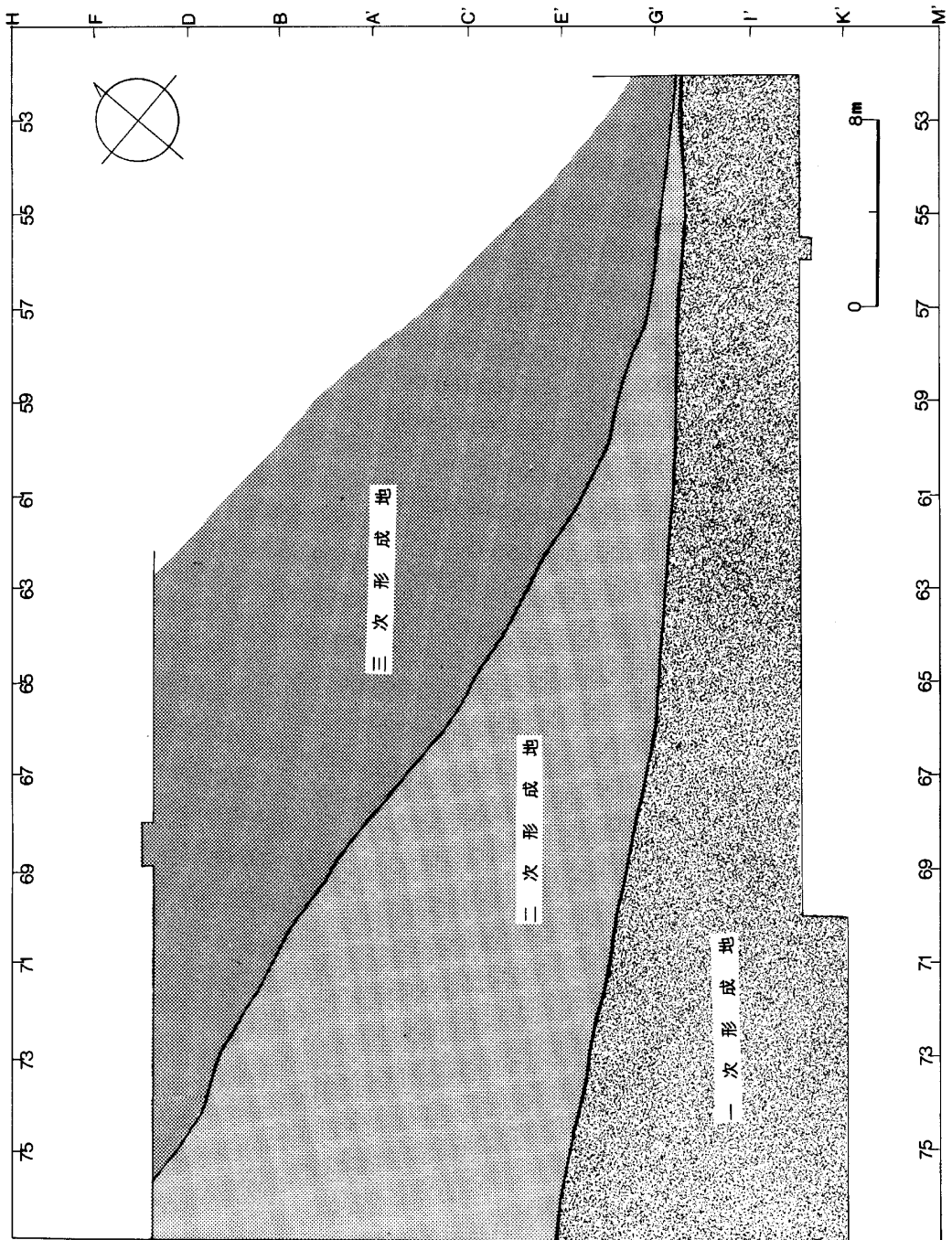
第XVI層 黒色砂層 縄文前期



第1図 基本層序模式図

参考文献

- 1) 遠藤邦彦・上杉陽『常呂』所収 東京大学文学部 1972

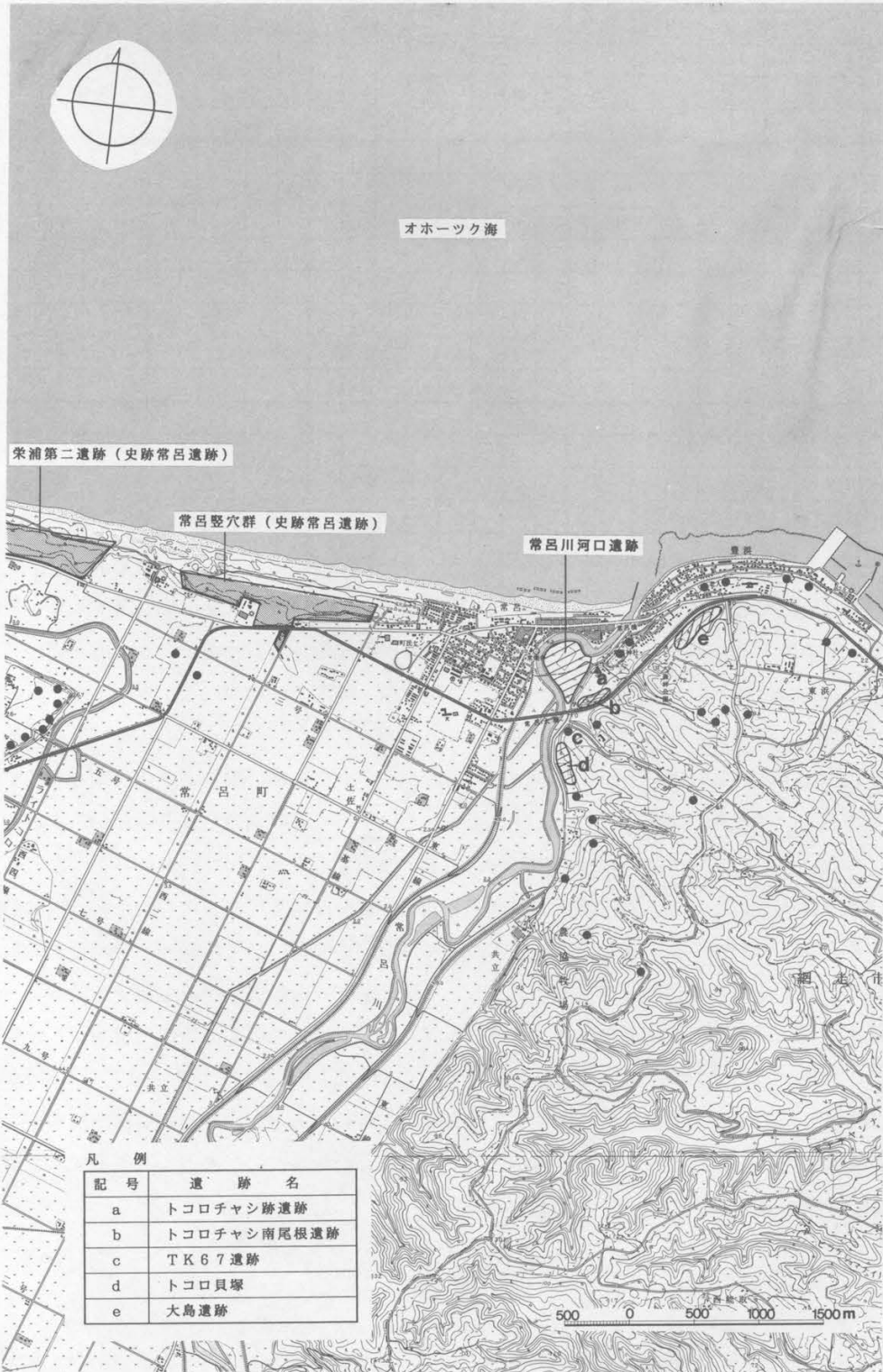


第2図 地形模式図

第Ⅲ章 周辺の遺跡

本遺跡の後背地にある標高20～30mの中位段丘には学史的にも有名な遺跡が多数存在する(第3図)。トコロチャシ跡遺跡は本遺跡から約100～150mの距離である。昭和35年には擦文文化とアイヌ文化の研究を目的とした調査が東京大学文学部により行われ、オホーツク文化期1号内側(藤本e群)、1号外側の2軒が調査された。また、竪穴の埋土中には近世アイヌ文化の遺構も検出されている。昭和38年にはアイヌ文化期の濠とオホーツク文化期の竪穴との関係を解明するためオホーツク文化期2号竪穴(藤本e群)と新旧2本の濠が調査されている。平成3年からは再度、トコロチャシ跡の濠の調査を実施しており、平成7年度の調査においては刀子、中柄、青銅製円盤をもつ矢筒、短刀、長刀を副葬するアイヌ墓のほかオホーツク文化期の屋外の骨塚も発見されている¹⁾。平成8年の調査ではチャシへの入口と思われる橋状遺構(ルイカ)に類する個所も検出され、先に検出されていた柵列柱穴と合わせチャシ跡の構造解明に大きな成果が得られている。

さらに東京大学は平成10年からオホーツク文化期の竪穴の調査を開始した。トコロチャシ跡遺跡0地点としたチャシの濠の南側に位置する7号竪穴住居である。この竪穴の調査は平成11年も引き続き行われた。長軸13.5m、短軸9.7mの7a号と長軸8.5m、短軸7.4mの7c号の2軒重複住居である。いずれも火災を受けているが、特に7a号では白樺樹皮で巻かれた炭化材列などが確認され、住居の内部構造を解明する上で貴重な情報をもたらした。さらに各種の遺物も豊富である。骨塚の前面から出土した十字形の青銅製品をはじめ、炭化木製品では大小の盆・碗・樹皮容器・櫛・杓子・スプーンなどがある。骨塚ではクマ・エゾシカ・タヌキ・キツネなどがある。時期はソーメン状貼付文(藤本編年e群)に比定される²⁾。今後の調査と詳細な分析が待ち遠しいところである。この様に、トコロチャシ跡遺跡から南側に続く台地の縁辺部にはオホーツク文化期をはじめとした大型の住居の窪地が遺されており、常呂川河口遺跡を含むこの区域は栄浦第二遺跡に匹敵するオホーツク文化の集落遺跡と言える。トコロチャシ跡遺跡に連続するトコロチャシ南尾根遺跡は標高60～80mの高位段丘面から西側に派生する台地の縁辺部にある。地表面から32軒の竪穴が観察され、昭和39年に東京大学文学部により北筒式の1号竪穴が調査されている。昭和50年には「トコロバイパス建設」(国道238号線)工事に伴う緊急発掘調査がおこなわれ18軒の竪穴が発掘されている。この調査では特に縄文後期中葉の船泊上層式・鮎潤式・エリモB式が出土している。昭和61年にはこの遺跡の最西端部で住宅建設工事に伴う緊急発掘調査が行われ8軒の竪穴が調査されている。擦文文化の竪穴埋土からは頸部に「井」のヘラ記号を持つ五所川原産の須恵器である長頸壺が出土し、縄文晩期のピットからは中葉頃の刺突の施された鉢型土器、ボート形の浅鉢が出土している。トコロチャシ南尾根遺跡から沢を挟んだ対岸にはTK67遺跡がある。昭和47年に発見されたこの遺跡は昭和61年、



第3図 常呂川河口遺跡の位置と周辺の遺跡

常呂川河口遺跡

62年に道営畑総事業の農道改良工事に伴い緊急発掘されている。常呂川を望む台地の縁辺部から比較的急傾斜な北側斜面に擦文期の竪穴5軒、時期不明のピット群があり、さらに奥まったところには続縄文期を主体とした竪穴がある。擦文期は後半期のものであり、包含層からは五所川原産の大甕の須恵器が出土している。常呂町内から須恵器が出土する遺跡はこのほか包蔵地範囲確認調査において岐阜127-6番地から1点、常呂川河口遺跡から1点出土している。いずれも五所川原産である。TK67遺跡に連続しているのがトコロ貝塚である。長さ約200m、幅約70mのカキ貝を主体とした縄文中期北筒式の貝塚である。昭和33年～36年に東京大学文学部による学術調査が実施され、トコロ6類・5類が層的に確認されるとともに縄文早期の石刃鏃が類竹管文を3段めぐらしたトコロ14類土器と共伴することが明らかにされた。石刃鏃は平成11年度に行われた東京大学大学院人文社会系研究科教授宇田川洋氏を研究代表とする地域連携推進研究の確認調査においてもトコロチャシ跡遺跡に近接する台地縁部から多量の石刃とともに出土している。

この様に本遺跡の後背地の段丘上には大遺跡が多く、時期も縄文早期からアイヌ期まで連続しており、常呂川河口遺跡の性格を解明する上でも重要な地域である。例えばオホーツク文化期の竪穴をみてもトコロチャシ跡の4軒と本竪穴の15号はソーメン状貼付文（藤本e群）の時期であり、両者に新旧関係があるのかそれとも同時併存するか等の問題がある。擦文期の竪穴も常呂川河口遺跡と同じ後期のものが多い。続縄文期の竪穴では宇津内系が多いようである。縄文後期では今のところ常呂川河口遺跡からは竪穴の発見はないが、ピット2基、集石4基がありこの周辺にも集落跡が予想される。これはオホーツク文化期に限らず全時代にも共通することである。これらの遺跡はごく一部分を調査したにすぎず各時代の全容を明らかにすることはできないが、現時点でこれらの遺跡と対比すると低地である常呂川河口遺跡の方が面としての広がり大きいようである。段丘上の遺跡と低地の遺跡は同時併存したのか、ある程度の時期（間）があるのか今後の課題である。常呂川河口遺跡の場合は漁労活動の一時的な生活場としてではなくかなり定住しているようである。それは前北式系の人々が最も顕著である。宇津内系の竪穴は最も多く、集落の近くに墓域を形成している。墓の副葬品は他の遺跡から比較すると圧倒的に豊富である。前回報告したピット95・254・263aと今回、報告するピット301がその例であり特に琥珀玉の出土量の多さには目を見張るものがある。副葬品の豊富さは生産活動の賜物であり、安定した食料源の獲得が一定の定住をもたらしたのであろう。低地にも大規模の遺跡が存在する理由を改めて考える必要がある。

文 献

- 1) 東京大学文学部考古学研究室・常呂研究室「トコロチャシ跡遺跡」1995年度調査略報 1995.9
- 2) 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室・常呂実習施設「トコロチャシ跡遺跡0地点」1999年度調査略報 1999.9

第IV章 竪 穴

44 号 竪 穴

遺 構 (第4図、図版1-1)

本竪穴はB76、C76グリットに位置する。床面近くにはブロック状化した白色の樽前a火山灰が堆積しておりこれを取り除くと茶褐色砂の床面が現れた。規模は東西約6m、南北約5.90mの方形を呈する。壁高はほぼ垂直に立上り確認面から約30cmを計る。黄褐色粘土を利用したカマドは東壁中央部にあるが床面を約12cmほど掘り下げた上に構築している。両袖部と炊口部が近代の攪乱により袖部の一部が破壊を受けており遺存は悪い。第4図にも示す通り袖部、煙道は比較的大型の角礫を芯材として利用している。焚口部から煙道部までは短く推定約95cmである。焼土内には魚骨と思われる微細な骨片が含まれる。カマドの南側にも黄褐色粘土の塊が見られる。当初はこれもカマドと判断していたが切断すると黒褐色砂の上に黄褐色粘土が堆積したもので燃焼部の赤化も見られないためカマドでないと判断した。中央部には炉跡もあったと思われるがこれも近代の攪乱を受けているため検出できなかった。

4本の支柱穴の深度は約20~30cmを計りさほど深くない。壁柱穴は東壁1本、西壁1本、南壁1本ある。床面の中央部周辺は平坦であるが、各壁部では若干の高まりをもつ。

遺 物 (第5図~第7図)

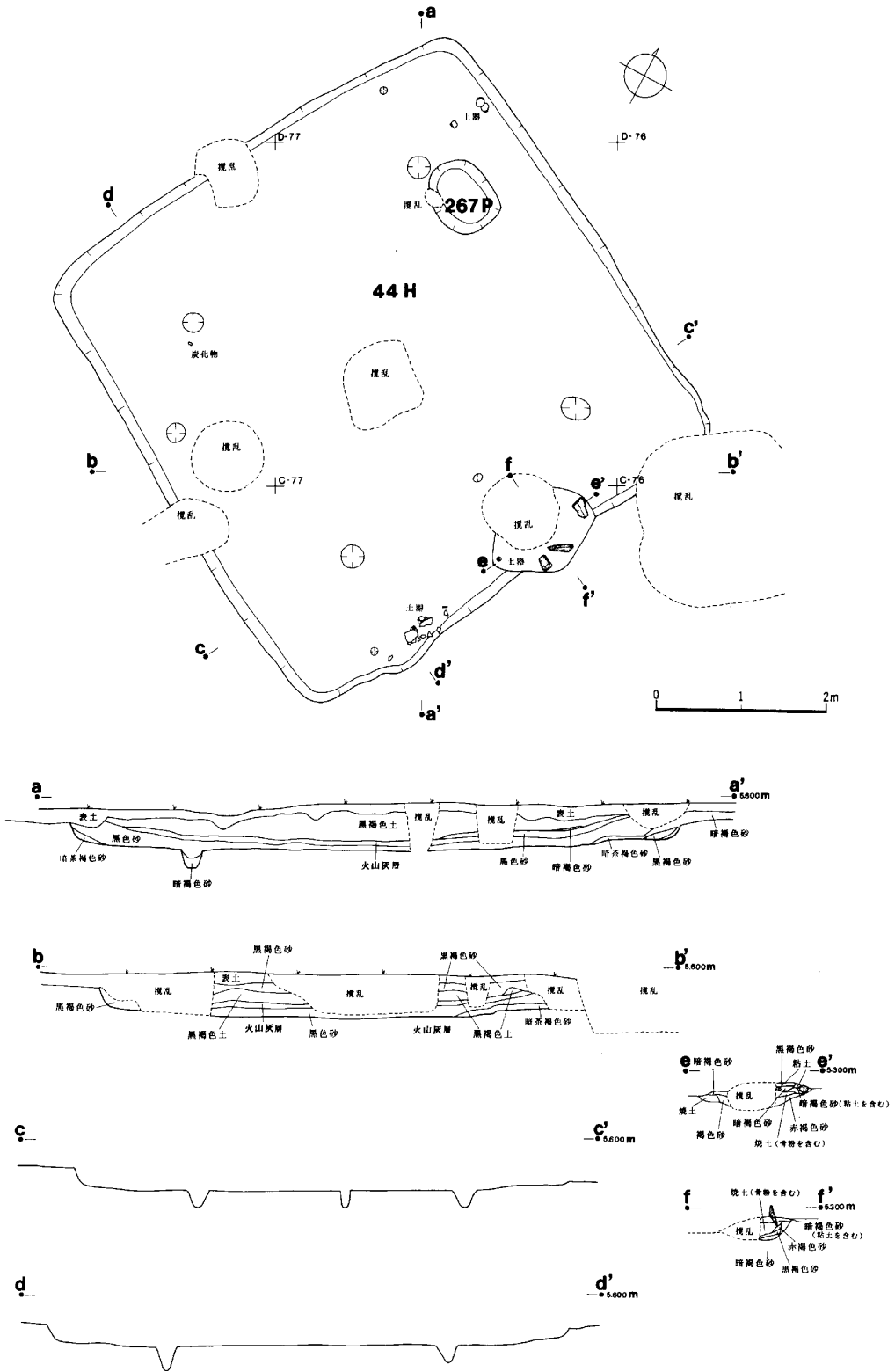
1はカマド内から出土した口径約29cm、器高約39cmの大型鉢形土器。口縁部は大きく外反し2条の列点文を持つ。器面は短沈線を交互に施し、横走沈線で区画された複段文である。文様は土器の上位にあり胴中央部まで及んでいない。2・3は床面出土の無文小型鉢形土器。2の底部には板目痕がある。3の底部は小さく凹凸があり立てることができないほど不安定である。4~7は高杯とその脚部。8は無文の中型土器。9は無文の大型鉢形土器。

第6図-1~6は続縄文後北C₂・D式。7は同宇津内II b式。8・9は同宇津内II a式。1・10も宇津内II a式の胴部と思われる。11・12は縄線文がある。続縄文初頭であろう。

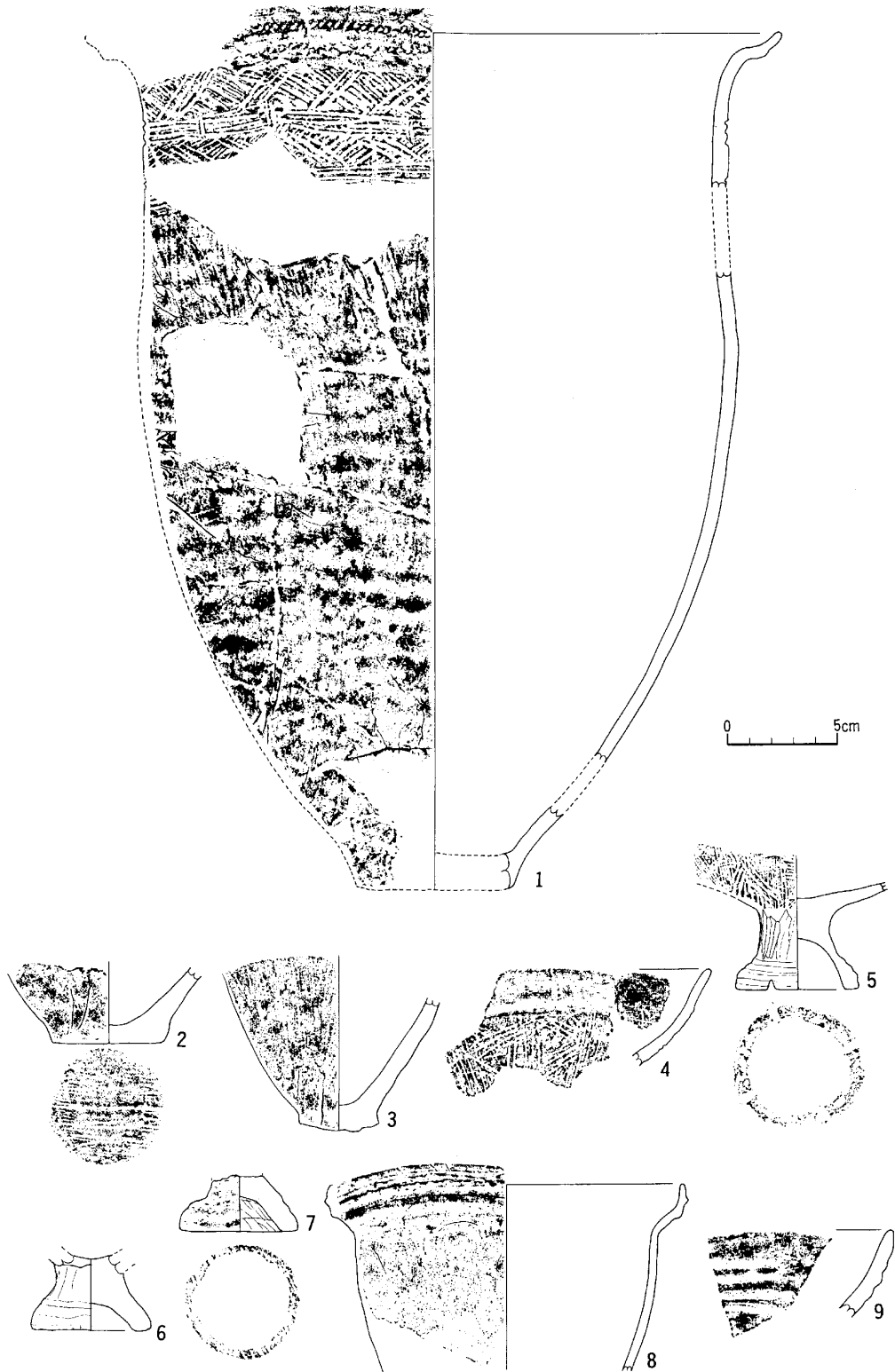
石器は第7図-1~18が埋土から出土している。1~3は無茎石鏃。4・5は両面加工ナイフ。6~15は削器。16・17は搔器。18は右側縁部に原石面を残した石匙。石質は18が頁岩であり、他は全て黒曜石製。

小 括

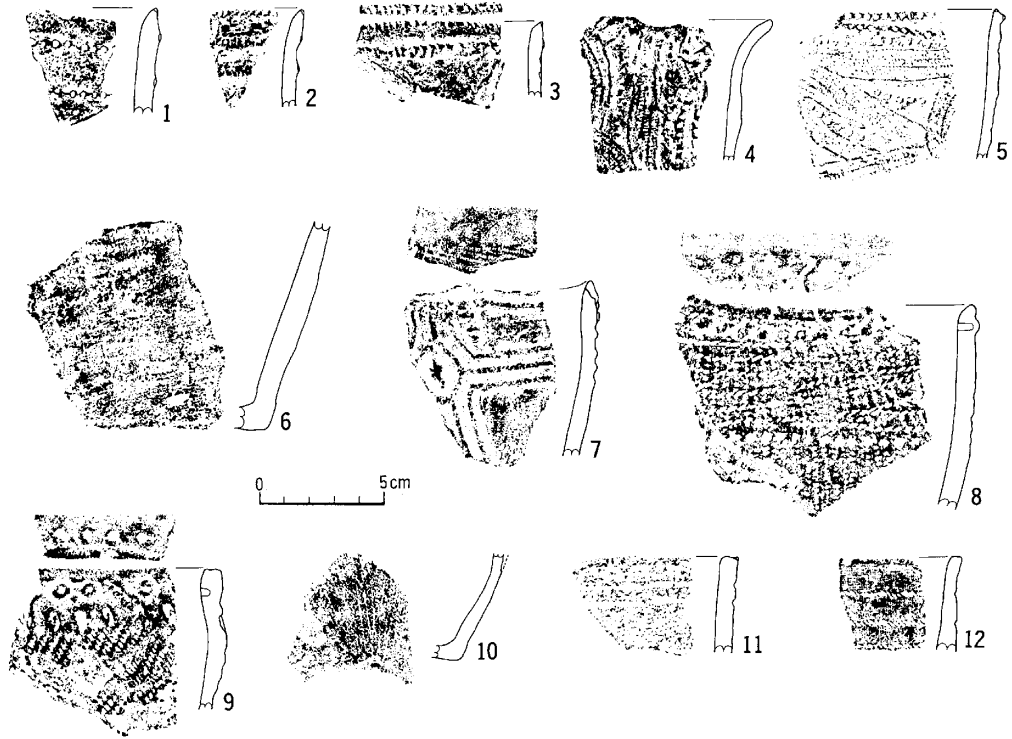
本竪穴の規模は一辺約6mの方形を呈する。カマドは東壁中央部にある。時期はカマド内出土の土器から判断して擦文期の宇田川編年後期・藤本編年h期に比定される。



第4图 44号竖穴平面图



第5図 44号竪穴カマド・床面・埋土出土土器

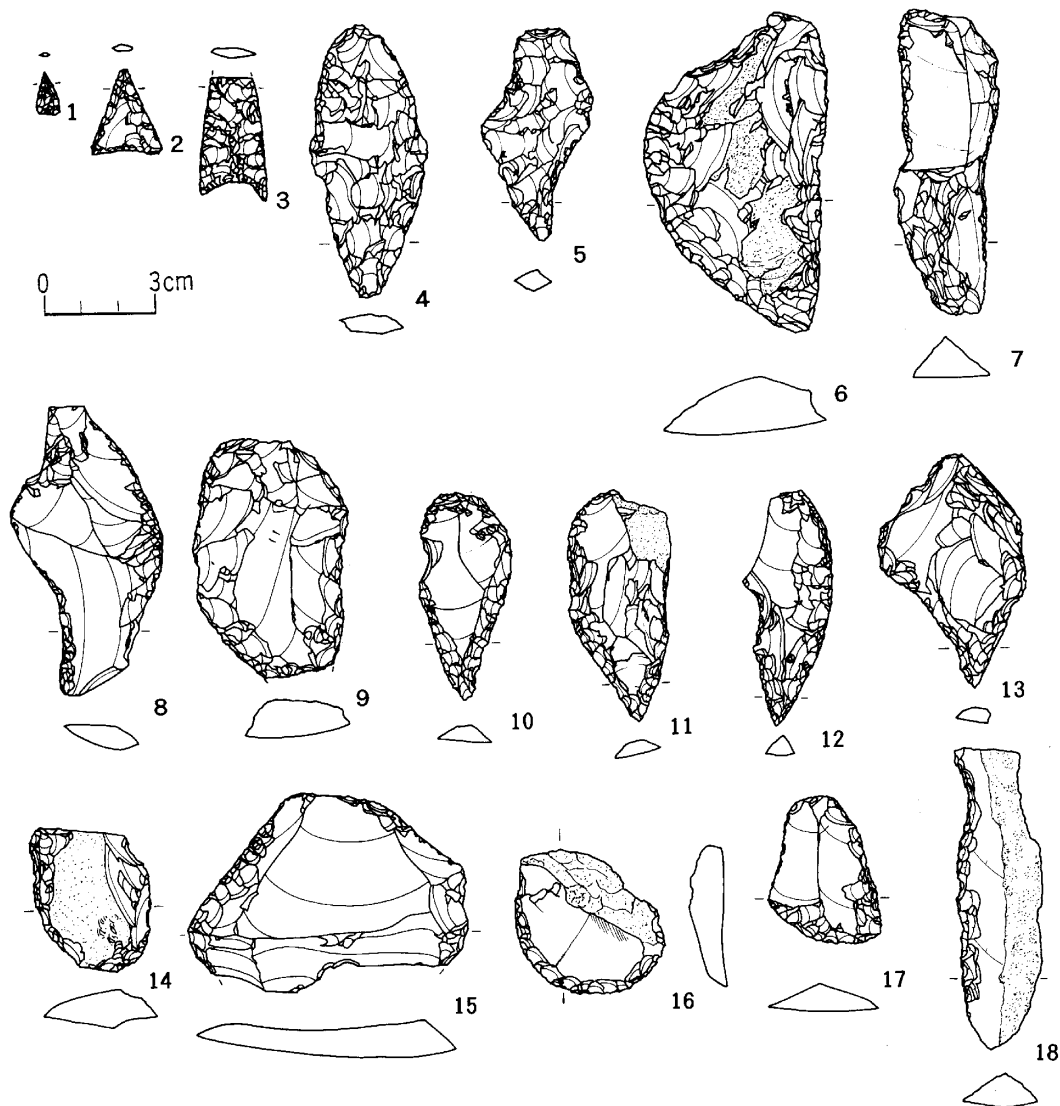


第6図 44号竖穴埋土出土土器

45号竖穴

遺 構 (第8図、図版1-2)

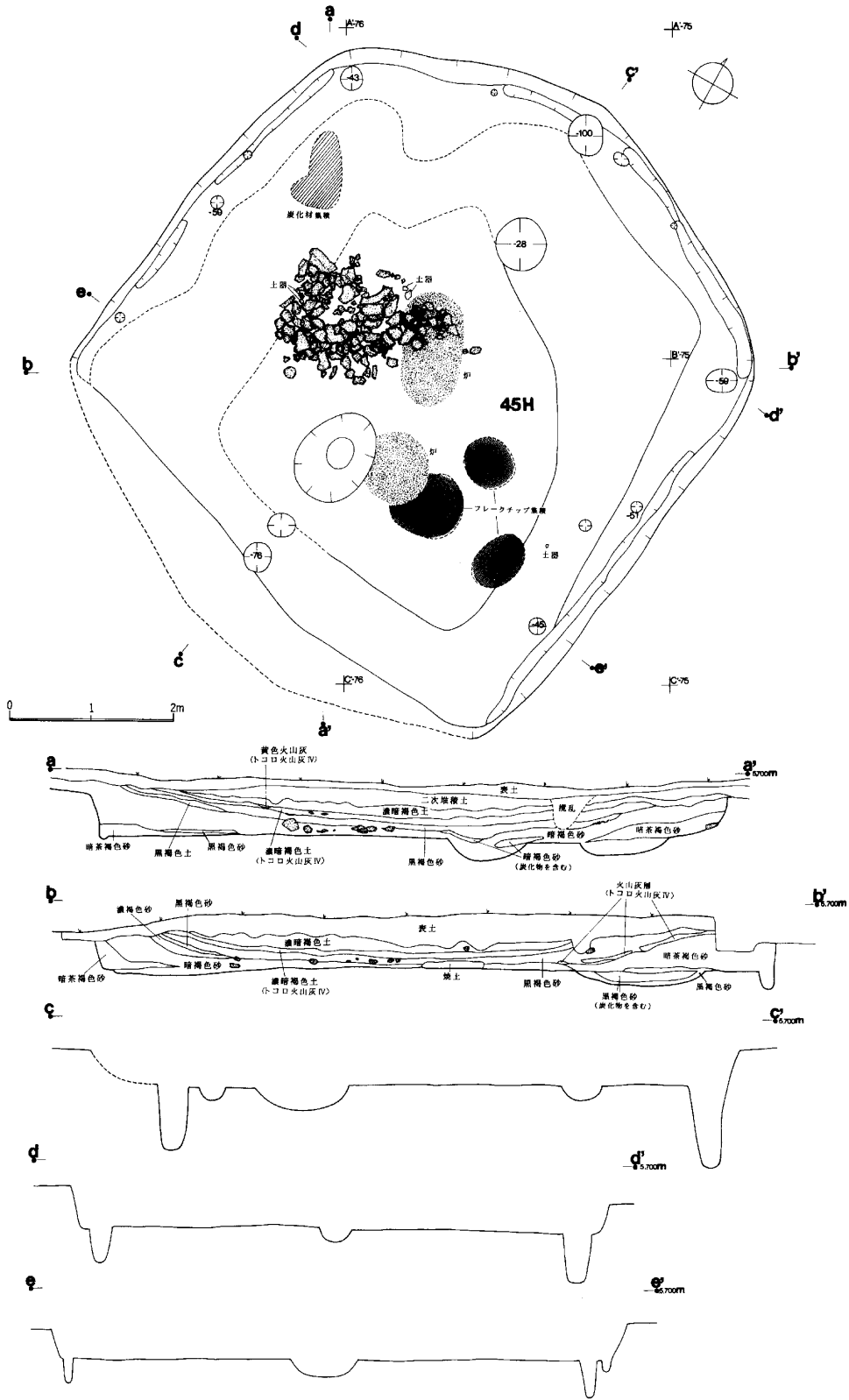
本竖穴はB76、C76グリットに位置する。表土を剝土すると二次堆積土面が現れた。この堆積土は竖穴の中央部付近を覆うもので竖穴の窪地を平坦にする目的で現代に盛られたもので、二次堆積土の下にある濃暗褐色土層が旧表土にあたる。旧表土層の直下には樽前a火山灰が全体を覆っている。さらに黑色砂層を挟んで摩周b火山灰が見られるが全体を覆うのではなく壁際に堆積している。摩周b火山灰の下部からは第10図-11の擦文前期の土器が出土している。本竖穴との時間的差を示すものとも考えられるがオホーツク文化期の遺跡である網走市二ツ岩遺跡3号竖穴の骨塚からは擦文前期とオホーツク文化ソーマン状貼付文の土器が共伴する例もあるので本竖穴の出土がそのまま時間差を示すものなのかやや疑問も残る。竖穴のほぼ中央部では角礫主体の集積がある。床面より浮いた暗褐色砂にあるもので本竖穴に伴うものではない。角礫は10~20cmのものが主体で全体の3分の2は火熱を受けている。竖穴の窪地を利用したこのような集積は21号、29a号竖穴でも確認している。竖穴中央部では床面である褐色砂に直径1.60mの骨片を含む炉跡があるが、この褐色砂を壁に追いかけると途中で黑色砂に変化する。黑色砂



第7図 44号竪穴埋土出土石器

は炉跡の周辺を取り巻くようになり土質は硬くしまり炭化材を含んでいる。オホーツク文化の竪穴に見られる黄褐色粘土の貼り床の替わりに黒褐色砂を代用したものかもしれない。壁下には幅10~20cmの周溝が巡るが全周せずとところどころで途切れる。支柱穴は直径32~64cmで、長軸に沿って4本、北東壁隅に1本、北西壁隅に1本ある。柱穴も南壁では認められなかったが東壁3本、西壁3本、北壁で3本確認した。

本竪穴の全体的な規模は東西の長軸約3.50m、南北の短軸約3.42mの六角形を呈する。



第8図 45号竪穴平面図

遺 物 (第9図～第14図、第19図-1～9)

第9図-1～4はオホーツク文化ソーメン状貼付文。1は唯一、本竪穴の床面から出土したもので2～4は埋土出土。5は同期と思われる底部。6～10は擦文期の高杯。11は揚げ底気味の底部をもった杯で、大型鉢形土器の底部に酷似している。製作時に杯に変更したと思われる。12～15は小型鉢形土器。13は口径12cmの小形土器。口縁部は緩く外反し波状を呈する。3本の横走沈線上に斜めの沈線を施し、最後の沈線には短刻線がある。内面上部のみ刷毛により調整される。16・17は大型鉢形土器。

第10図-1～11は擦文土器。1は口径24cm。文様は数十本の細い縦走沈線と鋸歯状文で構成される。胴部は刷毛により丁寧に調整されている。7の胴部には鋸歯状文と矢羽根状文がある。8の底部には何らかの圧痕文、10の底部には浅い刻線が見られる。11は頸部上に6本、下部に4本の沈線がありそれぞれを三角状の列点文で仕切られる。宇田川編年前期、藤本編年a期に比定される。

第11図-1～7、第12図-1～6は続縄文後北C₂・D式のものであるが、2・4は櫛歯状沈線を持つ同式の終末期であろう。7・8は後北C₁式。9～13は宇津内II b式、14は同II a式。

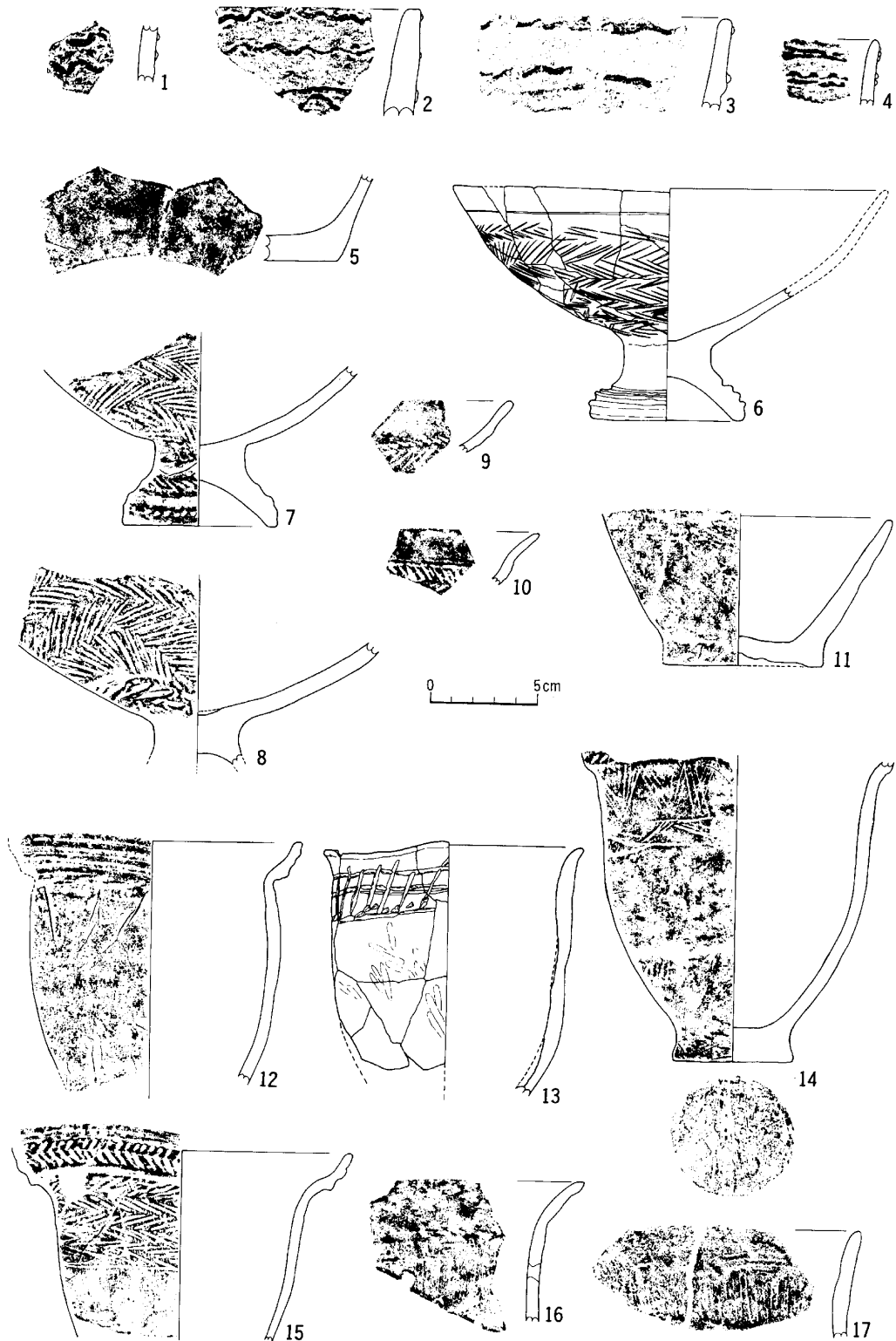
第13図-1～3は宇津内II a式。4はその底部であろう。5は下田ノ沢系であろう。6の器面は無文であり、口縁部から頸部にかけて幅1cm程の吊り耳を持つ。7は隆帯上、8は等間隔に縄端圧痕文が施される。6～8は続縄文前葉であろう。9～20は縄文晩期で、18～20の盛り上った爪形文は前葉、他は中葉と思われる。

石器は床面から第14図-1～5が出土している。1・2は片面加工ナイフ。3・4は搔器。5は表面を粗く打割し円形に調整した石球。埋土からは6～16の無茎石鏃。17・18の有茎石鏃。19は両面加工ナイフ。20～23は片面加工ナイフ。24は先端部が折れているものの断面三角形を呈するもので錐であろう。25～28、30～34は削器であるが26は刃部が急斜な角度をもつもので搔器とも考えられる。29は石匙。石質は14の硬質頁岩、28の頁岩を除き黒曜石製。

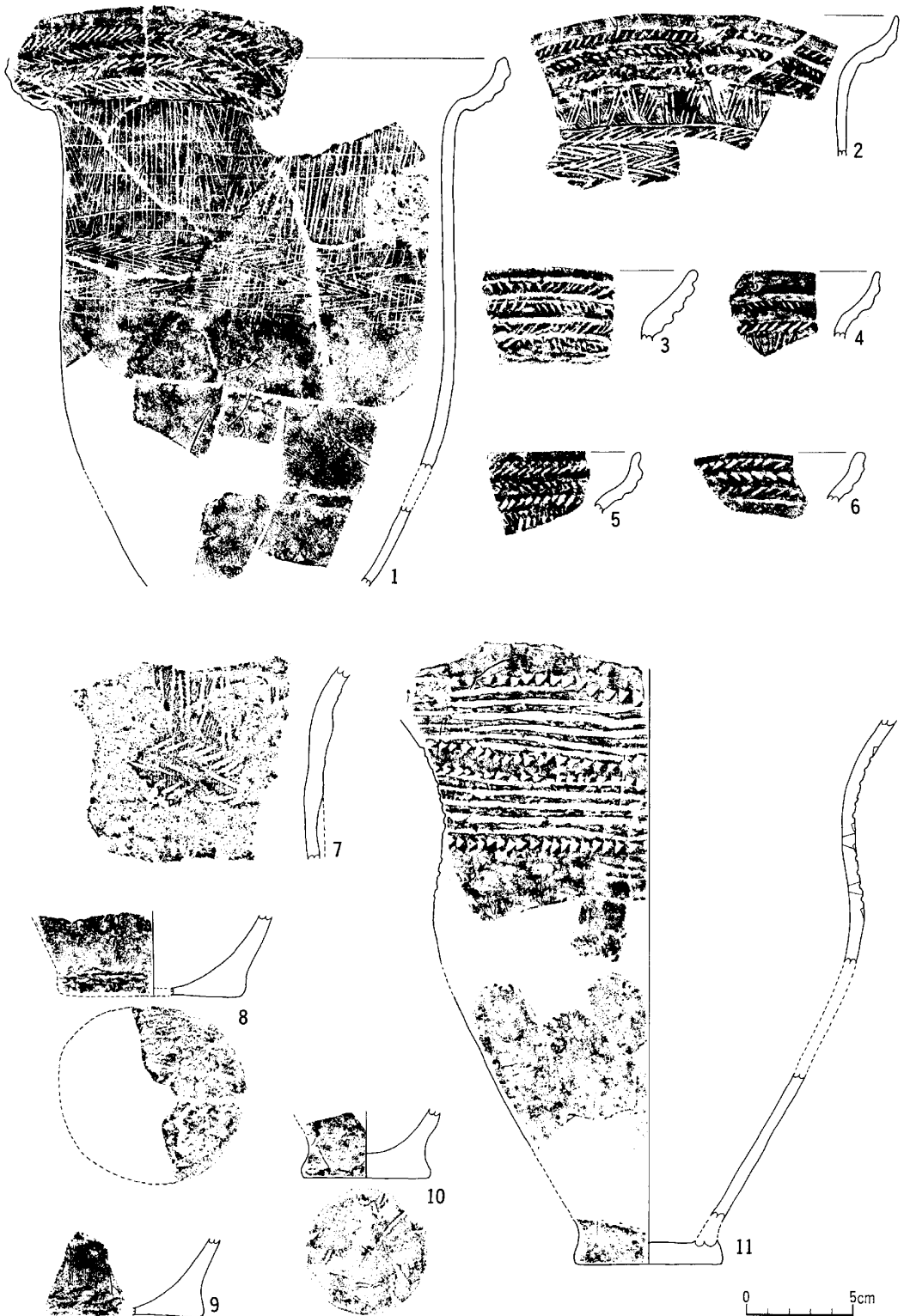
第19図-1～9も埋土出土。1は大形の縦長剥片の右側縁部から下端部にかけて原石面を残し、裏面に刃部を作出した削器。使用痕は裏面中央部に縦横に残される。2・3も削器。4～8は円形搔器。9は安山岩製の叩き石。石質は9を除き黒曜石製。

小 括

本竪穴の床面からはオホーツク文化ソーメン文貼付文(藤本e群)の土器片1点が出土しており、住居の平面形態からオホーツク文化期のものであることは確実である。竪穴の規模は長軸3.50m、短軸3.42mを計るもので、長短軸の差が無いいわゆる寸詰まりの竪穴住居である。この種の形態は各地のオホーツク文化遺跡でも検出されており、本遺跡では14号、16号竪穴と類似する。本竪穴の埋土出土土器と16号竪穴の床面出土土器が接合しており、同時併存の可能性はある。



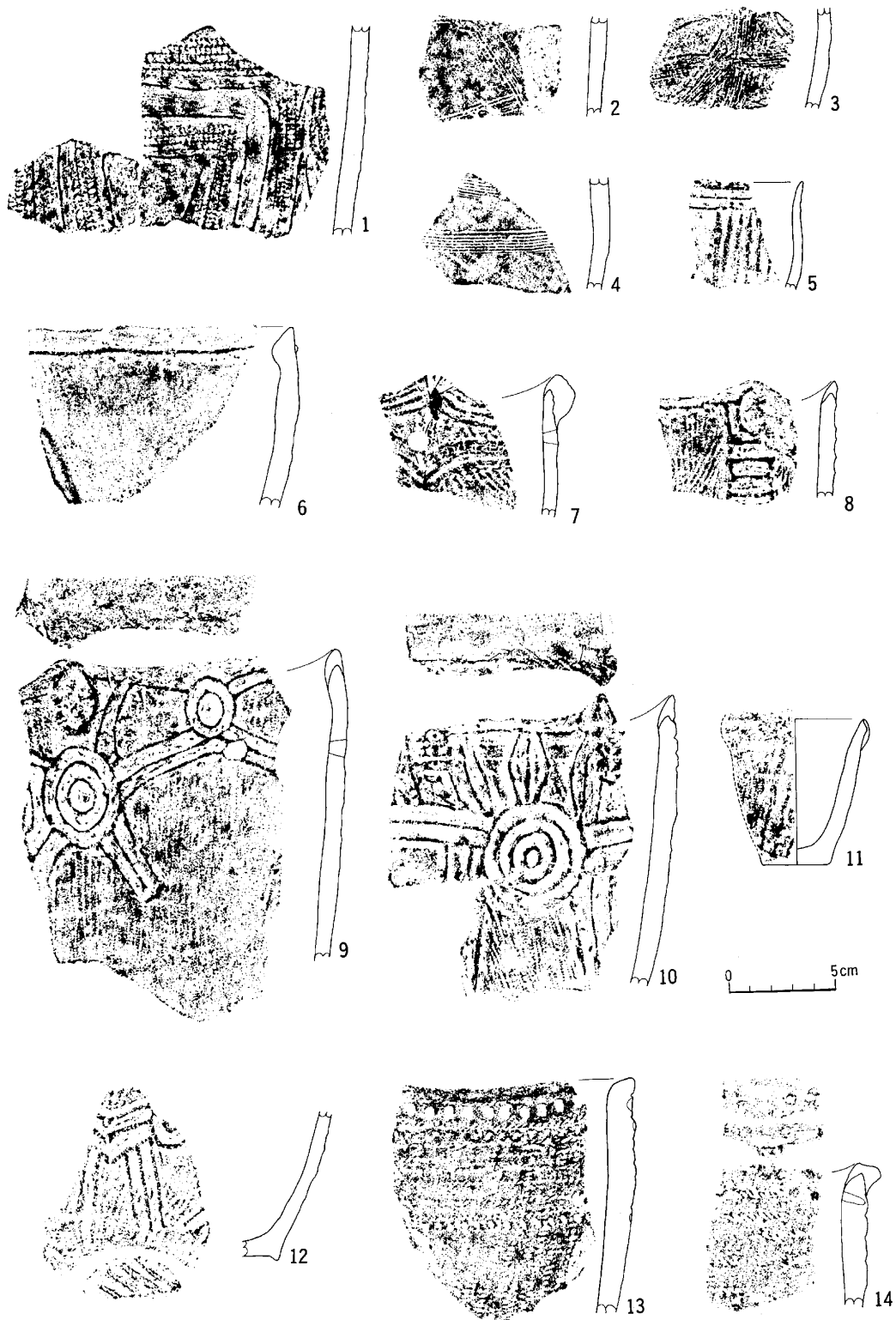
第9図 45号竖穴床面(1)・埋土出土土器(2~17)



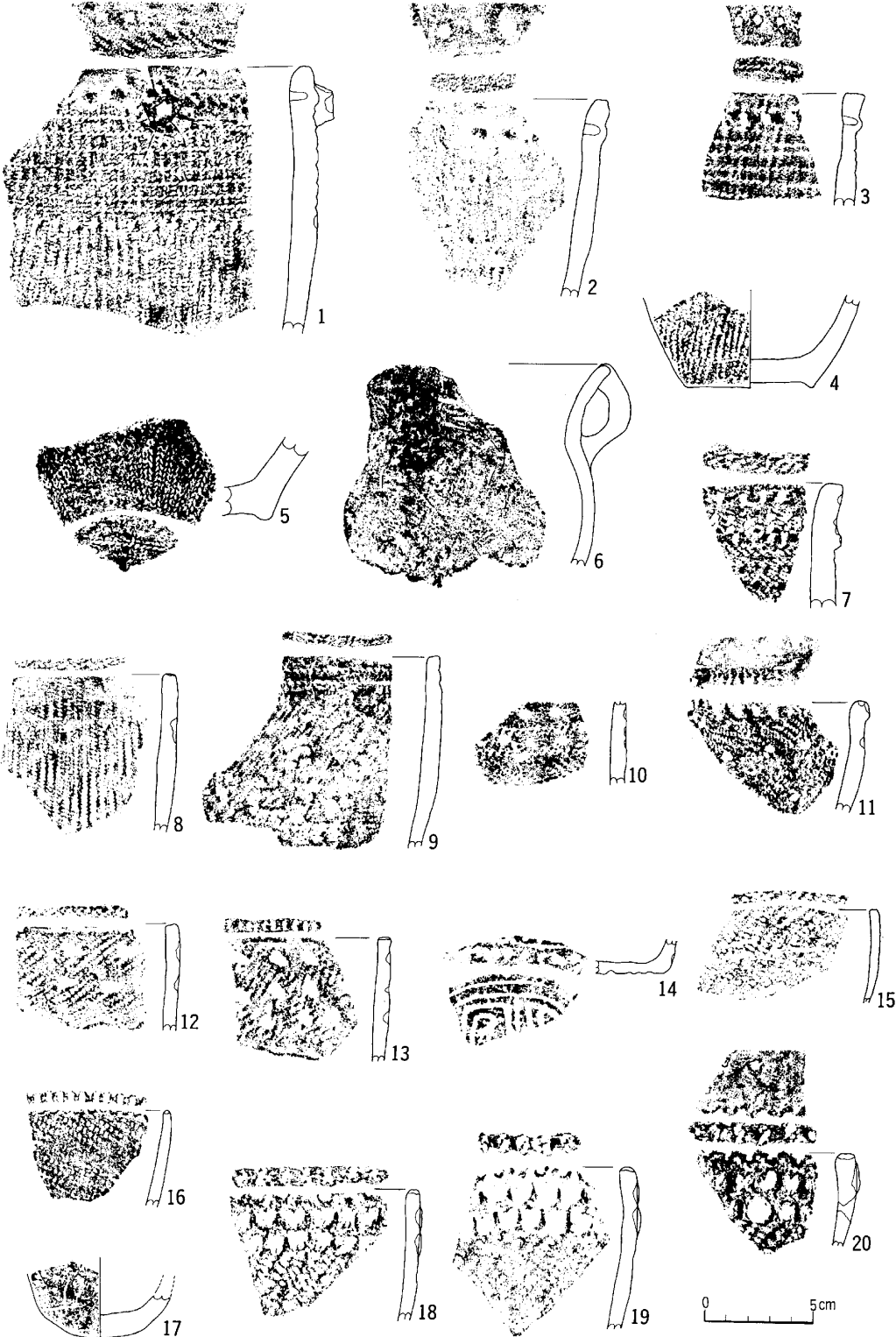
第10图 45号竖穴埋土出土土器



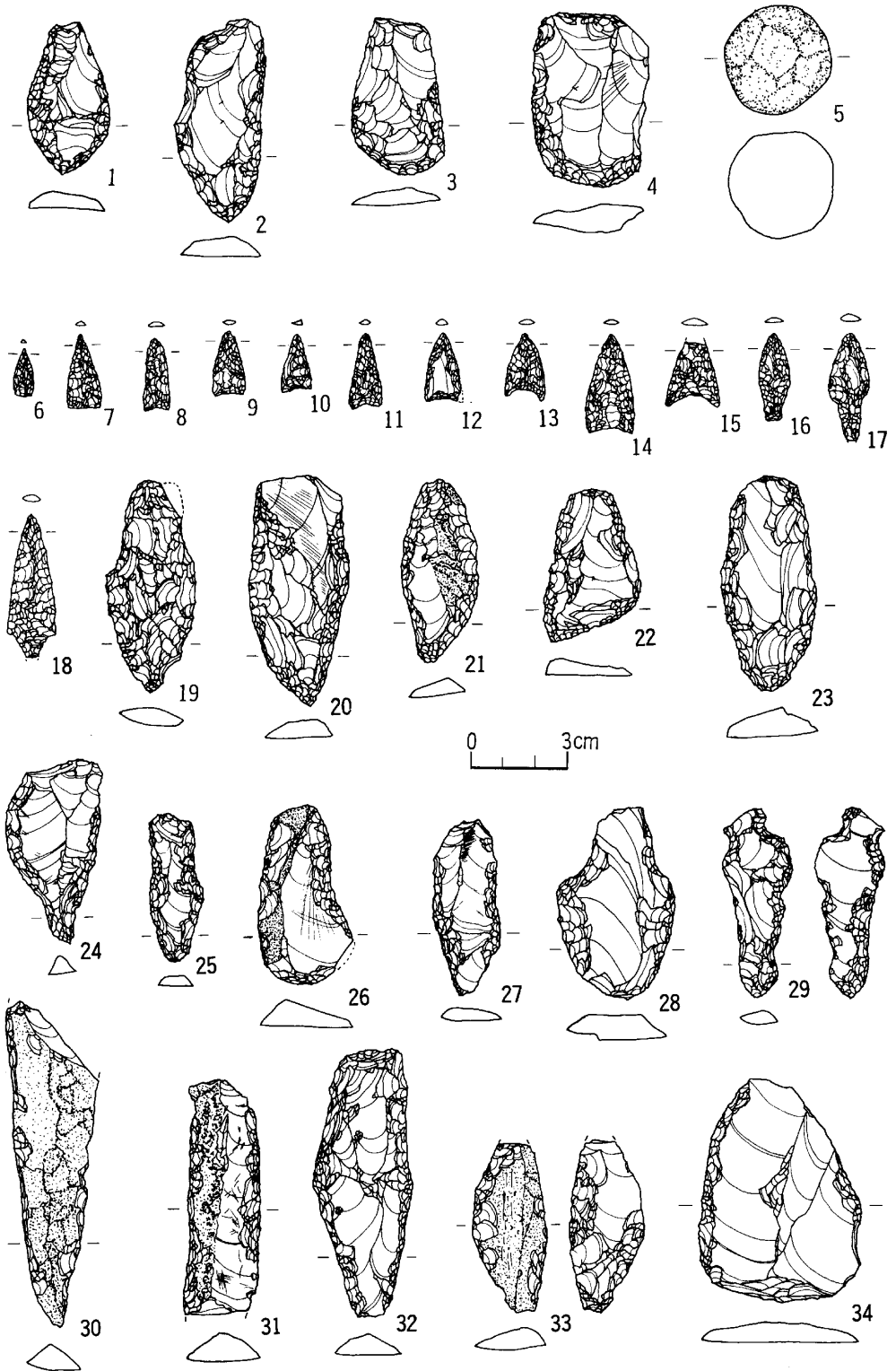
第11圖 45号竪穴埋土出土土器



第12图 45号竖穴埋土出土土器



第13圖 45号竪穴埋土出土土器



第14图 45号竖穴床面·埋土出土石器

45 a 号 竖 穴

遺 構 (第15図)

本竖穴は45号の床面精査中に石囲み炉石が円形に配置されていることが確認された。オホーツク文化期の炉は中央に位置するがこの場合45号竖穴の南側にありかなりずれており、形態も方形でないことから他の竖穴と理解された。このため石囲み炉を基準にサブトレンチを十字に設定しプランの検出を行うこととした。竖穴上部の大部分と床面の一部は45号に破壊されているため検出できたのは東壁の一部であった。石囲み炉が中央部にあると考えるとこの竖穴の規模は長軸約6.50m、平面形態はおそらく不整形を呈するであろう。

小柱穴は壁際に2本。石囲み炉周辺に2本ある。直径約8～11cm、深さ約4～10cmのものである。石囲み炉は大型の角礫8点で構築されている。このうち3点は凹み石として利用されている。

遺 物 (第16図、第19図-10～14)

石囲み炉周辺の床面より浮いて第16図-1・9の土器が散在して出土している。器面に同心円の施された縄文文字津内II b式。2は同II a式。3・4も宇津内系の底部と思われる。5～7は縄文初頭に位置づけられるものである。5は口径約19cmのボール状土器。6は2本の縄線文の上下と口唇内側に縄端圧痕文を施す。7の口縁は横撫でによる無文帯で、横走る断面三角形の隆帯下部には半載状施文具による刺突を下方から施す。8は無文土器。縄文晩期中葉であろう。

第19図-10～14の石器は全て埋土出土。10・11は無茎石鏃。12・13は削器。14は搔器。石質は全て黒曜石製。

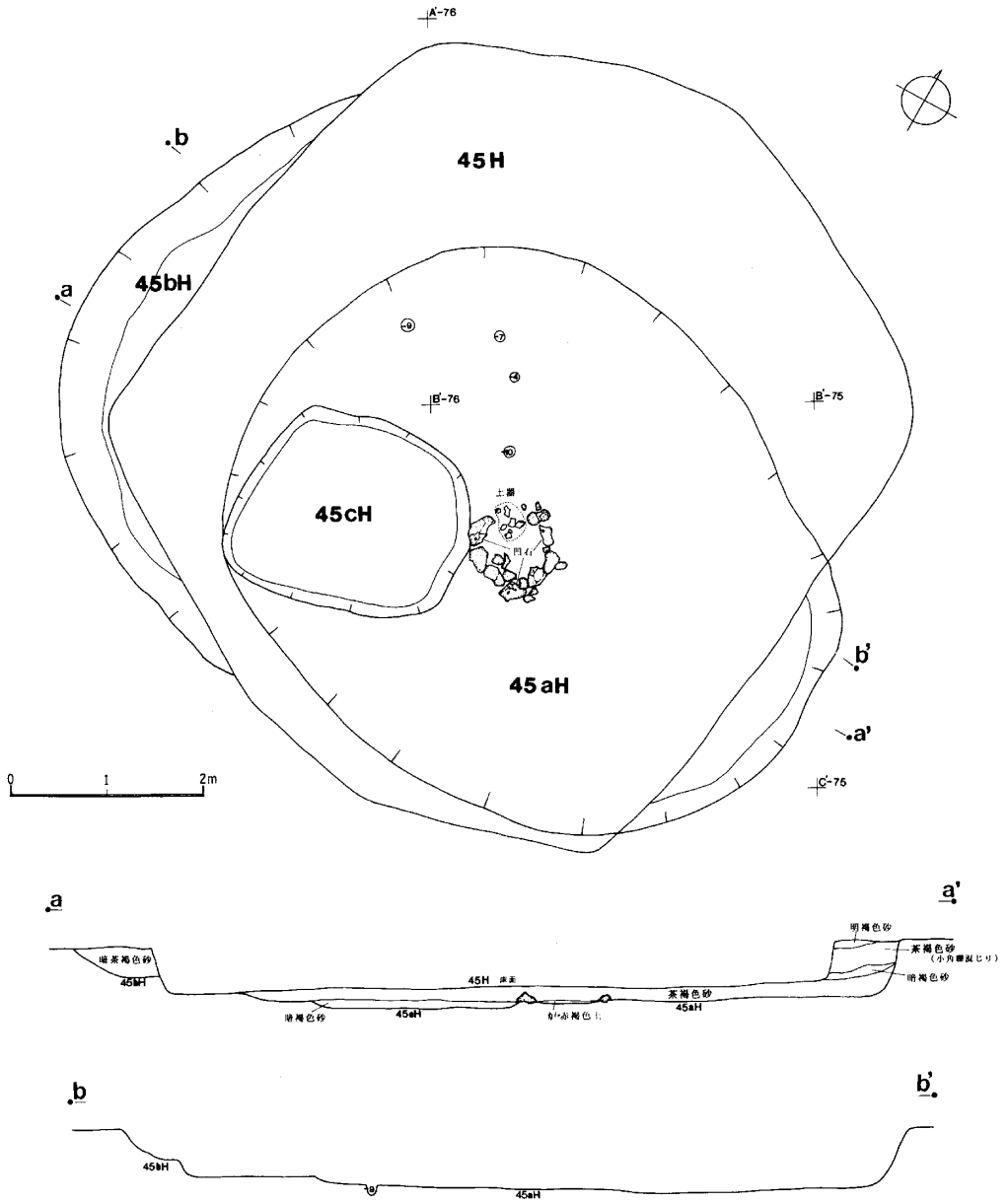
45 b 号 竖 穴

遺 構 (第15図)

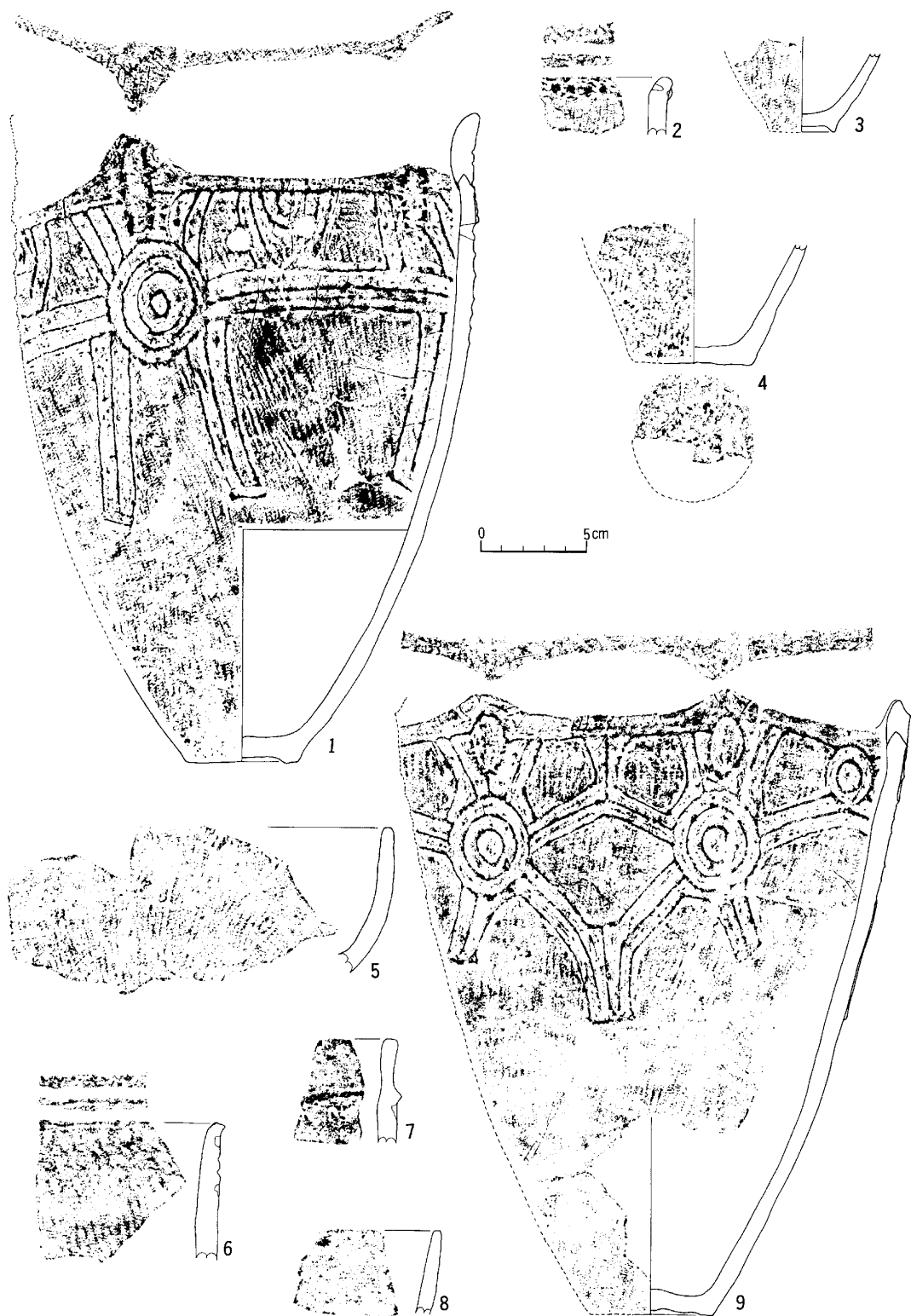
竖穴の殆どが45号竖穴により破壊を受けており西壁と東壁の一部が残存する程度である。残存する壁の長さは約4m、壁高は確認面から約28cmを計る。全体の平面形態、規模、時期などは全く不明である。

遺 物 (第17図-1～12、第19図-15・16)

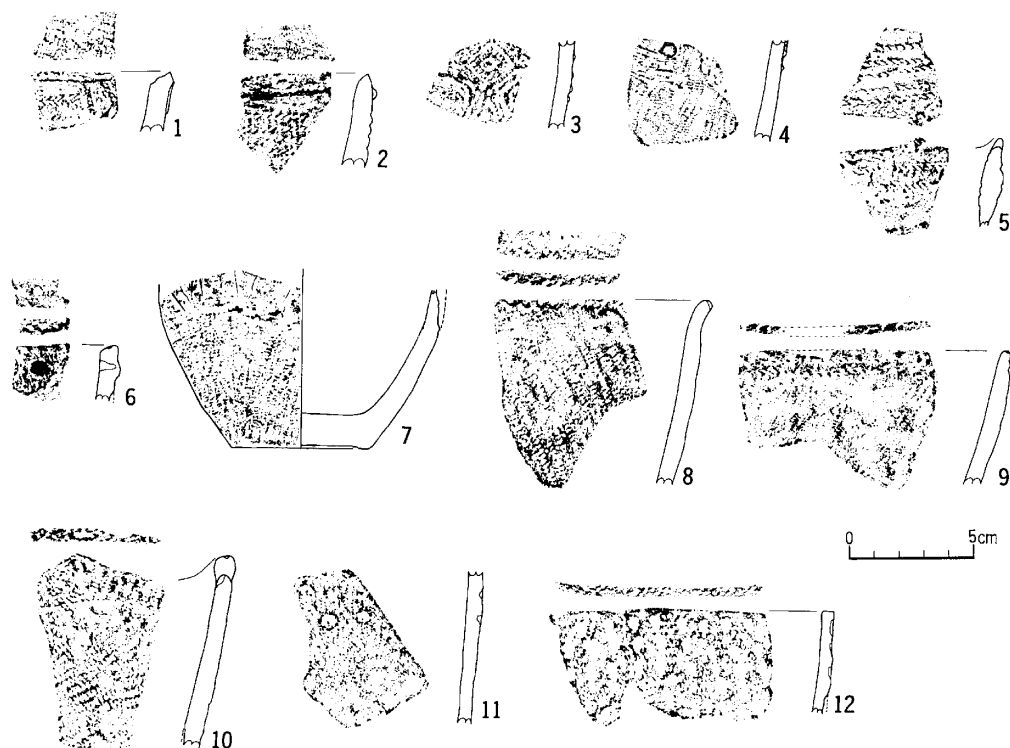
遺物は全て埋土から出土している。第17図-1～5は縄文文字津内II b式。6は同II a式。7はわずかに揚げ底を呈した宇津内系の底部と思われる。8は口縁部が「く」字状に外反する。口唇部内側は縄文、外側は刻目を施し「ハ」字状に構成させている。宇津内II a式よりもやや古手に位置すると思われる。9～12は縄文晩期のもので9は2条の縄線文、11は円形施文具を



第15图 45 a号·45 b号·45 c号竖穴平面图



第16图 45a号竖穴埋土出土土器



第17図 45 b号竪穴埋土出土土器

用いた刺突、12は縄端圧痕文を3列施す。9は末葉、10~12は中葉に比定される。

第19図-15は先端部が鋭く尖った両面加工ナイフ。16は削器。いずれも黒曜石製。

45 c 号 竪 穴

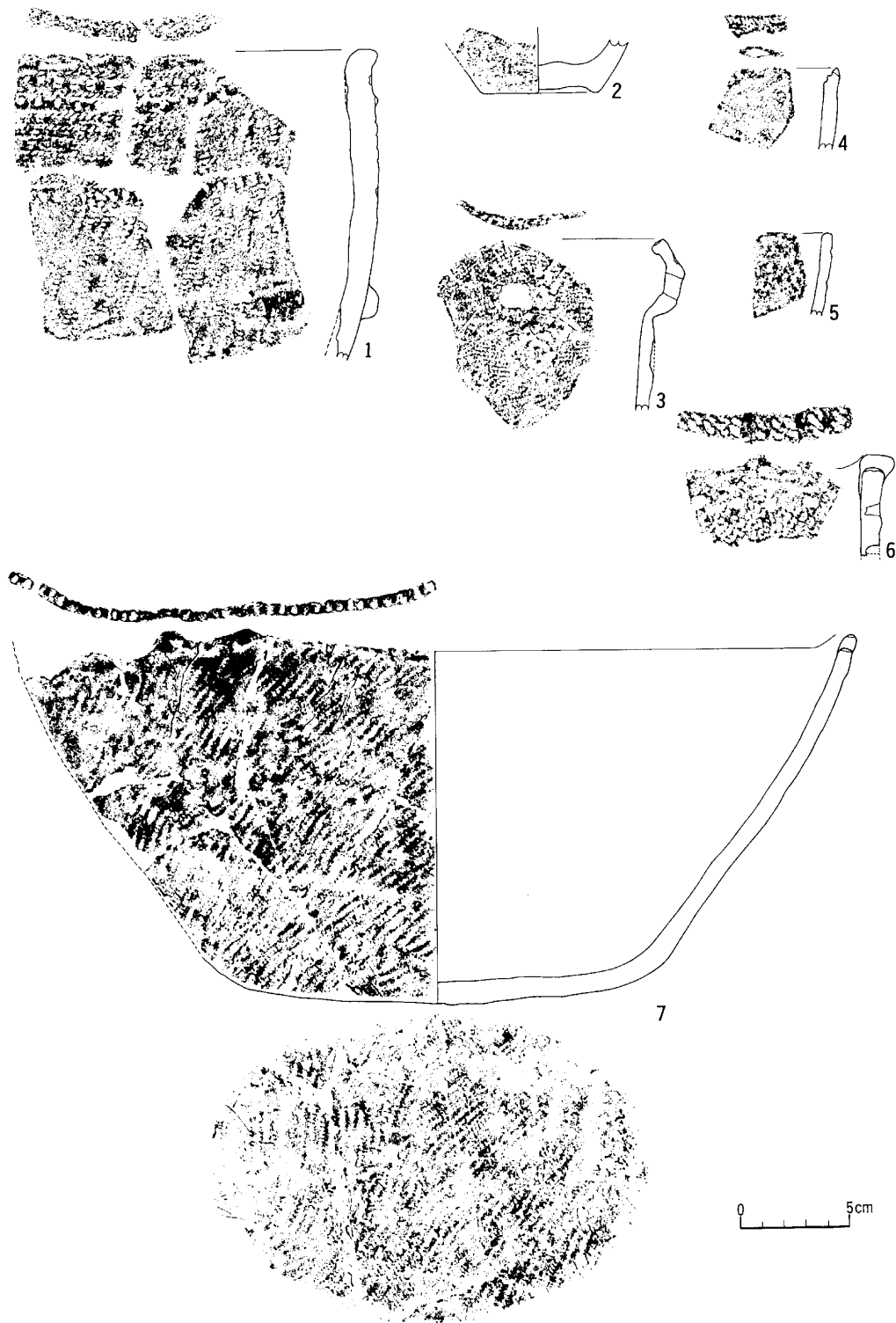
遺 構 (第15図)

45 a号竪穴の石囲み炉と僅かに切り合う。石囲み炉の一部が45 b号の上部に位置するようであり本竪穴は古い。規模は長軸2.22m、短軸2.10mの不整形を呈する。壁高は45 b号の床面から約10cmを計る。炉跡、柱穴等は認められず竪穴とするには疑問があるものの、ピットとするには規模が大きく竪穴として扱った。詳細な時期は不明であるが縄文晩期の可能性がある。

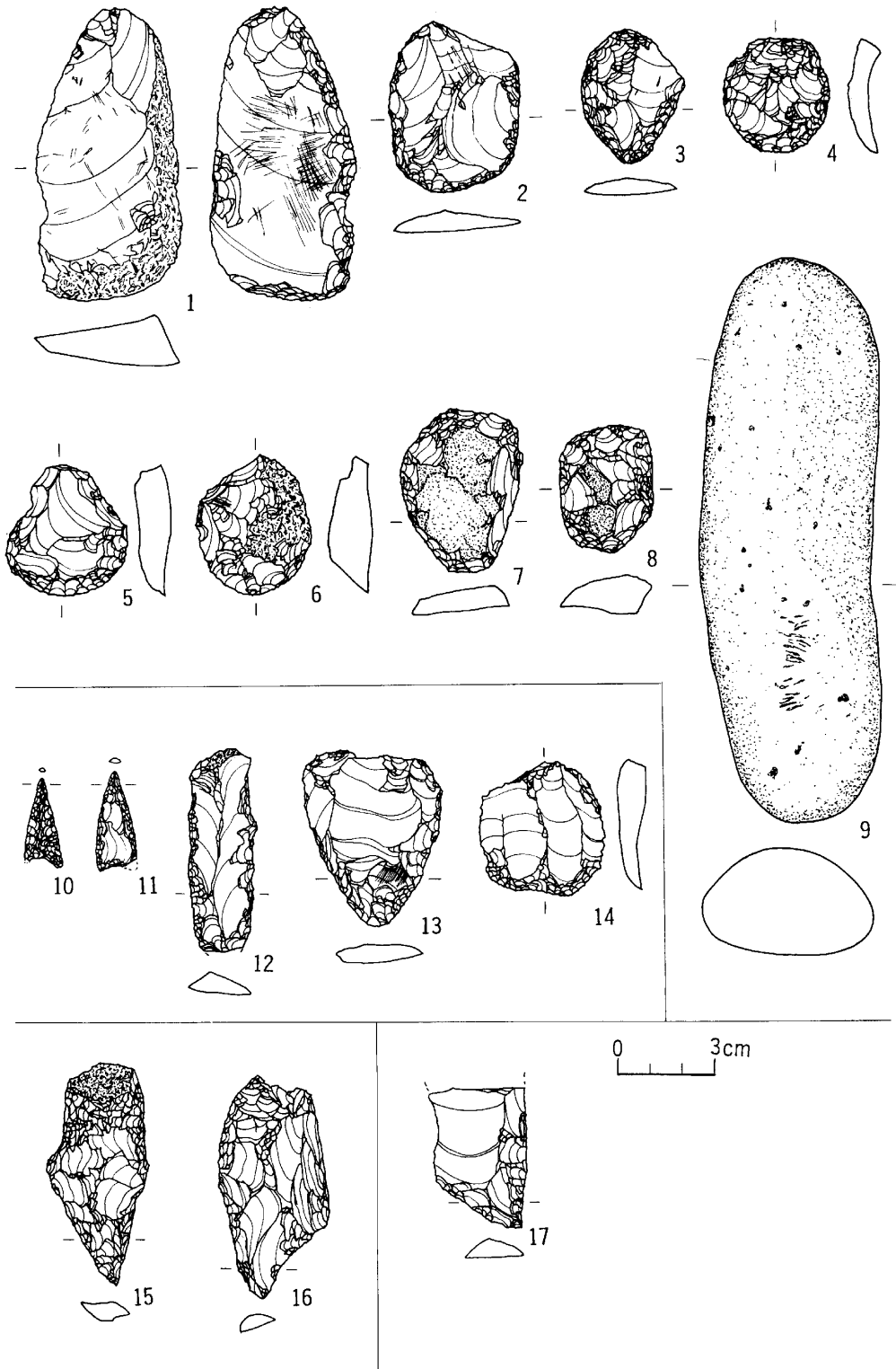
遺 物 (第18図、第19図-17)

第18図-1は宇津内式、2もその底部と思われる。3は口唇部と注口部に縄を押捺する。続縄文前葉であろう。4~5は縄文晩期。7は全体の2分の1を復元できた。口縁、底面とも楕円形を呈する様であり、短径37cm、器高16cmの浅鉢。刻みのある口唇部には3個の小突起がある。縄文晩期中葉であろう。

第19図-17は埋土から出土した黒曜石製の削器。



第18図 45c号竪穴埋土出土土器



第19图 45号 (1~9) · 45a号 (10~14) · 45b号 (15·16) · 45c (17) 号
竖穴埋土出土石器

46 号 豎 穴

遺 構 (第20図、図版2-1)

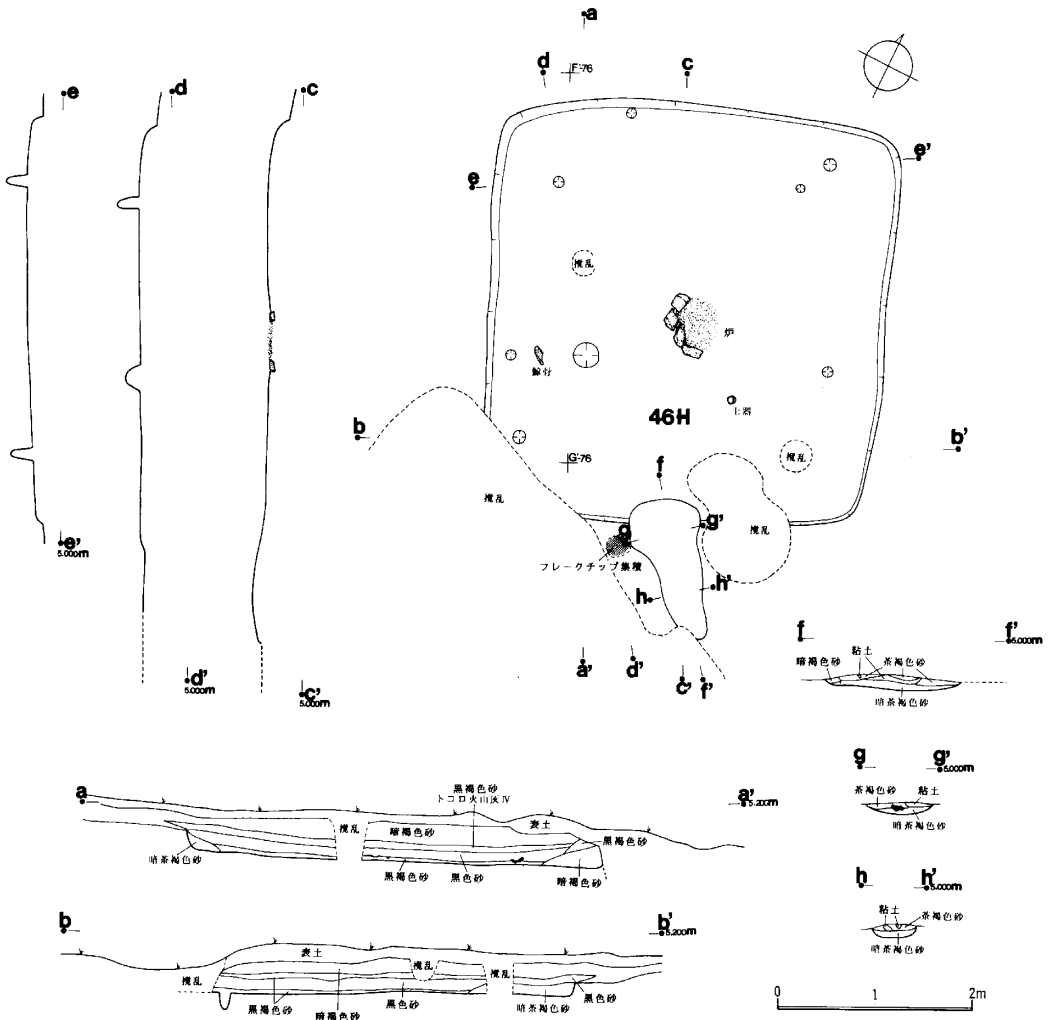
本豎穴はG75グリッドに位置する。南壁隅の一部が近代の攪乱を受けているもののほぼ全体の形態を確認できた。規模は東西約3.90m、南北約4.30mの方形を呈する。壁高は浅く確認面から約28cmを計る。カマドは南壁中央部に構築されている。両袖部の遺存も悪くかろうじて袖部と思われる黄褐色粘土が見られる。煙道は長く炊口部から約1.50mを計る。炉跡は中央部にある。4点の角礫を持った石囲み炉である。角礫の配置は円形か方形かは不明である。支柱穴は直径約10~15cmの小型のものが3本、径30cmのものが1本あるが、配置は不規則である。

遺 物 (第21図-1~16、図版2-2)

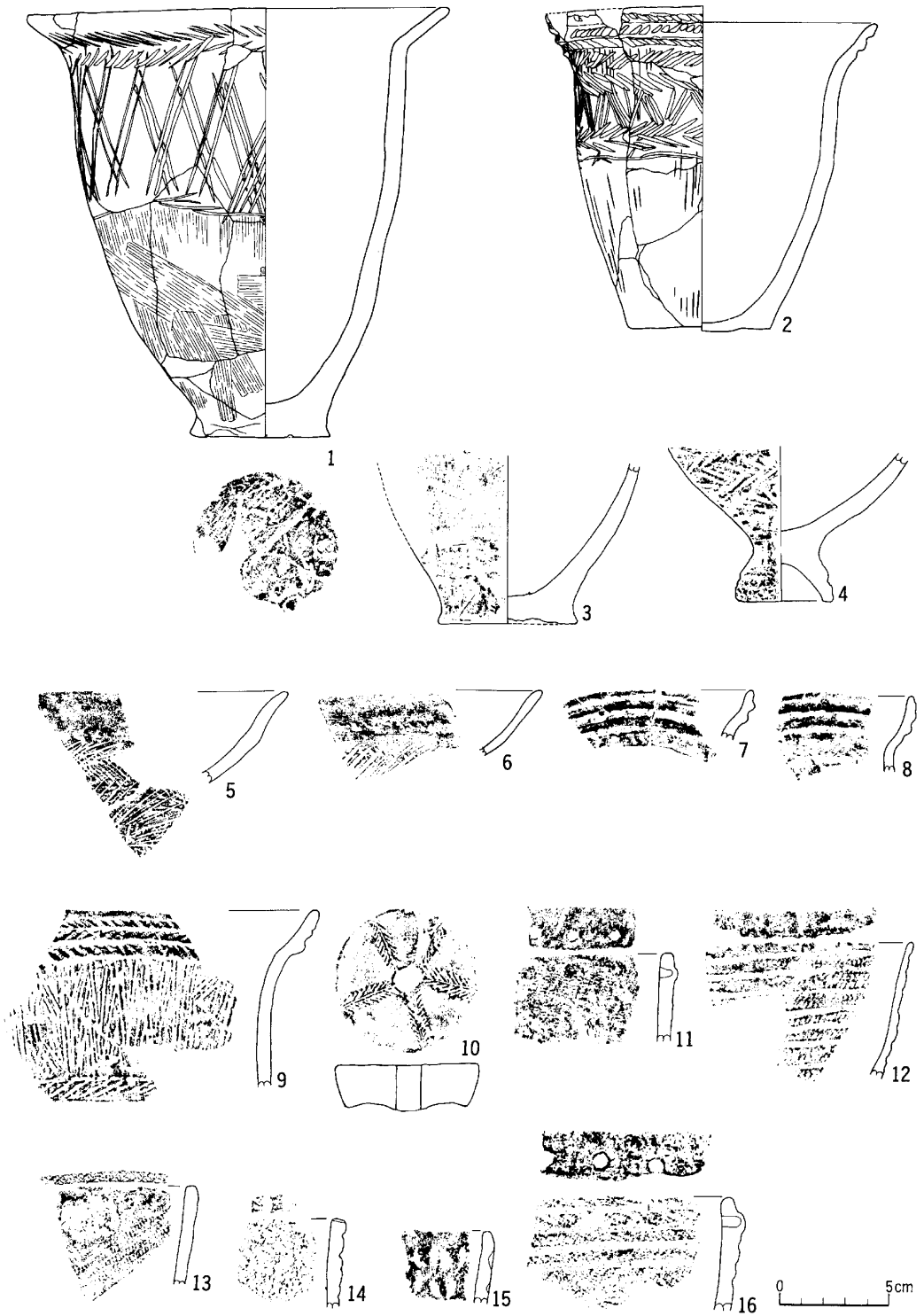
1~3は床面出土。1は器高21cmの中型鉢形土器で器面全体を丁寧に刷毛調整する。口縁部は段を持たず「く」字状に外反し、頸部に矢羽根状の刻目が連続する。胴部文様は2~3本の沈線を斜め方向に交互に胴中央部まで施すもので、従来からの規格的な格子目が変化したようである。2は器高15cmの小型鉢形土器。胴部文様は2列の矢羽根状とその間に挟まれた鋸歯状の沈線で構成される。底部の中央部は盛り上がりやや不安定である。1・2は内面の口縁から胴上部に煤が広範囲に付着する。図版2-1に示す通り2点の土器は近接して出土した。3は中型鉢形土器の底部。4~6は高杯。7・8は無文の中型鉢形土器。9は大型鉢形土器。3本の隆帯上に「手塩手法」による木目が施される。10は重量80gの紡錘車。5本の針葉樹状の刻線は極めて丁寧に施されている。中央部の孔より約1.4cmに浅い円形文が見られる。これは焼成前に残されたもので紡錘車の製作法と関係するものかもしれない。また、文様のある面は黒褐色に対して、側面と裏側は茶褐色を呈する。文様面を意図的に焙っているものと考えられる。11は続縄文宇津内II a式。12は帯縄文を地文とし、器面に7条の沈線を施したもので口唇部には縄端圧痕文が押捺される。器壁は薄い。続縄文初頭であろう。13は縄文、14は縄線文、15は盛り上がりのない「ハ」字状の爪形文が施されたもので縄文晩期中葉と思われる。16は縄文後期堂林式。

小 括

本豎穴はカマドと石囲み炉を持つ擦文期の豎穴である。通常、擦文期の豎穴はカマド、炉跡を持つのが一般的でありトビニタイ文化の豎穴の場合でも石囲み炉は持つもののカマドは持たず、本例は極めて特異な例と言える。第21図-1は宇田川編年晩期、藤本編年i~j期に比定される。無文土器に見られる「く」字状に強く外反した口縁部が特徴的である。石囲み炉を持つ本豎穴はトビニタイ文化の影響も考慮する必要がある。



第20図 46号豎穴平面図



第21圖 46号豎穴床面・埋土出土土器

第V章 ピ ッ ト

ピ ッ ト 301

遺 構 (第22図、図版3-1)

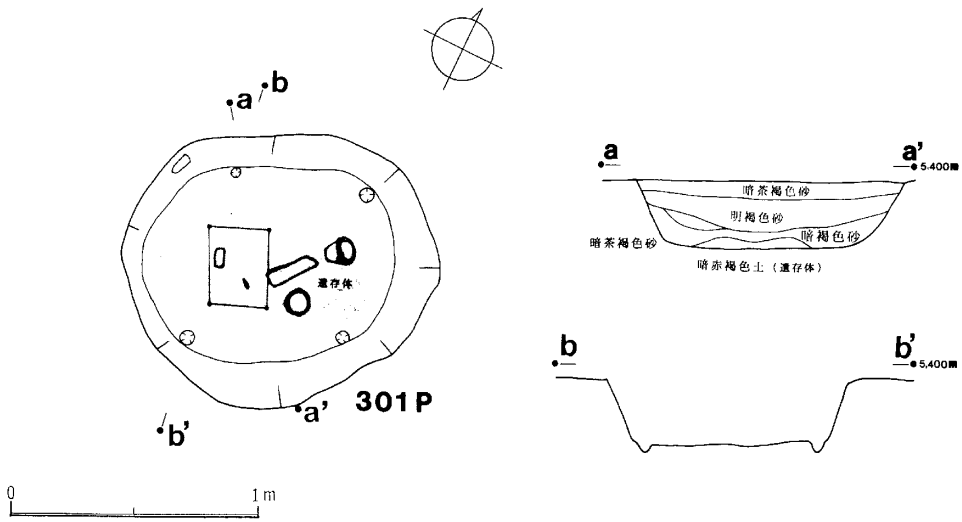
本ピットはC75グリッドに位置する。第II層茶褐色砂層の剥土段階で確認した。基本的な埋土は暗茶褐色砂、明褐色砂、暗褐色砂に分層され、このうち暗褐色砂中からベンガラが散布が見られる。ベンガラは遺存体にも撒かれるが第24図-1・2の土器と第25図-6の大形石斧の周辺は特に厚く散布されている。遺存体は粘性を有する暗赤褐色土で頭部は丸みを持ち、移植ゴテで削ると頭骸部の輪郭が観察された。歯骨は検出できなかった。明褐色砂層中からナイフが出土するものの、遺物の多くは遺存体上から集中して出土する。遺存体上の遺物は、胸部の周辺に琥珀玉、次に石斧がある(図版3-2)。その下部に土器が正立の状態で置かれるという特徴ある出方をしている。

規模は長軸約1.30m、短軸約1.10mの楕円形を呈する。壁は床面から壙上部にかけてやや開き気味に立上がる。高さは確認面から約30cmである。直径5~8cm、深さ6~10cmの小ピットは四隅にある。

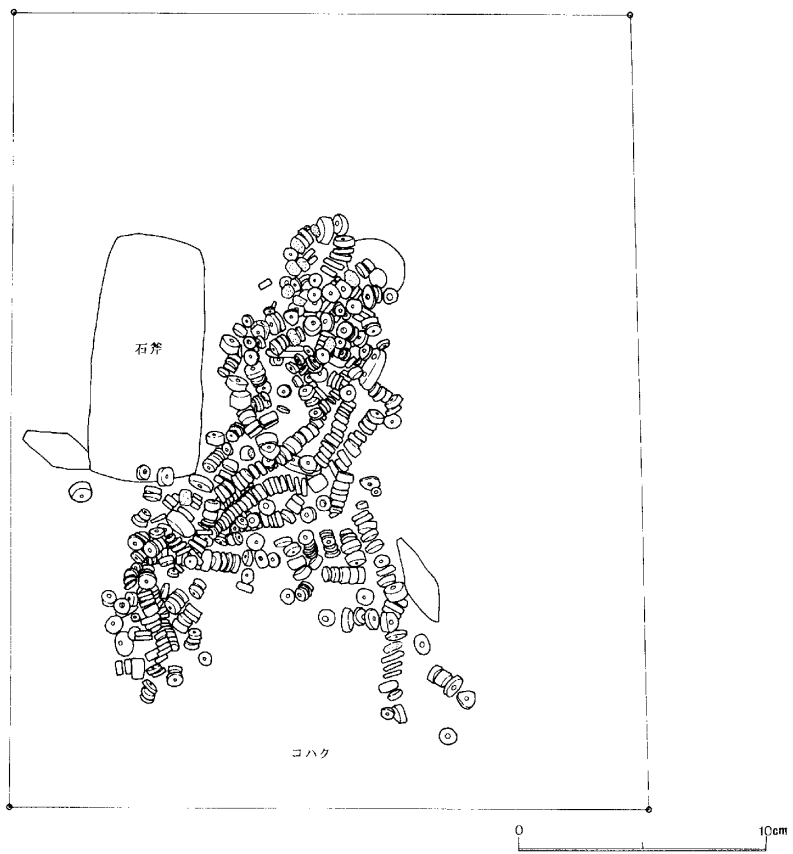
遺 物 (第24図-1~4、第25図、図版3-2・4)

第24図-1は器高10cmの小型土器。口縁部に内側から突瘤文が見られるもので、器面は撚糸文が施される。口唇部に2個の山形小突起と口縁下部に2個の吊耳をもつ。左側の吊耳の周辺を除き内外面には煤が付着する。2は器高10cmの小型土器。口縁部の内側から突瘤文と「∧」状の隆帯が加わる。口縁部には6~7条の縄線文と胴部から底部にかけて撚糸文が施される。内外面には煤が付着する。1・2の土器は続縄文宇津内II a式に比定される。3は円形刺突と沈線、横走る短刻線で構成され、4は下方から刺突を施したもので縄文晩期中葉の土器と思われる。

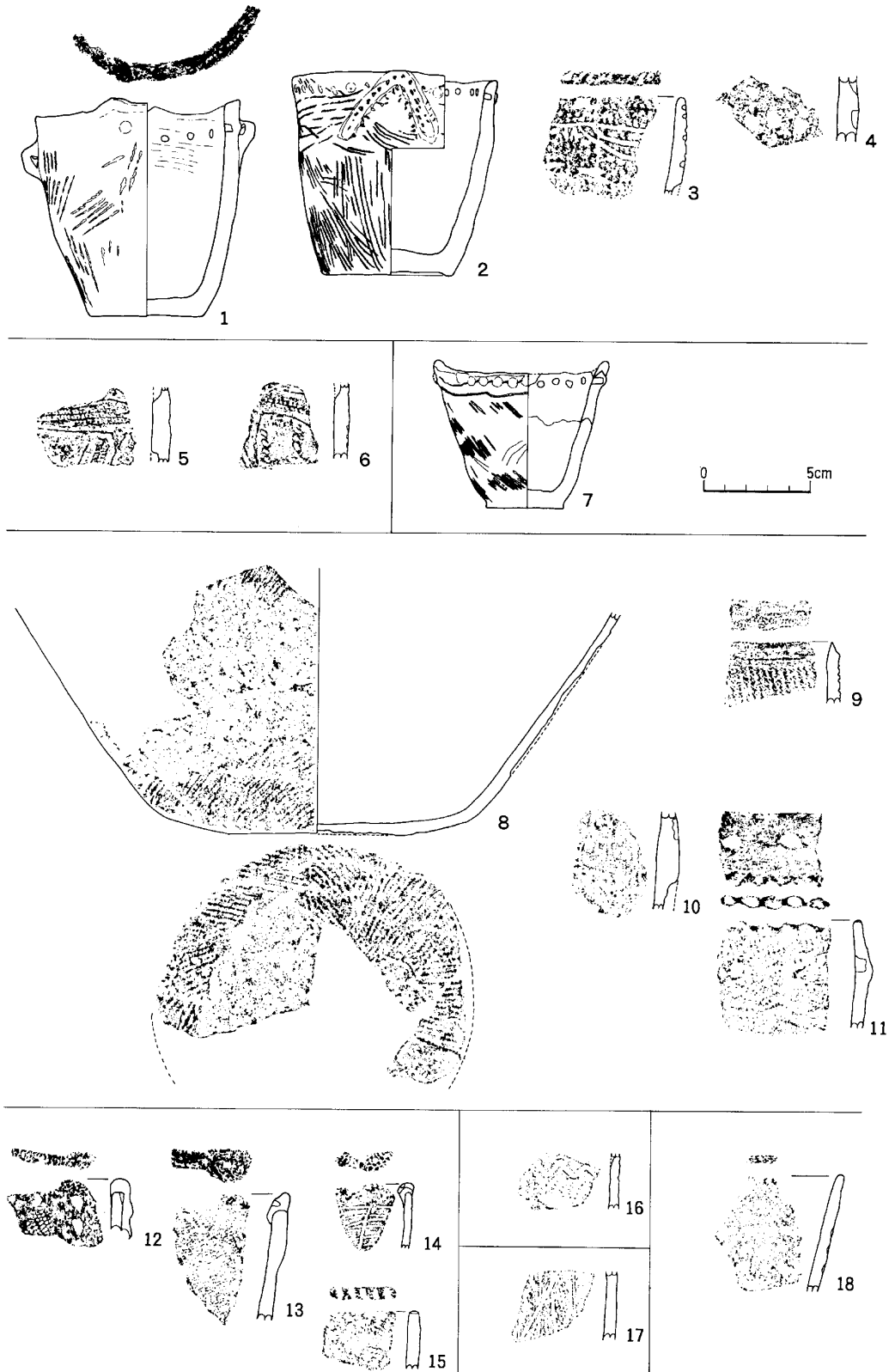
石器は第25図-1~16が遺存体上部から出土した。1~4は有茎石鏃。5は刃部が片刃の磨製石斧。青色片岩製。6は側縁部が敲打調整された大型の両刃磨製石斧。裏面中央部から基部にかけて浅い弧状に仕上げている。柄の装着と関係するのであろう。青色片岩製。琥珀玉は第23図に示す通り完全品が400点、破損品が約100点出土している。総計450以上に及ぶであろう。7~15はその内で形態的に特徴あるものを図示した。琥珀玉の大部分は13~15の直径約5~8mmの円形であり、直径12mmに及ぶ12の例や7~11の角形を呈するものは少ない。16は扁平な泥岩製の上部に8mmの孔がある。孔は実測図の左側面からのものであるが、両表面と孔内部に工作痕は見られず自然に出来たものを装身具として利用したのでであろう。17・19・20は両面加工ナイフ。18は削器。20はメノウ製。他は黒曜石製。



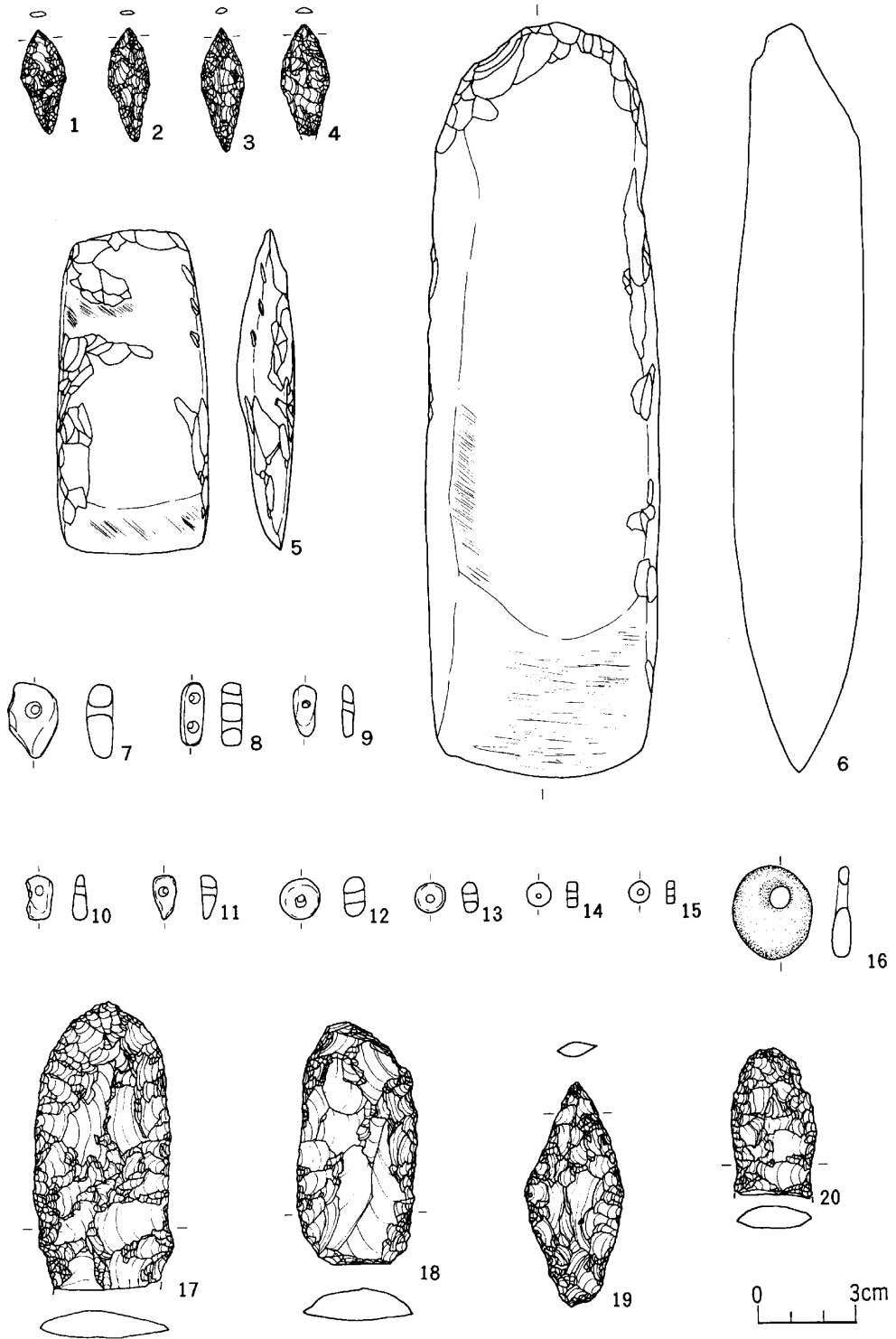
第22図 ピット301平面図



第23図 ピット301琥珀玉等出土状況図



第24図 ピット301床面(1・2)・埋土(3・4)、302埋土(5・6)、303埋土(7)、303a床面(8)・埋土(9~11)、311埋土(12~15)、312埋土(16)、314埋土(17)、315埋土(18) 出土土器



第25図 ピット301床面・埋土出土石器・琥珀玉

小 括

本ピットは続縄文字津内II a 式の土壙墓である。頭位は南西頭位で副葬品は遺存体の上部から出土する傾向を指摘できる。

ピ ッ ト 302

遺 構 (第27図)

本ピットはB73グリッドに位置する。規模は長軸0.55m、短軸0.44mの円形を呈する。底面は小さく、壁はラッパ状に立ち上がる。高さは確認面から約30cmである。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第24図-5・6)

5、6は埋土から出土した続縄文後北C₂・D式。

ピ ッ ト 303

遺 構 (第26図、図版5-3)

本ピットはA73グリッドに位置する。ピット303 a と切り合うもので本ピットが新しい。規模は長軸約1.20m、短軸約0.75mの楕円形を呈する。床面は凹凸がある。壁は開き気味に立上り、高さは確認面から約25cmを計る。形態的には土壙墓の可能性のあるものの遺存体の痕跡は確認できなかった。

遺 物 (第24図-7、図版5-1)

第24図-7は西壁隅の埋土から口縁部を下に向け、斜めの状態で出土した。器高7cmの続縄文字津内II a 式の小型土器である。

上面観は楕円形で、両端部に山形小突起をもつ。口縁部には突瘤文と2本の縄線文があり、器面は撚りの細かい斜縄文が施される。

小 括

第24図-7に図示した土器が本ピットに伴う可能性がある。

ピ ッ ト 303 a

遺 構 (第26図、図版5-3)

本ピットの東壁はピット303によって切られているものの残存部から判断して、長軸推定1.20m、短軸約0.90mの不整楕円形を呈すると思われる。壁は比較的緩く立上り、高さは確認面から約20cmである。

遺物 (第24図-8~11)

8は北壁近くの床面から出土した。縄文晩期後葉の浅鉢と思われる。9~11は埋土出土のもので9は宇津内II b式。10は続縄文初頭。11は縄文晩期前葉。

ピット 304

遺構 (第26図、図版5-3)

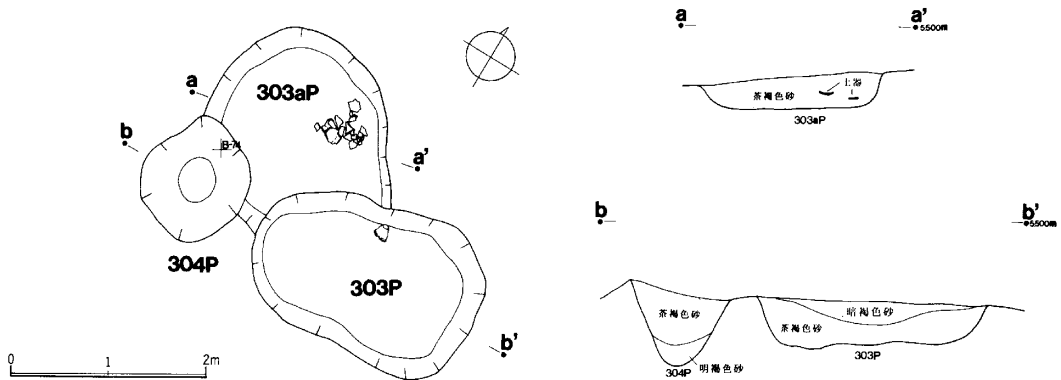
本ピットはピット303aの西壁を切込んで構築している。規模は直径約0.57mの円形を呈する。床面は細く壙上部に向かって「V」字形に大きく開く。壁高は確認面から約44cmを計る。出土遺物は無く時期は不明である。

ピット 305

遺構 (第27図)

本ピットはB73グリッドに位置する。ピット305aと東壁で切合い、時間的には本ピットが新しい。床面には北側と南側の2個所に赤褐色を呈した粘性のある遺存体が見られる。

規模は長軸約1.45m、短軸約0.93mの楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立上り、高さは確認面から約48cmを計る。



第26図 ピット303・303a・304平面図

遺 物 (第29図-1~9)

第29図-1・2の無茎石鏃、3~9の琥珀製の平玉は埋土出土。

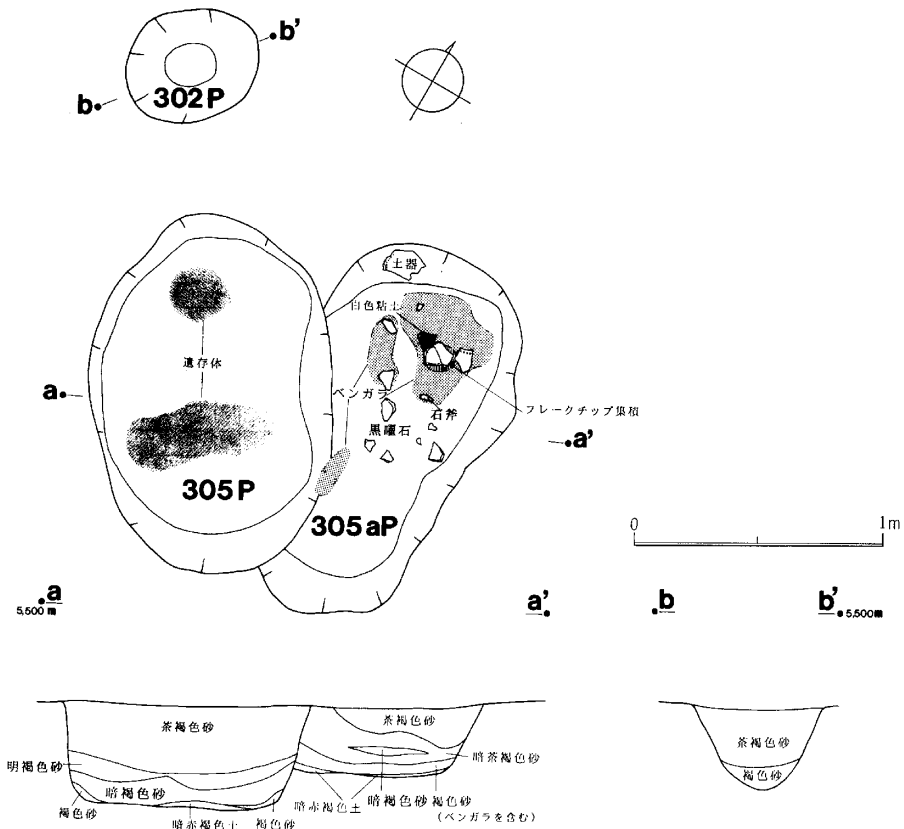
小 括

無茎石鏃、琥珀玉の存在から宇津内系の土壙墓と考えられるが、詳細は不明である。

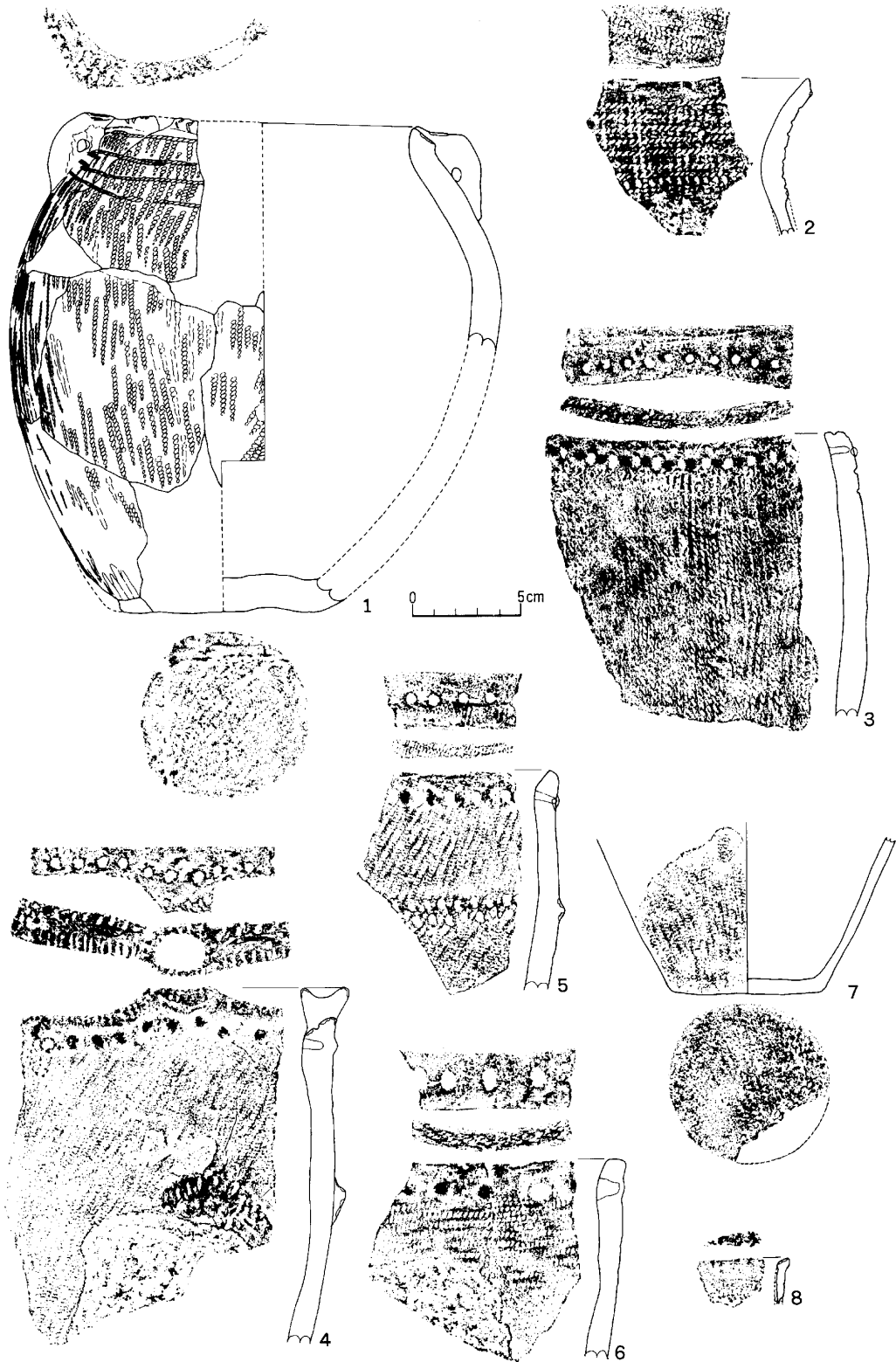
ピ ッ ト 305 a

遺 構 (第27図)

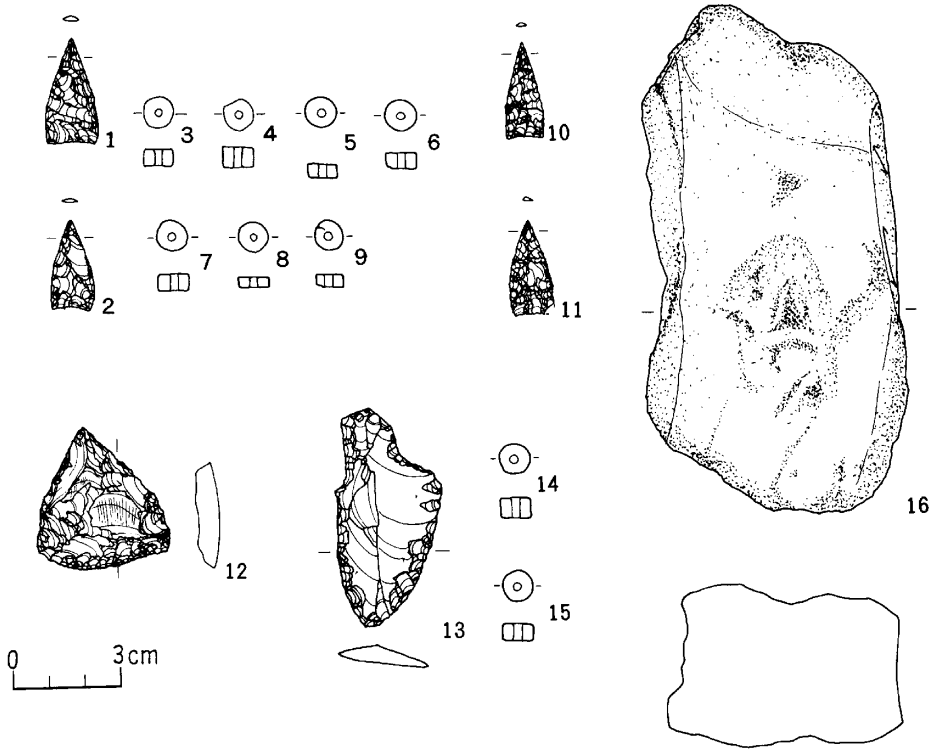
本ピットはB73グリッドに位置する。ピット305に西壁の一部が切られている。内部を掘り下げた直後から宇津内II b式の破片が出土し、第27図に示す通り多くは遺存体の上部周辺に見られる。これらの破片を接合復元したものが第28図-1である。この土器は遺体埋葬後に意識的に破碎された可能性が高い。遺存体は粘性をもつ暗赤褐色土でベンガラが散布されているが量は多くない。北壁近くでは遺存体の直上からフレーク・チップが直径15cmの範囲に集中して置



第27図 ピット302・305・305a平面図



第28図 ピット305a埋土出土土器



第29図 ピット305埋土（1～9）・305a埋土（10～16）出土石器・琥珀玉

かれ、隣接して白色粘土が出土している。これらの遺物はピットの中央から南側に無く、北側寄りから多く出土する傾向がある。

規模は長軸約1.55m、短軸約0.80mの楕円形を呈する。高さは確認面から約26cmを計る。床面に小柱穴は認められない。

遺 物（第28図、第29図-10～16、図版5-2）

第28図-1（図版5-2）は胴部が丸く張出し、すぼまった口縁部に吊り耳を持つ。縦走縄文を地文に4条の縄線文がある宇津内II b式。2も宇津内II b式。3～6は宇津内II a式。7は続縄文の底部、8は口縁下部に擦痕状の細い沈線が施されたもので、続縄文前葉であろう。

第29図-10・11は黒曜石製の無茎石鏃。12は三角形の搔器。13は薄手の縦長剥片に柄部を作出し、微細な加工のある削器。14・15は琥珀製の平玉。16は凹石。

小 括

本ピットから床面出土の遺物は無いが、埋土から破碎された状態で出土した第28図-1の石器が伴うものと考えられる。時期は続縄文宇津内II a式の土壌墓である。

ピ ッ ト 306

遺 構 (第30図、図版6-1・2)

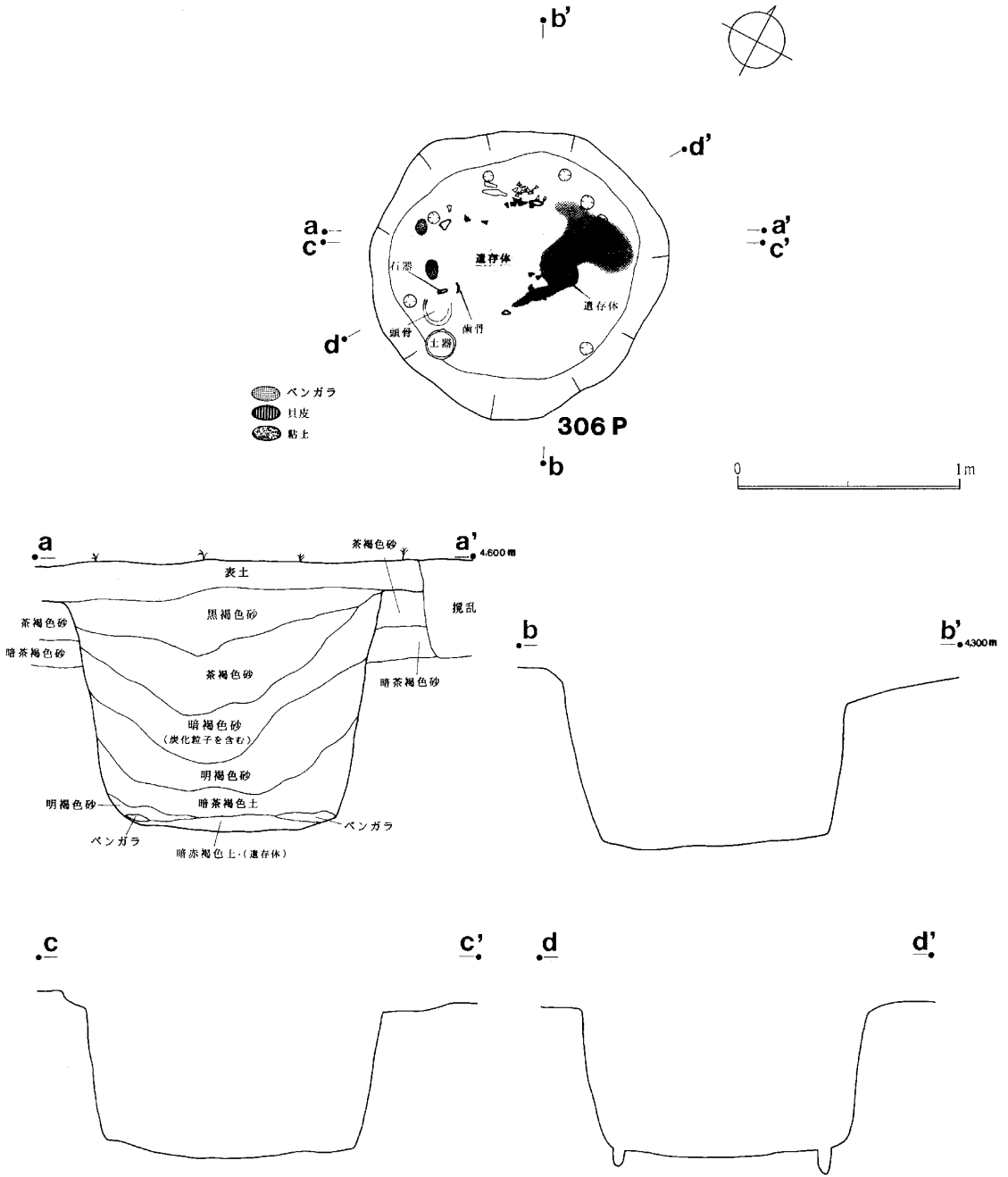
本ピットはJ'73グリッドに位置する。表土を剝土した段階で黒色土の落ち込みを確認したためJ'72、73、74ラインに沿って土層ベルトを設定し西側半分から掘り進めた。当初、黒色砂が堆積した浅いピットではないかと考えていたが、黒色砂を剝土すると茶褐色砂、暗褐色砂がレンズ状に堆積し予想以上に深いことが予想された。II層茶褐色砂とIII層暗褐色砂を切り込んで構築されていることが明らかになったので平面形を明確にするためII層、III層を剝土し地山まで掘り下げることにした。その結果、不整楕円形の輪郭を把握することができた。内部の調査は暗褐色砂まで下げた段階で中断していたが引き続き開始し、さらに明褐色砂、暗褐色砂を剝土した段階でベンガラが散布された赤褐色の遺存体を検出した。ベンガラ散布は遺存体にも撒かれるが僅かであり、頭部周辺に2箇所、北東壁際で厚く散布されている。大腿部と思われる太い骨もベンガラが浸透したためか赤変している。

規模は長軸約1.36m、短軸約1.35mの不整形円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり確認面の茶褐色砂層から約1.10mの深さである。壁から床面中央部にかけて浅い皿状を呈する。壁際には直径約6~7cm、深さ約6~12cmの小柱穴が6本ある(図版6-2)。土器は頭部に近接して正立の状態出土した。石器は西壁に近接した床面から出土するが、石鏃は遺体の上部から出土する。白色粘土は北壁近くの広範囲に散布されたベンガラの上部から出土した。白色粘土を取り上げるとカワシンジュと思われる貝皮が検出された。

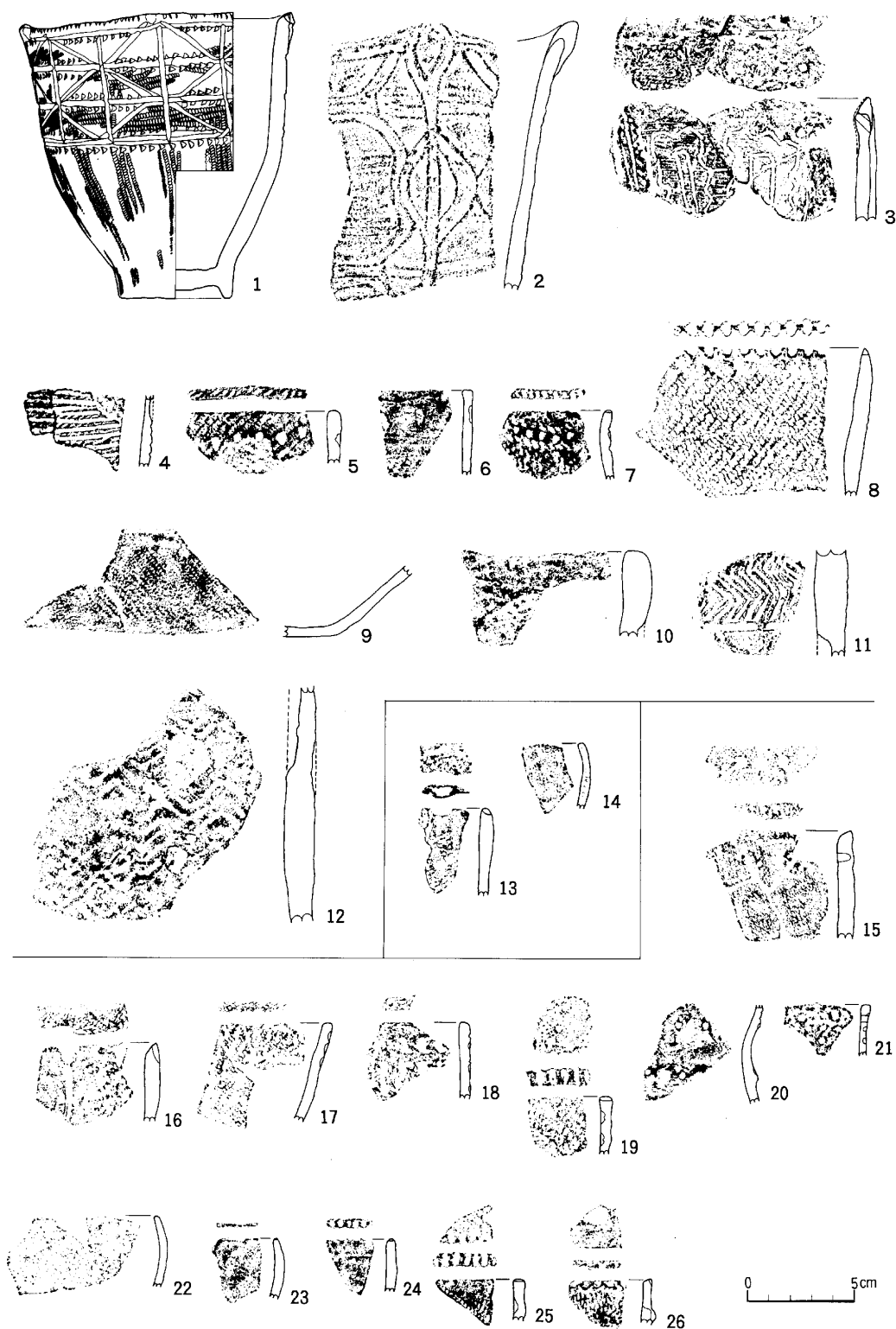
遺 物 (第31図-1~12、第32図、第33図、図版7・8)

第31図-1(図版7-1)は器高13.2cmの中型土器。口唇部に4個の小突起をもつ。口縁部は緩く外反し底部は揚げ底となる。胴上部は帯縄文を地文にまず横走する4本の沈線を施し、次に縦の沈線で区画した後にその区画を斜めの沈線で結び三角形文、見方によっては菱形文を構成したものである。三角形文とするとその底面に半截状施文具による刺突を巡らす。胴下部は縦位の縄文が施され、煤が顕著に付着する。続縄文後北B式に比定される。2は後北C₁式。3は幣舞式。4の器壁は薄く8条の横走沈線が施される。続縄文初頭であろう。5~9は縄文晩期中葉。10は縄文前期末葉の押型文に伴う無文土器。11・12は押型文。

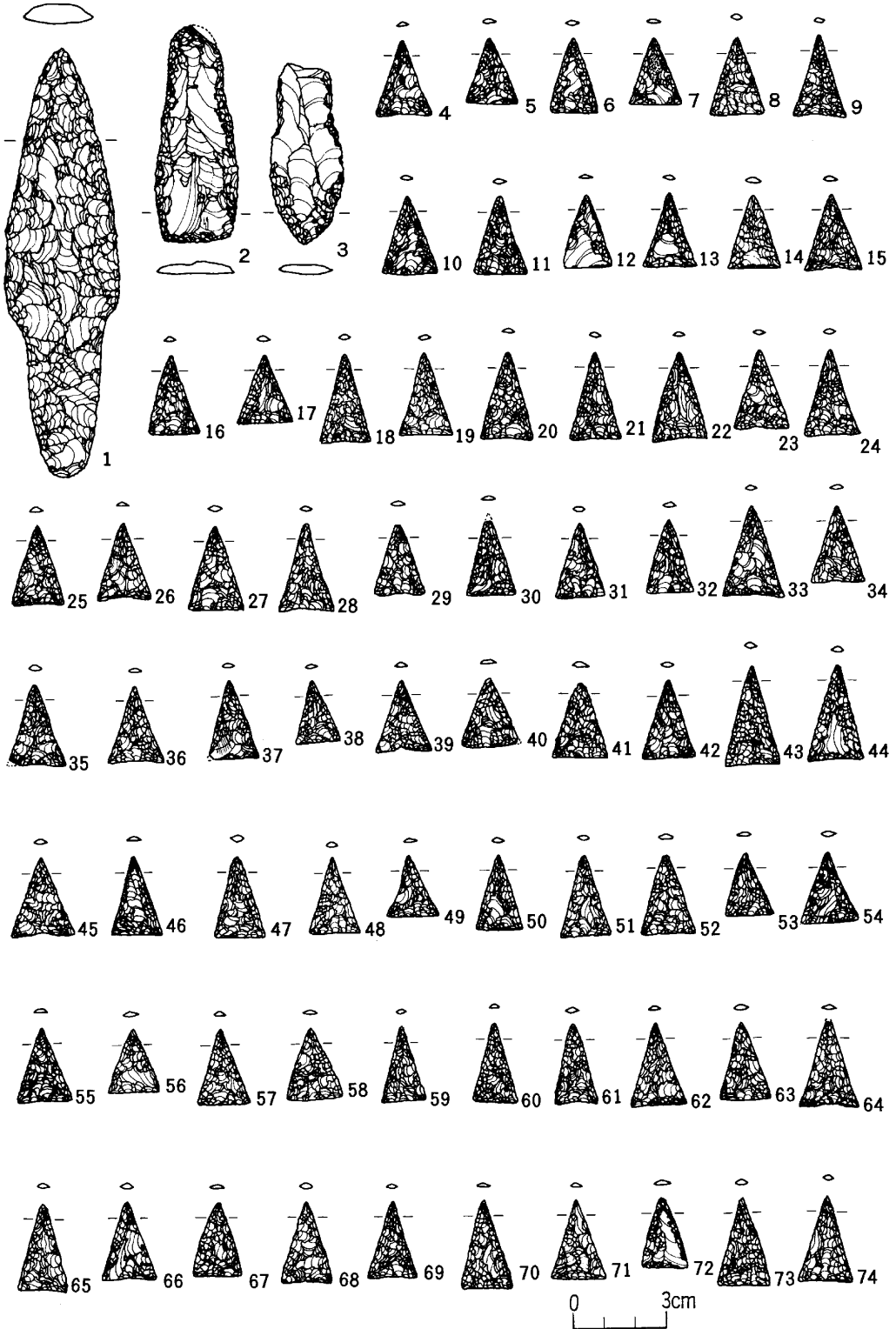
第32図-1の石器は頁岩製の石槍。茎部は楕円状の丸みをもつものの体部の断面はかまぼこ状である。2は削器。3の先端部の表裏面は細かに調整されてるもので、石槍の未製品であろう。2、3は黒曜石製。4~7及び第33図-1~15は二等辺三角形の石鏃。16~20は有茎石鏃。21の先端部は肉厚で急斜な角度をもった搔器。1~21まで黒曜石製。22(図版8-22)は白色粘土として取り上げたものであるが、他の土壌墓から出土する白色粘土は扁平なものが多く脆弱であるのに対してこの例は先端部が砲弾状な丸みをもち、胎土も硬い。色調も白色系と



第30図 ピット306平面図



第31図 ピット306床面 (1)・上部黒色土 (2)・埋土 (3~12), ピット308埋土 (13・14)、309埋土 (15~26) 出土土器

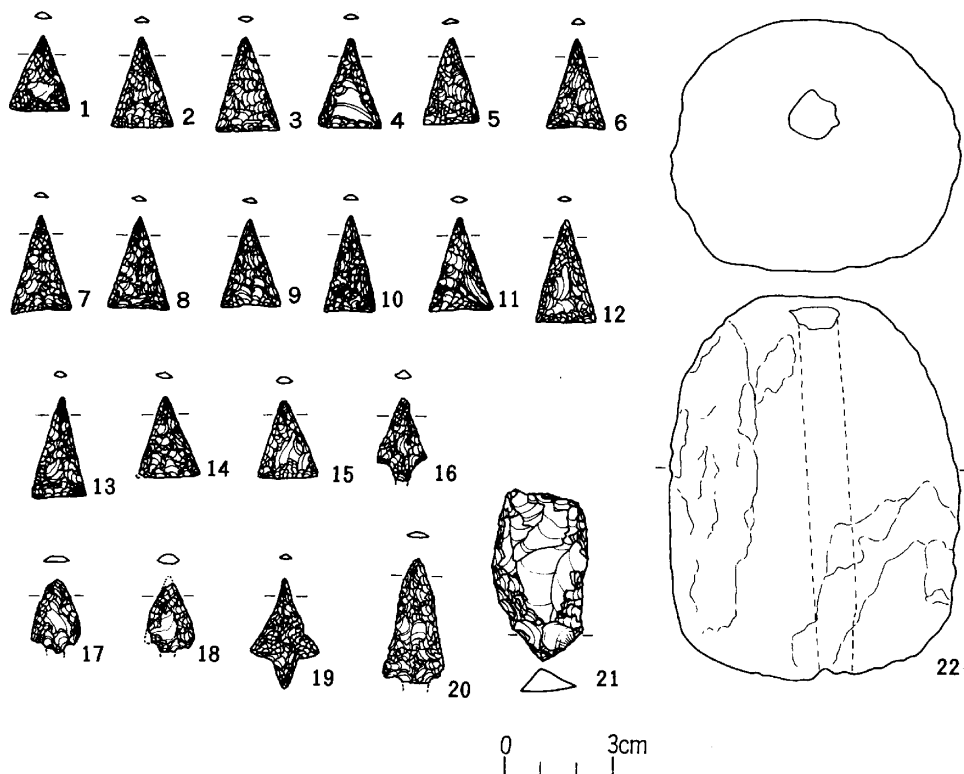


第32図 ピット306床面・埋土出土石器

言うよりは灰褐色を呈する。また、先端部から下端部にかけて直径1.1cmの孔が貫通している。重量も500gに及び従来の白色粘土とは性質を異にした資料と考えられる。

小 括

本ピットは続縄文後北B式に比定できる土壙墓である。南頭位である。床面に小柱穴を配置し、石器などを多量に副葬する例は宇津内II a 式的である。その反面、土器が頭部に接して正立の状態で置くなど後北C₂・D式に特徴的な葬法を持つなど興味深い。



第33図 ピット306埋土出土石器・有孔粘土

ピ ッ ト 307

遺 構 (第35図)

本ピットはK'73グリッドに位置する。規模は長軸約98cm、短軸約82cmの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約25cmを計る。遺物は出土しておらず時期は不明である。

ピ ッ ト 308

遺 構 (第34図)

本ピットはI'73グリッドに位置する。52号竪穴の舌状部により半分が破壊されているものの直径約0.92mの円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約20cmを計る。

遺 物 (第31図-13・14)

13は地文に縄文をもつ。14は無文。いずれも縄文晩期であろう。

ピ ッ ト 309

遺 構 (第34図)

本ピットはH'72、73グリッドに位置する。東壁の一部を擦文文化の33号竪穴により破壊されているものの規模は長軸約1.70m、短軸約1.60mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立上り高さは確認面から約25cmである。

遺 物 (第31図-15~26)

15は続縄文宇津内II a 式。16~25は縄文晩期中葉、26は同前葉であろう。

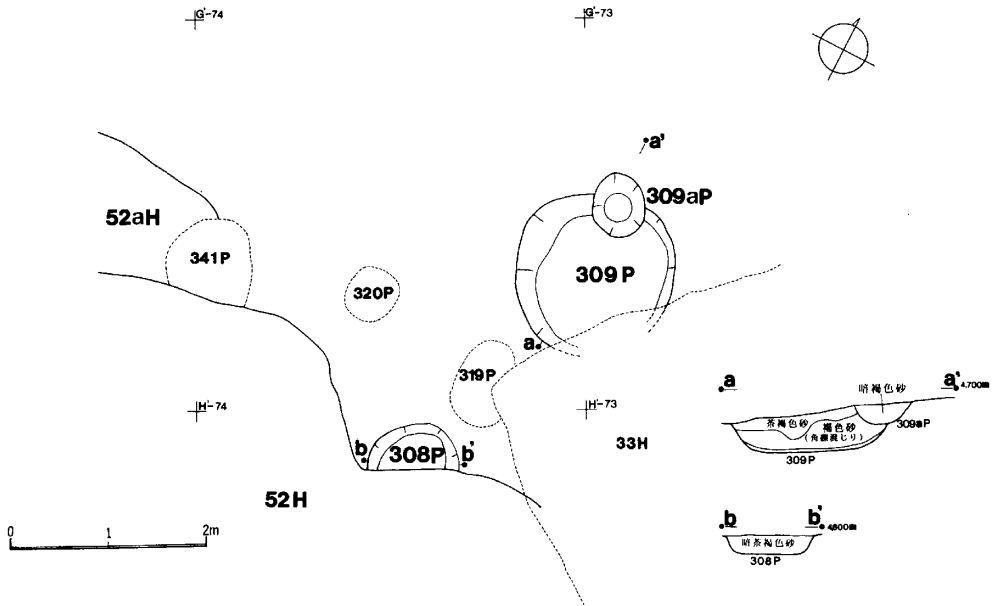
ピ ッ ト 309 a

遺 構 (第34図)

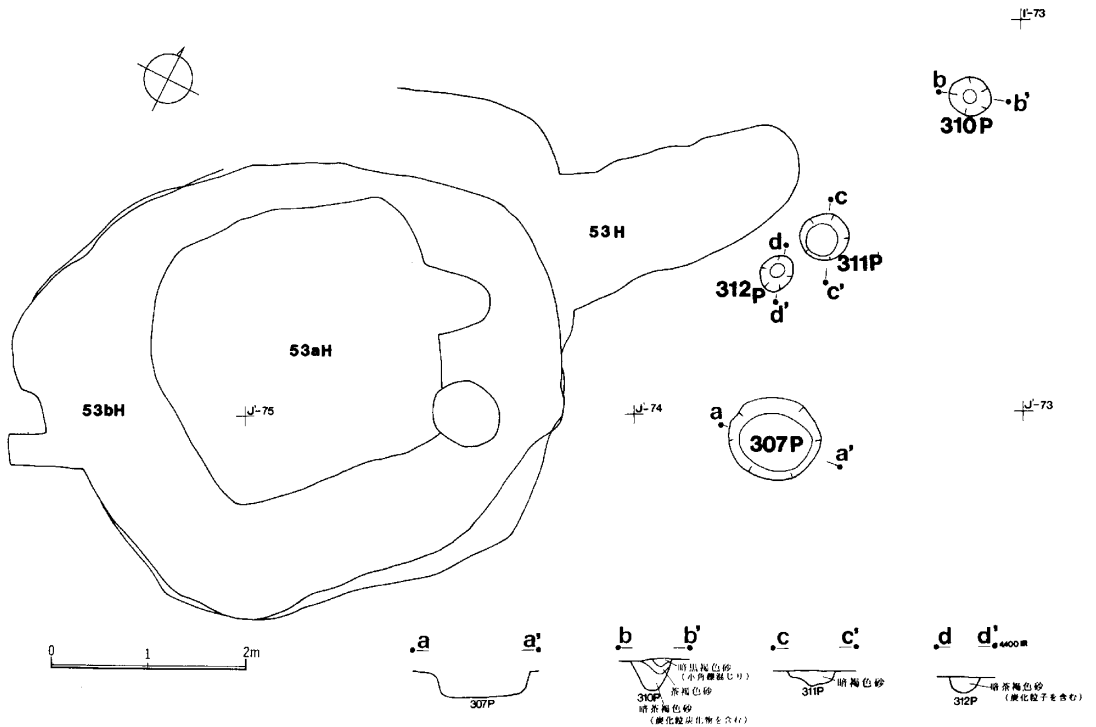
本ピットはH'72グリッドに位置する。ピット309の北壁を切り込んで構築されている。規模は直径約0.50mの円形小ピットである。壁は丸みを持って立ち上がり、高さは約24cmである。遺物は出土しておらず時期は不明である。

ピ ッ ト 310

遺 構 (第35図)



第34図 ピット308・309・309 a 平面図



第35図 ピット307・310・311・312平面図

本ピットはJ'73グリッドに位置する。床面からピット上部に向って大きく開く直径約44cmの小ピットである。壁高は確認面から約30cmを計る。上部に2～5cmの角礫、暗褐色砂層に炭化粒が多量に含まれる。遺物は出土しておらず時期は不明である。

ピ ッ ト 311

遺 構 (第35図)

本ピットはJ'73グリッドに位置する。規模は直径約43cmの円形を呈する。床面は凹凸があり不安定である。壁高は確認面から約13cmを計る。上部に10～15cmの角礫2点が認められた。正確な時期は不明である。

遺 物 (第24図-12～15)

図示した4点はいずれも縄文晩期のもので12～14は後葉の幣舞式。14はミニチュア土器。15は同中葉と思われる。

ピ ッ ト 312

遺 構 (第35図)

本ピットはJ'73グリッドに位置する。規模は直径約35cmの小円形を呈する。壁は床面から丸みをもって立ち上がるもので、壁高は確認面から約17cmを計る。正確な時期は不明である。

遺 物 (第24図-16)

16は埋土から出土した縄文晩期後葉の幣舞式。

ピ ッ ト 313

遺 構 (第36図)

本ピットはF'73、74グリッドに位置する。規模は直径約0.43mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約15cmである。遺物は出土しておらず正確な時期は不明である。

ピ ッ ト 314

遺 構 (第36図)

本ピットはF'73グリッドに位置する。規模は長軸約0.70m、短軸約0.62mの小楕円形を呈する。底面から壁にかけて丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約24cmを計る。正確な時期は不明である。

遺物 (第24図-17)

17は埋土から出土した。縄文を地文に5本の縦方向の沈線と斜めの沈線が施されたもので縄文晩期中葉と思われる。

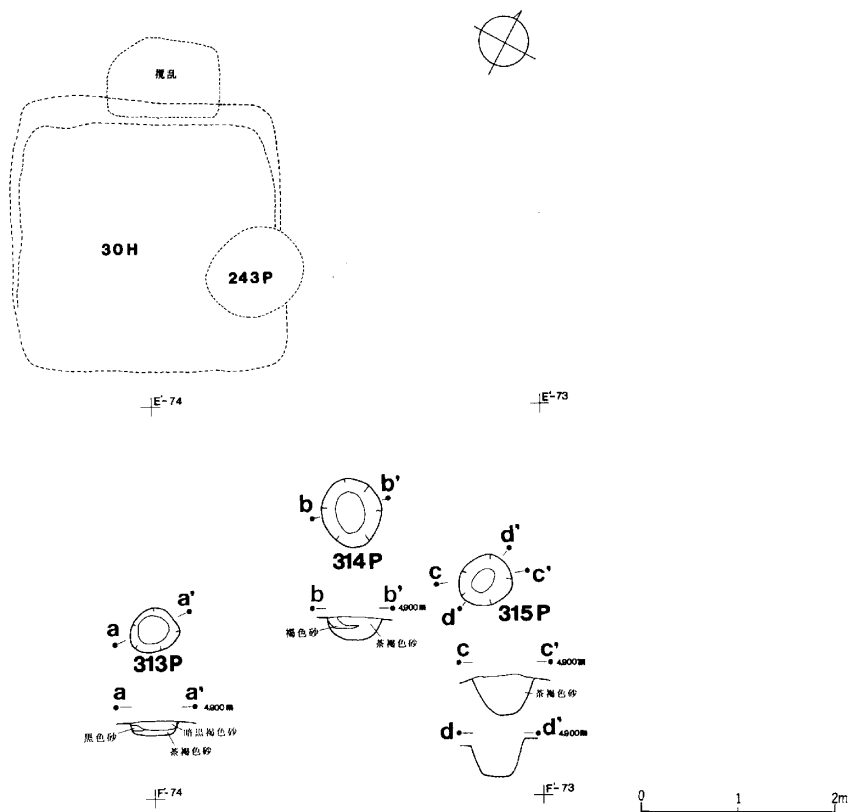
ピット 315

遺構 (第36図)

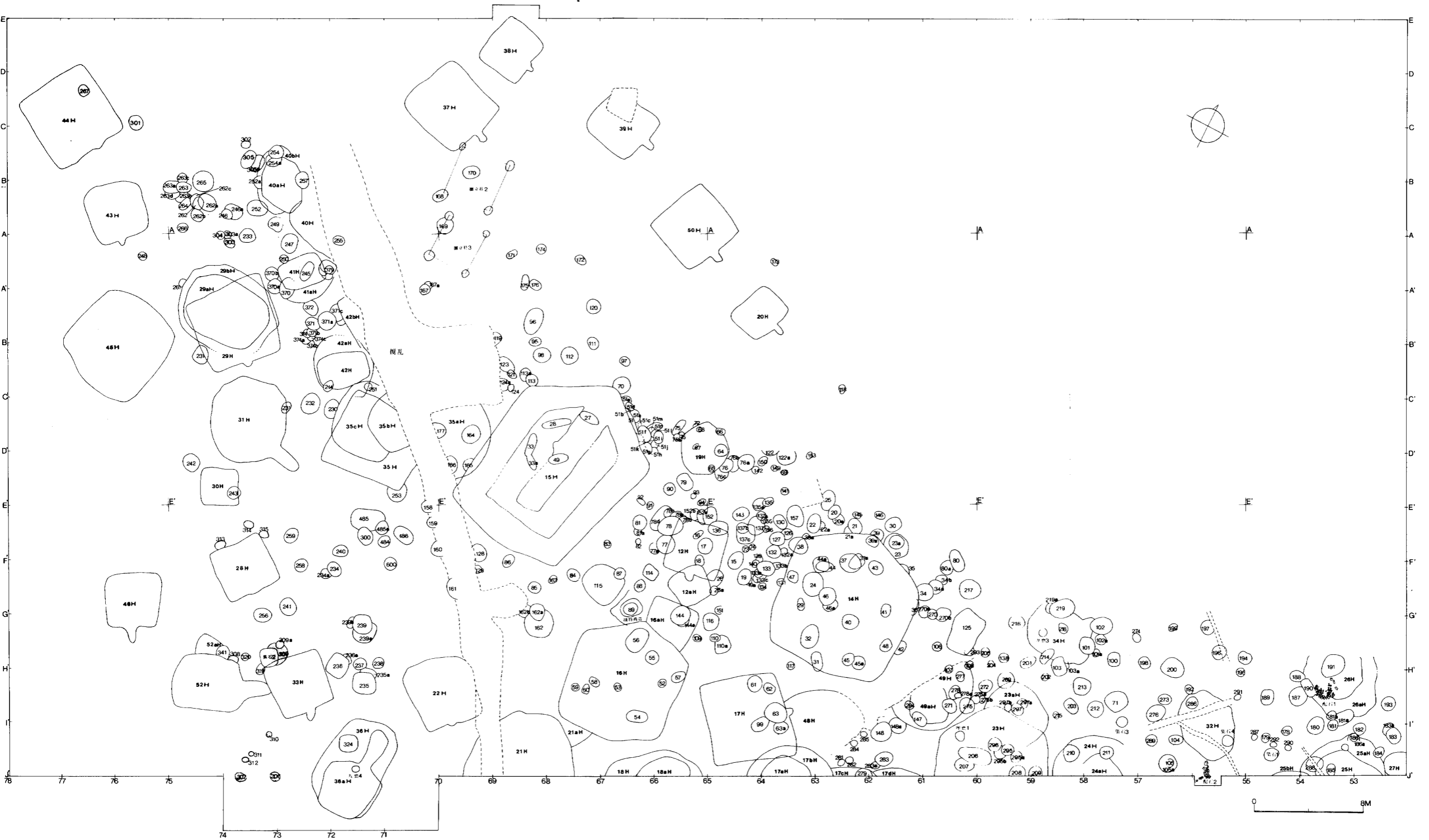
本ピットはF73グリッドに位置する。規模は直径約0.50mの円形を呈する。床面は南北方向が30cmを計るのに対して、東西方向は20cmと短く、立ち上がりはやや開き気味である。高さは確認面から約38cmである。

遺物 (第24図-18)

18は埋土から出土した。口縁のやや下部に3列の刺突文を施したもので、縄文晩期中葉と思われる。



第36図 ピット313・314・315平面図



第37図 遺構配置図

第VI章 第I層・II層の遺物

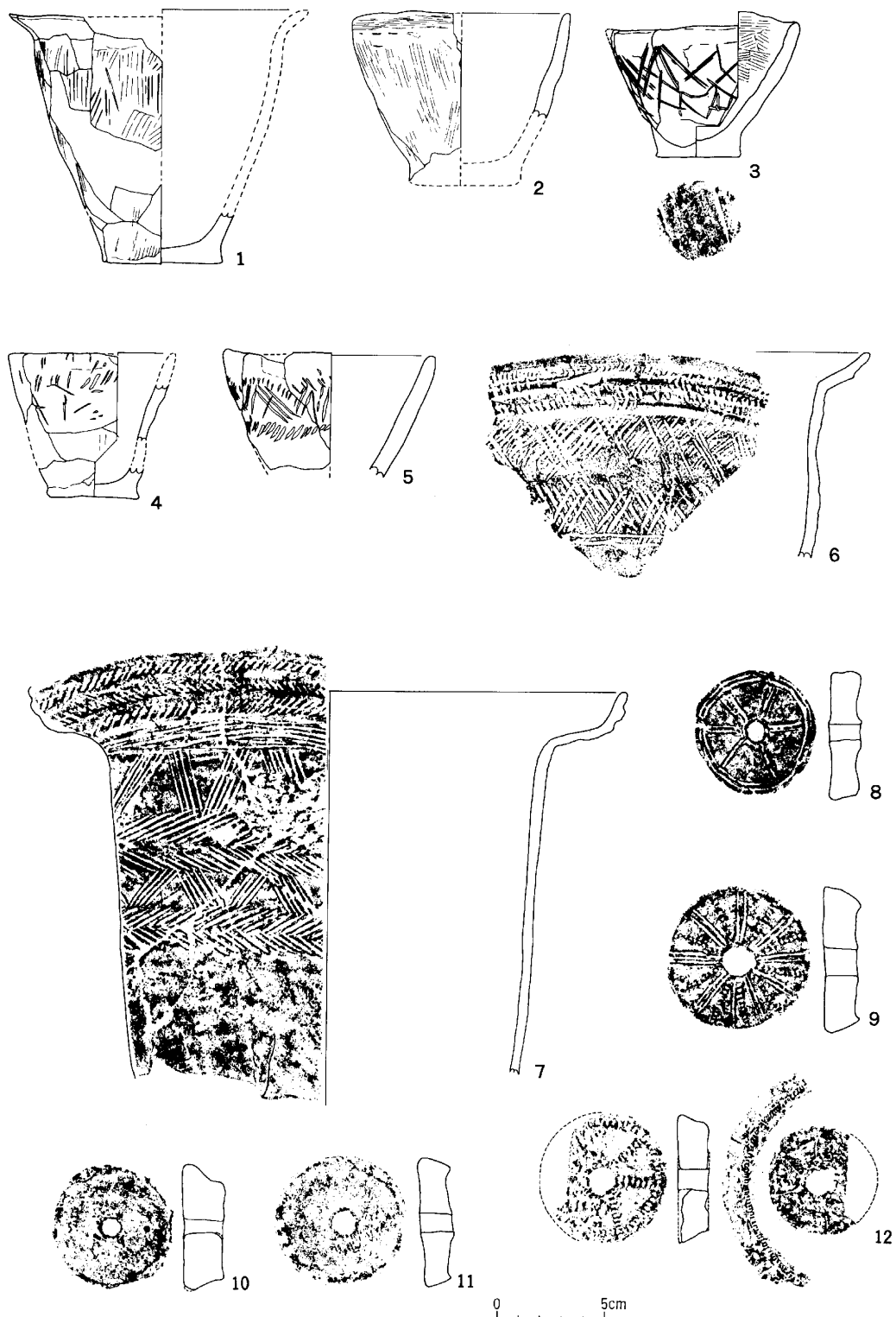
第I層・II層の概要

第I層の表土層は層厚約15~30cm、第II層の茶褐色砂層は層厚約25~30cmを計り遺跡全体に堆積する。河川改修に伴う移転前は40数軒の住宅があったため、建物基礎などにより包含層の一部は破壊を受けている。第I層と第II層からは擦文、オホーツク、続縄文、縄文前期・中期・後期・晩期の遺物が出土するものの、主体は擦文、続縄文、縄文晩期である。

1. 擦文土器 (第38図・39図-1、図版9-1・2・3・4・5・6)

第38図-1 (図版9-5)は口径約14cm、器高12cmの小型鉢形土器。器面は二次的火熱を受けているため風化している。篋により調整されている。2 (図版9-6)は口径10cm、器高約8cmの小型鉢形土器。篋により丁寧に調整されている。3 (図版9-2)は口径8.5cm、器高7cmの杯である。器形も左右のバランスを欠き、上面観も円形と言うよりは方形に近い。器面の沈線も鋸歯状と実測図の裏面は矢羽根状を施すものの極めて雑である。文様は全周せず広く無文帯を残す。内面は底面から上部にかけて刷毛により調整されている。底部には幅2.7cmの板目が見られる。この土器は成形、施文とも雑であり熟練者の手によるものではなく、あるいは子供の製作品かもしれない。4 (図版9-3)は口径7cm、器高6.6cmの小型鉢形土器。実測図面の個所だけに短刻文が施される。5 (図版9-4)は口径10cmの小型鉢形土器。波状を呈した列点文と短刻文の間に山形文を連続させたもの。6は口縁部に3~4状の列点文と胴上部には2段にわたって短刻線を交互に施す。7は口径約29cmの大型鉢形土器。山形と矢羽根状の刻線を複段的に施文している。8~12は紡錘車。8、9は中央から放射状に沈線が施され、8には沈線間に列点文が加わる。重量は8が55g。9が80g。10・11は無文のものであるが10には使用痕であろうか浅いキズ状の短線が外周部から中央孔の近くまで観察できる。重量は10が70g。11は50g。12は丁寧に施文されているもので表面には細い刻線文様が施され、裏面には1本の刻線を挟んで刺突が針葉樹状に施される。この刺突は側面にも見られる。裏面は刺突が放射状に施される。表裏面の一端が欠失するものの重量は40gである。

第39図-1 (図版9-1)は上部直径約7.5cm、高さ3.6cmの製品である。最大の特徴は乳房状の丸みをもった底面が穿孔されていることである。また、断面図に示すとおり底面から上部にかけて大きく開くが、内部空間が狭く容器としての体を成していない。底面の穿孔は明らかに焼成前に行なわれており、意図的に作られたものである。文様は口縁下部に短刻線が斜めに施され、底面に向かって縦方向にへら削りされている。内部の大部分は剥落しているが、残存部を見るとへら削りが丁寧にに行なわれ黒色処理されている。底面の穿孔部の表面は火で焙ったように黒色化している。この様な資料の類例は無く用途は不明である。



第38図 発掘区出土土器（Ⅰ・Ⅱ層）（1）



第39図 第I・II層出土土器(2)

2. 須恵器 (第39図-2・3)

2・3は同一個体と思われる。器形は大型の広口壺であろう。2の口縁部は凹状を呈する。3には叩き目が施される。2・3の内面色調は灰褐色を呈するが器面は黒味を帯びた暗灰褐色である。特に2の口縁部が顕著であり、自然釉と考えられる。

3. トビニタイ I 群土器 (第39図-4)

4は小型土器と思われる。器壁は薄く、口縁部が「く」字状に外反する。2条の擬縄貼付文が横走り、胴部の「V」字状の擬縄貼付文と連結する。

4. オホーツク土器・石器 (第39図-5~10、図版8-23~25・図版9-7・8)

5~8はソーメン状貼付文(藤本編年e群)。4点とも小型土器である。5は口縁部から頸部にかけて1~2本の直線のソーメン文間に2~3本の波状のソーメン文を重鎮したものである。肩部が張り出し、炭化煤が口縁部を中心に付着する。6は僅かに肥厚した口縁部に波状、頸部に直線と波状のソーメン文を施す。内側と外側の一定方向から行われた補修孔があるが、内側のは貫通していない。7は口縁部から頸部に3本の直線のソーメン文があり、口縁部にボタン状の貼付文を施している。内外面ともに炭化煤が付着する。8は口径約20cmの中型土器。肥厚した口縁部に直線と波状のソーメン文がある。9~10は擬縄貼付文(藤本編年d群)。9は強く張り出した肩部に2本の擬縄貼付文がある。10(図版9-7)は口径14.7cm、器高14cmの中型土器。口縁部に2列の列点文がめぐり、頸部は凹帯をなす。肩部には幅6mm~1cmの太い貼付文があり、刻み目が施される。器面は横方向に丁寧に調整されている。図版9-8は口径約8cmの無文小型土器。2本の直線のソーメン文がある。

本文化の特徴的な石器では第40図、第41図に示した有孔石錘がある。第40図-1(図版8-23)はA'62グリッドの表土から出土。上部が細く下部が太い形態のものであるが全体的に丸みをもつ。孔は両側から穿孔される。表面は敲打調整され中央よりやや下部は浅い縛着溝が横にめぐり、縛着溝の上部には凸部が5個残される。石質は砂岩。重量は2kg。2(図版8-25)はC'67グリッドのII層茶褐色砂層から出土。比較的扁平であるが上部は細く、孔は両側から穿孔される。表面は火熱を受けたため部分的に赤化しており、実測図に示すとおり3個所の凹みが見られる。重量は2kg。第41図-1(図版8-24)はF'62グリッドのII層出土。上部が細く、下部が太い形態で表面は敲打調整され、部分的に研磨されている。孔は両側から穿孔されたもので上部中央から孔にかけて浅い縛着溝がめぐり、石質は砂岩。重量は2.5kg。

5. 続縄文土器

1) 北大式土器 (第39図-11~16・42図・43図・44図・45図、図版9-9・10・11・12)

北大式土器は後北C₂・D式最終末から北大I式初頭にかけてのものが大部分を占め、明らか

に北大I式に比定できるのは第42図-1~5である。5点とも外側からの突瘤を持ち、1は特殊な縄文が施される。2の微隆起線は6条に及ぶ。3~5は細い沈線を横、斜め方向に多用する。

第39図-11~16、第42図-6・7と第43図・第44図・第45図の資料は後北C₂・D式最終末から北大I式初頭と思われるものである。第42図-6(図版9-9)は口径約23.5cm。器高は底部近くで接合できなかったものの推定29cmを計る。口縁部は「く」字状に外反した口縁下部に円形刺突が施される。無文の器面には縦方向を基調とした擦痕が見られる。焼成は良い。7(図版9-10)は口径21.5cm。器高は底部が欠失するため正確には不明であるが現存部で約31cmである。胴部が丸みもち頸部から口縁部にかけて緩く外反し1個の山形小突起をもつ。円形刺突は頸部近くに施される。器面は刷毛目調整されている。

第43図-1は微隆起線が垂下し、2~5、7~13、16・17は口縁部が無文帯となり、器面は帯縄文が施される。口縁部は外反する1~5を除きほぼストレートに開くものが多い。10~13、16の焼成は良い。14は帯縄文を斜めに施す。15の突瘤は小さいものの内側まで深く刺し込んでいる。

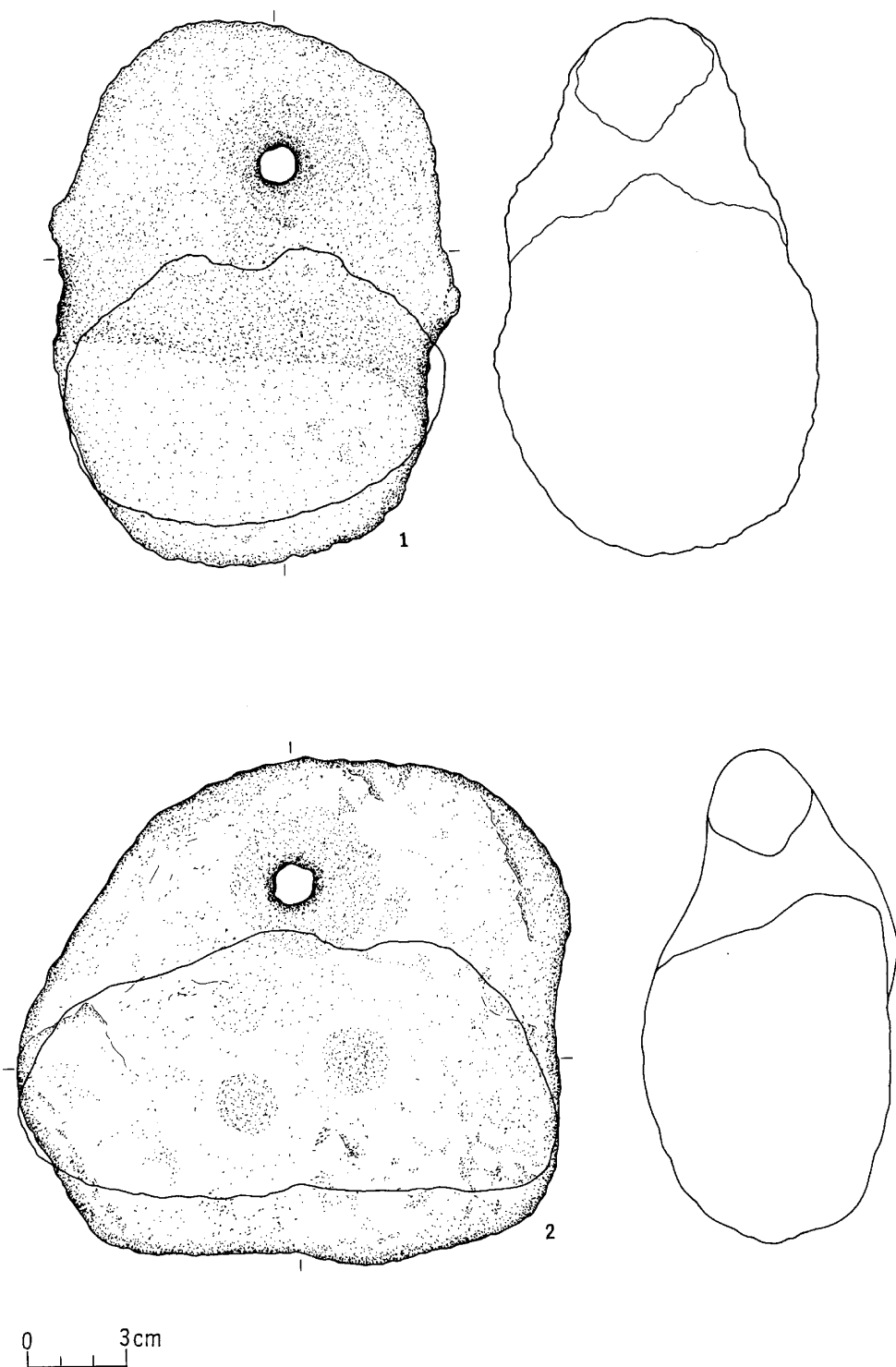
第44図では4・11を除き口縁部がストレートに開く。1(図版9-11)は口径約19.5cmを計る。底部は欠失するため正確な器高は不明であるが、現存高は約21cmである。口縁部直下に外側からの円形刺突をほぼ等間隔に施すもので、底部から口縁部にかけてほぼストレートに立ち上がる。器壁は約3~6mmを計り薄い。器面は縦方向の擦痕が観察され、炭化煤が内外面に付着する。2~6は口縁部に数列の細い刺突が施されるもので3・4には擦痕状の細沈線が見られる。6は小突起をもち、焼成は良い。7~11は櫛歯状、貝殻条痕状の文様を鋸歯状に施文したもので、10は裏面にも及んでいる。9(図版9-12)の口径は25cm。7には刺突文、8、11には突瘤文も施される。

第45図-1~10は器面に沈線が施されているもので、7の注口土器を除いて口縁部はほぼストレートに開く。1~3、7~10は沈線を鋸歯状に施したもので、9・10は帯縄文の上から加えている。4と5には刺突も見られる。11は3条の櫛目文が施されたもので、胎土は砂粒を多く含むものの焼成は良い。本遺跡の57号竪穴埋土からは尖底の櫛目文土器の完形品と後北C₂・D式が相伴しており、この土器もこの頃であろう。

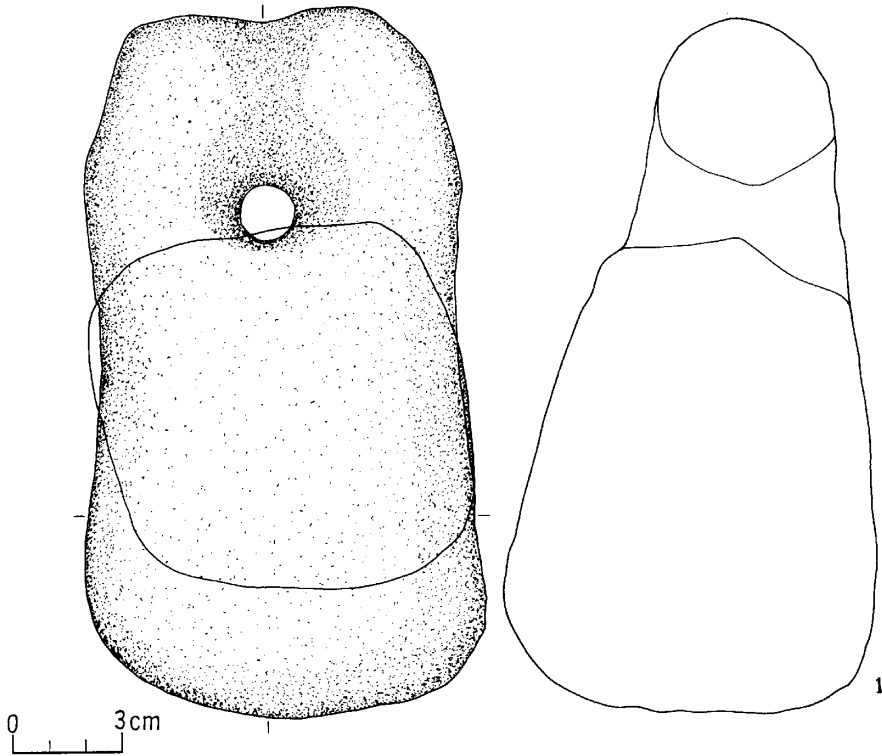
2) 後北C₂・D式土器、土製品(第46図・47図・48図・49図・50図・51図、図版10-1~10、図版11-3・4)

この時期の土器は各グリッドから出土しており、その量は他の時期と比較しても多い。

第46図-1(図版10-4)は口径31cm、器高41.5cmの大型鉢形土器。口縁下部に2条の微隆起線を持ち、胴部は帯縄文と微隆起線が直線的な鋸歯状に施され、胴下部とは横走の帯縄文と微隆起線で区画される。2の口縁部は小波状を呈する様である。胴部文様は曲線的である。3



第40図 第I・II層出土有孔石錘



第41図 第II層出土有孔石錘

の帯縄文も直線的である。

第47図-1～7も後北C₂・D式土器である。1・2は口縁下部に微隆起線があるものの帯縄文を微隆起線で囲うものではない。1は口径約12cm、器高8.5cmの小型鉢形土器。帯縄文と列点文が施される。2(図版10-5)は口径16cm、器高18cmの中型鉢形土器。鋸歯状の帯縄文と連続しない短い帯縄文で構成される。3～5は帯縄文を鋸歯状に施したもので、5(図版10-7)の注口土器は口径10cm、器高10cmを計る。

第48図-1～12も後北C₂・D式である。1～7・9・12は帯縄文を鋸歯状に施したもので12は口縁部と平行する2条の微隆起線部から垂直に立ち上がり、胴部は丸みをもつ。内面の調整も丁寧で焼成も良い。

第49図-1は口径37cm、器高63cmを計る。口縁部に2条の貼付け帯をもつ。胴部文様は横冠する2本の帯縄文の間に半曲線的な帯縄文が施された、後北C₂・D式の特大土器。

第50図-1～4は後北C₂・D式。1(図版10-1)は口径35cm、器高38cmの大型鉢形土器。口縁部は4個の小突起を持ち、緩い波状を呈し、1条の貼付け帯が巡る。胴部文様は直線的な横走る3本の帯縄文と曲線的な帯縄文、列点文で構成され、胴下部には縞縄文が施される。2は底部から胴部にかけて強く張り出す様である。3は曲線的、4は直線的な帯縄文である。

図版10-2は口径28cm、器高28.5cmの大型鉢形土器。口縁部に三角形の大きめな山形突起を4個もつ。突起の下部には円形の帯縄文が配され、それらを連結する様に直線、弧線状の帯縄文が施される。胴下部には縞縄文が見られる。

図版10-3は口径28cm。口唇部は尖がり気味であり、口縁下部に2条の貼付帯をもつ。直線的な三角形の帯縄文を横走る帯縄文と列点文で連結している。

図版10-6は先の報告書に記載している配石2と同一レベルから出土した後北C₂・D式である。口径31cm、器高44cmを計る。口縁下に刻みのある微隆起線と鋸歯状に施された帯縄文で構成される。

図版10-8は口径16cm、器高11cmを計る。帯縄文を直線的な鋸歯状に施された注口土器。

図版10-9は注口部とその反対側で緩い波頂部を呈するもので、口径20cm、最高部は25cmを計る。口縁下部の2条の貼付帯と曲線的な帯縄文、列点文が主要文様である。

図版10-10は口径14cm、器高10cmを計る無文の注口土器。注口部の周辺から底部にかけて煤が付着する。

第51図-1～5は後北C₂・D式。1は注口土器。2は口縁部の無文帯を貼付文で区画する。3は曲線状の帯縄文と列点文が見られる。4は不整形を呈した底部。5は山形突起に三角形の隆起帯をもつもので、器面は縞縄文が施される。6～8は土製品。6（図版11-3）は直径約7.5cmほどの有孔製品で、貫通する円形刺突が2列に巡る。7は右側がやや幅狭な長方形で、微隆起線の内側に刺突が2列施される。8（図版11-4）は中央に孔をもつ。凹状を呈した下端部の周囲には刻みが施される。3点の土製品は胎土の状態から後北C₂・D式と思われる。

3) 後北C₁式・宇津内II b式土器（第52図・53図、図版11-1・2・4～12）

第52図-1～4は後北C₁式に比定される。1（図版11-1）は口径25cm、器高37.5cmを計る大型甕形土器。口縁部に4個の小突起をもつ。縞縄文と帯縄文を地文に波状の微隆起線が施され、部分的に列点文が見られる。2（図版11-2）は口径約12cm、器高15cmの小型土器。胴上部と下部を微隆起線で区画し、二段にわたって微隆起線を施すが上段は波状、下段は鋸歯状になるものでそれぞれを3条の列点文で区画する。3は縦横に区画された中に弧状の微隆起線が施される。4は口縁部に切り込みの入った2個の小突起をもち、2本の微隆起線で区画される。5～7は宇津内II b式に比定されるもので、5は口縁部に吊手を持ち、円形刺突文が加えられる。6（図版10-8）・7には同心円状の微隆起線が施される。

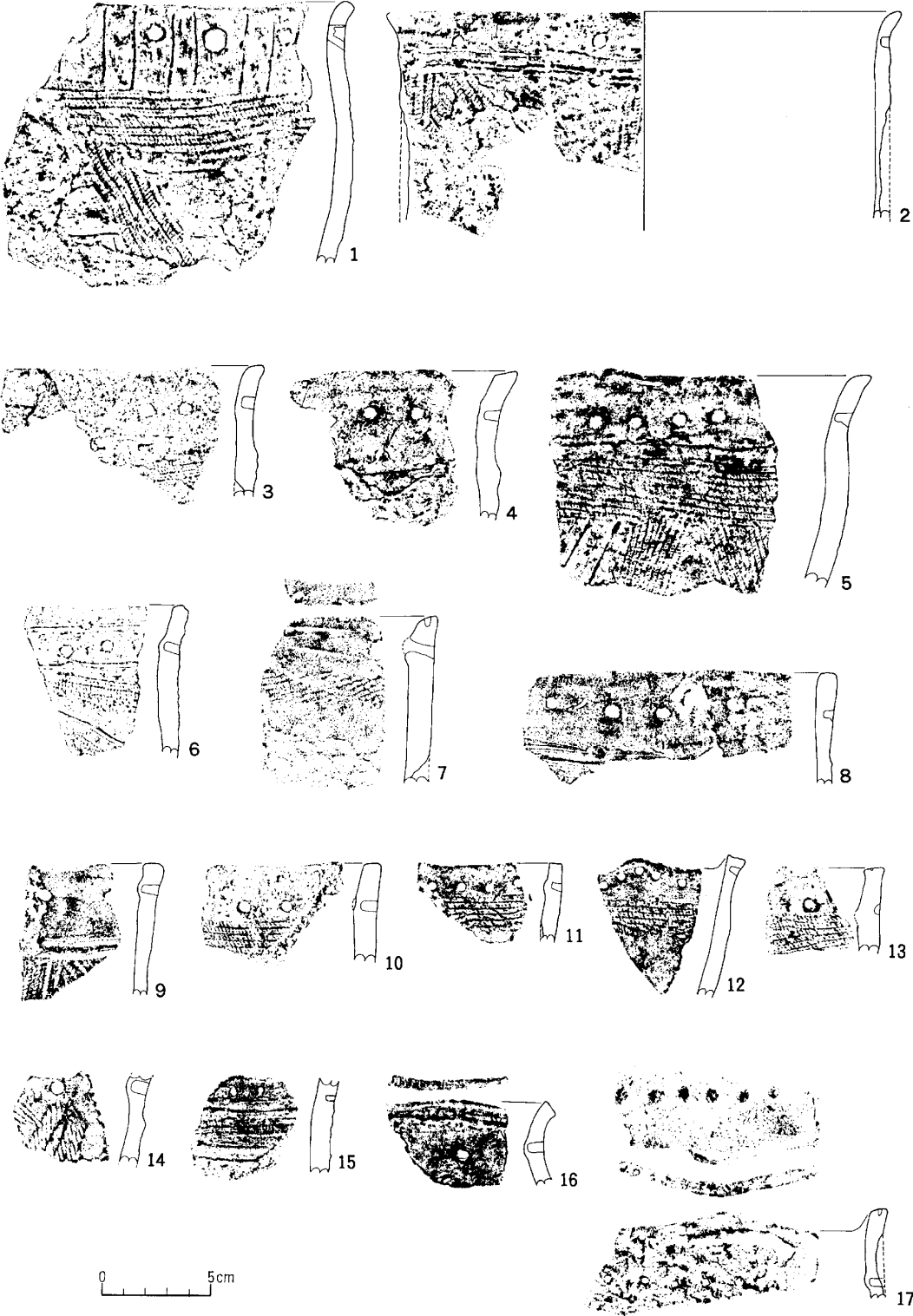
図版11-5は口径16cm、器高22cm。地文の縄文は見られず、無文地にメガネ状の微隆起線を施す。胴下部は極めて丁寧に調整されている。

図版11-6は口径11.5cm、器高14cm。胴上部の文様は斜行縄文を地文にメガネ状の微隆起線、胴下部は縦走縄文と縦横の微隆起線を施す。

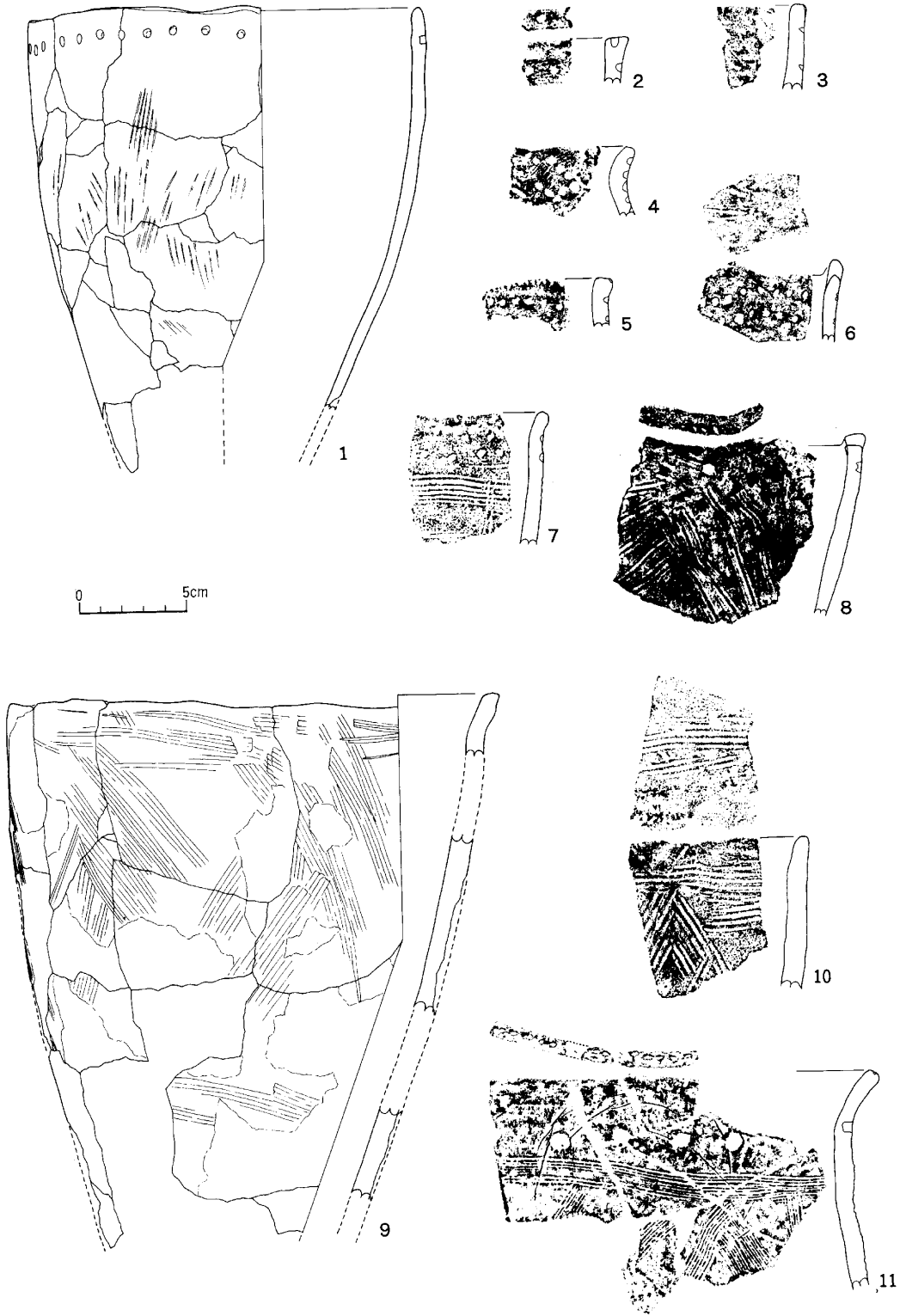
図版11-7は底部が欠失する。胴部が膨らみ口径部がすばまる器形で、口縁部に2個の吊り



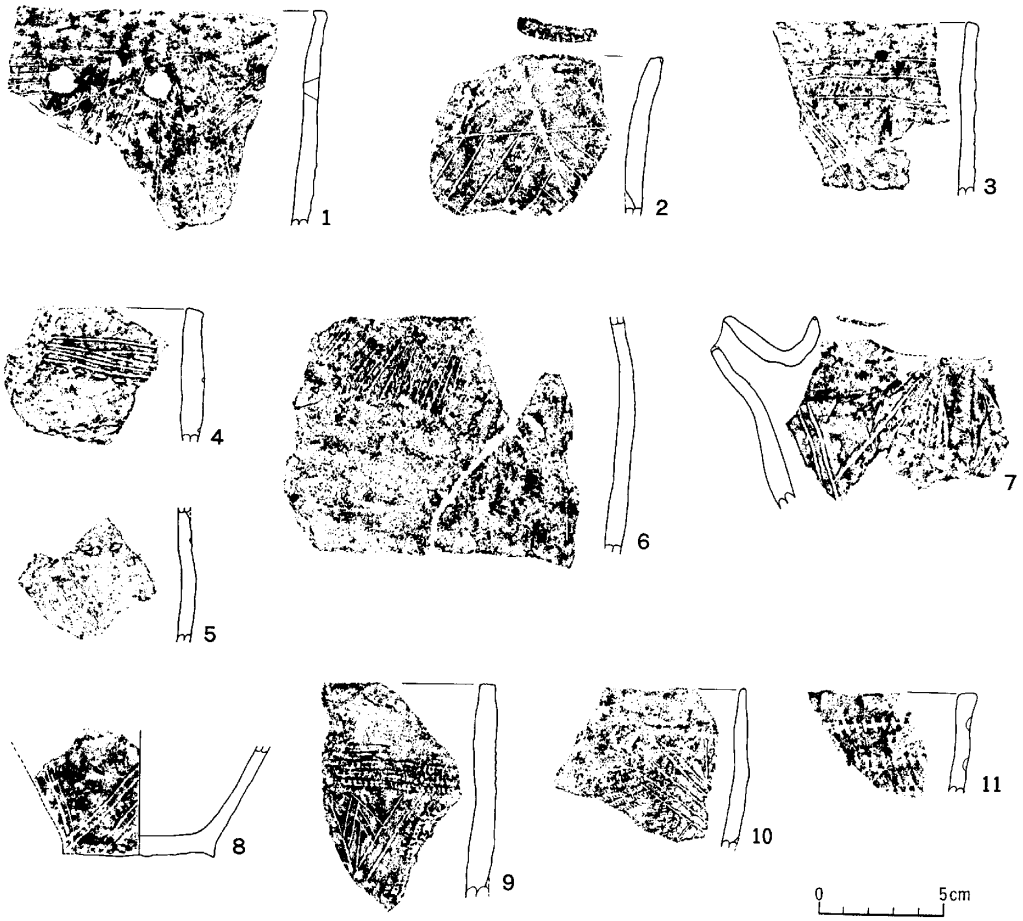
第42図 第I・II層出土土器(3)



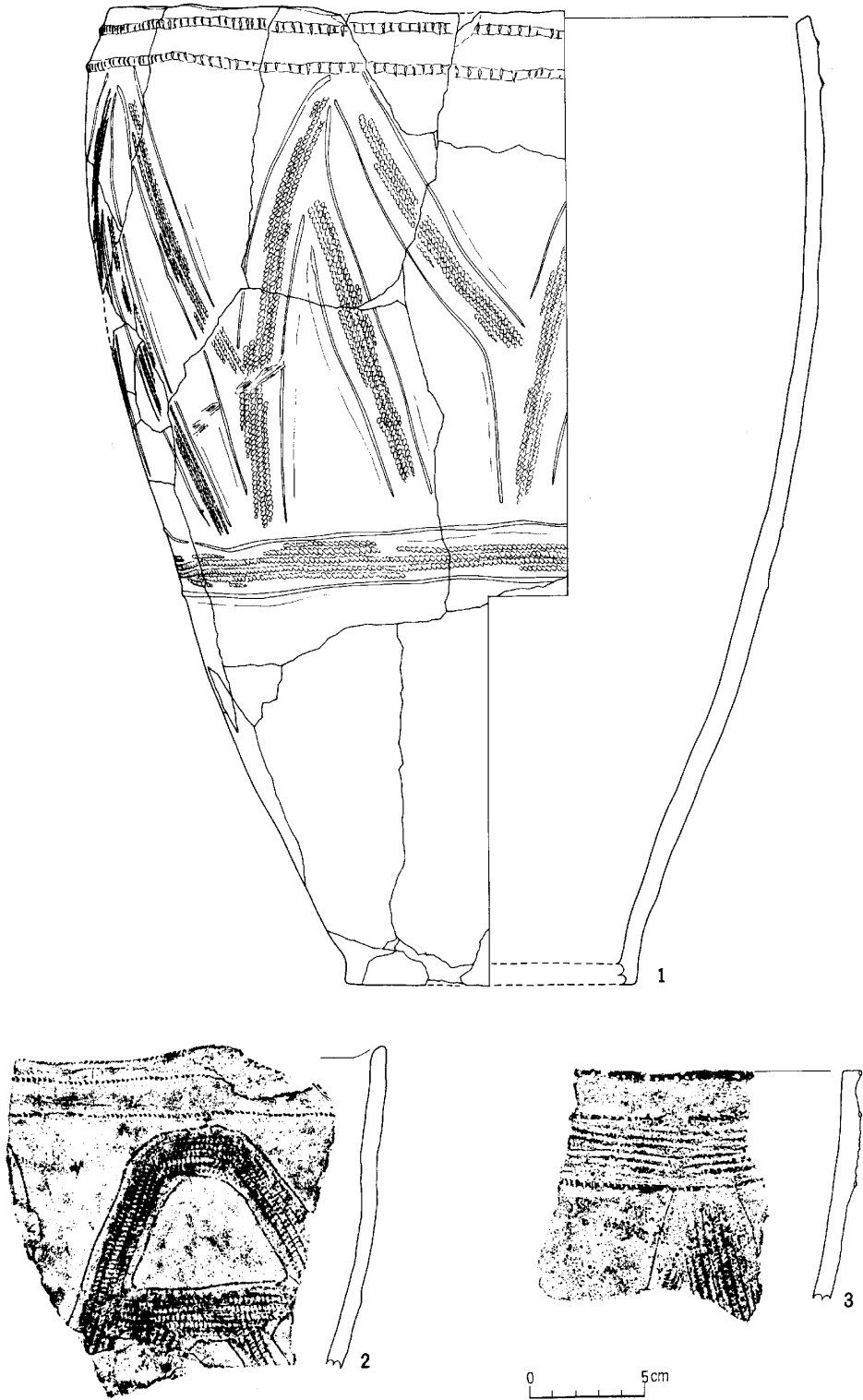
第43図 第I・II層出土土器(4)



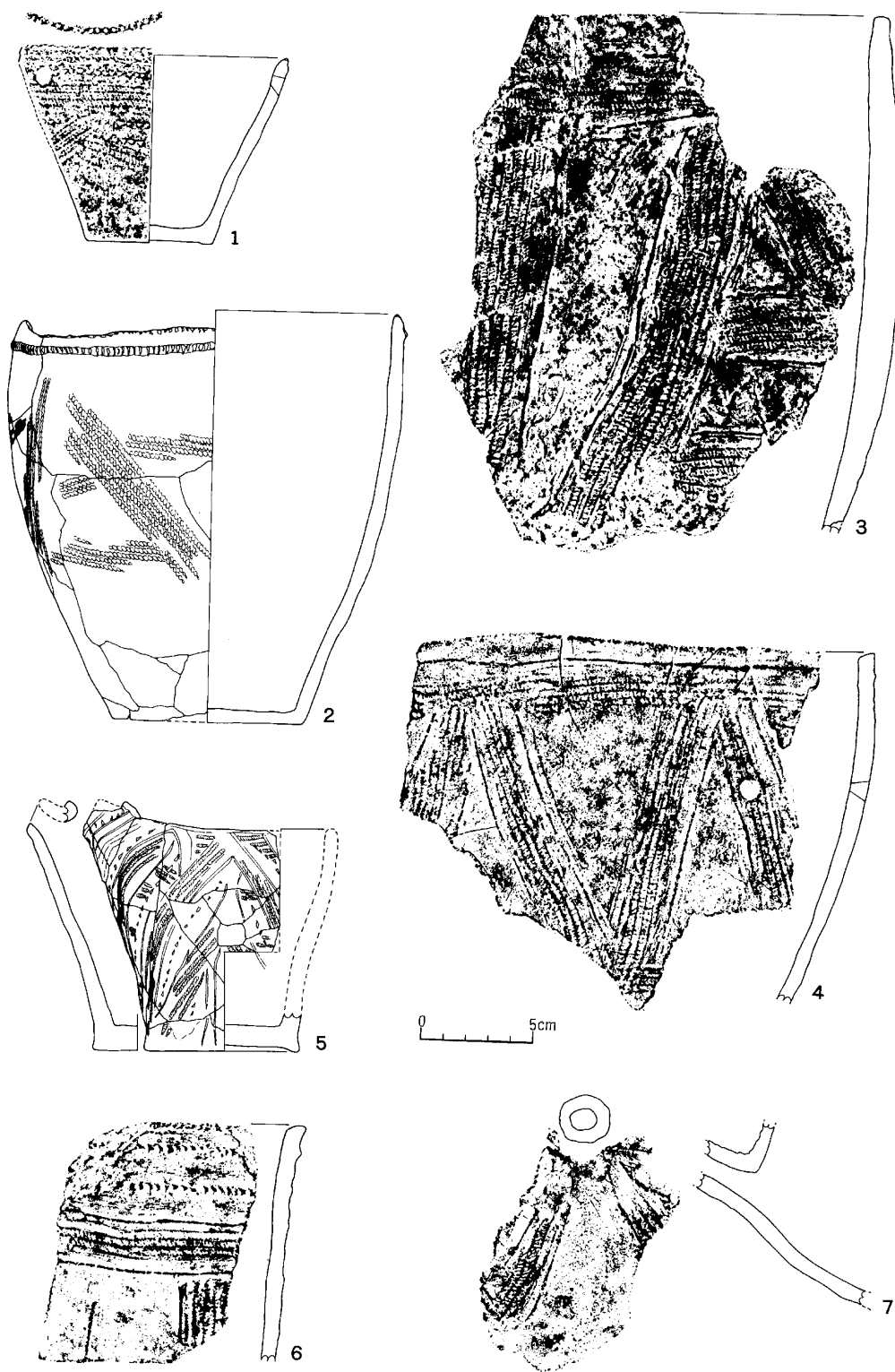
第44図 第I・II層出土土器(5)



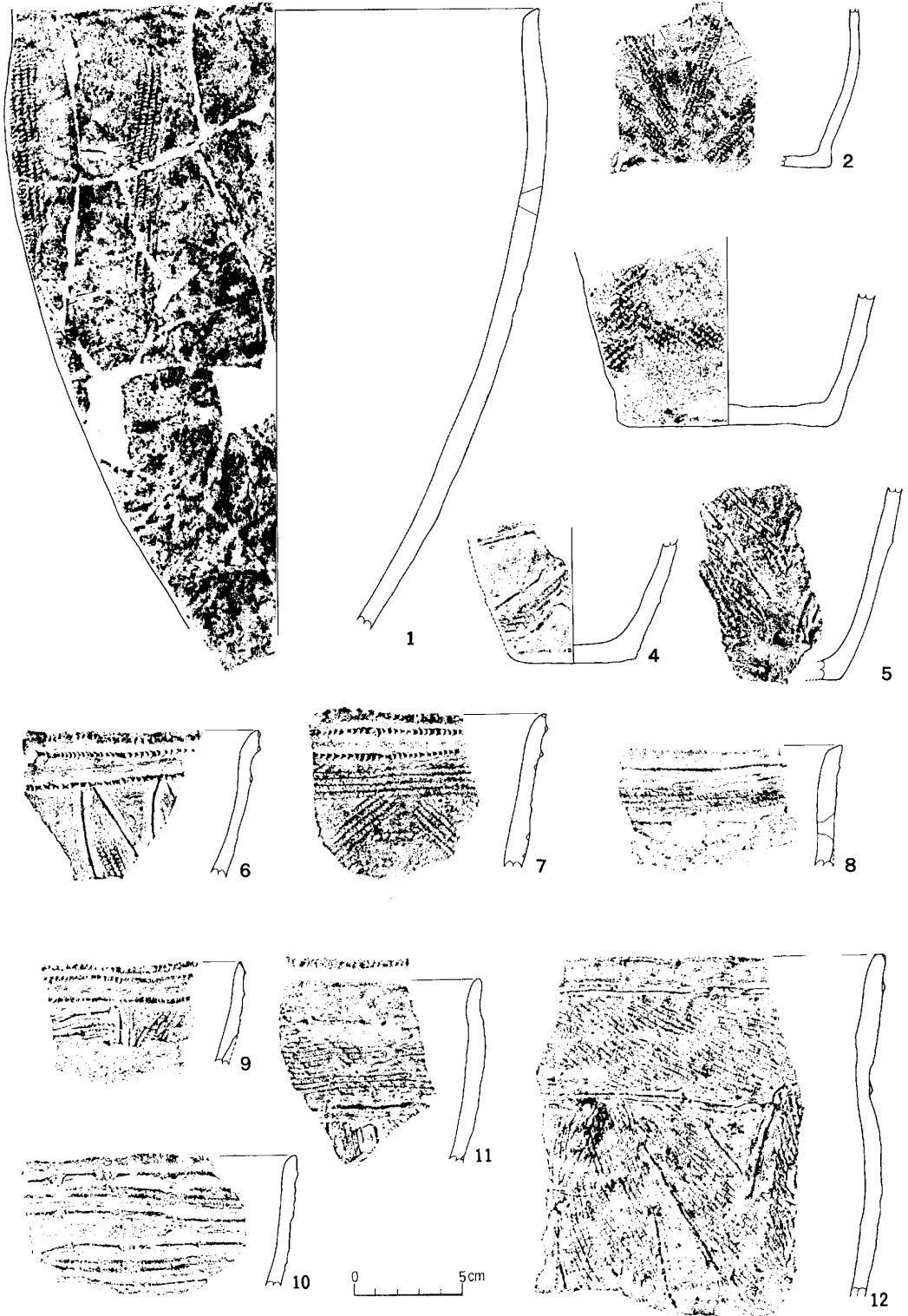
第45図 第I・II層出土土器(6)



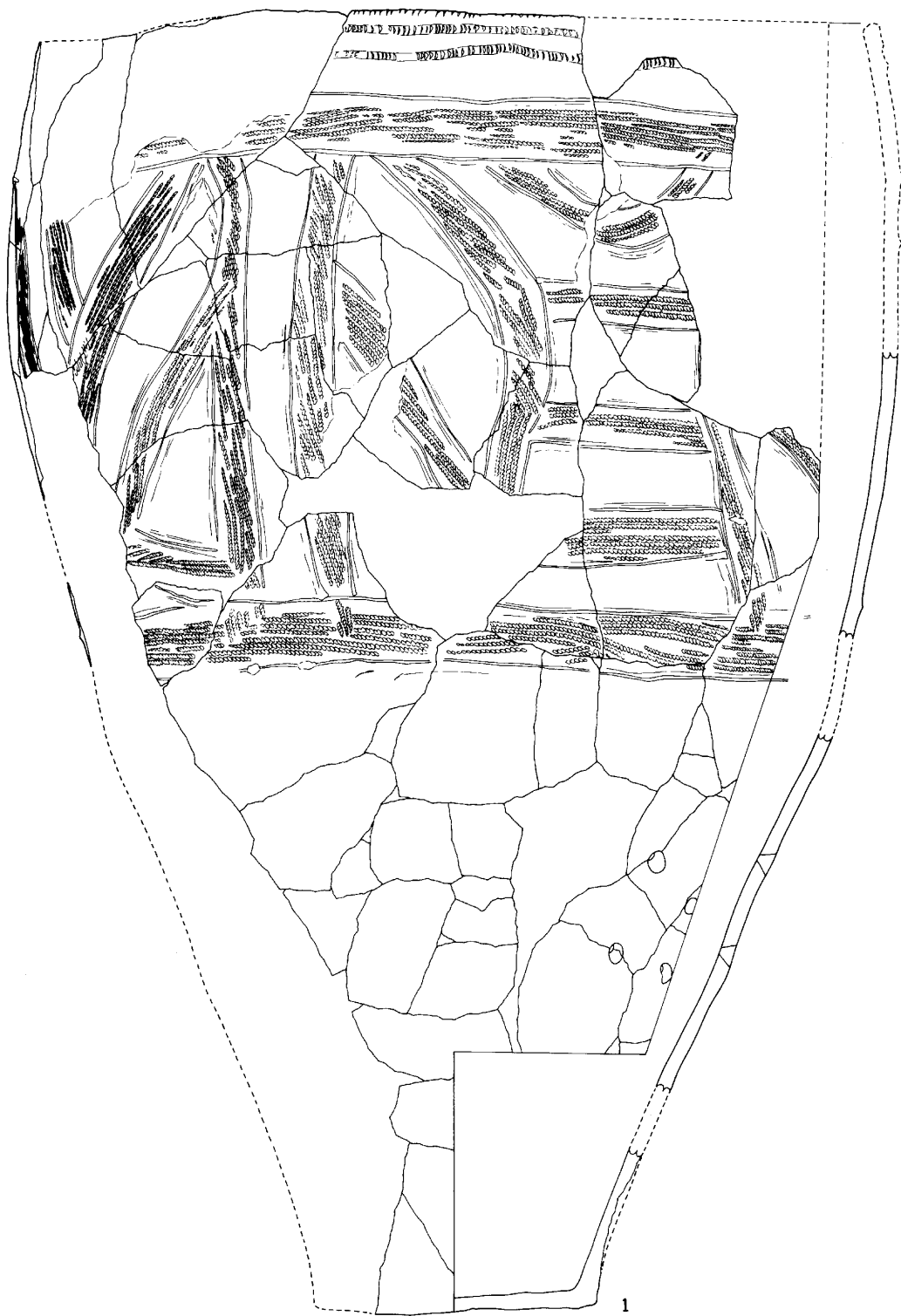
第46図 第I・II層出土土器(7)



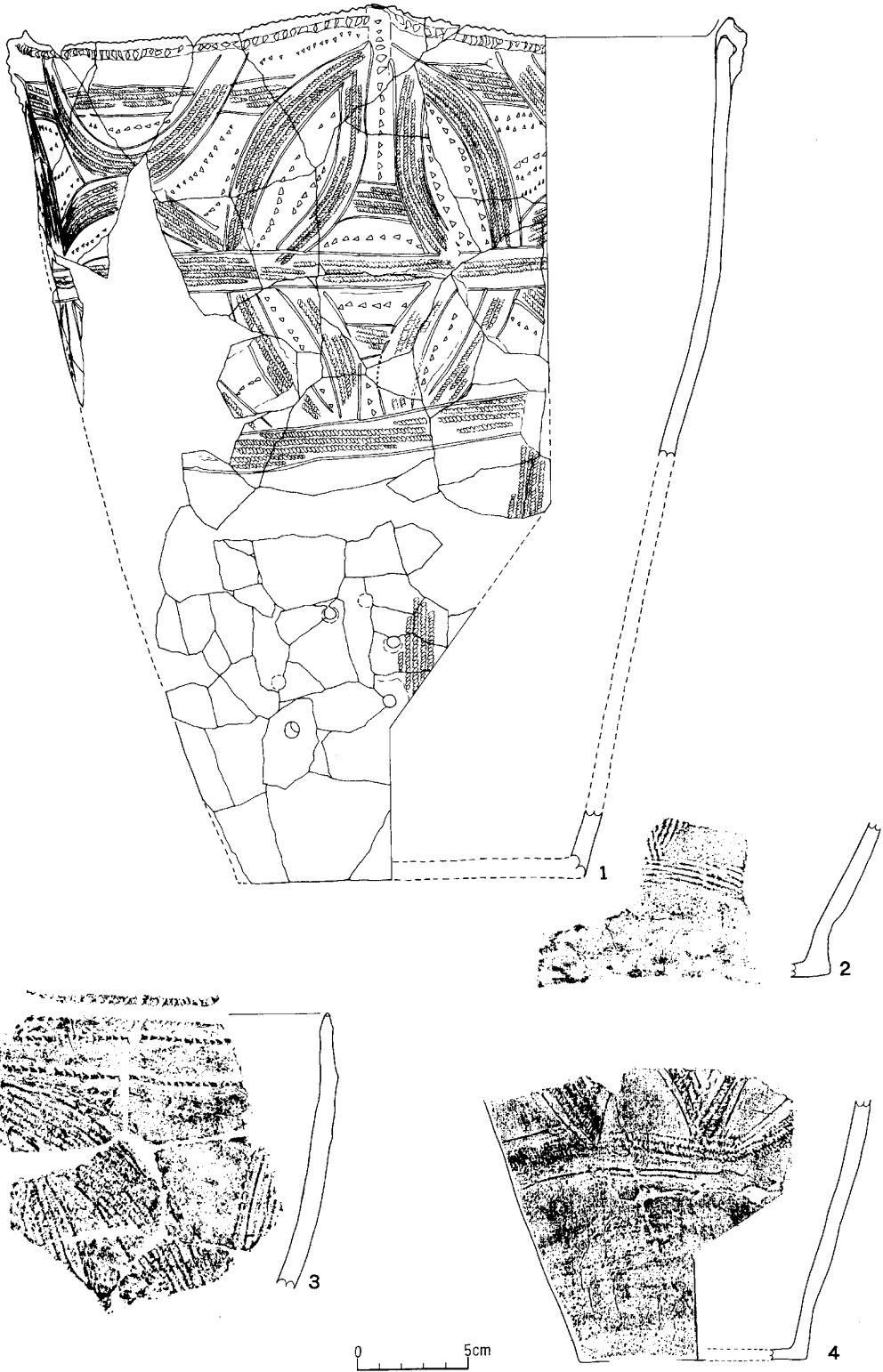
第47図 第I・II層出土土器(8)



第48図 第I・II層出土土器(9)



第49図 第I・II層出土土器 (10)



第50図 第I・II層出土土器 (11)

耳と吊り耳の下部に円形貼付文がある。器面は帯縄文が縦横、斜走する。

図版11-9~12は口縁部に複数の小突起と縄線文、胴部には連結した同心円が施された宇津内II b式である。

図版11-9は口径23cm、器高37cm。口縁部は内屈し、吊り耳をもつ。

図版11-10は口径22.5cm、器高31cmを計る。口縁部には2個の大型突起間に2個1対の小突起をもつ。

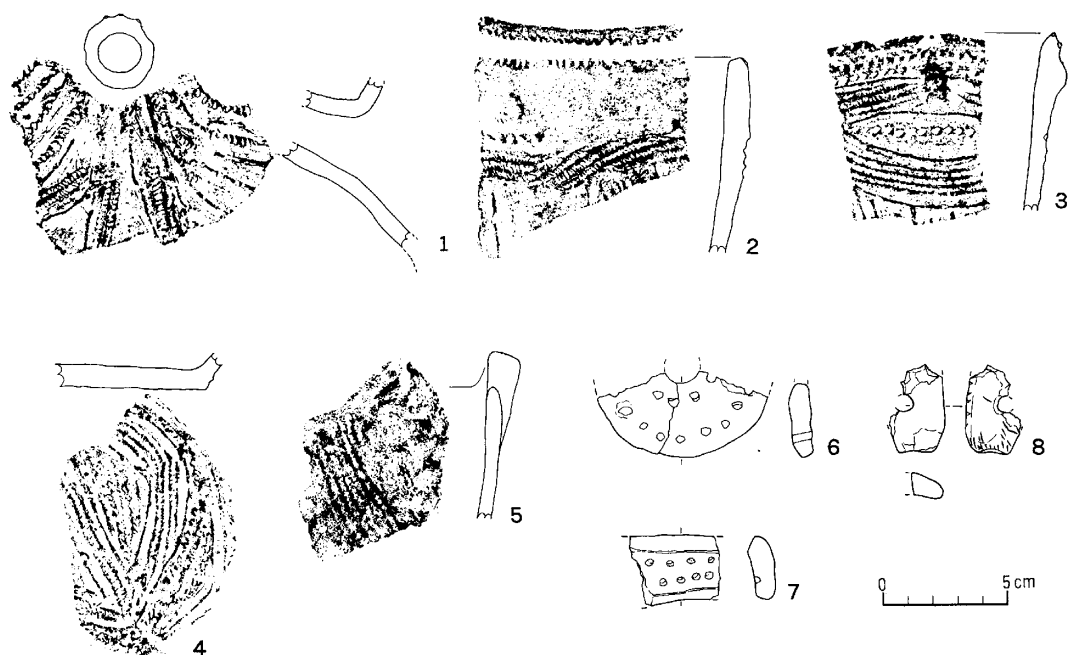
図版11-11は口径13cm、器高16.5cmを計る。口縁部は縄線文と同心円状の隆帯が施される。11-12は口径25cmを計り、底部は欠失する。2個2対あると思われる口縁部の小突起下部には細かく刺突された隆帯が垂下する。

図版12-1・2も同心円が施文される。図版12-1は器高9.6cm、2は口径9.5cm、器高11cmの小型土器。

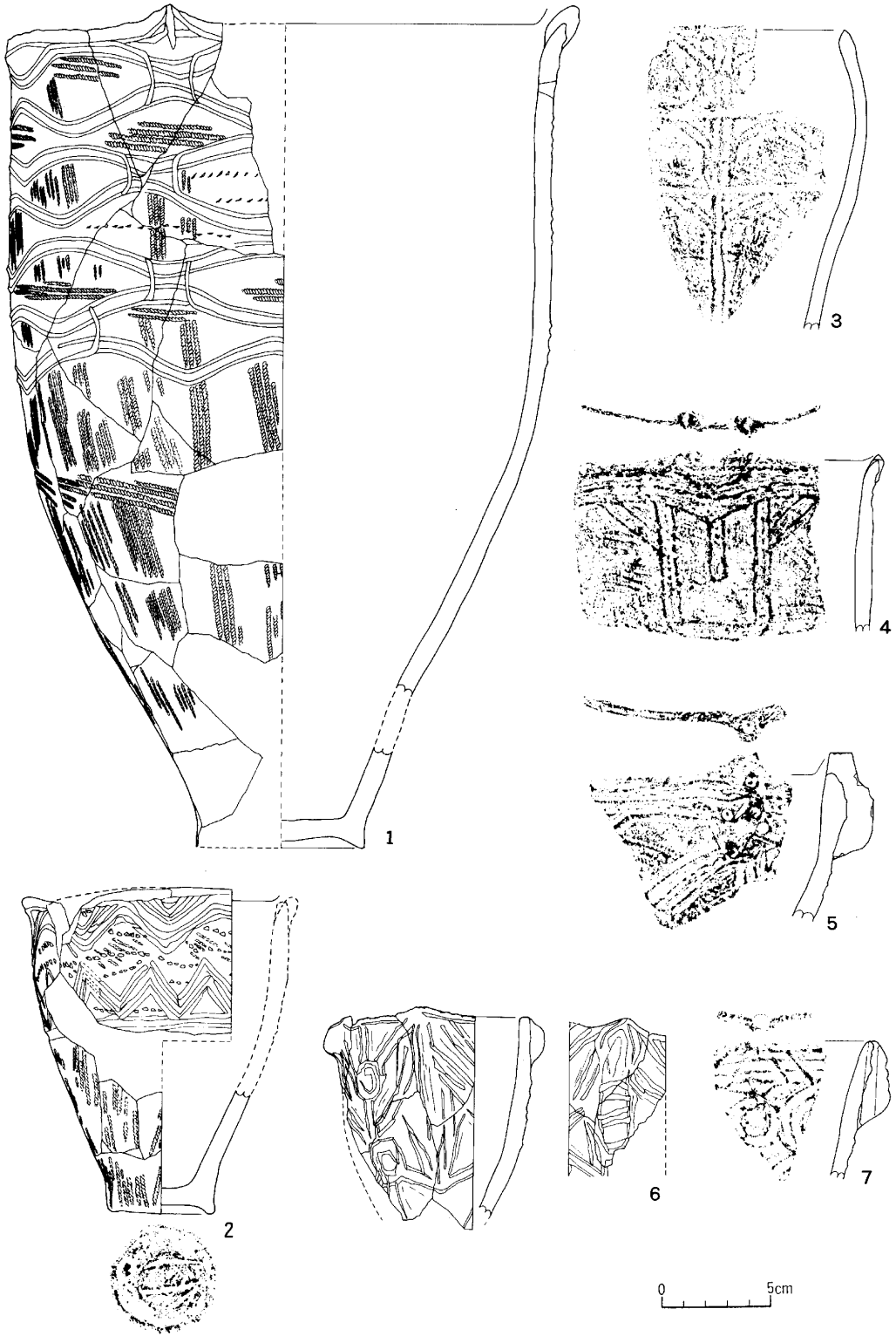
図版12-3は器高16.5cmの中型土器。小突起から垂下した「×」字状の隆帯が施される。

図版12-4は器高9.7cmの小型土器。2個の小突起からはそれぞれ2本の隆帯が垂下する。

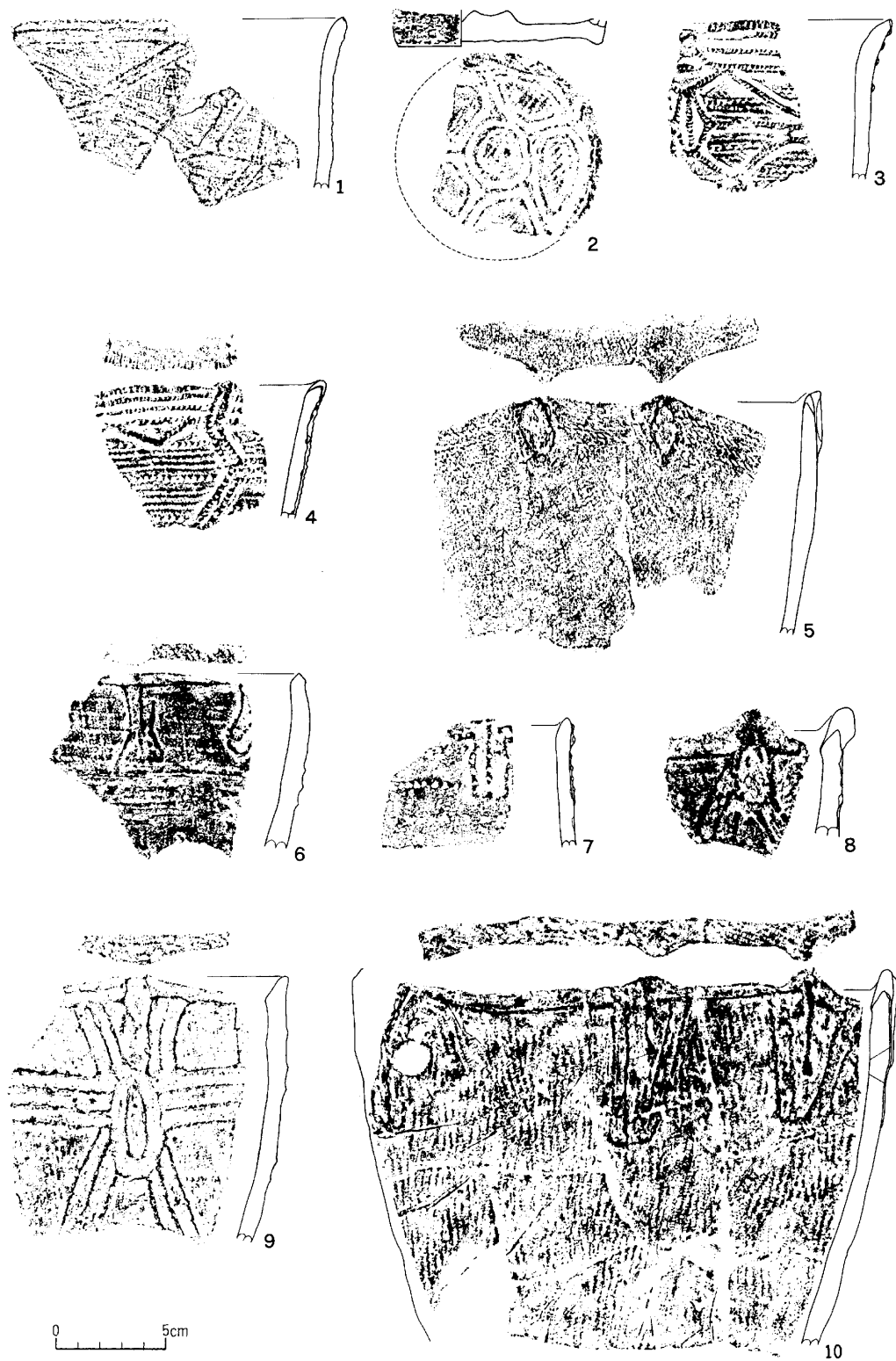
第53図-1・2は後北C₁式。2の底部内面の中央部にボタン状の凹部がある。3・4は発達した擬縄貼付文と半截状施文具による連続した刺突が見られるもので後北B式であろう。5~10は宇津内II b式。



第51図 第I・II層出土土器 (12)



第52図 第I・II層出土土器 (13)



第53図 第I・II層出土土器 (14)



第54図 第I・II層出土土器 (15)



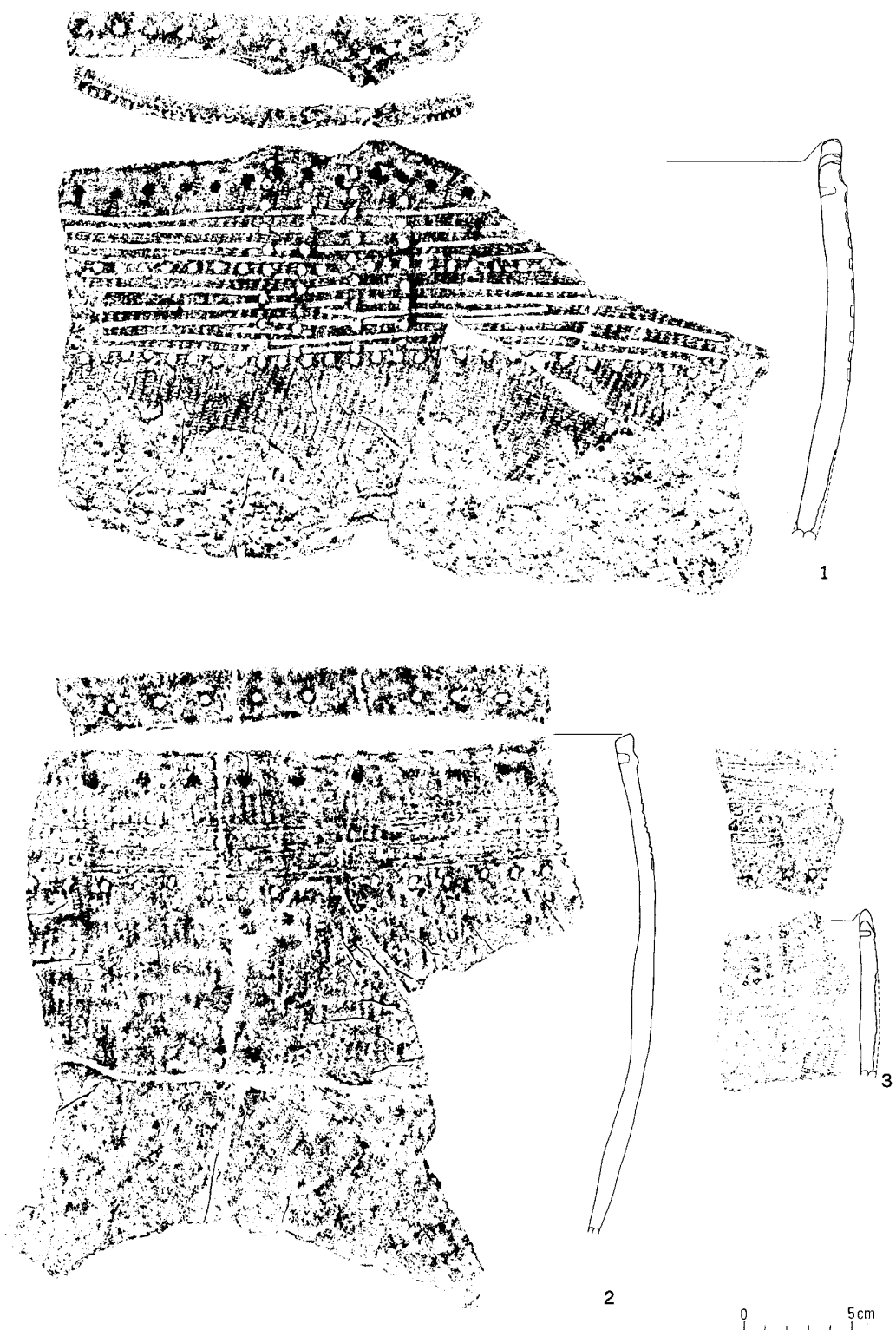
第55図 第I・II層出土土器 (16)



第56図 第I・II層出土土器 (17)



第57図 第I・II層出土土器 (18)



第58図 第I・II層出土土器(19)

第54図-1は口縁部から底部まで約3分の1程度が復元できた。口径約43cm、器高55cmの大型土器である。小波状の口縁部から派生する隆帯が胴上部の隆帯と連結するもので、宇津内II b式に比定される。

4) 続縄文初頭の宇津内II a式・興津式・フシココタン下層式相当の土器 (第55図・56図・57図・58図・59図・60図・61図・62図・63図・64図・65図・66図・67図-1~5、図版12-5~12、図版13-1~11)

第55図-1~5は口縁部に内側から突瘤文が施された宇津内II a式。1(図版12-7)は口径約21cm、器高27.8cmの大型甕形土器。縄線文の下部からは縄端圧痕文が垂下する。2(図版12-5)は口径23cm、器高30cmの大型甕形土器。口縁部の突起から隆帯が垂下する。3は2列の縄端圧痕文で区画される。4の口縁部には「U」状の縄線文が2個施される。5は撚糸文を地文に2個の山形小突起をもつ。

第56図-1~4は宇津内II a式である。1は胴部が湾曲するもので、キャリパー状を呈すると思われる。2は波状突起の頂部と胴部に縄端圧痕文が見られる。3は突瘤下に円形刺突が2列施され、4のボタン状貼付文の周りに縄端圧痕文が施される。

図版12-6・8~12も口縁下部に突瘤文がある宇津内II a式。図版12-6は第55図-2と類似した文様構成をもつ。図版12-8~10は縄線文が施される。8は口径約9cm、器高11.5cm。9は口径30cmで2本の隆帯が垂下する。10は口径約7cm、器高7.5cmの小型土器。11は口径25cm、器高30cmで口縁下部にボタン状の貼付文をもつ。12は口径約11.5cm、器高13.5cm。

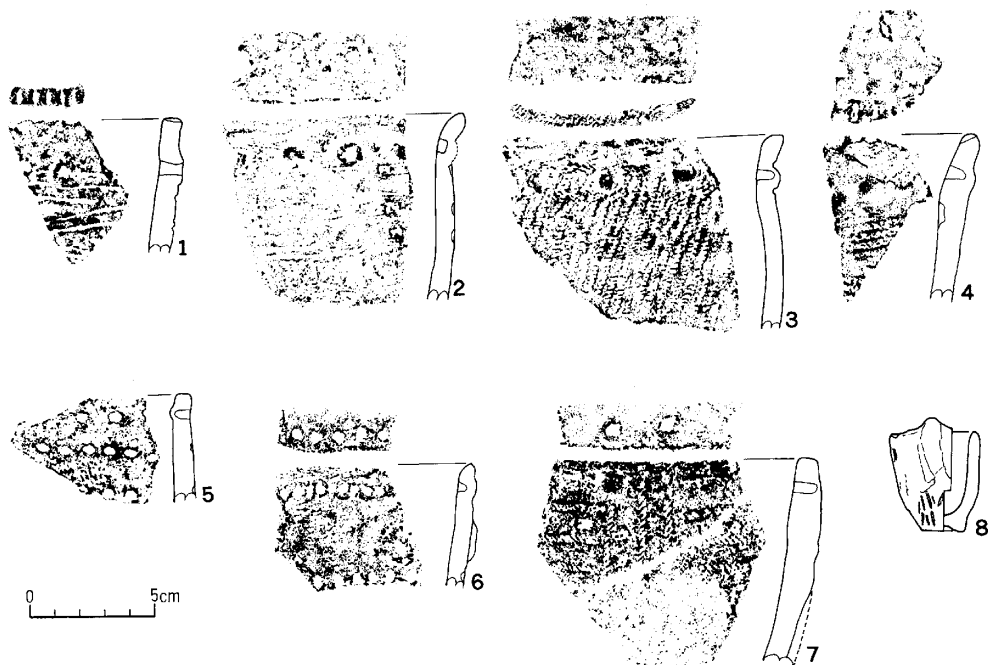
第57図-1~3も宇津内II a式である。1は口径約40cmの大型土器であり、ボタン状貼付文から縄端圧痕文の施された隆帯がある。2は小突起から垂下した隆帯に鋭い刻みが施される。3は突瘤が縦に3個施されている。4は口縁部と平行して隆帯が横走するもので、上下に半截状施文具による刺突が見られる。この文様構成は宇津内II a式に見られないもので興津式に相当するものと思われる。

第58図-1は11条に及ぶ浅い沈線と縄端圧痕文、2は半截状施文具による沈線と縄端圧痕文で構成された大型土器である。3は口縁部の周辺に細く浅い数条の沈線と刺突が施されるもので、裏面にはやや太い沈線が見られる。

第59図-1~5は半截状施文具による沈線が施されるもので1・3・4には刺突が加わる。6~10は横走、曲線の沈線が施される。7は無文部に横走沈線と縦方向の曲線に刺突を施したもので内外面とも器面は丁寧に調整されている。8は細い弧状の沈線を描く。9・10は沈線下部に刺突が施される。11には波状の口縁部の内外面に3条の縄線文がある。12~14の口縁部は無文帯をなし12は内外面から突瘤が加わる。



第59図 第I・II層出土土器 (20)



第60図 第I・II層出土土器 (21)

第60図-1～3とも突瘤は貫通し、1の口唇部には刻みが施される。3は2本の縄線間に突瘤文がある。6は口唇部と内面の突瘤下部に縄端圧痕文が施される。7は外側からの突瘤と下部に2条の刺突列がある。8の突瘤文のほとんどは貫通する。幅広の無文帯には剥落するが円形貼付文と縄端圧痕文が横走る。9は突瘤文に縦横の縄線文、円形刺突で構成される。

第61図-1の口唇部は平縁で、口縁部に突瘤文が施される。器面は無文で小突起から刺突が下方に向かって加わるもので宇津内II a式より古手の興津系の土器であろう。2(図版13-3)・3(図版13-5)は縄線文を多様し、吊り耳をもつ小型土器である。突瘤文は持たないものの宇津内II a式と共伴する例があり、同群と理解される。3の底部には「一」字状が施文される。4(図版13-4)の実測図では口縁部に1個の張り出した突起をもつが、本来は2個1対あると思われる。刺突は口縁部から底部まで長方形に施され、器面は平坦である。口縁部の太い縄線文も長方形の区画の中に6条施される。口唇部には縄端圧痕文が見られる。6(図版13-6)は口径21cmを計る。4と同様に縄線文を多様し縦の縄線で区画し、口唇部には縄端圧痕文が見られる。5は縄線文の下部に刺突が見られる。7には2本の縄線文が施される。

図版13-1・2は口縁部に突瘤文を持った宇津内II a式。1は口径20.5cm、器高20.2cmで口縁部に小突起を持ち、器面は撚糸文が施される。2は口径10.5cm、器高12cmの小型土器。



第61図 第I・II層出土土器(22)

第62図－1～11は太目の縄線文が施されるもので8・10・11は短縄線が縦方向に押捺され、7・8・12は縄端圧痕文、9は刺突が加えられる。

第63図－1～13は横走沈線があるもので1の口縁部は内湾し無文帯に3本の横走沈線があり、口唇部には鋭い刻みが施される。3は沈線下部に刺突、5は裏面に縄端圧痕文、7・9は刺突、13は縄線文が施文される。14は凹形の小突起下部に縦長の突起を持ち、3条の絡条体が施されたもので類例の無い資料である。

図版13－7は器高11cmの小型土器で1条の縄線文が施文される。

図版13－8は口径9cm、器高11.3cmの小型土器。口縁部に3条の縄線文下に縄端圧痕文が施され、1mm程の貫通孔が1個ある。

図版13－9の口径は最大幅7.5cm、最小幅5.5cmで、上面観は楕円状である。器高は6cm。口縁部に小孔のある2個の突起を持つ。内面には赤色顔料が付着する。

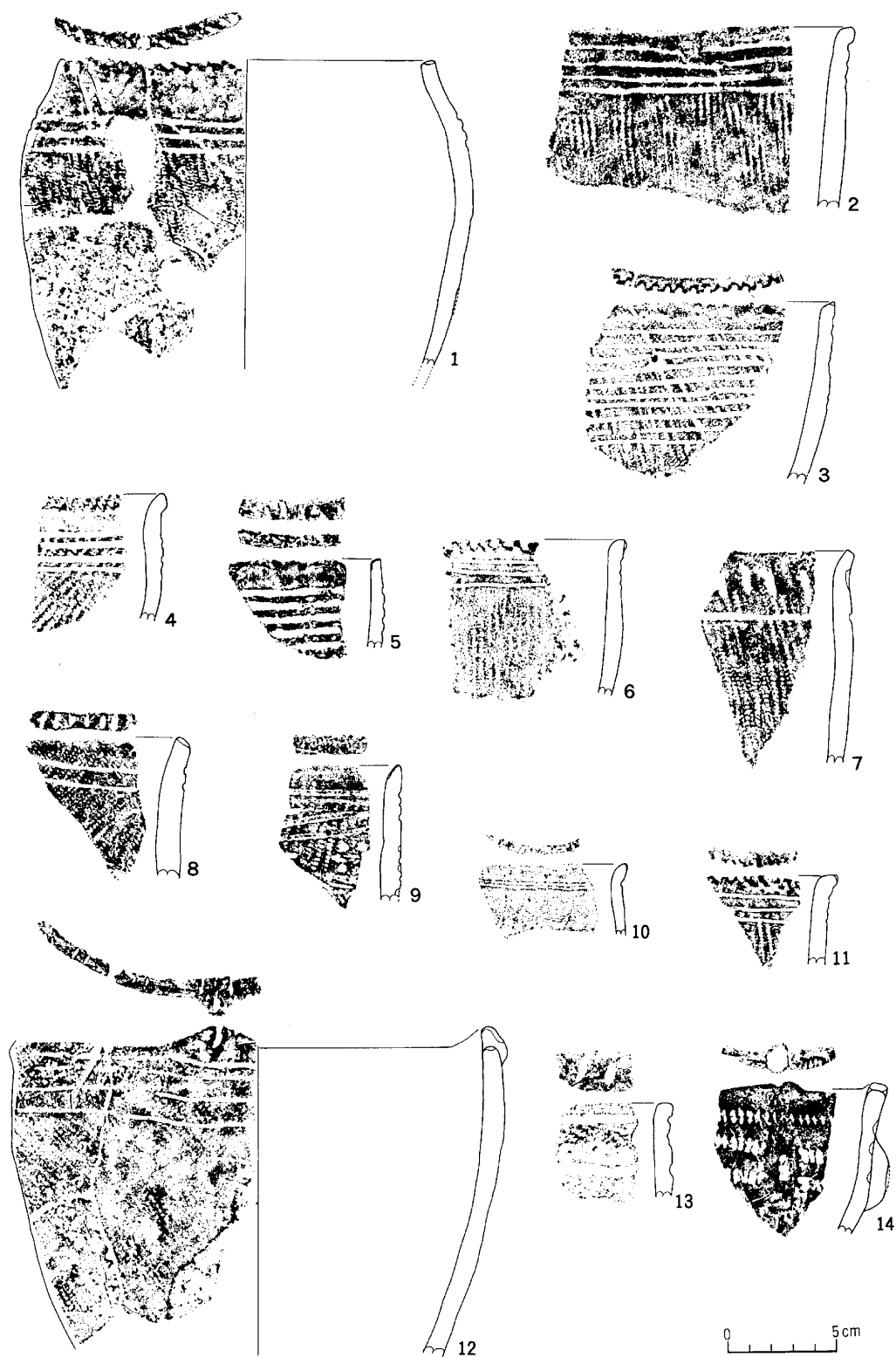
第64図－1～3の口縁部は無文帯となり縄端圧痕文が施される。5、7は撚糸文を地文とし4・7・8には円形刺突文が施される。6は絡条体と刺突が加わる。9の底部には木葉痕が残る。10(図版13－10)は口径6.6cm、器高10.5cmを計る。底部が丸底の小形壺である。「く」字形に緩く外反した口縁部は無文帯をなし、胴部から底部にかけては極めて浅い短沈線が横走する。11は器高8.7cmを計る。器面は無節の斜縄文を地文に口縁部から底部にかけて2本の細く、浅い沈線が見られる。12は縞縄文が縦横に施される。

第65図・第66図は無文地の口縁部に沈線を施したものが大部分を占める。沈線は直線的な横走、山形状、工字状のもので縄端圧痕文、刺突文、縄線文が加わる。第65図－1～9は横走沈線もしくは連続する菱形状沈線で構成され2・3・5には縄端圧痕文が施される。6の口唇部には刻み、7は刺突、8は半截状刺突具による刺突が横走沈線間に重鎮する。10・11は上下に弧線文が施される。13～15は菱形状沈線と縄線文のあるもので13には円形貼付文、14は口縁部に小突起を持つようである。15は縄端圧痕文が垂下する。16～18の沈線は横鋸歯状であり、17は円形貼付文と縄端圧痕文があり、18は縄文を地文とする。19と第66図－1～3はやや曲線的な山形状の沈線がある。4の沈線角度は急斜である。5は上下から弧線状の沈線を施し、内部を緩曲線を描く。6は縦方向の沈線、7は口唇部と胴部に4列の刺突。8は縄端圧痕文、9・10・14の沈線文はやや曲線的である。11～13は工字状の沈線文で12には縄端圧痕文の施された貼付帯と口唇部には沈線文と縄線文が見られる。15は刺突列の下部に鋸歯状の沈線がある。16(図版13－11)は口径13cm。口縁部は緩く外反する。刺突の下部には2本の横走沈線間に「×」字状文が連続してある。17～21は半截状施文具による沈線が施されるもので、19・20は突瘤がある。20は口縁部が強く外反するもので、第67図－3の土器と同じ広口壺形を呈するかもしれない。21は丸みをもった突起は縄線で切られ、下部の小突起は半截状沈線の上から貼り付けられている。内面にも円形刺突が施される。

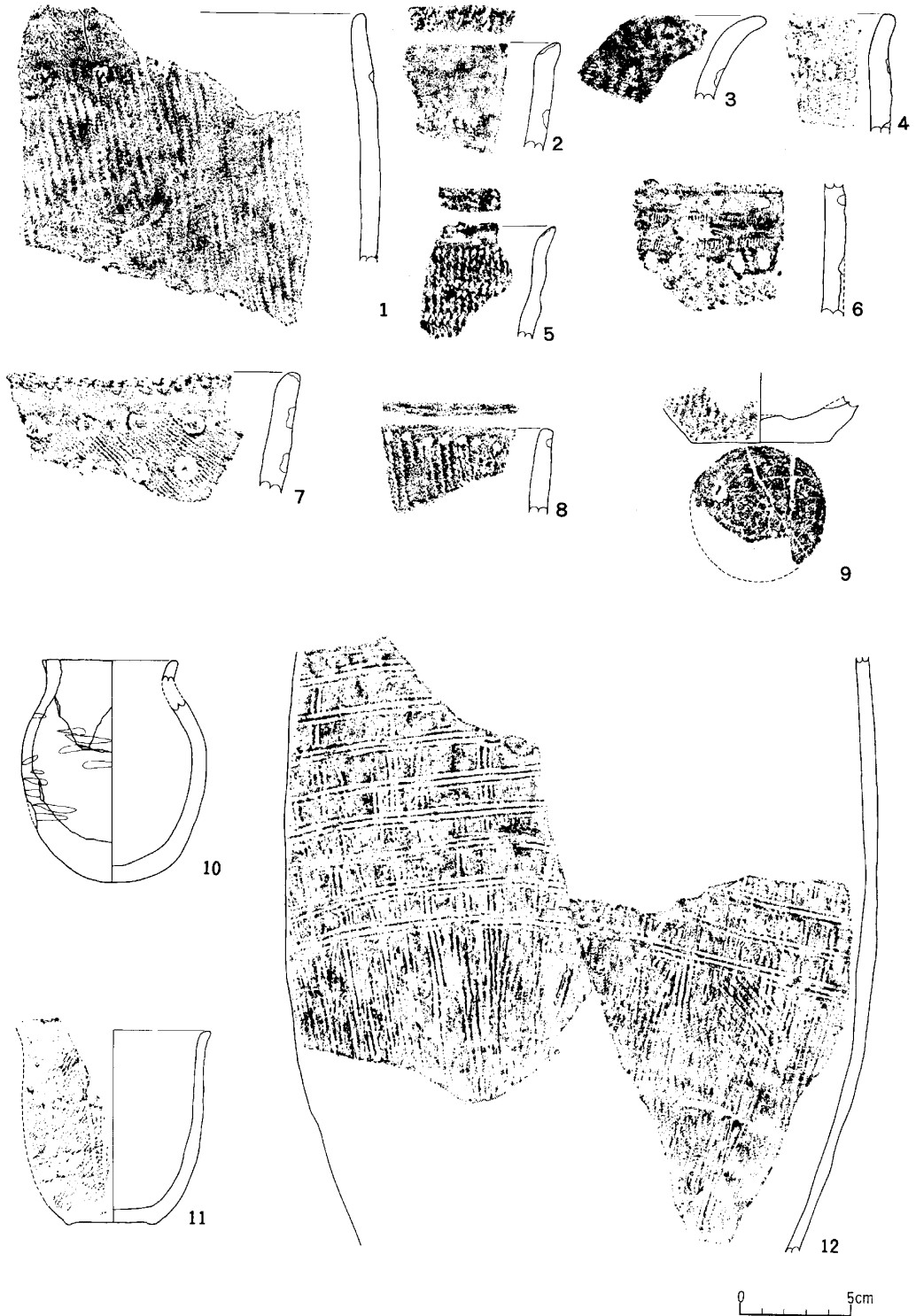
第67図－1～5は広口壺を呈すると思われる。1は肩部から急斜な角度で胴部に移行する。



第62図 第I・II層出土土器 (23)



第63図 第I・II層出土土器 (24)



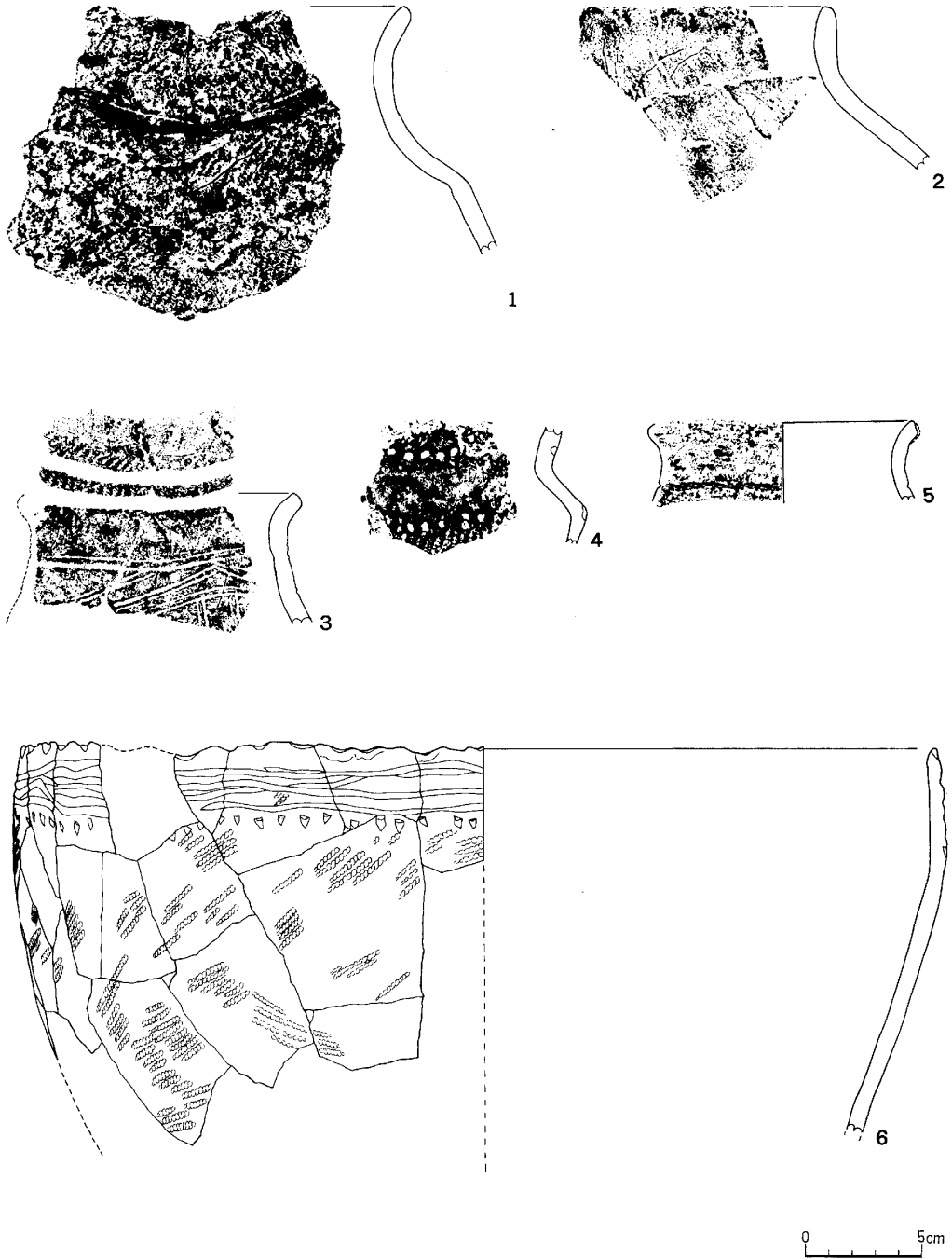
第64図 第I・II層出土土器 (25)



第65図 第I・II層出土土器 (26)



第66図 第I・II層出土土器 (27)



第67図 第I・II層出土土器 (28)

器面の風化は著しいが縄文を地文に、頸部には半截状施文具による沈線がある。2は撚糸文を地文とする。3はしまった頸部を持つもので半截状施文具による沈線を直線、弧線状に施す。4の肩部は無文地で縄端圧痕文で区切られる。5の頸下部に1条の縄線文が施される。

6. 縄文晩期

1) 後葉の土器—緑ヶ岡・幣舞式 (第67図—6・68図・69図・70図・71図、図版13—12・図版14—1～7・図版15—1～5)

第67図—6 (図版14—1)は口径約43cmの特大土器。口唇部は斜めの刻目をもち、口縁部には4本の小波状の沈線文と刺突文が施された緑ヶ丘式。

第68図—1・2は器面に綾くり文、3は小波状、4・5は弧線状の沈線が施された緑ヶ岡式。図版13—12は口径12.5cm、器高17cm。LRの斜縄文を地文として頸部に6本の縄線文が施される。底部は丸底である。縄文晩期後葉であろう。

図版14—2は口径9.5cm、器高15.5cm。上面観は方形を呈し、角部に小突起と孔を持つ。口縁部は8条の縄線文と細い刺突文で構成される。

第69図・第70図・第71図は幣舞式である。第69図—1 (図版14—3)は口唇部に刻みと隆帯が垂下する。2 (図版14—4)は頸部が縮約した瓜実形の土器である。同形態のものは本遺跡のピット46a号でも出土しており、同一時期と思われる。3 (図版14—5)は口径8cm、器高4.5cmの小型土器で口唇部に刻みがある。4 (図版14—7)は口径13cm、器高7cmの小型土器。5 (図版14—6)は口径33cm、器高8cmの皿形土器。

第70図—1は上部文様帯を隆帯で仕切る。2は口縁部が極端に内屈する。3～8、11は沈線、9は篋状の幅広の施文具を擦る程度に浅く「>」状に施す。12は底部が尖底化するものであるが、さらに尖底化した底部の破片が1点出土している。この土器の反対側と対になるものかもしれない。異形土器の一種であろう。細かな刺突文が沈線間を埋める。

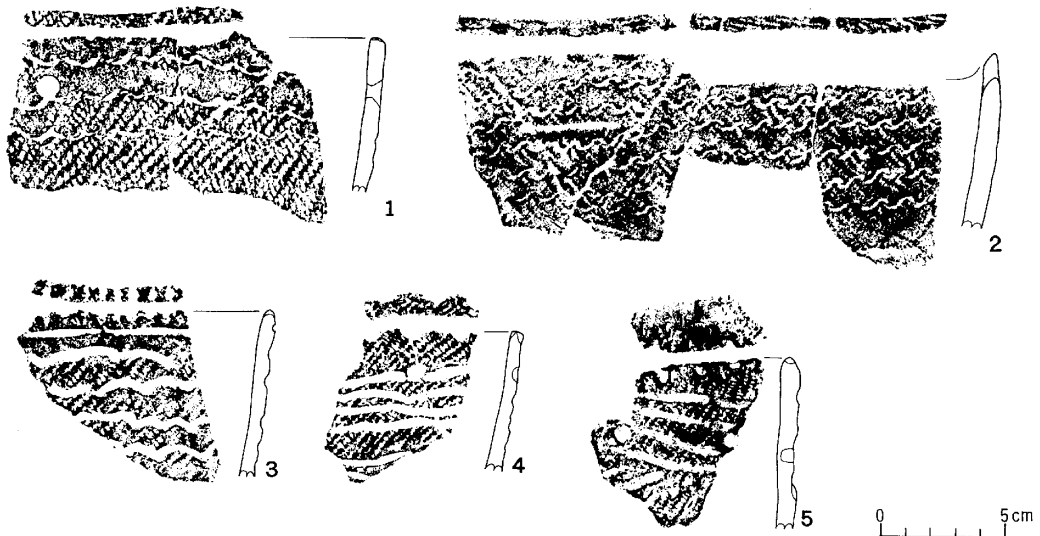
第71図—1の口径は約52cmを計る特大土器である。2本組の隆帯が等間隔に4箇所配置されるのであろう。文様は縦横の連続山形文と直線、短沈線で構成される。2は多用された縄線文を連続山形文で区切り、「U」字状の隆帯が施される。

図版15—1は口径13cm、器高12cmを計る。口縁部の4個の台状突起からは2本の隆帯が垂下する。器面は縄線文と波状の沈線があり、口縁部から底部にかけて煤が付着する。

図版15—2は口縁部は舳先状のある船形土器である。口縁部は最大径18.6cm、最小径11cm、高さ20.5cmである。直線的な胴部から底部にかけては極端な角度であり頸部は僅かにくびれる。文様は直線的な胴部に波状、口縁下部に直線の縄線文が施される。

図版15—3は縄文を地文とする。頸部がくびれ、最大幅が底部近くにあるもので器形的には図版15—2と類似する。

図版15—4は口縁部の大半が欠失するため口径は不明である。器形は底部形態から丸みを



第68図 第I・II層出土土器 (29)

もった不整三角形を呈した浅鉢と思われる。文様は渦巻状の沈線と列点文が丁寧に施される。

図版15-5も口縁部の殆どが欠失するため正確な口径は不明であるが、推定36cmの大型土器である。口縁部が内屈する特徴を有するもので直線と山形状の縄線文が施される。

2) 中葉の土器 (第72図・73図・74図・75図・76図・77図・78図・79図・80図・81図・82図・83図・84図・89図、図版15-6~8・図版16・17・18-1~9)

図版15-6は口径43cmの大型鉢形土器。口縁部に3条の縄線文が施される。

図版15-7は器高10cmを計る。上面観は図版14-4と同様な丸みをもった不整三角形を呈すると思われる。3本の縄線文が施される。

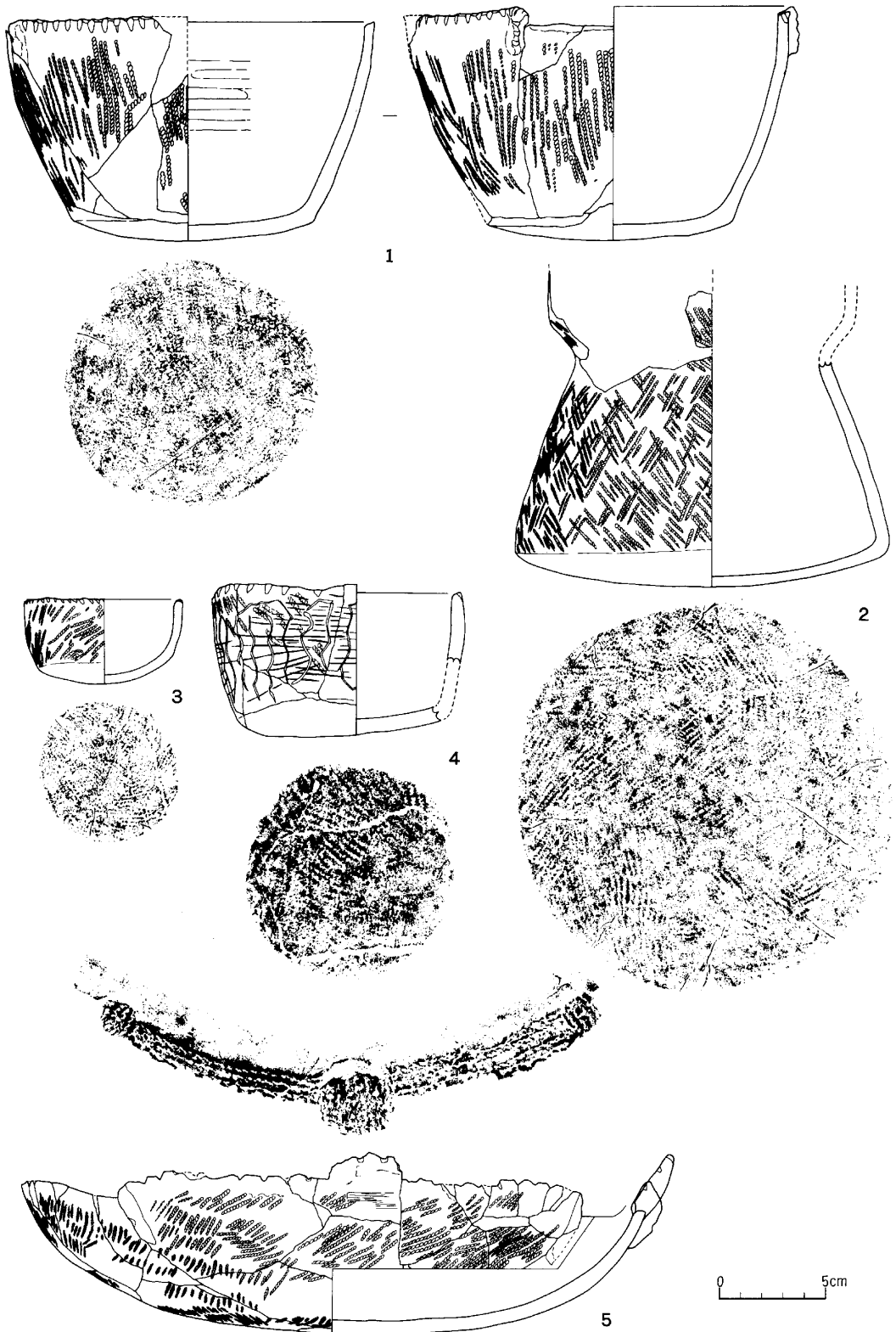
図版15-8は口径13cm、器高5.5cmの椀状土器。1個の嘴状突起と1本の縄線文が施され、口唇部は鋭い刻みが施される。

第72図-1 (図版16-1) 底部から大きく開いた口径42cm、器高33cmの大型鉢形土器。縦走縄文を地文に6条の縄線文が施される。2 (図版16-2) も口径32cmの大型土器。3条の縄線文下に刺突列がある。

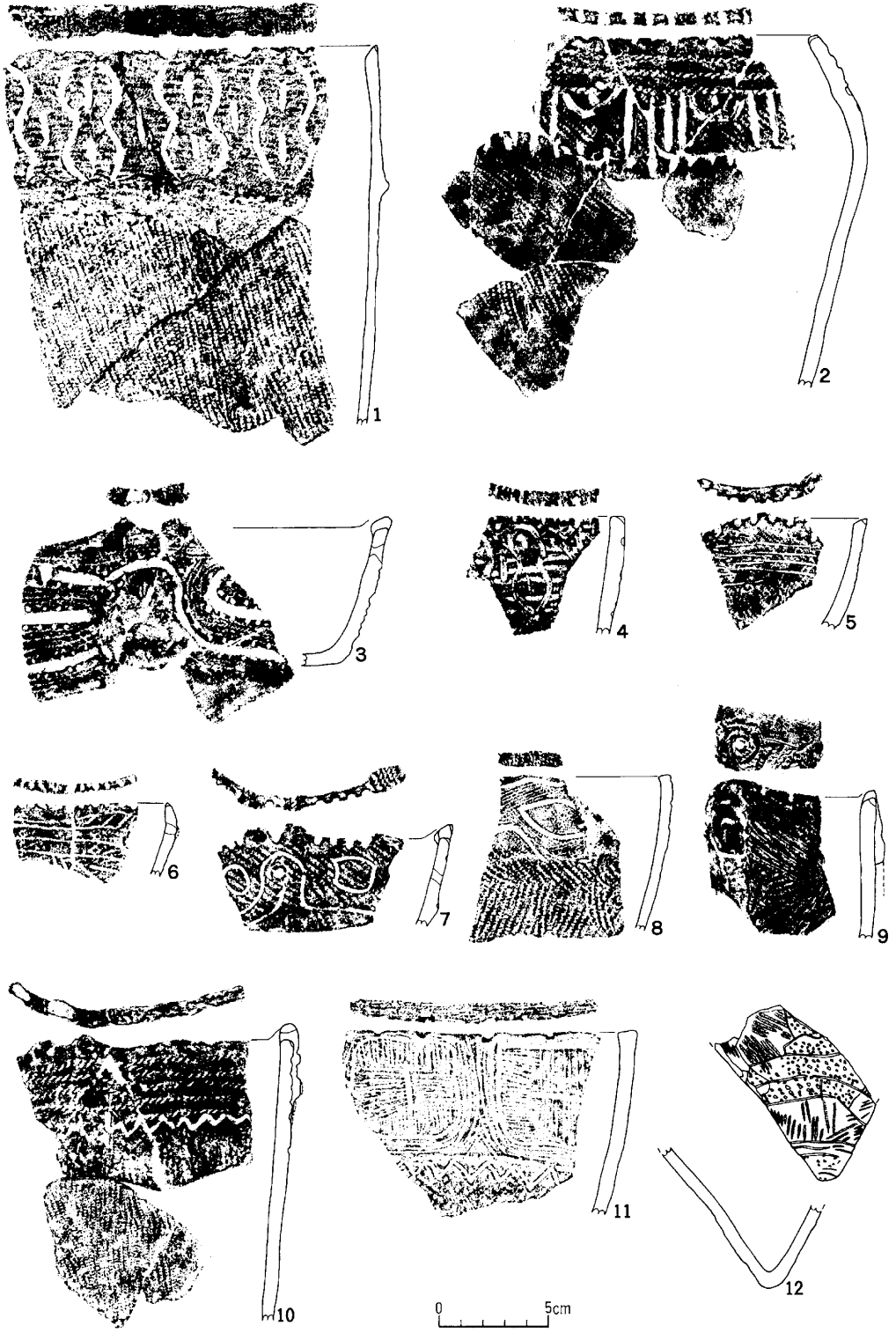
第73図-1 (図版16-3) は口径28cm。底部からほぼ垂直に立ち上がった器形で、3条の縄線間に2列の半截状刺突が加わる。

図版16-4は上面観、底部とも楕円形である。口縁部の小突起下部に2個の小孔がある。縄線文は器面の全面に及び、内面にも施される。

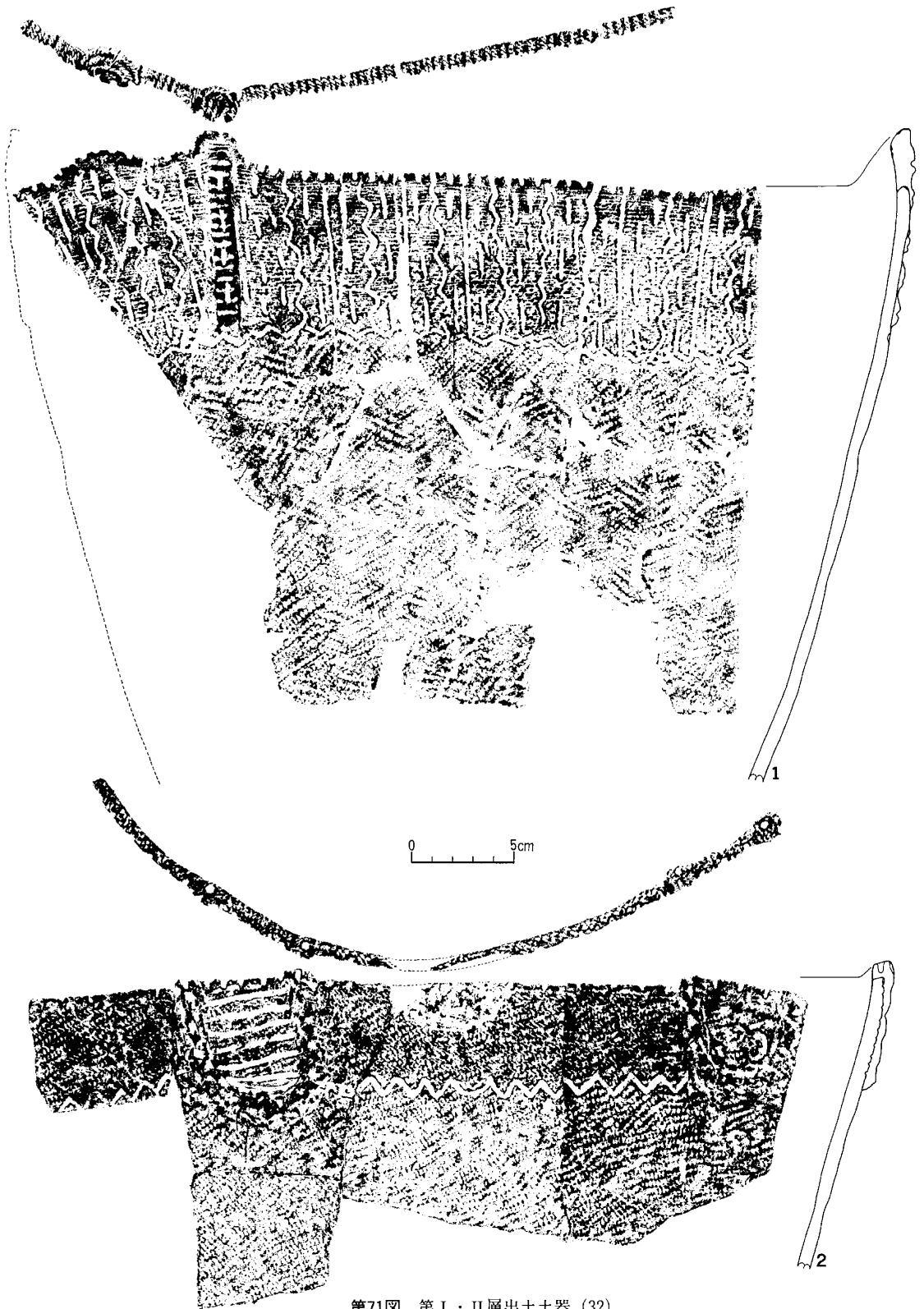
第74図-1~3は縄線文が施されるもので1は口径47cmの特大型鉢形土器。3本の縄線文と刺突があり、2は底部から口縁部にかけて垂直に立ち上がるボール状土器で縄端圧痕文、3は刺



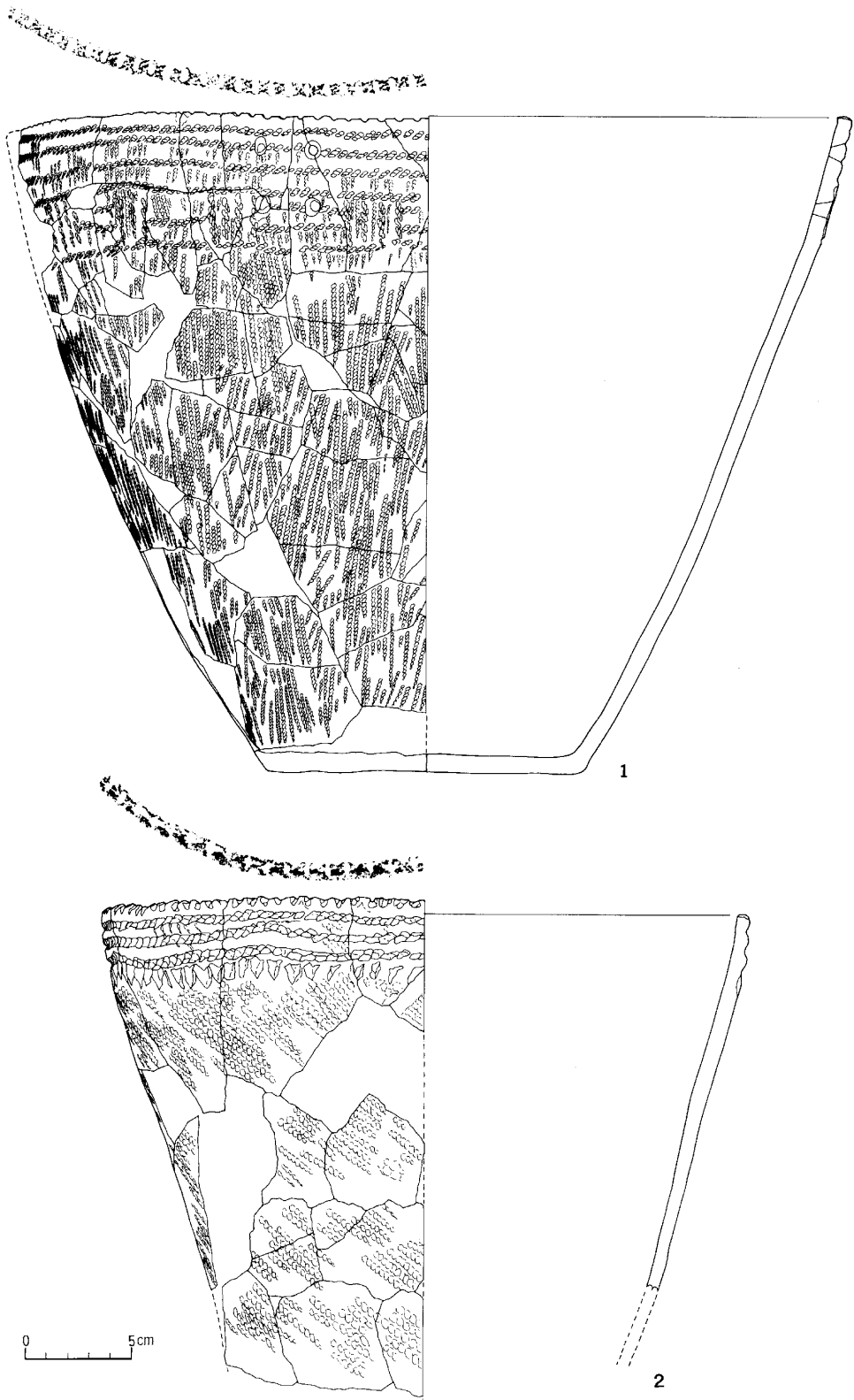
第69図 第I・II層出土土器 (30)



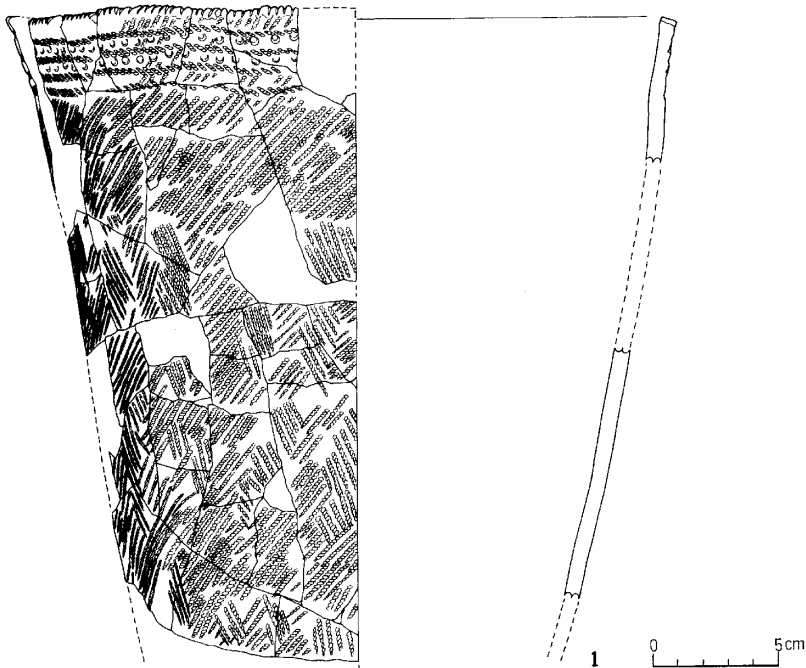
第70図 第I・II層出土土器 (31)



第71図 第I・II層出土土器 (32)



第72図 第I・II層出土土器 (33)



第73図 第I・II層出土土器 (34)

突が施される。

第75図-1は縄端圧痕文。2~14は縄線文を基本とするもので2は内側から刺突、3は刺突が施される。5にはボタン状の貼付文が見られる。9・11・12・13・15は円形刺突があるもので、13は胸部の張出し部に施される。

第76図-1~15は縄線文が施されるもので2は幅広の隆帯、3は刺突文、12はボタン状貼付文がある。

第77図-1~16は縄線文を基本に刺突が施される。1・5~7・8は半截状、2~4・15は円形、9~13は爪形状、14は縄端圧痕文が施される。17~19は横走沈線に刺突が施されるもので19は斜めの短沈線が加わる。

第78図-1は縄線文も見られるが1~20まで基本的に横走沈線文を主体としたもので10~17の様に斜め、直線方向の短沈線、18~20の曲線的な沈線が施されたものである。

第79図-1~21は沈線文を主体とする。1~3・8は短沈線が施されたもので1の短沈線の上下の施文具は異なるもので、下は半截状のものを挟り取る様に施すが上は不明である。2は幅1cmの隆帯上に施される。3には縄線文の上部にある。4は曲線と円形刺突、5~7・10~12は直線と弧状の沈線、9の口縁部は嘴状の突起をもち、弧線状の沈線と刺突が重鎮するもので異形土器であろう。13・18~20は曲線、14は直線と円形刺突が施される。15は直線・波状の沈線と刺突、盛り上がりのある「ハ」字状の爪形文で構成される。16は波状沈線、17は口縁部が

緩く外反し「へ」状の沈線と刺突が施される。

図版16-7は口径23.6cm、器高9cmのボール形土器。口縁下に3条の円形刺突が施される。

図版16-8は口径33.3cm。口縁下に4条の刺突が施される。

第80図・第81図は刺突文を主体とする。第80図-3は内外面とも同一の円形施文具を用いる。4は小吊手をもつ。口唇部は小吊手部の縦沈線を基準に右側が比較的鋭い沈線、左側が「×」字状に施文される。7は口縁部が内屈する。15は丸みを持った口縁部は若干外反し、刺突文の下部は極めて細い沈線がある。続縄文初頭かもしれない。17には爪形状の刺突が施される。

第81図-1~13・16は円形状の刺突、14・15・17~21は半截状の刺突を施す。

第82図-1~5・8は円形刺突、6は浅鉢であろう。丸みをもった肉厚の突起があり縄端圧痕文が器面を覆うようである。7の刺突は浅く半截状の横走沈線が施文される。9~15・17~20は縄端圧痕文が施されるもので20は口唇部と大きく張り出した隆帯の上下部に円形刺突、16は刺突が見られる。

第83図・第84図-1~9は地文として縄文が施されるものである。第83図-1は器高39cmの大型鉢形土器。2の山形小突起部「+」字形の刻みが見られる。

第84図-3は内側に3本の沈線と刺突をもつ。9(図版16-9)は口径28cm、器高11cmのボール形である。口縁部の一端に3個の小突起をもつ。8・10は表面、11は裏面に縄線文を施す。

図版16-10~12は縄文が施された大型鉢形土器。10は口径28.4cmで口唇部に刻みが施される。11の口径は27cm、12の口径は36.5cm。

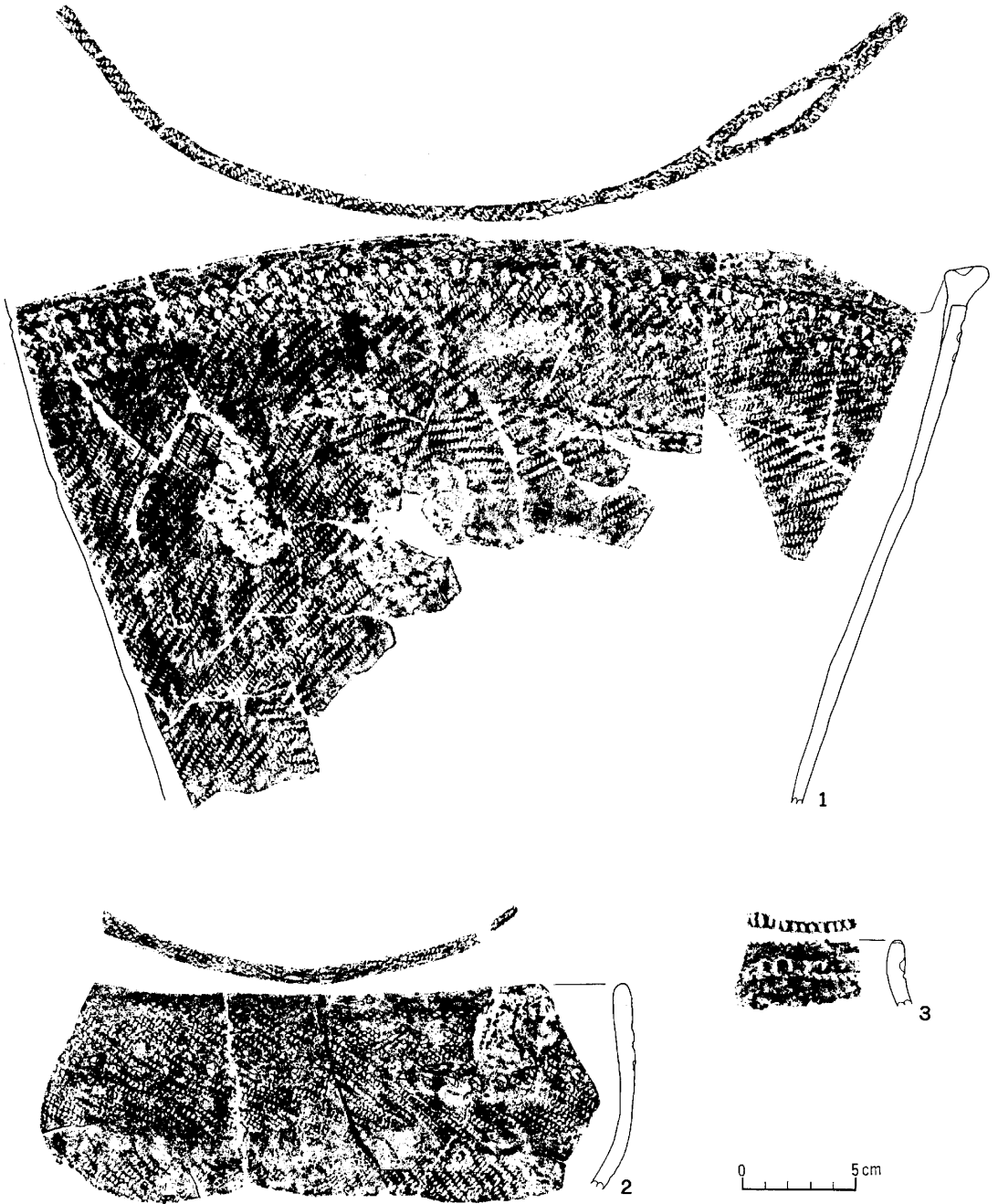
3) 前葉の土器 (第85図・86図・87図、図版18-10・11)

第85図・第86図は内側に斜め方向から施された突瘤文を主体とする。第85図-1は突瘤文が二段、2は器面に縄端圧痕文、3~6は盛り上がりや欠く爪形状の刺突、7~9は盛り上がりを持つものの「ハ」字状とはならず、粘土がめくれ上がる。10~12は半截状刺突、13は刺突が施される。

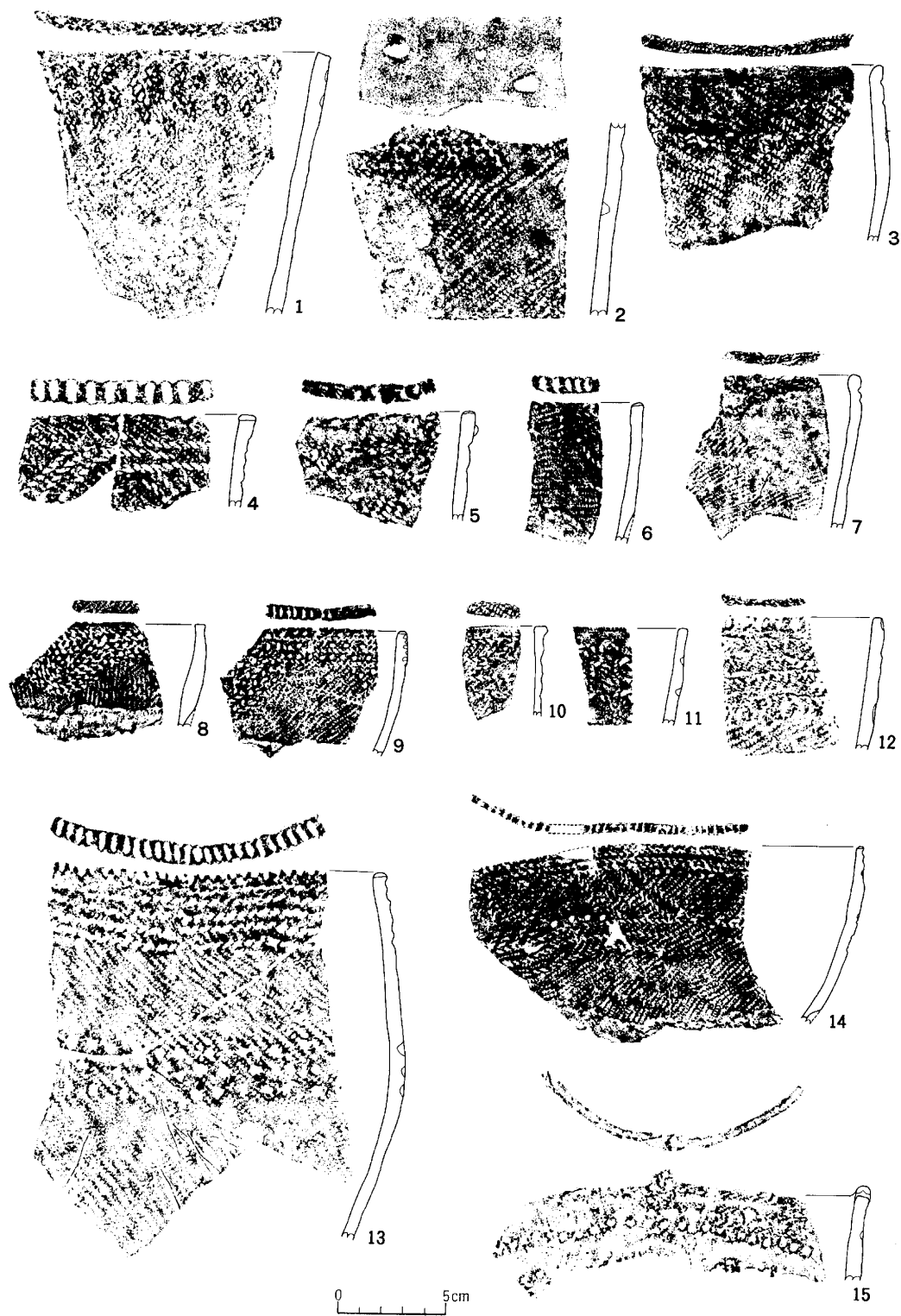
第86図-1~12は第87図-4~13の資料にある爪形文、刺突文等を欠き突瘤文を単独とするものである。いずれも斜め方向から施された突瘤であるが、11の内側の突瘤面は突き刺した後に器面調整したため他の資料と比較してきわめて細い。12はほぼ垂直に近い角度で突瘤されている。

第87図-1~3は内側からの突瘤文、4~13は盛り上がりのある爪形文が施されるもので、8は幅広の無文帯となる。

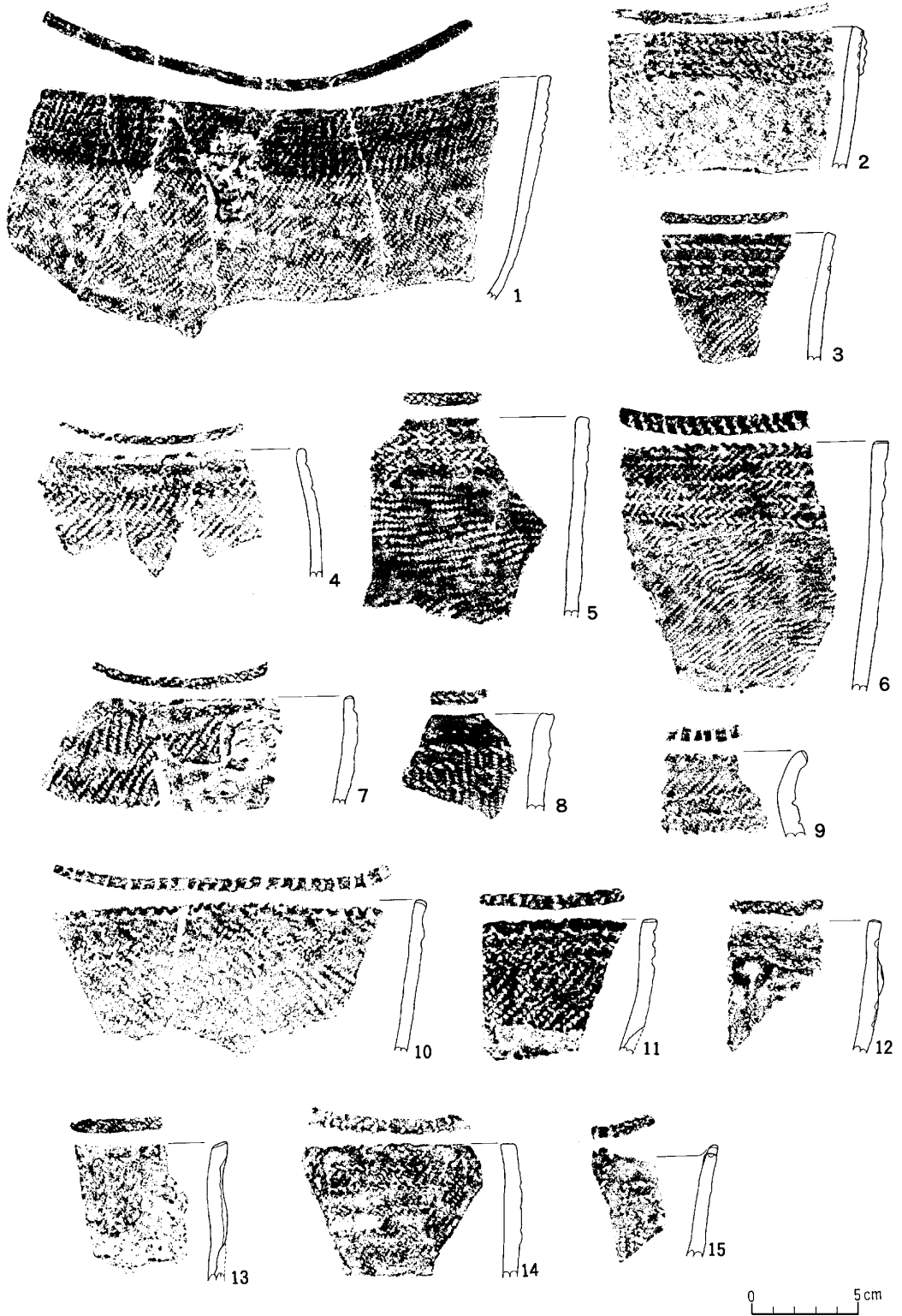
第88図-1~15は盛り上がりのある「ハ」字状の爪形文が施されたものである。1(図版18-10)は器高11cmで、低い脚部から大きく開いたコップ形土器。胴部から脚部にかけて爪形文と円形刺突文が施され、底部には曲線状の沈線がある。2(図版18-11)は口径22cm、器高7cmの皿形土器である。1と同様の爪形文が施される。口縁部に1個の小突起をもつ。3の口唇部



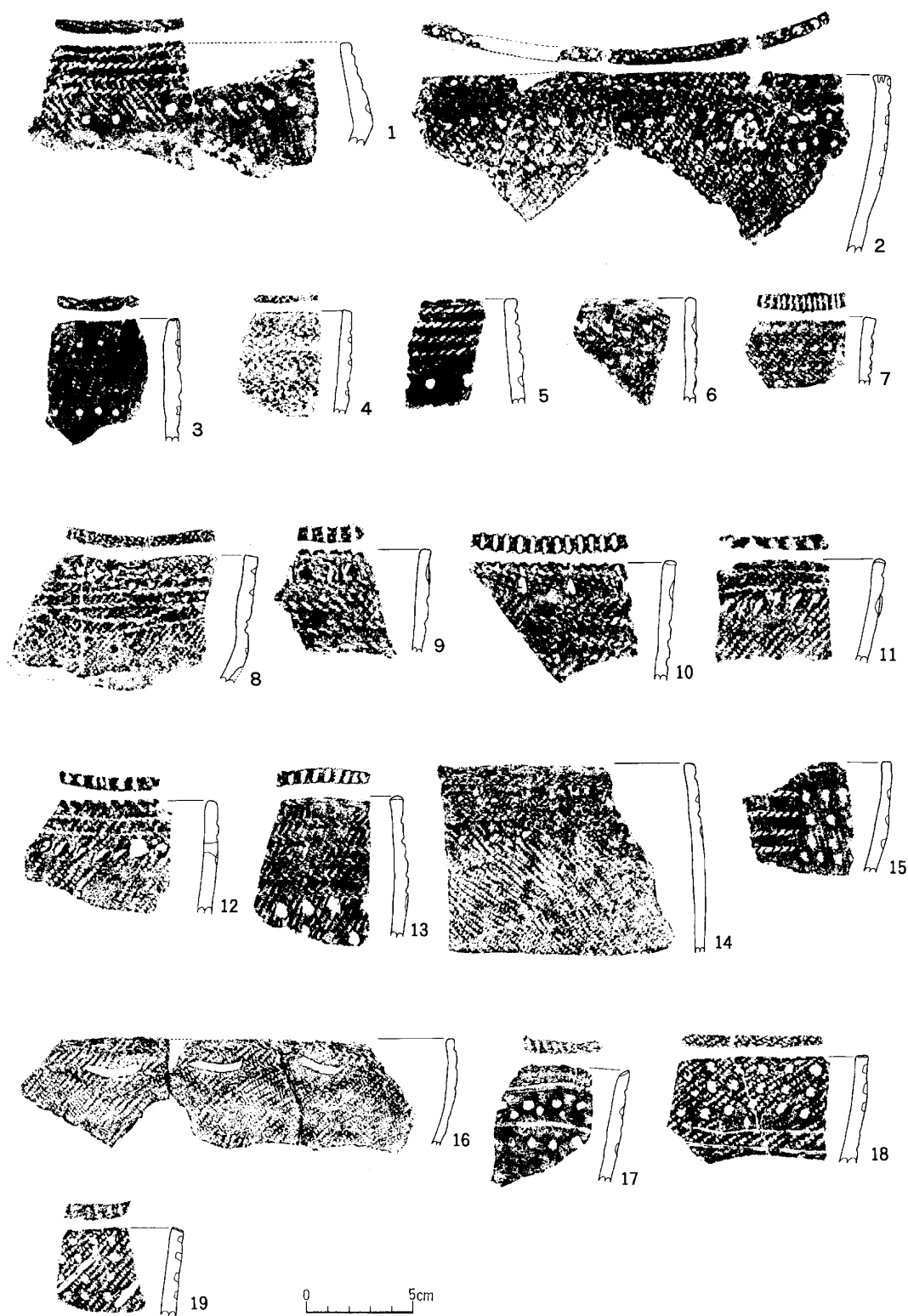
第74図 第I・II層出土土器 (35)



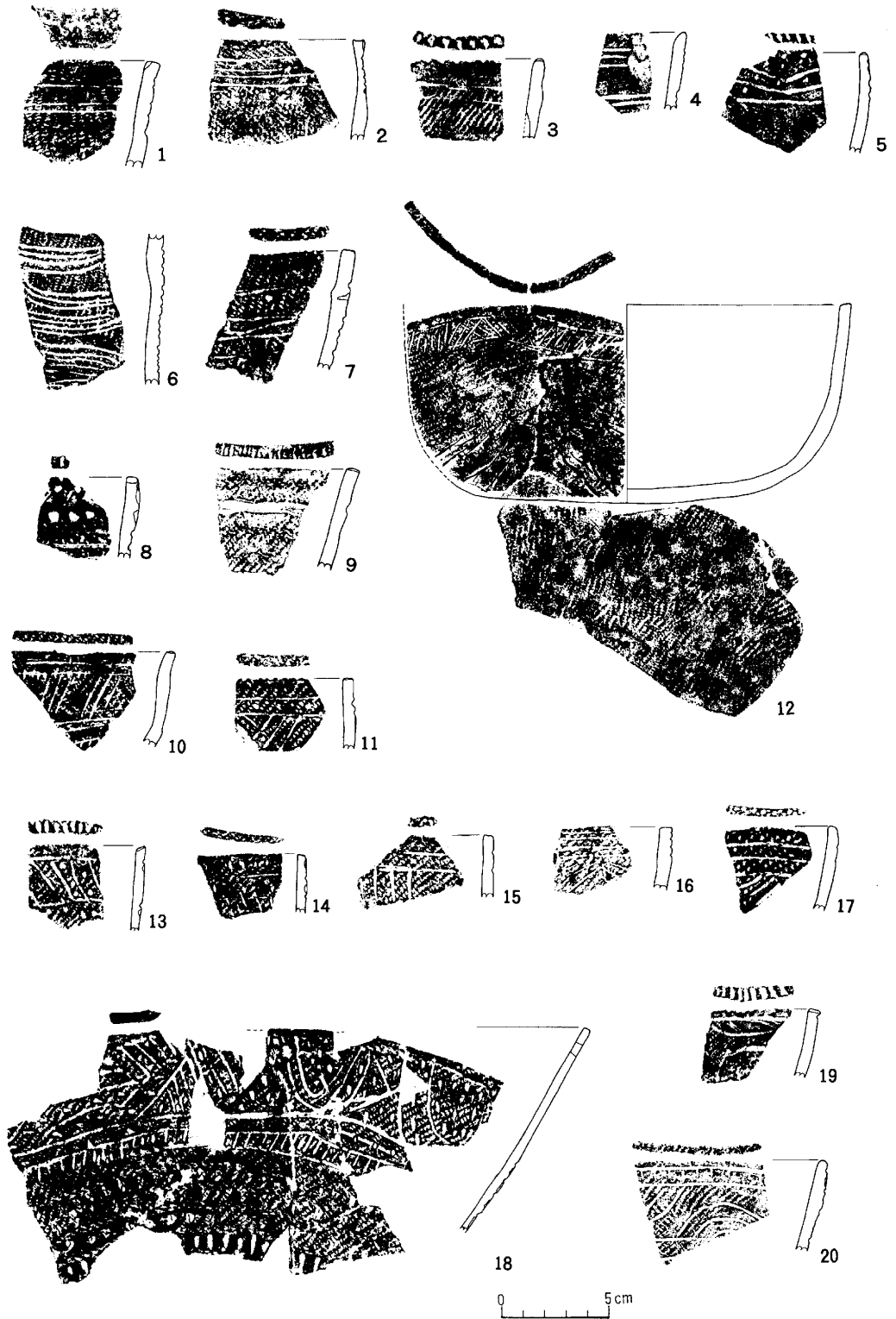
第75図 第I・II層出土土器 (36)



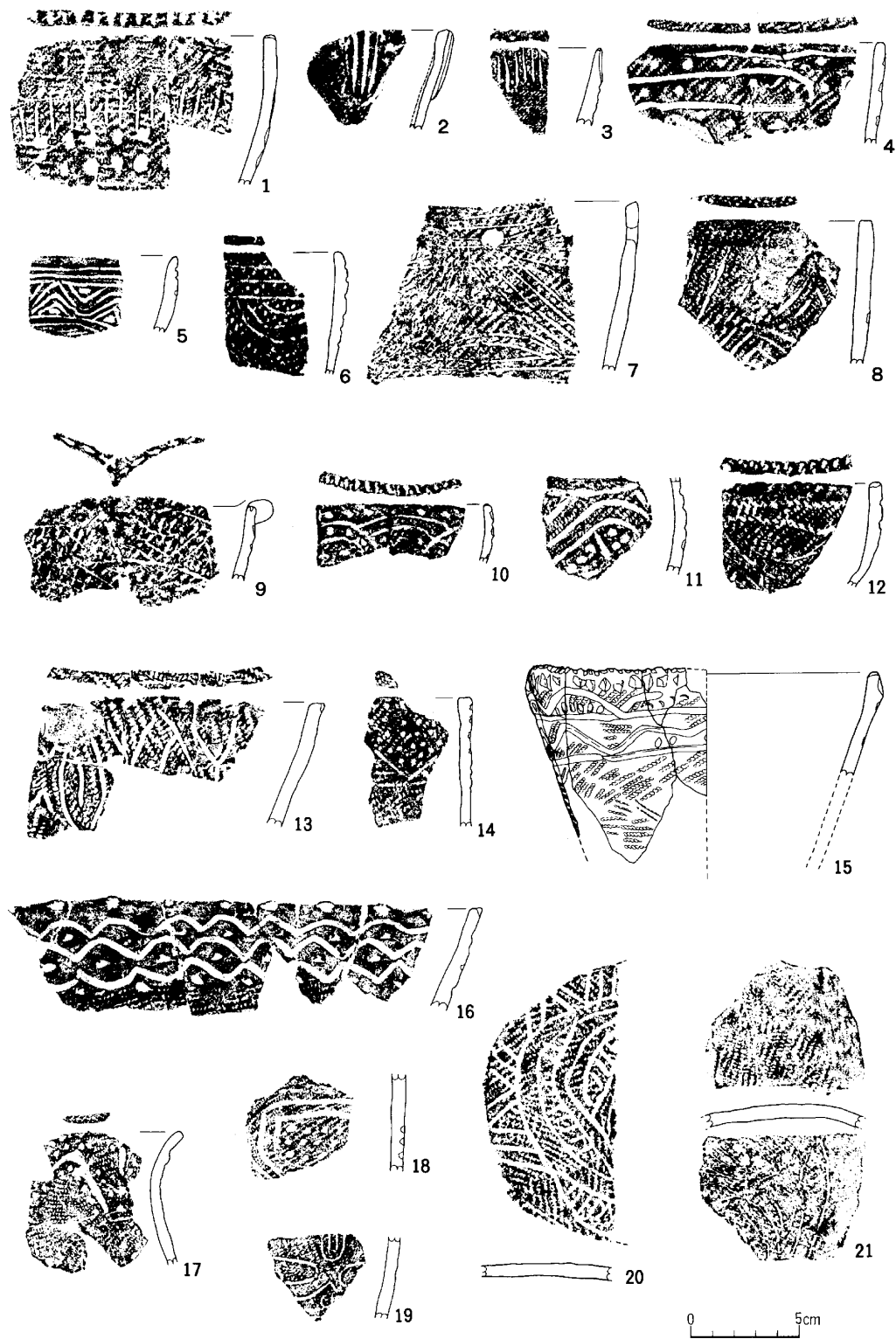
第76図 第I・II層出土土器 (37)



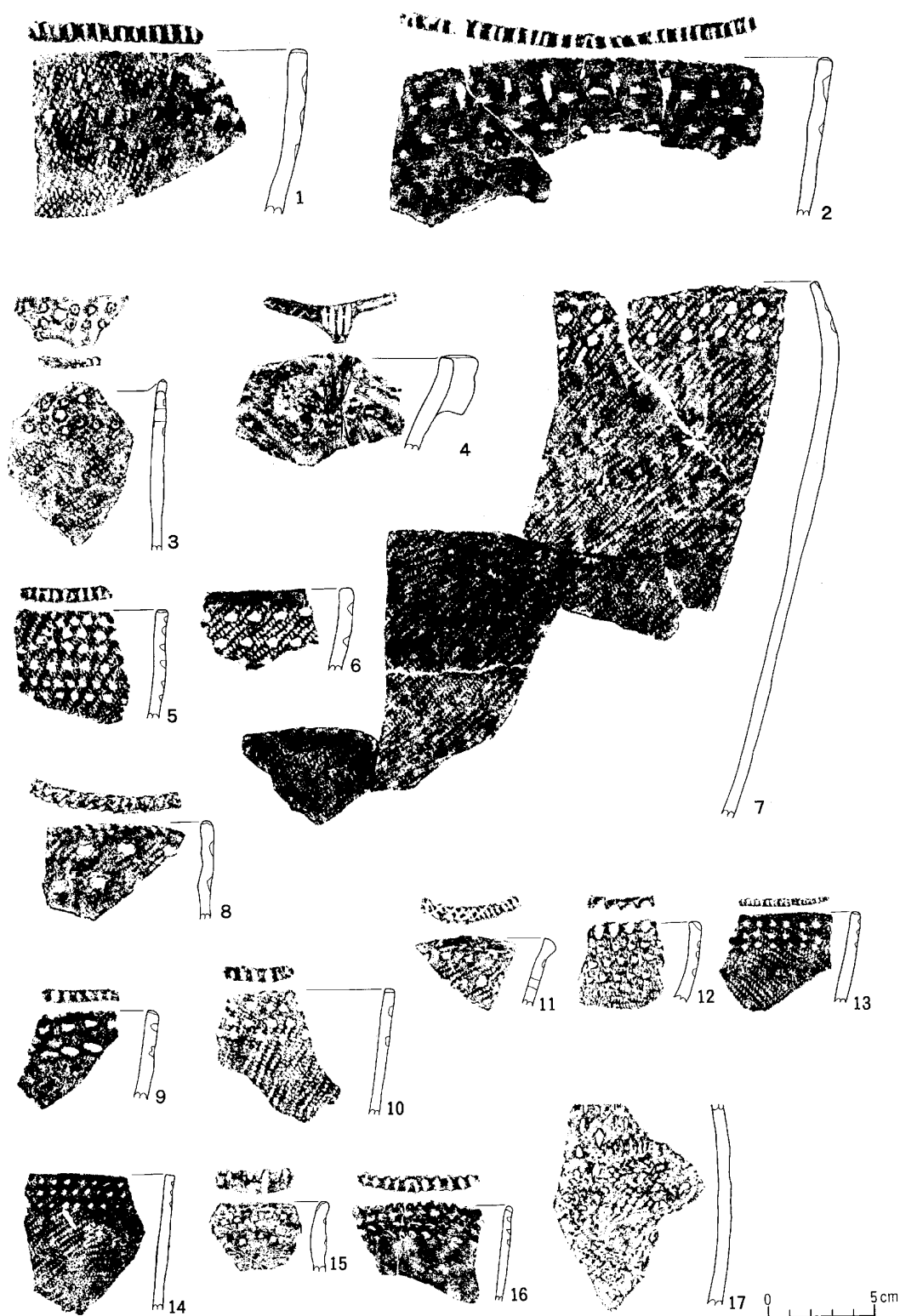
第77図 第I・II層出土土器 (38)



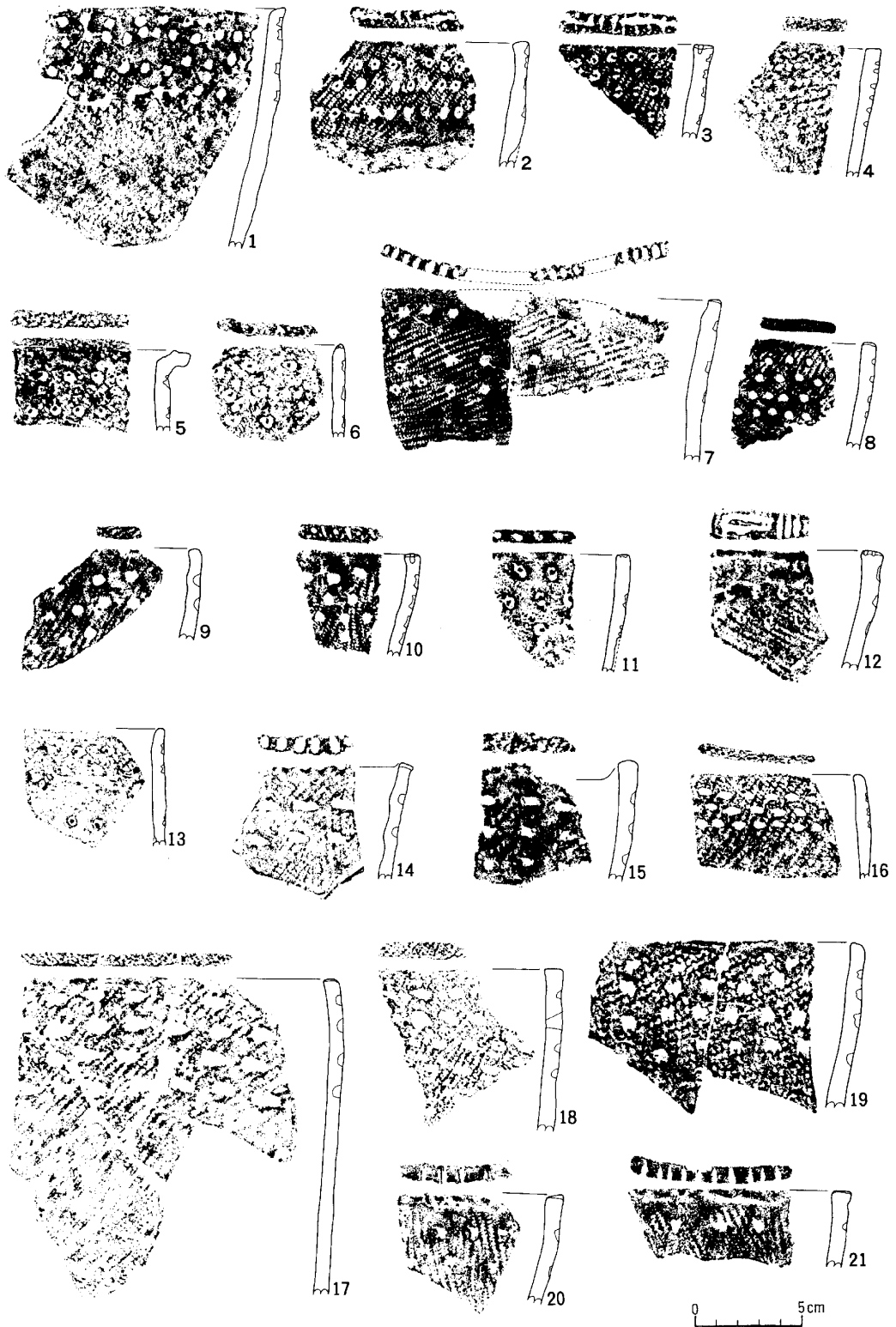
第78図 第I・II層出土土器 (39)



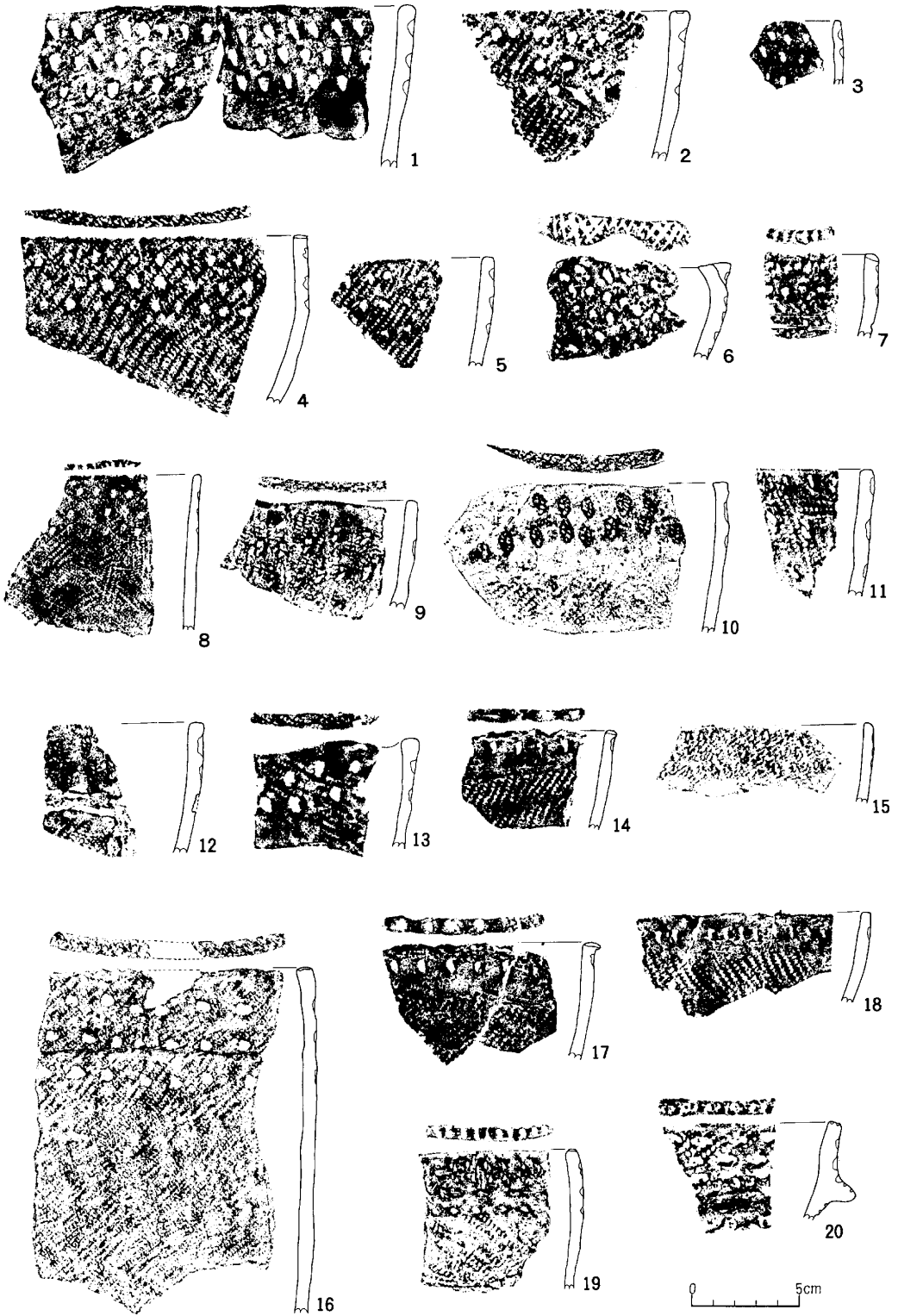
第79図 第I・II層出土土器(40)



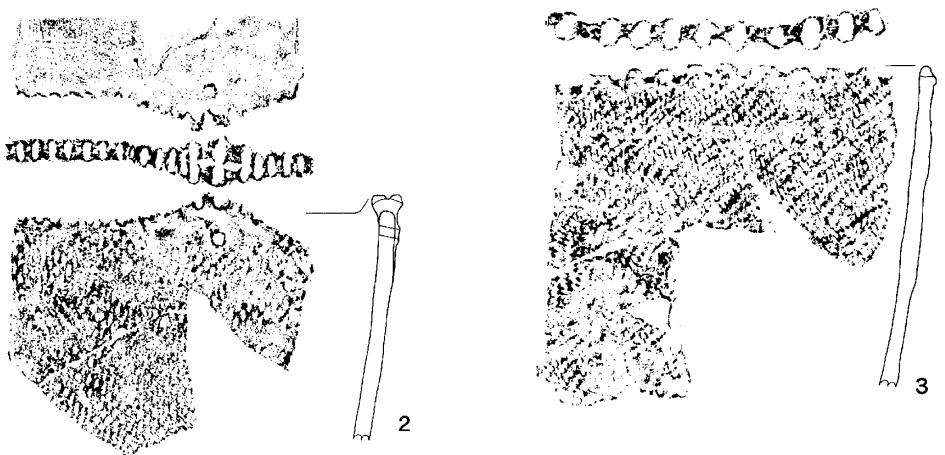
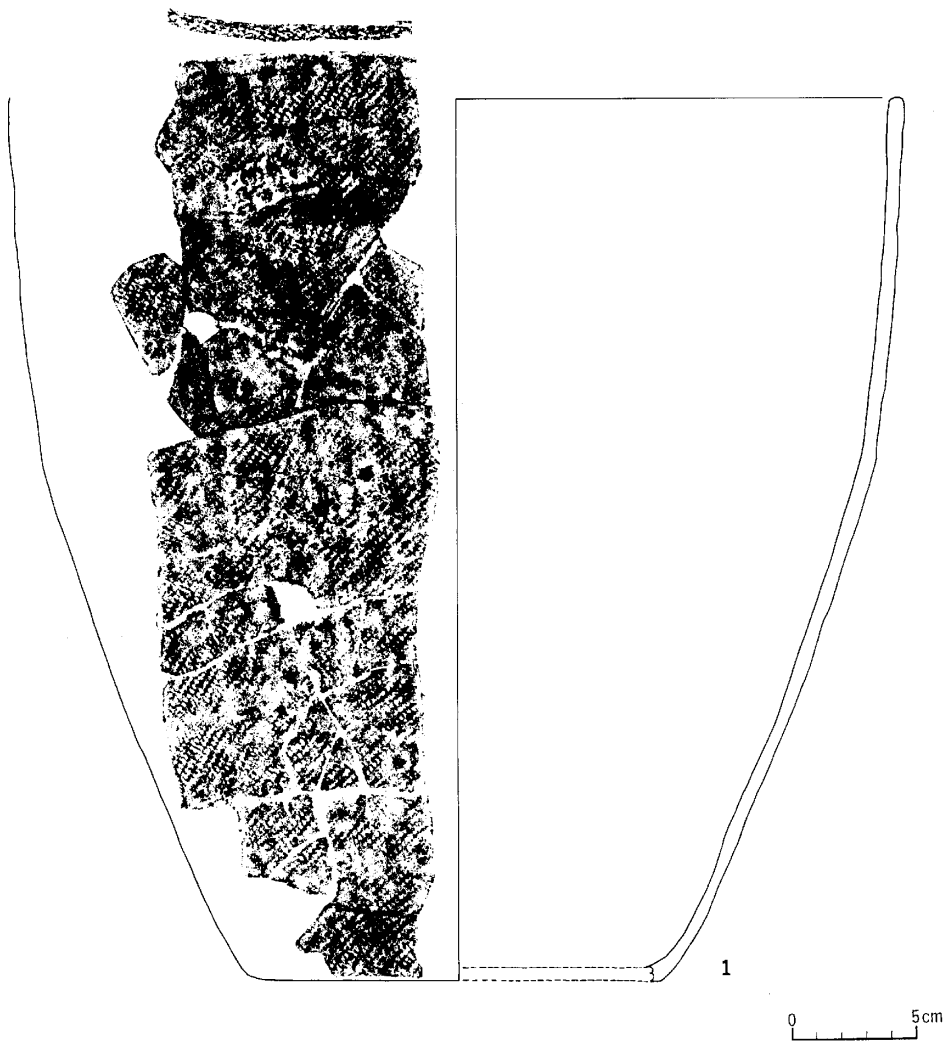
第80図 第I・II層出土土器(41)



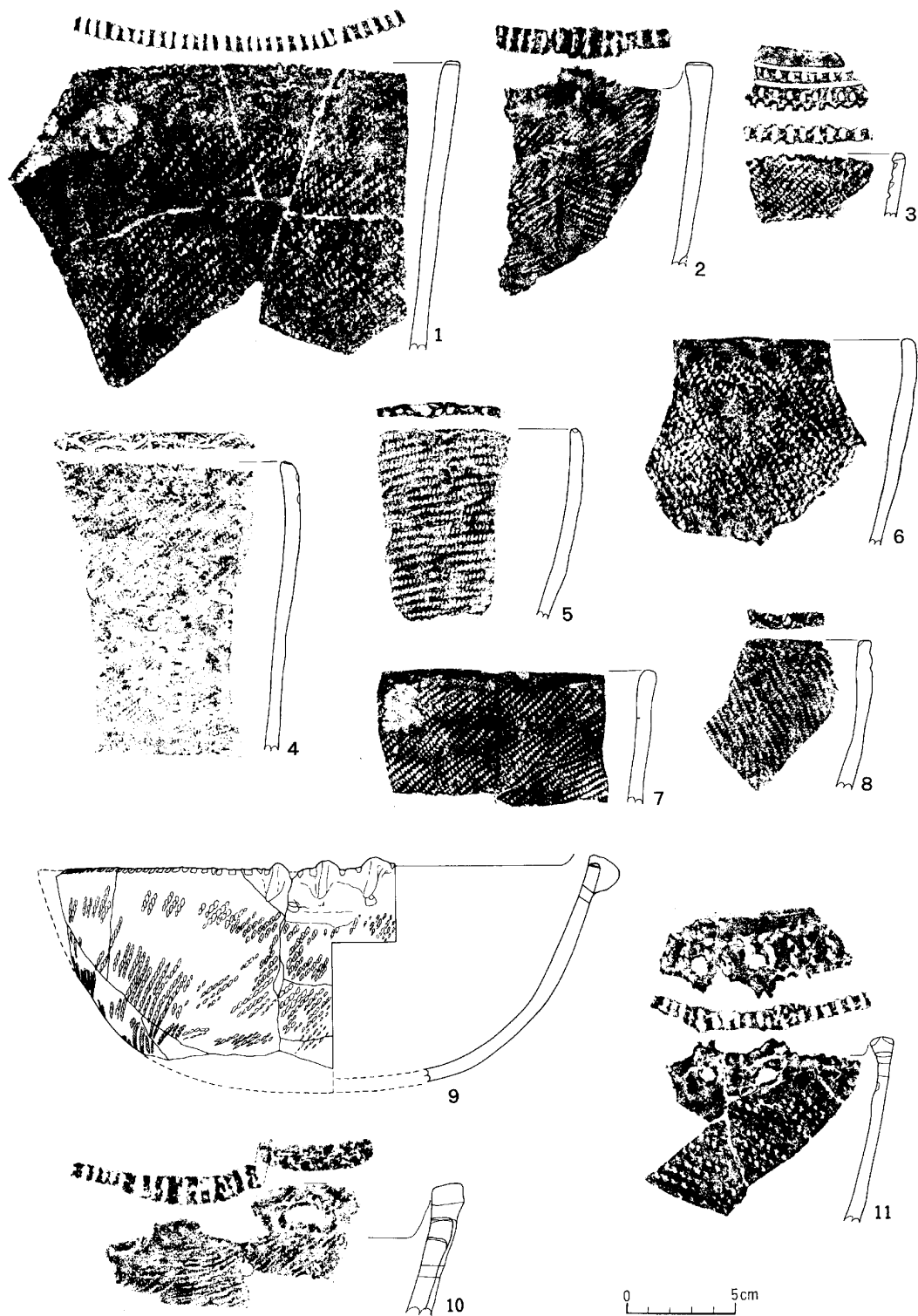
第31図 第I・II層出土土器 (42)



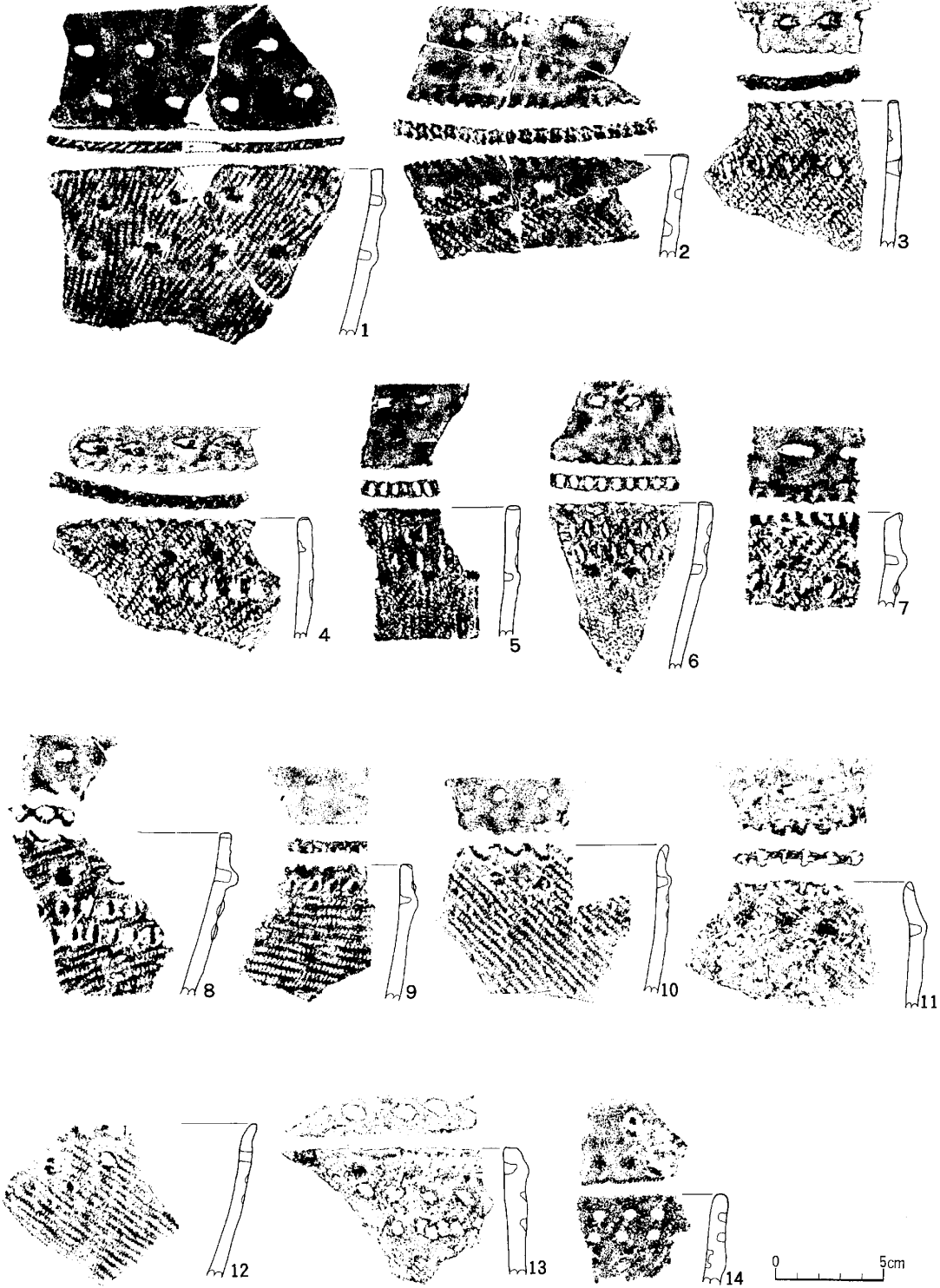
第82図 第I・II層出土土器 (43)



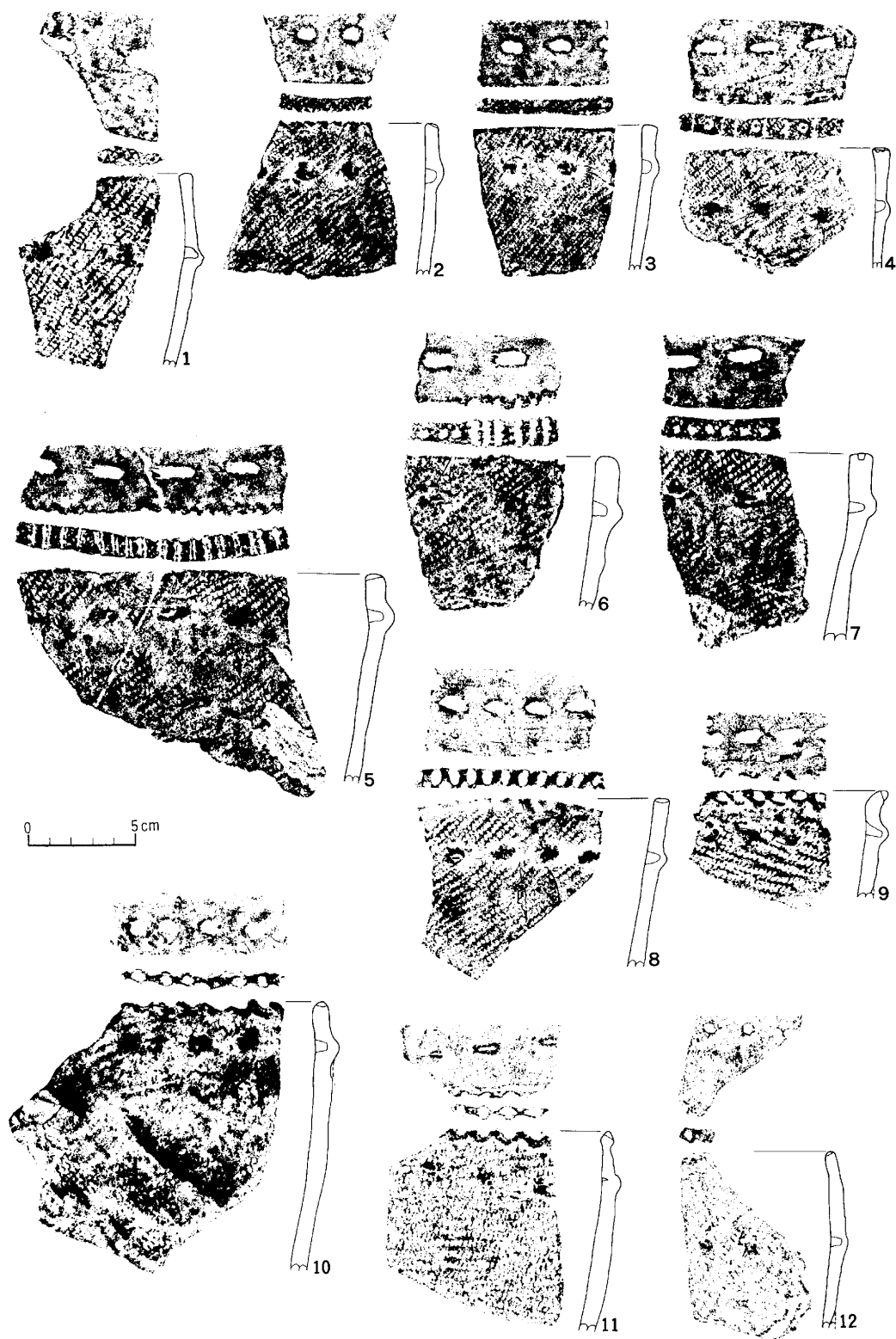
第83図 第I・II層出土土器 (44)



第84図 第I・II層出土土器(45)



第35図 第I・II層出土土器 (46)



第86図 第I・II層出土土器(47)

は縄端圧痕、5と9には円形刺突文が加わる。10・11は爪形文の間隔が広い。

第89図-1は無文地に縄端圧痕文、2は口唇部に縄線文が施される。3～8は無文であり4の内面には刺突がある。5の孔は焼成前のものであり、内面の孔外周部は貼付されている。8は杯であろう。9(図版17-6)は口縁部から頸部は無文でくびれ、胴部から底部にかけて広がる器形を呈する。頸部は爪形、胴部は擦痕状の整形痕があり器壁は薄い。10(図版17-7)の上面観は楕円形状を呈した無文の碗形土器。11(図版16-6)は器面を弧線状の沈線文と刺突で表し、底部は渦巻状の沈線を施した坏である。9～11の3点は33号竪穴のカマド煙道部にある5点の大型角礫を取り除いた時に破碎された状態で出土した。12(図版17-8)・13(図版17-9)・14(図版18-7)は無文土器。15(図版17-10)・16(図版18-1)・17(図版18-2)は無文、18(図版18-3)は山形状の沈線と底部に同心円の沈線を持つミニチュア土器。19・20は円形もしくは楕円形を呈した土製品。2点とも刻線が施される。特に20の刻線は鋭く表面には赤色顔料が塗布される。胎土は後北C₂・D式的である。21は4個の脚部をもつが上部の形は不明である。後北C₂・D式的な胎土である。22(図版18-4)は舟形を呈したミニチュア土器である。右端部に2本の隆帯が垂下し、内側から2個の小孔があけられている。

7. 縄文後期・中期の土器(第90図、図版26-3)

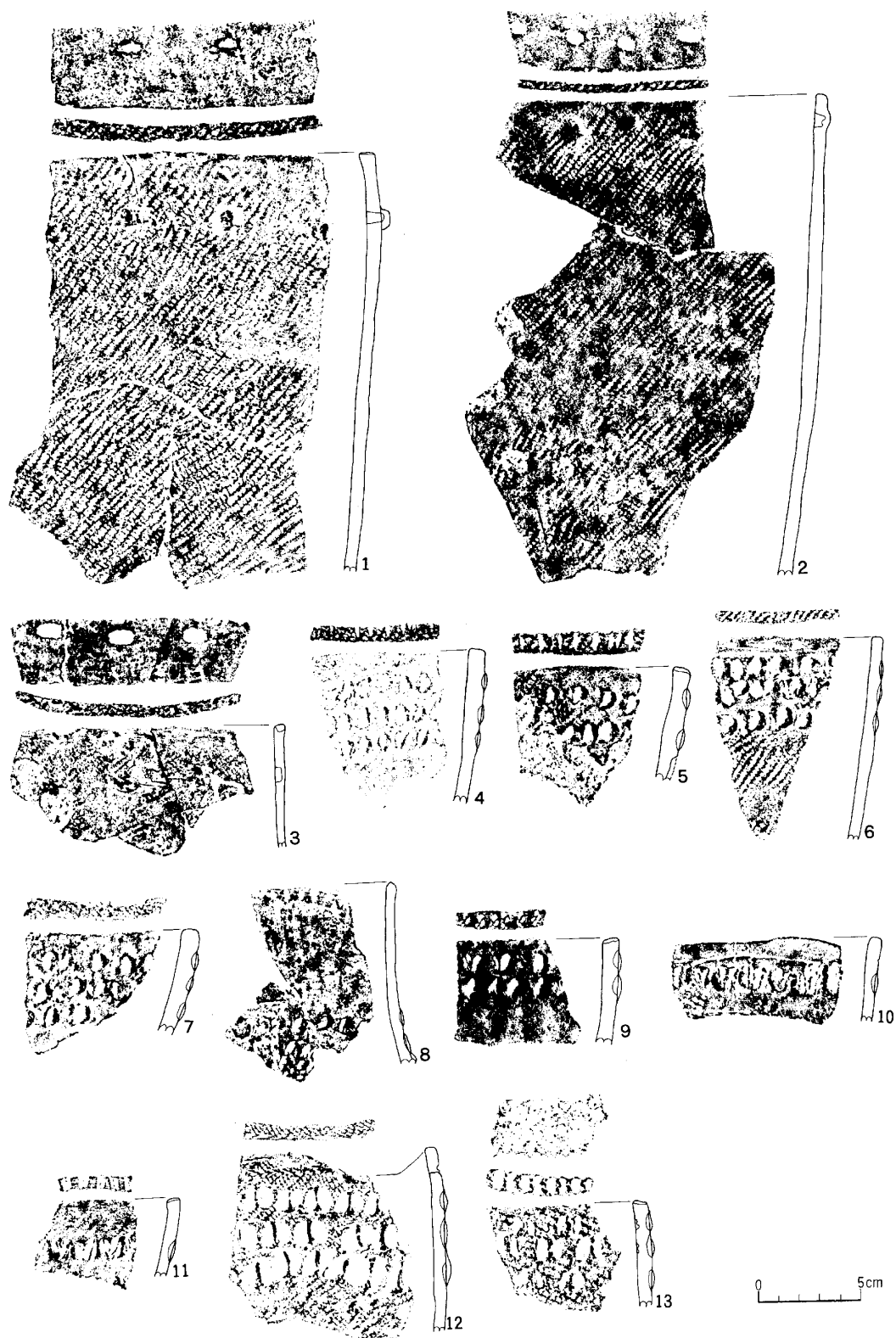
図版26-3は全体の3分の2を復元できた。口径約23cm、器高22cmの深鉢形土器で口縁部に内側からの突瘤文が刺突された縄文後期堂林式。

第90図-1～6は内側からの突瘤文と6を除き沈線文が施された堂林式。7・8・10は口縁部・頸部に沈線で仕切った刻みがあり、9は沈線が施された船泊上層式。11は口縁下に幅広の隆帯が巡るもので縄文中期後半であろう。12は網走式。

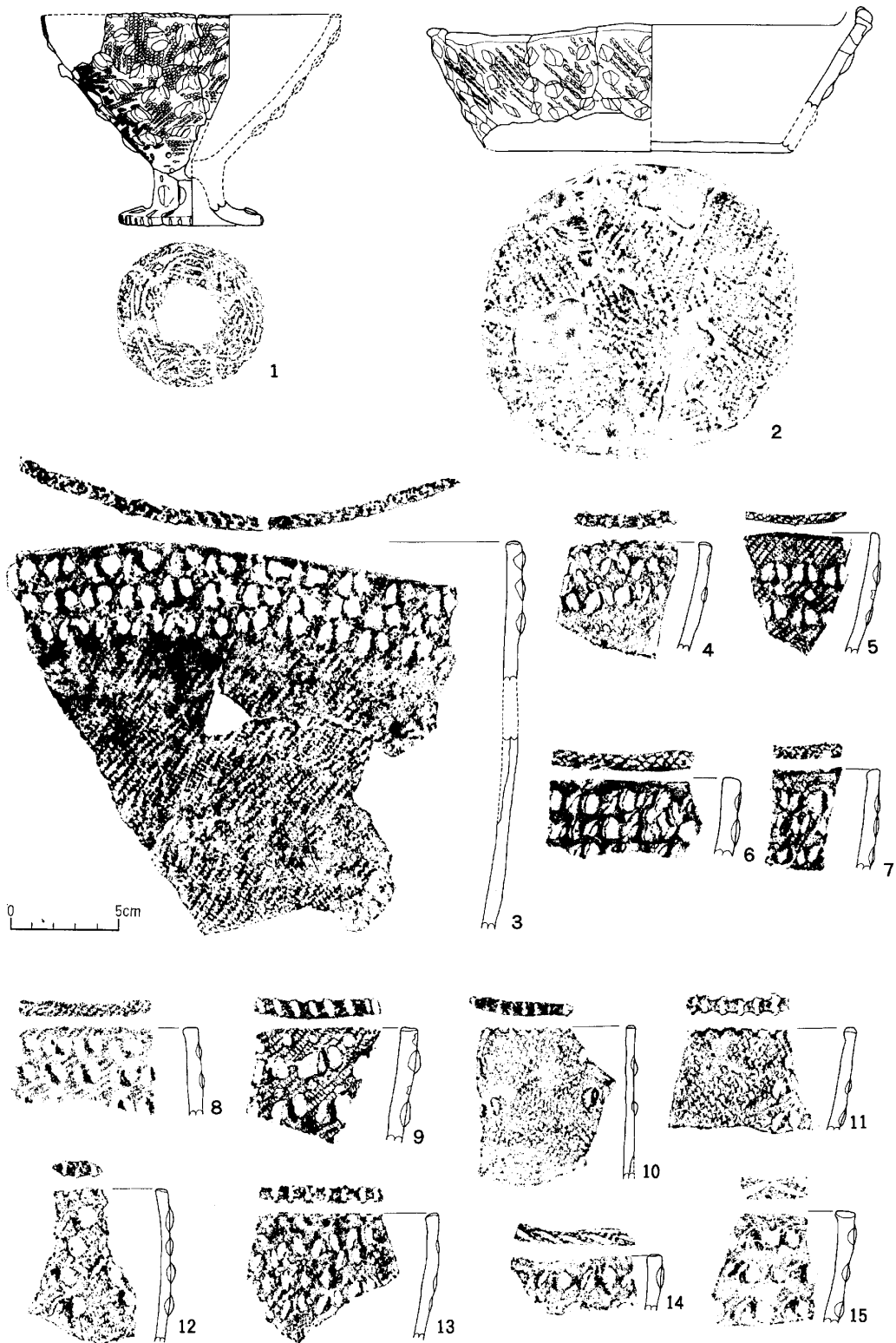
8. 石器(第91図・第92図、図版19・図版20)

I・II層の発掘区からは石鏃、石槍、石銛、ナイフ、削器、搔器、石斧など各種形態のものが多数出土している。ここではその中から代表的な石器を掲載する。

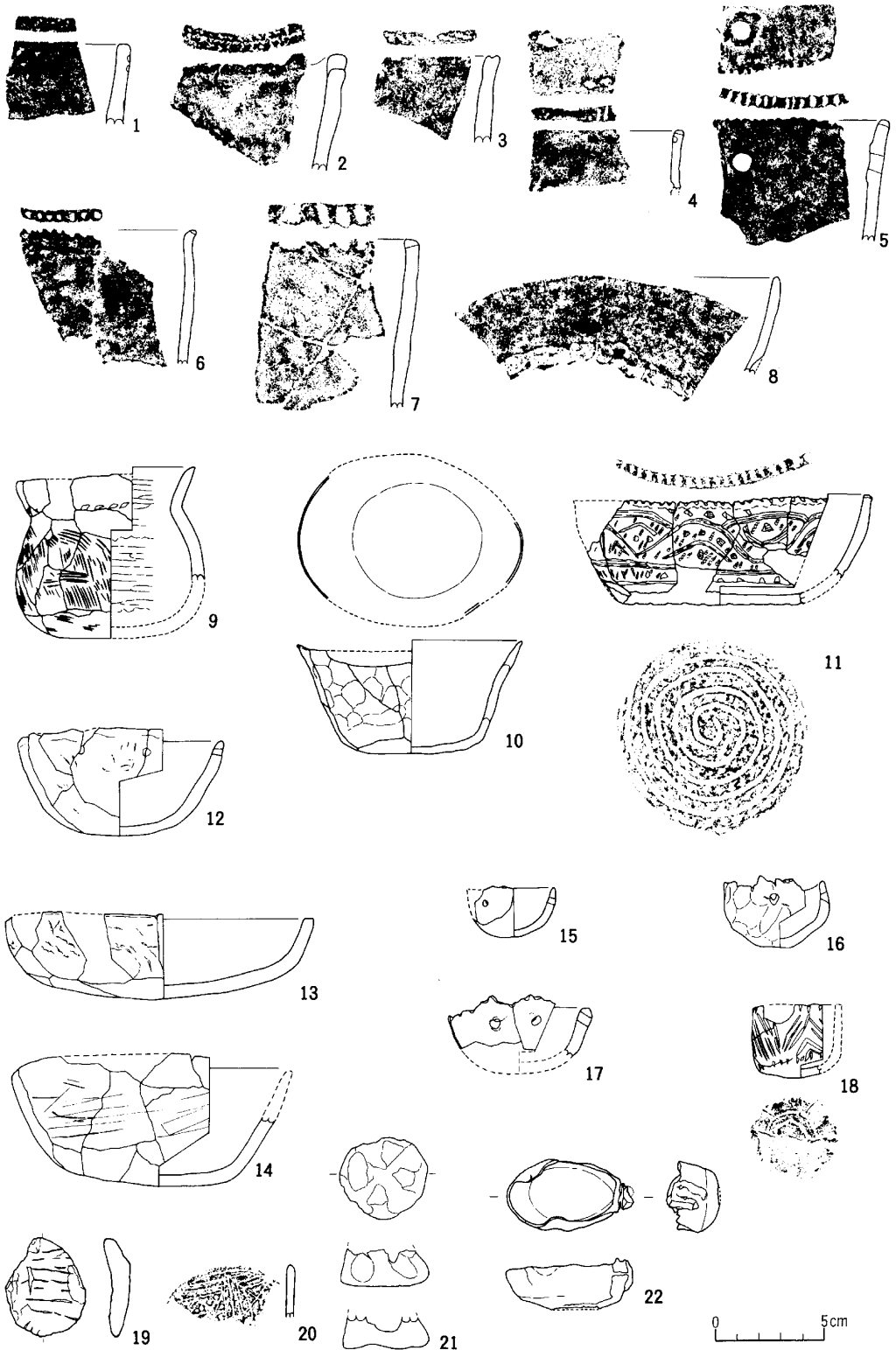
第91図-1～17は石鏃。1～3は基部に二又状の大きな抉りがある。5～7は鏃身部に突起を作出した有茎石鏃。8も鏃身部に小突起をもつ。異形石器かもしれない。9～15は石槍もしくは石銛であろう。13は先端表裏面にタール状の粒子が付着する。硬質頁岩製。16は菱形で肉厚の大形剥片を素材としたもので、右下と左上に急斜な刃部をもった削器。17も削器。18は台形状を呈した搔器。22は上部に抉部があり、刃部が丸みをもった分銅形を呈した搔器。19・21は人・動物を意匠した異形石器。22はブーメラン状を呈すると思われる。23は両面、側面に研磨痕が観察される。実測図の下端部には表裏面からの穿孔痕がある。24は叩き石。底面に使用痕があり、上部は握りやすい様に部分的に研磨している。25(図版19-25)は両端が欠失する石剣と思われるものである。丸みをもった素材の両側を研磨し楕円状に仕上げたもので、1本



第87図 第I・II層出土土器(48)



第88図 第I・II層出土土器(49)



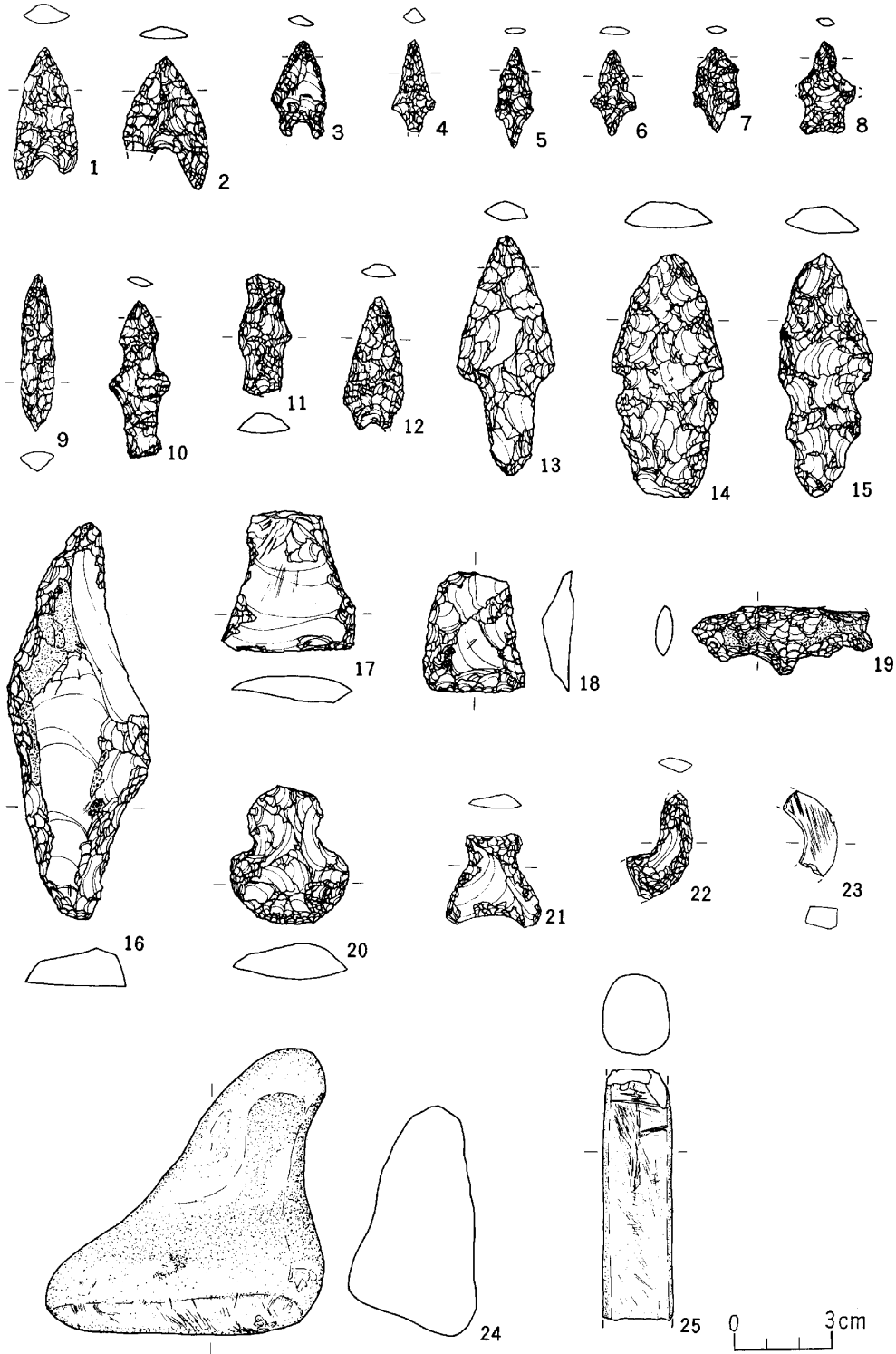
第89図 第I・II層出土土器 (50)



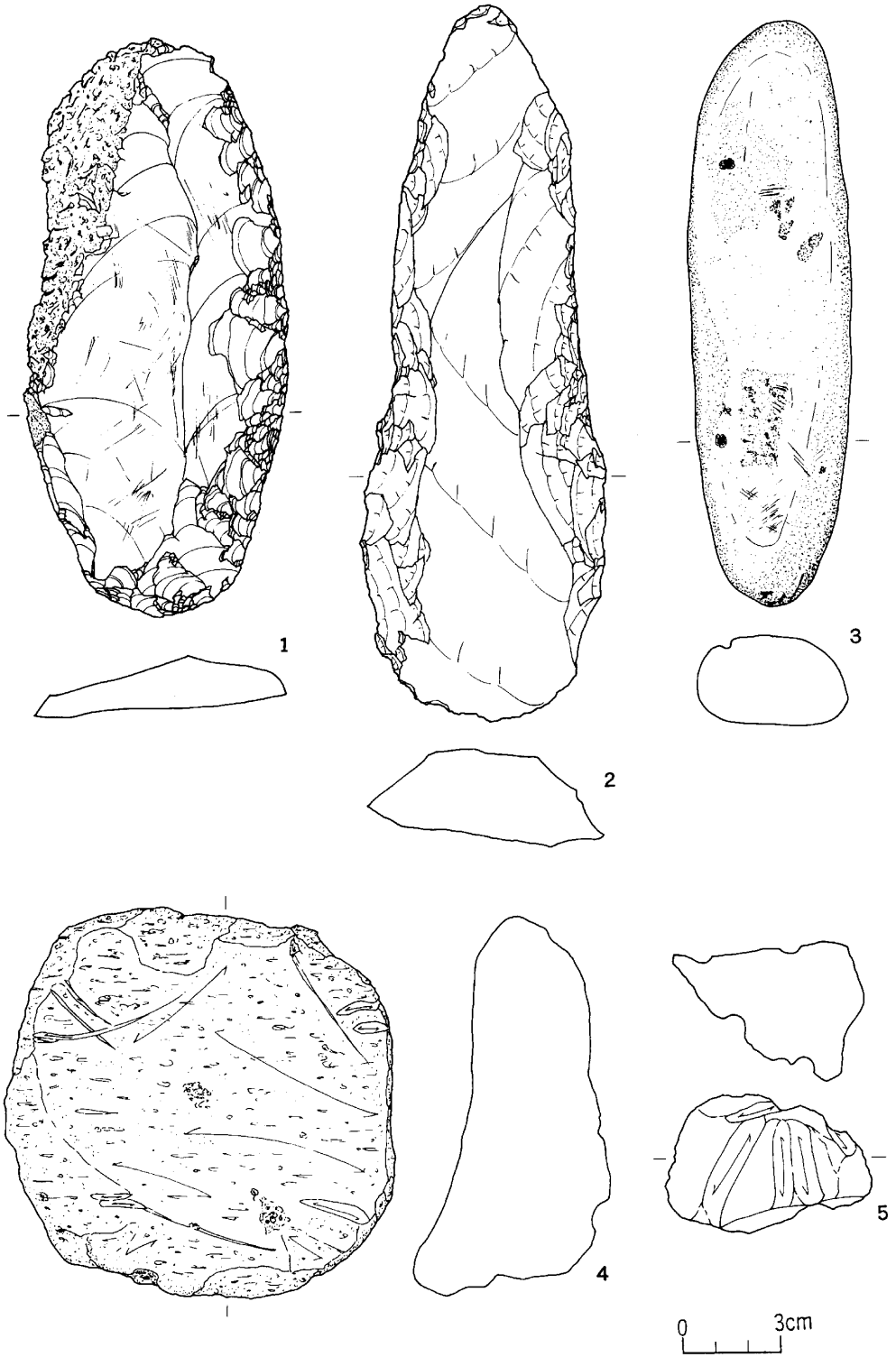
第90図 第I・II層出土土器 (51)

の横走る刻線は研磨のため切れている。その他、数条の浅い刻線がある。平成11年度の調査において1210号土壌墓から同種の石剣が出土している。石質は10が硬質頁岩。23は不明。24は安山岩。25は角閃岩。他はすべて黒曜石である。

第92図-1は大型削器。2は側縁部を調整加工し、石斧状の刃部をもつ。安山岩製であり斧よりは堀具として利用されたのであろう。3は叩き石。実測図左側に2個所の浅い孔をもつ。4は磨石。5は有溝石器。石質は1が黒曜石。3が安山岩。4は軽石。5は砂岩。



第91図 第I・II層出土石器(1)



第92図 第I・II層出土石器(2)

第VII章 第IV層の遺構・遺物

第IV層の概要

本層はH'52から55、I'52から55、J'52から55グリッド周辺の狭い区域に堆積している。地表面から約1mの深度に堆積するもので層厚は約5～10cmと薄い黒色砂の土層である。4基の集石と8箇所の焼土は本層の上層で検出した。

集 石 1

遺 構 (第93図)

J'52グリッドに位置する。拳大の円礫13点が長軸約80cm、短軸50cmの範囲に集中している。円礫は火熱を受けている。礫の下面に堀込み等は認められない。

集 石 2

遺 構 (第93図)

J'52グリッドに位置する。拳大の円礫19点が長軸約70cm、短軸40cmの範囲に集中している。円礫は火熱を受けている。礫の下面に堀込み等は認められない。

集 石 3

遺 構 (第93図)

I'52グリッドに位置する。拳大の円礫20点が長軸約60cm、短軸50cmの範囲に集中している。円礫は火熱を受けている。礫の下面に堀込み等は認められない。

焼 土

遺 構 (第93図)

焼土はJ'52グリッドに5箇所、J'53グリッドに1箇所、I'54グリッドに1箇所、H'54グリッドに1箇所の合計8箇所を検出した。J'52グリッドの焼土は径約30～50cmと小規模で3基の集石の内側にまとまっているのに対し、J'53・I'54・H'54グリッドのものは集石からやや離れた東西方向に配置されるもので径約70cm～1.30mとやや規模が大きな傾向性をもつ。J'53グリッドの焼土からは微細な骨片が多量に検出された。



第93図 縄文後期集石・焼土平面図

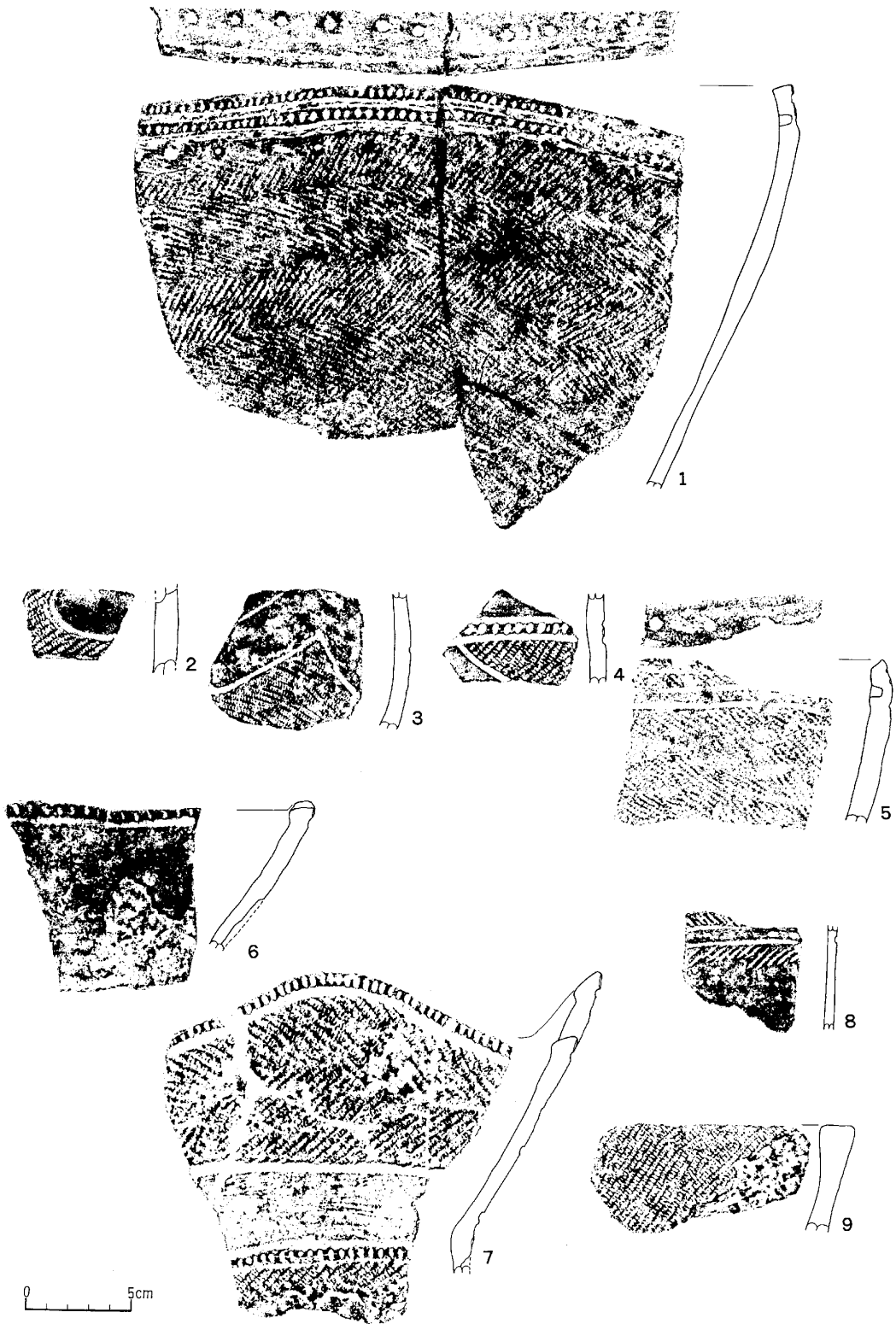
遺物（第94図・第95図、図版21）

集石、焼土の周辺からは第94図の土器、第95図の石器が出土している。第94図-1は口縁上部の2条の沈線間に刻目と内側から突瘤を加え、地文の縄文は目の細かい羽状縄文を施す。2～4は縄文が曲線の沈線で区画されたもので1～4は縄文後期エリモB式に比定できる。5は口縁下部に横走する3条の沈線と内側から突瘤を加える。沈線と言っても連続したものでなく途切れ途切れの不連続である。地文は斜行縄文を施したもので縄文後期堂林式であろう。6は口縁部に沈線と刻目をもつ。7は大きな波状口縁をもち胴中部が沈線と刻目で区画された無文帯になる。8は2条の沈線の上下に刻線が羽状に施される。9は口縁部が幅広く斜縄文が施される。6～9は鯨澗式に比定される。

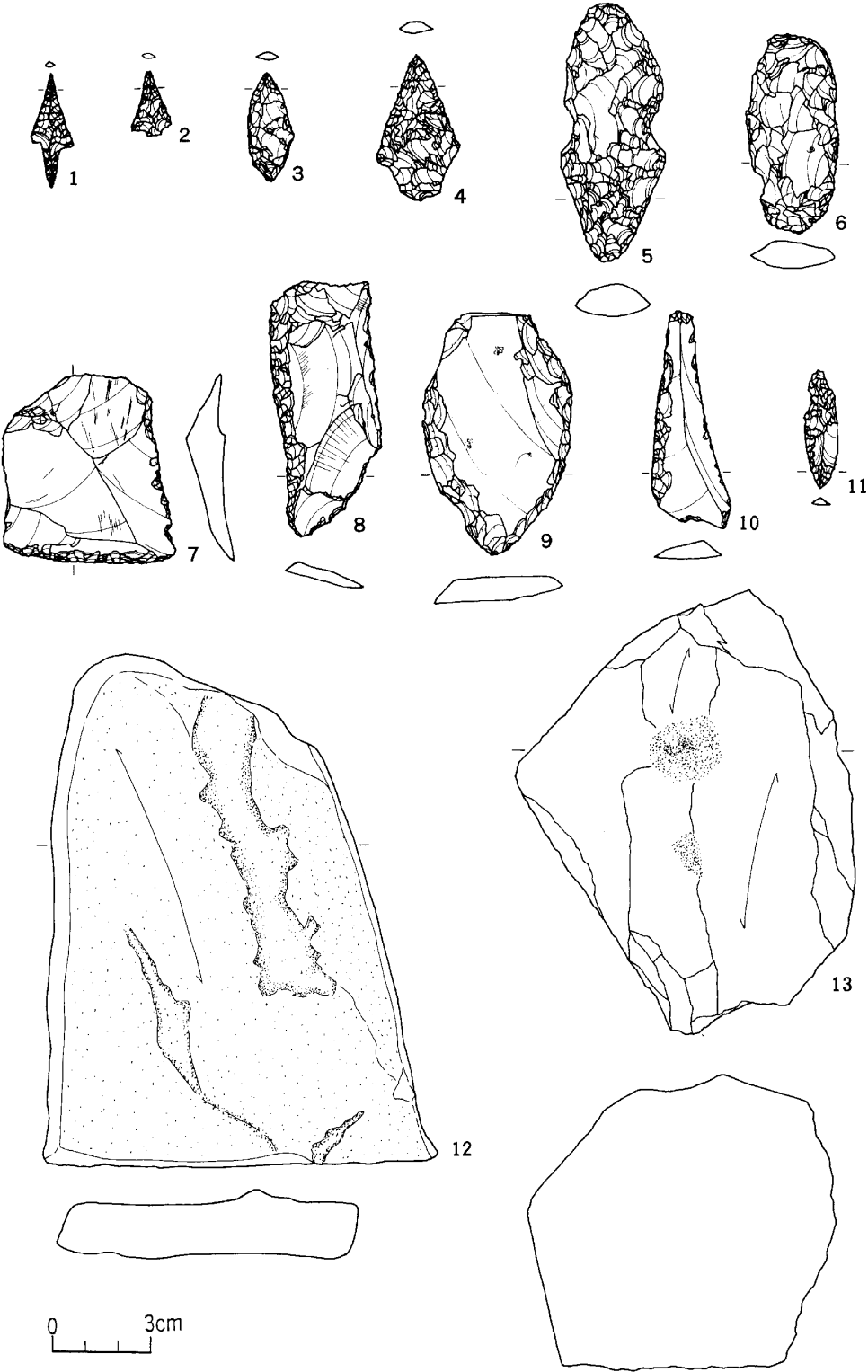
第95図-1は比較的長い茎部をもつ有茎石鏃。2も同様と思われる。3は木葉形石鏃。4は鏃身部が二等辺三角形を呈した石銛。5は中央部の両側に抉入部を持ち実測図の下部が丁寧に調整された両面加工ナイフ。6は右側縁部から下部が調整された両面加工ナイフ。7は台形状の大形剝片の下端部に入念な加工を施し、上部に細長い使用痕が見られる。7～10は削器。11は先端部が尖った断面三角形の小形削器であろう。12は砥石。13は砥石か石皿を転用した凹石。1～8・10・11は黒曜石。9は安山岩。12・13は砂岩。

小 括

集石1から集石4の周辺からは縄文後期鯨澗式が出土しており本層はこの時期のものである。遺物はJ'52グリッドの集石、焼土付近は少ないがJ'53グリッドの焼土周辺からは多く出土する傾向があり出土状況の変化を指摘できる。第93図の○印は土器、△印は石器、□印は石皿を示す。J'52グリッドからは柱穴等は検出できなかったが3基の集石を含めた何らかの簡易施設があったのかもしれない。この時期における集石以外の遺構ではピット53、58がある以外他の遺構は確認されていない。この時期の住居跡は本遺跡の後背地である標高18～20mのトコロチャシ南尾根遺跡で発見されており、本遺跡の場合は極めて短期間に利用されたのであろう。



第94図 第IV層出土土器



第95図 第Ⅳ層出土石器

第VIII章 第VI層の遺物

第VI層の概要

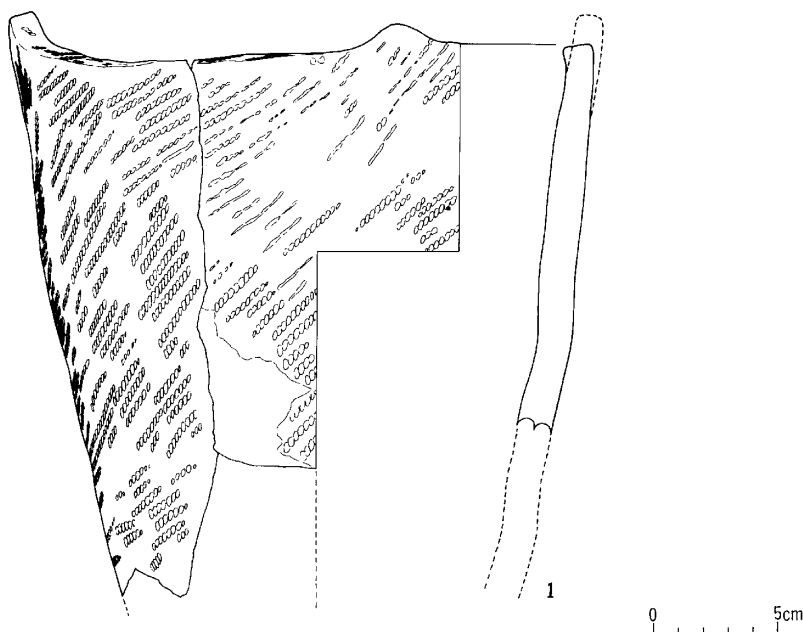
本層は発掘区の全域に堆積するのではなく主にH'52から68、I'52から68グリッド周辺に堆積している。黒色砂の層厚は第98図に示す通り薄く、約5～10cmを計る程度である。この層は縄文中期であるトコロ6類、5類と後期の縄濶式、エリモB式の間堆積している。層厚は薄く堆積範囲も狭いことからごく限られた時間に形成されたのであろう。この層からは下記の土器が出土している。当初、この時期の文化層と考えていたが遺構は無く、遺物も少量であるため積極的にこの時期と断定するには難しい。

遺物（第96図・第97図-1・2）

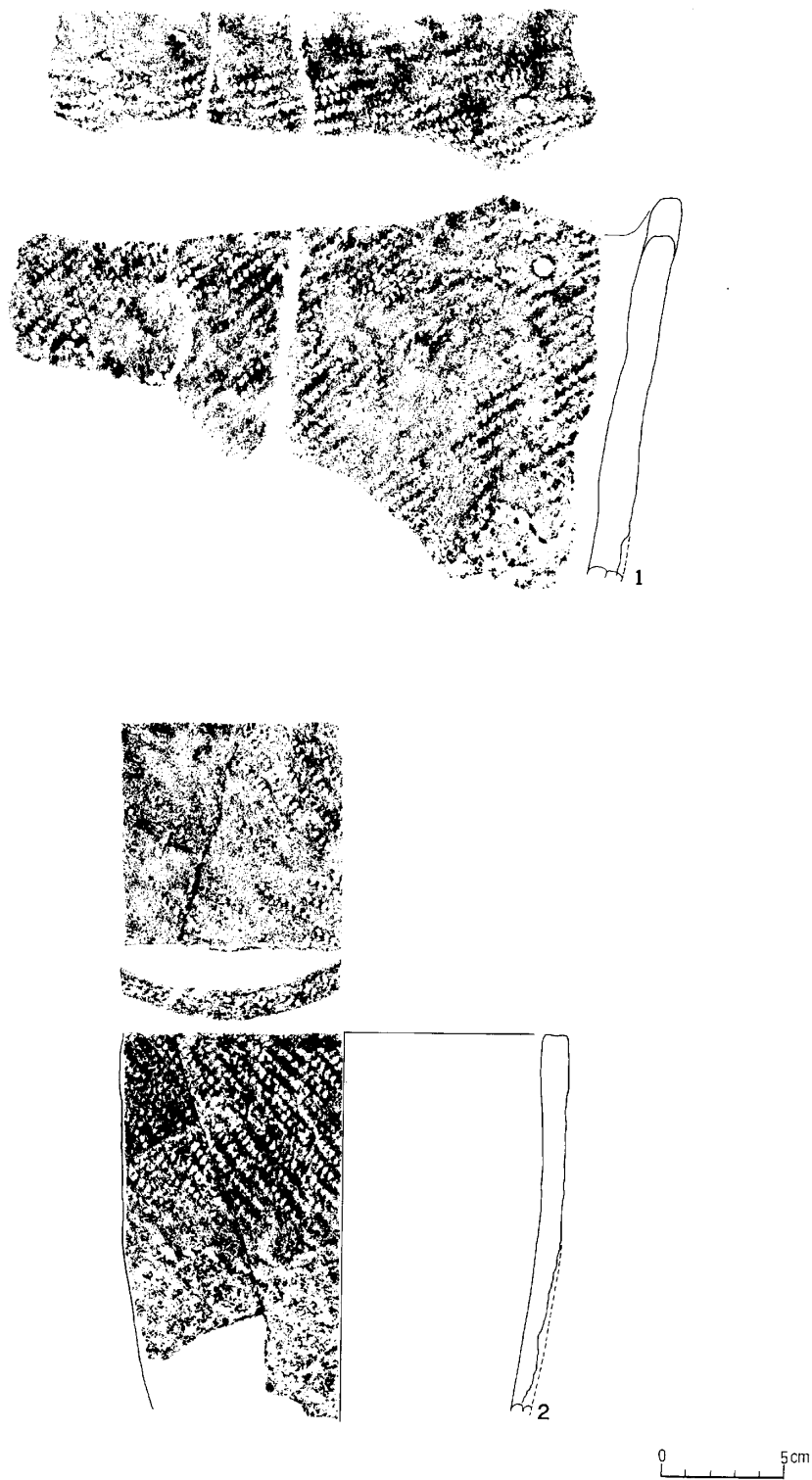
第96図-1は口径23cm。底部は欠失するが、口縁部にかけてラッパ状に開く器形であろう。口縁部に4個の山形小突起をもつ。LRの斜縄文を地文とし、煤が付着する。

第97図-1も第96図-1と同様の器形、施文をもつ。この2点の土器は縄文中期後半であろう。

第97図-2は口径21cmを計る。RLの斜縄文を内外面に施す。胎土は第96・97図と同じで、繊維を混入する。



第96図 第VI層出土土器（1）



第97図 第VI層出土土器(2)

第IX章 第VII層の遺物

第VII層の概要

本層は発掘区域の全面に堆積する。粒子の粗い明褐色砂と拳大程の角礫を含んだ砂礫層である。4～5cm程度の小角礫が層中に含まれるものの円礫は認められない。層厚は概ね30cmを計る。遺物は量は少なく散発的に出土する。河川の氾濫、増水等の自然変化による堆積層と考えられるもので、遺物はその過程で混入したものであろう。

遺物 (第99図・第100図・第101図・第102図・第103図、図版22・図版23・図版24)

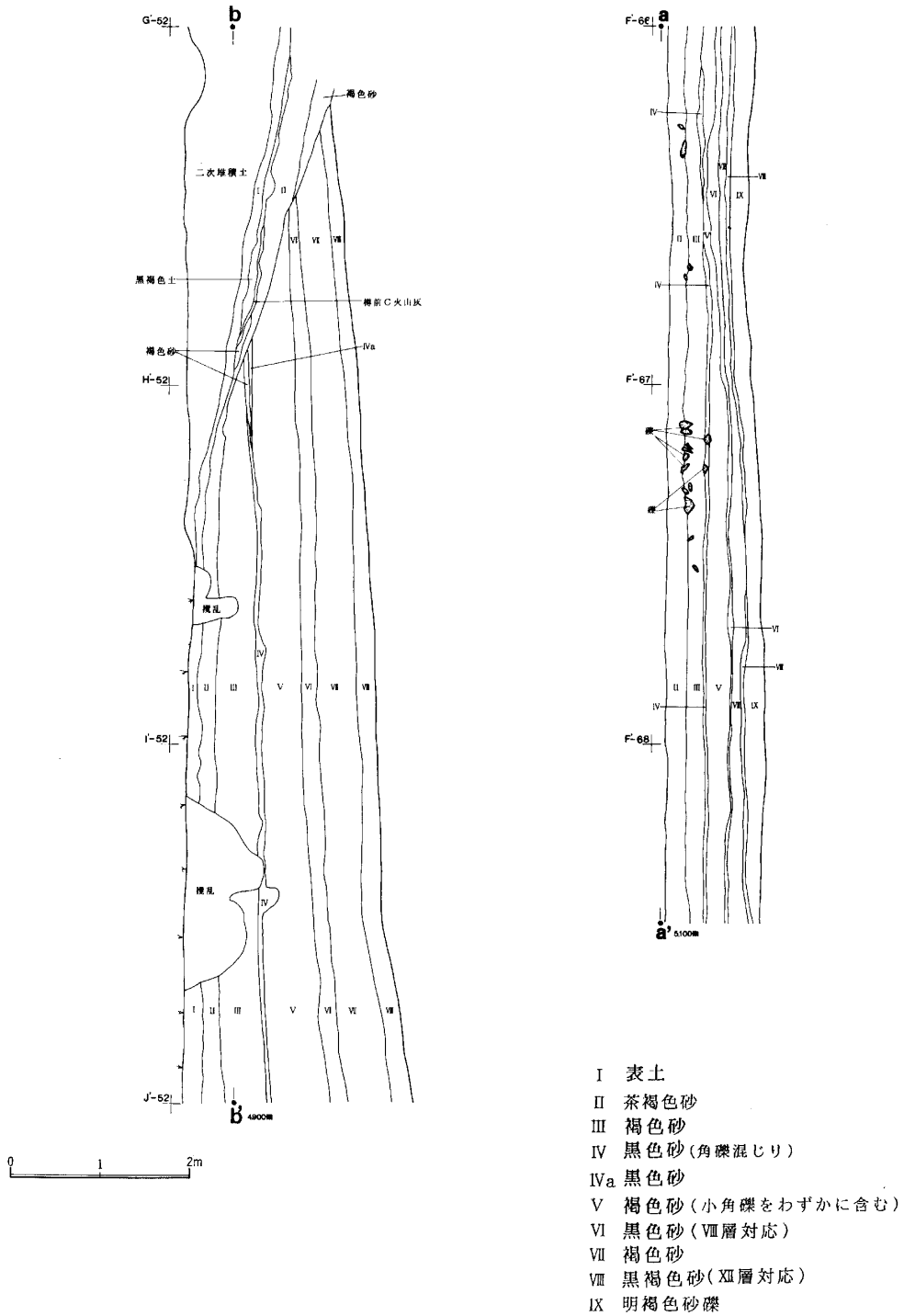
第99図-1・2は切り出し状の口縁部と口唇部に押引文、円形刺突が施されるもので、1は押引き状のテクニックで施文された沈線文が見られる。3の口縁部は2列の刺突が巡る。5は結節があり、器面は赤色顔料が塗布されている。1～5は胎土に繊維を含む。トコロ6類の中でも1・2は古手の(古)トコロ6類であろう。4・7はトコロ5類。6は隆帯をもつ肥厚帯の下部に「U」字状の刺突と押引手法による沈線が施される。繊維は含まない。類例の資料は無いが隆帯をもつ幅広の肥厚帯はトコロ5類的でもあるが、刺突された幅広の無文帯をもつ点などから羅臼式と同時期のものと思われる。

第100図-1はトコロ5類。2は口唇部から内壁にかけて剥落するため詳細な形態は不明であるが、丸みのある切り出し状と思われ、隆帯状の突起が付けられる。縄文間では無文帯を形成する。繊維は含まない。トコロ5類以降のものであろう。3～7は胎土に繊維を多量に含む縄文前期の尖底土器。

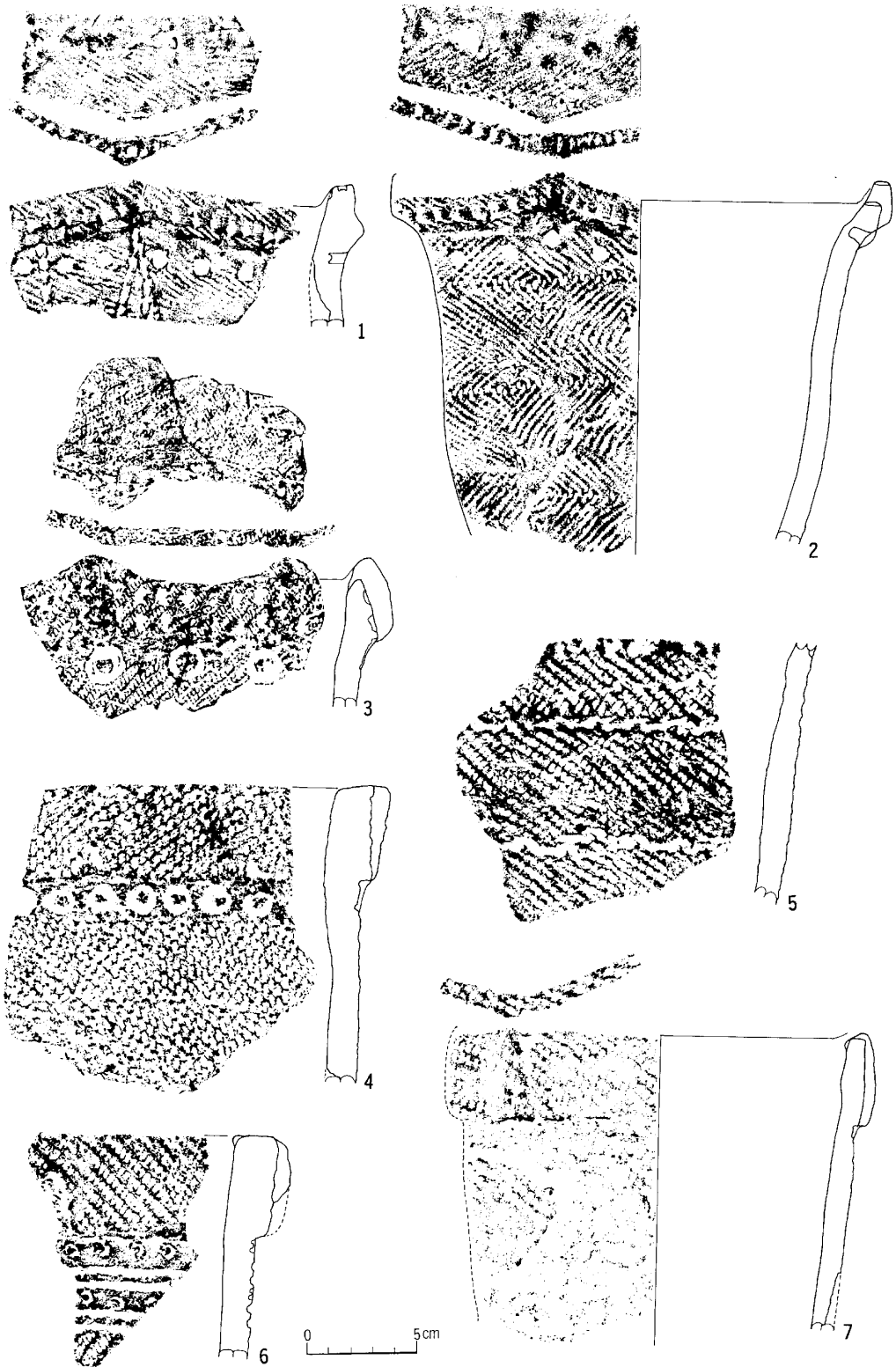
第101図-1・2は有茎石鏃。3・6は石槍。5は石銛。4・7～10は両面加工ナイフ。11～13は片面加工ナイフ。14～25は縦長の石匙。21～23は硬質頁岩、24・25は玄武岩製であり他は黒曜石製である。

第102図-1～15は搔器。16～20は削器。6は頁岩、他は黒曜石製。

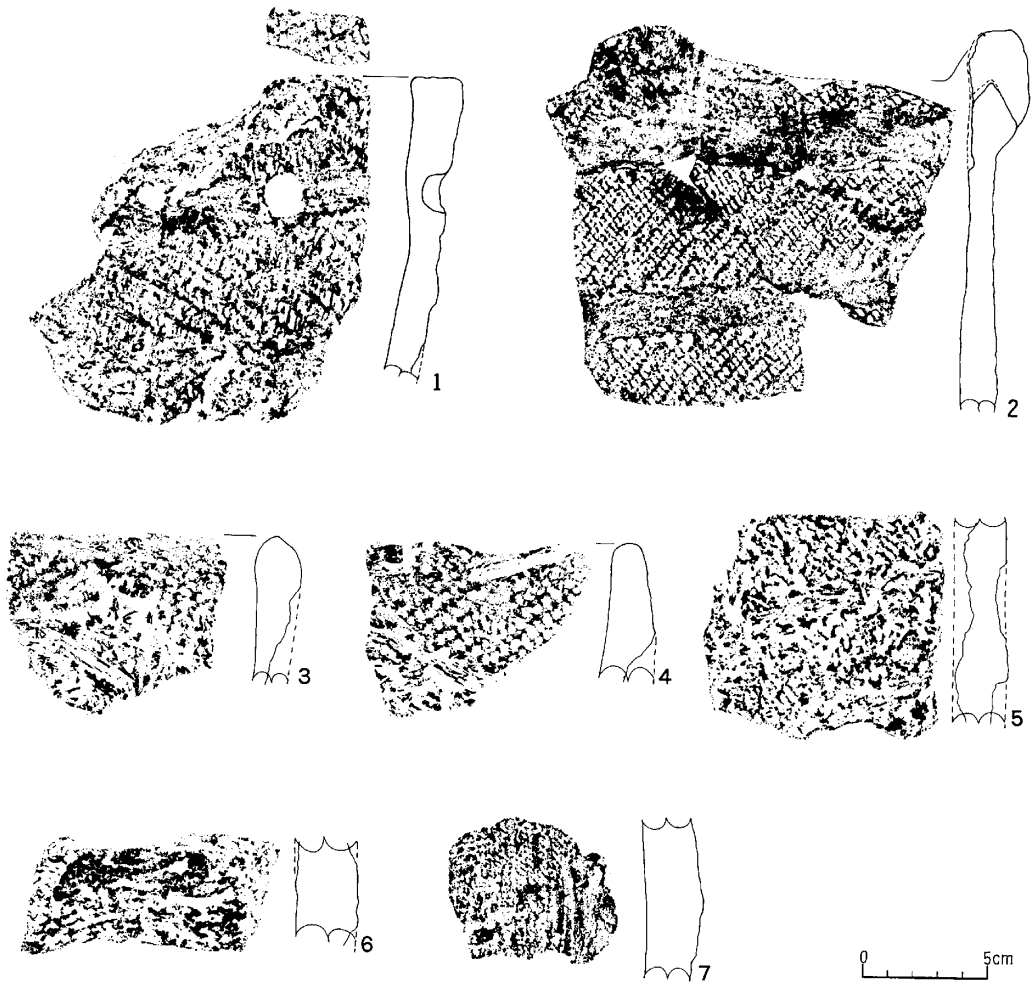
第103図-1～8は削器で6～8は弧状の刃部をもつ。9は異形石器。10～15は磨製石斧。15は両刃、他は片刃である。8は頁岩、10・11は黒色片岩、12～15は緑色片岩であり他は黒曜石製である。16は砂岩製の砥石。



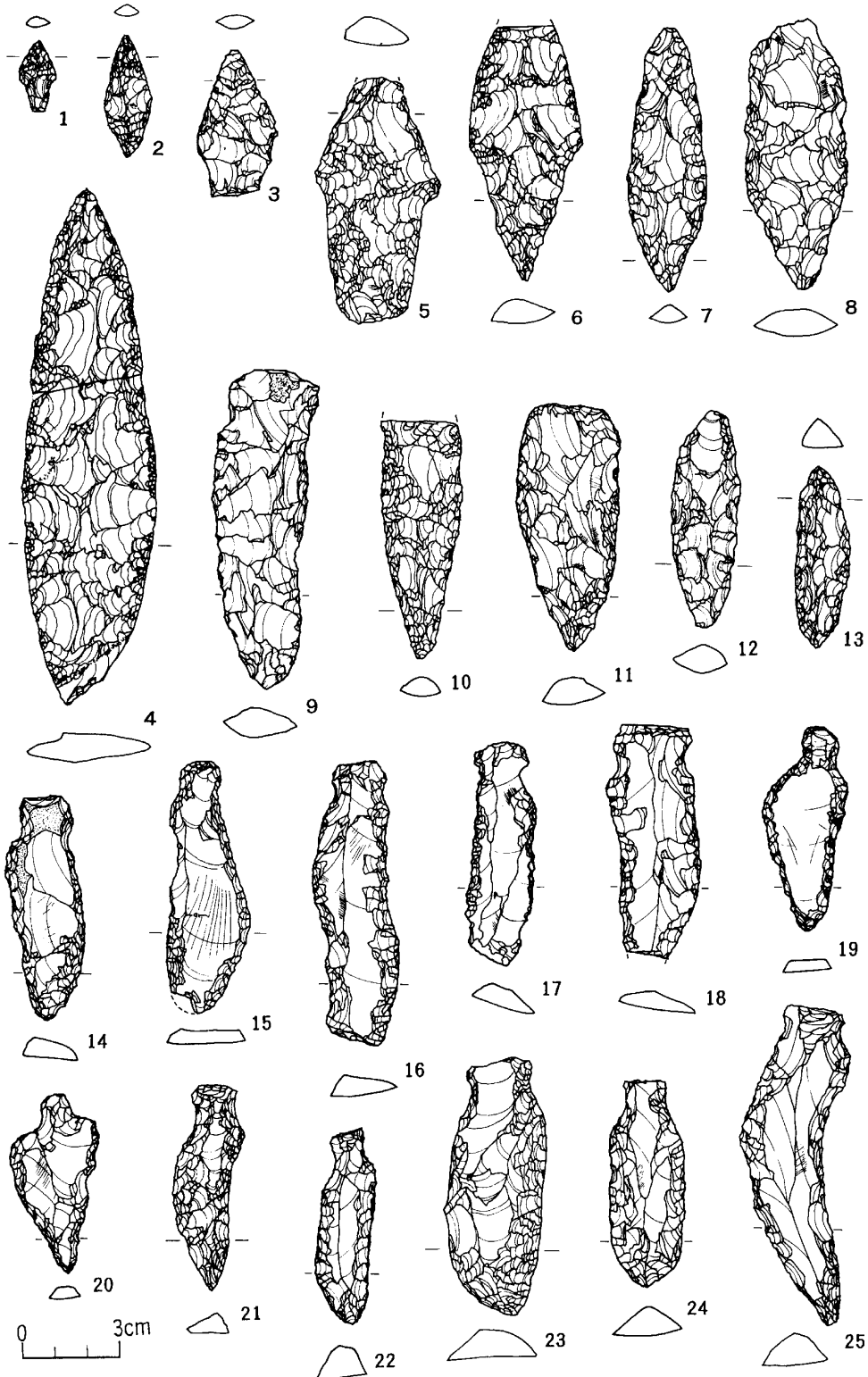
第98図 第VI層土層図



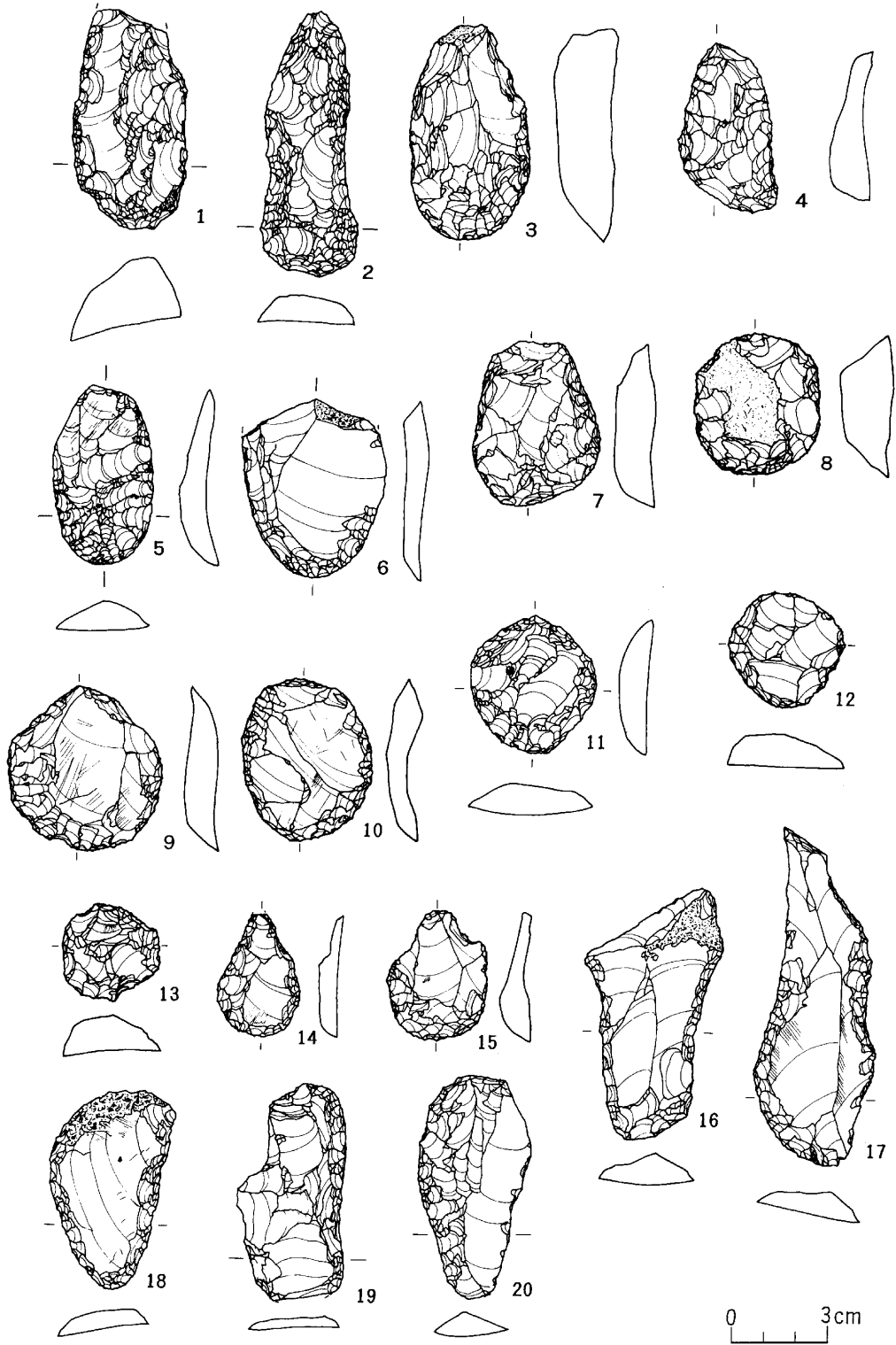
第99図 第VII層出土土器（1）



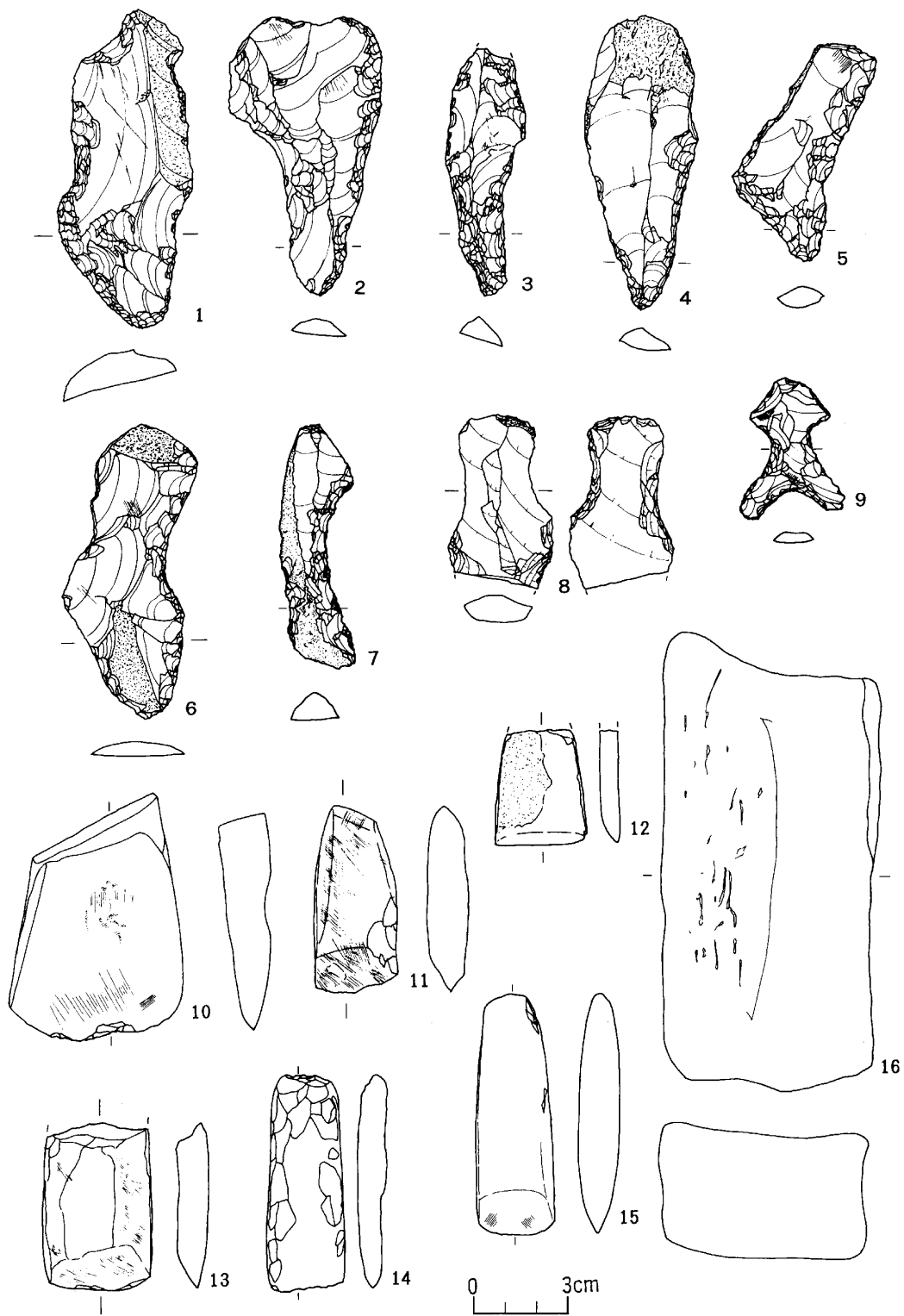
第100圖 第七層出土土器（2）



第101図 第VII層出土石器 (1)



第102図 第七層出土石器 (2)



第103図 第VII層出土石器(3)

第X章 第VIII層の遺構・遺物

第VIII層の概要

本層は地表面から概ね1.5mの深度に堆積しているがE'70、71、72グリッドラインで突然欠失する。欠失した理由は定かでないが第X層の平底押型文期の石囲み炉の一部も破壊を受けているところから判断すると、かなり強力な洪水などの自然災害のため一気に削り取られたものとも考えられる。その時期は本層より上位の堆積層から判断して縄文後期頃であろう。このことから縄文前期末から中期の包含層は本来かなり西側まで広がっていた可能性が指摘できる。現在の地表面はほぼ平坦に見受けられるがこれは近代の盛土等のために地形が改変された理由による。本層や第X層など安定した堆積層を見ると西側から東側に向かって緩く傾斜しており、欠失した本層の端部であるE'73グリッドから調査区域の最東端であるN'77グリッドの比高差は約70～80cmである。層厚約15～20cmで小角礫をわずかに含む硬く締まった黒色土である。

本層からは縄文前期中野式、綱文式。同末の(仮称)常呂川河口平底押型文II式。中期の(古)トコロ6類、トコロ6類、(仮称)常呂川河口平底押型文I式、トコロ5類など各種の時期に及んでいる。この中で(古)トコロ6類は本層下部の第Xa、Xb層、綱文式は第XVI層から遺物が出土しているため明らかに本層に伴うものではない。本層に伴うものはトコロ6類、(仮称)常呂川河口平底押型文I式である。

1 号 豎 穴

遺 構 (第104図、図版25-1)

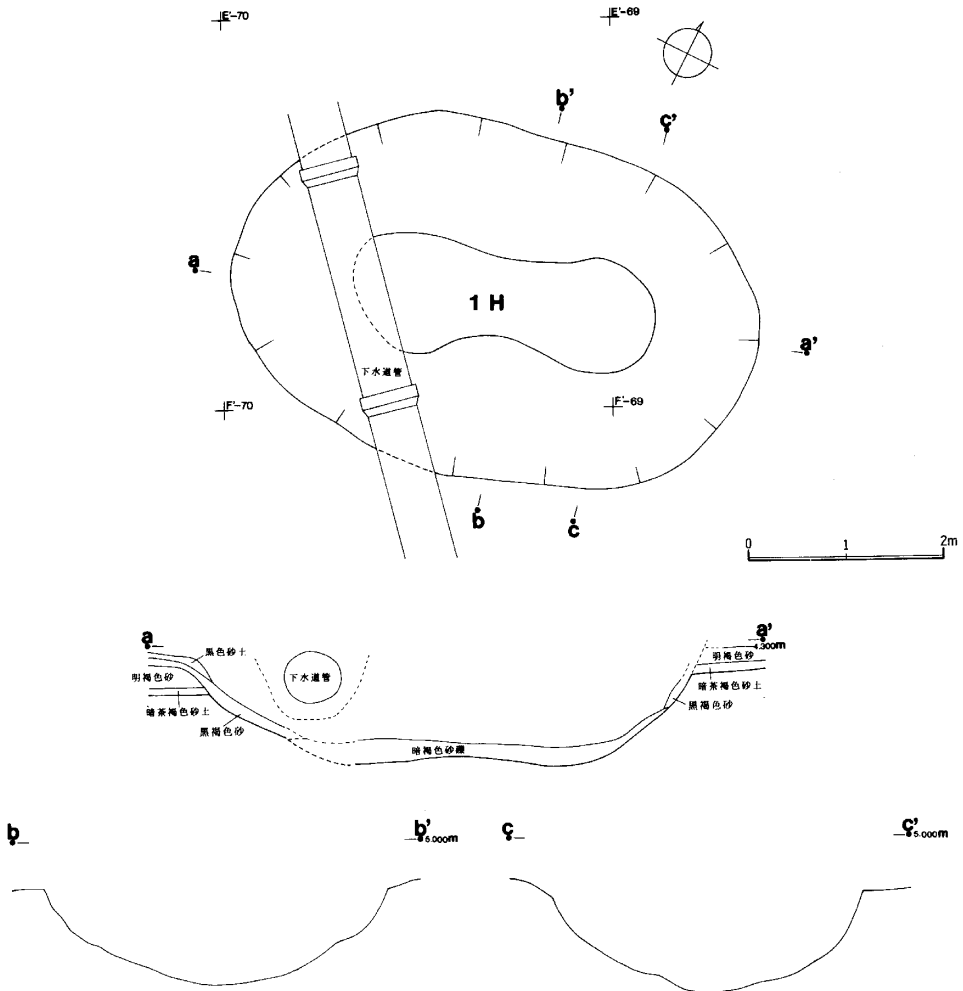
本豎穴はG'68、E'68グリッドに位置する。第VIII層を剝土した段階で落ち込みを確認したものである。南壁の一部が下水管理設により破壊を受けているものの全体の規模を確認することができた。規模は東西5.43m、南北3.60mの不整楕円形で北西壁隅はやや角張る特徴をもつ。埋土層の大半は1層の礫混じりの明褐色砂が堆積し、壁際から床面にかけて礫を多量に含む2層の暗褐色砂が薄く堆積し北筒式、押型文が包含される。1層の明褐色砂は河川氾濫による土砂が堆積したものであろう。床面は中央部が盛り上がり、壁際が沈む不安定なものである。壁高は確認面から約1.10mを計る。緩い立上りで、どちらかと言えば壁から床面にかけて丸みを持ち、南壁では若干のステージ状をみせる。床面からは炉跡、柱穴等は全く検出することができなかった。

遺 物 (第105図、第106図)

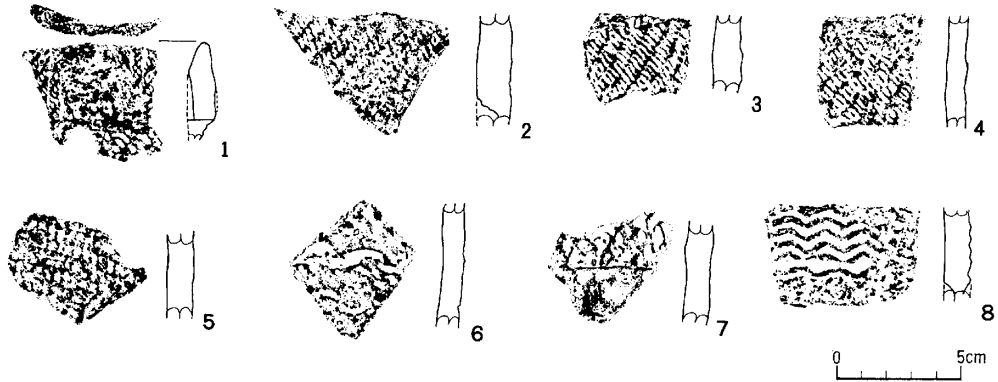
遺物のほとんどが床面上層の暗褐色砂からの出土である。第105図-1～4・6は胎土に植物繊維を含む。5は繊維を含まないもの。1の口縁部には刻線がある。トコロ5類であろう。7・

8は器面に山形押型文が施される。

第106図-1は石銚。2は石槍。3～5は両面加工ナイフで3はつまみをもつ。6・7は削器。8・9は搔器。10は撥状の磨製石斧。11は磨石。1～9は黒曜石。10は青色片岩製。11は砂岩。



第104図 第VIII層1号竖穴平面图



第105図 第VIII層1号竪穴埋土出土土器

小 括

本竪穴は長軸5.43m、短軸3.60mの不整楕円形を呈する。平面形態が不整形で内部にステージを有する例は北見市開成1遺跡、標茶町茅沼遺跡など各地の縄文中期の遺跡で報告されている。本竪穴も同種のものであろう。時期は床面出土土器から北筒式、トコロ6・5類頃と判断できる。

ピ ッ ト 1

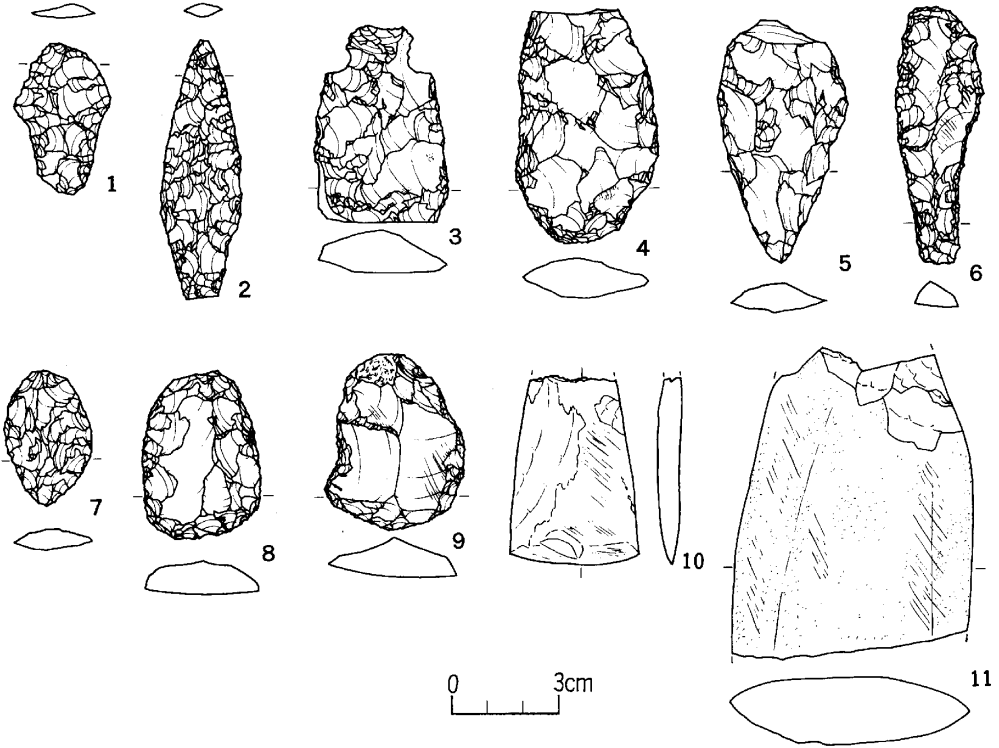
遺 構 (第107図)

本ピットは第VIII層上面の精査段階で発見した。第VIII層を切込んで構築されたものであるが埋土はサラサラした明褐色砂が堆積していたもので明確に識別することができた。規模は長軸約1.75m、短軸約0.65mの長方形を呈する。壁高は確認面である第VIII層上面から約19cmであり、極めて浅い。遺物の出土が無いいため詳細な時期は不明であるが本層に伴うものであろう。

ピ ッ ト 2

遺 構 (第107図)

本ピットもピット1と同じ状況で発見した。規模は長軸約1.60m、短軸約0.70mの長方形を呈する。壁高は確認面である第VIII層上面から約24cmであり、極めて浅い。埋土にはサラサラした明褐色砂が堆積する。遺物の出土が無いいため詳細な時期は不明であるが本層に伴うものであろう。



第106図 第VIII層1号竪穴埋土出土石器

ピット 3

遺 構 (第107図)

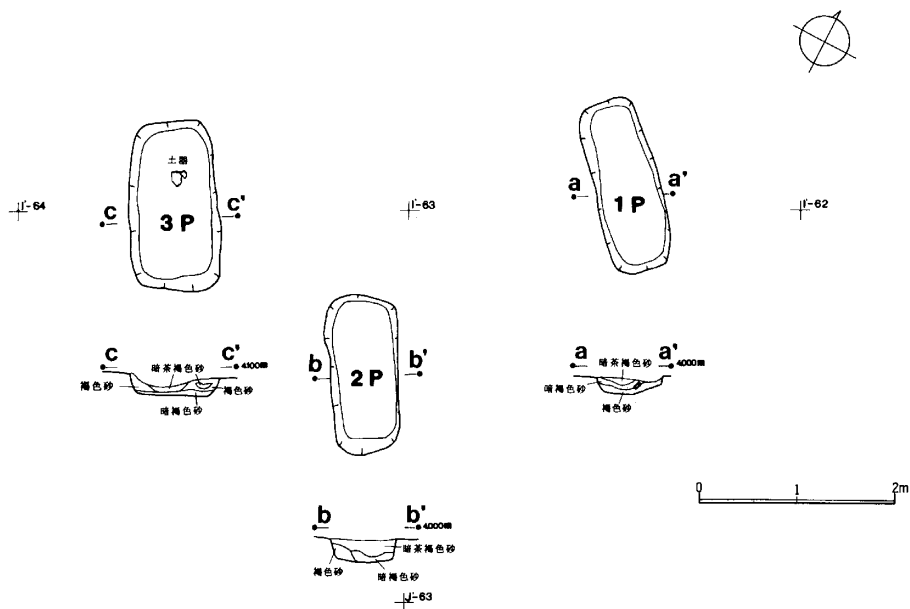
本ピットもピット1と同じ状況で発見した。規模は長軸約1.70m、短軸約0.90mの長方形を呈する。壁高は確認面である第VIII層上面から約20cmであり、極めて浅い。埋土にはサラサラした明褐色砂が堆積する。埋土からトコロ6類の土器片が2点出土している。

ピット1、ピット2、ピット3の3基は近接しており規模・形態・長軸方向も酷似している。この3基は本ピットの埋土出土土器に見られるトコロ6類の時期であろう。

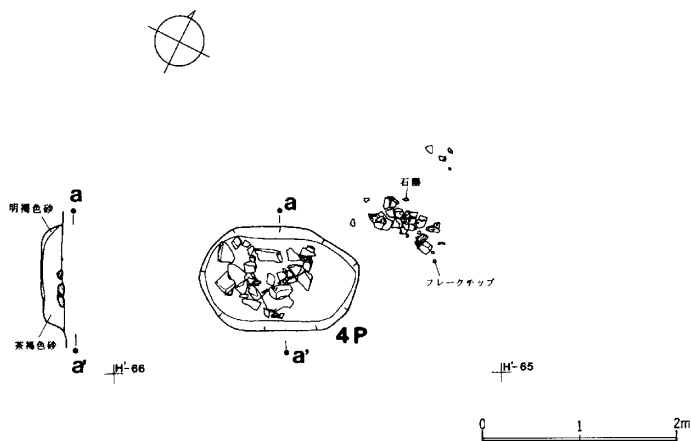
ピット 4

遺 構 (第108図)

本ピットは長軸1.60m、短軸1.05mの不整長方形を呈する。壙上面には大小39点に及ぶ角礫が集石されている。集石は火熱を受けず、配置のパターンも見られずピットに伴うものか不明である。ピット1からピット3と同じトコロ6類の時期であろう。



第107図 第VIII層ピット1・2・3平面図



第108図 第VIII層ピット4平面図

2 号 豎 穴

遺 構 (第109図、図版25-2)

本豎穴はG'81、H'82グリッドに位置する。埋土中には2枚の黒色砂が堆積しており、上層からは縄文後期の土器が出土している。間層を挟んだ下層の黒色砂層からはトコロ6類が出土。

豎穴の規模は長軸約4.90m、短軸約2.60mの不整長方形である。壁高は確認面から約30cm。地床炉は中央部より北東壁に寄り、さほど赤化していない。柱穴は中央部に5本、北壁に1本ある。いずれも直径約6～10cm、深さ5～9cmの小柱穴である。フレーク・チップは南壁際に集積される。遺物は図示していないが、床面からトコロ6類と思われる土器の小片が出土している。

南壁際には縄文後期のピット5が構築されている。

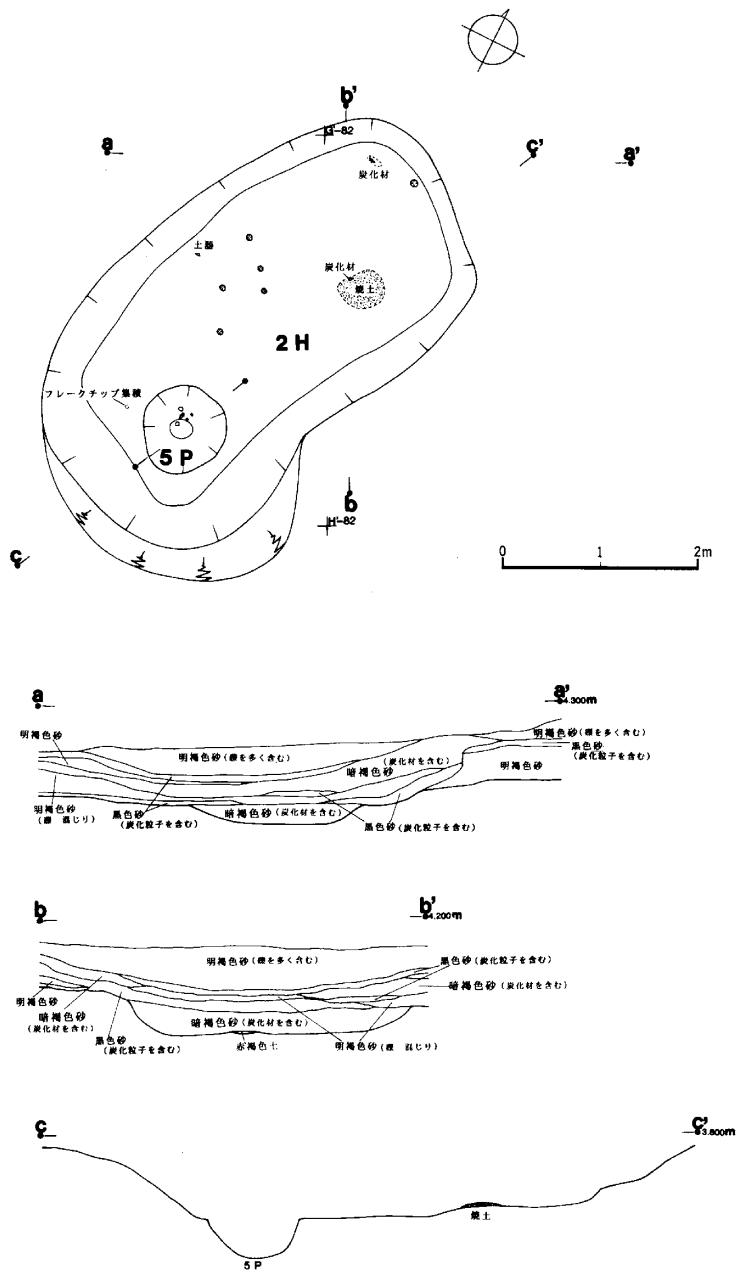
小 括

本豎穴は隅丸の不整長方形である。第VIIIb層を切り込んで構築されているため、これより新しいものであろう。床面からはトコロ6類と思われる土器小片が出土しており、この時期と考えられる。

ピ ッ ト 5

遺 構 (第109図、図版26-1)

本ピットは2号豎穴の南壁際に構築されている。規模は直径約0.80m程の円形で、底面から丸みをもって立ち上がる。床面近くから縄文後期土器片が出土。



第109図 第VIII層2号竪穴、ピット5平面図

ピット 6

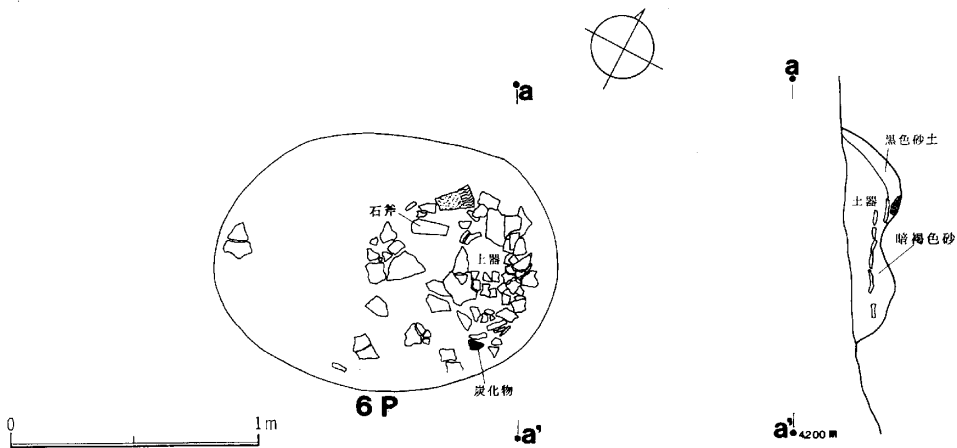
遺 構 (第110図)

本ピットはH'76グリッドに位置する。第VIII層の黒色土内に構築されているため上面で検出できず、第VIII層との切り合いもH'76、I'76グリッドのセクションラインに懸かったためかろうじて掘むことができた。底面は起伏があり、壁は緩く立ち上がる。規模は直径1m程の円形である。壁高は16~24cmである。土器は東壁寄りで、炭化粒を含んだ暗褐色砂層から広く散らばった状態で出土した。

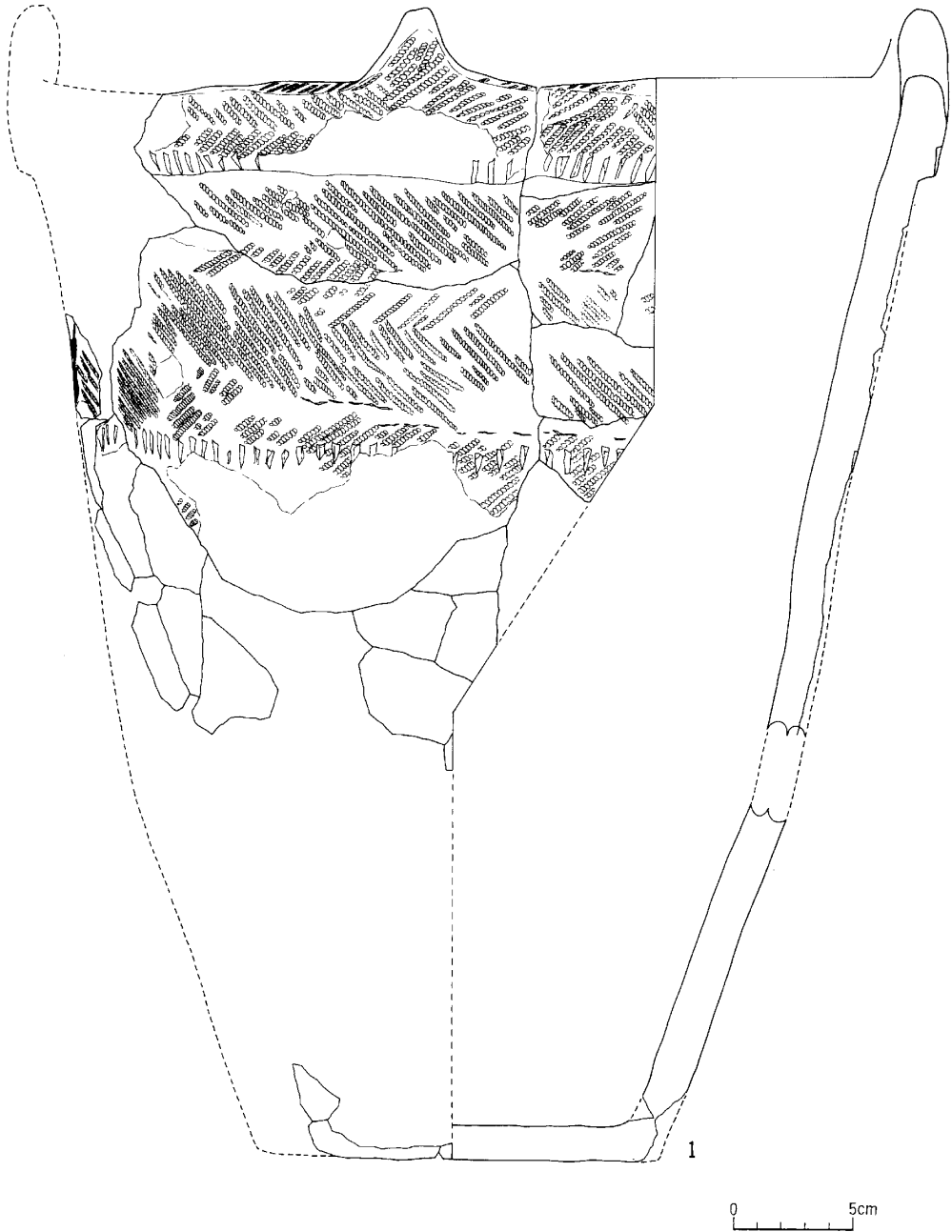
遺 物 (第111図、図版2-2)

この土器は口径40cm、器高48cmの大型土器である。器形は胴部が僅かに膨らむ深鉢で、口縁部に角状に尖った突起をもつ。残存するのは1個であるが、おそらく4個もつのであろう。幅4cmの隆帯上と胴中央部には細い円形竹管を下方から刺突する。器面は風化のため剥落するが撚りの小さい羽状縄文を地文としている。胎土は2~3mmの小砂利と砂を多量に含み、繊維は全く見られずどちらかと言うと押型文的である。

この種の土器の類例は無く時期は定かにできないが、VIII層を切り込んでいるため縄文中期トコロ六類以降で、後期に近いものかもしれない。石器は図示していないが磨製石斧が1本同一レベルから出土する。



第110図 第VIII層ピット6平面図



第111図 第Ⅷ層ピット6埋土出土土器

第VIII層石囲み炉群

遺 構 (第112図・113図、図版31-1)

石囲み炉は第VIII層を掘り下げた直後に検出した。G'67・68、H'67・68グリッドに位置する。石囲み炉の配置は規則性を有する。中央部に直径約1.2m程の大型の方形石囲み炉があり、その回りに直径0.70～0.90m程の小型石囲み炉が配置される。礫が無く炉跡だけのものも見受けられるが、小型石囲み炉は円形状に配列されている。炉の使用石材は砂岩製の角礫であり、円礫は用いられない。炉の焼土は赤化が著しく微細な骨片を含むものが多い。

中央の大型石囲み炉の東側には規模の小さい地床炉がある。地床炉と石囲み炉の時間関係は不明である。石囲み炉群の内部にはフレーク・チップの集積があり、南側には火熱を受けた円礫で構成される集石を検出している。これらは本炉群に伴うものと判断される。

小 括

中央に大型の方形石囲み炉を持ち、それを取り囲む様に小型の炉を円形に配置する方法は栄浦第一遺跡において検出している。栄浦第一遺跡のものは第IX層の押形文土器(常呂川河口押形文II群)が出土しており、本例はそれよりも新しい時期であることは層位的に確認された。本層からは第IX層とは形式の異なる第143図、第144図、第145図等に示す押形文土器(常呂川河口押形文I群)が出土しており、本遺構はこの時期のものと考えている。

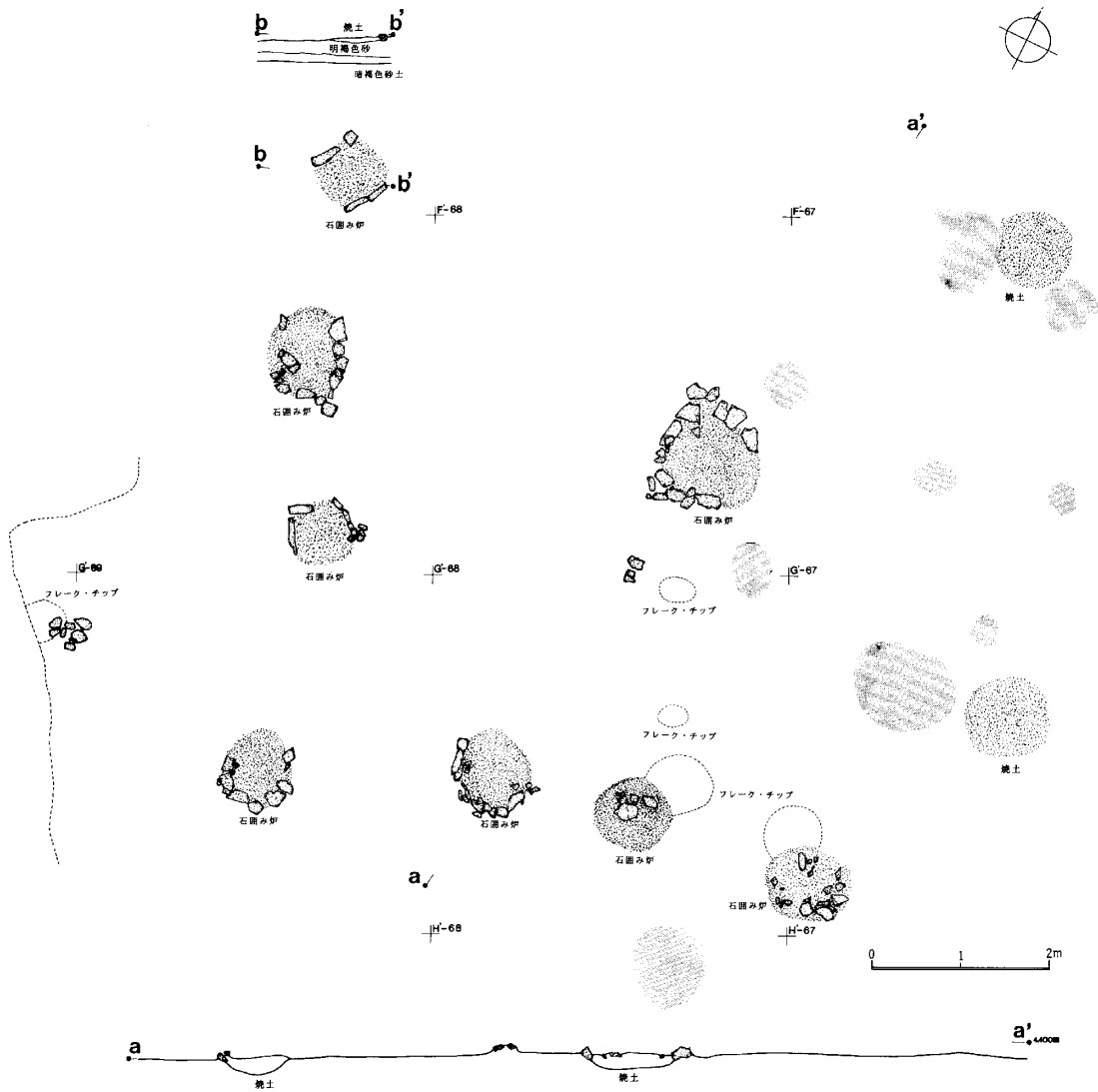
第VIII層出土遺物

遺 物 (第114図～第200図)

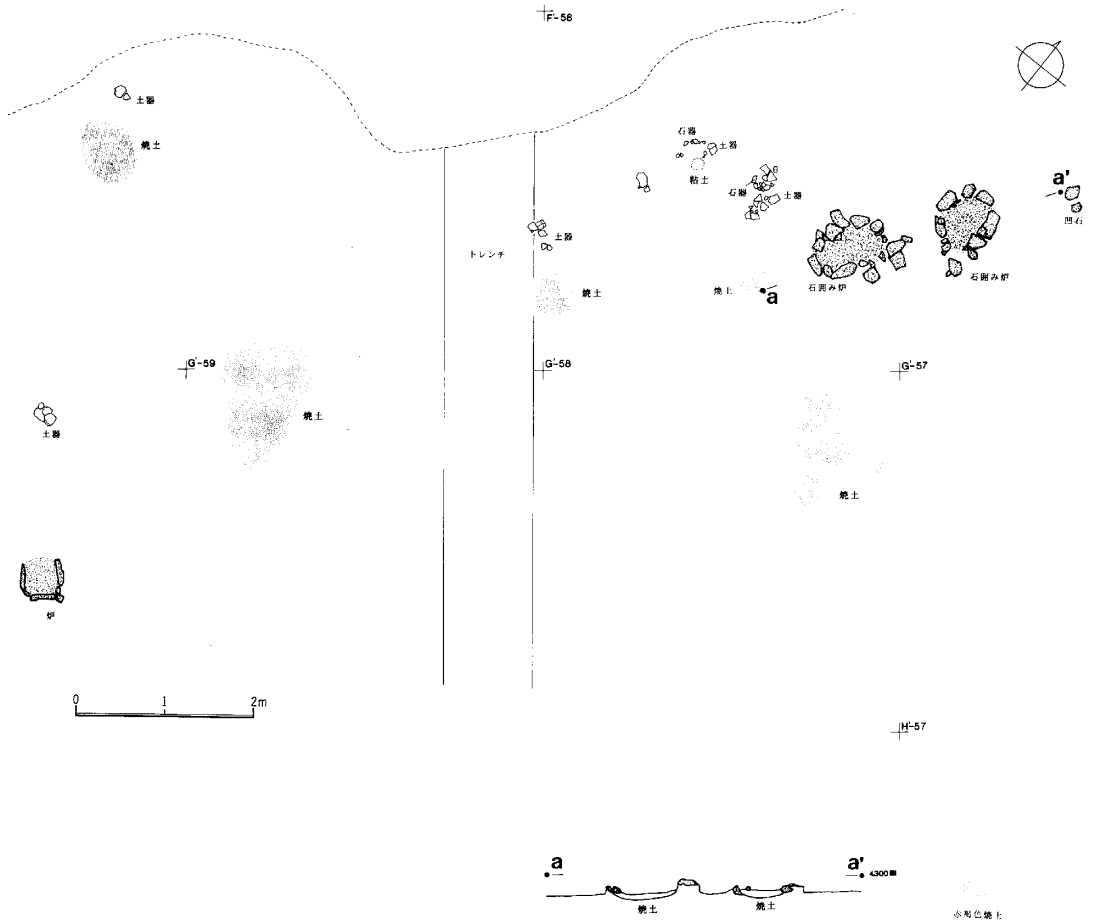
本層からは先に記述したとおり縄文中期の羅臼式、トコロ6類・5類、平底押型文、縄文前期の中野式、網文式、網走式、平底押型文に伴う櫛目文、シュブノツナイ式と1点のみであるが東釧路III式が出土するなど各期の遺物が見られる。この中で、明確にVIII層に伴うものはトコロ6類と平底押型文の二形式の土器である。羅臼式、トコロ5類を除く他のものはさらに下層に包含層をもつもので本層に混入されたものである。

第114図-1は胴下部が欠失するもののほぼ垂直に立ち上がった器形である。1条の隆帯は横冠し、LRの斜縄文は表面と内面に施される。

第115図-1は口径24cm。底部からほぼストレートに開く器形で、4個の山形小突起をもつ。2は肥厚帯下部の無文帯の上下を縄で区画し、円形刺突文を基に山形状の縄線文を施す。無文帯の下部は複節となる。3は山形小突起から縄を縦に押捺する。4～6は肥厚帯を持たないので、4は撚りの異なる複節の縄目を羽状に施したトコロ5類。5は直径0.5mmの細い円形文を内壁近くまで鋭く刺突する。2・3は羅臼式。



第112図 第Ⅷ層石囲み炉群(1)



第113図 第VIII層石囲み炉群(2)

第116図-1~4は平縁で器面に複節の縄文を施したものである。口縁部下に横撫でによる無文帯を作出することにより肥厚帯を分離し円形文、刺突文の施文効果をあげている。1の無文帯部の円形文は下方から突き上げたもので、その際の引き摺り痕が観察される。2は口径17cm。縦位の隆帯を2個もつ。

第117図・第118図・第119図・第120図は口縁部に縦位の沈線が施される。117図-1は口径24cm。かなり大型の筒形土器である。胴上部は撚りの異なる縄文を羽状に、胴下部は斜縄文だけ見られる。2の円形文は丸みを呈する。指頭によるものかもしれない。2・3は繊維を含む。6は底部。

第118図-1は口径23cm。7個の小突起をもつ。胎土は多量の砂粒を含む。2は肥厚帯をもたず、3・4は縦位の隆帯と幅広の肥厚帯がある。

第119図-1の口唇部は薄く尖がり気味である。4は口径約24cmで複数の突起をもつ。胎土に

繊維を僅かに含む。5は縦位の隆帯と幅広の肥厚帯があり、円形文は指頭状の丸みをもつ。器面には複節縄文も見られる。6は切り出し状の口縁部で円形文は指頭状である。

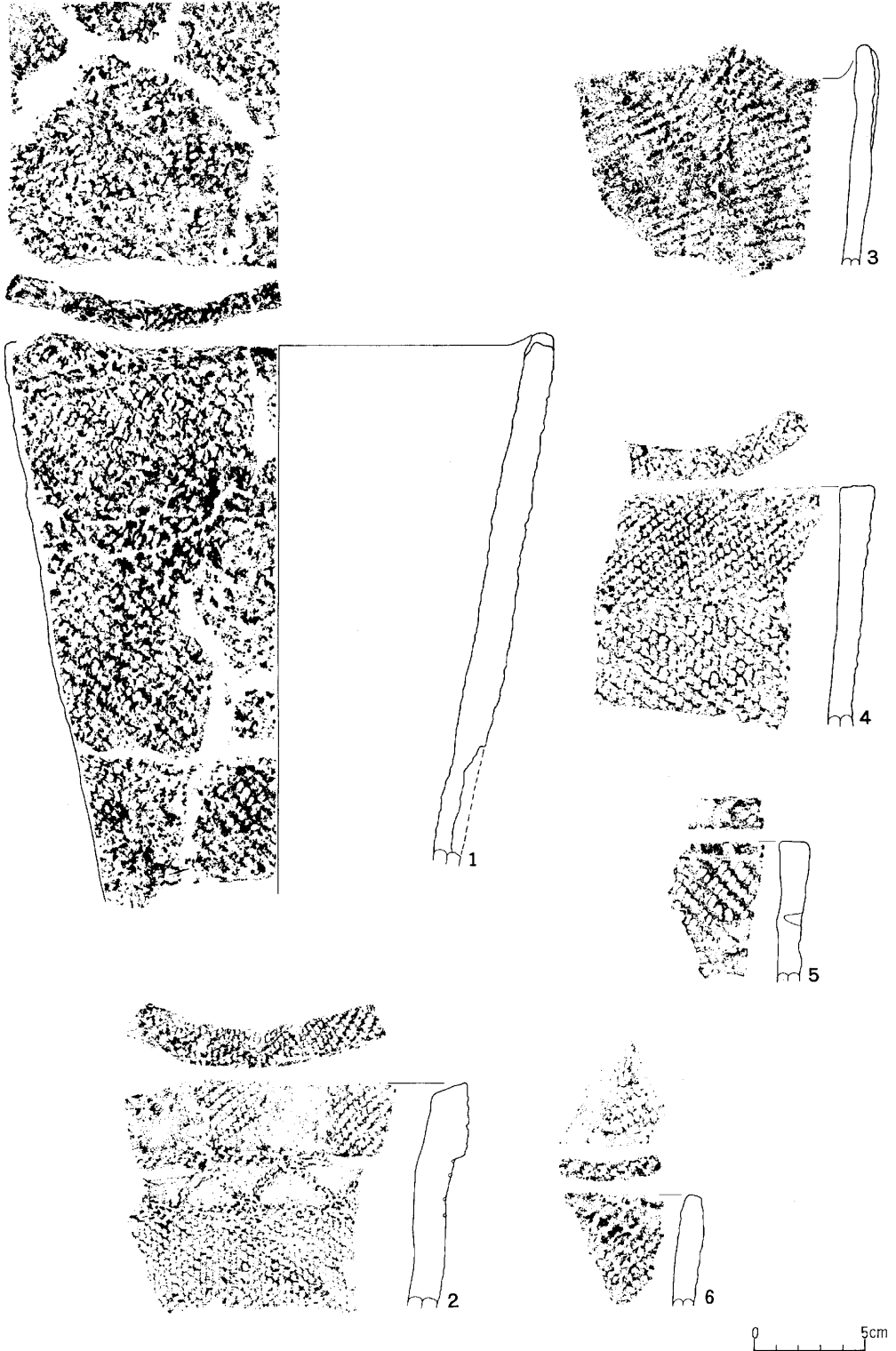
第120図-1は口径27cm。口唇部には推定14個の小突起をもち、深い刺突が加えられている。2・4の口縁部は肥厚帯を持たない。2は鋭い沈線が施され、4は器壁が薄い特徴を持つ。3・5～7は幅広の肥厚帯で3は繊維を含む。8の底部には押引文が施される。

第121図-1～3は幅広の肥厚帯があり1は丸み、2は角張った縦位の隆帯をもつ。トコロ5類。3は口径20cm。緩い弧状の肥厚帯には4個の隆帯をもち、縄が押捺された羅臼式。4は口径20cm、器高34cm。4個の小突起をもつ。円形文は口縁直下に施され繊維を含む。

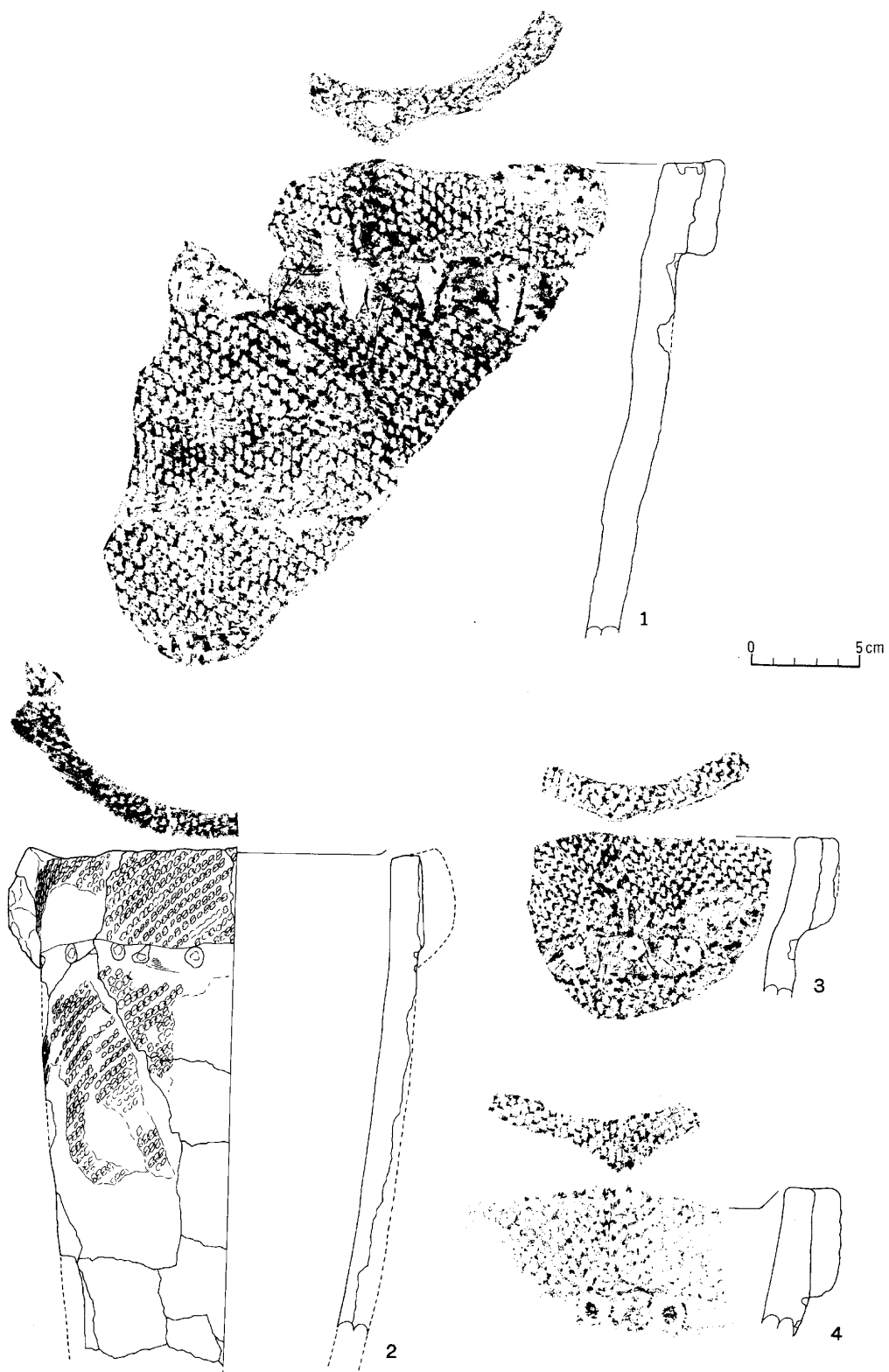
第122図-1・2は肥厚帯の下部に幅狭の無文帯がある。2は斜めの無文帯で、縦位の隆帯と複節縄文が施される。3は肥厚部を持たず無文帯が横撫でにより施される。4は口径17cm。器高31cm。口縁部は肥厚帯を持たない。胎土は砂粒を多量に含む。5・6は切り出し状の口縁部



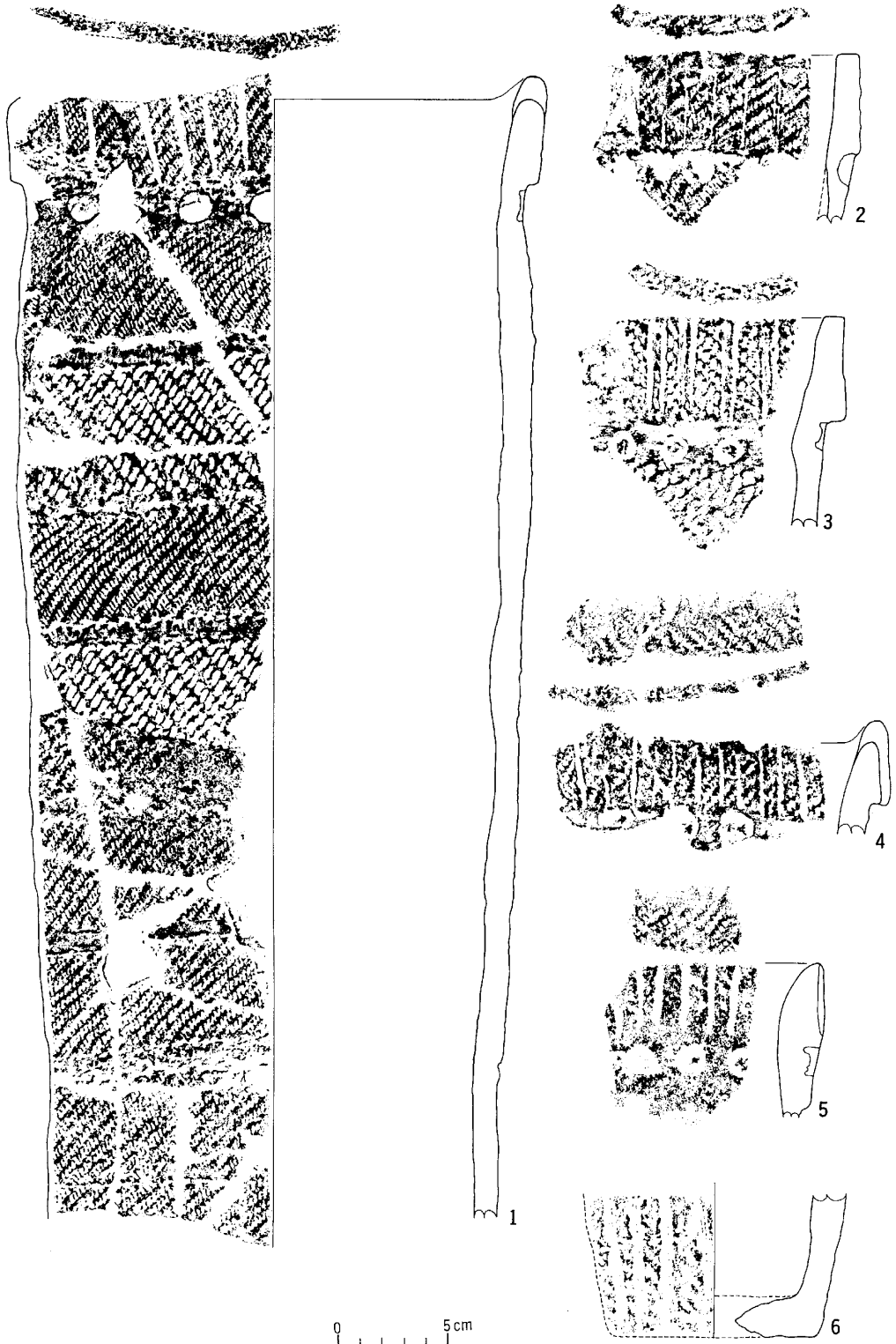
第114図 第八層出土土器(1)



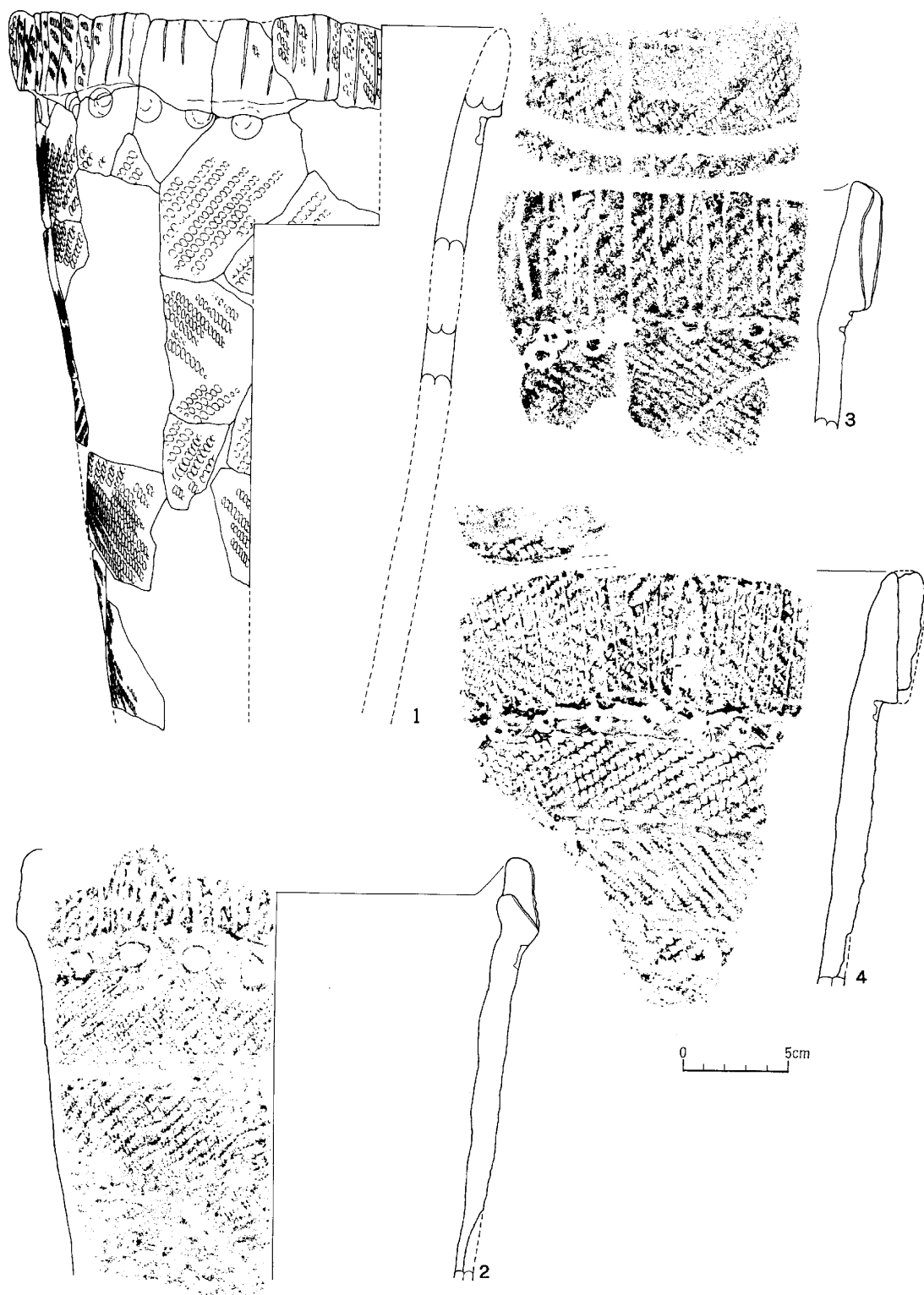
第115図 第VIII層出土土器（2）



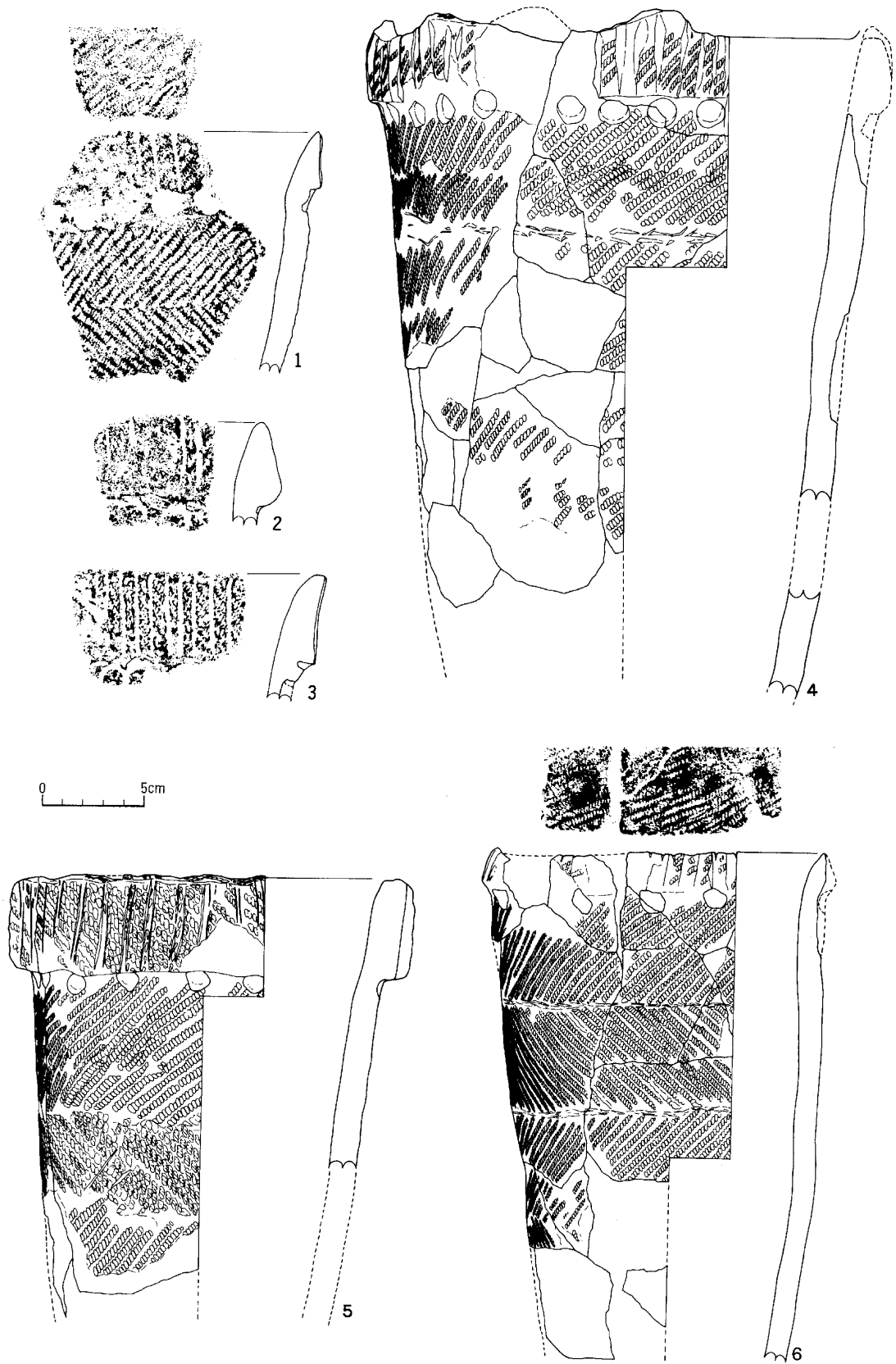
第116図 第八層出土土器(3)



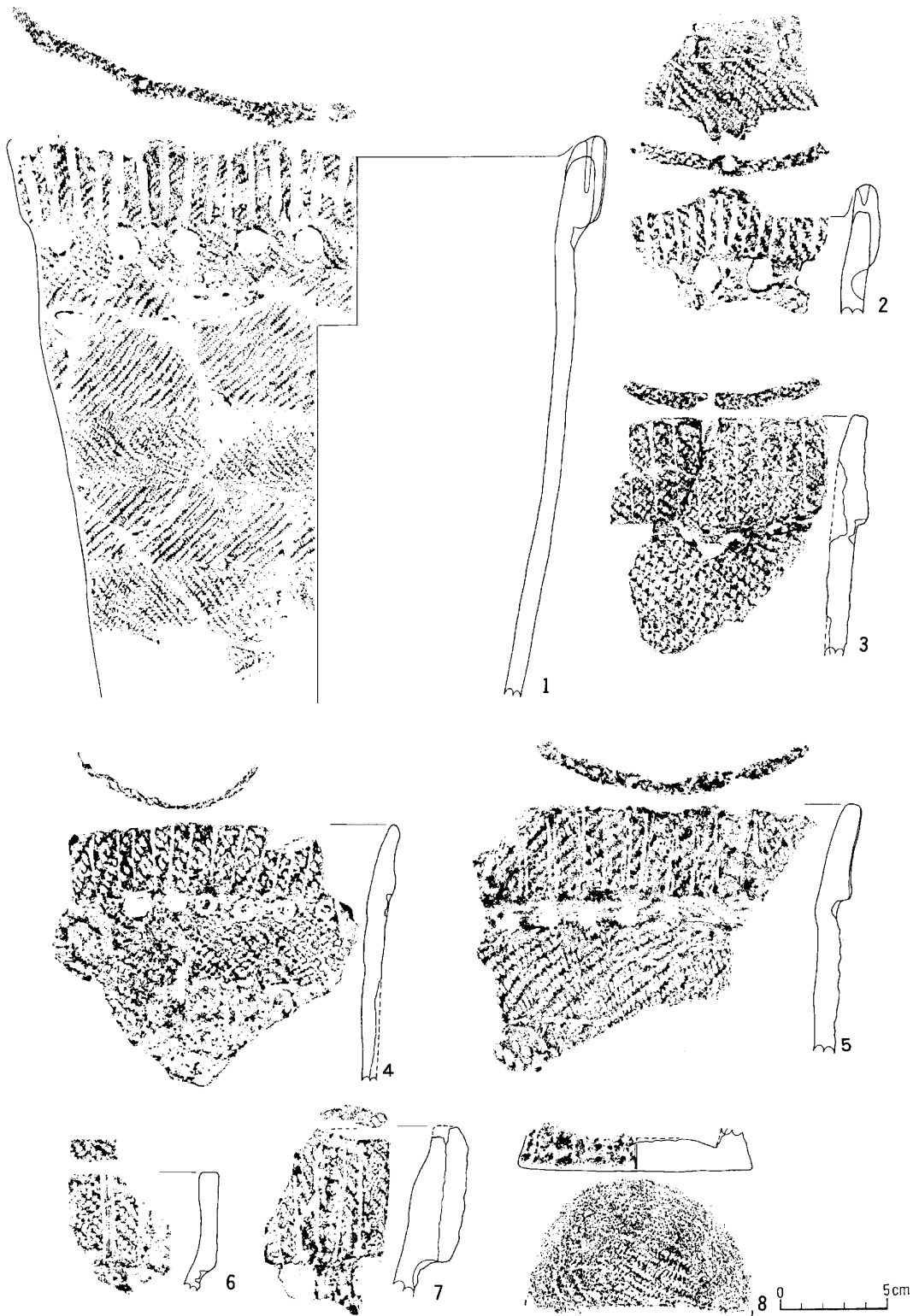
第117図 第VIII層出土土器(4)



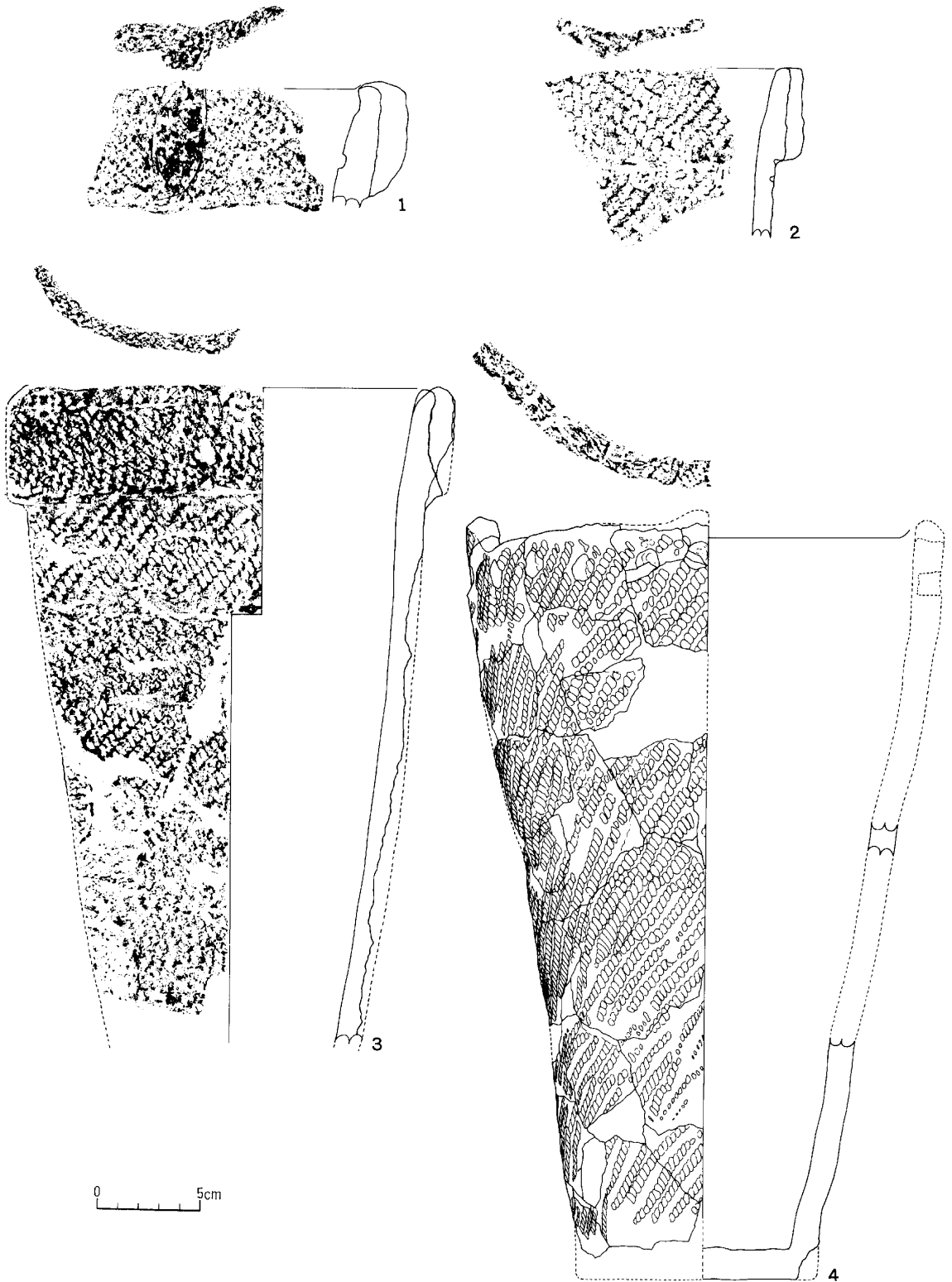
第118図 第Ⅷ層出土土器(5)



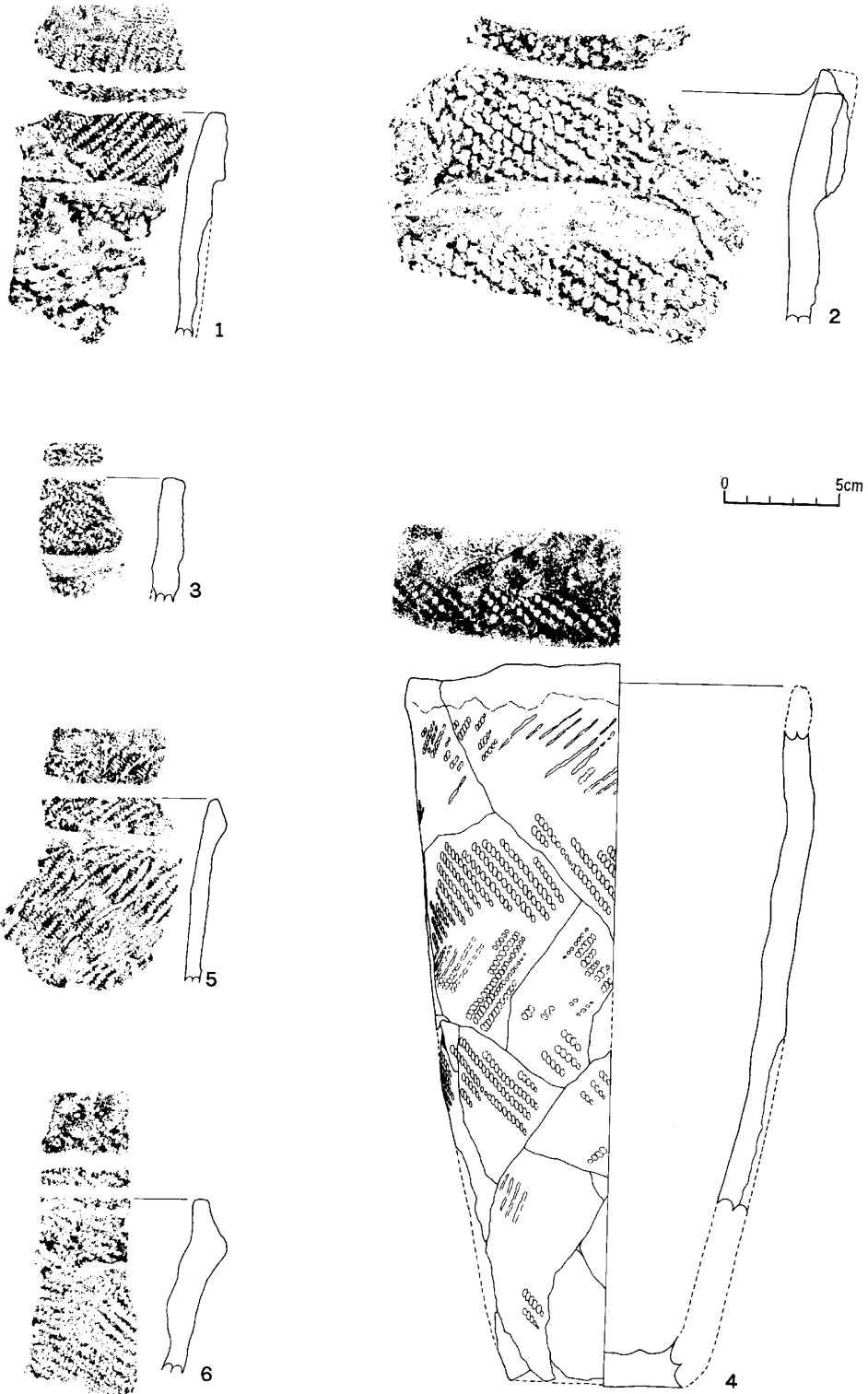
第119图 第八层出土土器(6)



第120圖 第八層出土土器（7）



第121図 第VIII層出土土器（8）



第122図 第Ⅶ層出土土器(9)

で、4・6の口唇部は平坦である。3・5・6は繊維を含むが他は含まない。1・2・4はトコロ五類であろう。

第123図-1～3は胎土に繊維を含まない。1・2は口縁直下に円形文を施す。トコロ6類であろう。4は口径19cm。頸部はくびれ、張出した4個の突起が付けられる。羽状縄文を地文とする。

第124図-1～5は胎土に繊維を含み、切り出し状の口縁部に円形文が施されたトコロ6類土器。1は口径18cm。8個の小突起をもつ。2・3は特に切り出しの張出しが強いもので2は口径17cm、器高23cm。7個の小突起をもつ。円形文は指頭状の丸みをもつ。3は口径22cm。円形文の間隔は短い。1・4・5の円形文は中空の施文具を用いている。

第125図-1～3も切り出し状の口縁部と円形文のあるトコロ6類であるが、切り出しの幅は比較的狭い。1は口径22cm。器高39cm。8個の小突起をもち、羽縄縄文が施される。指頭状の円形文である。3は複数の張り出した突起をもつ。

第126図-1～5もトコロ6類。3は複数の突起をもつ。

第127図はトコロ6類。1は口径15cm、器高22cm。5個の小突起をもつ。2は口径21cm、器高29cm。数個の小突起をもつ。3は口径12cm、器高24cm。底部から垂直に立ち上がった器形である。口唇部は尖がり、横位の隆帯がある。外に張り出した底部には沈線が施される。4と第123図・第124図は明瞭な肥厚を持たず、口唇部は角形状を呈する。口唇部には三角状の刺突、突起下部では円形文が垂下する。

第128図-1の口縁部は強く外反し、裏面に刺突がある。2は口径11cm。揚げ底気味の張り出した底部。3は口径13cm。4は口径18cm。5・7の口縁部は無文地となり5は浅い円形文。

第129図は幅の狭い切り出し状の口縁部で、1・4・6の円形文は指頭状の丸みをもつ。

第130図-1は口径24cm。平坦な口唇部の大半は刻みが入るものの、一部は押引状となり、10個の小突起が配される。肥厚帯の押引は二段に及ぶ。各種の文様施文は丁寧で焼成も良い。2の内側には弧状の刺突が一行巡る。3の口縁部は切り出し状と言うよりは三角形を呈し、肉厚である。最上部の円形文は刺突、下部は指頭状の丸みをもつ。1～3はトコロ6類。

第131図-1～4の口縁部も切り出し状と言うよりは三角形を呈する。4点とも山形小突起をもつ。2を除き結節文が施される。

第132図-1・2は切り出し状の口縁部、口唇部に押引文が施される。1は口径28cm。小突起部から断面三角形の隆帯が1本垂下する。2は口径16cm。

第133図-1～5は切り出し状の口縁部をもつ。1～3は強く張り出した縦位の隆帯をもち、1・2には押引文が施される。2の口唇部も押引文で胴部には円形文が多用される。4～6の口唇部には鋭い角度からの刺突が施される。1～6とも胎土に繊維を含む。

第134図-1は口径18.5cm。複数の小突起をもつ様である。切り出し状の口縁部には篋状施文具による2列の刺突がある。捺糸文を地文に小突起からは「∧」字形に刺突が施される。2は

口縁部に山形突起をもつ。口唇部と隆帯部に半截状、突起下部に三角状の刺突が施される。3～5は間伸びした薄手の口縁部に刺突が施される。3・4は同一個体で貫通した吊り耳状の縦位の隆帯と3列の「C」字形の刺突がある。6・7は肥厚部に円形刺突があるもので、6は平坦な口唇部に急斜な角度からの刺突が加わる。8の器壁は肉厚で、胎土は砂粒を含む押型文的である。口唇部と口縁下に横位の撚糸文が施される。

第135図－1～4切り出し状の口縁部をもち、1～3の口唇部は尖る。1は口径26cmを計る大型の筒形土器。7個の突起をもち、やや伸びた切り出し状部に押引文が施される。大ききの割には器壁は薄い。2は幅の異なる2種類の施文具、3は篋状の施文具で押引きされ、4は三ヶ月状の刺突が施される。これらはトコロ6類より古手であろう。5は横走する撚糸文が施される。胎土に繊維を含まない。どちらかと言えば押型文的な胎土である。

第136図－1～9は切り出し状の口縁部で、1～3・5は押引状の施文がなされる。1は小形の突起をもち、口唇部は刺突される。2・3の口唇部は押引される。2は丸みのある胴部であろう。4の口唇部は細い施文具を垂直に刺突する。5・6は小突起下部に強く張り出した円形状の突起が特徴的である。6は口唇部、口縁部とも刺突される。7は指頭状の円形文の上下に三ヶ月状の刺突がある。8は幅広の口唇部に大きな突起をもち、急斜角度から刺突が施される。9の口唇部は刺突され、山形突起の裏面には「×」字状の刻線が見られる。

第137図－1～7は切り出し状の口縁部に円形文と押引文が施される。1は口径18cm。口縁部には孤線状、胴部は篋状の押引がなされる。8はやや丸みのある口唇部で刺突が施される。

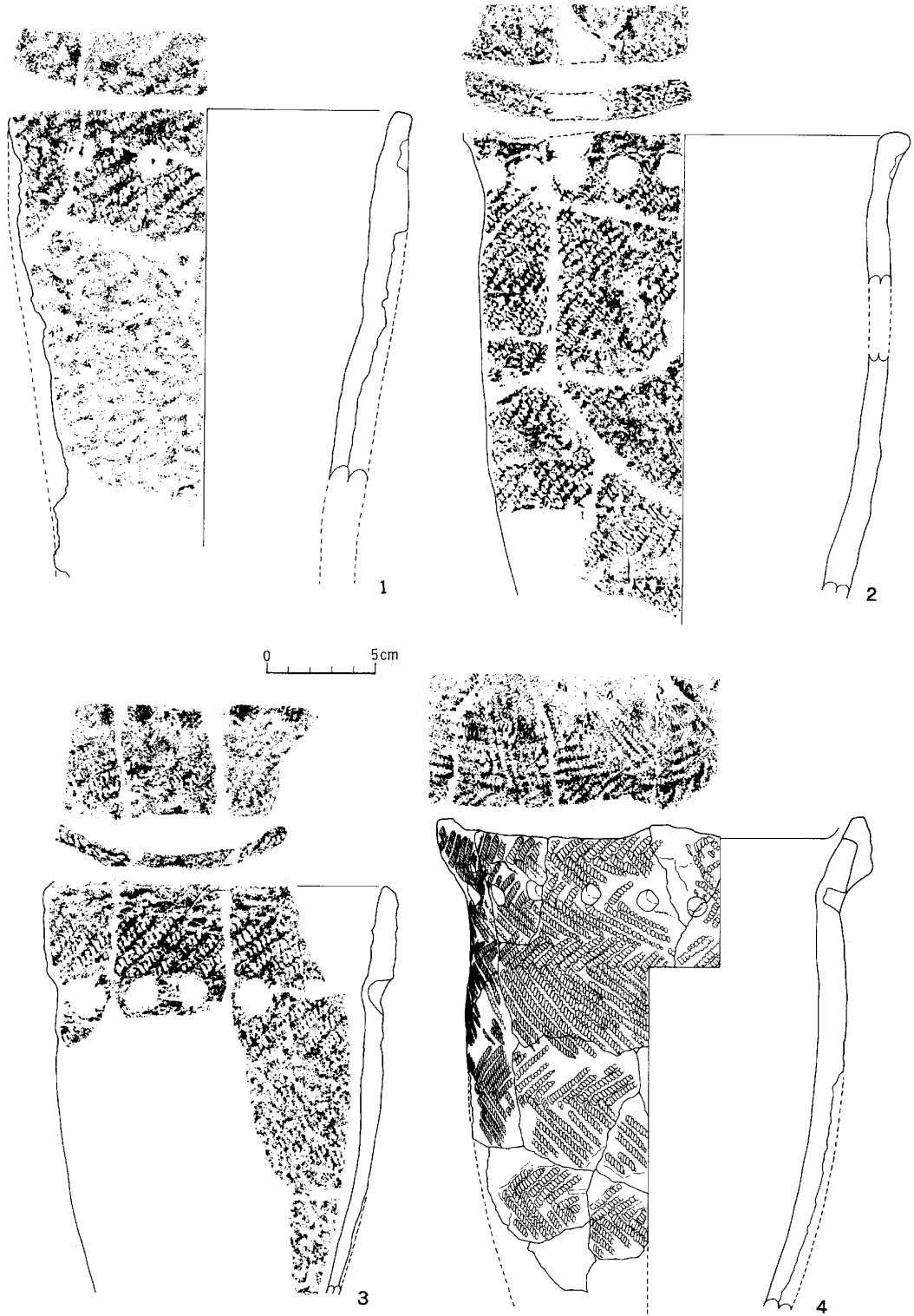
9は口径19cm。角形の口縁部には幅の狭い押引きがなされ、平坦な口唇部には刺突と押引文が施される。10は口径約22cm。やや間伸びした口縁部に3列の押引文と2列の円形文がある。口唇部では緩い山形状口縁を境に右側が篋、左側が三角状施文具による刺突が施される。

第138図－1～4は胎土に繊維を含み、切り出し状の口縁部に押引文と円形文が施される。1の口唇部は斜位からの刺突があり、緩い突起部には円形刺突が施される。2は極めて小さな突起と縦位の隆帯があり、口縁部と並行して篋状の刺突がある。2・4の口唇部には緩い角度からの刺突、5の口唇部には半截状の刺突が加えられる。外に張り出した小突起の下部には3本の刺突列が垂下する。

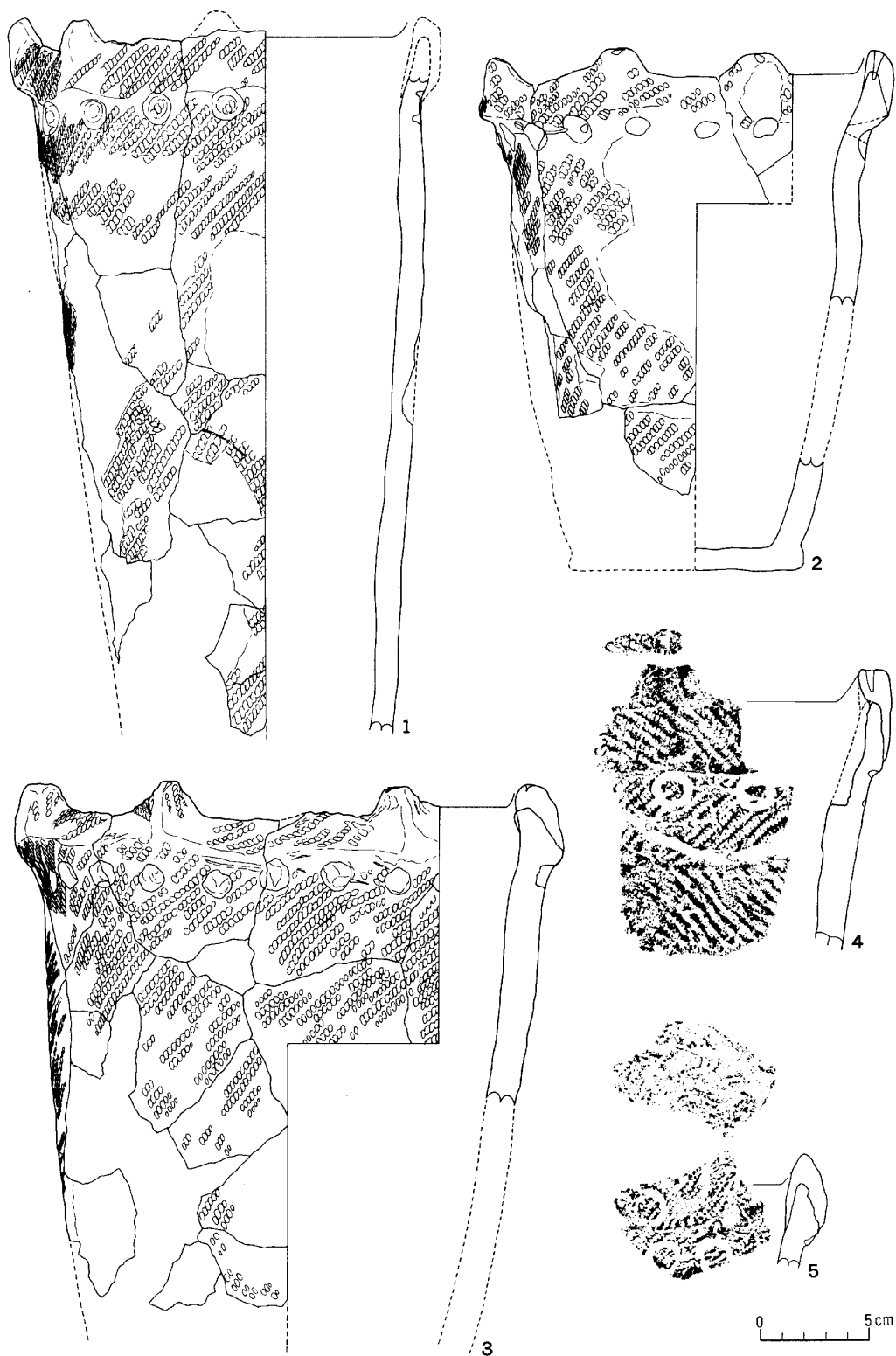
第139図は底部から口縁部にかけてほぼストレートに開く1～3・6、口縁下部で僅かに外反する4・5・7～11がある。1は丸みをもった口唇部で口縁下に円形文、2・4・6～11は口縁最上部に押引文と円形文が施される。9は押引文が垂下する。3・5は刺突文が施される。

第140図－1～4は口縁の最上部に隆帯が巡るもの。1は口径14cm。口縁直下の横位の隆帯上を半截状施文具による刺突が連続する。2・3は縦位の短い隆帯が加わる。4は丸みのある小突起と刺突を有するが円形文は無い。5は横位の隆帯を意識した丸みをもった口縁部。6～10は三ヶ月状刺突文が施される。11は連続した押引文、12は「C」字状の刺突が連続する。

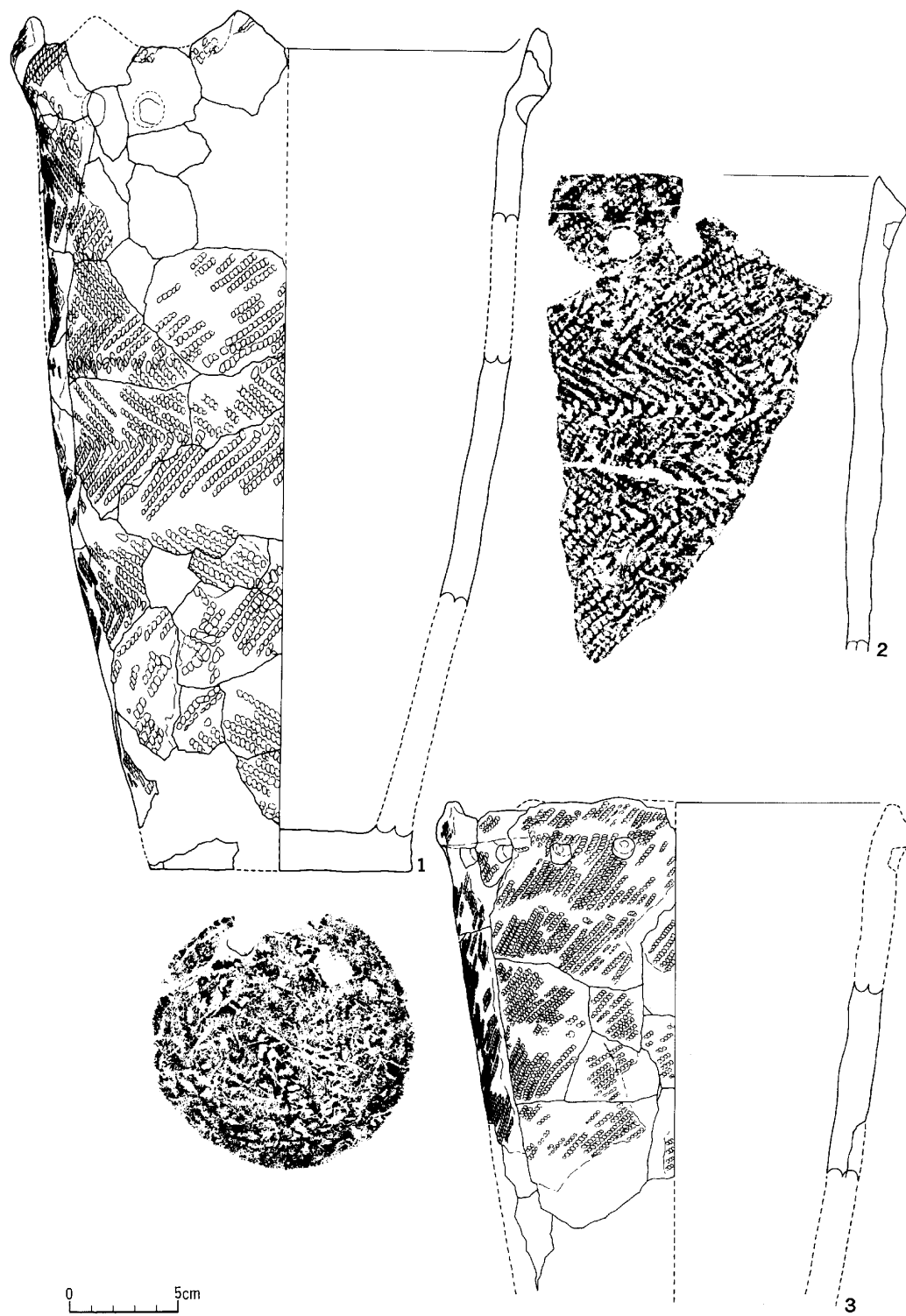
第141図－1～10は口縁部が5に示す様に強く外反する例もあるが、多くは極めて緩い。9・



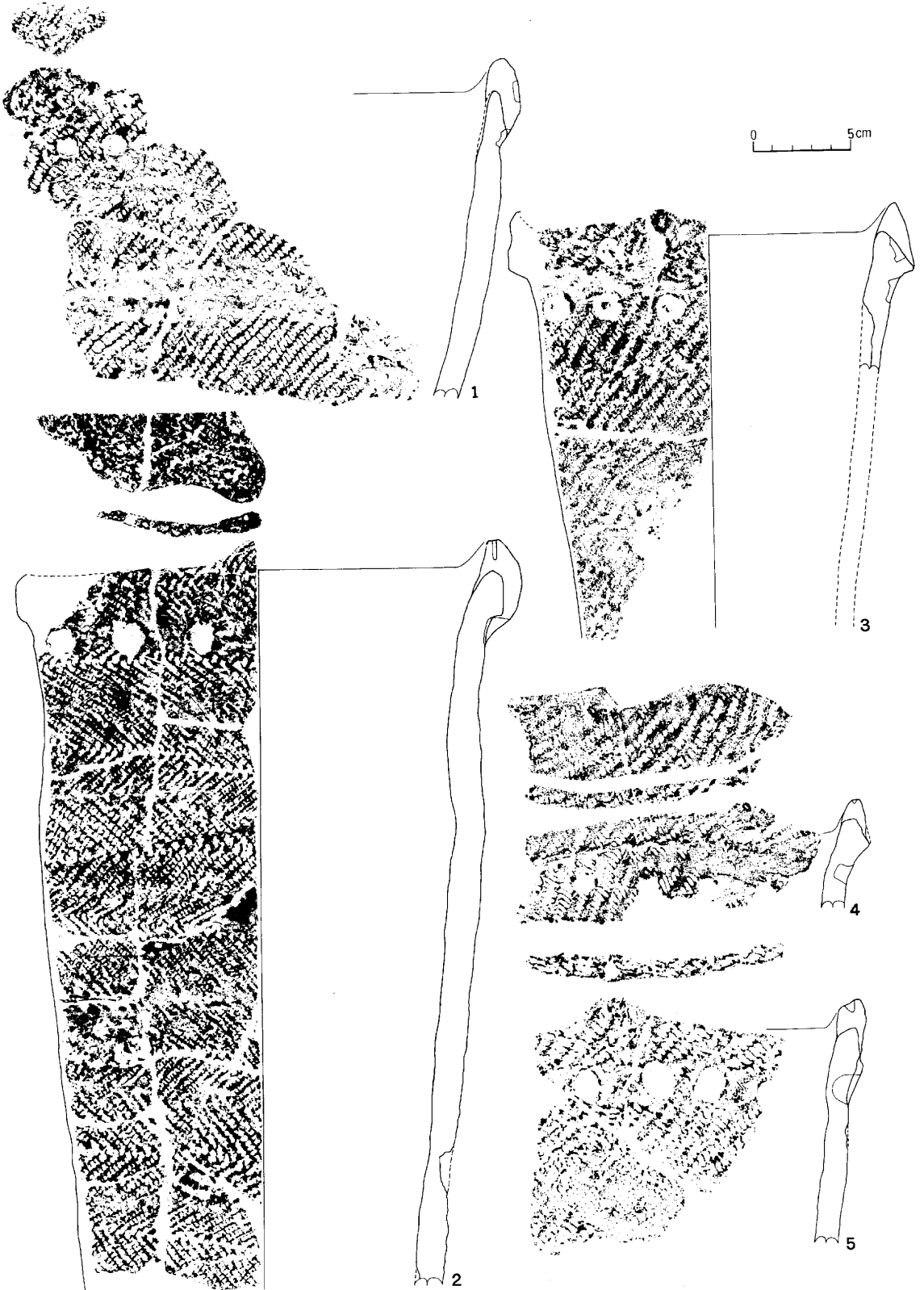
第123図 第VIII層出土土器 (10)



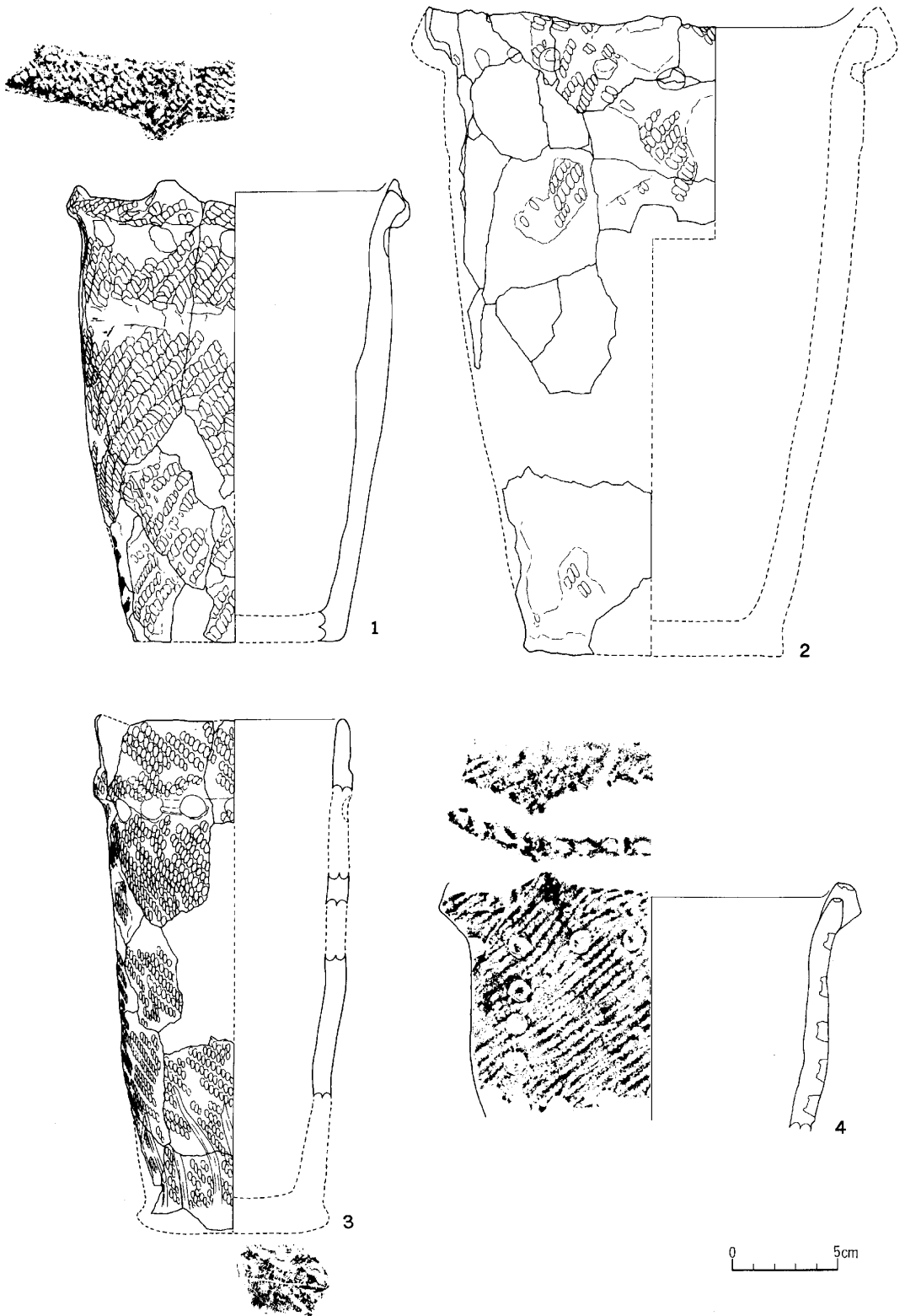
第124図 第Ⅶ層出土土器 (11)



第125図 第八層出土土器 (12)



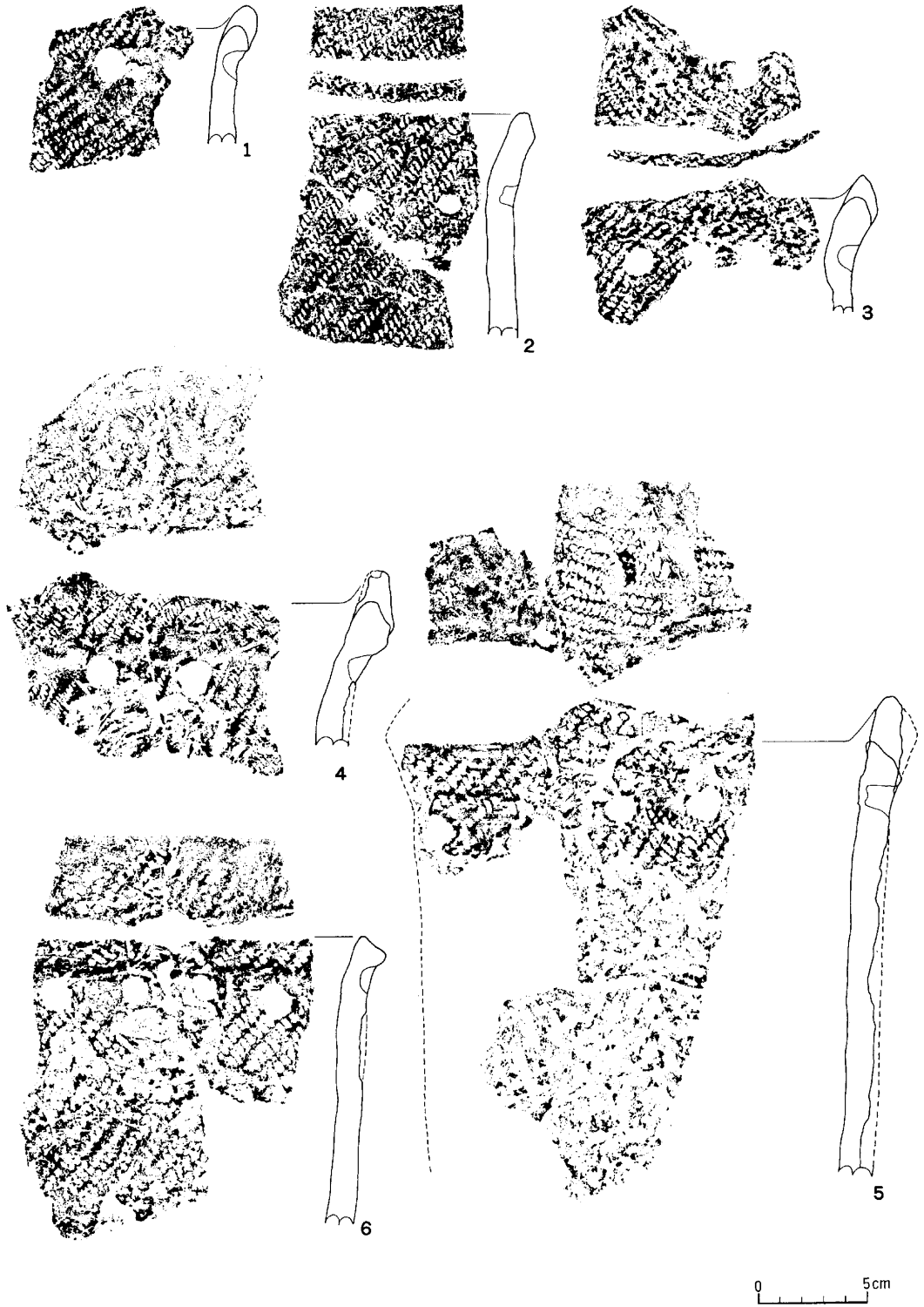
第126図 第八層出土土器 (13)



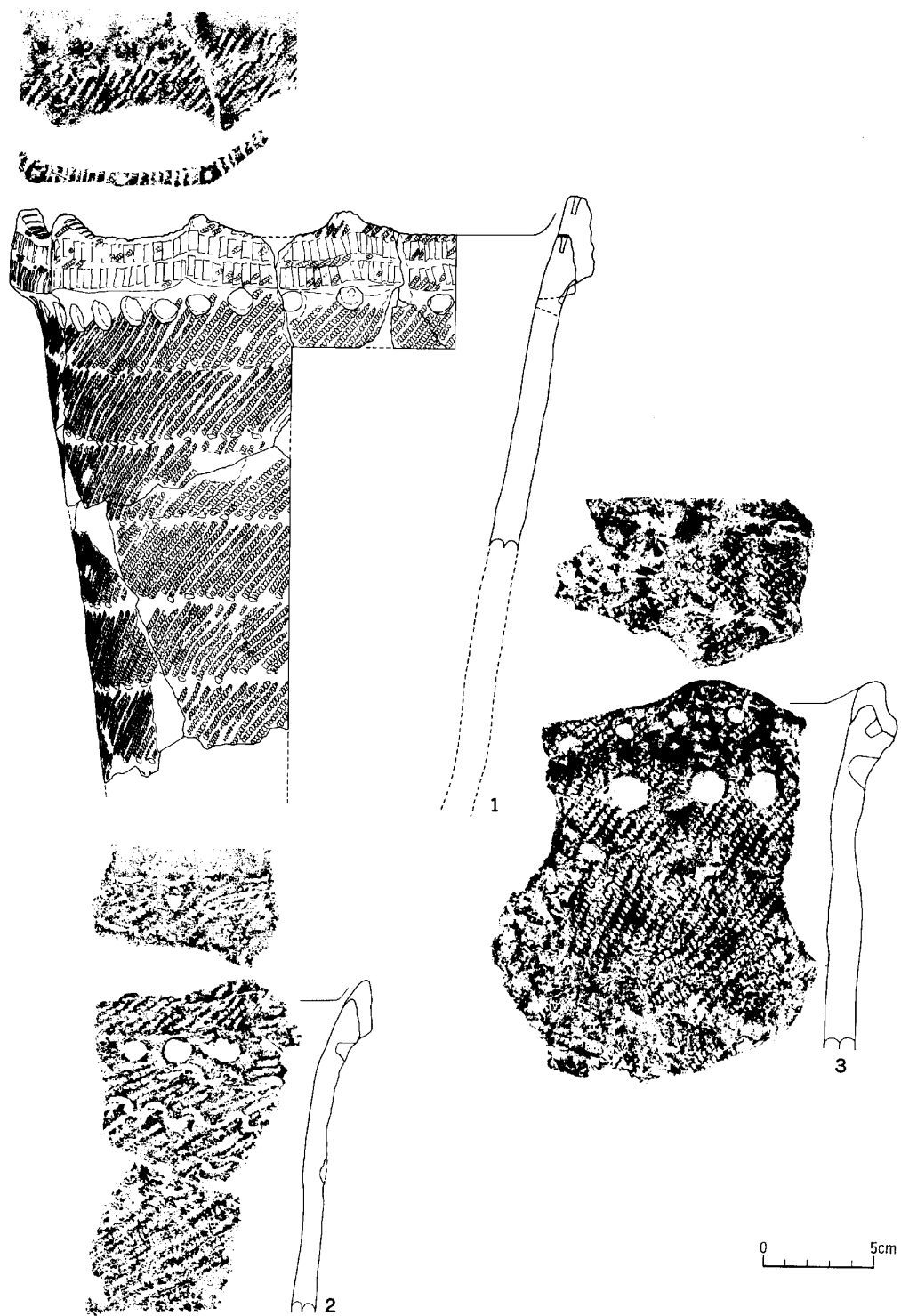
第127図 第VIII層出土土器 (14)



第128図 第Ⅶ層出土土器 (15)



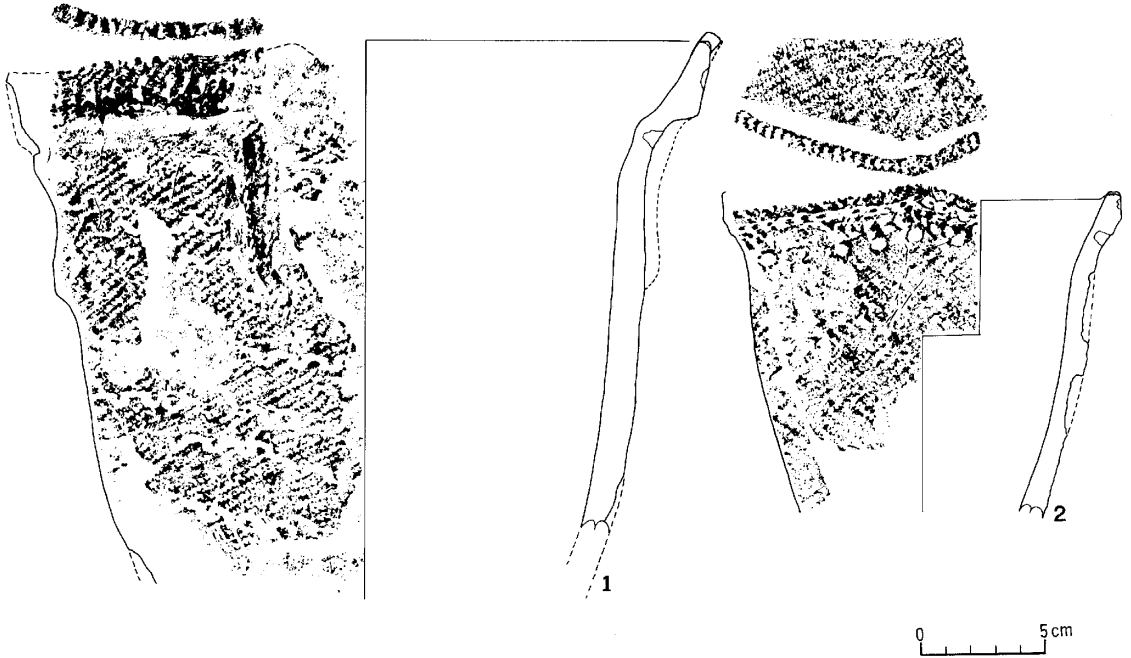
第129図 第VIII層出土土器 (16)



第130図 第八層出土土器 (17)



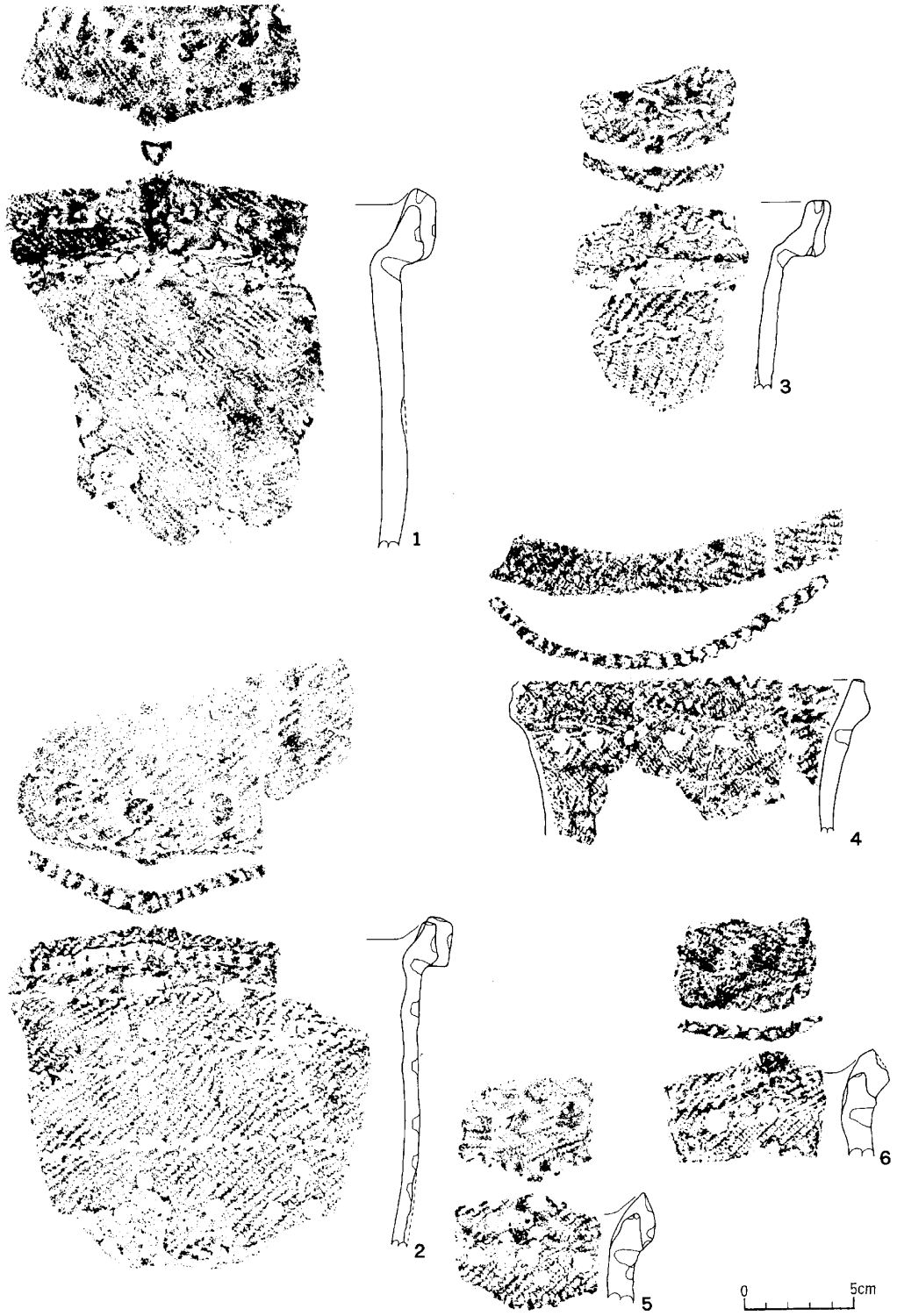
第131図 第VIII層出土土器 (18)



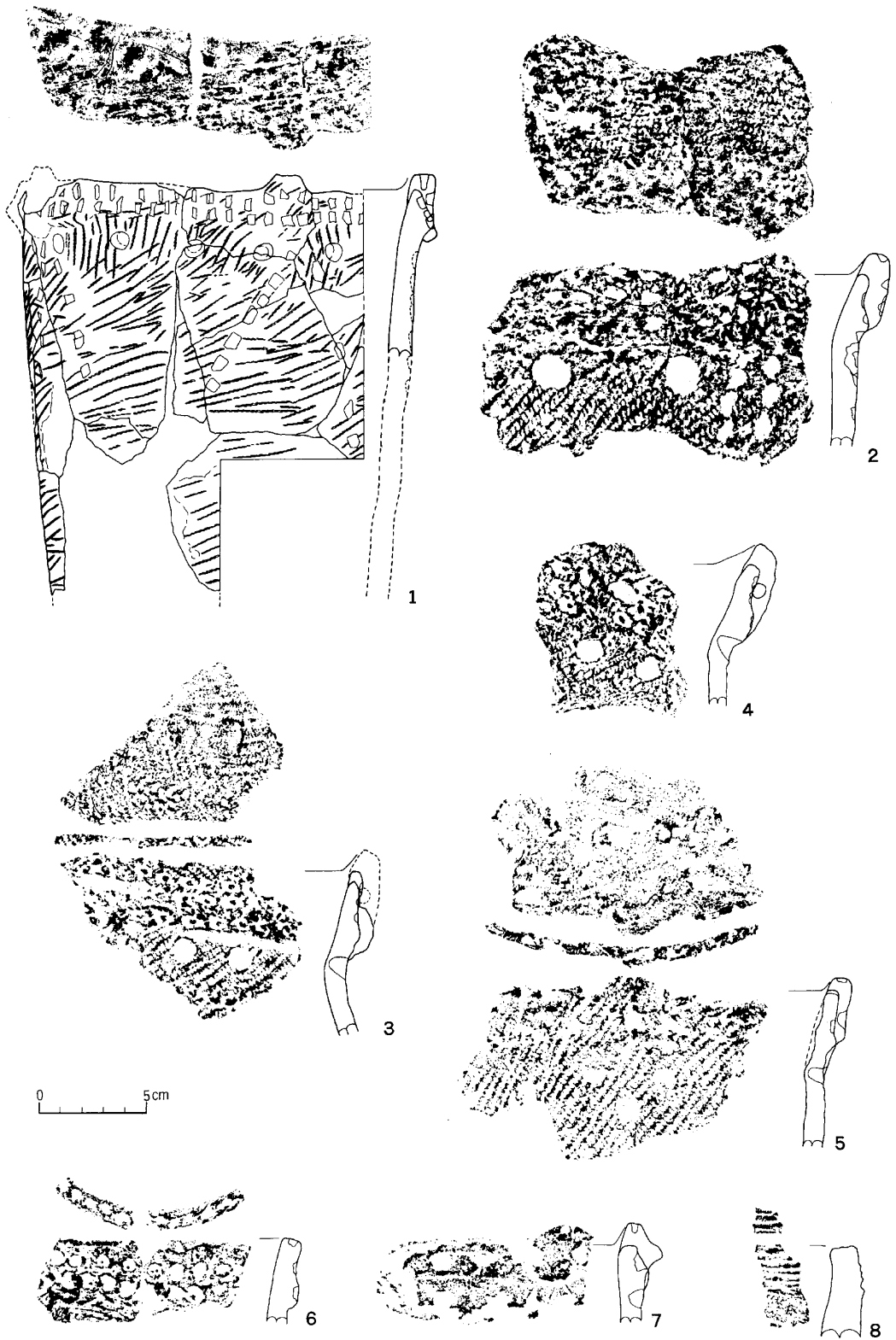
第132図 第Ⅷ層出土土器 (19)

10の様に垂直に立ち上がるものもあり、円形文が施される。口唇部は平坦で刺突が施されものが多い。地文には羽状縄文もある。いずれも胎土に繊維を含むもので(古)トコロ6類とした。第Xc層出土の土器と同一形式のものと考えられる。1は口径約21cm。小さな山形小突起をもち、口唇部には三角形の刺突が加えられる。2も山形小突起をもち、口唇部には篋状の施文具を緩い角度で刺突している。3は半截状・4は篋状の施文具を用いて口唇部にほぼ垂直に近い角度で刺突が加えられる。5は口径19cm。口縁部は比較的強く外反する。2個の山形小突起が残るもので、当初は4個あったのであろう。山形突起の間は小波状になる。口唇部は三角形の刺突が急斜な角度で施される。6・7も山形小突起で口唇部は縄文が施される。8は篋状、9・10は中空状の円形施文具を利用したもので、波状口縁となる。

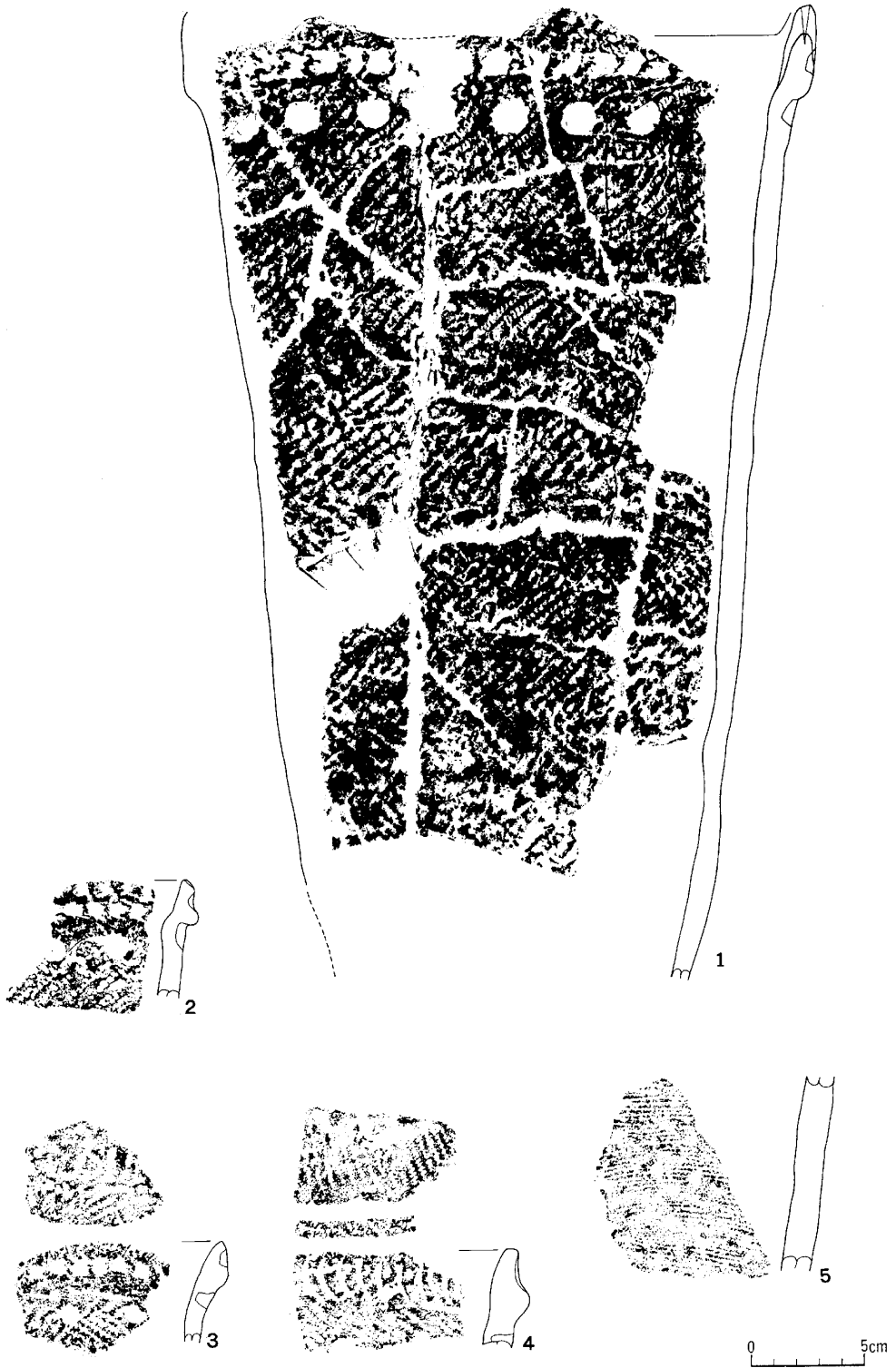
第142図-1は口縁下部に横位の太い鎖状隆帯を施した縄文前期末葉の網走式。2・3は同網文式。4・5は同中野式。6は器面が風化するものの組紐文が施された縄文早期東釧路Ⅲ式。



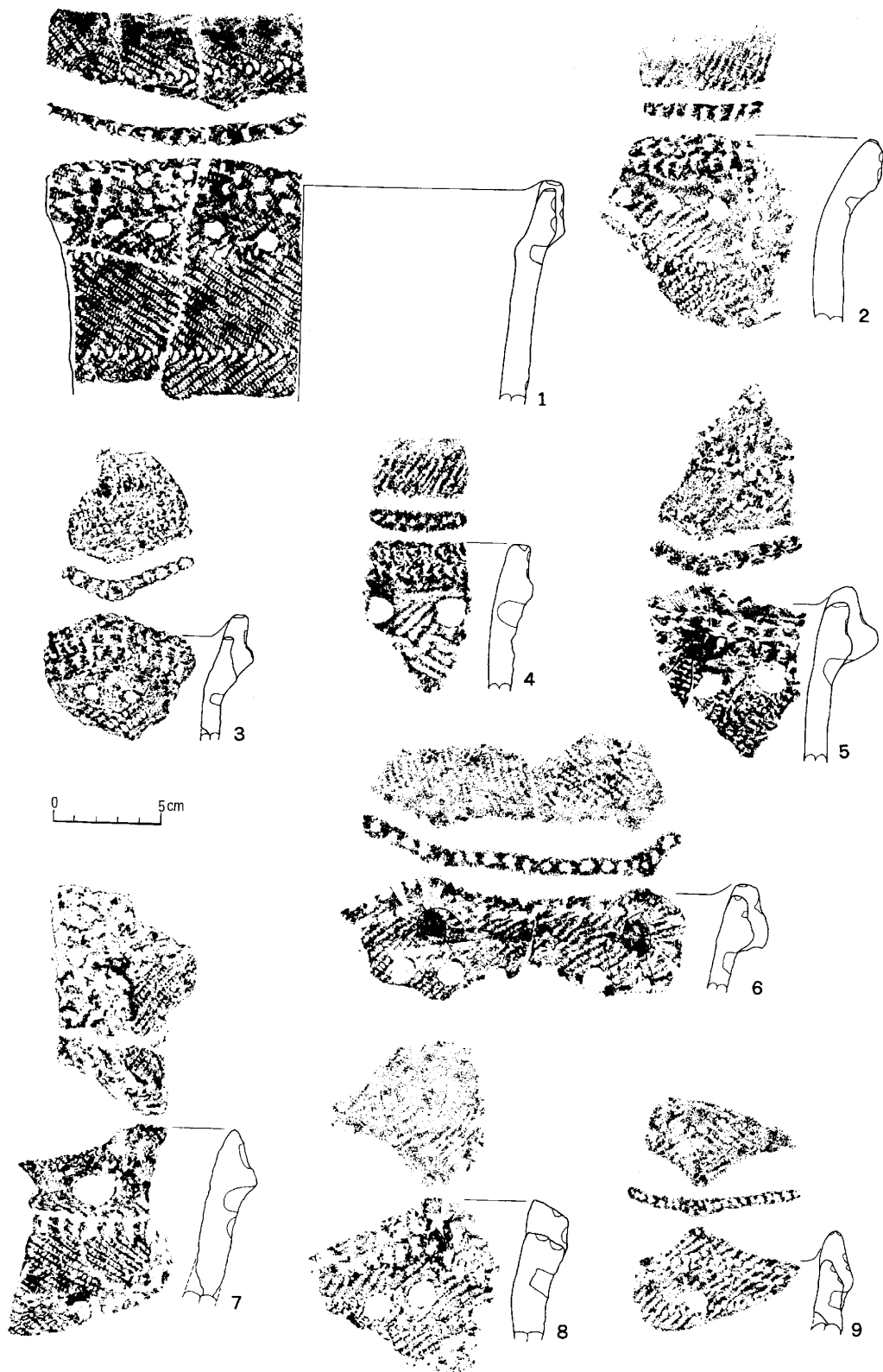
第133図 第八層出土土器 (20)



第134図 第Ⅷ層出土土器 (21)



第135図 第VIII層出土土器 (22)



第136图 第八層出土土器 (23)



第137図 第八層出土土器 (24)



第138図 第Ⅷ層出土土器 (25)



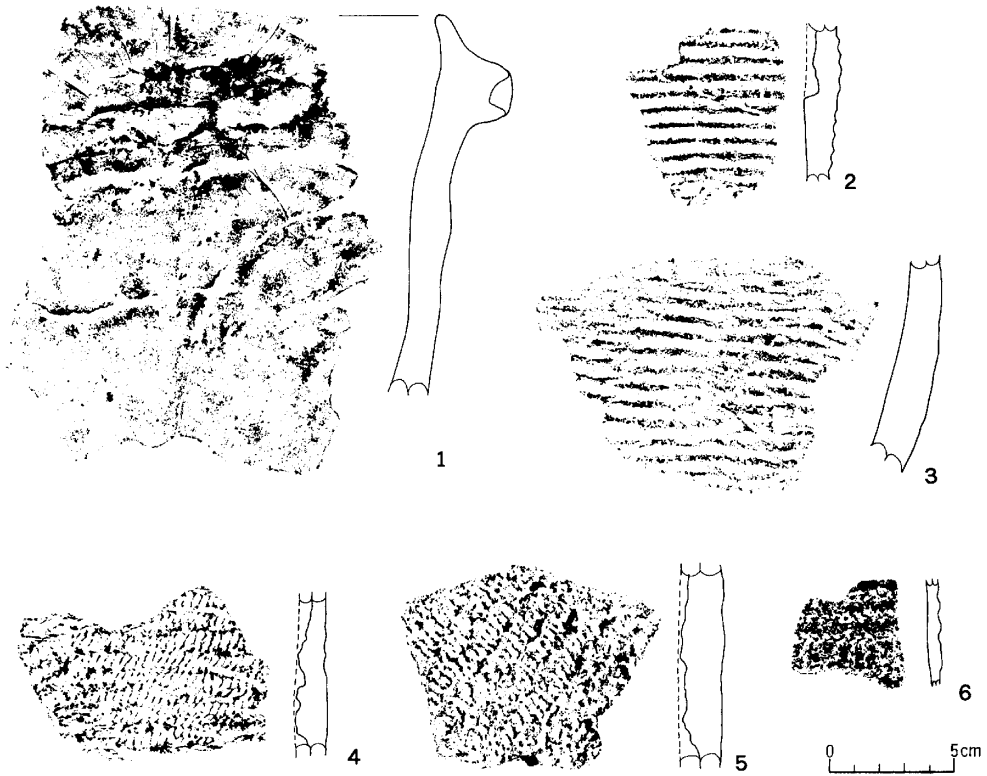
第139図 第VIII層出土土器 (26)



第140図 第八層出土土器 (27)



第141図 第八層出土土器 (28)



第142図 第八層出土土器 (29)

縄文中期平底押型文（仮称常呂川河口平底押型文I群）

本群の特徴は口縁部の刺突と隆帯及び口唇部にある。口縁部は切り出し状の肥厚帯をもつものが最も多く、僅かに角形を呈するものがある。山形小突起から縦位の細い隆帯が派生する。押型文原体は格子目と矢羽根を交互に施文し複段効果を表すものもあるが、大半は単一の原体施文であり、第XII層出土の平底押型文（II群）に見られる各種の組み合わせた原体をもつ例は稀である。胎土には植物繊維を含まない。

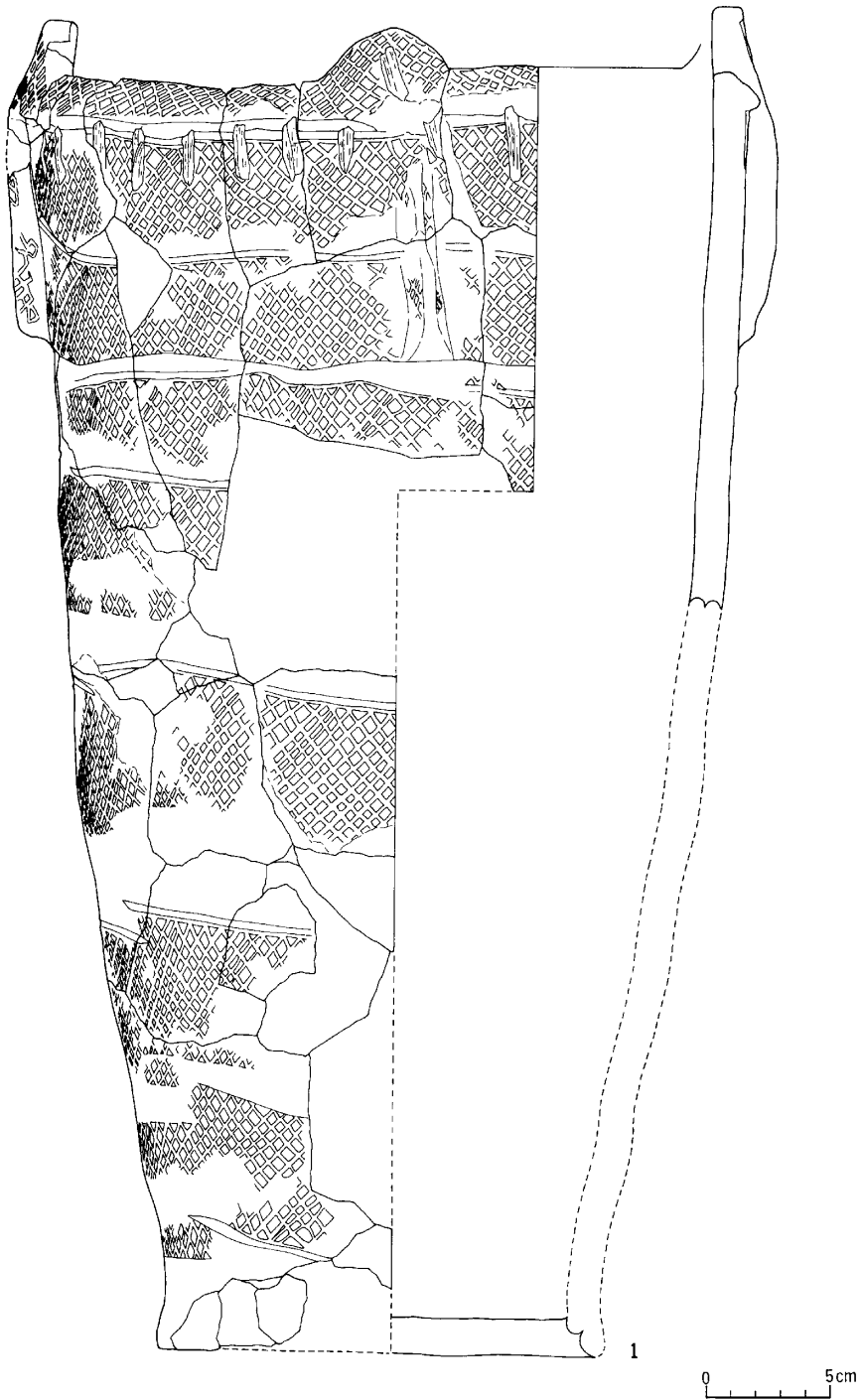
第VIII層から出土した平底押型文土器の中には明らかに第XII層出土と類似したものがある。両層出土の土器と接合する例もあり、本来は第XII層のものが土砂の堆積過程で上層である第VIII層に押し上げられたものと理解される。

第143図-1（図版31-2）は器高53cm、口径31cmの本土器群最大の大きさをもつ。底部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がった筒形土器である。口縁部には丸みをもった半円状の突起を4個もつ。突起からは幅1.5cmの隆帯が垂下する。肥厚帯の下部には刺突列が巡る。刺突は筥状施文具を用いたもので下方から施される。

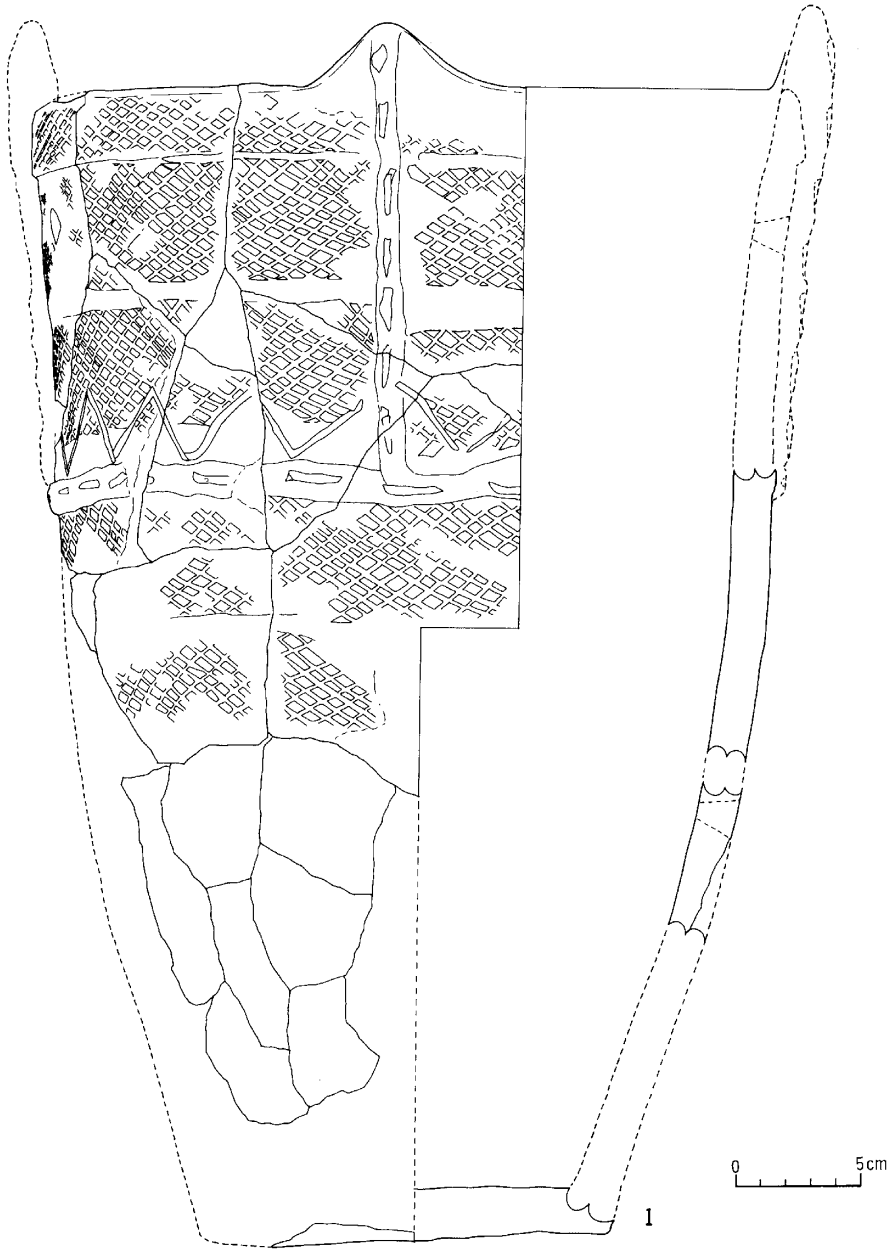
第144図-1（図版31-4）は器高約46cm、口径31cmの大型筒形土器。口縁部には幅3cmの肥厚帯が巡る。口唇部は方形と言うよりは僅かに外側が削られた切り出し状にちかく4個の山形突起をもつ。山形突起からは幅1.5cmの隆帯が垂下し胴中央部で横走する隆帯と連結する。隆帯には抉り取る様に鋭い刺突が施されるほか、横走隆帯の上部には連続鋸歯状の沈線も見られる（図版31-5）。押型文は菱形文単独で原体幅は約5cmである。胴下半部の表面は火熱を受けたためであろうか剥落もしくは風化しているため押型文を観察することはできない。本来は底部まで施文されていたと思われる。内外面には煤が著しく付着する。

第145図-1（図版31-3）は器高45cm、口径32cmの大型筒形土器。第144図-1同様に幅3cmの肥厚帯を口縁部にもつ。山形小突起からは隆帯が垂下し、胴中央部で横走する2本の沈線と連結する。第144図-1に見られる横走隆帯を沈線に置き換えたものであろう。隆帯上とその両側及び沈線間、隆帯間には刺突が施される。押型文原体は菱形文単独で原体幅は6cmである。2・3は切り出し状の口縁部と菱形文の原体が施されたもので、2は幅4cmの肥厚帯と小突起をもち、筥状の施文具による刺突が施される。

第146図-1（図版33-1）は底部が欠失するものの残存部は器高45cm、口径26cmの大型筒形土器である。口縁部は切り出し状を呈する。4個の山形小突起には円形の刺突が施され、幅1.8cmの隆帯が垂下する。肥厚帯下部と隆帯上には刺突が下方から加えられている。押型文原体は山形・菱形・短冊形で構成され、5段に及んでいる。原体幅は6.6cmである。それぞれの原体は交錯するのではなく約1cmの無文帯を設けている。施文具の両端部は突起をもつていたと思われ、器面には回転時にできた沈線が見られる。内面は横撫でにより丁寧に調整され、外面には煤が僅かに付着する。2も切り出し状の口縁部で、刻線状の刺突が3本単位で施される。第147図-1（図版33-3）は器高42cm、口径31cmを計り底部から口縁部にかけてほぼ垂直に



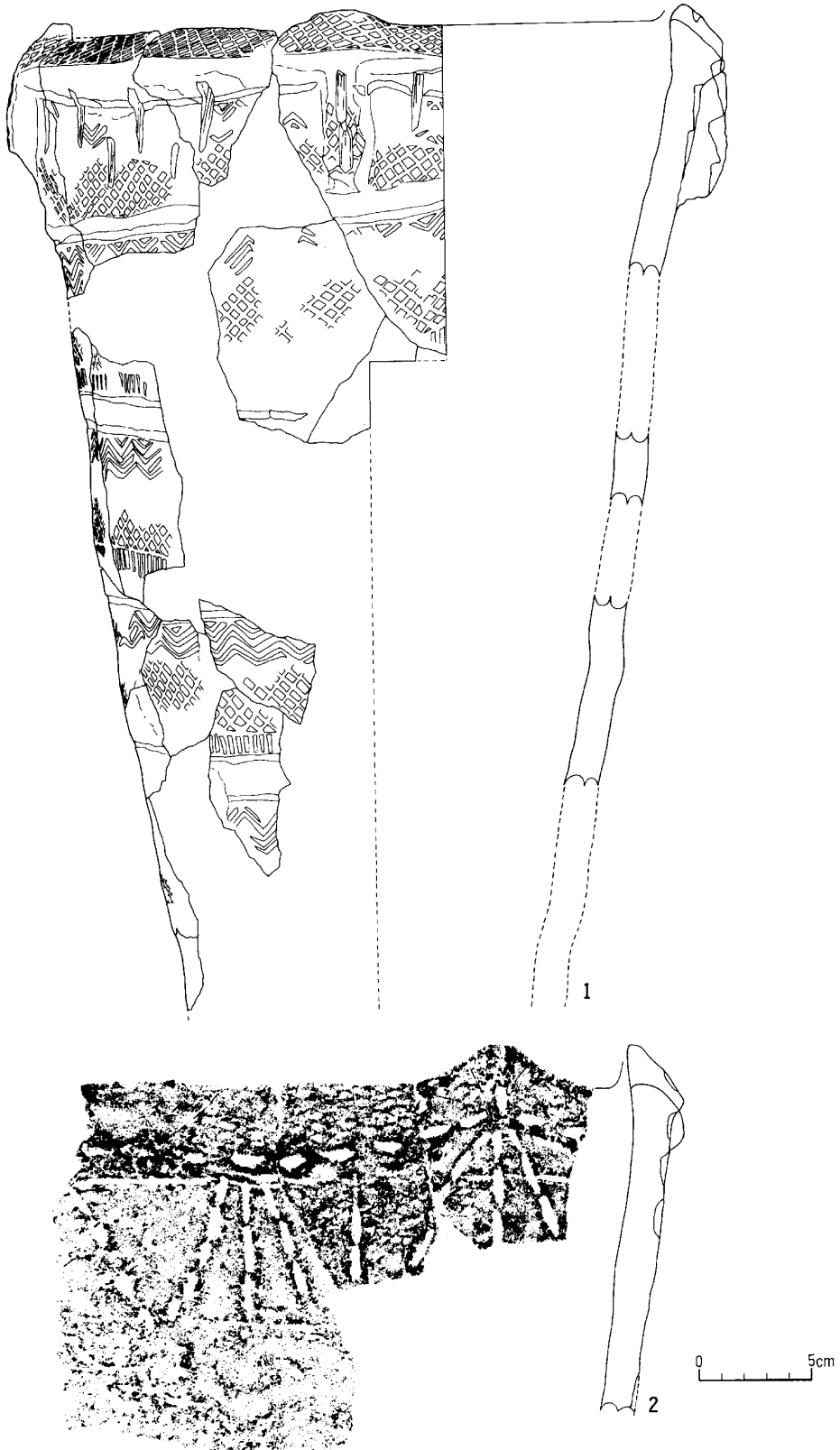
第143図 第八層出土土器 (30)



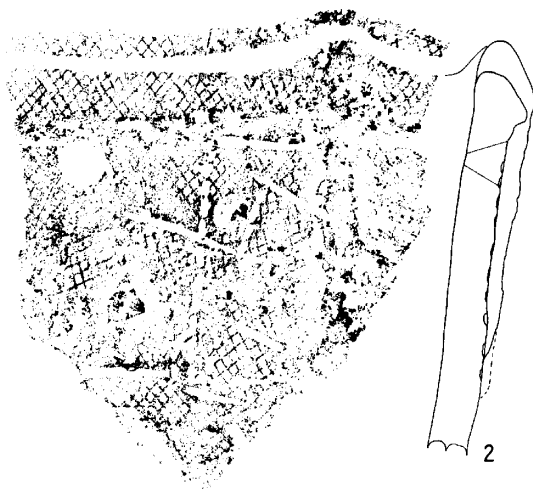
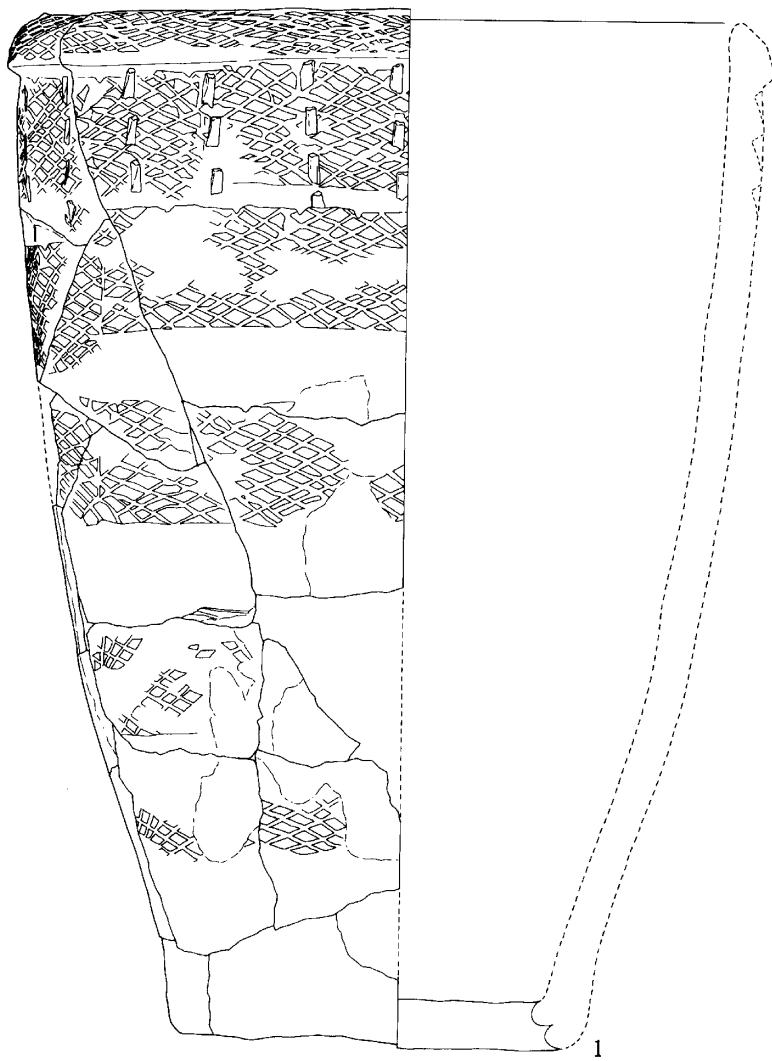
第144図 第VIII層出土土器 (31)



第145図 第Ⅷ層出土土器 (32)



第146図 第VIII層出土土器 (33)



0 5cm

第147图 第八层出土土器 (34)

立ち上がる。幅2cmの切り出し形の肥厚帯下部には3～4列の刺突文がほぼ等間隔に施される。おそらく筥状の施文具を下方から突き上げるように施したものと思われる。押型文は菱形文だけで構成され、部分的に無文帯が残る。原体幅は4.5cmである。2は切り出し状の肥厚帯をもち、山形小突起から幅1.5cm前後の細い隆帯が垂下する。器面の押型文は菱形文単独で短沈線が縦、斜め方向へ不規則に施される。

第148図-1(図版33-5)は底部径21cm、口縁部径32cm、器高50cmを計る。底部径と口縁部径は差がなくほぼ垂直に立ち上がる。切り出し状の肥厚帯と山形小突起をもち、口縁下部と胴上部は刺突文で区画され、山形小突起から2～3本の刺突列が垂下する。菱形の押型文は施文時には全面に施されていたのであろうが器面の風化が著しく部分的に観察できる程度である。

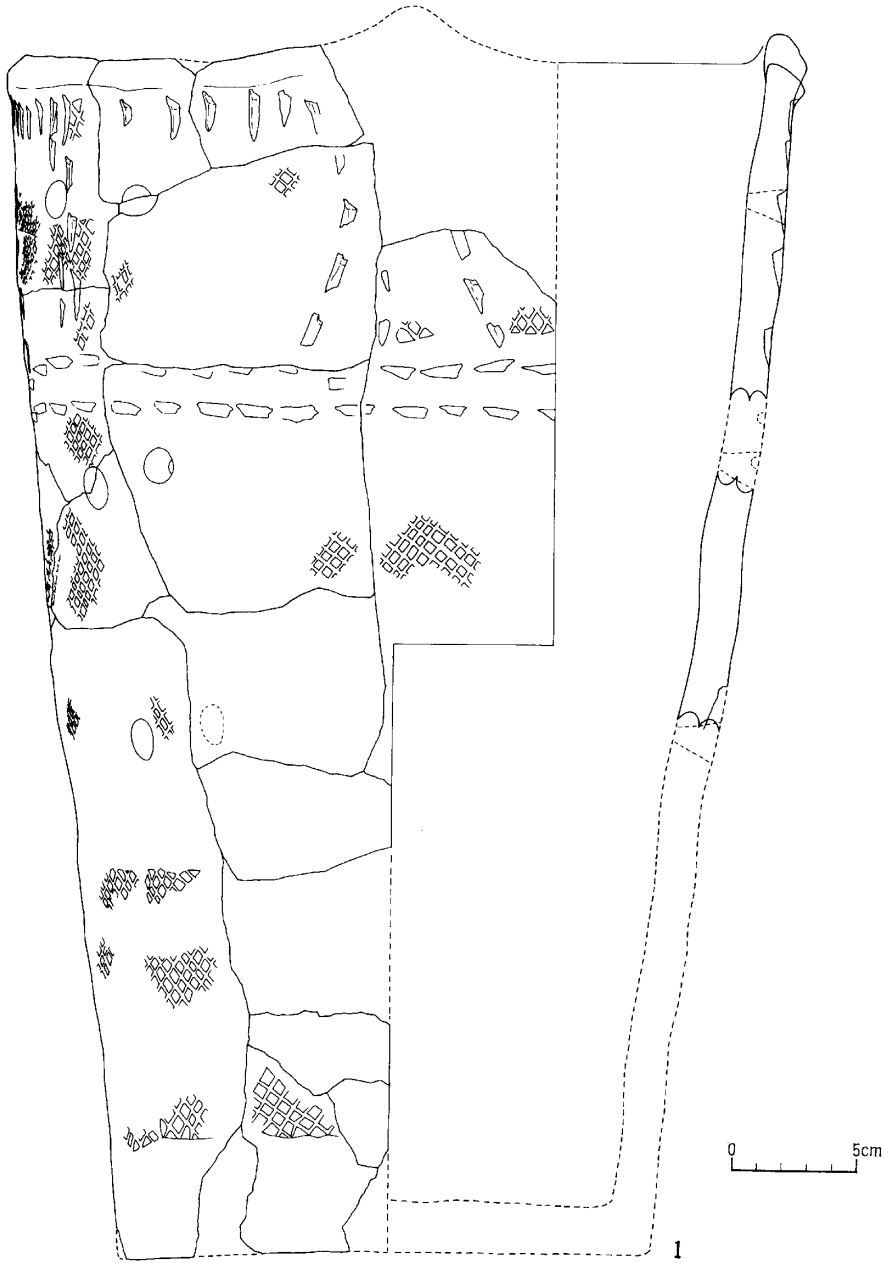
第149図-1(図版32-1)は器高45cm、口径35cmの大型筒形土器である。口縁部は肥厚帯を持たないものの切り出し状を呈する。小突起はもたず4個の隆帯が等間隔に垂下する。口縁下部と隆帯上に刺突が施される。押型文原体は短冊形・菱形・山形で構成され、器面は5段に及んでいる。原体幅は6.5cmで、各原体間は幅2～3cmの無文帯を設けている。この土器の原体の特徴は第146図-1と同じである。第149図-1の原体内容は山形(2cm)・菱形(3cm)・短冊形(1cm)であり、原体幅は6cmである。一方、第146図-1の原体内容は短冊形(1cm)・菱形(3cm)+山形(2cm)で原体幅は6cmである。それぞれの数値は一致しておりこの2個の土器は原体を逆転させて使用したもので同一原体を使用している様である。口縁下部の刺突の配列や無文帯をもつことなどにも類似点が認められ、同一人の製作とも推測される。

第150図-1(図版34-2)は口径33cm。口唇部は切り出し状で緩い山形突起を4個もつ。横走する幅広の隆帯間を三角形状に施した隆帯が巡る。原体は連続山形文である。2(図版34-1)も切り出し状の口唇部で、極めて緩い突起をもつ。原体は縦位の山形文である。

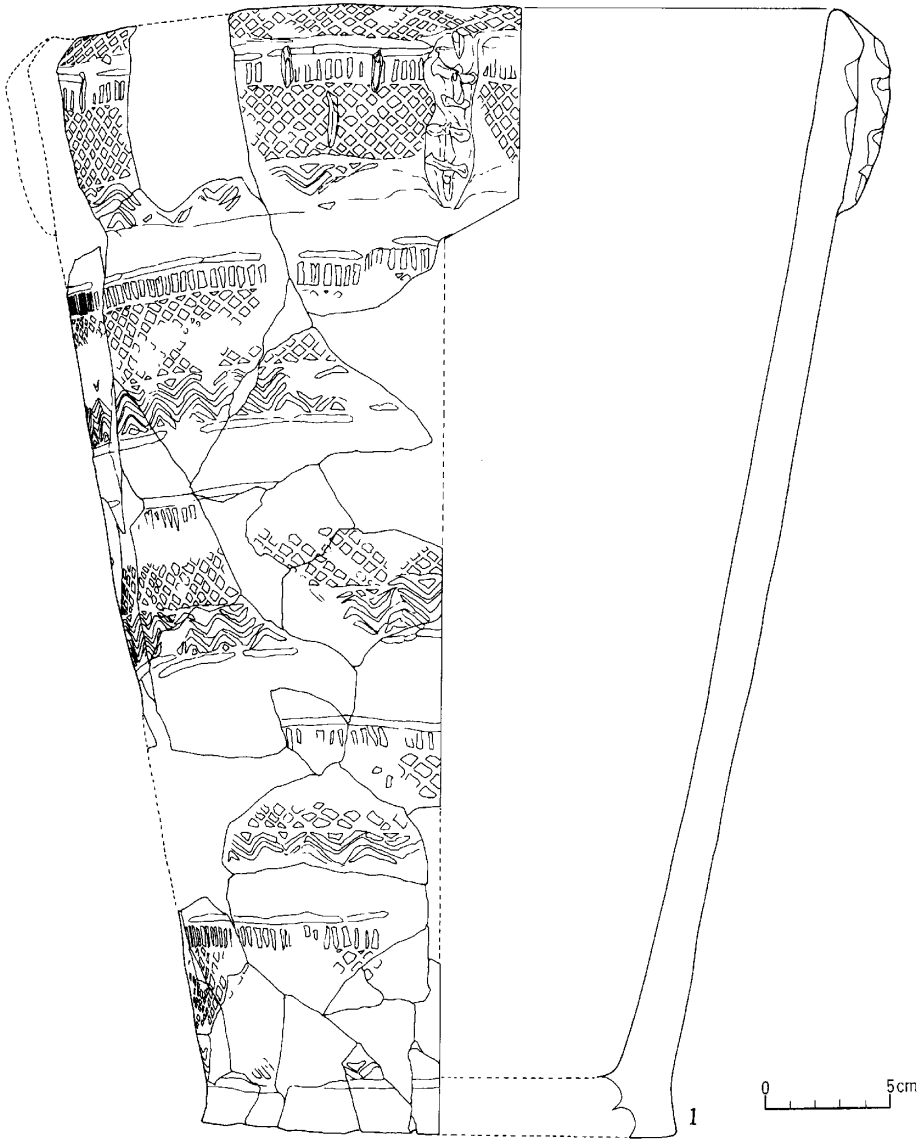
第151図-1(図版32-3・4)は器高49cm、口径36cmを計るもので胴中央部から口縁部にかけて緩く開き、底部が僅かに張り出した大型筒形土器である。口唇部は角形で4個の山形小突起をもち幅1cmの細い隆帯が垂下する。口縁部には2列の刺突列が巡る。押型文は菱形単独で約10段にわたって施される。原体幅は5cmである。

第152図-1(図版33-6)は器高47cm、口径27.5cmを計り底部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がる大型筒形土器。角形の口縁部は幅2.5cmの肥厚帯をもち幅1.3cmの隆帯を4個もつ。口唇部は平縁で小突起をもたない。肥厚帯の下部には刺突が巡る。器面に施された押型文は菱形単独であり、押捺は数回繰り替えされた箇所も見られる。原体幅は約4cmである。

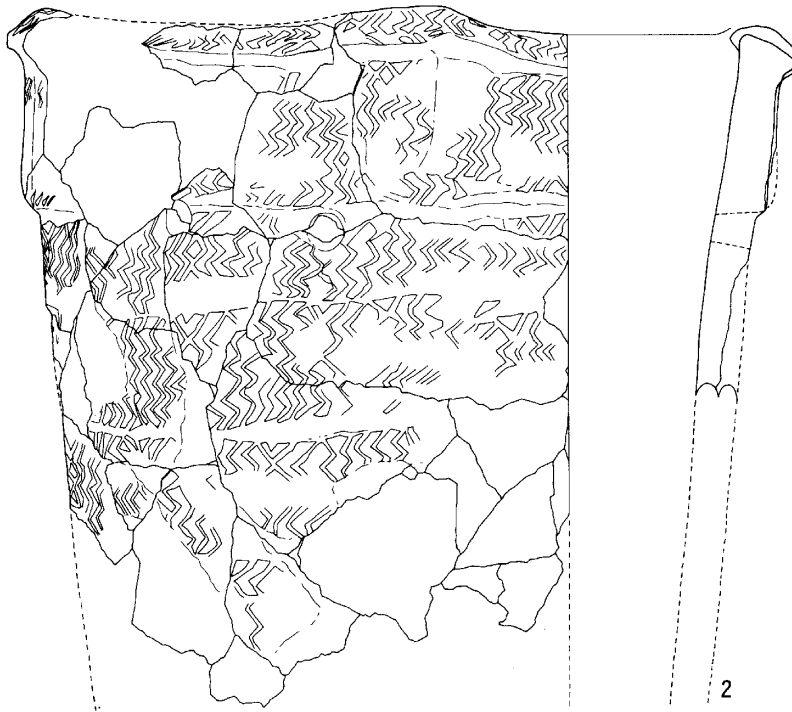
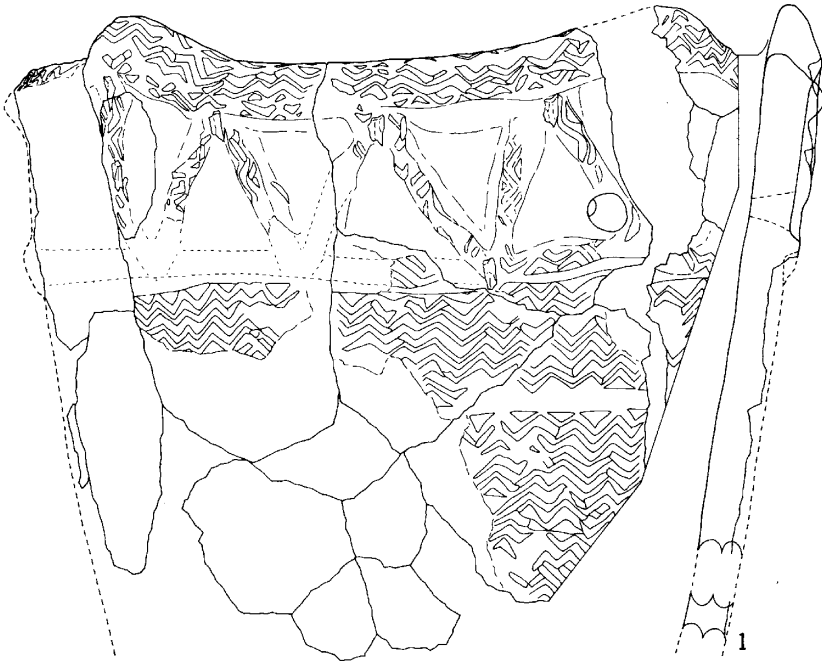
第153図-1(図版32-5・6)は器高42cm、口径35cmの大型筒形土器で底部から極めて緩く立ち上がる。口縁部の小突起からは幅1.5cmの隆帯が垂下し、隆帯部には縦列、隆帯下方では並行した2列の刺突が横走する。刺突の原体はかなり細く鋭い物を使ったと見られる。押型文原体は菱形文と矢羽根形・菱形文の2種類で構成される。菱形の原体幅は約7cm。



第148図 第八層出土土器 (35)

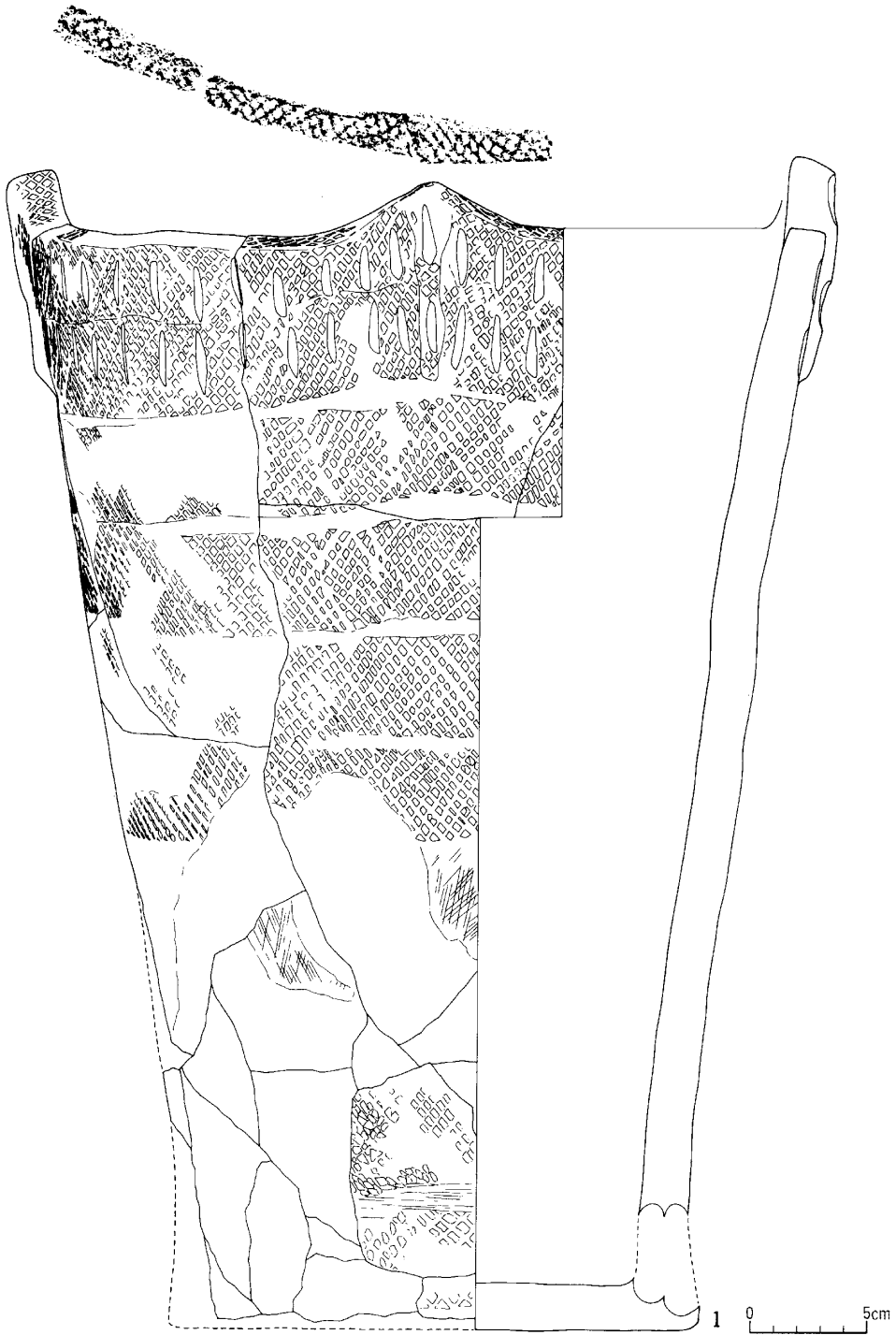


第149図 第VIII層出土土器 (36)

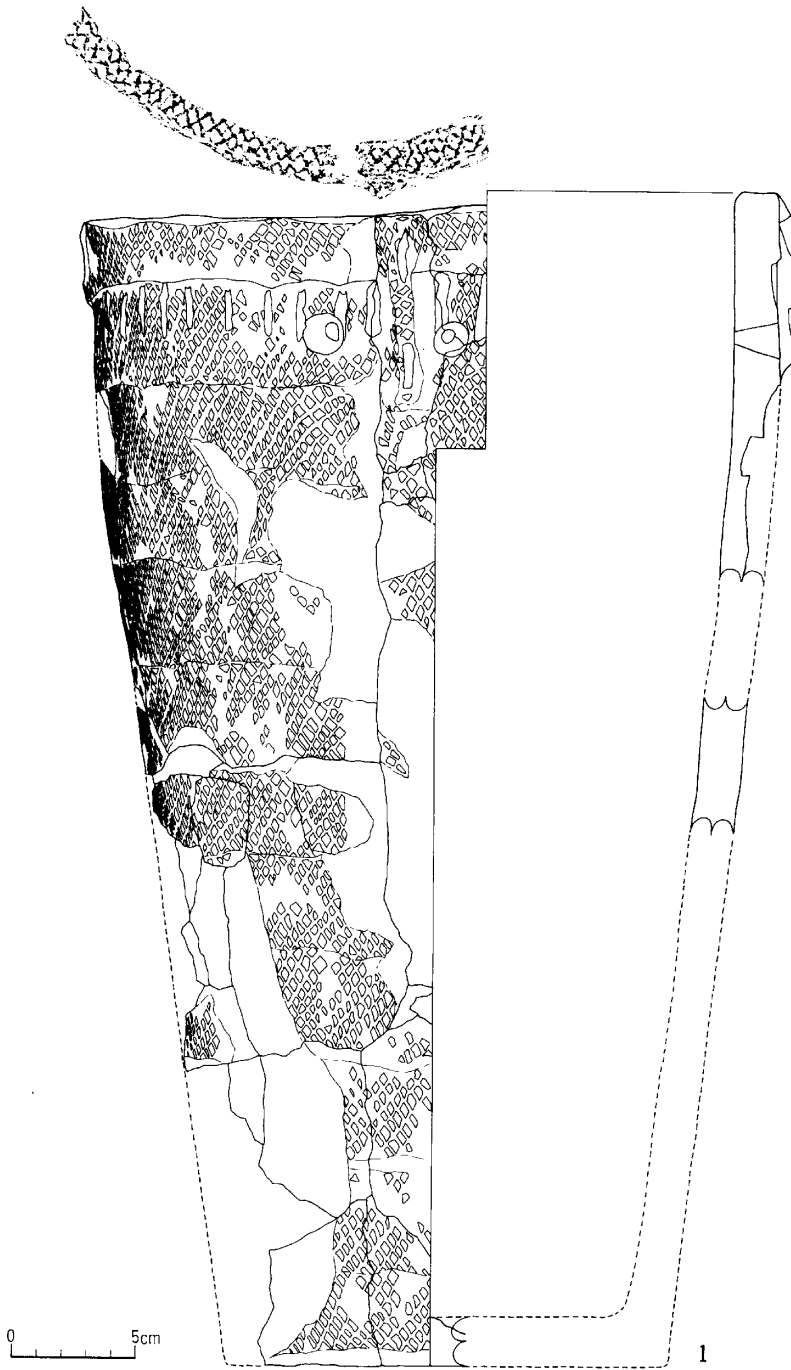


0 5cm

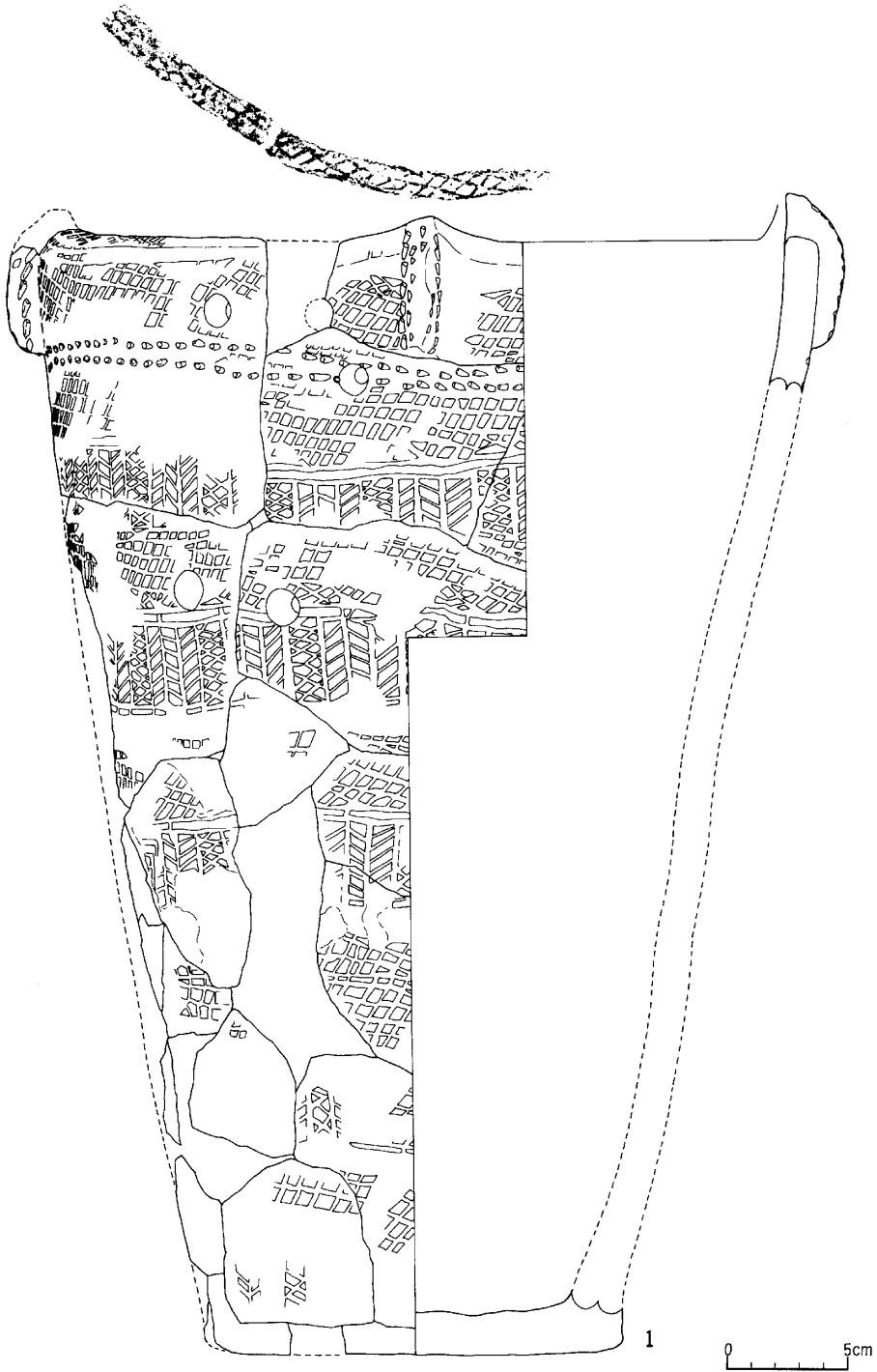
第150図 第八層出土土器 (37)



第151図 第VIII層出土土器 (38)



第152図 第八層出土土器 (39)



第153図 第VIII層出土土器 (40)

第154図-1(図版36-6)は口径28cm。切り出し状の口唇部と三角形の小突起をもつ。口縁下部は幅広の施文具を用いた短めな刺突が下方から等間隔に行なわれ、長めの刺突は小突起から垂下するものが胴部で連結し「+」字状となる。2は口径30cm。角形の口唇部である。波状の突起頂部には円形刺突が加えられ隆帯が垂下する。格子目文と山形文の原体幅は4.5cmで無文帯を残し、2列の刺突が加えられる。

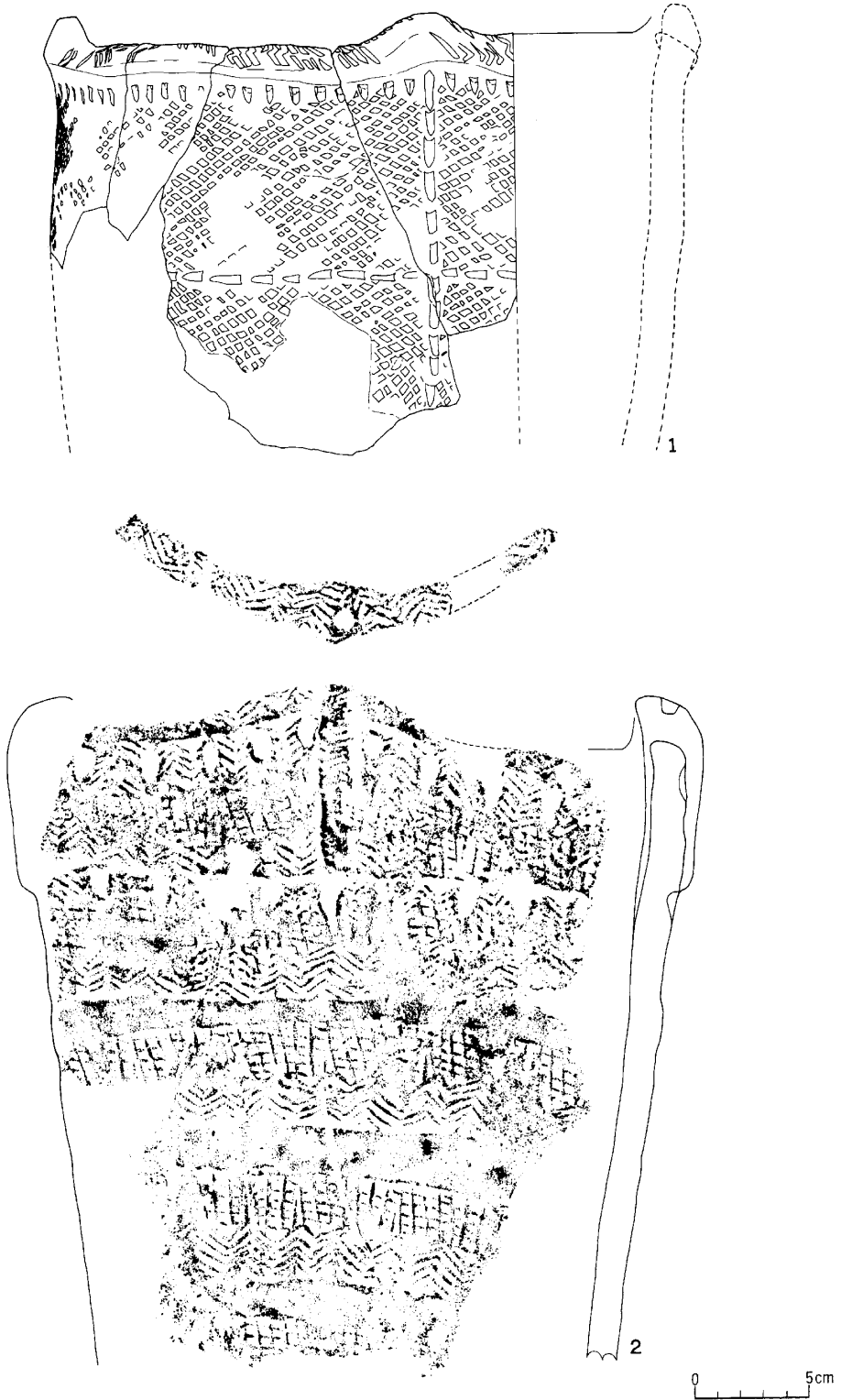
第155図-1(図版36-5)は胴下部が欠失しているため器高は不明であるが、口径は32cmを計る。大型の部類に属する土器である。口縁部は幅2.5cmの切り出し状の肥厚帯をもつ。やや長めの4個の隆帯と口縁下部には下方からの刺突が加わる。器面には方形押型文を単独に施文する。2(図版36-7)は底部近くが欠失するため正確な器高は不明であるが、残存部では37cmを計る。口径は35cm。器形は底部がすばまり口縁が開く朝顔状を呈する。口縁部は切り出し状で波状効果を持たせる様な裾長の突起が4個ある。突起からは幅1.5cmの隆帯が垂下しそれぞれの隆帯下部を弧状の隆帯で連結させている。押型文は連続山形文・菱形文で構成される。

第156図-1~4は角形の口唇部で刺突が施される。1(図版34-3)の口径は29cm。口縁部は小波状である。肥厚部を持たず下方からの刺突が連続する。原体は方形文である。2は口径約33cm。山形突起には円形刺突が施される。2~4の原体は格子目。

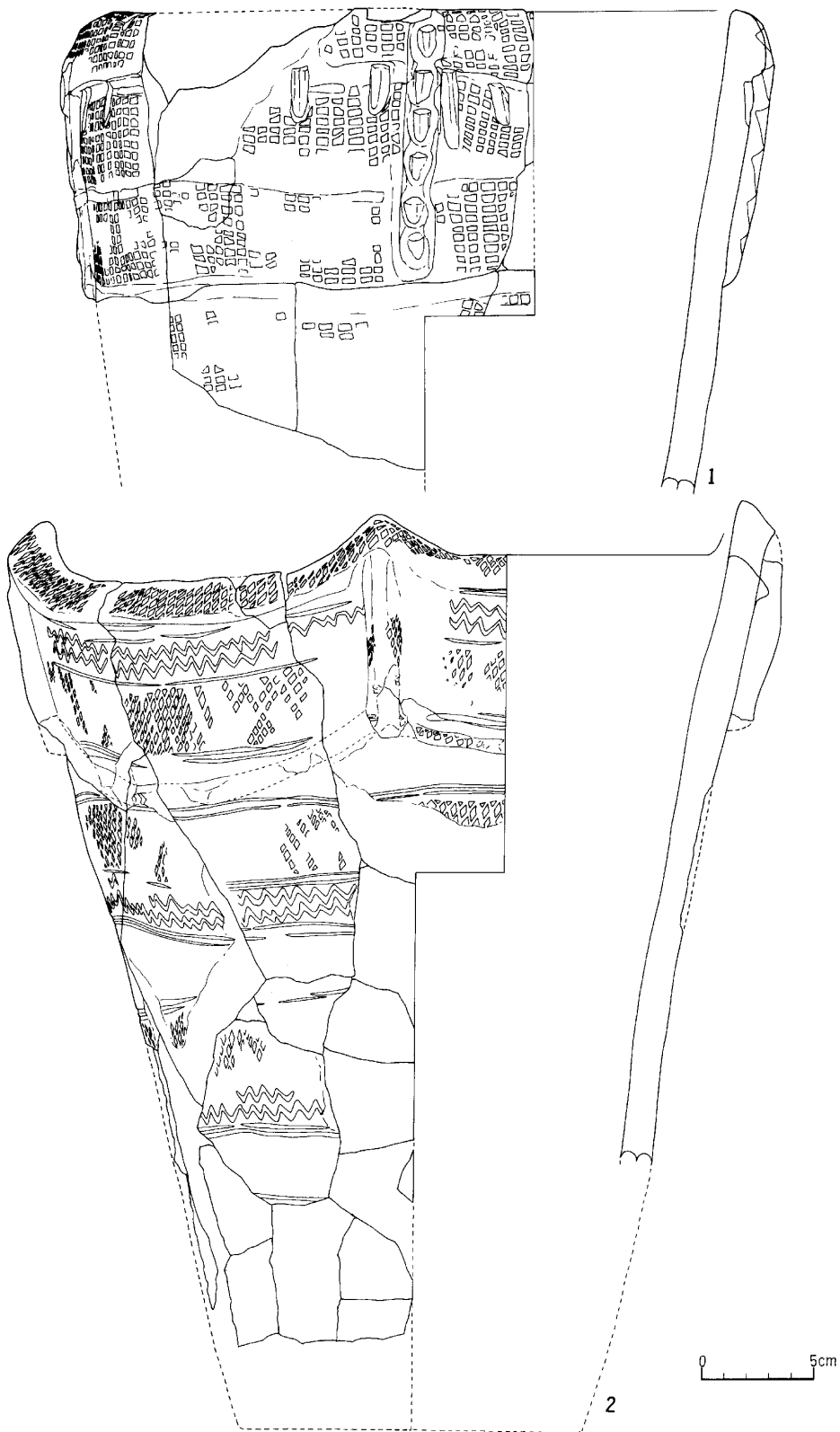
第157図-1(図版34-4)は口径35cm。角形の口唇部をもつ。1.5cmの隆帯が2本垂下する。幅5.5cmの格子目文を原体として無文部を作り、2列の円形刺突が施されが2列目の円形文は無文の凹部を作出後に施される。2(図版34-5)は口径37cmで口縁部は緩く開く。口唇部には円形刺突の施された丸みを有した小突起がある。小突起から「U」字形に垂下した1~1.5cmの幅広い隆帯は胴中央部まで達し、2本の横走る隆帯で結ばれる。原体は縦位の山形文で、1同様に外側から円形刺突が2列施される。

第158図-1(図版34-6)は口径22cm。丸みをもった口縁部の下部に1本の太い隆帯が横走る。口縁部と隆帯の間は凹状で幅狭の無文帯となり、横撫でされている。矢羽根状の押型文である。2は口径約17cm。波状口縁である。器面の大部分は剥落するため詳細は不明であるが、矢羽根状の原体を縦方向に回転させている。3は口径23.5cm。波状口縁である。土器は欠失部や剥落箇所もあるため縦に付けられた隆帯の正確な数は不明であるが、残存部で3個確認できるので、推定7個程度あったと思われる。格子目・短冊形の押型文。4は幅4.5cmの格子目の原体を地文に3本の刺突列が口縁部から垂下する。刺突は「U」字状の鋭い施文具を用いている。5の口縁部は切り出し状に近く丸みをもつ。口縁部下は幅広の無文帯となり、下部の文様帯とは6~7mm程の有段になる。薄く貼付られた隆帯が垂下する。幅3.5cmの格子目の原体を縦方向の回転により施文し、拓本図の下面には山形状の押型文も見られる。6は刻線と「ハ」字状の原体である。原体幅は5.5cm。

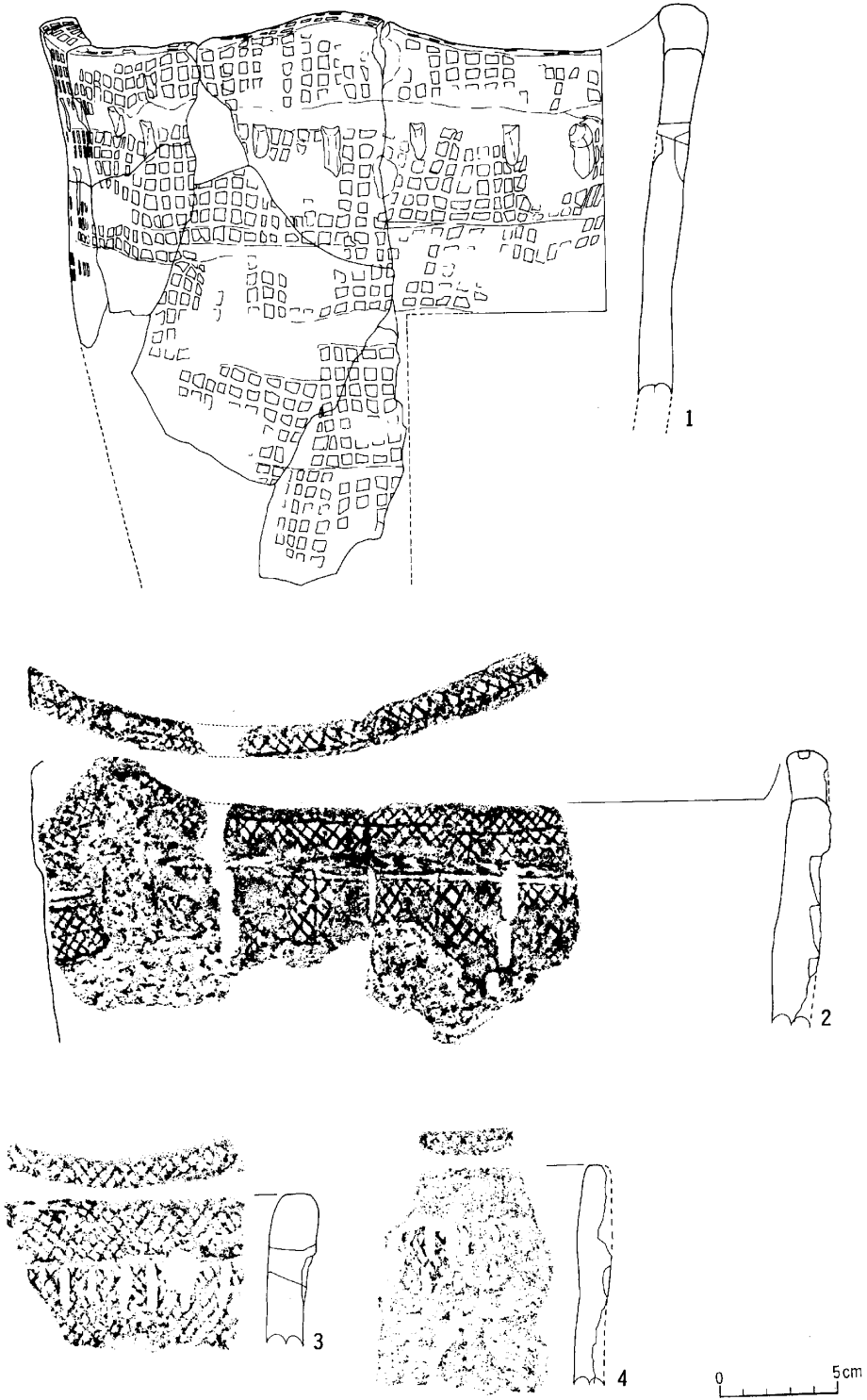
第159図-1(図版36-8・9)・2は押型文原体が凸形の楕円形である。1の口径は24cm。横位の隆帯上は凹状の無文帯となる。小波状の口縁部から幅1cmの太い隆帯が垂下し、横位の



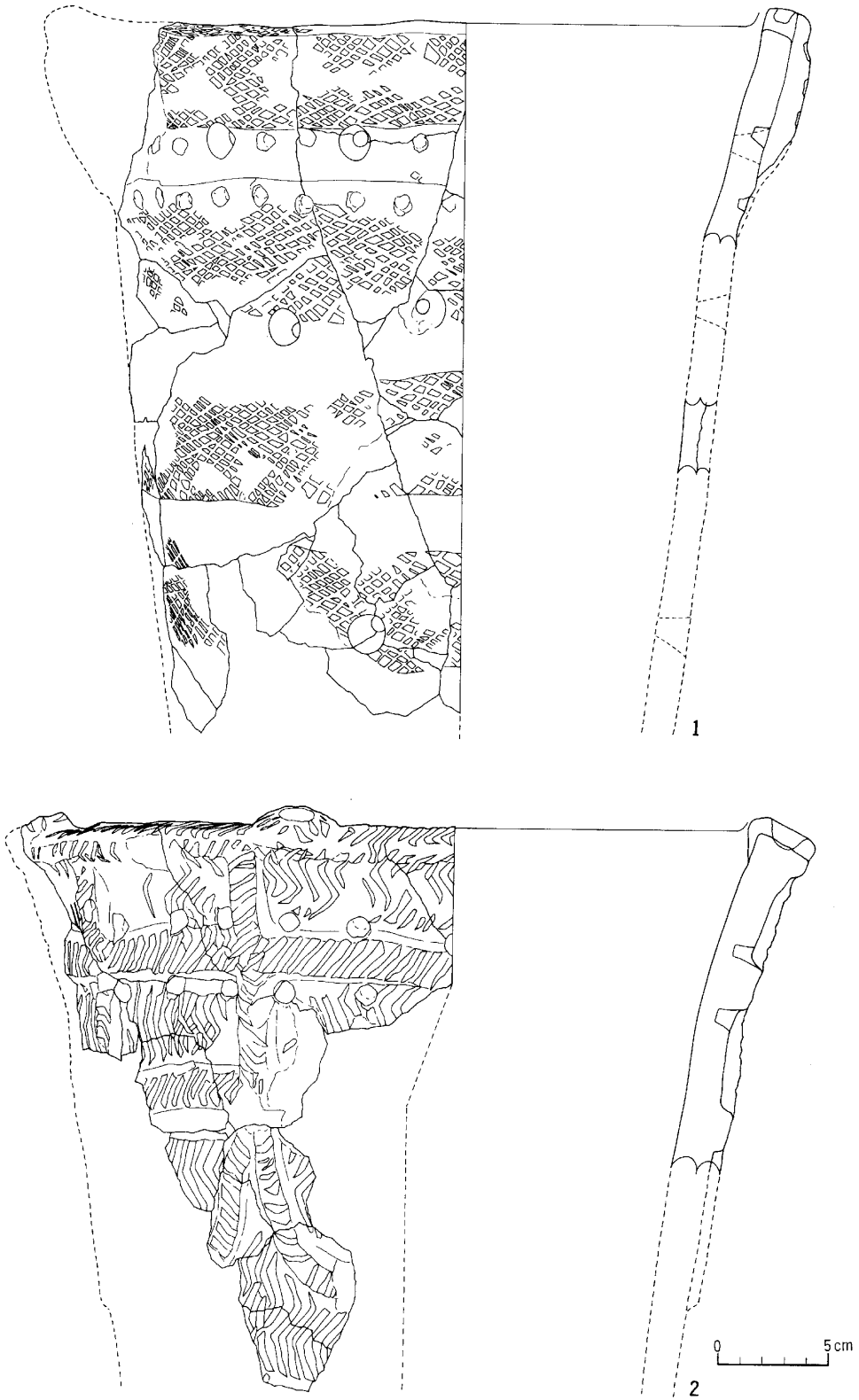
第154図 第VIII層出土土器(41)



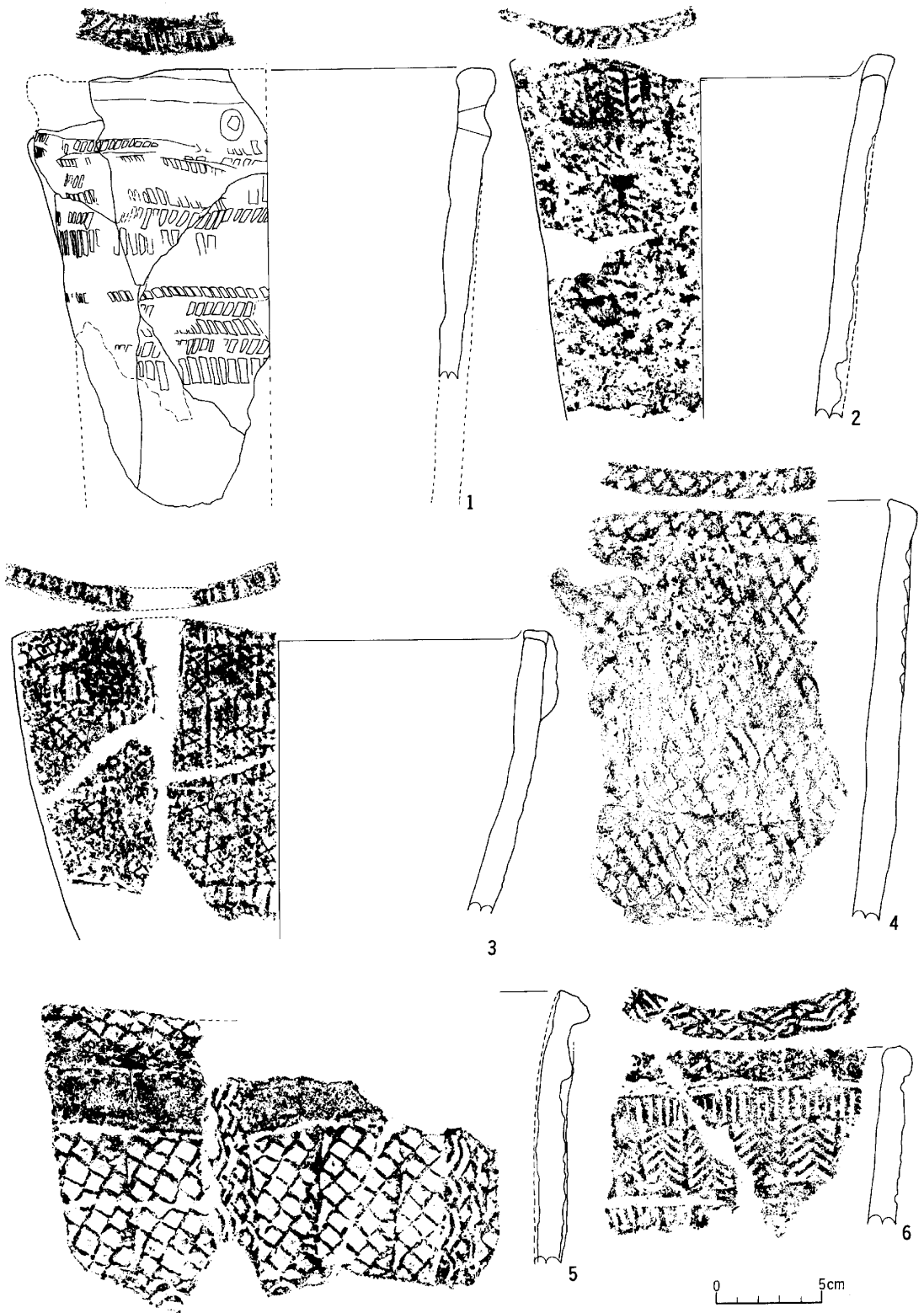
第155図 第八層出土土器 (42)



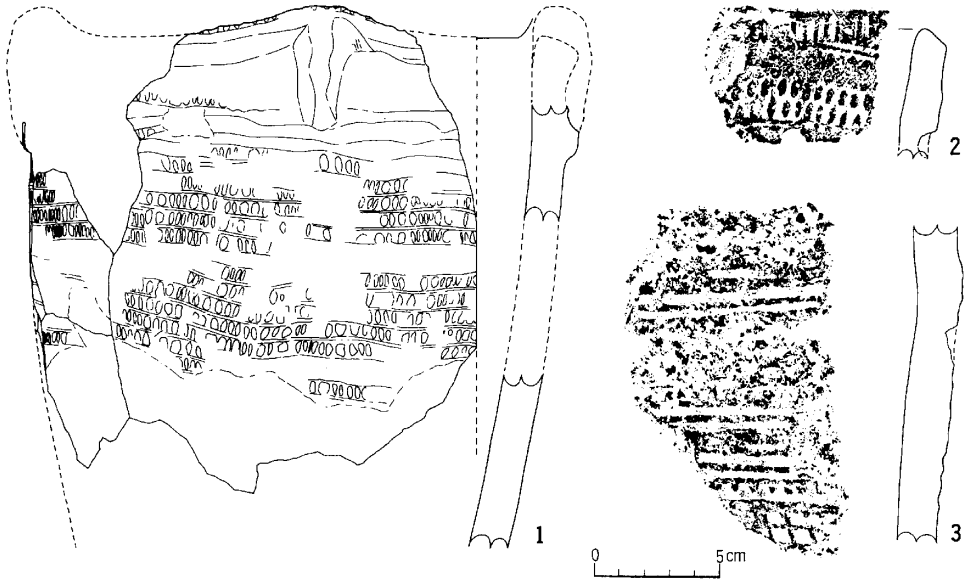
第156図 第VIII層出土土器 (43)



第157図 第八層出土土器 (44)



第158図 第VIII層出土土器 (45)



第159図 第Ⅷ層出土土器 (46)

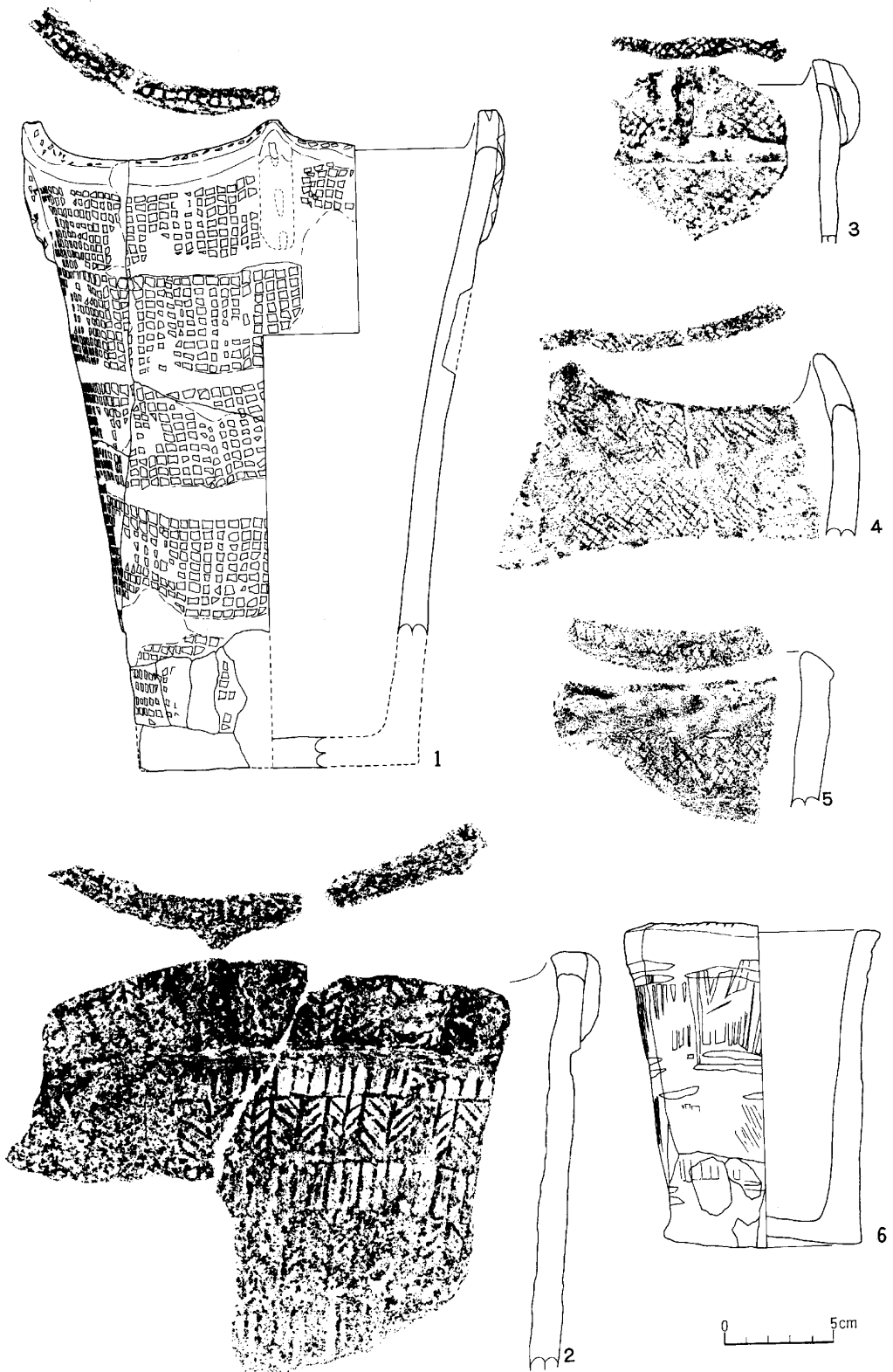
隆帯と連続する。原体幅は3.5cm。3は数10本に及ぶ沈線と方形文が施される。

第160図-1～6は円形文を持たない。1(図版35-1)は口径21cm。器高29cm。4個の山形小突起には縦位の隆帯があり刺突が見られる。原体幅4.5cmの方形文を5段にわたって施文する。2・3も縦位の隆帯がある。2の原体は短冊文・矢羽根文、3は格子目文である。4・5の原体も格子目文。4の口縁部は内湾気味。6(図版35-2)は口径11cm、器高15cm。短冊形の原体を2段施す。底部は揚げ底気味で僅かに張り出す。

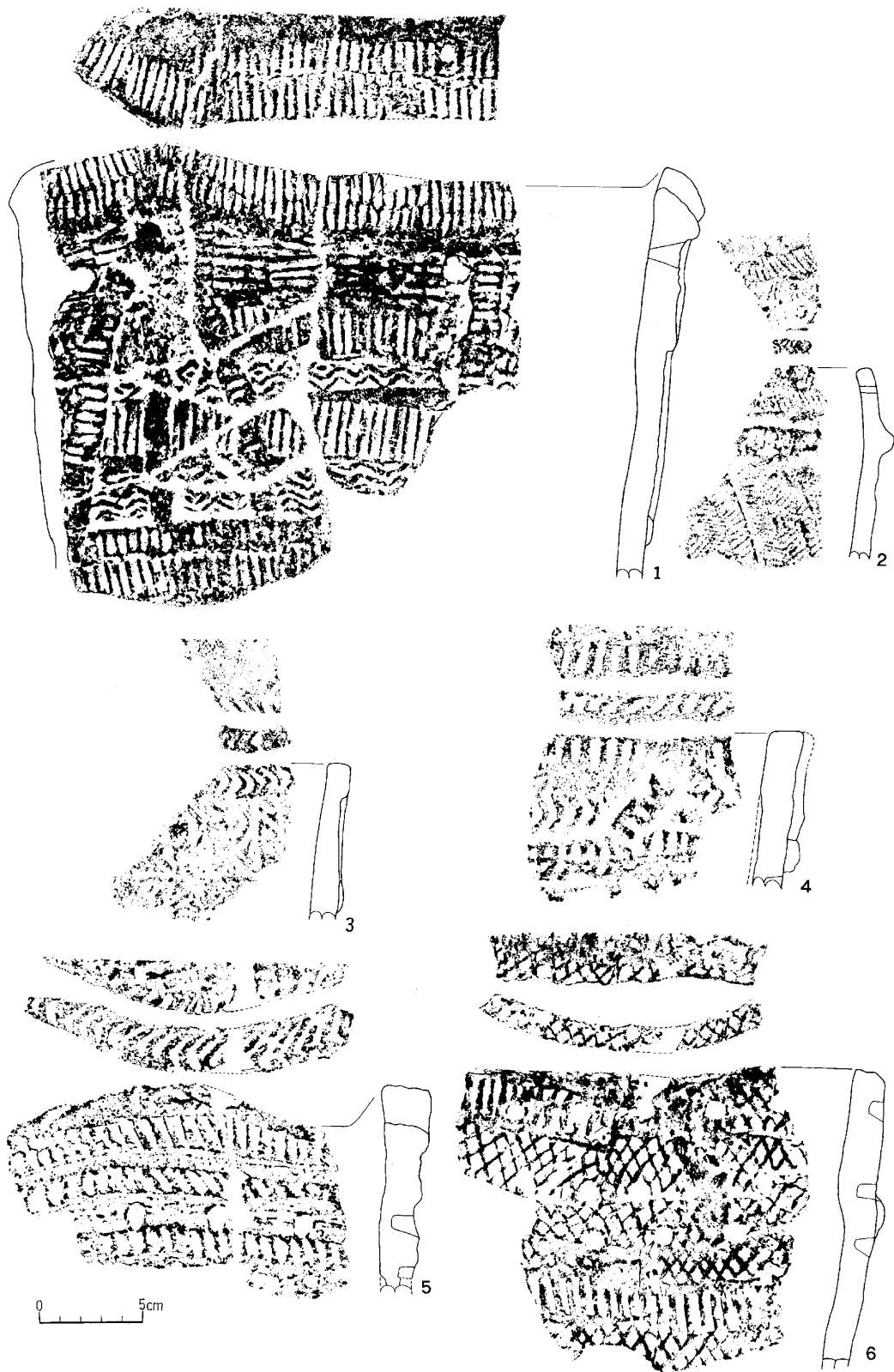
第161図-1～6は口縁部、胴部に隆帯が付される。1は切り出し状で大きな山形突起になると思われる。胴部の隆帯に山形突起から派生した3本の隆帯が連結する。口縁直下は横位の短冊文が見られるが、胴部は短冊文・山形文が施される。2は横位の隆帯。口縁直下の円形文の幅は狭く、貫通する。矢羽根状の原体。3は横位の隆帯と3本の縦位の隆帯が連結する。4は鋸歯状と横位の隆帯がある。短冊文と縦の山形文で構成すると思われる。5は胴部に横走する隆帯の上下と口縁下部に円形文がある。格子目文と短冊文が施される。6は波状口縁。2本の横位隆帯を持ち、円形文が2段施される。

第162図-1は口縁部と胴部の幅広い隆帯と、突起部から縦走する細い隆帯が連結する。縦走する隆帯上には「U」字状の刺突が加わる。表面は火熱を受けているため状態は悪く山形文の一部が見られるだけである。裏面には山形文と短冊文が施される。2は小波状の口縁部で、極めて細かい菱形文を施す。

第163図-1(図版35-3)は口径30cm。垂下した4本の隆帯は胴上部の横位の隆帯と連結する。押型は縦位の連続山形文。



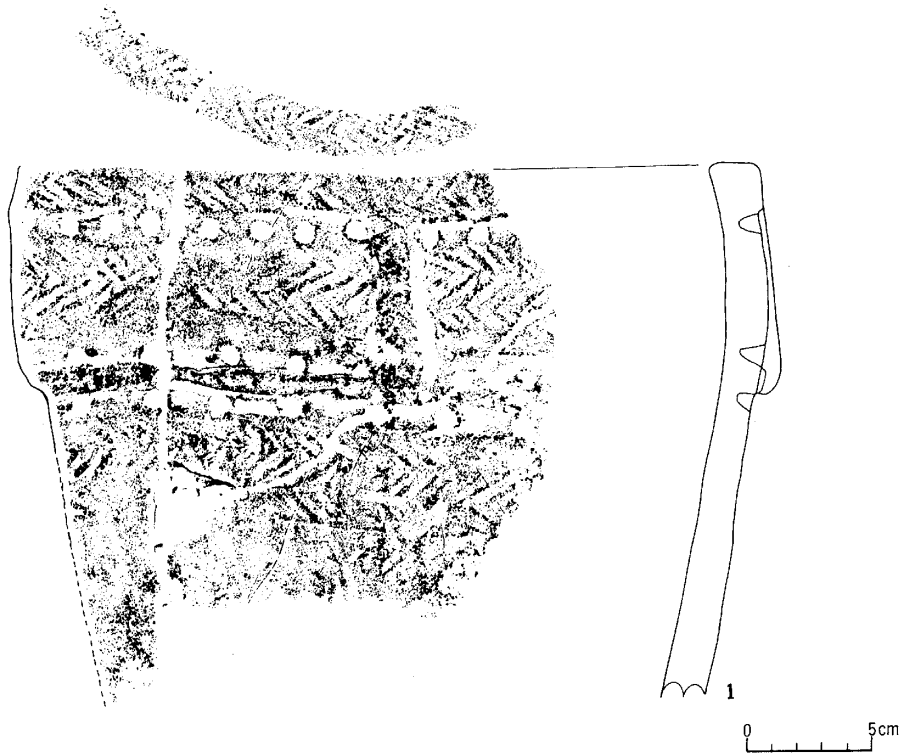
第160図 第VIII層出土土器 (47)



第161图 第八层出土土器 (48)



第162図 第VIII層出土土器 (49)



第163図 第Ⅷ層出土土器 (50)

第164図-1~4・6は角形の口唇部で円形文をもつ。1は山形小突起があり肥厚帯は薄い。押型は連続山形文と方形文である。2は丸みのある波状口縁で、2本の沈線文と三角文が施される。3の押型は連続山形文と短冊文。4は胴中央部から上部にかけて緩く開き、凹帯上部に円形文がある。内外面に矢羽根文が施される。5は有段化した口縁下部に下方からの刺突が施される。6は円形文の下部が無文となる。

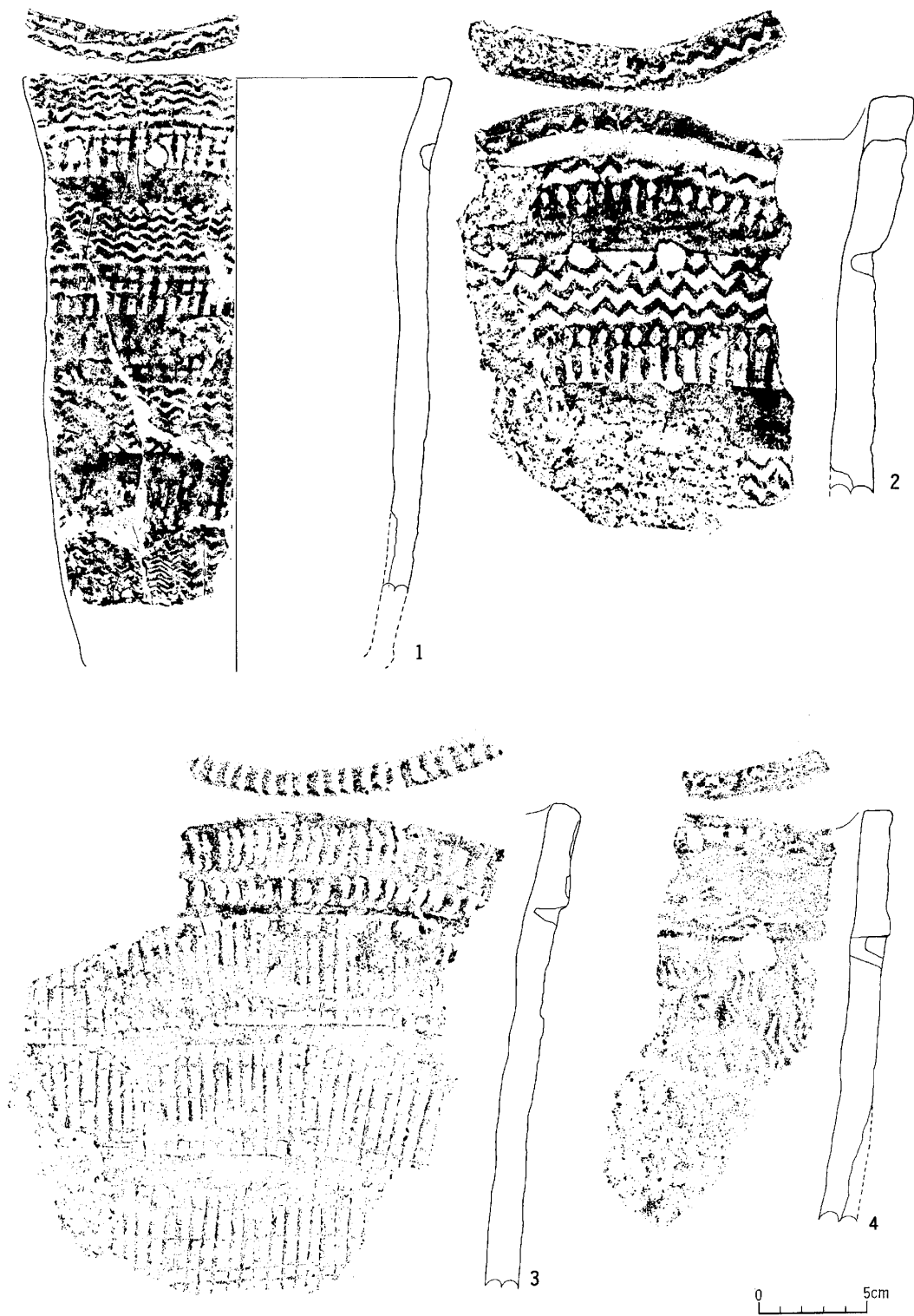
第165図-1 (図版35-4)は波状口縁。押型文を施文後に2本の無文帯を作るため中間は隆帯状になる。原体は短冊文・方形文・矢羽根文で構成される。2は厚みのある口唇部で浅い円形文が見られる。

第166図-1~3・5~6は押型文の施文後に2条の凹帯を施す。押型は短冊文・方形文・矢羽根文で構成される。原体幅は5cm。内面は風化が著しいものの縦位の刺突列が見られる。2は極めて浅い円形文。3は頸部が無文をなし、菱形文と方形文が施される。4は短冊文と連続山形文。5は連続山形文。6は擦痕状の浅い沈線が斜め方向に施される。

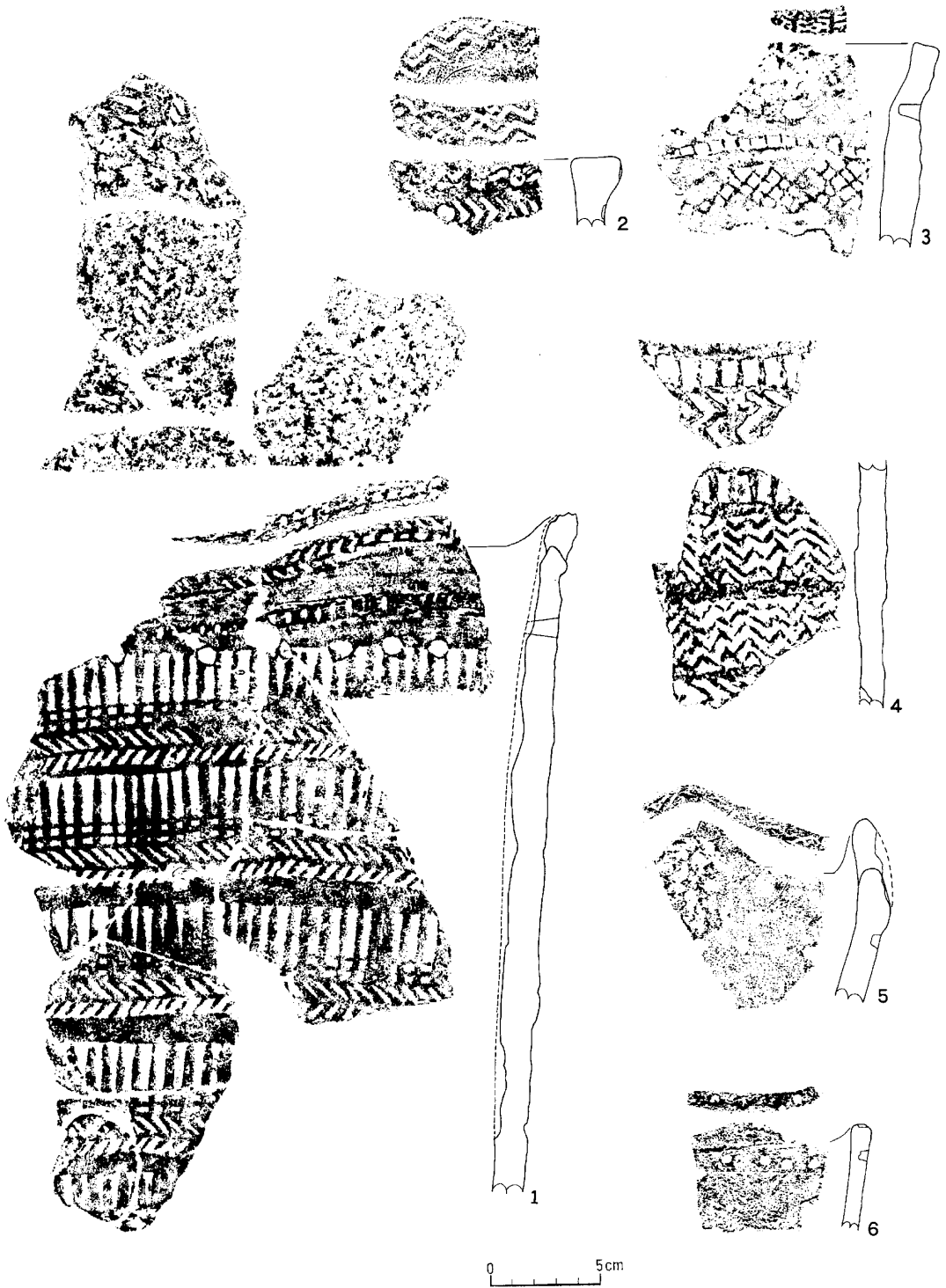
第167図-1は円形文をもたない。短冊文と山形文の押型文。2は口径27cm。幅広い4個の小波状の口縁部。2段の円形文と方形の押型文が施される。3 (図版35-5)は口径28cm。4個の山形突起を持つ。突起からは縦位の隆帯が垂下する。円形文は幅1cmの無文帯を横撫でによ



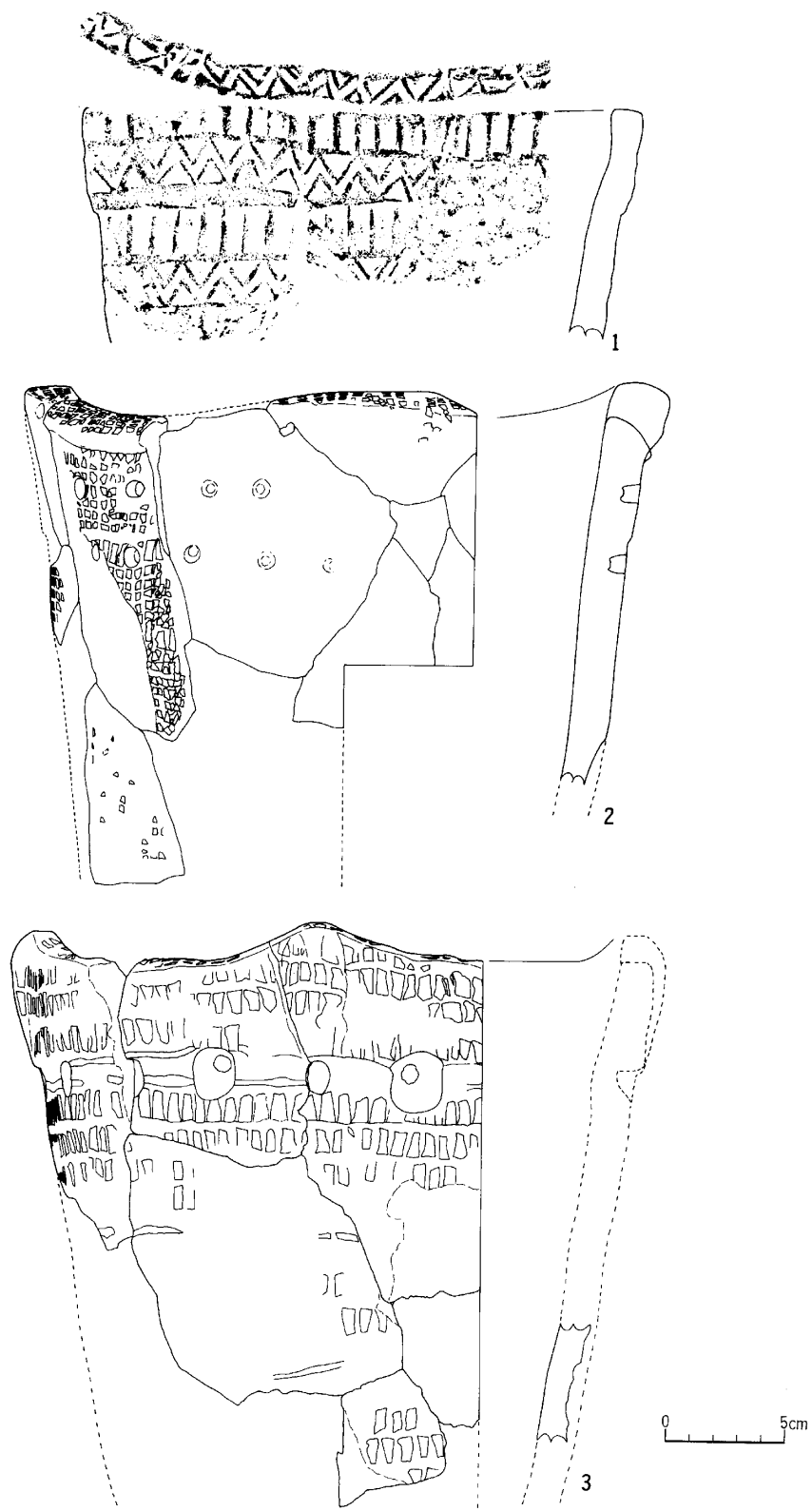
第164図 第VIII層出土土器 (51)



第165図 第Ⅷ層出土土器 (52)



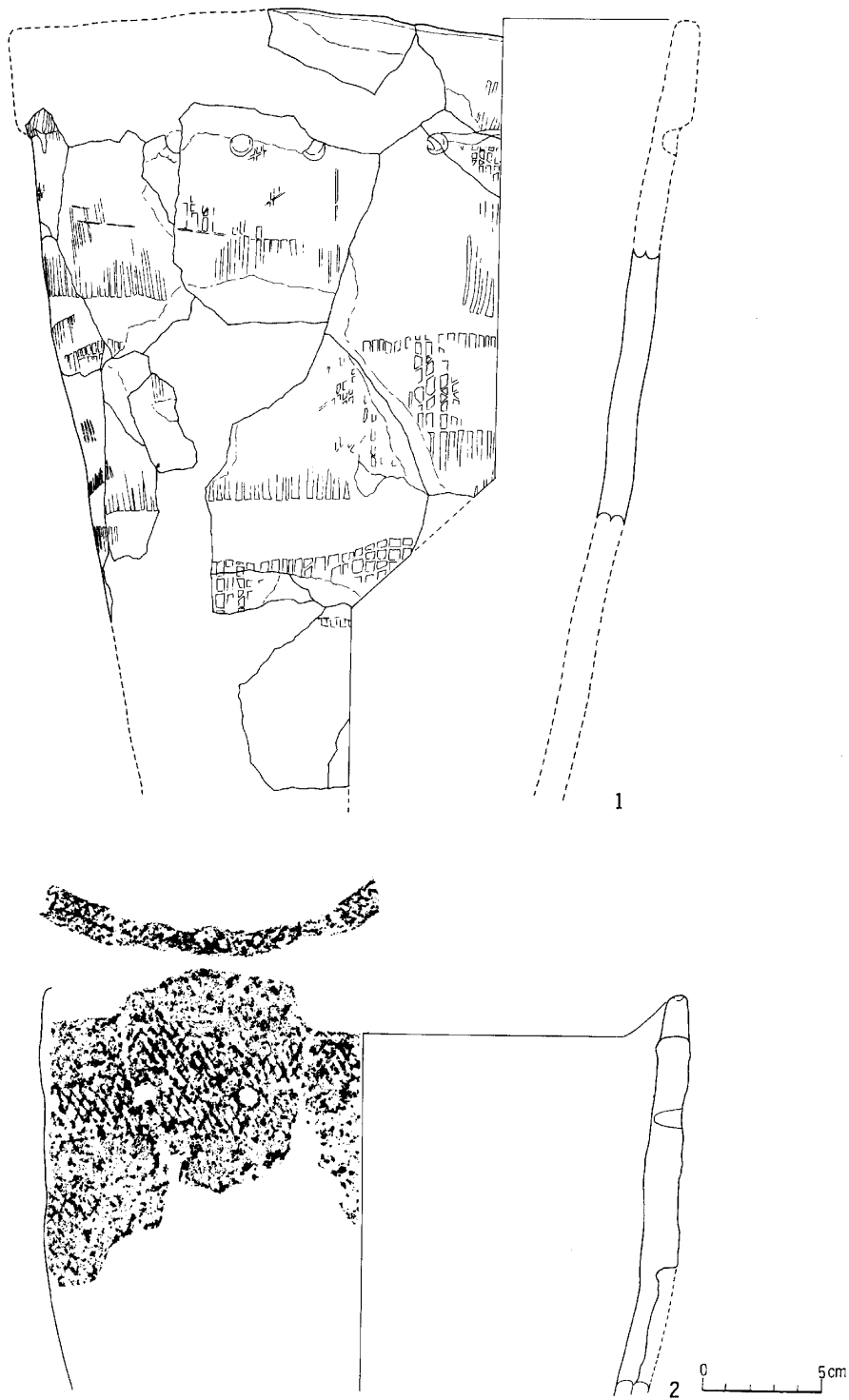
第166図 第VIII層出土土器 (53)



第167図 第Ⅷ層出土土器 (54)



第168図 第VIII層出土土器 (55)



第169図 第Ⅷ層出土土器 (56)

り整形した後に施す。

第168図-3～5は円形文をもつ。1・2は方形の押型文があり円形文をもたない。3は縦位の隆帯が付されていた様である。矢羽根状の押型文。4は方形の押形文。5は波状口縁の下に半截状の刺突が2段ある。矢羽根状の押型文。

第169図-1(図版35-6)は幅広の肥厚帯の下部、2は幅広の肥厚帯部と下部に円形文をもつ。1は口径29cm。極めて緩い波状口縁と思われる。方形の押型文で幅1～2cm程の無文部を残す。2は台形状突起に縦位の隆帯がある。菱形と矢羽根の押型文。

第170図-1(図版35-7)は口径29cm。山形突起を4個もつ。浅い肥厚帯とその下部に円形文があり原体は縦位の波状押型文である。2の口縁部は緩く外反し、2列の浅い円形文がある。

第171図・第172図は刺突文系の土器である。第171図-1～4は円形文が見られる。いずれも口縁直下に施されるもので、1・2は横位の隆帯がある。1は幅広の無文帯下部に隆帯をもつ。3の口縁は緩く外反し、4は切り出し状を呈する。7は幅広の施文具で内部に植物の繊維筋がある。8は2本単位の刺突。13・14は短沈線状である。15は2種類の施文具を使用。16は張出しをもつ底部。17は半截状施文具を横位に施す。

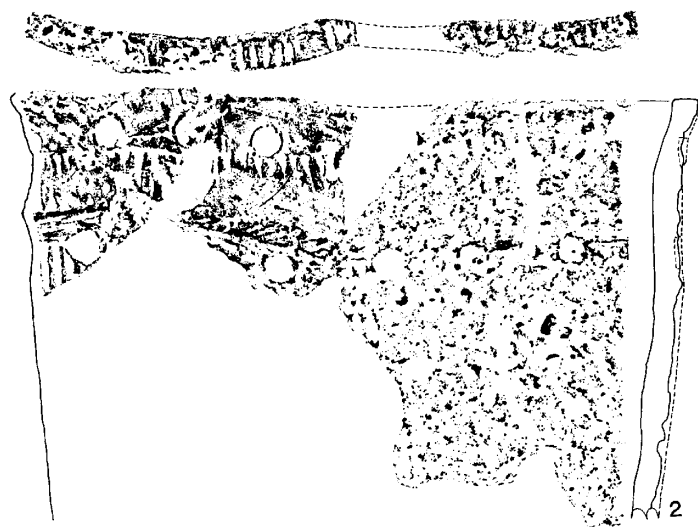
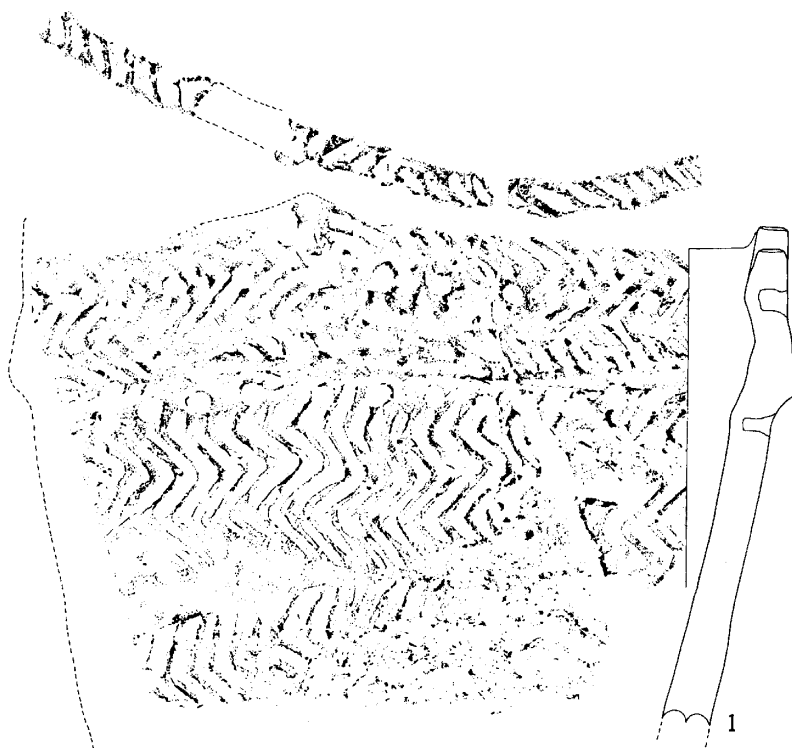
第172図-1・5・9は円形文をもつ。1は幅狭の肥厚部に小突起をもち、半截状の刺突が施される。3は櫛目文の下部に列点文が不規則に配される。4の口縁部は切り出し状。5は極めて肉厚な肥厚帯である。9の円形文は凹帯上に施される。13(図版35-8)は口径23cm。小波状の口縁部に4個の小突起が付けられ、円形施文具による刺突が横位、縦位に2条施される。

第173図は櫛目文系の土器である。1・2・5～8には円形文がある。1は凹部、2は無文地に円形文を施す。3の口縁部は肥厚し、2種類の施文具を用いる。4は縦位の隆帯の付された薄い肥厚帯上に櫛目文が施される。9は幅広の口唇部。12は細沈線と櫛目文が複合する。

石 器 (第174図～第200図)

第174図(図版38)、第175図-1～4(図版39-1～4)は石鏃。1は基部に抉りが無い二等辺三角形の無茎石鏃。2～6は基部の抉りが明瞭な無茎石鏃。7～10は鏃身の中央部を緩い弧状に仕上げた有茎石鏃。11～35は二等辺三角形の形態を持った比較的大きな有茎石鏃で、30～35は基部の最下端部が張り出す。36～56は三角形の尖頭部を有した有茎石鏃。57はアグ状の張出しが無く、太い基部をもつ。58・59は五角形、60・61は基部に抉りをもつ。62・63は尖頭部が緩い弧状を呈し細い。64～68は菱形。69・70・第175図-1は柳葉形。2は縦長剝片の側縁部に微細な調整加工を施し、3はアグが下方に張り出した有茎石鏃。4は0.52cmの長身鏃。第175図-5～34・第176図・第177図・第178図・第179図-1～11は石銛・石槍。第175図-5～34、第177図-1～7、18・19は尖頭部が三角形、8～17は菱形状の形態をもつ。18・19は安山岩製で他は全て黒曜石製。

第178図-1～21は比較的細身の二等辺三角形の尖頭部のもので、22～24・第179図(図版

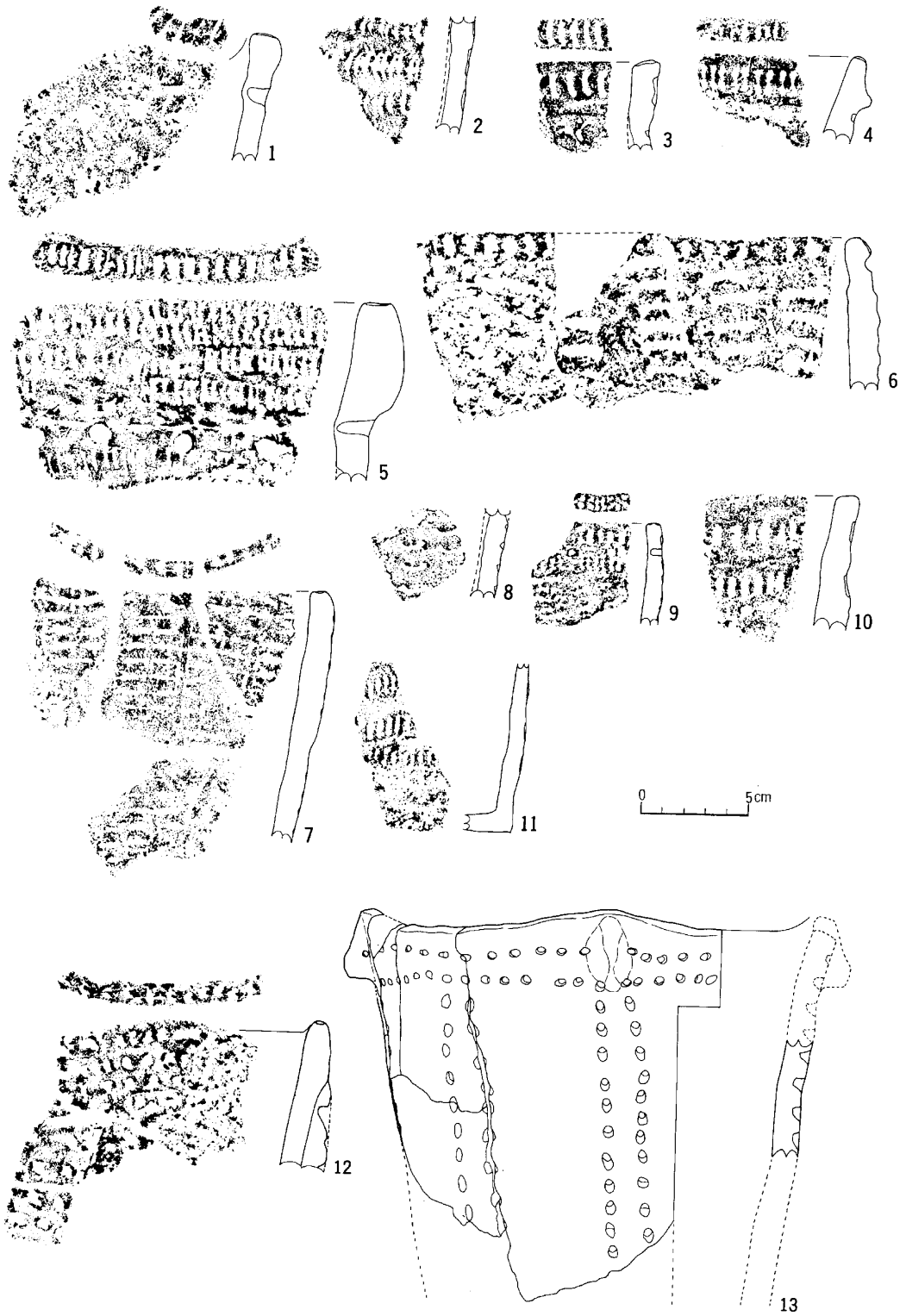


0 5 cm

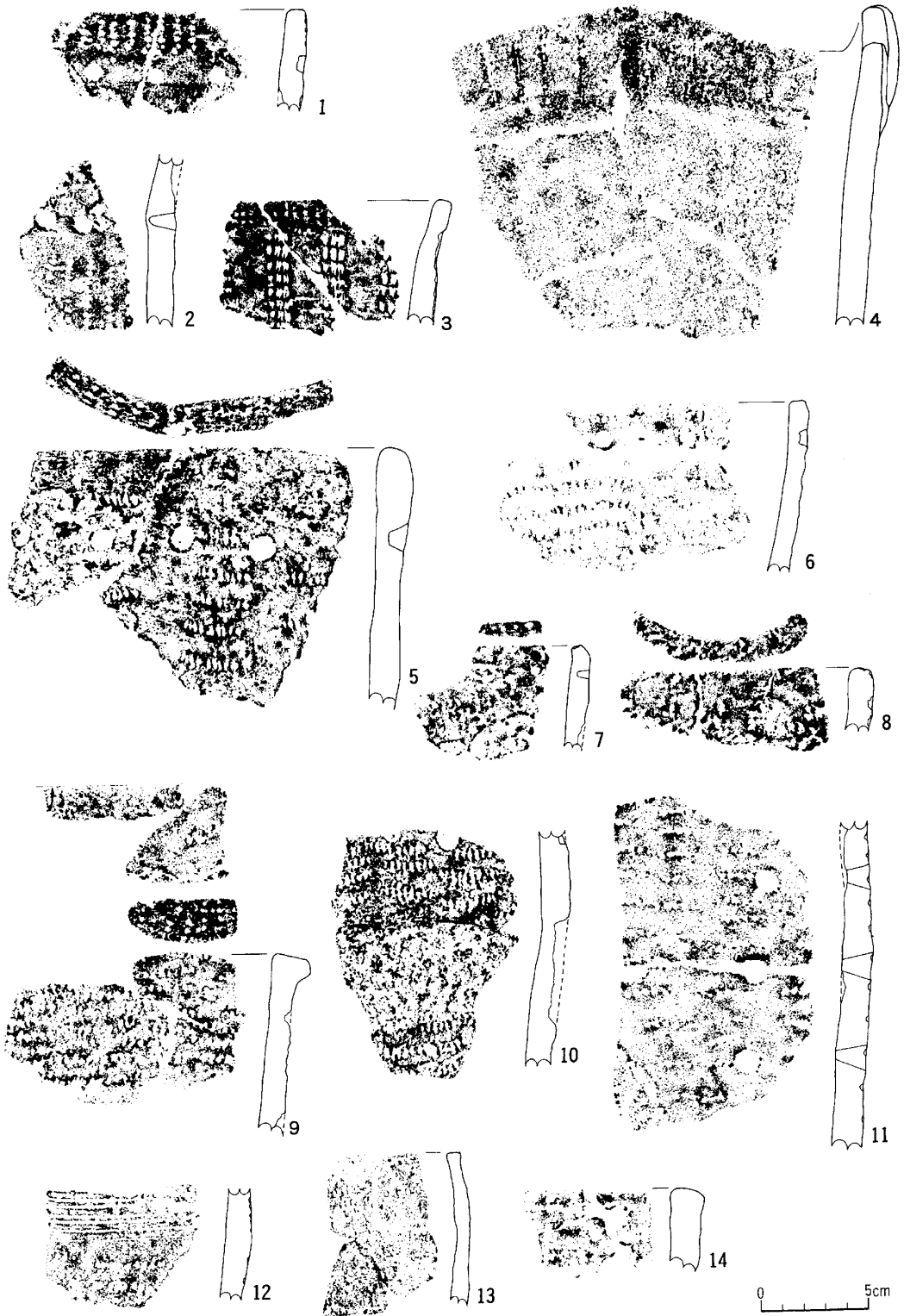
第170図 第Ⅷ層出土土器 (57)



第171図 第VIII層出土土器 (58)



第172図 第七層出土土器 (59)



第173図 第八層出土土器 (60)

41) - 1・2は菱形状である。3～9は柳葉形の石槍。11は両頭石槍。10は下端部が欠失するものの11と形状が酷似した両頭石槍と思われる。12～15は両面加工ナイフ。13・15は両側縁に抉入がある。

第180図は尖頭器状に先端部が尖った両面加工ナイフ。1・2・15の基部は抉入される。3は基部に原石面があり、4・5・7は方形の柄部が作出されている。すべて黒曜石製。

第181図は両面加工ナイフ。1は尖頭器状の大型ナイフである。表裏面とも剥離面は広く、基部に原石面が残る。3・4の側縁部は一方が直線的で片方は弧状である。2・5～10は尖った先端部をもつが、特に8～10は尖鋭的で断面は三角形状である。1は安山岩、他は黒曜石製。

第182図-1の先端部の両縁は弧状に作出され、張出しが広く柄部が長い特徴をもつ。2・3は先端部が丸みをもった両面加工ナイフ。4は肉厚の片面加工ナイフ。1～3は黒曜石製。4は安山岩製。

第183図も両面加工ナイフ。4～10は両側縁部が平行的な細身のナイフで他は柳葉状のナイフである。15～17の裏面は縁辺部のみ加工されている。全て黒曜石製。

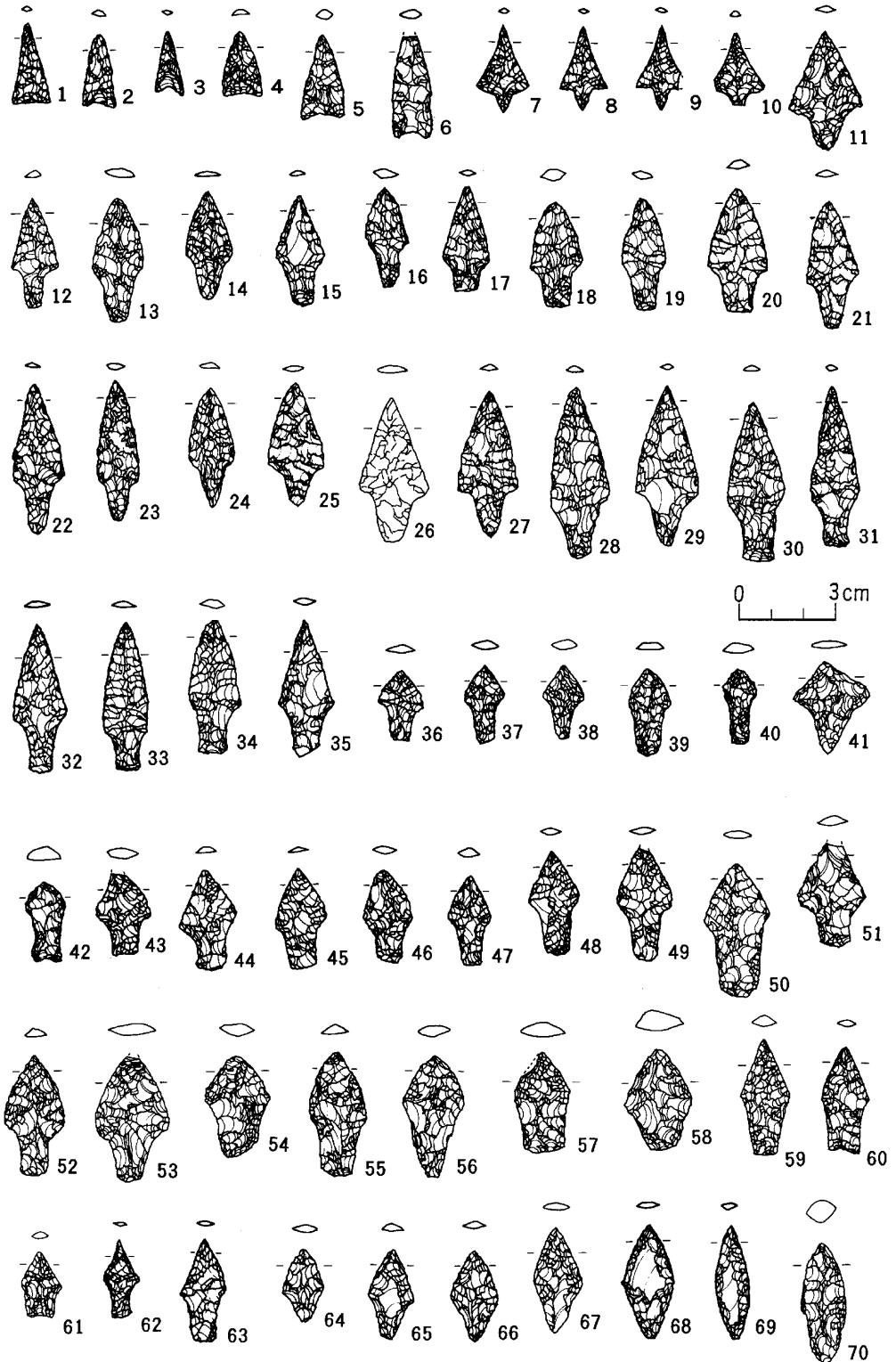
第184図(図版42)・第185図(図版43)はつまみ付きナイフ、いわゆる石匙である。1・19～23は刃部幅が広いものの、他は縦長剥片を素材とする。1は裏面の側縁部を中心に使用痕があり、10は表面の大きな剥離面に縦方向に伸びる使用痕がある。1～18は黒曜石製。19は安山岩石製。22はメノウ。他は硬質頁岩。第185図も縦長剥片を素材にしたもので1は先端部が尖り、3は丸みをもつ。6・7・16・18は肉厚で急斜な刃部である。8は玄武岩。9は安山岩。10～13は頁岩。他は硬質頁岩。

第186図-1～24は不整形のものもあるが総じて肉厚で、急斜の刃部をもつ円形搔器。20～24は原礫面を残す。全て黒曜石製。

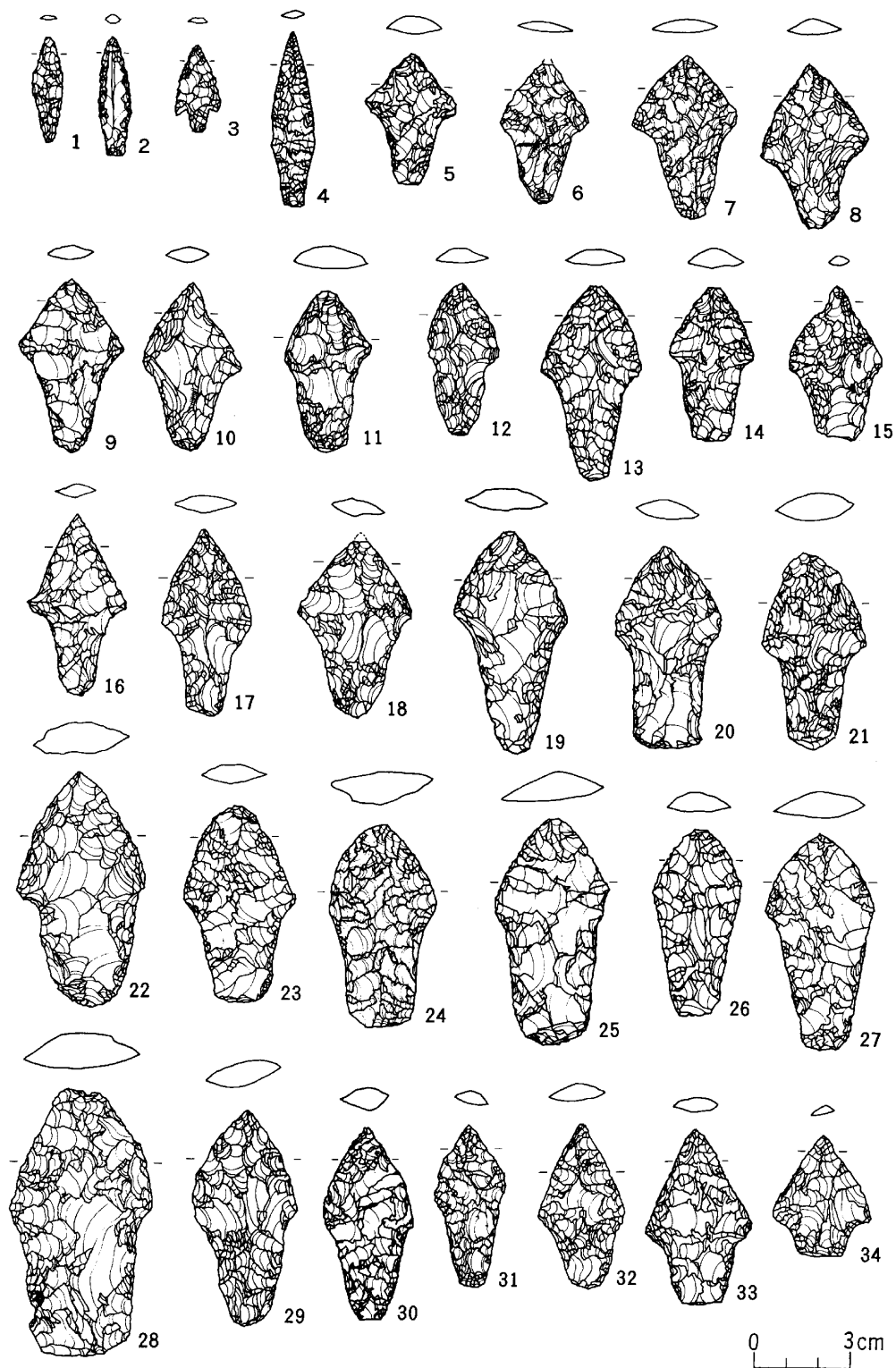
第187図-1～6は急斜な刃部をもつ搔器。6の表裏面、特に裏面には微細な使用痕が全面に及んでいる。第187図-7～18・第188図は縦長剥片の両側縁に加工を施した削器。第188図-19の硬質頁岩の他は全て黒曜石製。

第189図-1～6(図版45-1～6)は円錐形を呈した石核。単打面ですべても頭部調整され、4・6には微細な使用痕が観察される。すべて黒曜石製。

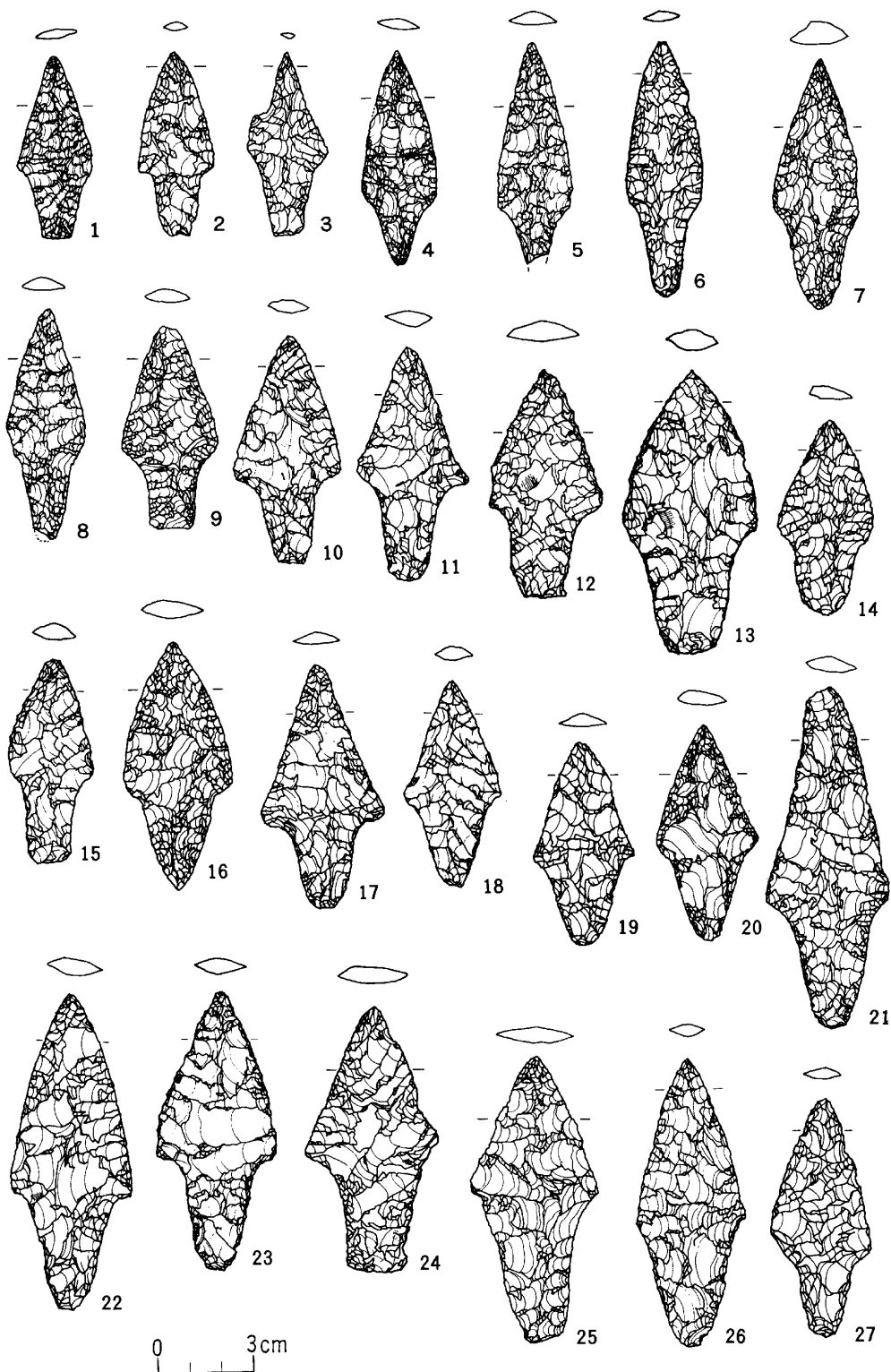
第190図・第191図(図版44)は磨製石斧。第190図-1～5は全面研磨の両刃磨製石斧。1・2は細身、3～5は方形を呈する。6・9・10は偏平な原礫の一端を研磨した両刃磨製石斧。7・8は敲打調整された片刃磨製石斧。11は砂岩製の原礫を素材としたもので、表面は研磨されているが裏面は大きな剥離面が残り、刃部は粗く加工されている。未製品であろう。12は全面研磨されているが刃部は欠失する。側縁部は敲打されている。1は黒色片岩。2は青色片岩。3は泥岩。4・5は黒色片岩。6は安山岩。7は頁岩。8は青色片岩。9・10は不明。11は砂岩。12は角閃岩。



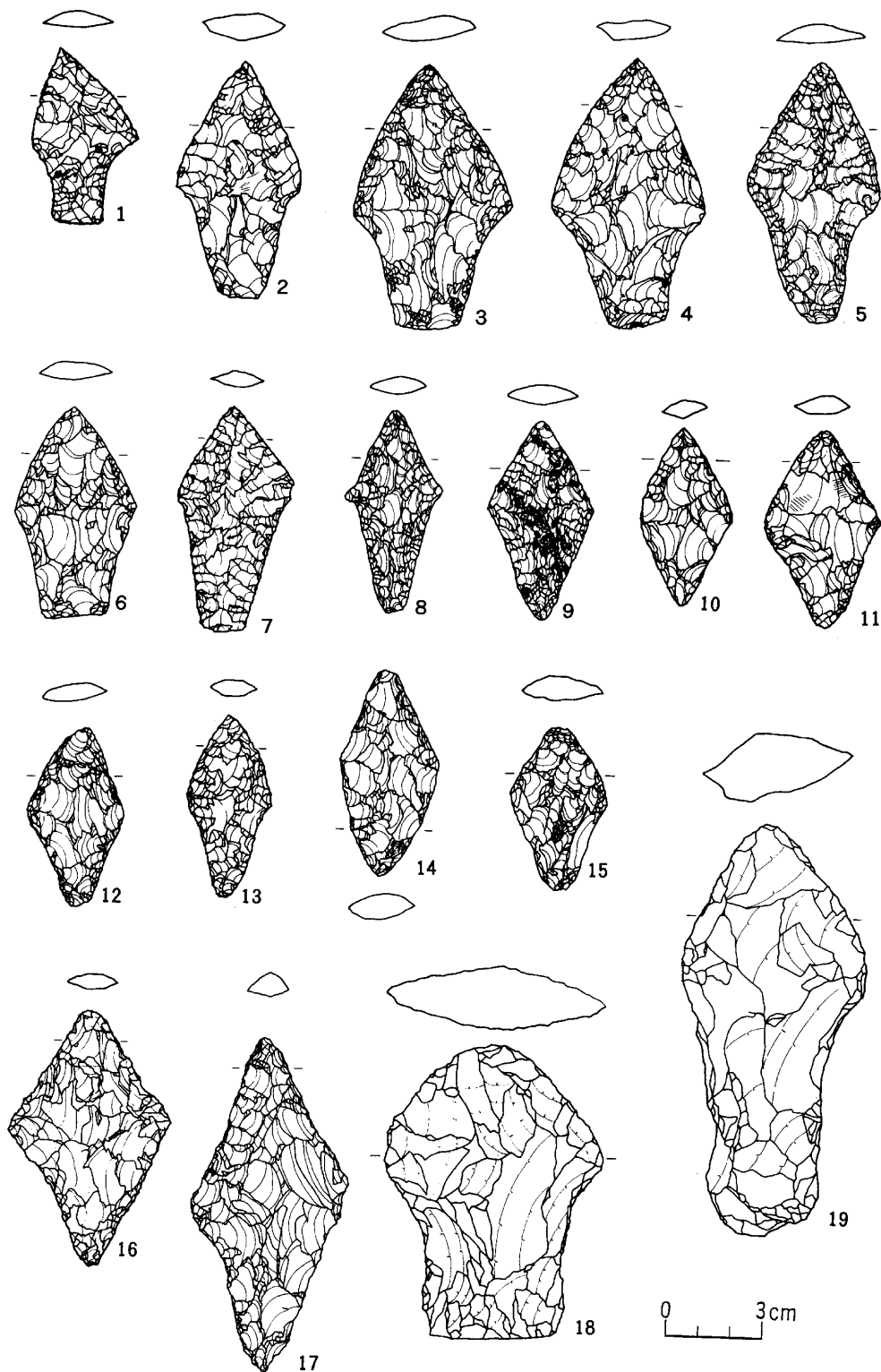
第174図 第VIII層出土石器（1）



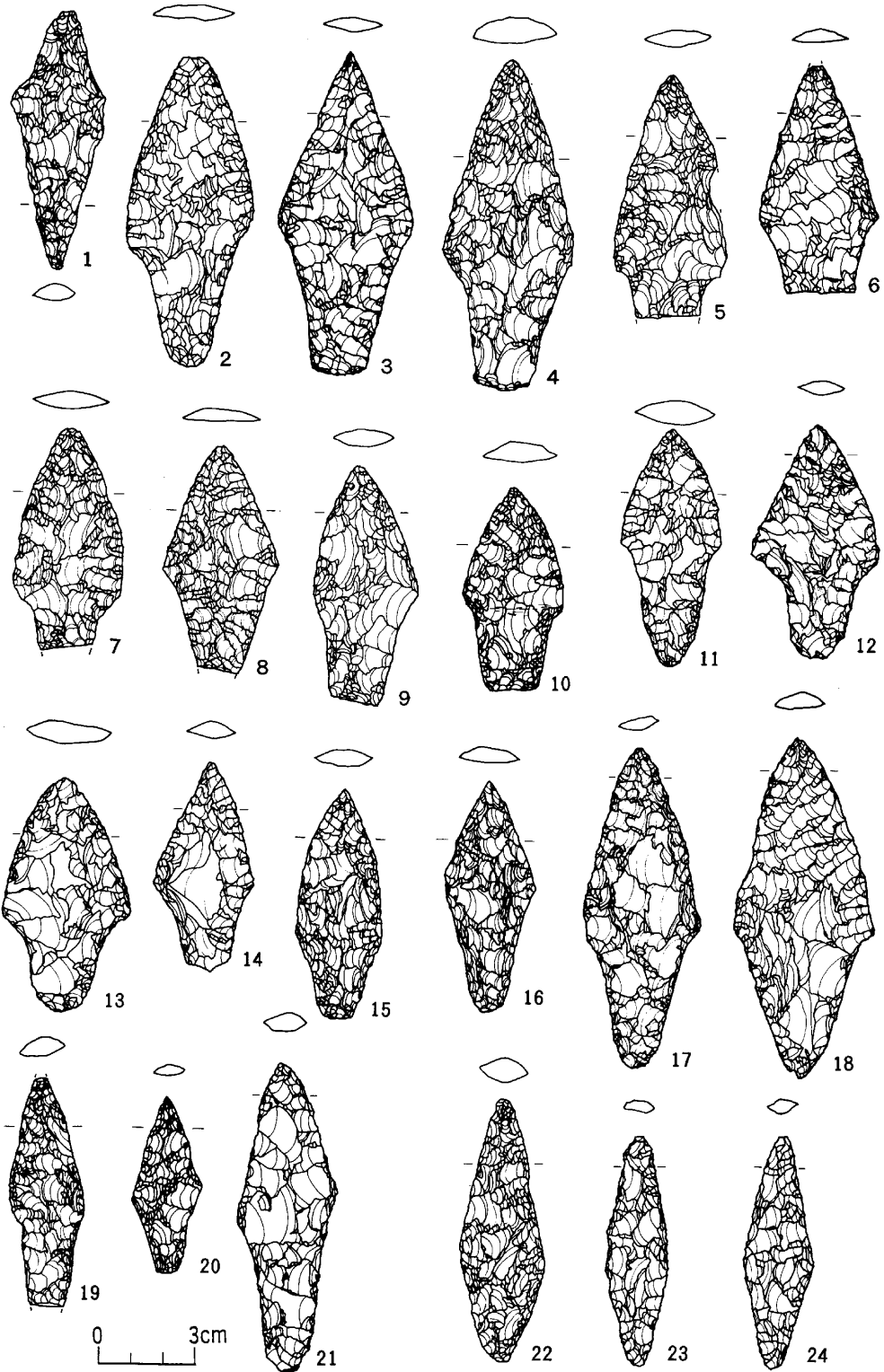
第175図 第八層出土石器(2)



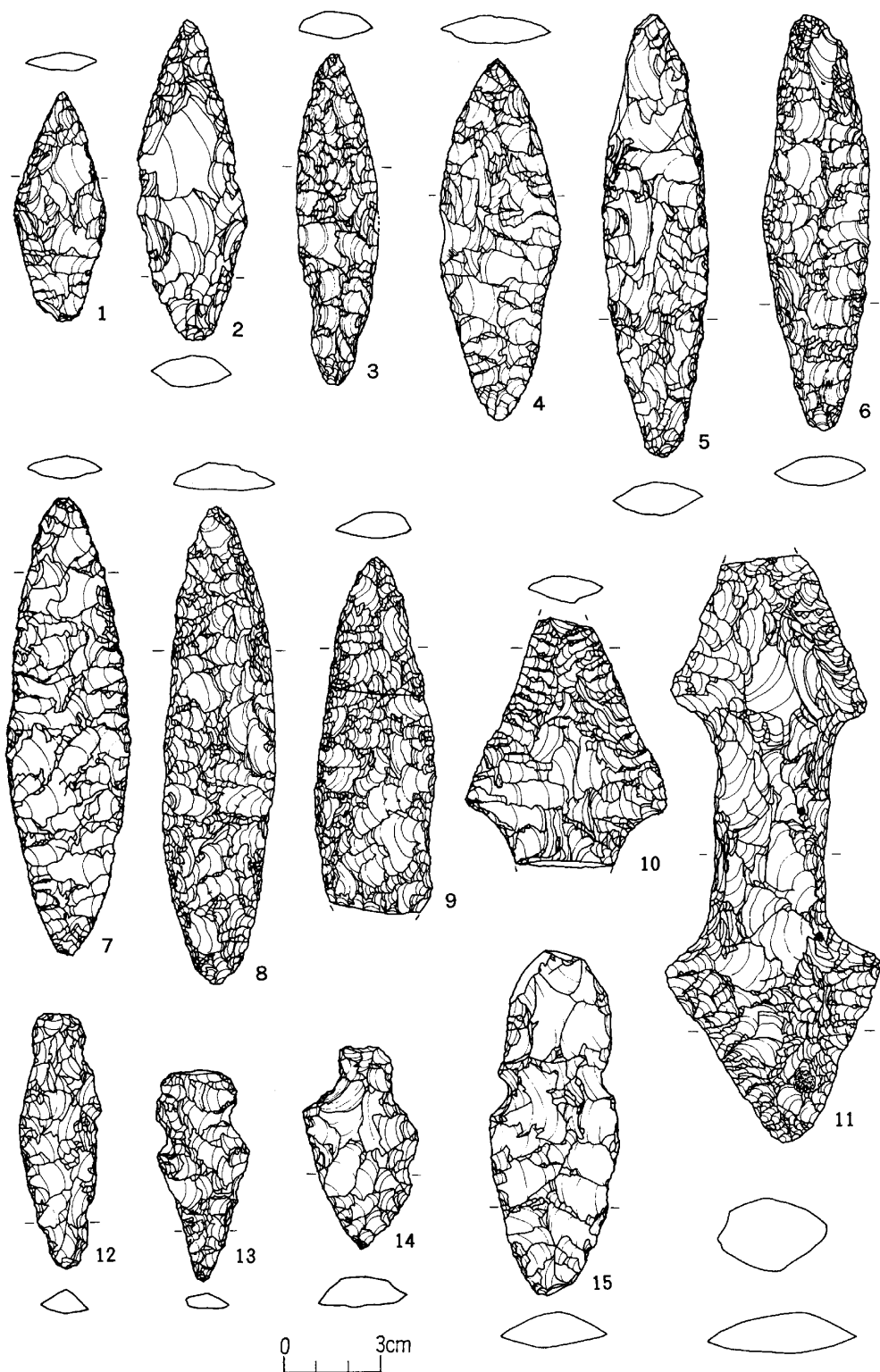
第176図 第VIII層出土石器(3)



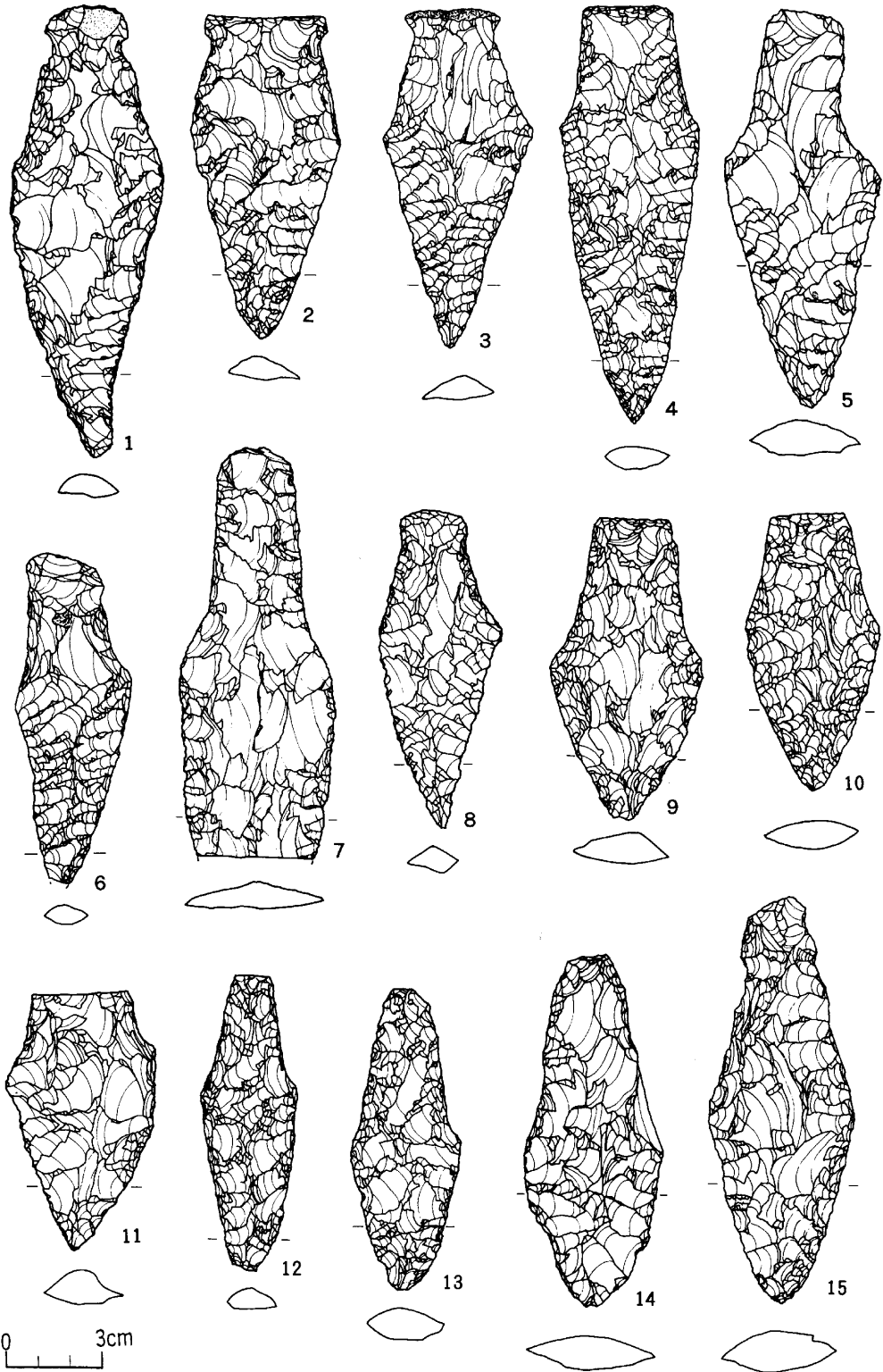
第177圖 第八層出土石器(4)



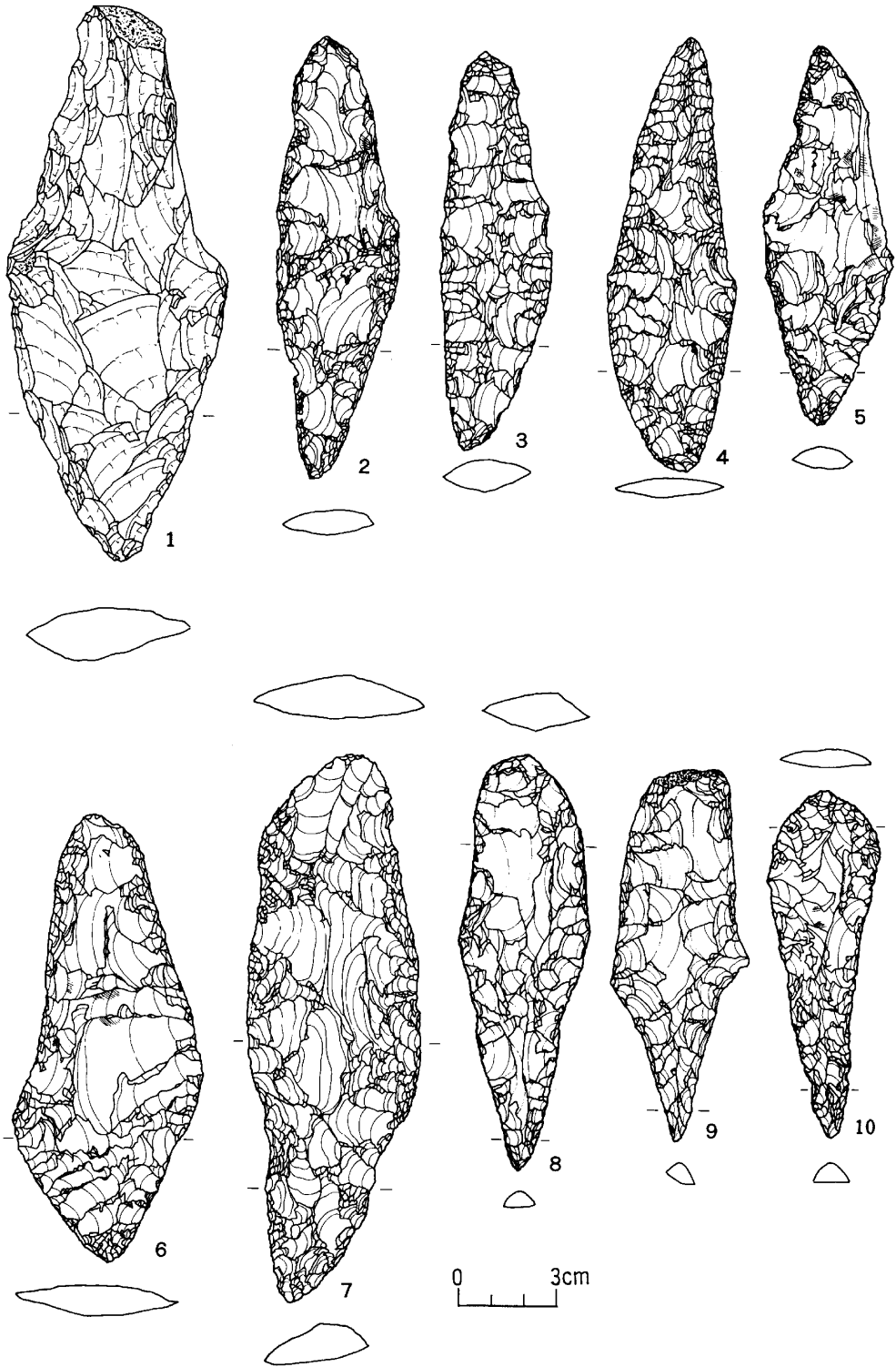
第178図 第八層出土石器（5）



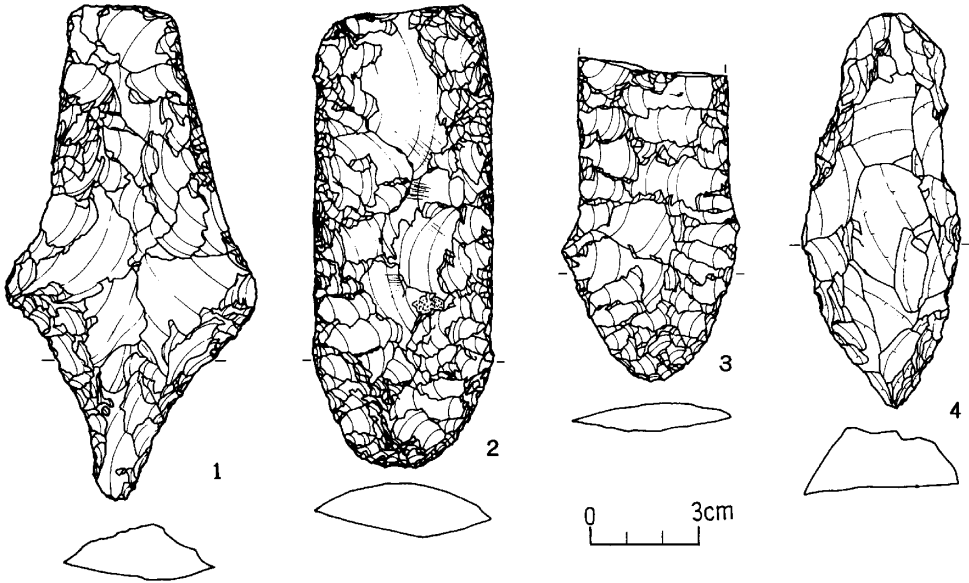
第179圖 第八層出土石器(6)



第180図 第八層出土石器(7)



第181図 第八層出土石器 (8)



第182図 第VIII層出土石器（9）

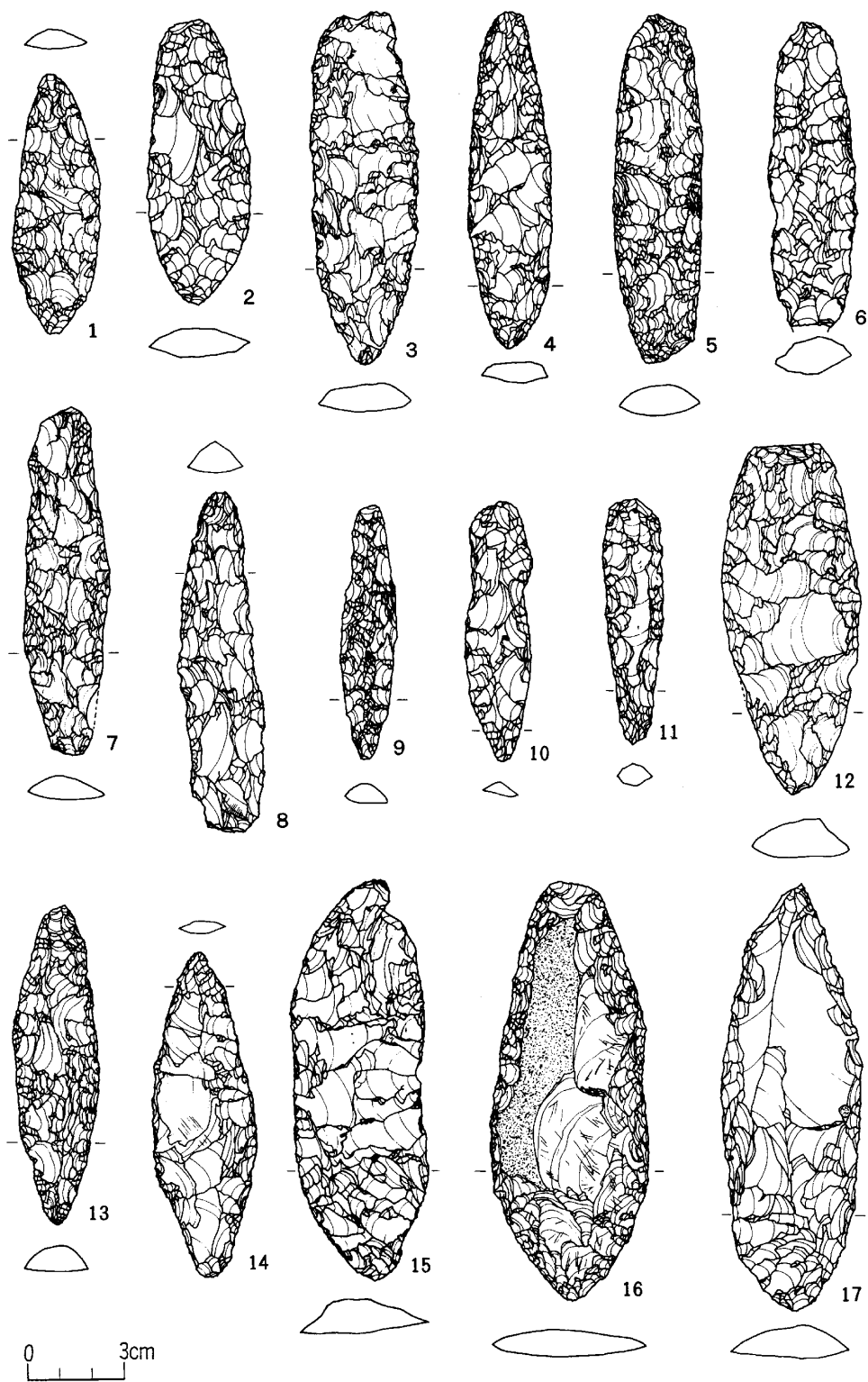
第191図-1は全面を研磨した両刃磨製石斧。全表面と裏面の刃部周辺は赤化する。火熱を受けているのであろう。頂部は敲打されている。2～6は原礫を素材としたもので、2は下端部を刃部として研磨した両刃磨製石斧。3は裏面刃部が欠失するため正確ではないが片刃と思われる。両側縁の中央部のみ研磨調整される。4・5は両刃磨製石斧。特に5は側縁部を除き研磨調整される。6は片刃磨製石斧。7は全面研磨の両刃磨製石斧。両側縁の一部は敲打される。8は撥状、9～12は方形状を呈した肉薄の両刃磨製石斧。1～7は安山岩。8・9・12は角閃岩。10は緑色片岩。

第192図-1は角柱状の礫の端部のみを研磨した片刃磨製石斧。2・3は叩き石。4は下部に大きな剝離面を残し、周辺部を調整加工したものである。裏面は加工されておらず石斧の未製品と思われる。5・6（図版45-12・13）は石球であるが5には叩き痕がある。2は砂岩、他は安山岩。

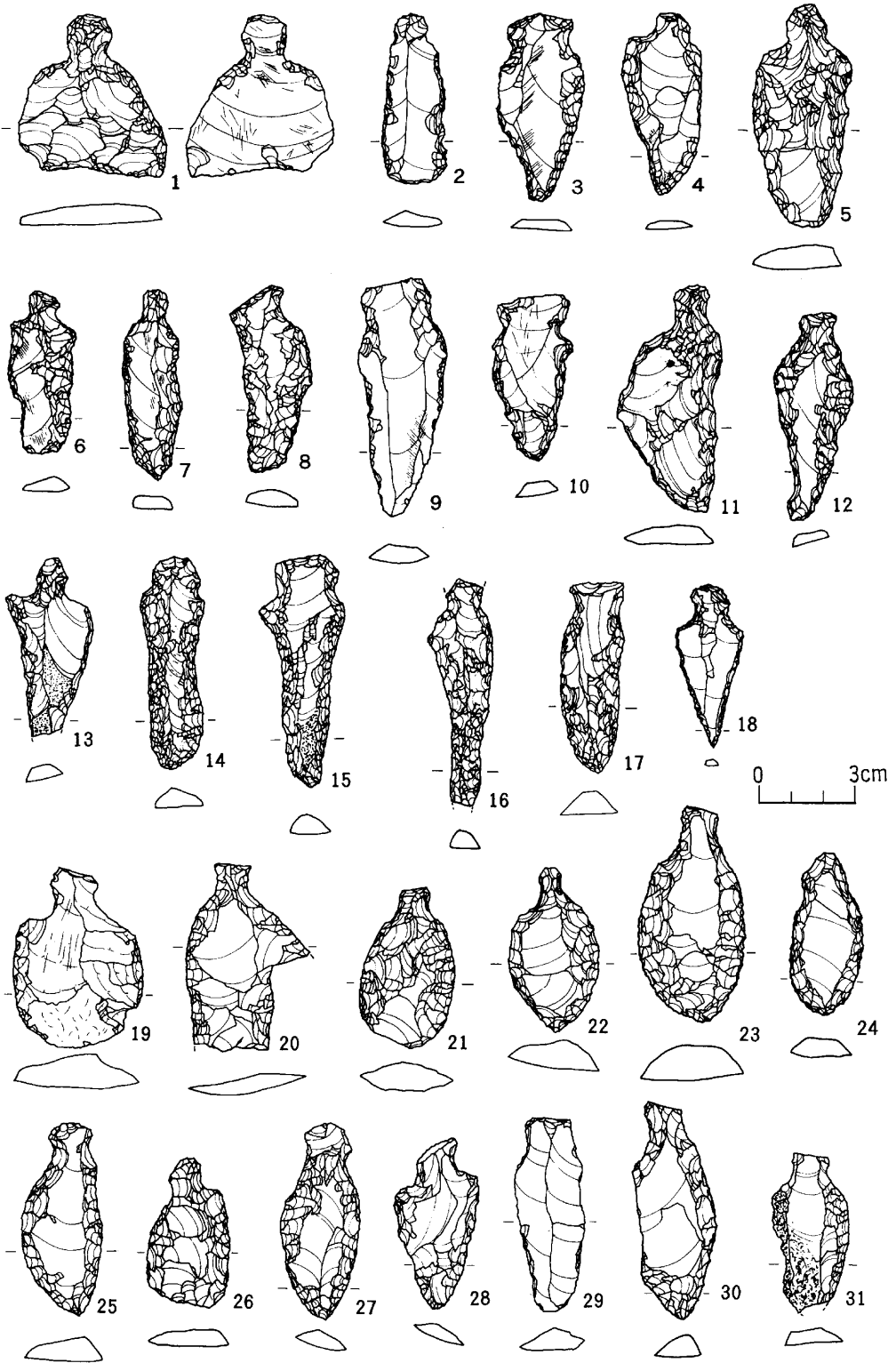
第193図-1～6（図版45-7～11）は角柱状の礫を素材とした磨石。1は表裏面の擦痕と共に表面で2個、裏面で1個の叩き痕がある。6は主に横方向からの細かい擦痕と側面に叩き痕がある。7は砥石。3は硬質頁岩、7は砂岩、他は安山岩。

第194図-1～4は2～3個の凹みがある砂岩製の凹石。1は4個所の打ち欠きがあり、石錘としても利用されている。5は硬質頁岩製の擦石。6は砂岩製の石皿。7は砂岩製の有溝砥石。

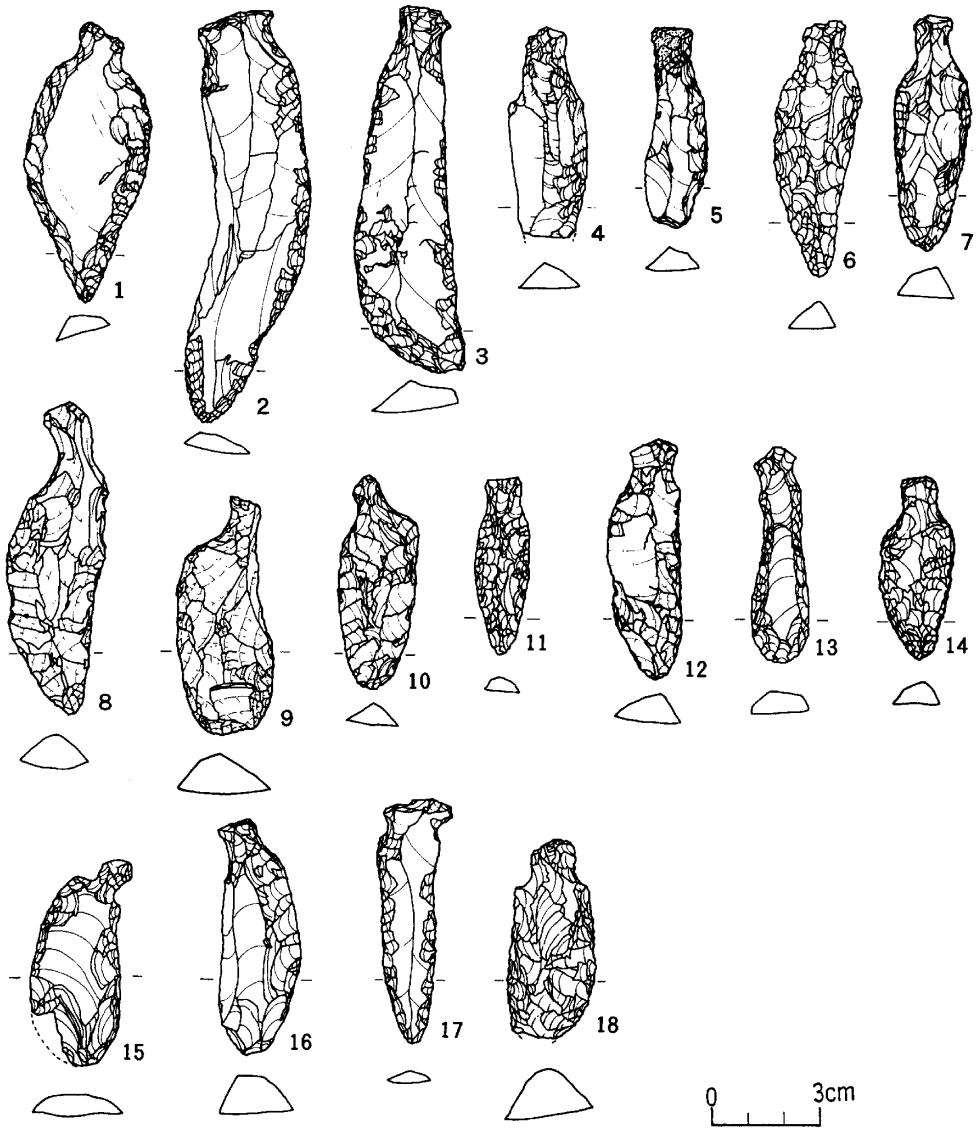
第195図-1は砥石。2は上部に2個の抉入がある砂岩製の石錘。3・4（図版45-16・17）は黒曜石製の石錐。5・6（図版45-14・15）の2点は同形態の異形石器。



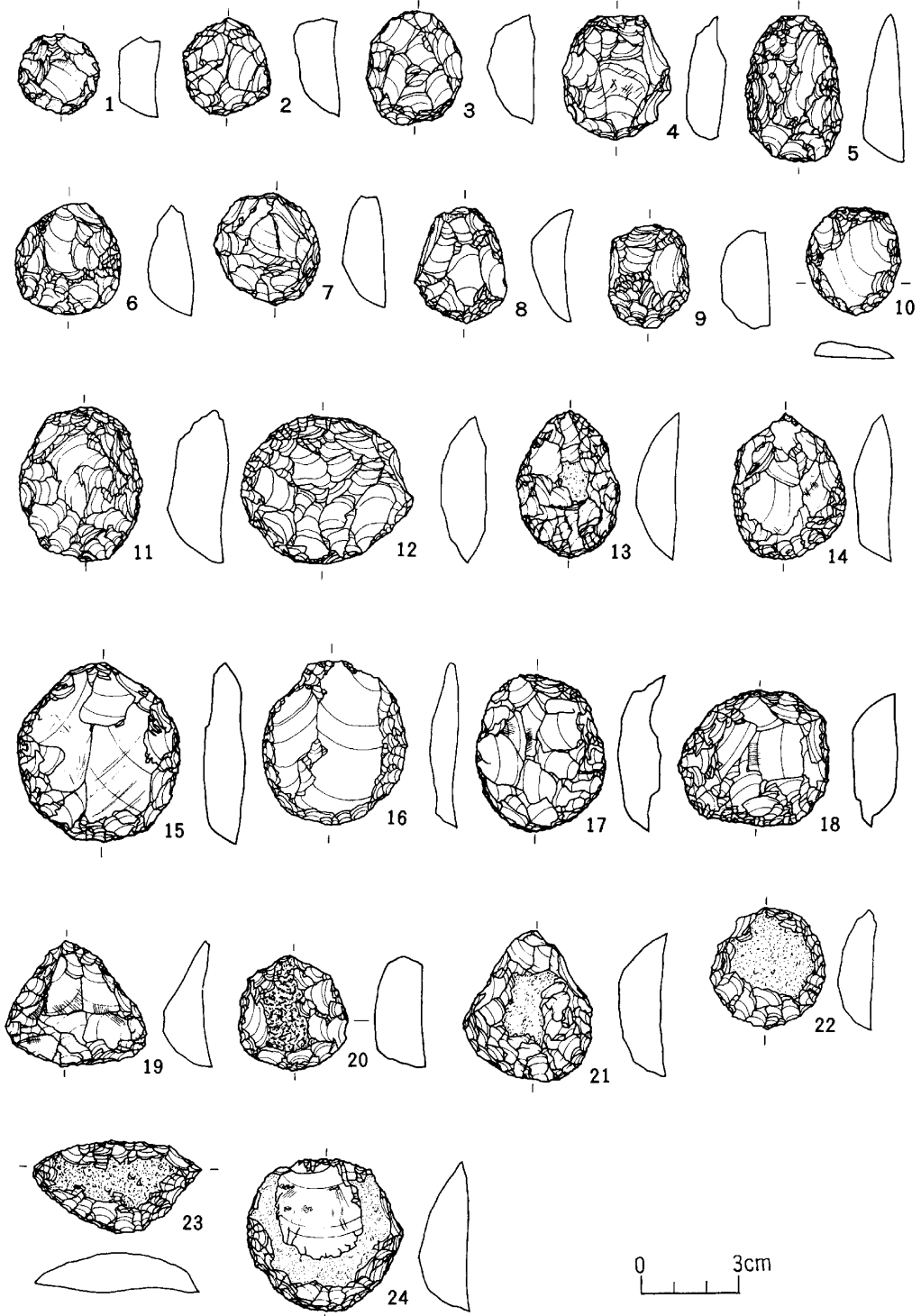
第183図 第八層出土石器 (10)



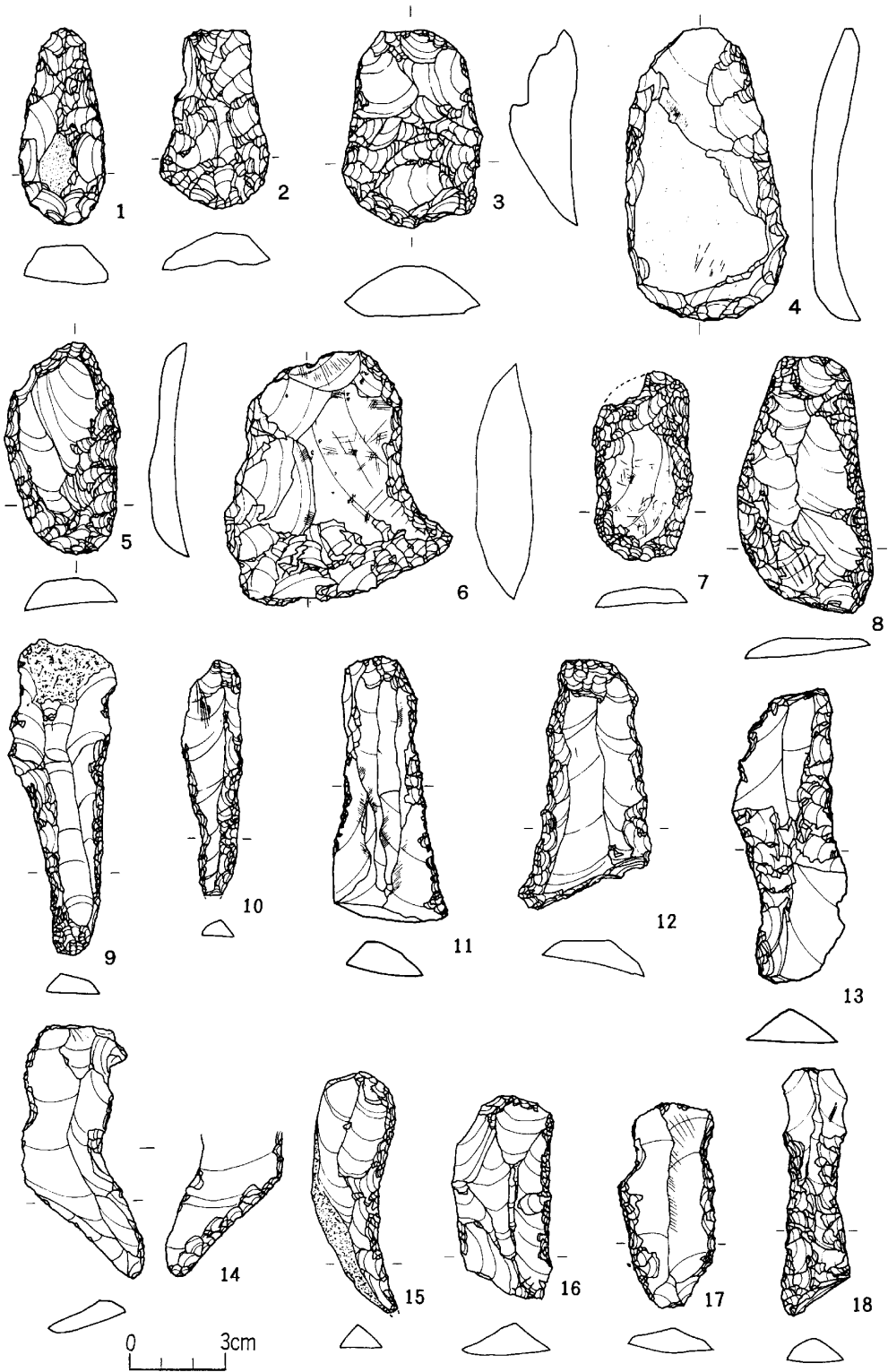
第184図 第八層出土石器 (11)



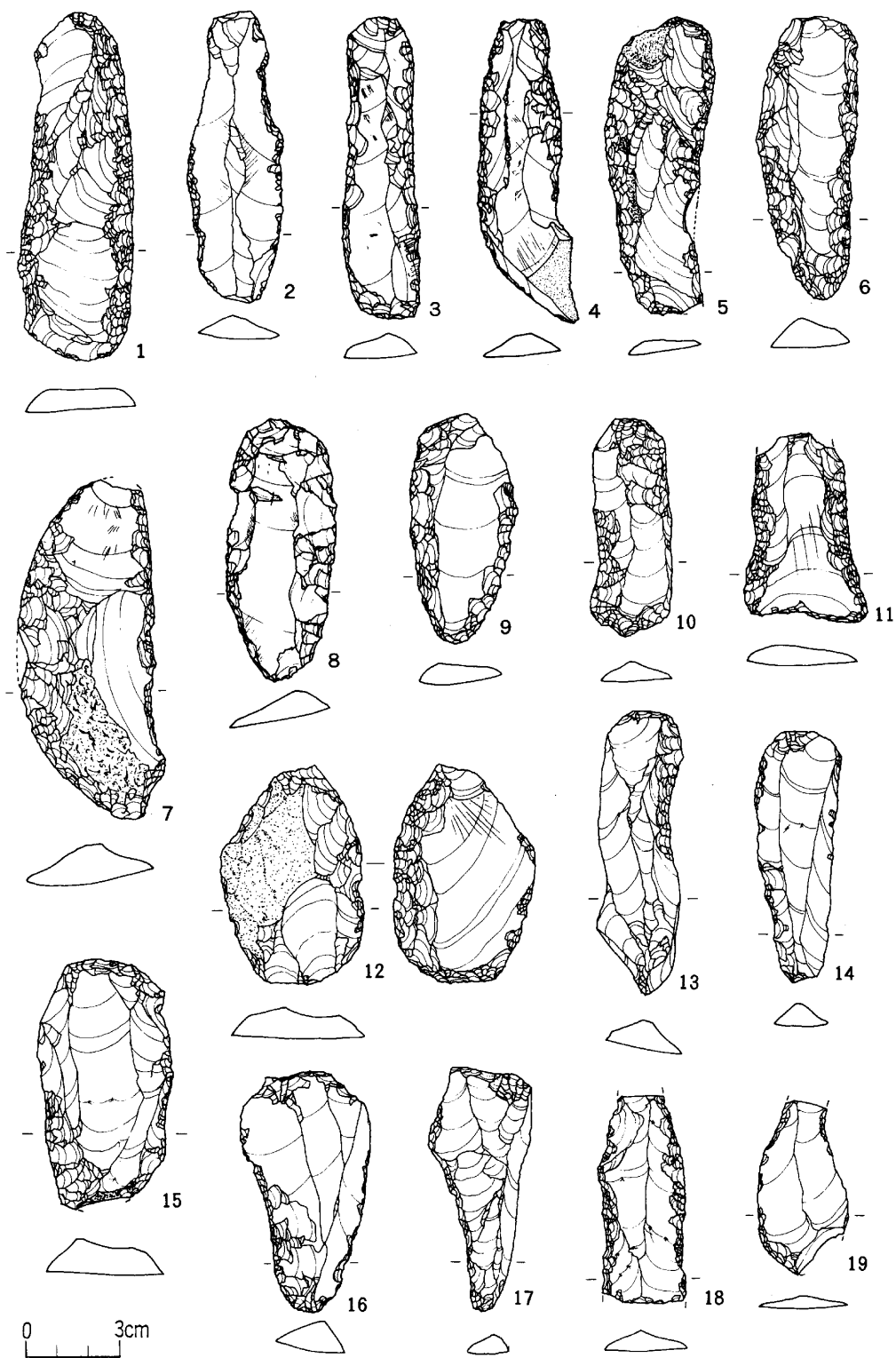
第185図 第Ⅷ層出土石器 (12)



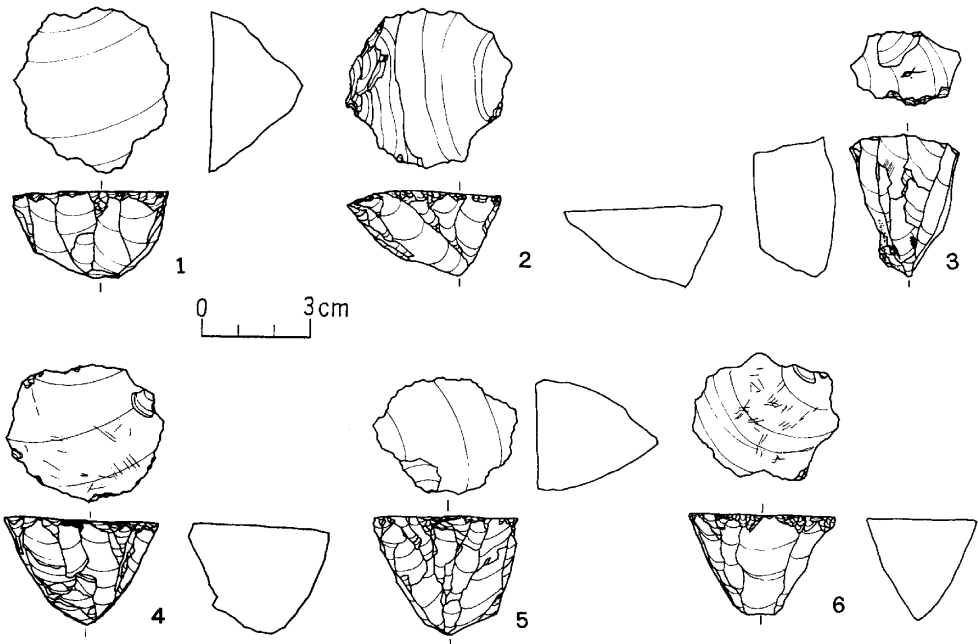
第186図 第VIII層出土石器 (13)



第187図 第Ⅷ層出土石器 (14)



第188図 第VIII層出土石器 (15)



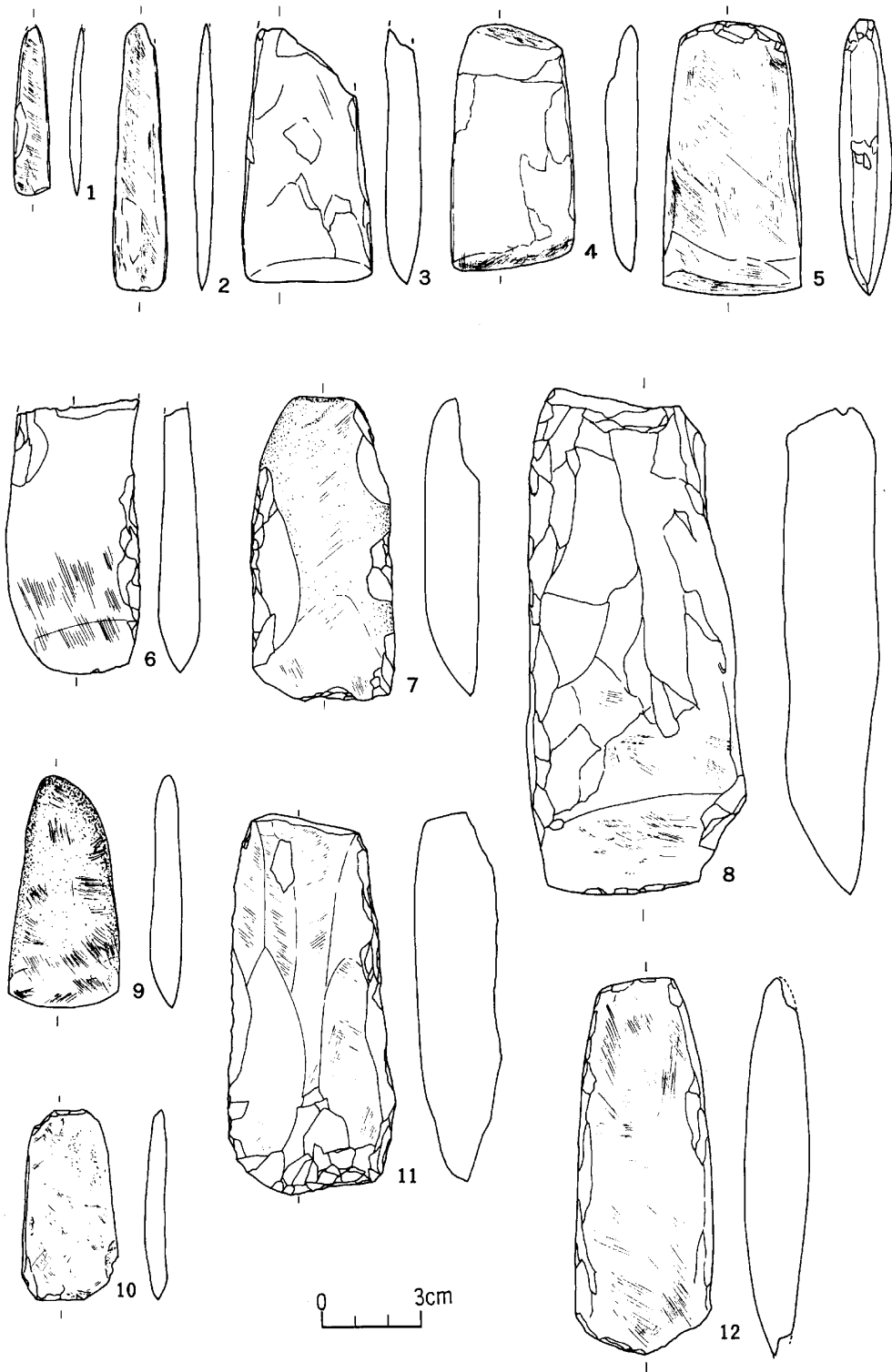
第189図 第Ⅷ層出土石器 (16)

第196図～第200図は打ち欠きによる抉入のある石錘。形態的には円形、方形、楕円形、長方形の各種がある。石質は砂岩・安山岩が多く僅かに頁岩も使用する。第196図－1～5・7・8は長軸面に2個の抉入があり、6は3個と変則的である。いずれも小形で扁平なものであり、1～7は円礫を利用している。8は安山岩製。9・10は砂岩製の肉厚な4個打ち欠きの石錘。9には縛着による浅い溝が観察される。10は表面を丁寧研磨している。

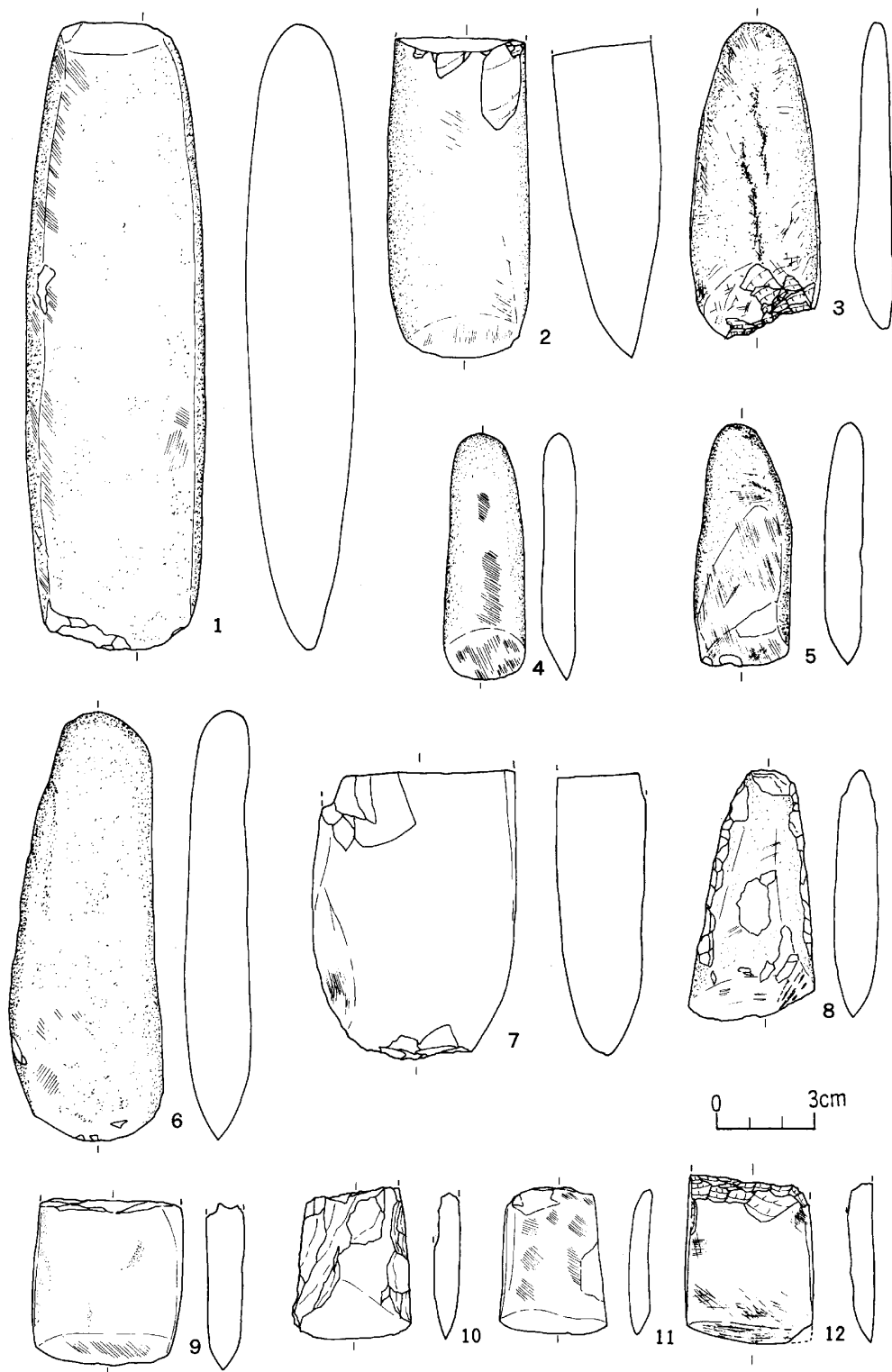
第197図(図版46)は小型の石錘。2・4・7・9は安山岩、他は砂岩。第198図－1～3は小型の石錘。4～6は長方形の中型石錘。7・8は楕円形の大型石錘。2・4～6は安山岩、他は砂岩。第199図(図版47)－1・2は楕円形の大型石錘。3～6は方形である。1～3は砂岩、4～6は頁岩。第200図は長方形の大型石錘で3は安山岩、他は砂岩。

骨角器 (第195図－7～14)

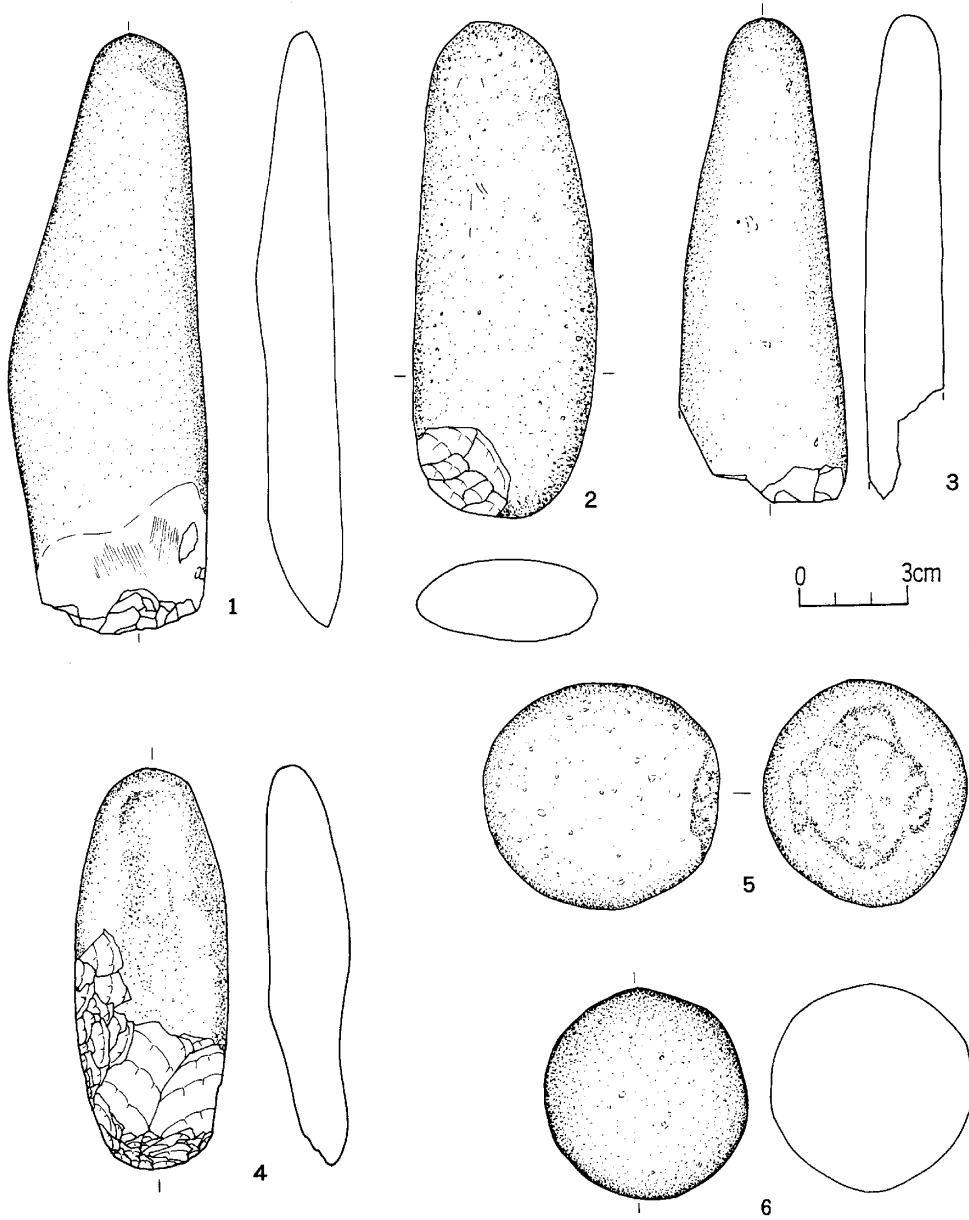
第195図－7～14は焼土から出土した。7は表面に3箇所刻線が施される。用途不明の骨角器。トリ骨。8～14は骨鋸片であろう。12・14は先端部が尖る。10はシカ骨と思われる。14は陸獣骨。13は海獣骨。8・11・12は不明。



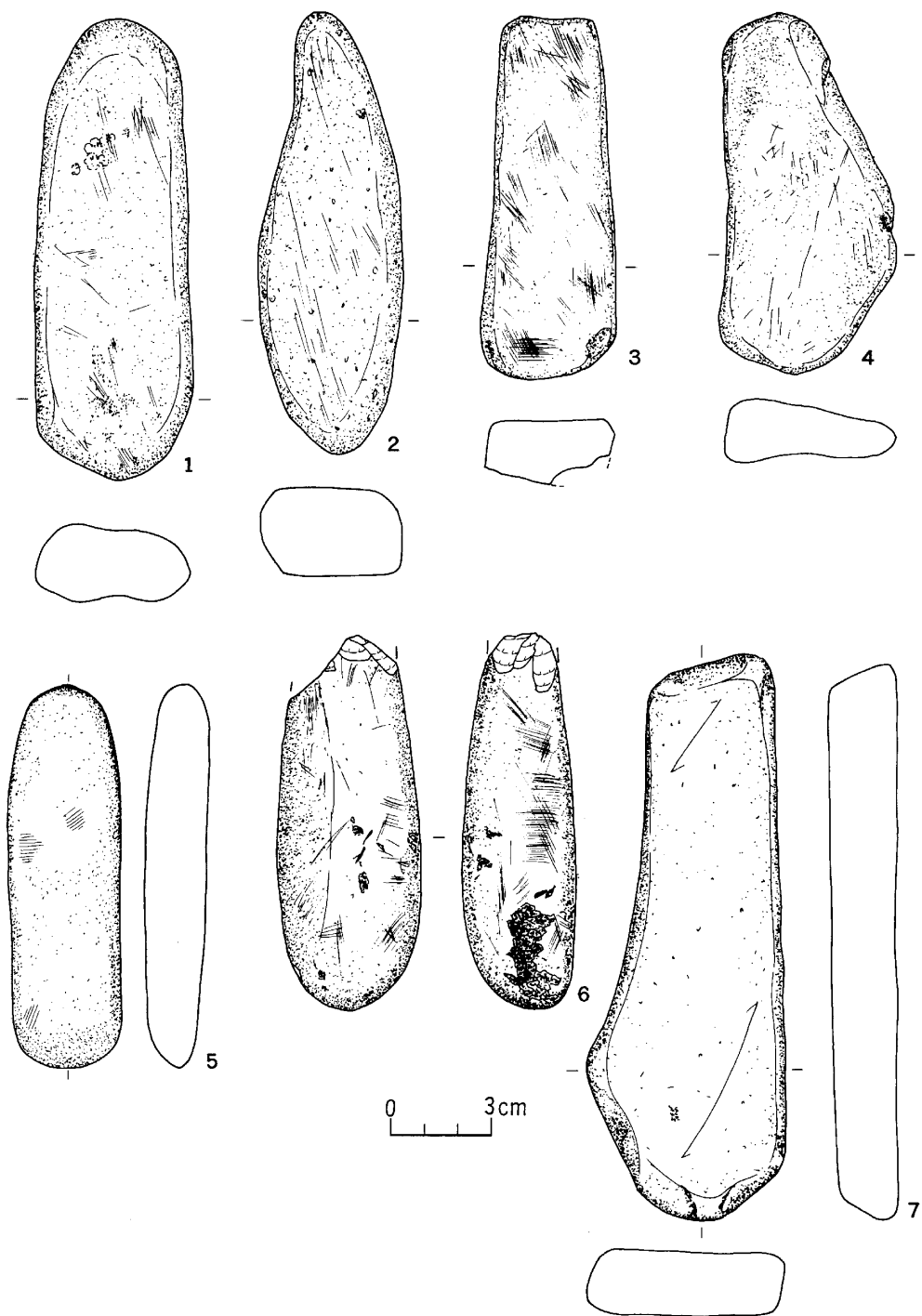
第190図 第八層出土石器 (17)



第191図 第Ⅷ層出土石器 (18)



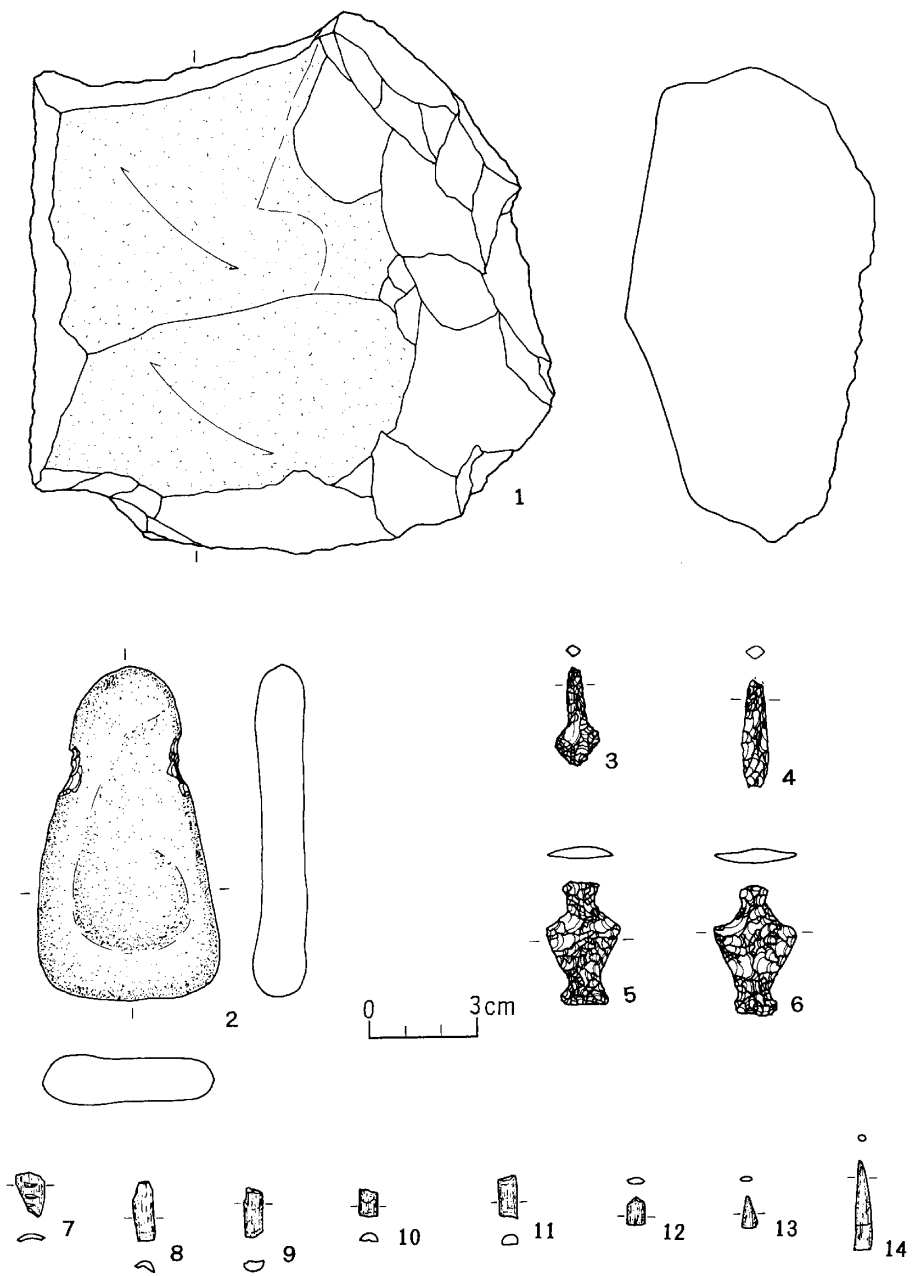
第192図 第VIII層出土石器 (19)



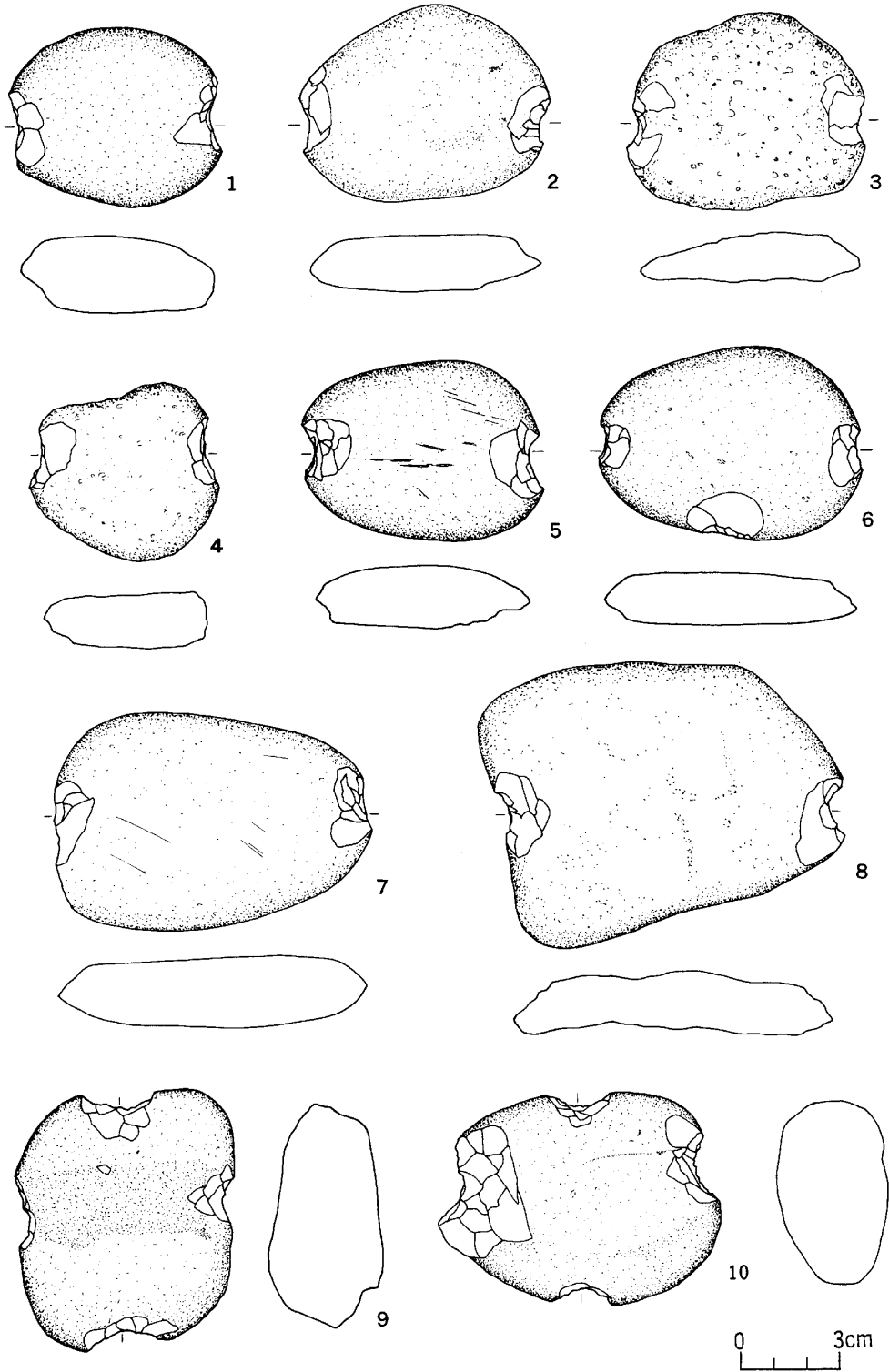
第193図 第Ⅷ層出土石器 (20)



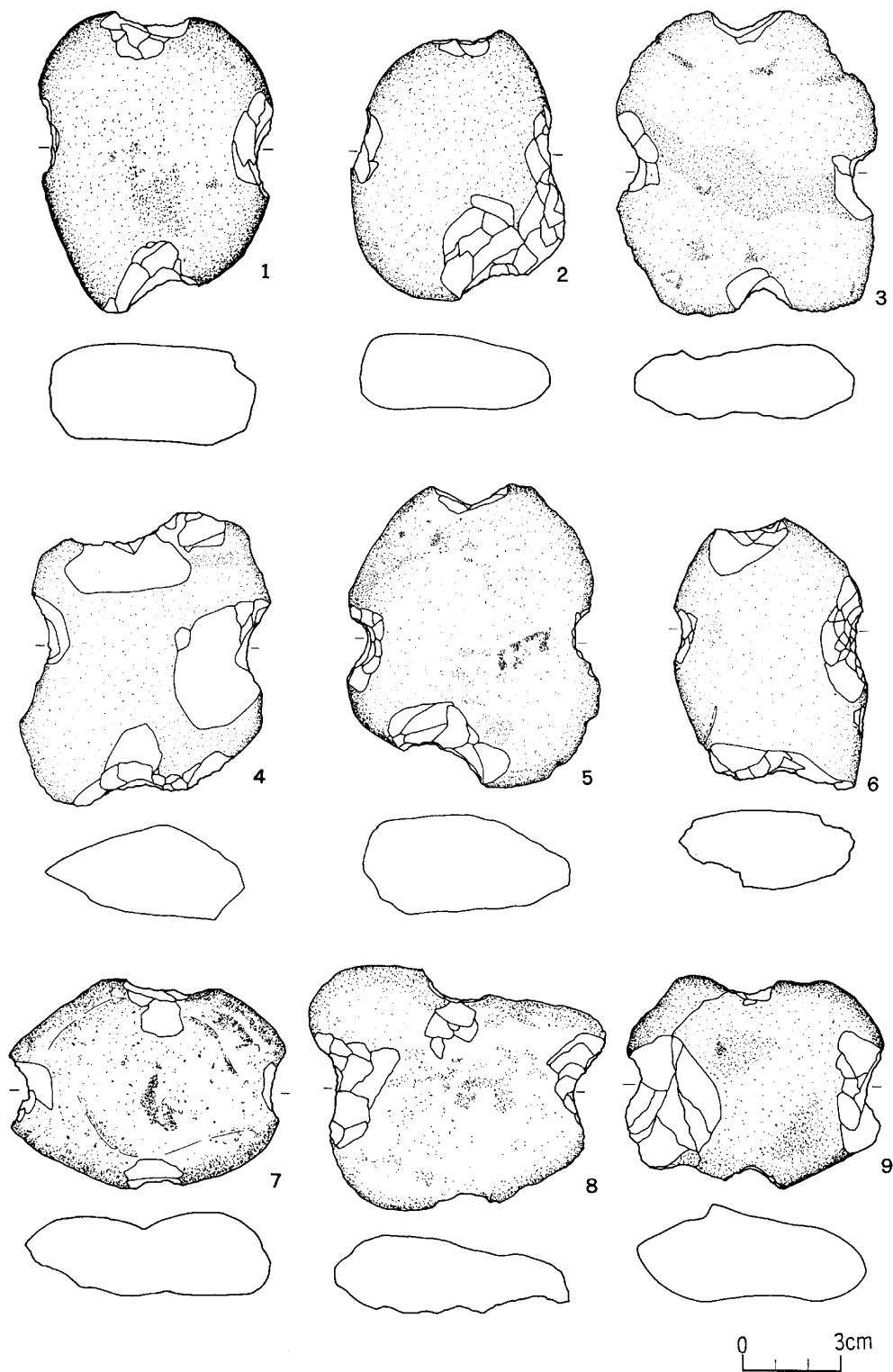
第194図 第VIII層出土石器 (21)



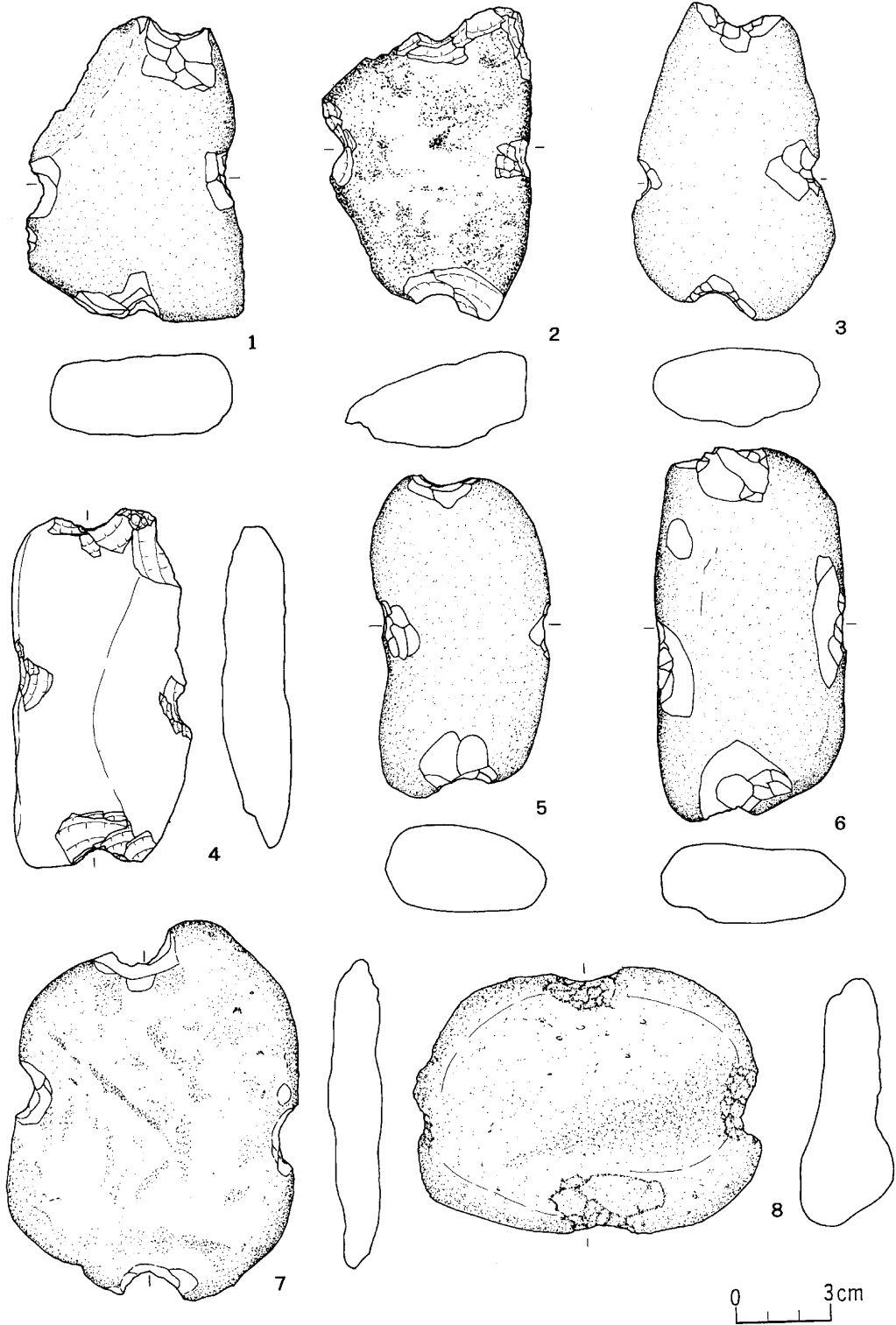
第195図 第Ⅷ層出土石器 (22)・骨角器



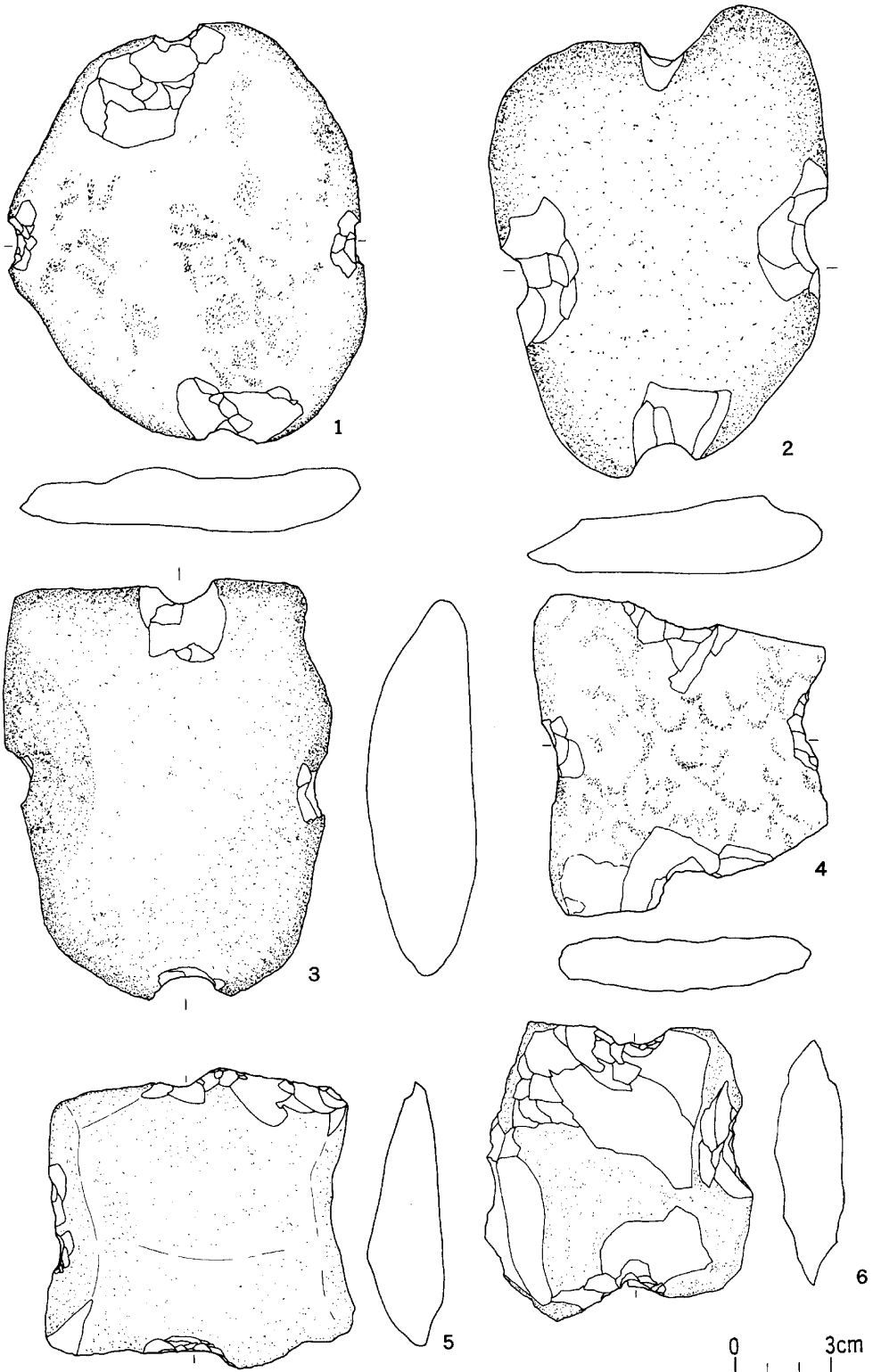
第196図 第VIII層出土石器 (23)



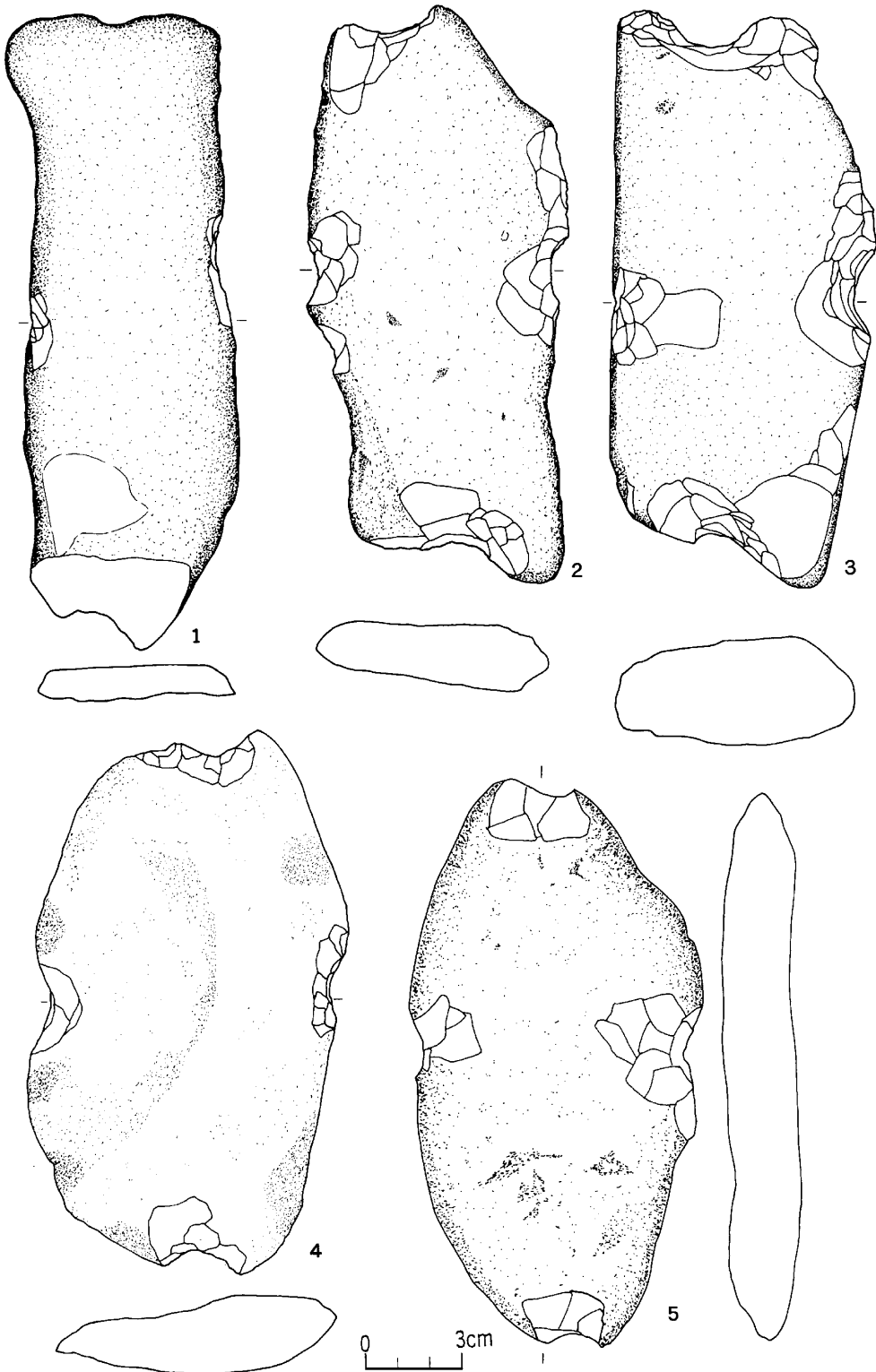
第197図 第八層出土石器 (24)



第198図 第VIII層出土石器 (25)

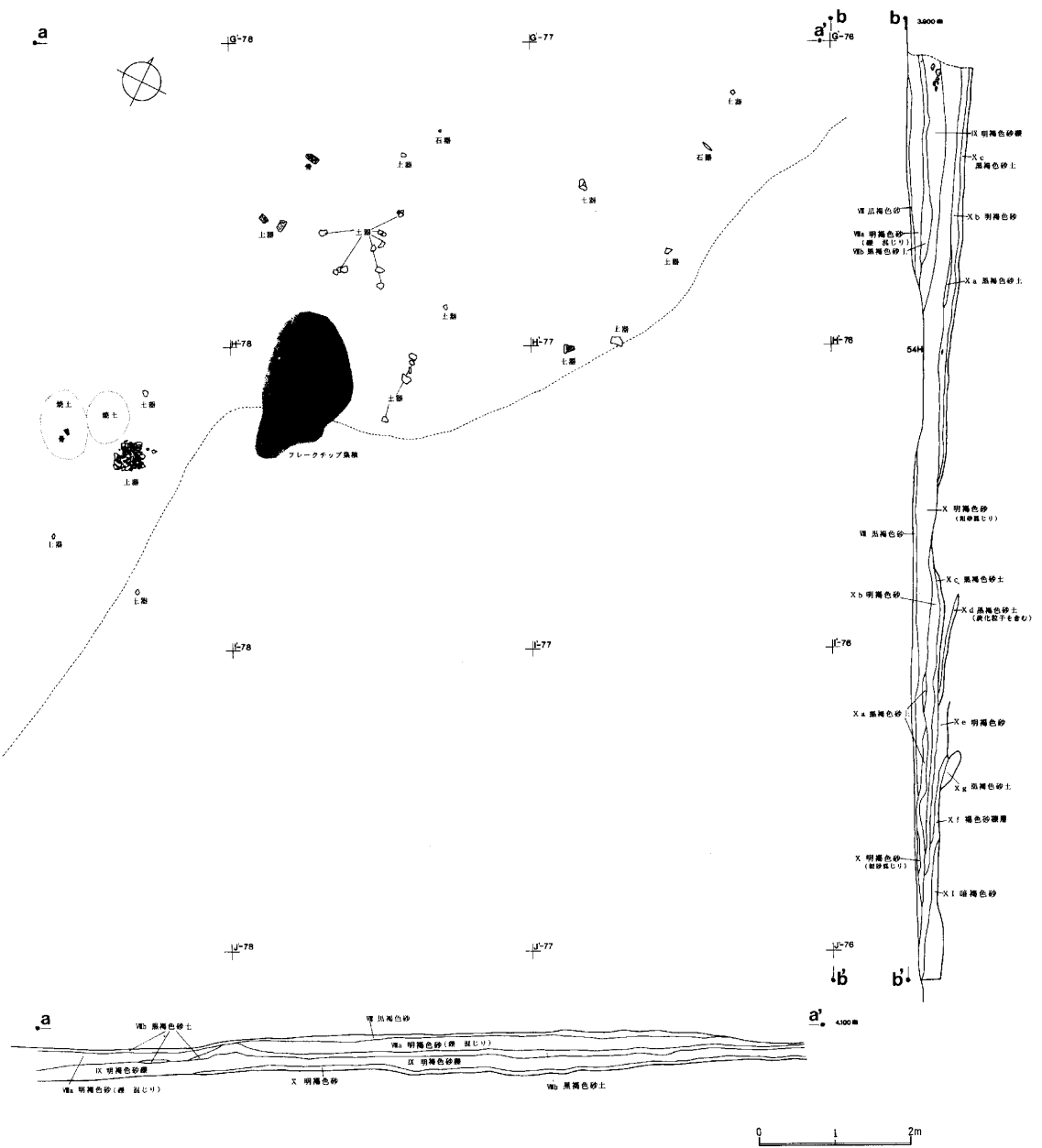


第199図 第八層出土石器 (26)



第200図 第VIII層出土石器 (27)

常呂川河口遺跡



第201図 第Xa層焼土・遺物出土平面図

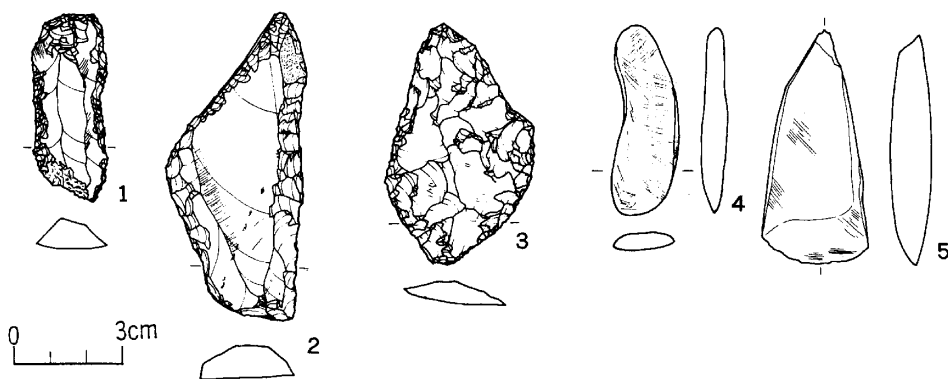
第XI章 第VIII b 層の遺物

第VIII b 層の概要

本層はJ'76、77の周辺とG'75～80グリッドから未発掘区の南側のグリッドに広がる様である。しかし、VIII層が発掘区の広い範囲に堆積するのに対し、VIII b層は極めて狭い部分にある。第VIII層から分派して潜り込む状態と、第201図のG'76～80グリッドの土層図に示す通り皿状の浅い窪みに腐食土が堆積した状態とである。色調は黒褐色を呈し、炭化粒を混入する。層厚は薄くて10cm。厚くても15cm程である。部分的に欠失するなど不安定に堆積し、短期間のうちに形成されたのであろう。

遺物 (第202図-1～5)

1・2は削器。3は片面加工ナイフ。1～3は黒曜石製。4は刃部を縦位、胴部を横位に研磨した泥岩製の磨製石斧。5は破損した右側縁部を研磨調整した片刃の緑色片岩製の磨製石斧。本層からはこの他に、図示していないが胎土に繊維を含む北筒式系土器の土器片が出土している。



第202図 第VIII b層出土石器

第Ⅹ章 第Ⅹa・Ⅹc層の遺物

第Ⅹa・Ⅹc層の概要

第Ⅹa・Ⅹc層は第201図の土層図に示す通り、第Ⅹ層から西側に潜り込む様に堆積した（古）トコロ6類の包含層である。本層は発掘区の全域に堆積するのではなくH'75~78、I'75~78、J'75~77グリッドの周辺にあるが、一部は南側の未発掘区にも伸びる傾向である。層厚は5~10cmと薄い。第Ⅹa層と第Ⅹc層は明褐色砂を間層として挟むが、この2層は1か所で接続する。土層の接続部では第Ⅹa層が第Ⅹc層を切り込んで上部に堆積していることが明瞭である。下層を切り込んで上部に堆積するのは他の発掘区においても観察できる。複雑な土層の堆積は河川の影響等によるものと推測されるが、基本的に土層の逆転現象は認められないものと判断している。

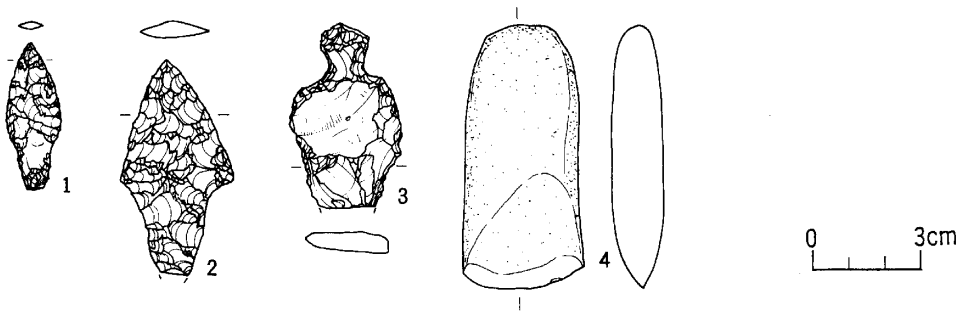
遺 構 (第201図)

I'77グリッドにフレーク・チップの集積がある。第Ⅹa層の上部から検出されたもので、長軸1.10m、短軸0.70mの範囲に黒曜石が集中して遺されていた。I'78グリッドには直径0.70mと0.80mの2個の焼土も認められるが、赤化はそれほど著しくない。周辺には炭化粒、ベンガラ状の赤色顔料も一部に散布されている。土層の堆積状態や堆積範囲から推測すると、第Ⅹa層は極めて短時間に形成され、利用されたものと判断できる。

遺 物 (第203図・第204図~206図、図版37-1~10)

第204図-1（図版37-6）は第Ⅹa層出土。張り出した肥厚帯には押引文があり、4個の突起が付される。胴部は丸みを持ち、結節羽状縄文が多様される。

第205図-1は3段の押引文があり、突起下部の円形貼付文には刻みが施される。焼成は良い。2（図版37-9・10）は底部が細く、上部にかけてラッパ状に開く。口唇部には4個の小突起をもち刺突が加えられる。口縁下部には押引文が施される。4は口縁部と頸部の2本の隆帯が突起下部から垂下した隆帯と連結する。口唇部と隆帯、内面には刺突が施される。



第203図 第Ⅹc層出土石器



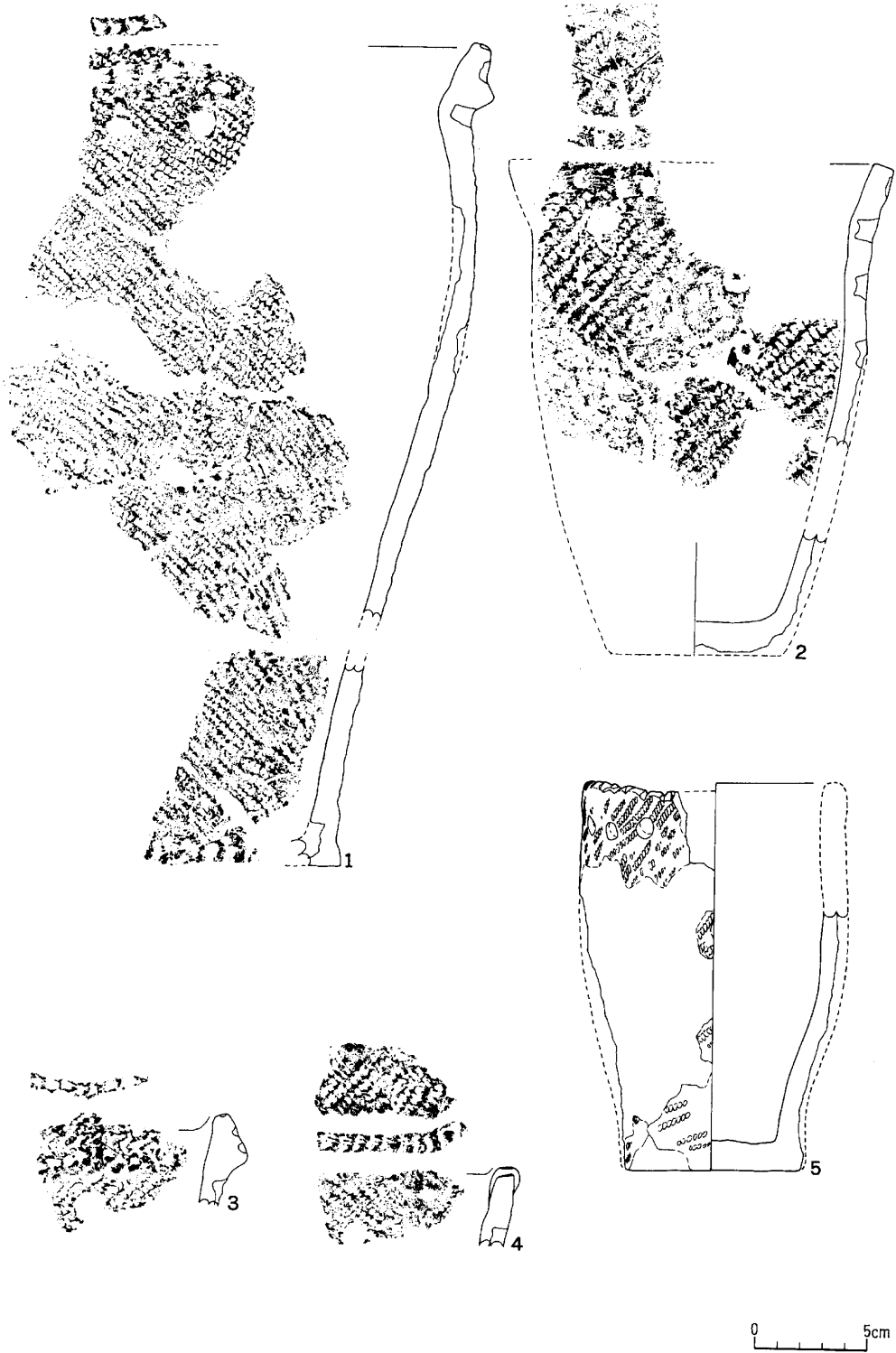
第204図 第Xa層出土土器（1）

第206図-1は切り出し状の口縁部に押引と円形文、口唇部に刺突が施される。押引は底部の外側にも見られる。繊維を含む。2（図版37-7）は角形の口唇部と口縁部に押引文、頸部に円形文が施される。胎土に多量の繊維を含む。3は口唇部と口縁部に押引文が施され、4は口唇部に押引文が施される。5（図版37-8）は胴下部から上部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。比較的厚みのある土器で口縁部に円形文、口唇部には刺突による刻みが施される。繊維を含み、内外器面には赤色顔料が付着する。

第203図（図版37-1～5）-1は有茎石鏃。2は石銛。3は石匙。4は硬質頁岩製の円礫の端部を刃部とした磨製石斧。1～3は黒曜石製。



第205図 第Xa(1~4)層出土土器(2)



第206図 第Ⅹa(1~4)・Ⅹc(5)層出土土器(3)

第Ⅲ章 第Ⅱ層の遺構・遺物

第Ⅱ層の概要

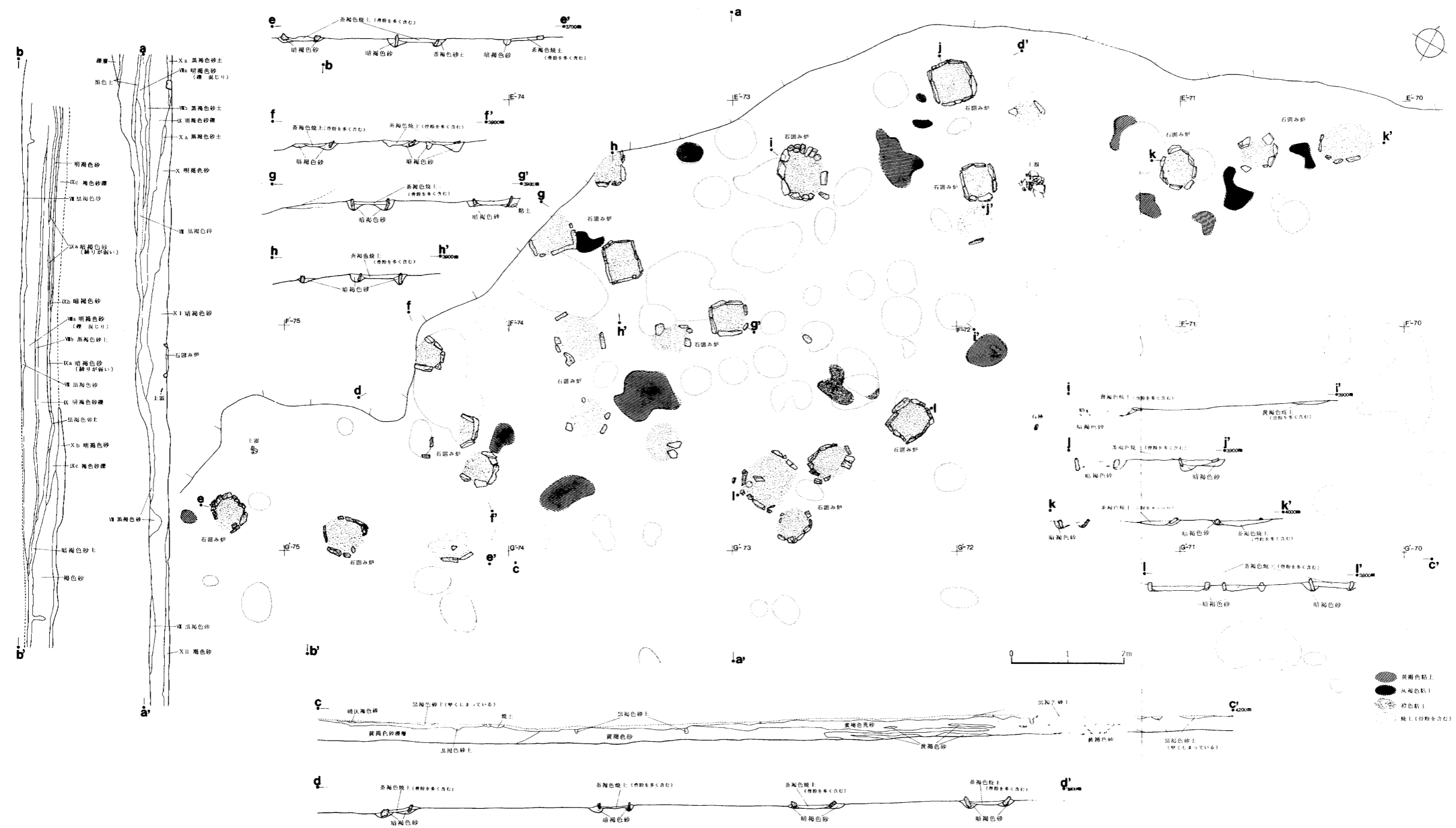
本遺跡の発掘区域は南北に長く、西から東にかけて緩い傾斜であるため堆積は一様でない。薄くて約5～6cm、厚くて約10～20cmの黒色砂層が堆積し、平坦面ほど層厚は薄い。下層は粒子の極めて細かい明褐色砂が堆積する。第207図の土層図に示す通り東西F'73・G'73から西側のE'73グリッド、南北E'70・F'70・G'70からG'75グリッドまでの周囲約20mは平坦であり石囲み炉が構築されている。I'73から東側のJ'73・K'73など各グリッド方面では緩傾斜し、厚く黒色土が堆積するもののF'73グリッドから西側では黒色砂層が断絶し、F'73・G'74グリッドにある石囲み炉は真中から破壊を受けている。この断絶面は南北方向に伸びており常呂川による土砂流失の影響によるものと考えられ、上層には礫層・砂礫層が堆積する。現在の常呂川は西側で大きく蛇行するが、第Ⅲ層の形成以後は直線的であった可能性が高く、幾度かの土砂堆積によるせり出しで現在の地形が形成されたのであろう。石囲み炉が真中から破壊を受けていることは、少なくとも本層が形成される前までは安定した平坦面が広い範囲に及んでいたということの証左でもある。

遺 構 (第207図・第208図、図版48-1・2)

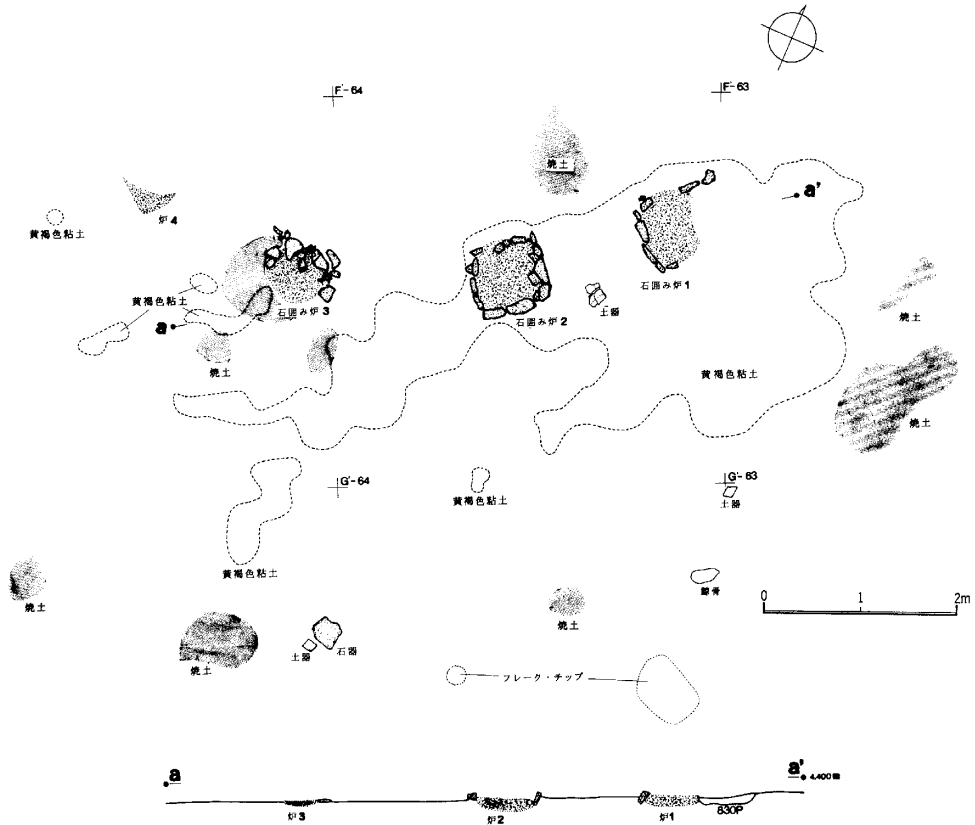
遺物である押型文土器や石器の一部は上部の明褐色砂層からも僅かに出土する。主体は第Ⅱ層であり、遺構である石囲み炉群(図版48-1・2)、焼土は本層を剝土する段階で検出した。石囲み炉は基本的に角礫を方形に配置し、周辺には黄褐色粘土も残存することから貼床としていたことも考えられる。柴浦第一遺跡例と同じ配置パターンを取る個所も見受けられるが、中には石囲み炉が不都合に思えるほど異常に近接する個所もある。石囲み炉が重複することは無いが、焼土の上に石囲み炉が作られている個所もあり新旧関係がある。石囲み炉はある程度の時間差があって構築された可能性がある。

石囲み炉、周辺の焼土からは動物遺存体の分析報告でも明らかな様に各種の魚骨、陸獣骨等が検出された。柴浦第一遺跡の場合は「祭祀的な場所」と指摘したが、本例の場合は食料源である魚・動物骨があることや、各種の土器・石器、骨角器そしてフレイク・チップの集積から石器製作が行われている点から共同作業場としての役割を持っていたものと推察する。

土器は各発掘区から出土するが第209図、第210図、第211図、第212図、第213図、第218図、第219図、第220図、第221図、第223図の大型土器は図版51-1に示す通りG'65・66・67、H'65・66・67グリッドからまとまって出土した。



第207図 第八層石囲み炉群 (1)



第208図 第Ⅷ層石囲み炉群(2)

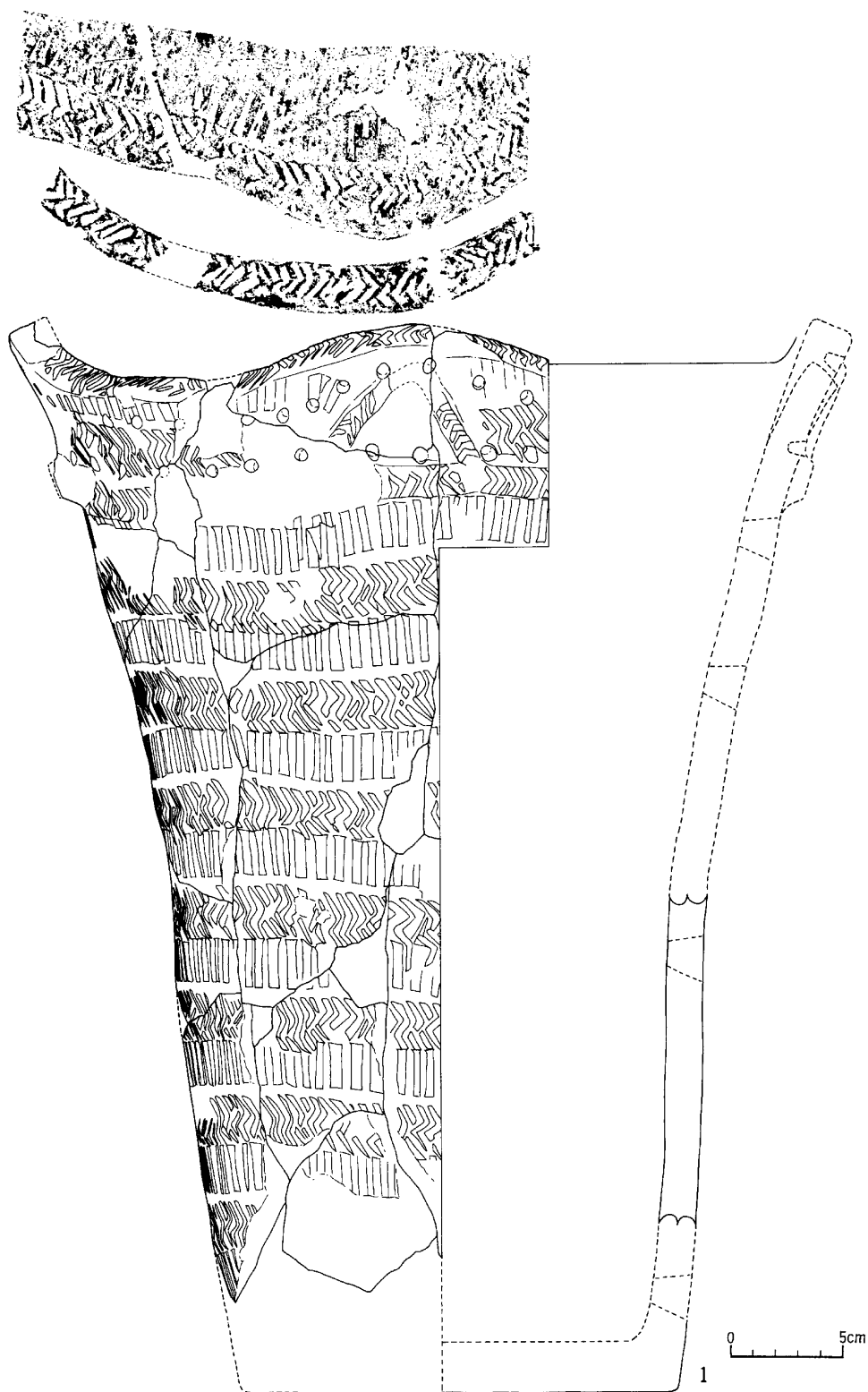
遺物

(1) 土器

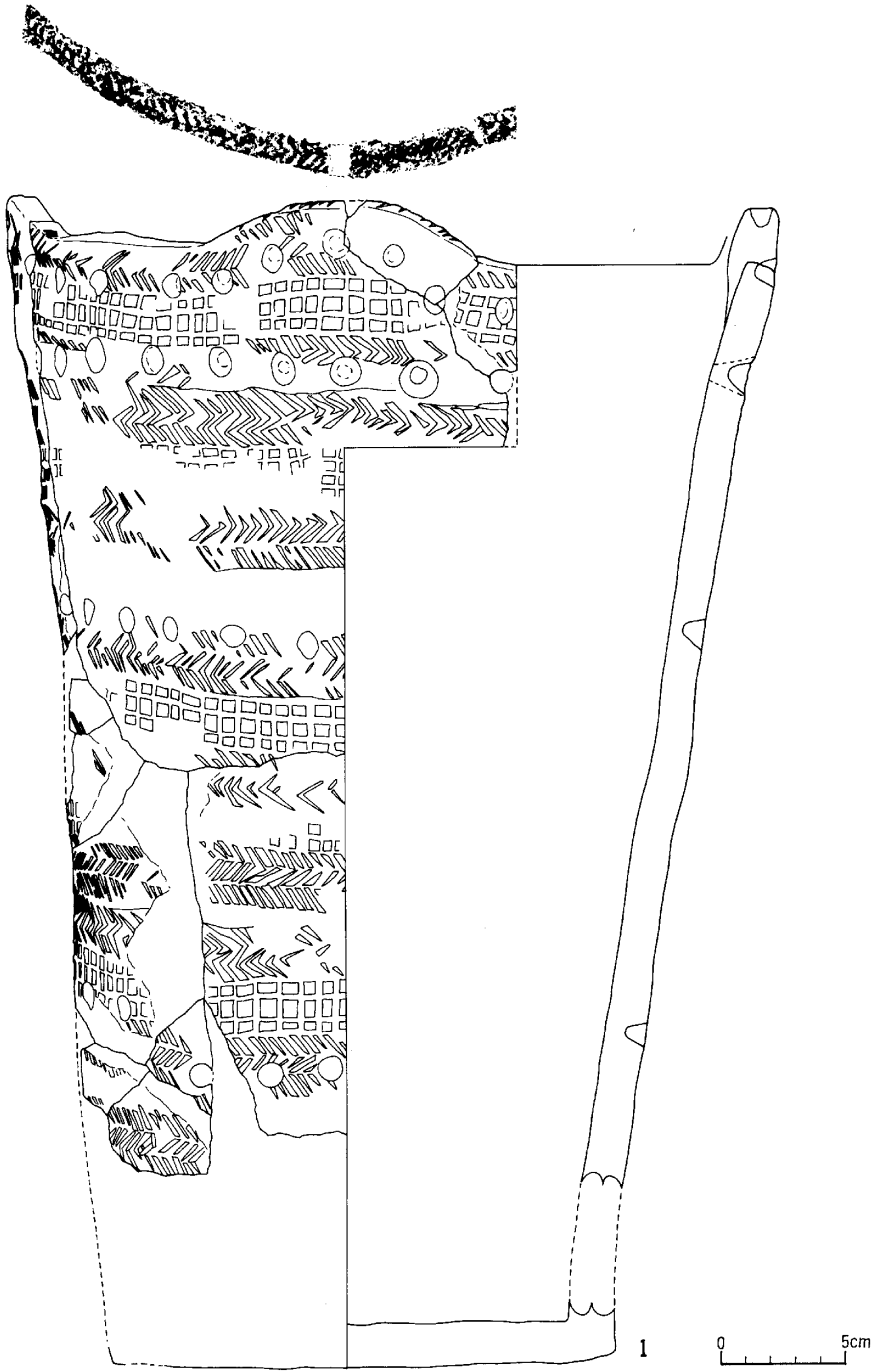
第209図-1 (図版49-1・2) は口径38cm、器高48cmを計る。口唇部は角形、口縁部は大きな波状を呈し、胴中部から朝顔状に開く。口縁部の鋸歯状の隆帯は横位の隆帯で区画され、円形文が2列見られる。器面は短冊文・縦波状文の原体を8～9段にわたって丁寧に施文する。外側から穿孔された補修口が縦位に4箇所並ぶ。

第210図-1 (図版49-3) は口径31cm、器高47cm。底部からはぼストレートに開き、弧状の口縁部をもつ。円形文は口縁部に2条、胴中部に1条、胴下部に1条ある。押形文は縦波状・方形文・縦波状で構成され、原体幅は6cm。

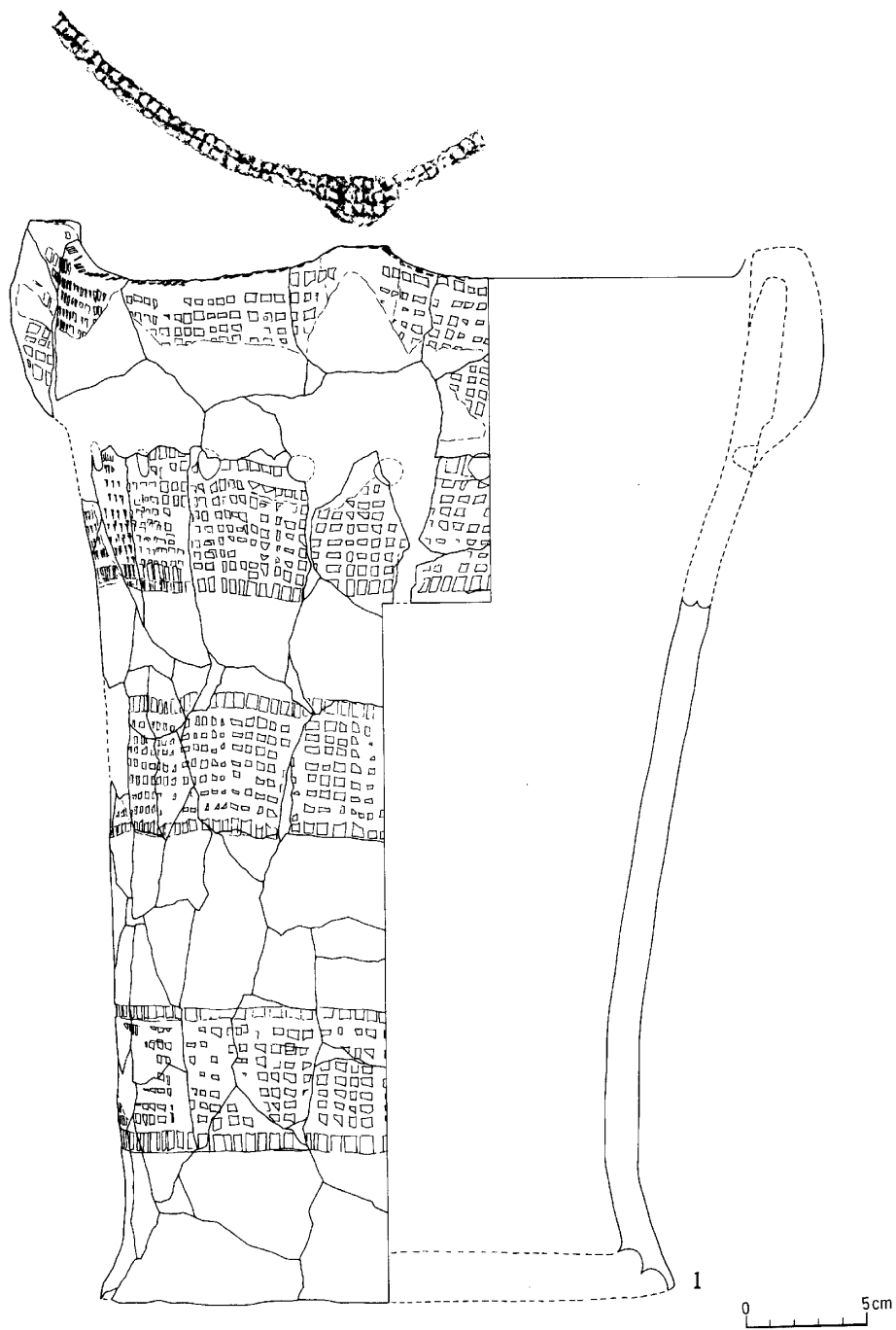
第211図-1 (図版49-4) は口径33cm、器高44cm。小台形状の突起からは縦位の太い隆帯が付される。薄い肥厚帯の下部に円形文が施される。押型文は方形文であるが、幅5.5cmの原体の両側を比較的大きい方形文、内部を小さい方形文としているため引き締まったものとなり、幅広の無文帯を上手く生かして文様効果をあげている。底部は本土器群には珍しく大きく張り出す。



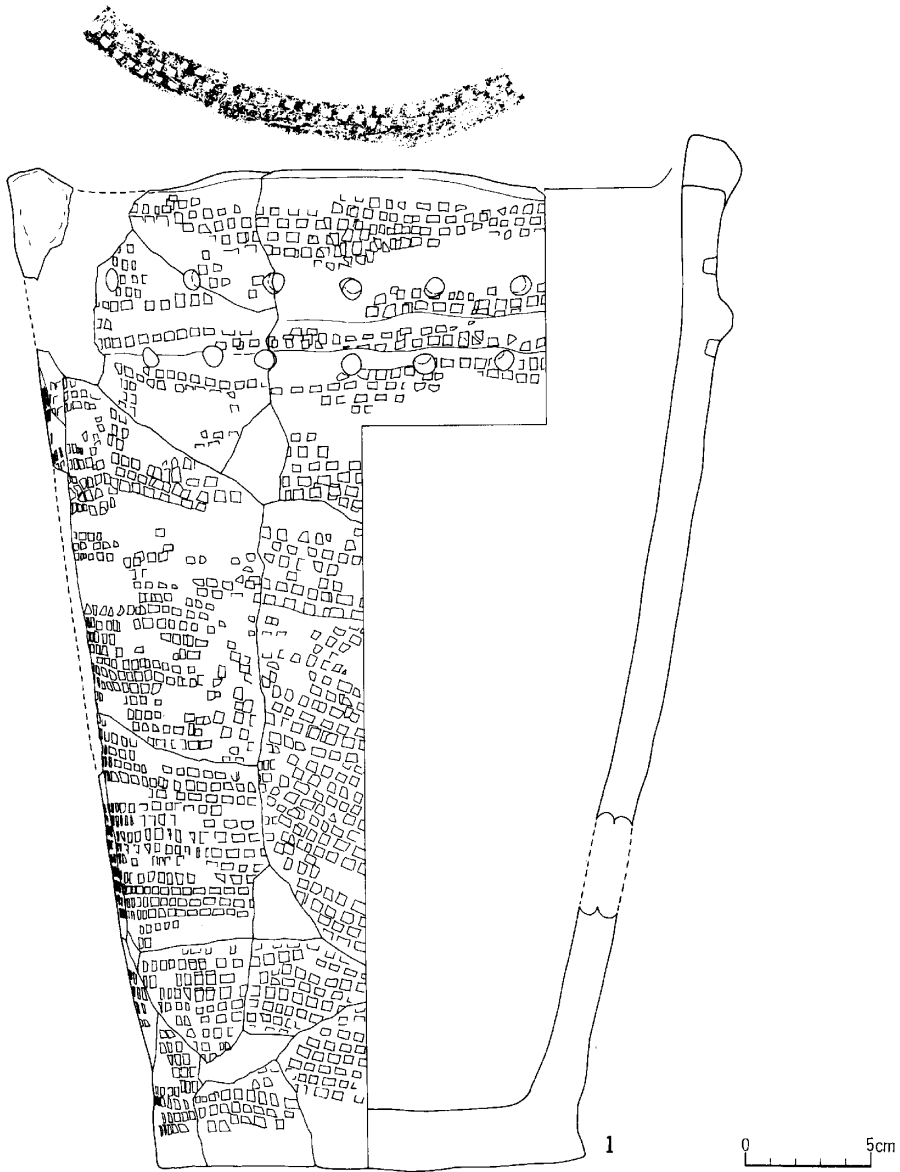
第209図 第Ⅱ層出土土器(1)



第210図 第Ⅷ層出土土器（2）



第211図 第四層出土土器(3)

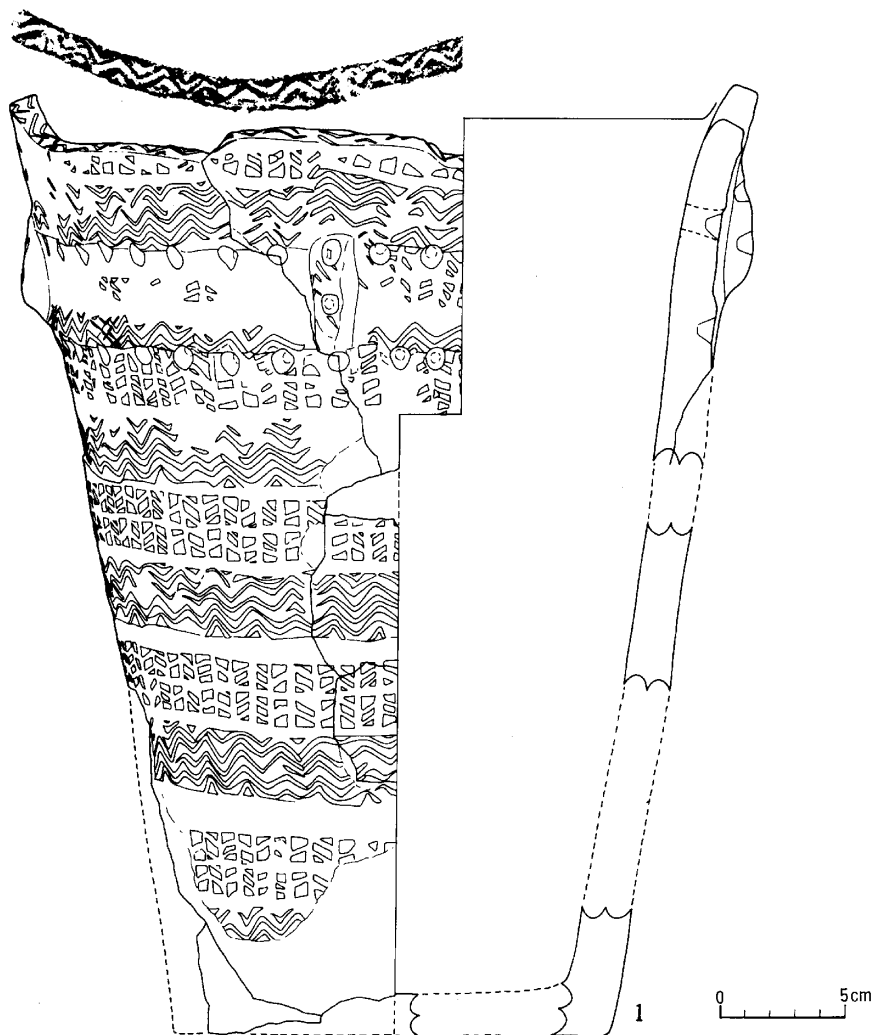


第212図 第Ⅷ層出土土器（4）

第212図－1（図版49－5）は口径30cm、器高40cmで緩い小波状の口縁部をもつ。横位の隆帯部の上下に円形文が施される。器面は方形文を単独施文する。

第213図－1（図版49－6）は口径30cm、器高36cm。台形状の口縁下部には縦位の隆帯が付される。隆帯幅と並行して円形文が2条ある。原体は縦矢羽根・山形文で構成され、5段にわたって施される。原体幅は5.5cm。

第214図－1は口径34cm、器高44cm。口縁部は弧状を呈し、斜位の隆帯の下部には円形文がある。原体は縦位の山形文・三角文・矢羽根文で構成され、胴下部は幅広く無文帯を残す。

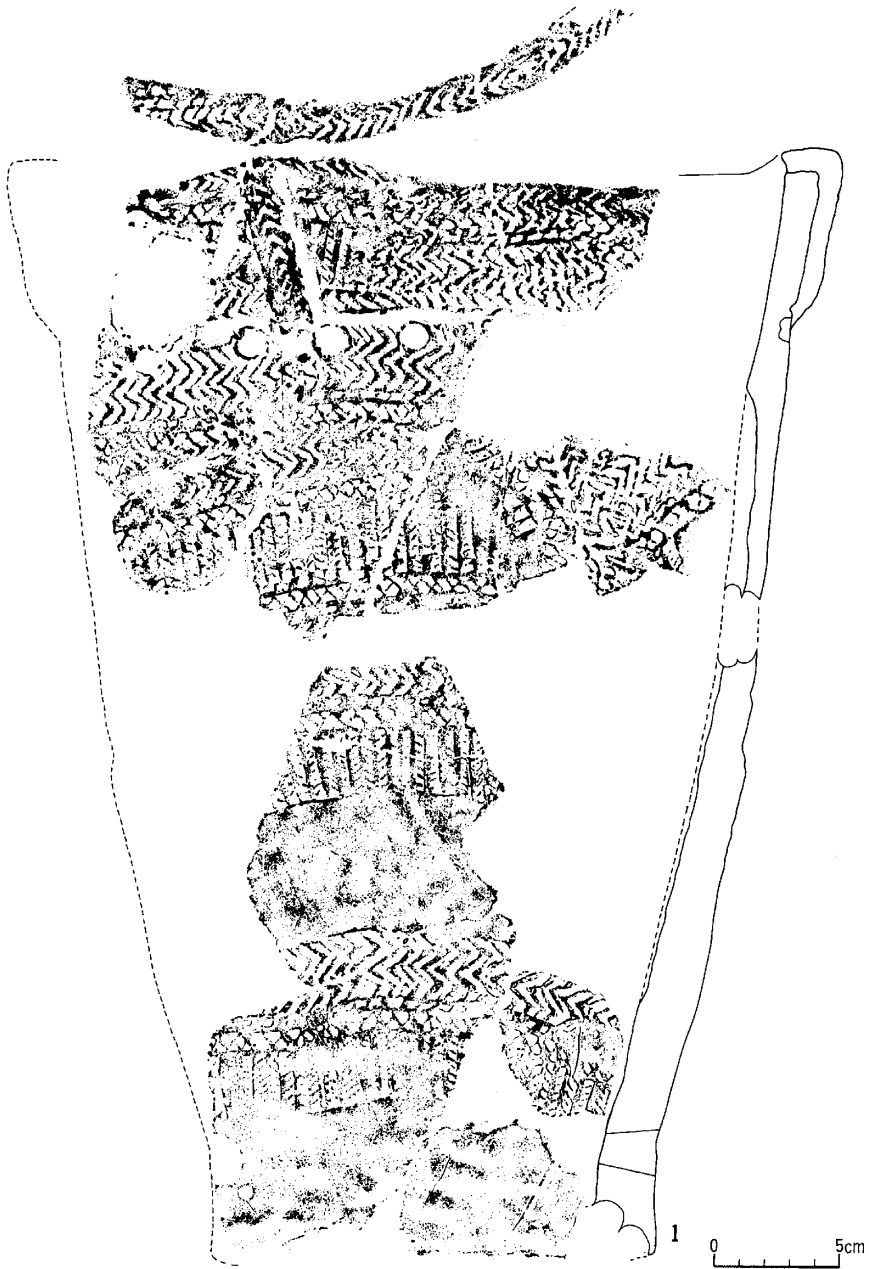


第213図 第Ⅶ層出土土器(5)

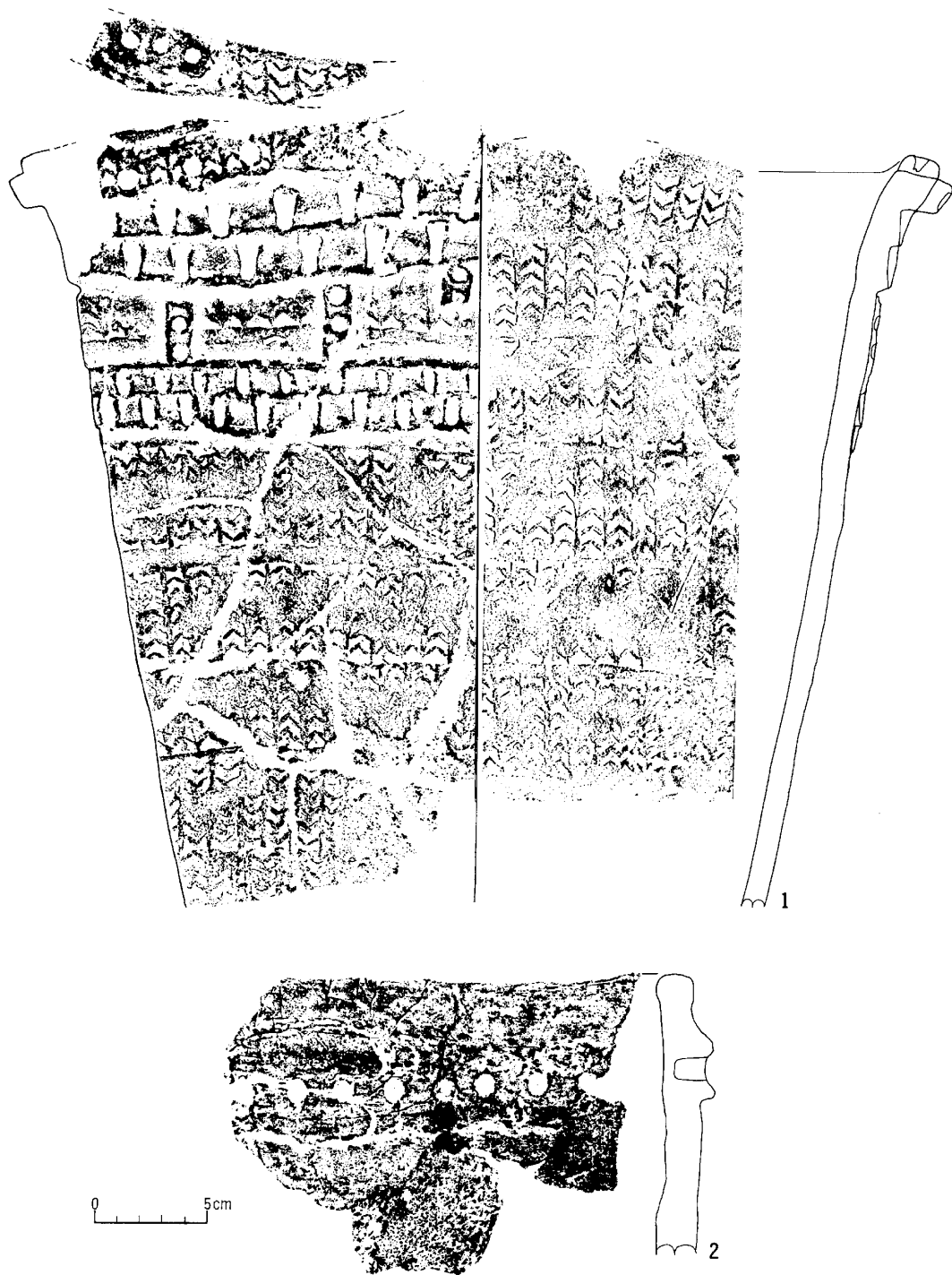
第215図-1の口縁部は大きな波状を呈し、角形の突き出た隆帯が巡る。段差のある3つの無文地のうち2つには太い刺突が加えられ、1つには縦位の隆帯が付され、これらは最下段の刺突の施された薄い隆帯で胴部と区画される。原体である縦位矢羽根文は内面深くまで及んでいる。2は幅広い横位の隆帯に凹帯を設け、円形文を施した無文土器。

第216図-1は小突起をもつ。無文部に円形文が施される。2は口縁部で緩く外反する。2本の横位の隆帯間に縦位の隆帯と円形文があり、短冊文が施される。3は口径30cm。台形状の口縁部下に小さな円形文が2列ある。原体は斜位短冊文・短冊文・格子目文によるもので幅は6cm。

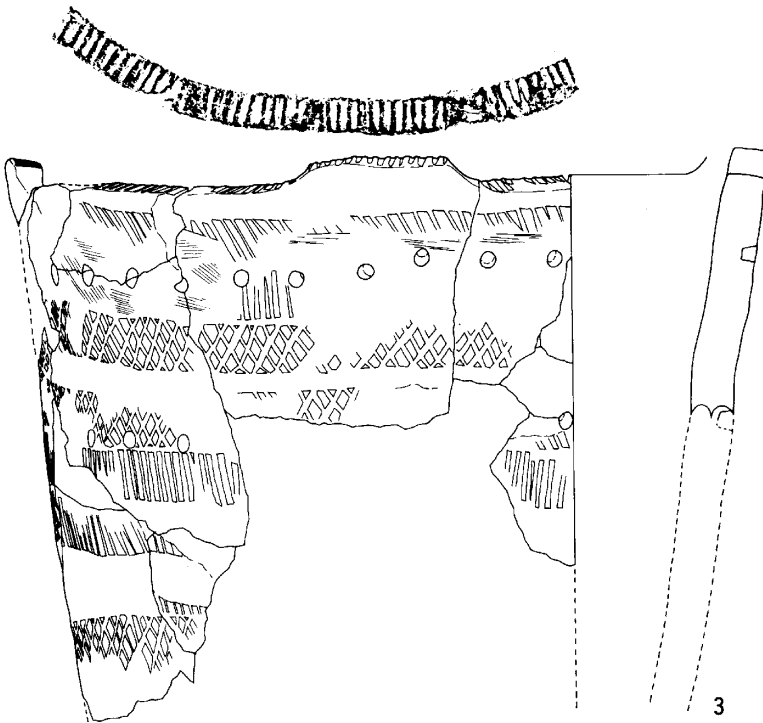
第217図-1(図版52-1・2)は口径29cm、器高40cm。第215図-1の土器の様に口縁部は



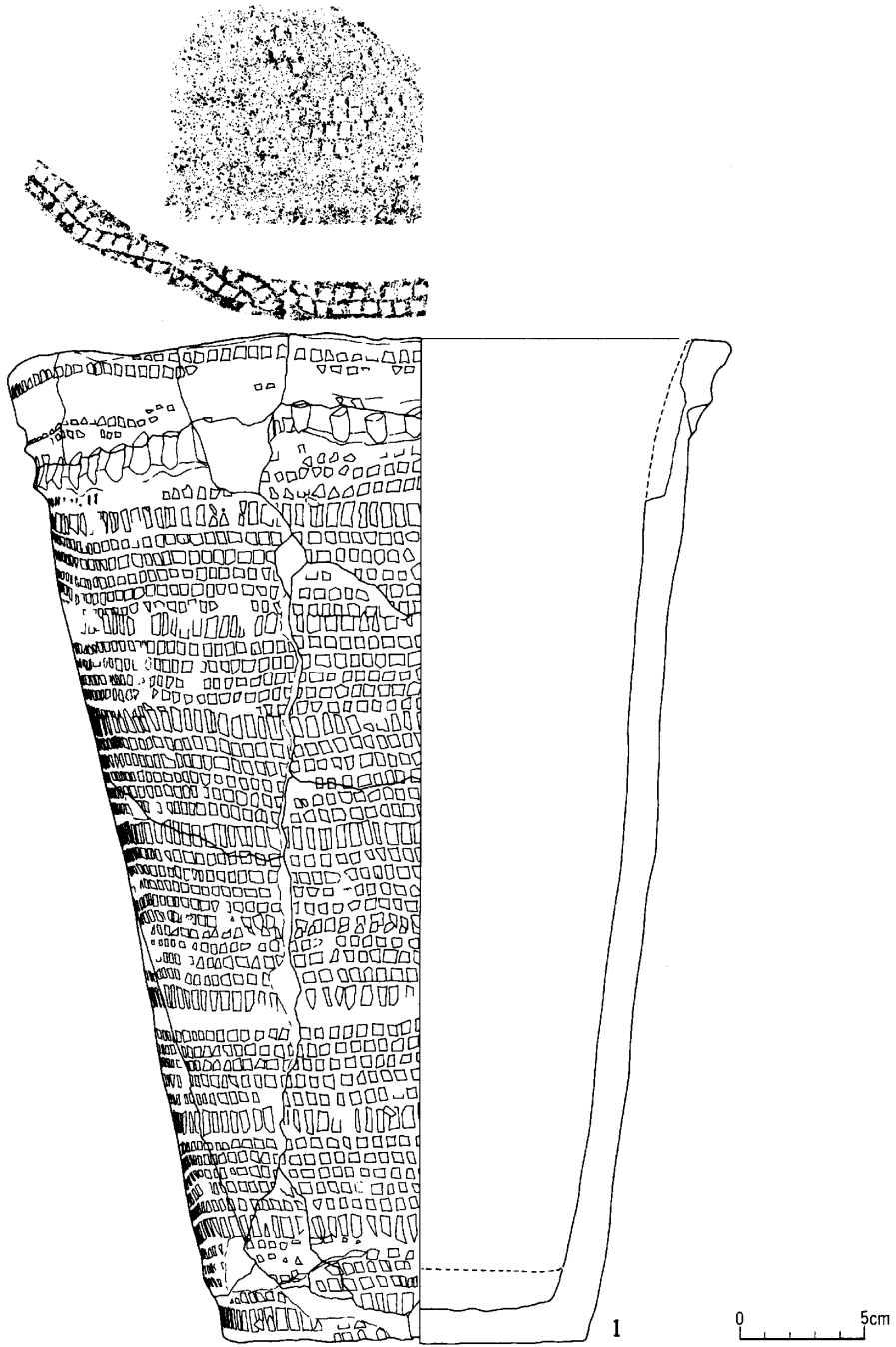
第214図 第Ⅷ層出土土器（6）



第215図 第Ⅱ層出土土器(7)



第216図 第Ⅻ層出土土器（8）



第217図 第Ⅱ層出土土器(9)

無文地に段差を設けて刺突を加えるが、この土器の無文地は横撫でにより凹帯状となる。原体は長方形状・格子目状で構成される。

第218図-1 (図版52-3) は口径36cm、器高47cmで底部からほぼストレートに開く。口縁部と底部が無文となる。口縁部は凹帯を呈し、幅広い無文帯の下部に円形文がある。口唇部は角状であり、器面は矢羽根状文と短冊文を5段にわたって施す。底部は若干であるが揚げ底であり、木葉痕が見られる。原体幅は約6.5cm。

第219図-1 (図版52-4) は口径35cm、胴中央部から朝顔状に開く。底部は欠失するもののおよそ50cmの器高をもつ。小波状の口縁下に円形文をもつ。口唇部は角状で短冊文と縦の山形文で構成された原体を6段施す。原体幅は約4cm。

第220図-1 (図版52-5・6) は口径38cm、器高42cmで胴中央部から朝顔状に開く。口唇部は厚みのある切り出し状であり、円形文は見られない。格子目文と山形文の原体を4段にわたって施す。原体幅は約6cm。

第221図-1 (図版50-1・2) は口径36cmで朝顔状に大きく開いた緩い小波状の口縁部である。口縁部と並行して隆帯が横走する。円形文は無い。原体は矢羽根状文・短冊文で構成される。幅は5.5cm。

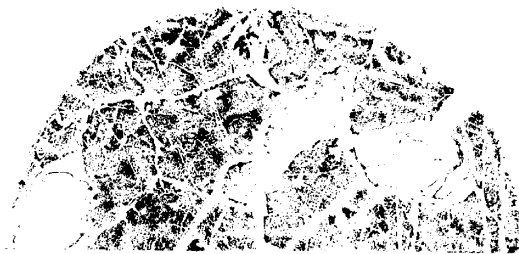
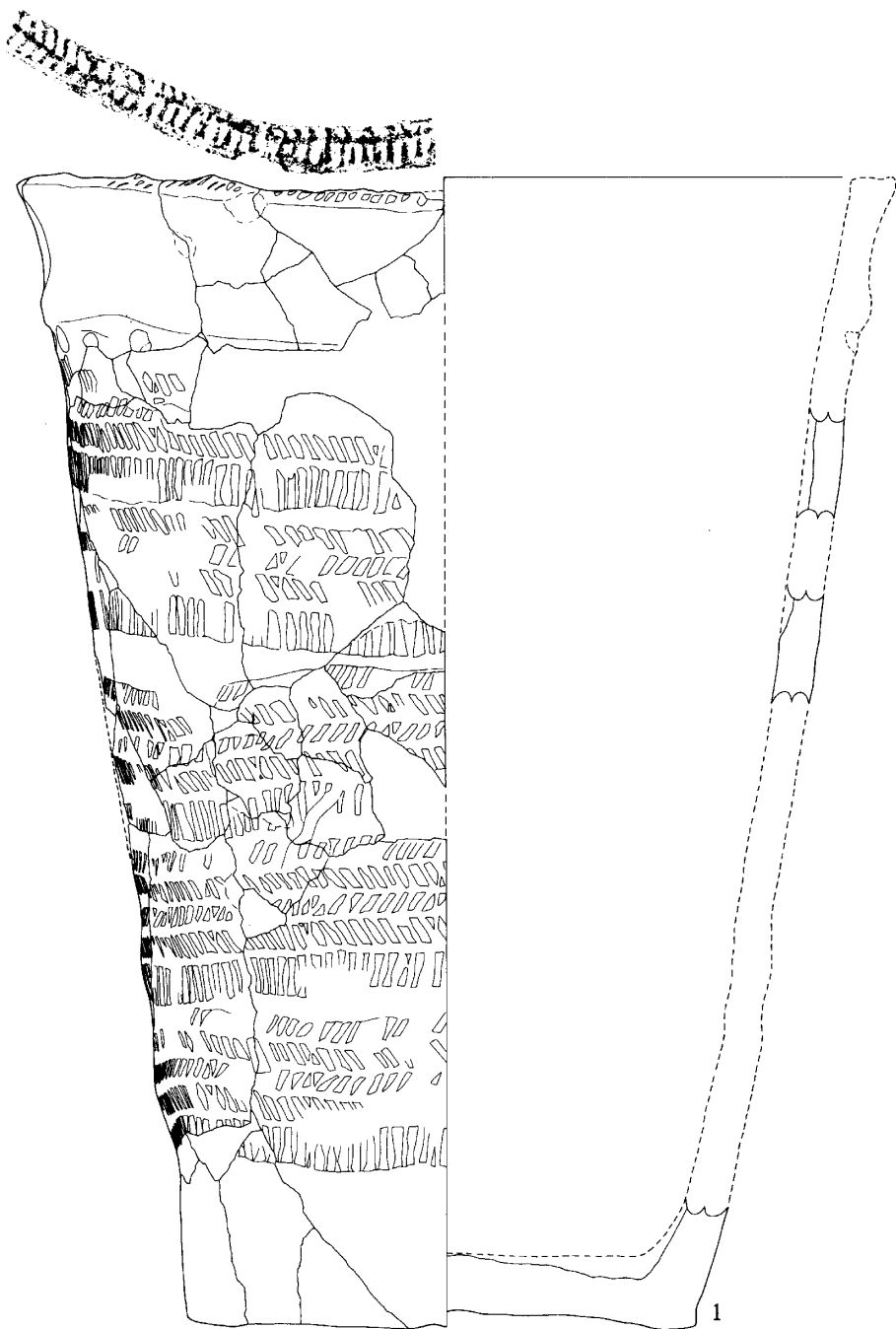
第222図-1 は口径31cm、小波状の口縁部でやや張り出した口唇部である。2列の円形文が加えられ、原体は格子目文である。2は口径25cm。小波状口縁に4個の縦位隆帯があり、円形文が施される。原体は方形文である。

第223図-1 (図版50-3) は口径34cm、器高44cmを計る。6個の小突起のある口縁部に幅5cm、胴部に幅3.5cmの隆帯が横走し、細長い縦位の隆帯で連結される。

第224図-1 (図版60-1) は口径25cm、器高30cmを計る。第Ⅶ層出土の土器片と接合した。円形文は凹帯部に施される。押型は矢羽根文・短冊文・菱形文で構成される。原体幅は6.5cm。胴下部から底部にかけて火熱を受け赤変する。2は肥厚帯部に台形状の隆帯をもつ。円形文の間隔は短く、押型は連続山形文を基調とする。3の口縁部には山形小突起と幅広い肥厚帯をもつ。押型は連続山形文と斜位の短刻文。第235図とは同一個体と思われる。

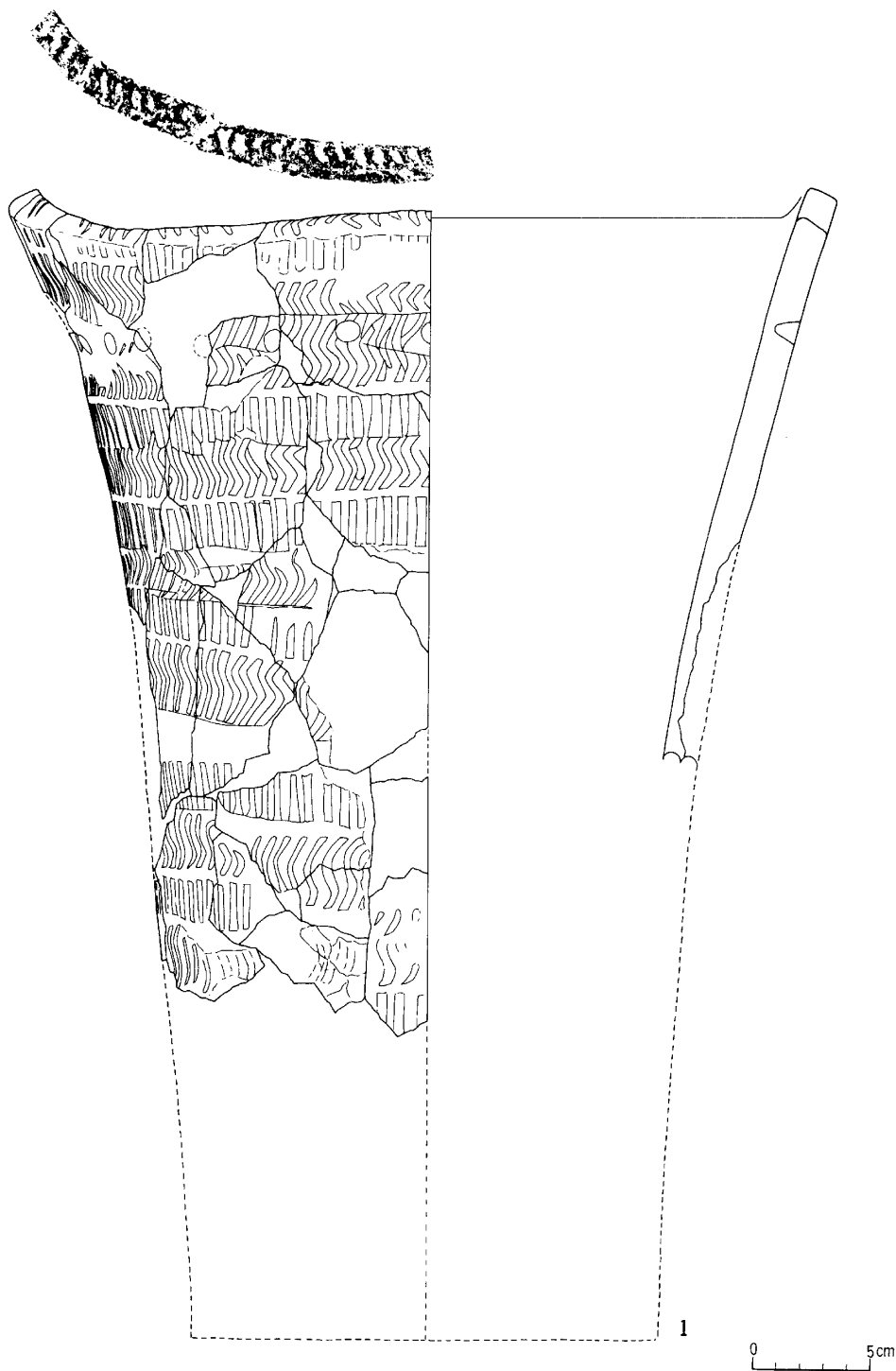
第225図-1 は口径18cm。口唇部は尖がり気味である。原体は菱形文を地文に幅1.5cm程の矢羽根文を施す。2 (図版53-1) は口径21cm。器高27cmで口縁下部に円形文をもつ。幅約6.5cmの原体は短冊文・格子目文で構成される。3 (図版53-2) は口径32cm。弧状口縁で幅広い凹帯状の肥厚帯とその下部に円形文が施される。幅約5cmの原体は方形文・短冊文で構成され、胴中央部では縦位に回転される。

第226図-1 は幅狭い肥厚帯の下部に円形文がある。2 (図版53-3) は口径19cm、器高23cmで小突起をもつ。口縁下部に横撫でによる凹帯を作出することにより薄い肥厚帯を設け、円形文を施したものである。幅約4.5cmの原体は短冊文・方形文で構成される。3～8は円形文が施される。3は刺突、4は凹帯のある肥厚帯、5は無文帯、6・7は同一個体で薄い肥厚帯、8

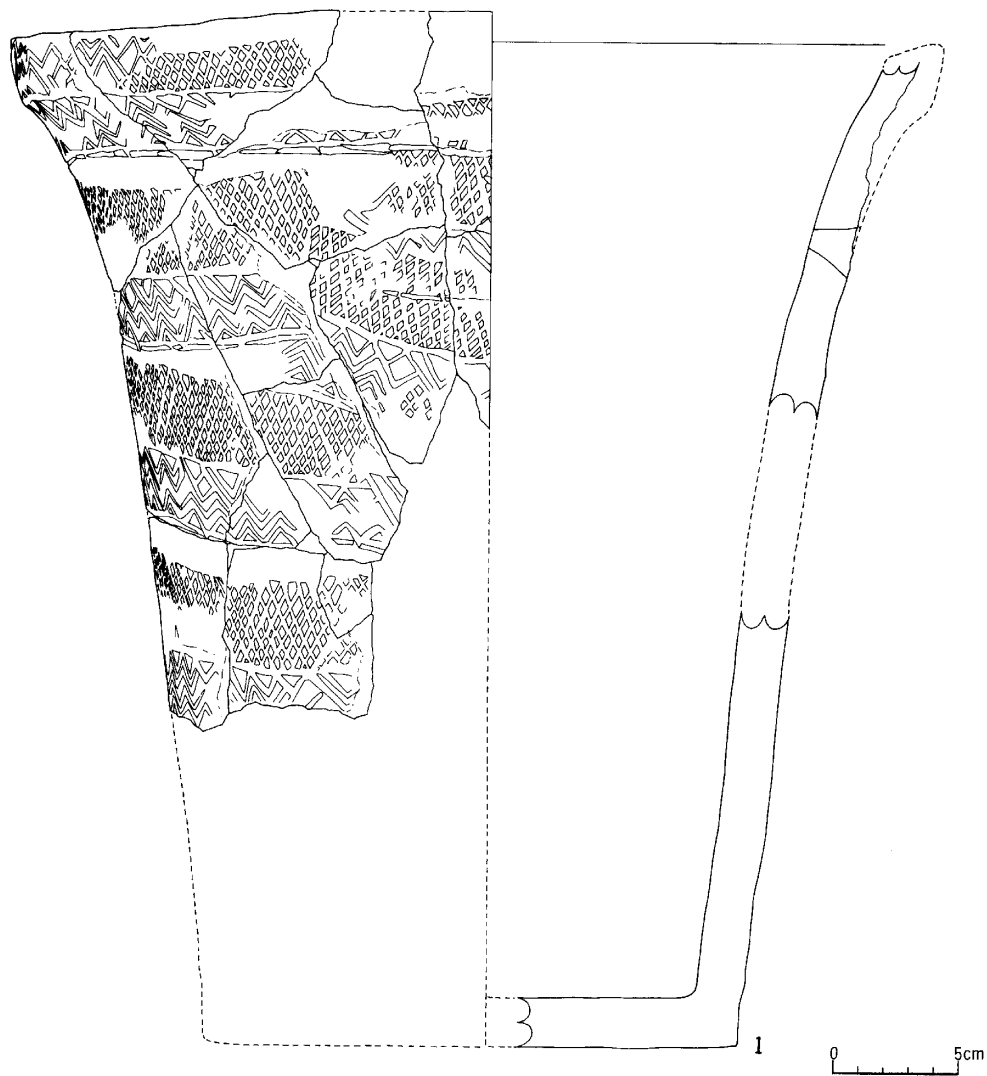


0 5cm

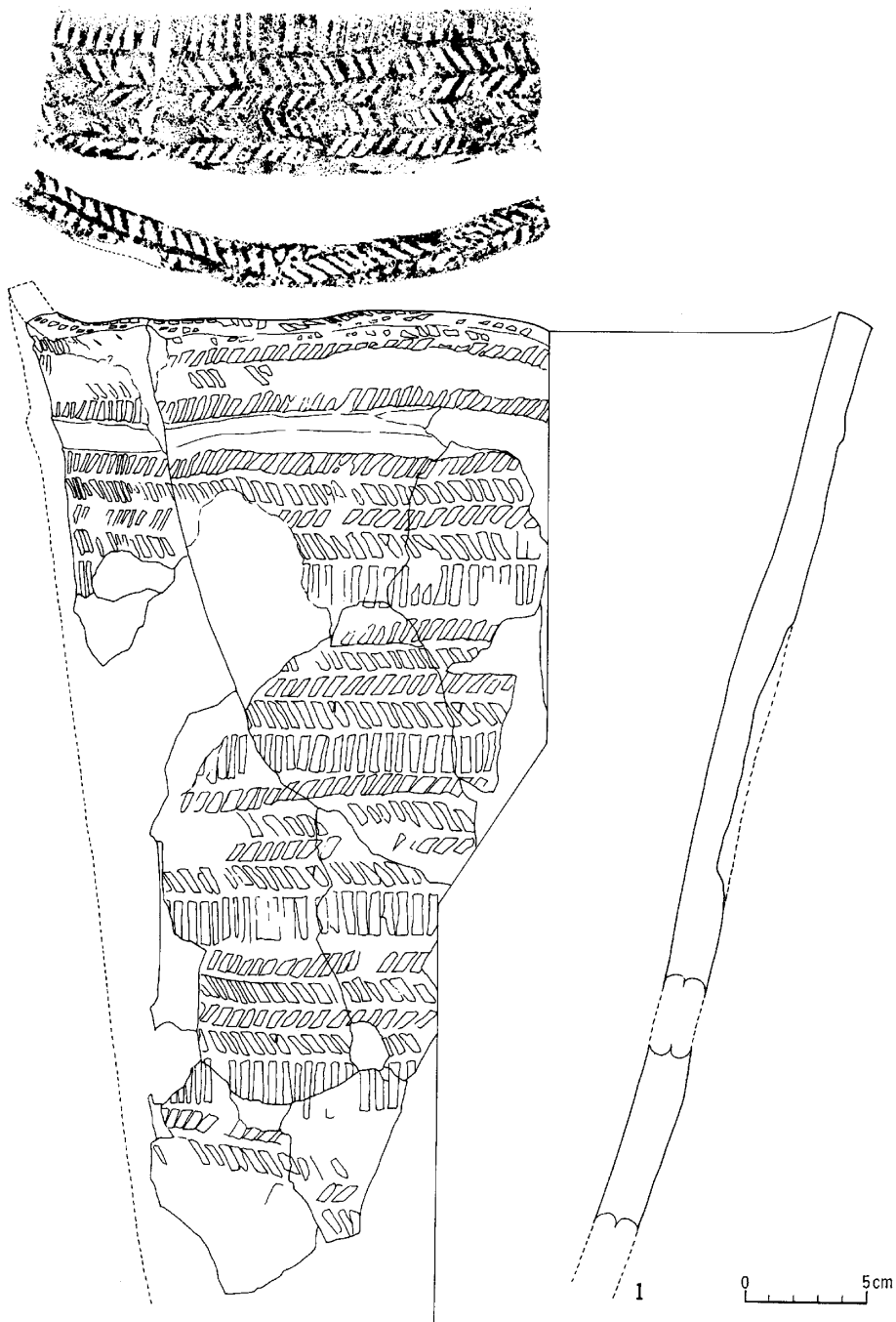
第218图 第Ⅳ层出土土器 (10)



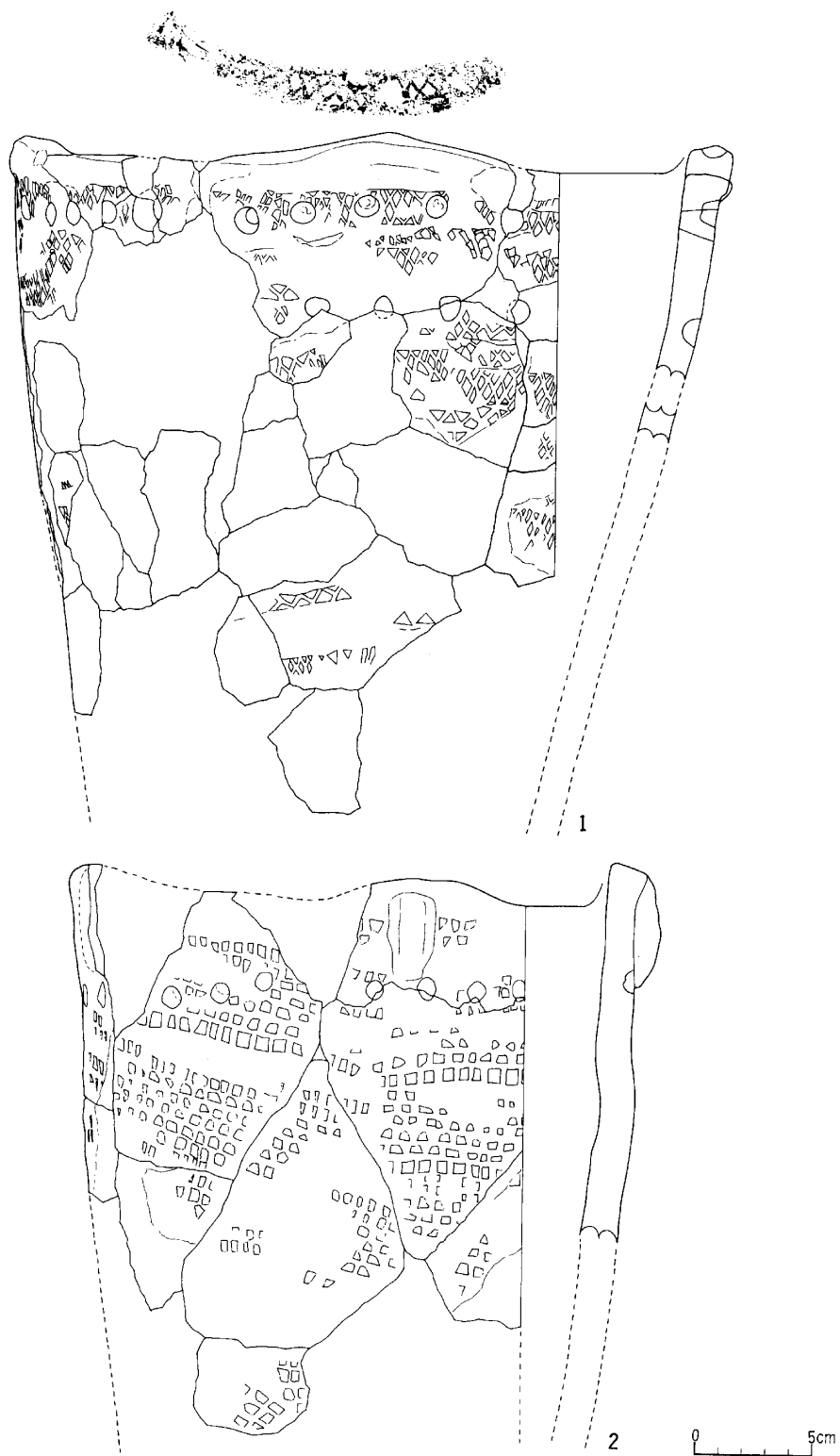
第219図 第Ⅱ層出土土器 (11)



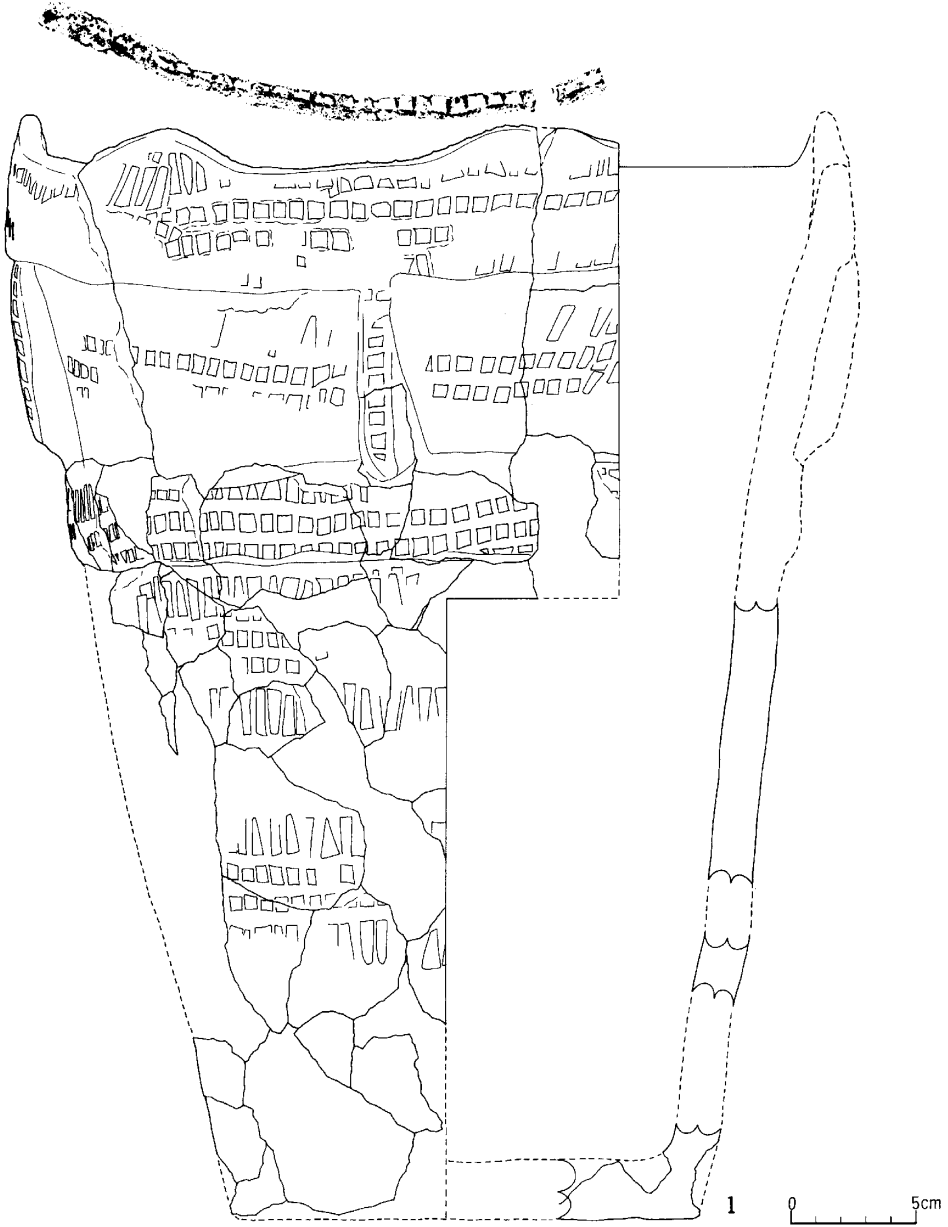
第220図 第Ⅱ層出土土器 (12)



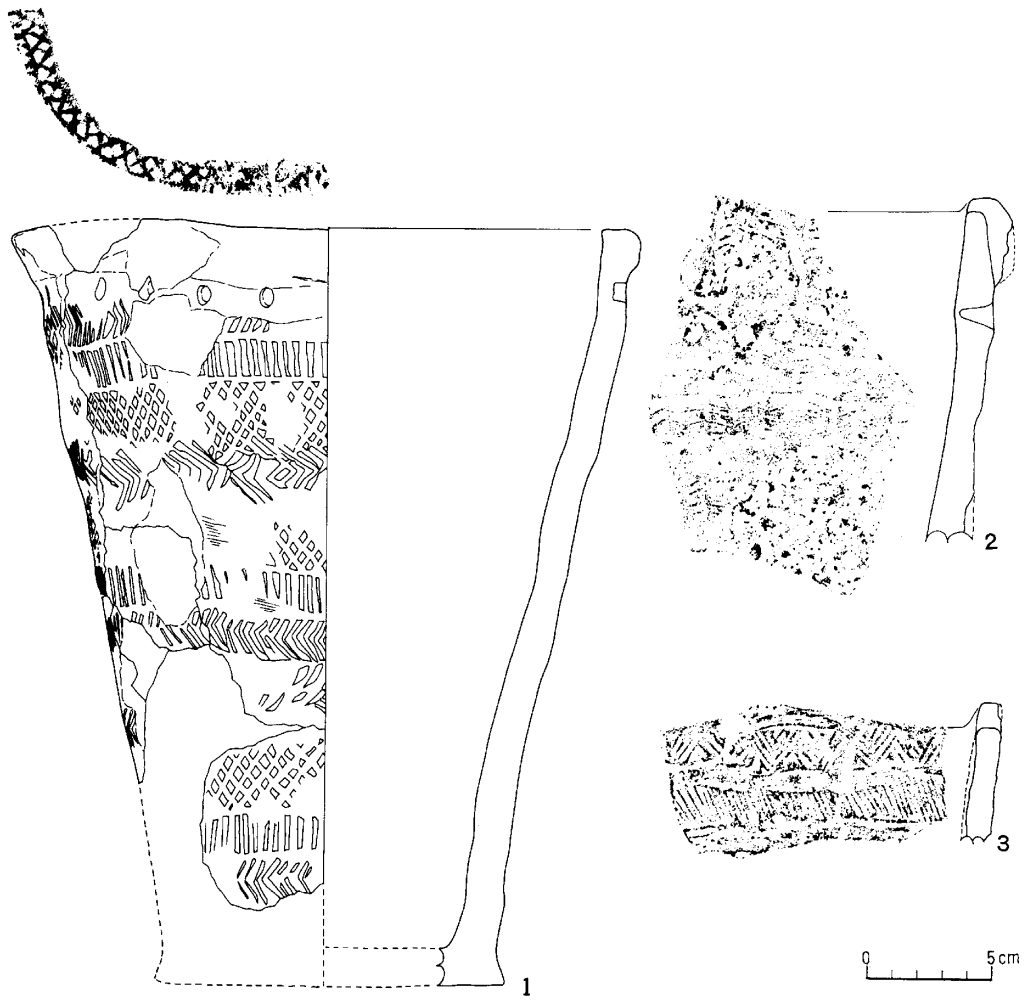
第221図 第Ⅷ層出土土器 (13)



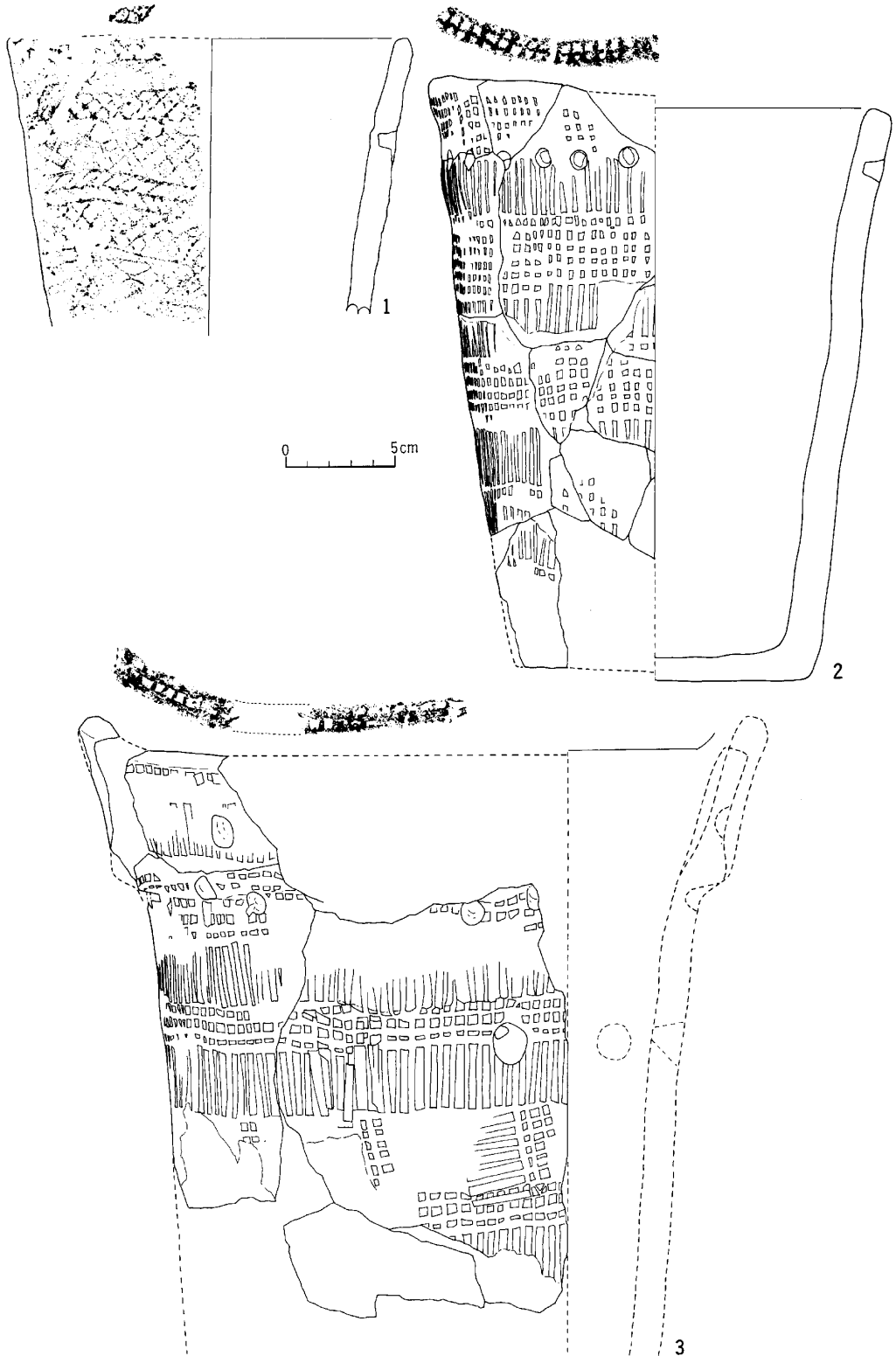
第222図 第七層出土土器 (14)



第223図 第Ⅷ層出土土器 (15)



第224図 第Ⅶ層出土土器 (16)



第225図 第Ⅷ層出土土器 (17)



第226図 第四層出土土器 (18)

は肉厚の肥厚帯である。

第227図-1 (図版53-4)は口径28cm。薄い肥厚帯の下部に小さな円形文が施される。幅5.5cmの原体は方形文である。2 (図版53-5)は口径27cmで小波状の口縁下部に円形文が施される。胴上部を幅3.5cmの原体による縦位の山形文、胴中央部を幅4cmの原体による格子目文が施される。

第228図-1~5の器面は菱形文を地文として口縁下部に円形文が施される。1は弧状口縁の頂部で内側から外側にかけて凹状を設ける。菱形文間に無文部を残す。2はくずれた菱形文で無文部を残す。3は口径20cm。無文部がある。4は口径17cmの小波状の口縁部である。円形文は凹帯を作出した後に付けられている。胴下部には無文部がある。5は横位の隆帯をもつ。

第229図-1 (図版53-6)は口径26cm、器高38cmで弧状の口縁部をもち、幅広い肥厚帯の下部には凹帯上に円形文が施される。無文部を残し幅4.5cmの原体による菱形文がある。2は大きな波状口縁で薄い肥厚帯の下部には円形文と縦位の隆帯がある。3は小さな台形状の突起から肉厚な肥厚帯に縦位の隆帯が垂下する。4は横位の隆帯の上部に円形文がある。

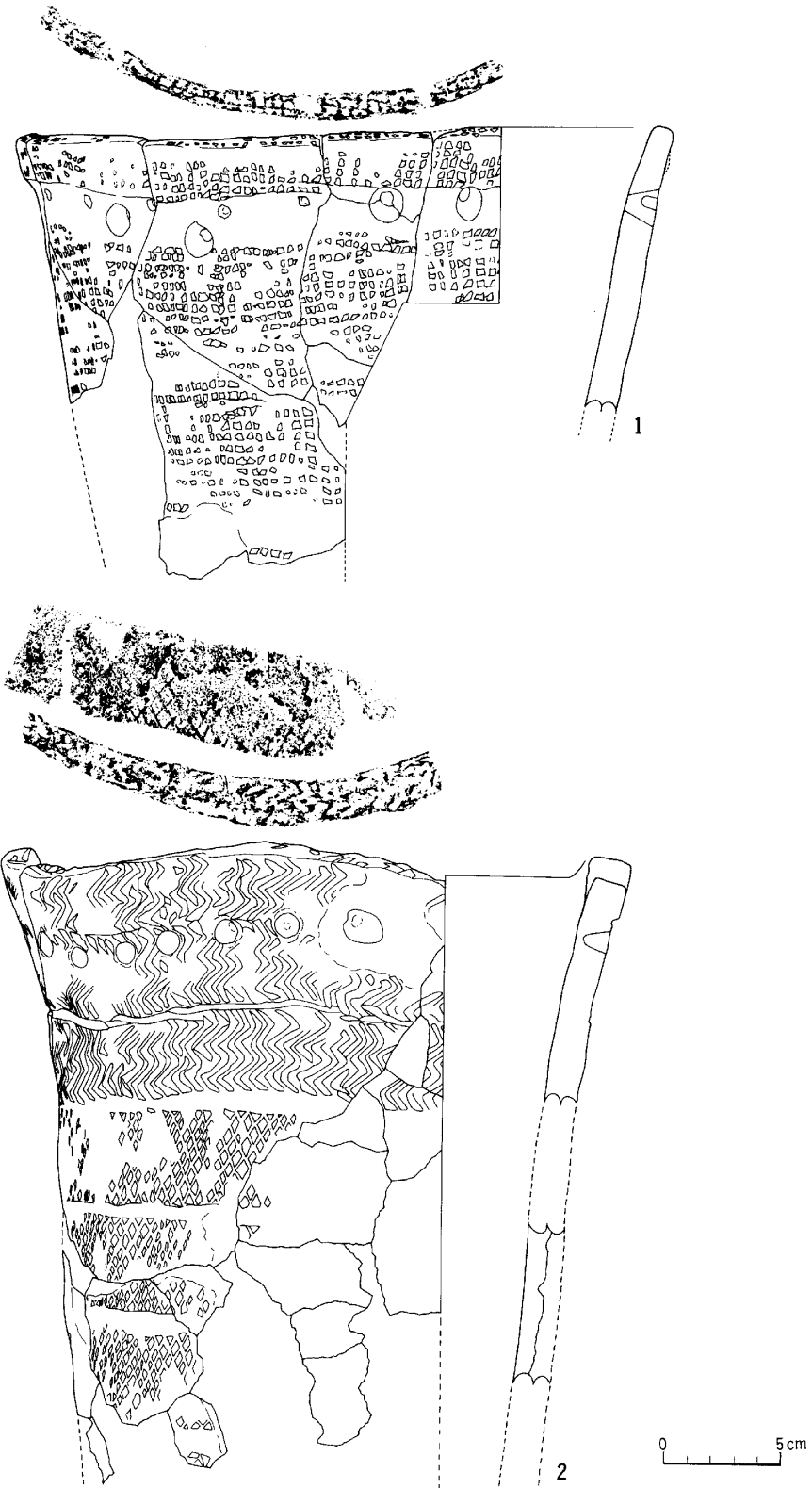
第230図-1 (図版54-1・2)は口径35cm。4個の大きな山形口縁は肉厚で大きく外に張出しながら口唇部で内屈する。凹帯で無文の肥厚帯の下部ではやはり、凹帯上に円形文が施される。幅5cmの原体は菱形文・短冊文で構成され、無文部を幅広く残している。2の底部には縦状に伸びた小さな起伏が観察される。3 (図版54-3)は口径31cm。台形状の口縁部で、薄い肥厚帯の下部に円形文が施される。原体の詳細な構成は把握できないが、上部は山形文単独で胴部は菱形文・山形文で構成されている様に見受けられる。

第231図-1 (図版54-5・6)は口径29cm、器高29cmで4個の山形状の突起をもつ。山形突起間に下脹れ状の隆帯が付けられる。幅5cmの原体は山形文・短冊文で構成される。2・3は切り出し状の口縁下部に円形文が巡る。2 (図版54-4)は幅5.5cmの原体は山形文・短冊文で構成され、無文部は残す。3は口径17cm、器高16cmを計る。肥厚帯下部に円形文が連続する。器面は菱形文が施される。

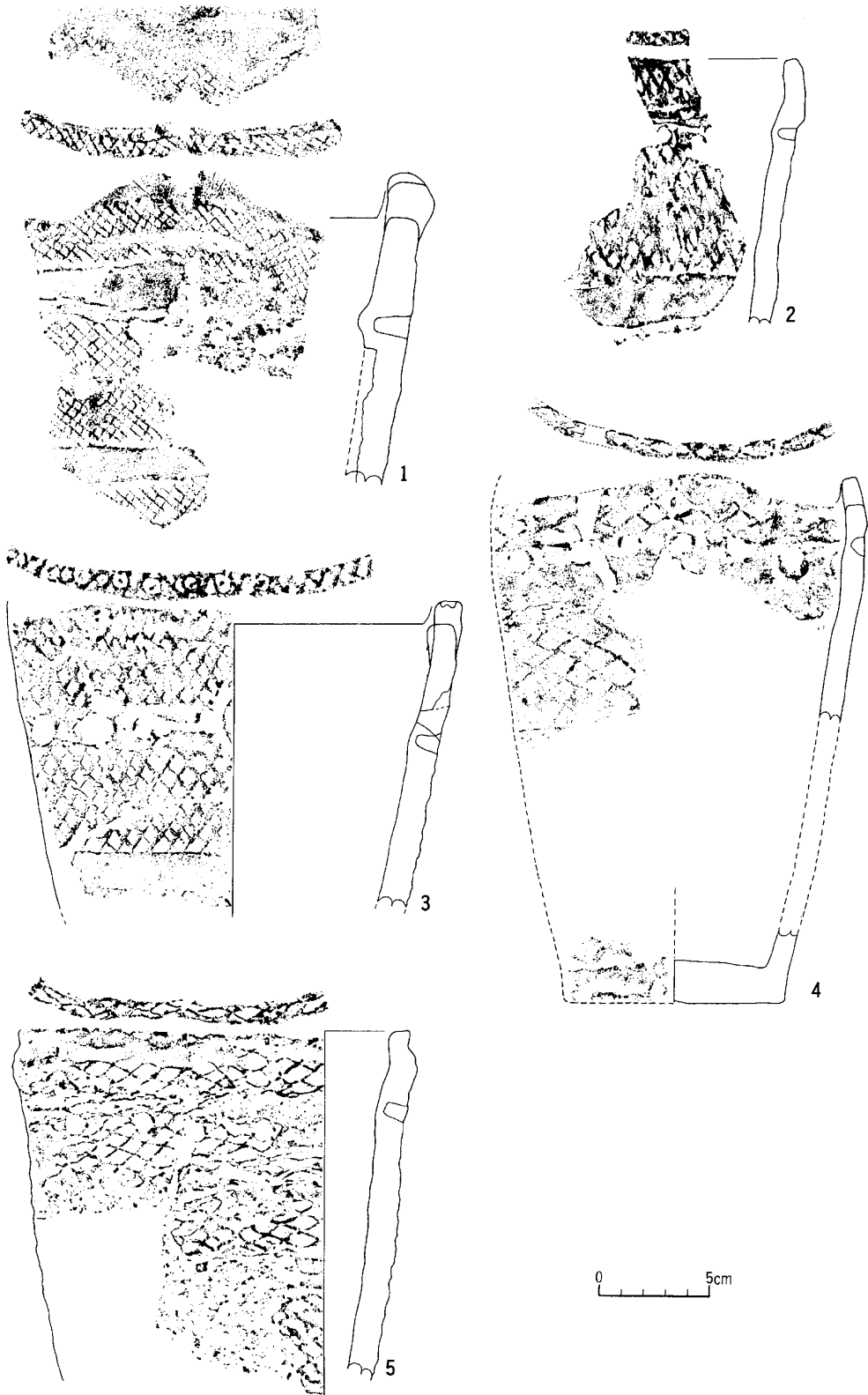
第232図-1 (図版55-1・2)は口径29cm。細長い台形状の突起は3個現存する。おそらく4個あったのであろう。このうち1個だけに円形刺突が加えられている。幅広い肥厚帯の下部には円形文が施される。器面の押型文は縄文的な斜方向に流れる菱形文である。2は口径15cm。器高18cmの小型土器。

第233図-1は口径35cm。二瘤状の突起をもつ。円形文は無文部に施される。幅5cmの原体は波状文・菱形文で構成される。2は短冊文・矢羽根状文で構成される。

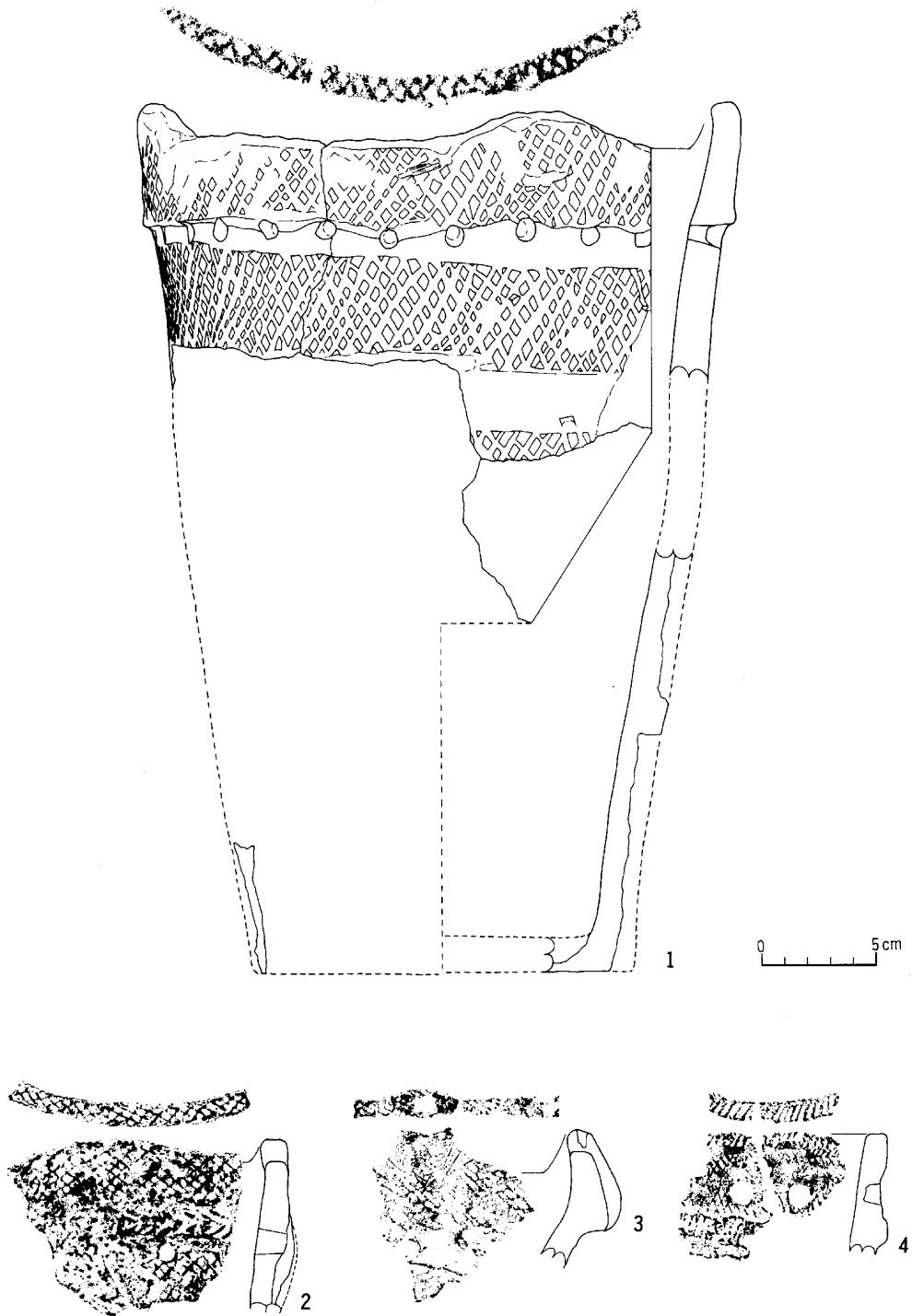
第234図-1・2は山形文を地文に円形文がある。3は矢羽根文。4は口縁部に沿って横走する角形の隆帯上に円形文がある。器面は縦位の連続山形文が施される。5・6は矢羽根状文を地文に円形文があるもので、5は口縁下部は無文部を残し、6は極めて肉厚である。7は縦位の連続山形文に円形文がある。



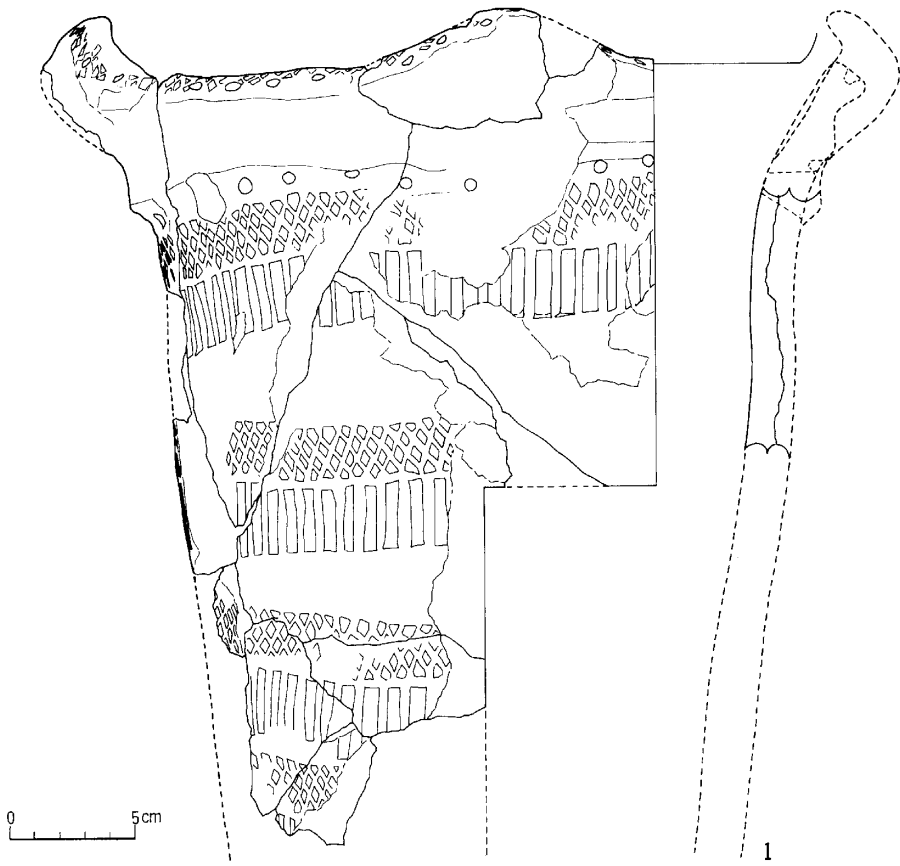
第227図 第七層出土土器 (19)



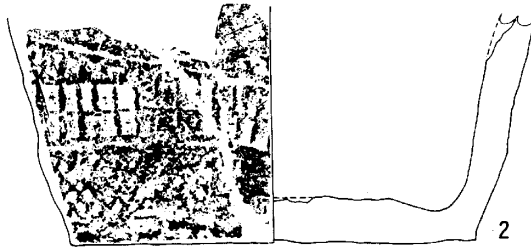
第228図 第Ⅷ層出土土器 (20)



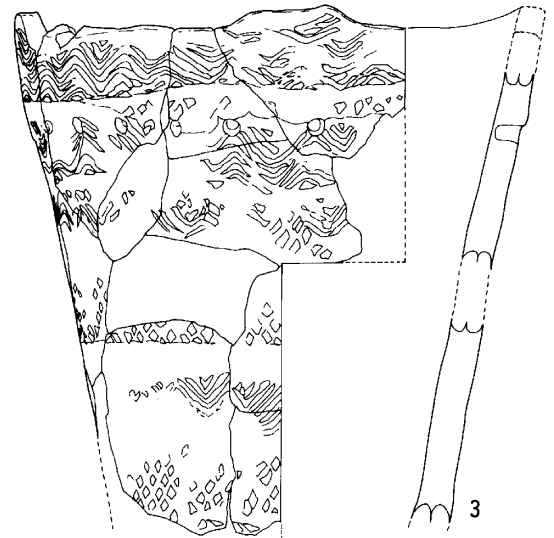
第229図 第四層出土土器 (21)



1

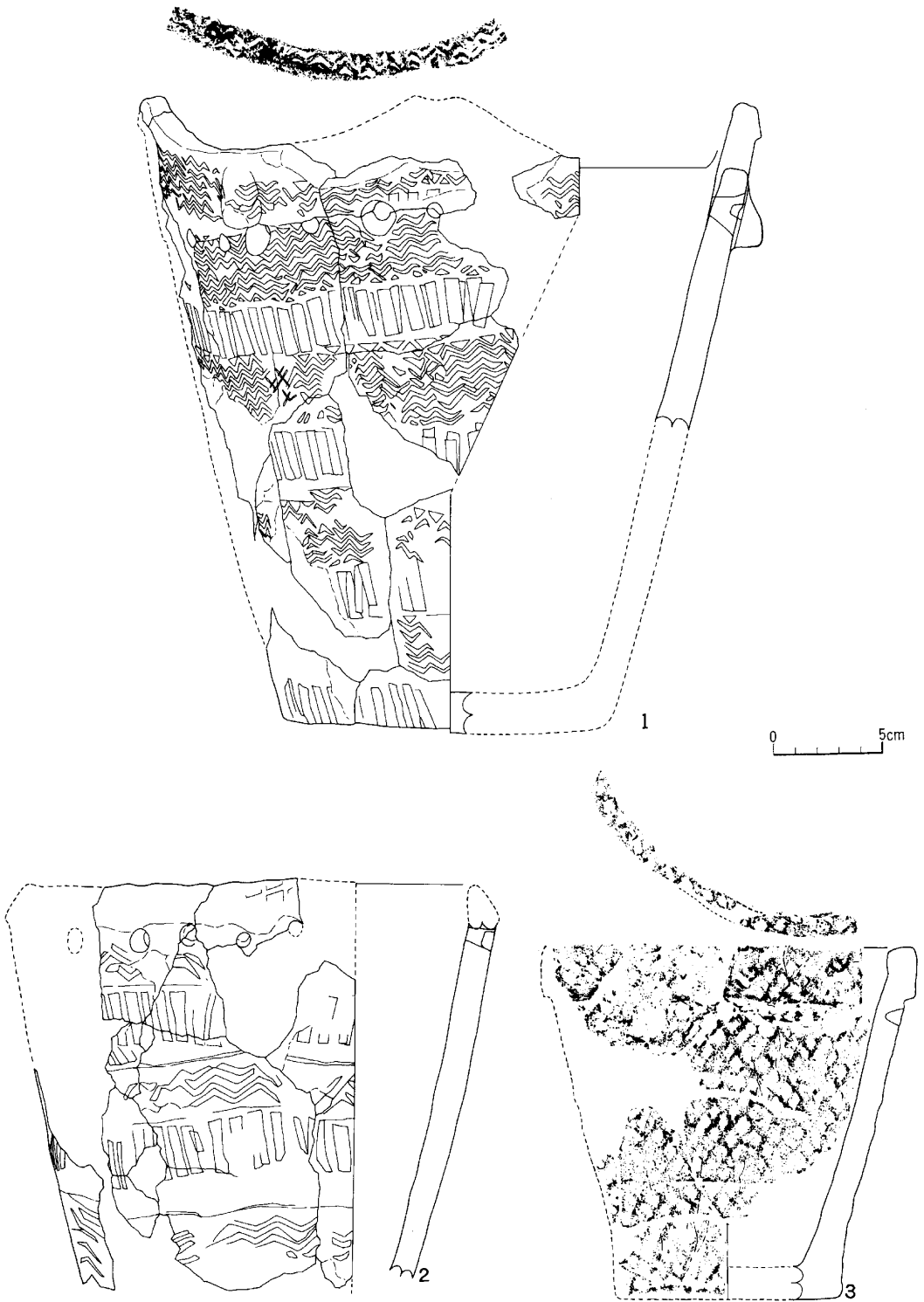


2

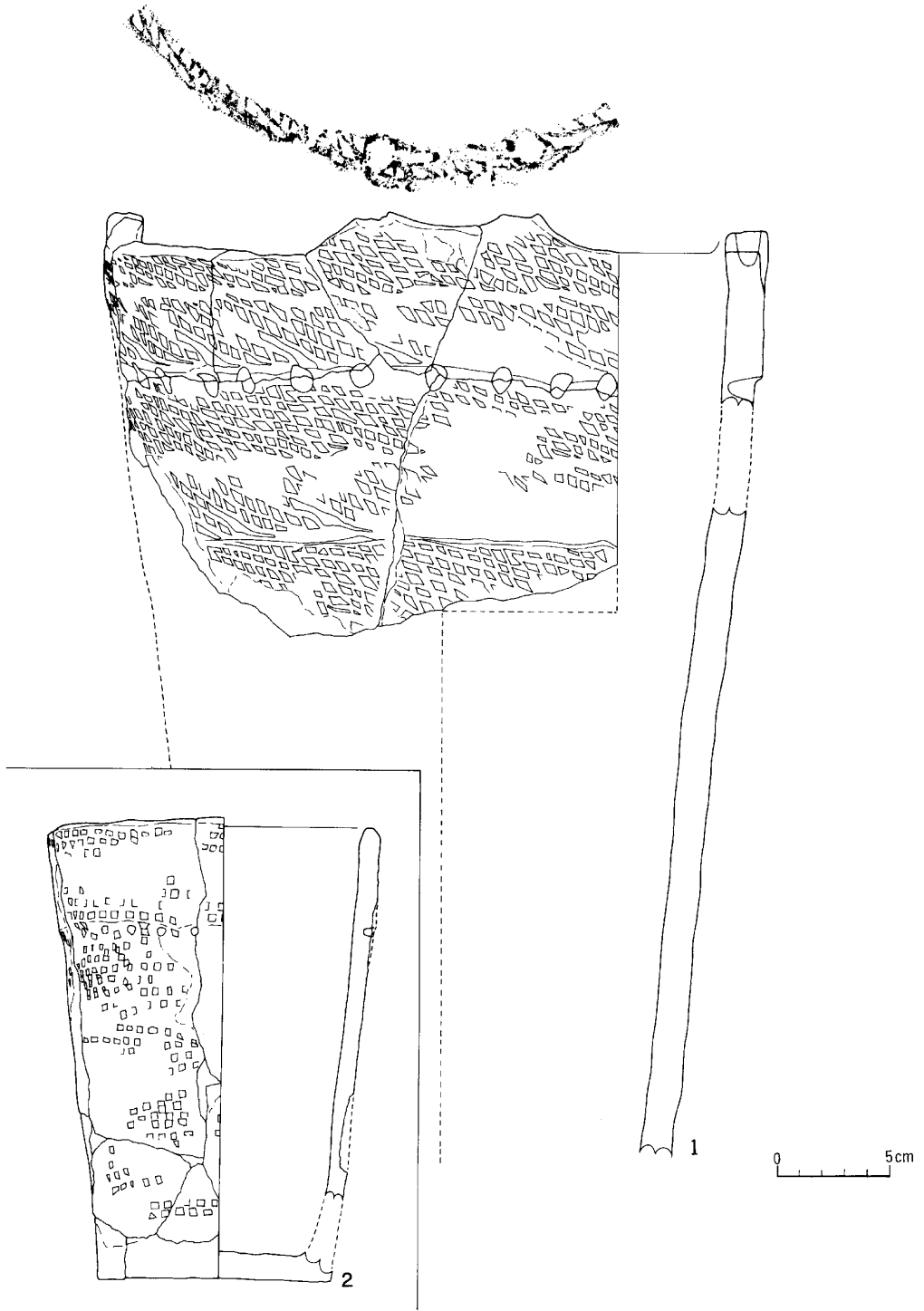


3

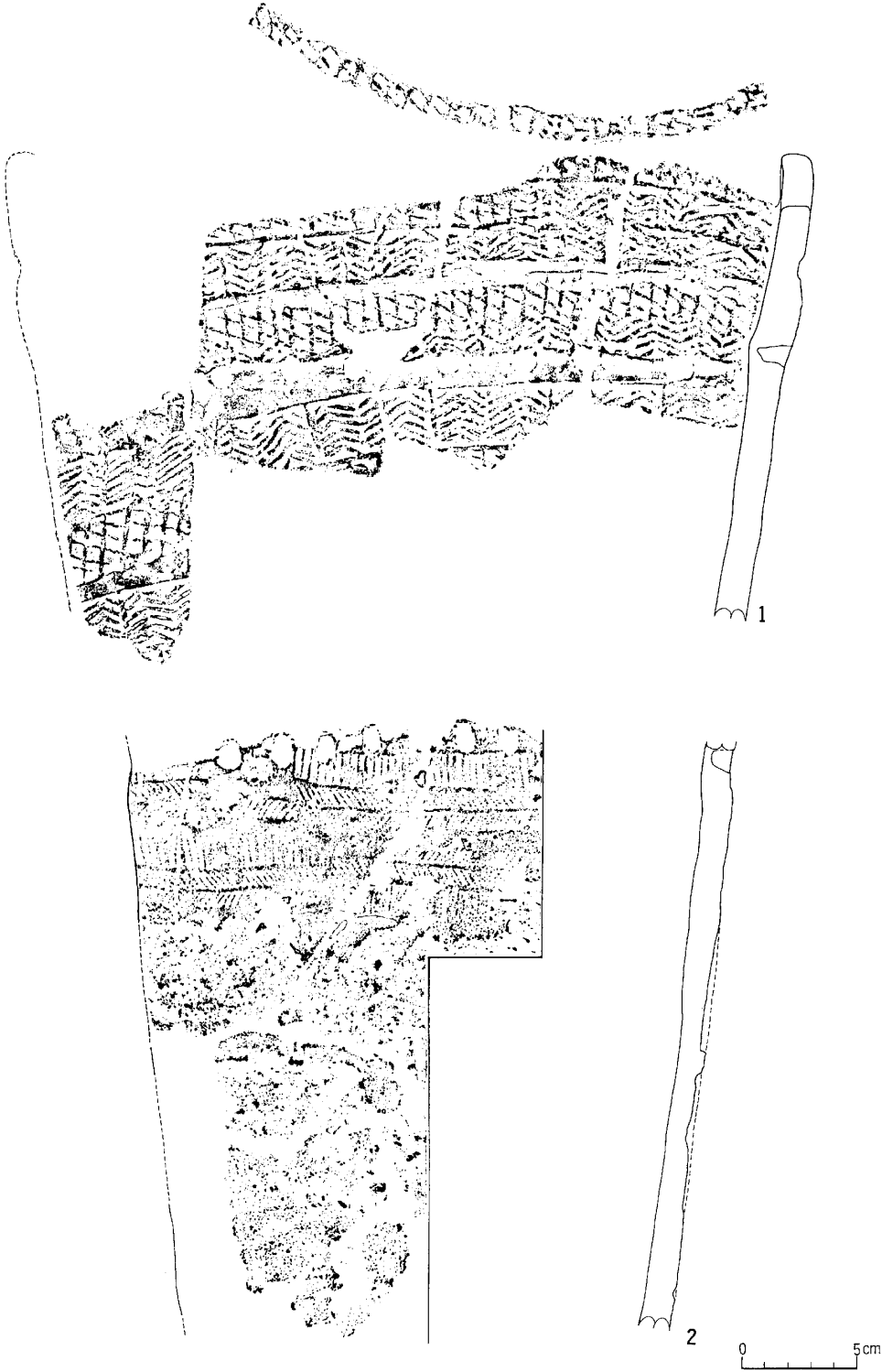
第230図 第ⅩⅡ層出土土器 (22)



第231図 第Ⅻ層出土土器 (23)



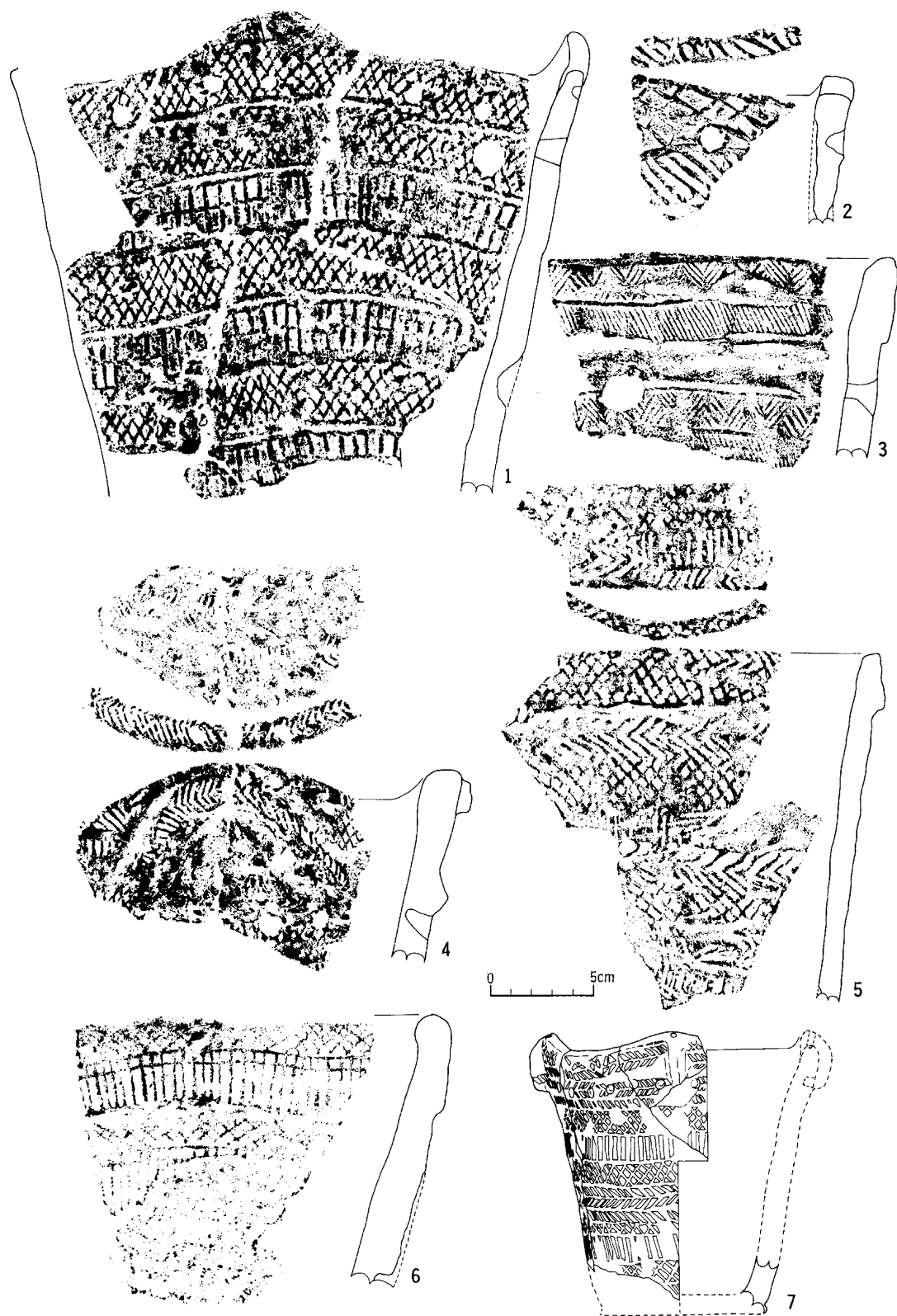
第232図 第Ⅷ層出土土器 (24)



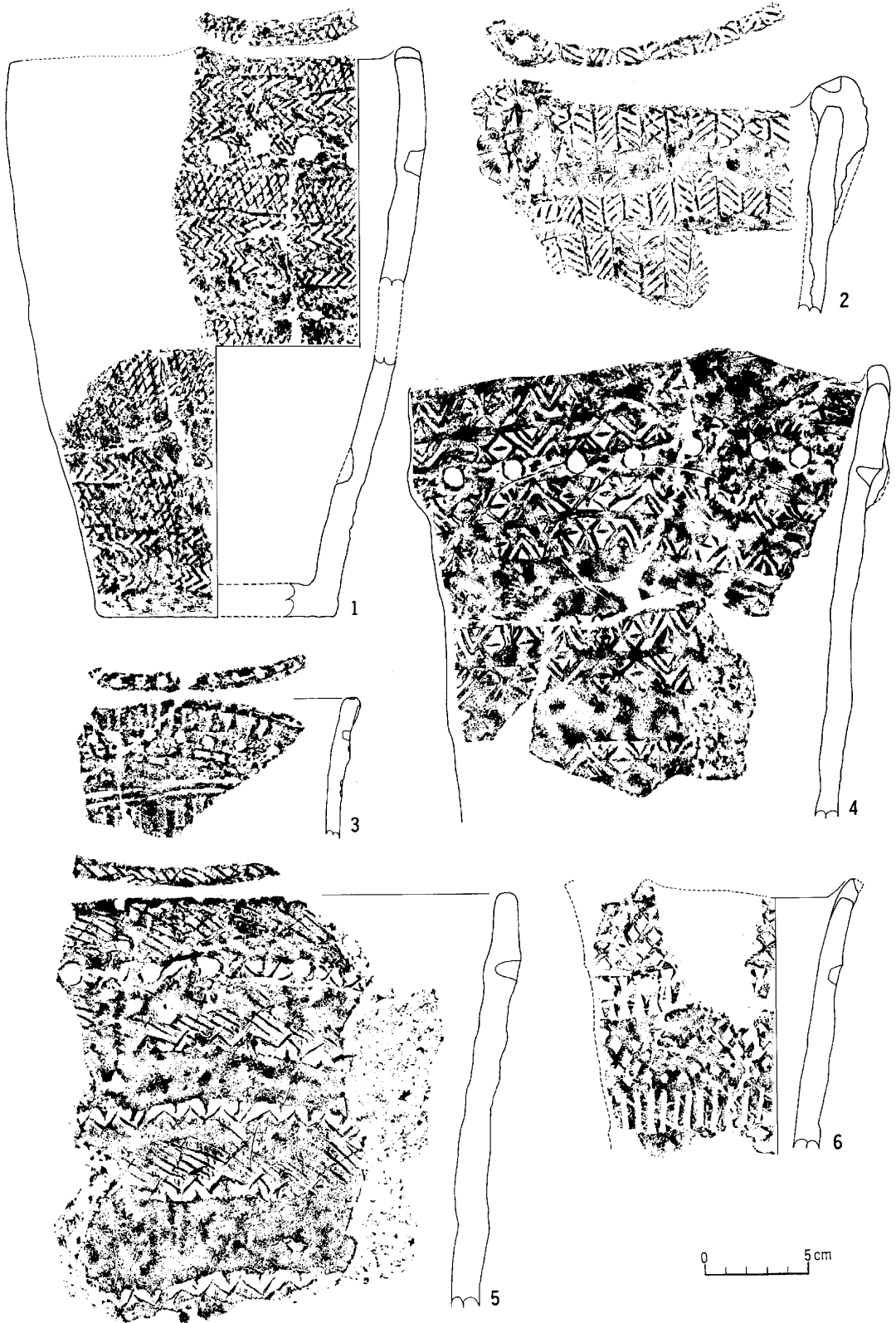
第233図 第Ⅻ層出土土器 (25)



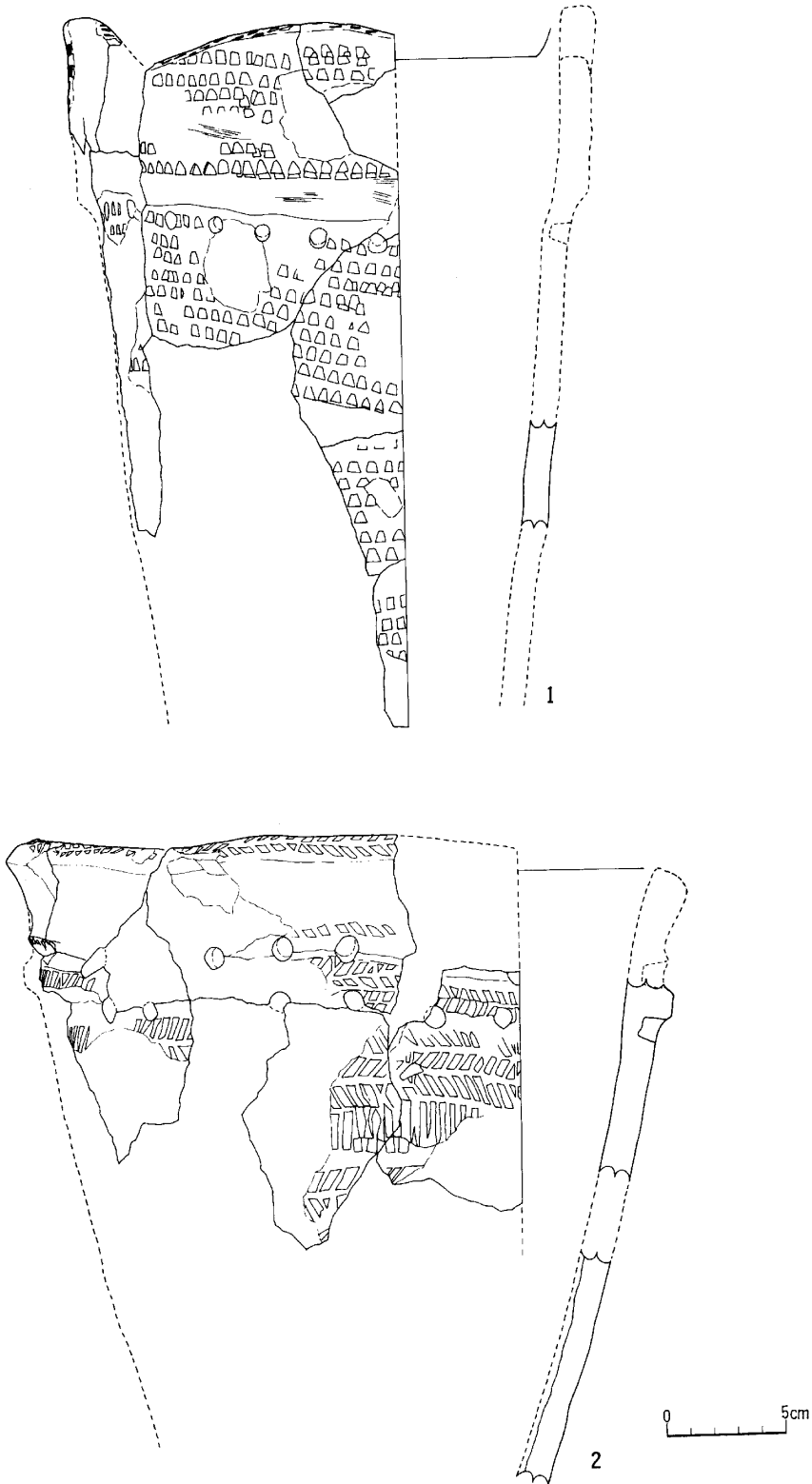
第234図 第XII層出土土器 (26)



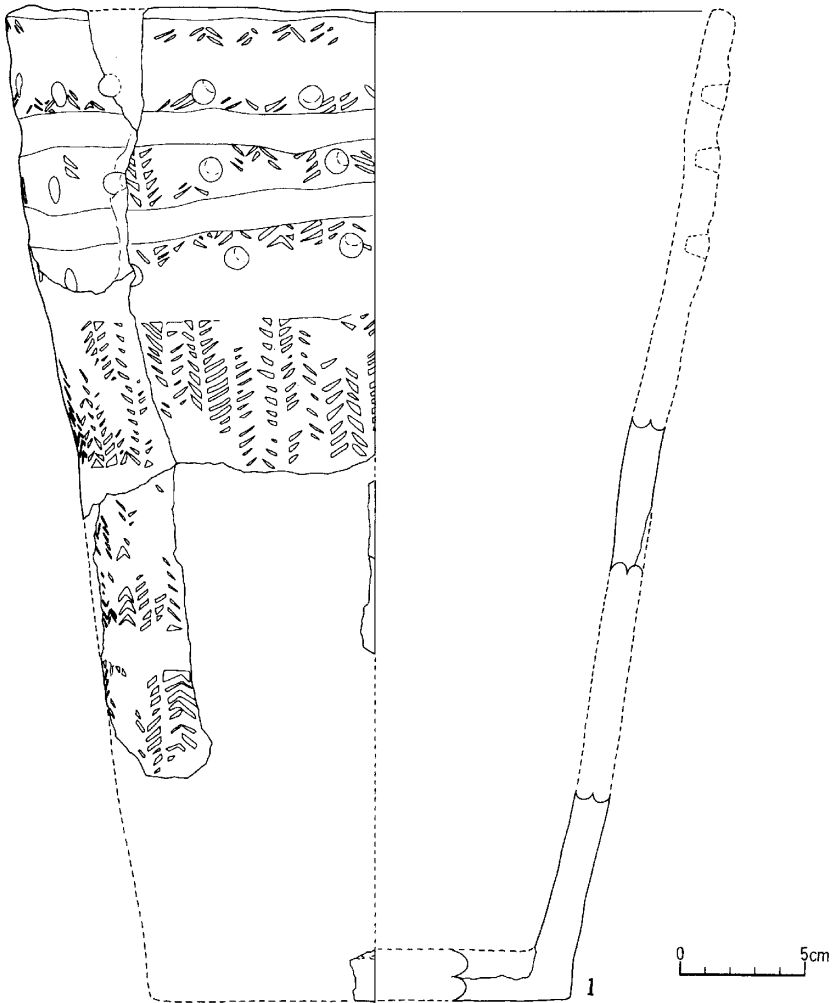
第235図 第Ⅱ層出土土器 (27)



第236図 第Ⅷ層出土土器 (28)



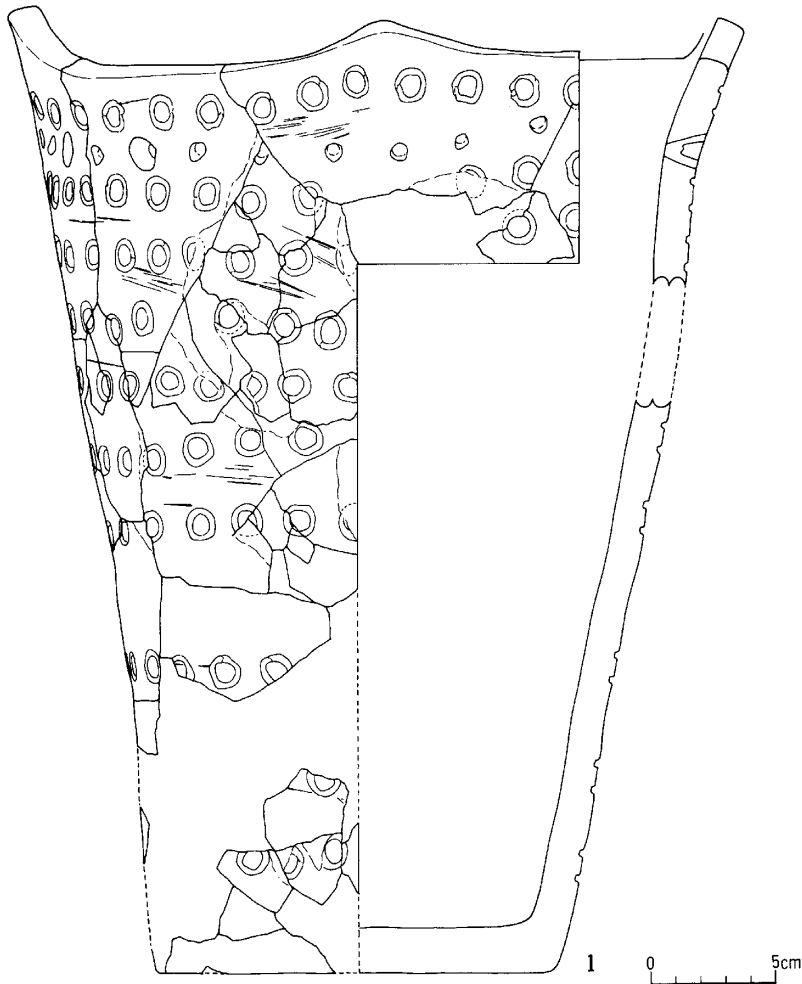
第237図 第四層出土土器 (29)



第238図 第Ⅱ層出土土器 (30)

第235図-1は口径28cmで山形小突起をもつ。円形文のある口縁部は2段の菱形文があり、それより下部は幅6cmの原体である短冊文・菱形文で構成される。2は菱形文と斜位の押型文が施される。3は肥厚帯の下部は無文部となるが円形文は施されない。押型文は刻みの細い波状文と斜位の押型文が施される。4は大きな円形の口縁部に沿って隆帯が付され、円形文が施される。5は切り出し状、6は薄い肥厚帯をもつ。円形文は無い。7(図版55-4)は口径15cm。器高14cmの小形土器。小波状の口縁部に縦位の隆帯が付され、円形文が巡る。幅4.5cmの原体は二段の矢羽根文と菱形文・短冊文で構成される。

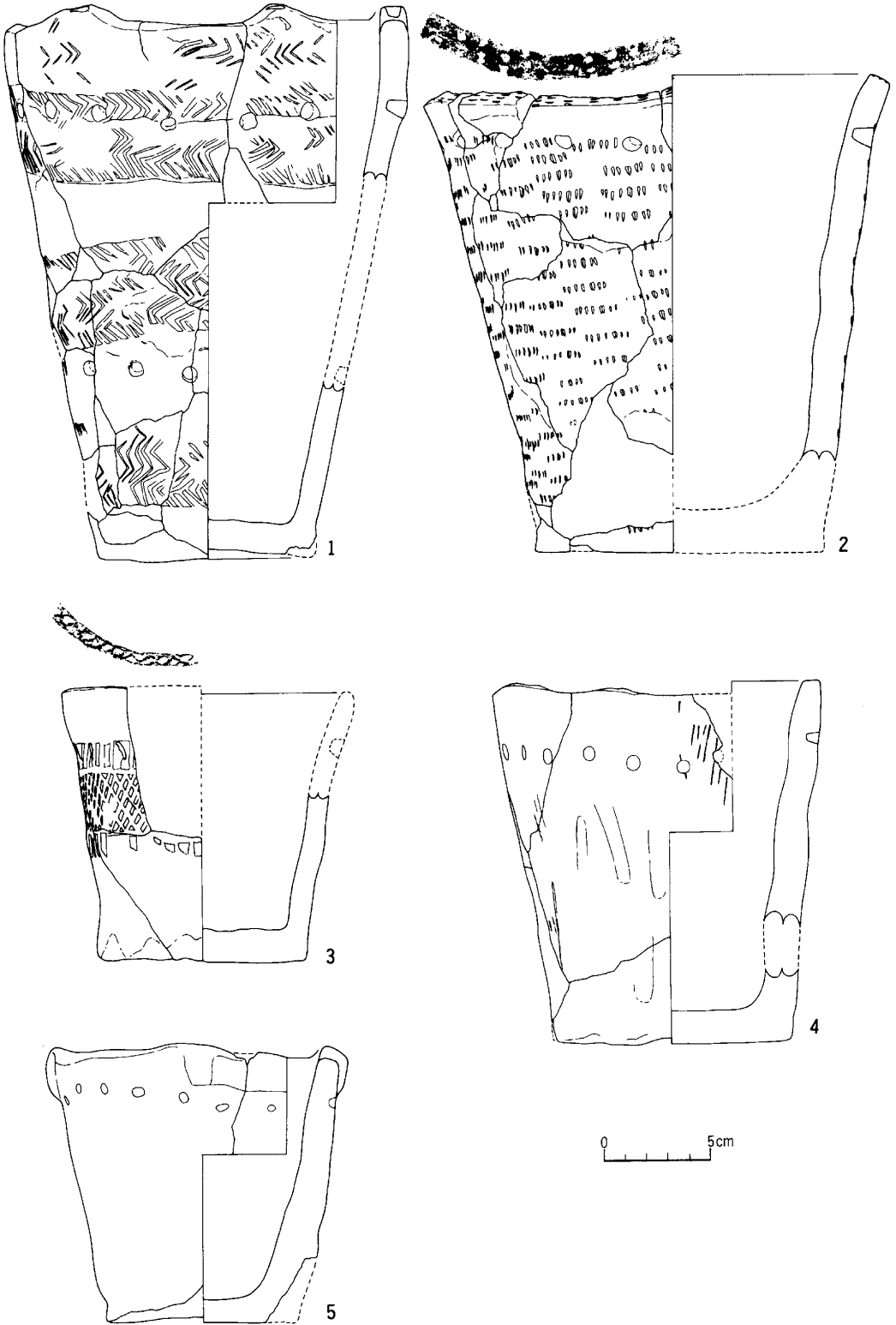
第236図-1は口径22cm、器高30cm。底部からほぼストレートに立上がり、小突起をもつ様である。円形文の施文部位は僅かに凹状を呈する。原体は波状文・菱形文で構成される。2は縦位の隆帯が付され、矢羽根状の押型文が施される。3の器面は薄く、凹帯部に円形文がある。



第239図 第Ⅹ層出土土器 (31)

方形文・長方形文と沈線文が見られる。4は口径25cm。山形口縁と薄い肥厚帯の下部には円形文がある。山形突起の下部は無文部となるがこの個所は横位の突起があったと考えられ、円形文と同列にある小突起と連結していたのであろう。原体は三角形文と山形文を組み合わせた複雑なもので、胴部に無文地を残す。原体幅は4cm。5の原体は両側が「V」字状文、内部が斜長方形である。原体幅は10cm。6は口径15cm。原体は菱形文・短冊文で構成される。原体幅は11cm。

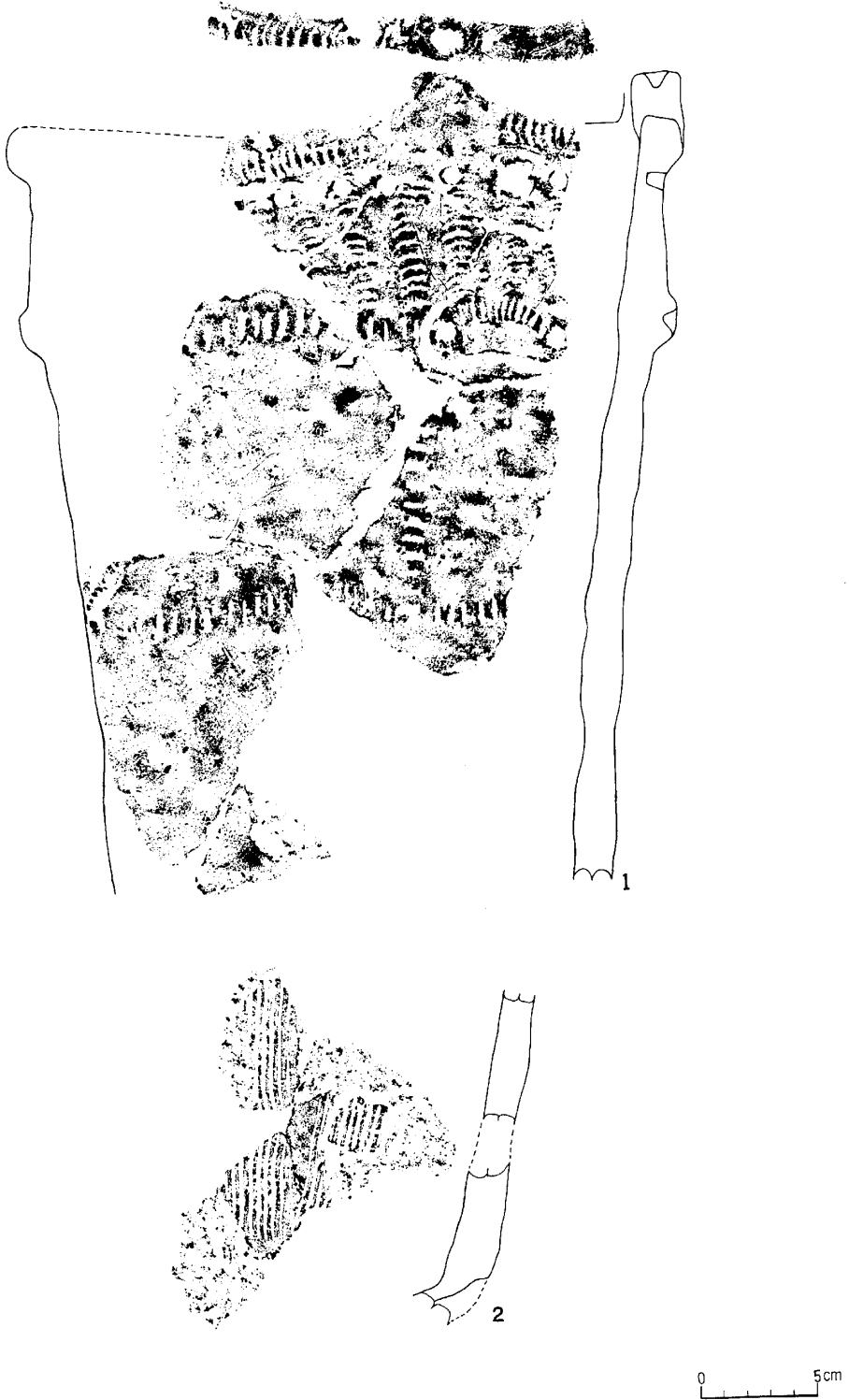
第237図-1(図版55-6)は口径22cmを計る。第Ⅷ層と第Ⅹ層出土の土器片が接合した。波状口縁は幅広の肥厚帯をもち、4本の縦位の隆帯が垂下する。円形文は肥厚帯下部にある。押型文は三角形である。2(図版56-1・2)は口径29cm。極めて緩い波状口縁である。口縁部は凹帯状の無文部を残し、横位の隆帯の上下に円形文、矢羽根状の押型文が横位に施される。



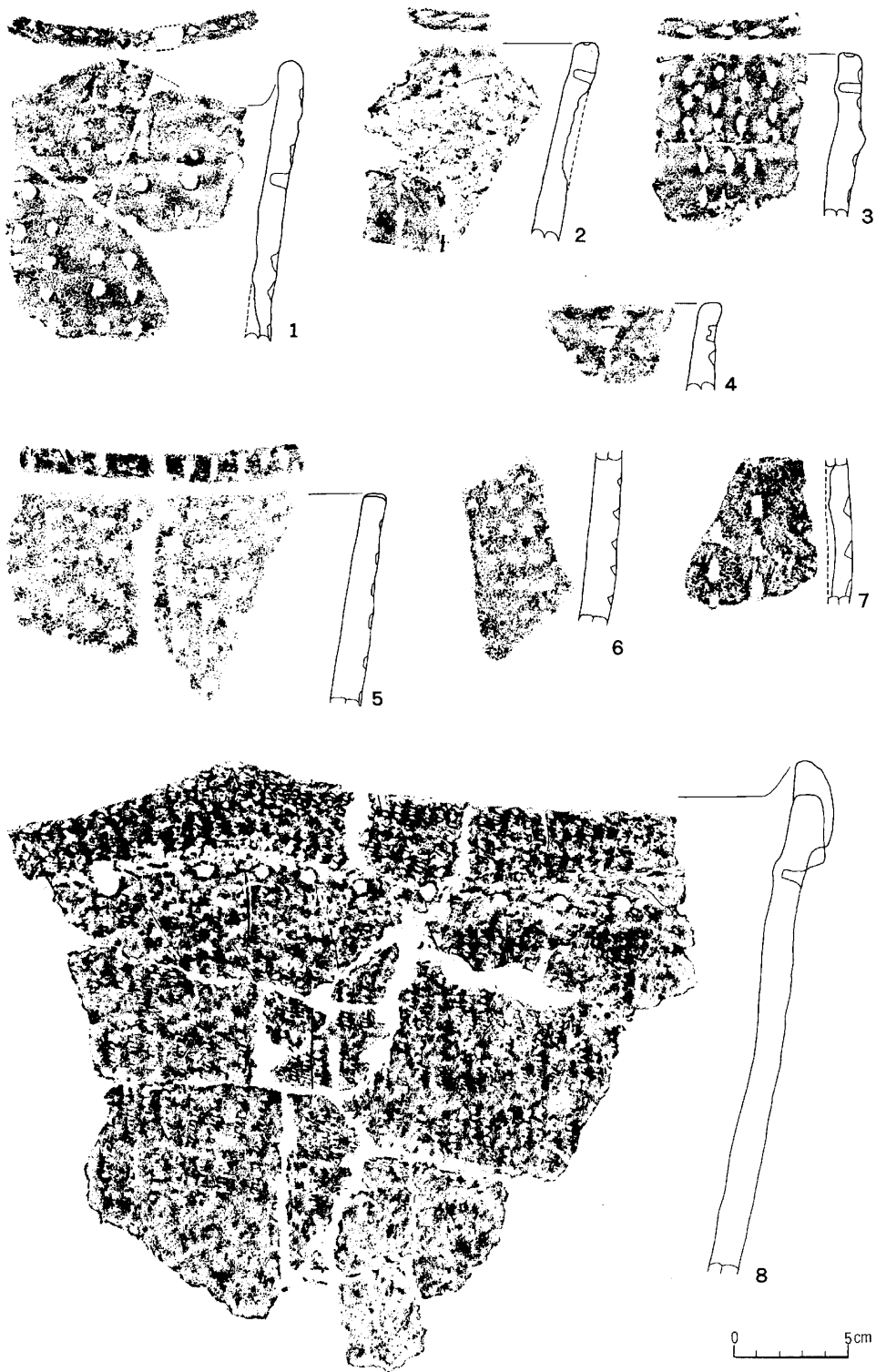
第240図 第Ⅱ層出土土器 (32)



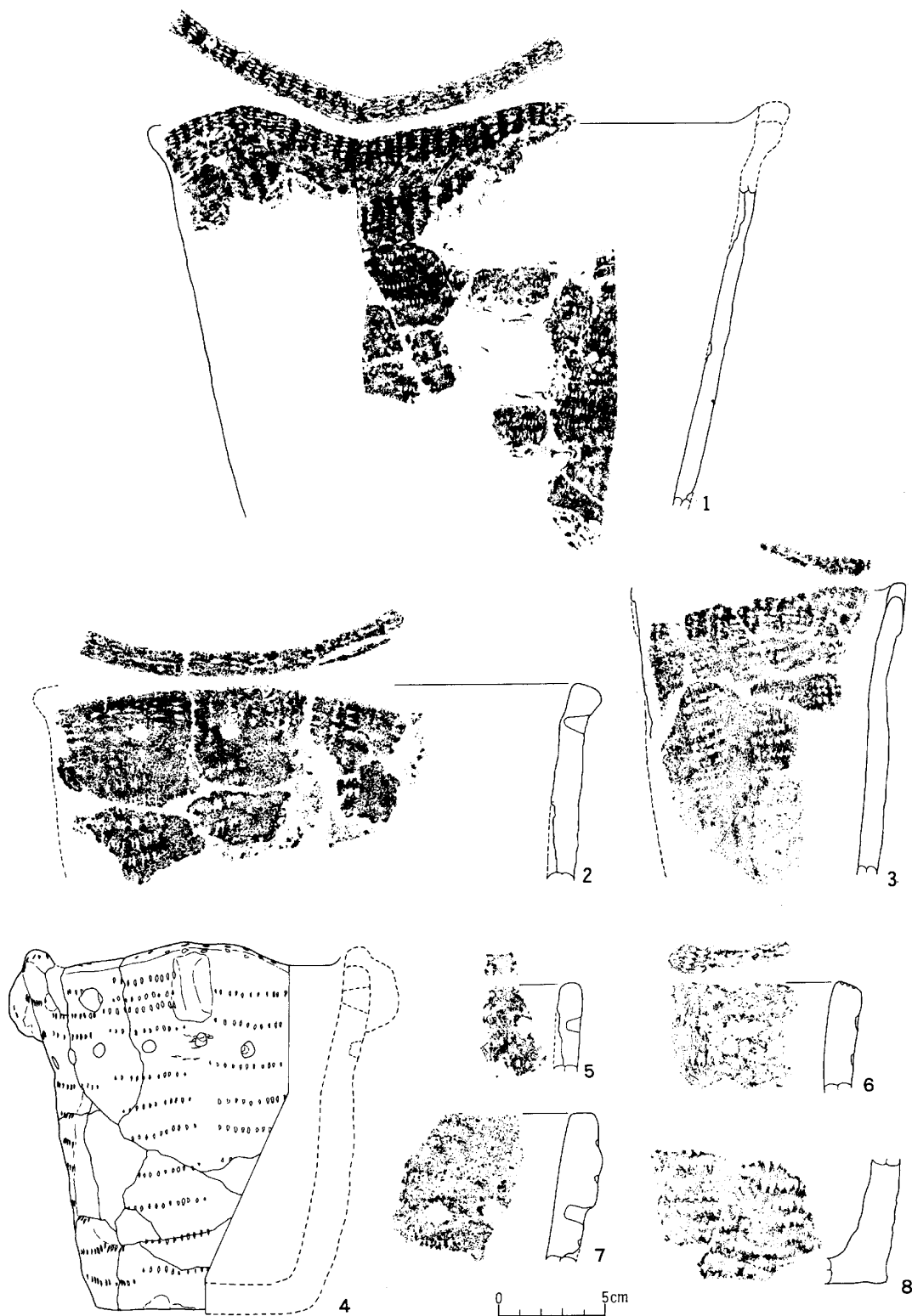
第241図 第四層出土土器 (33)



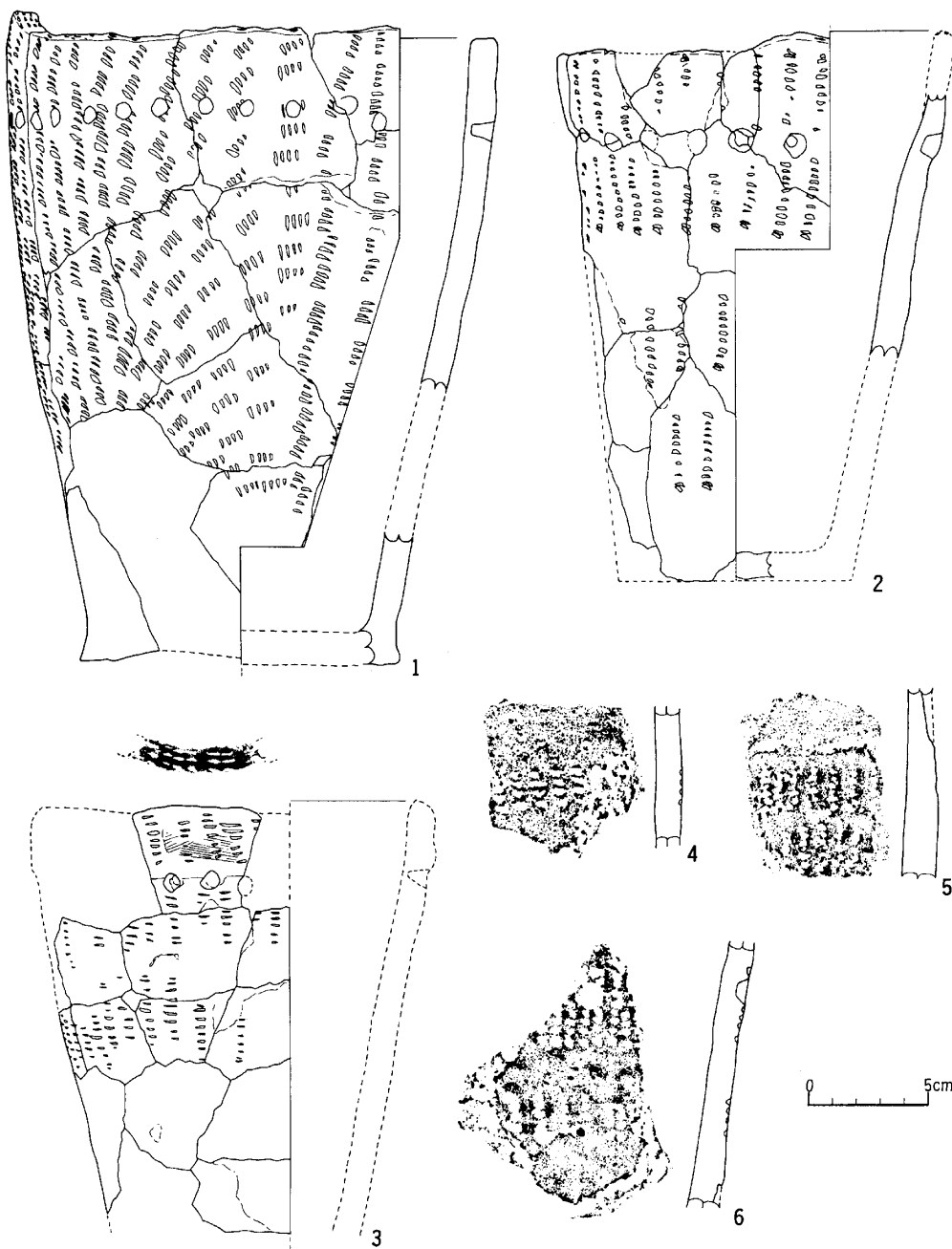
第242図 第Ⅷ層出土土器 (34)



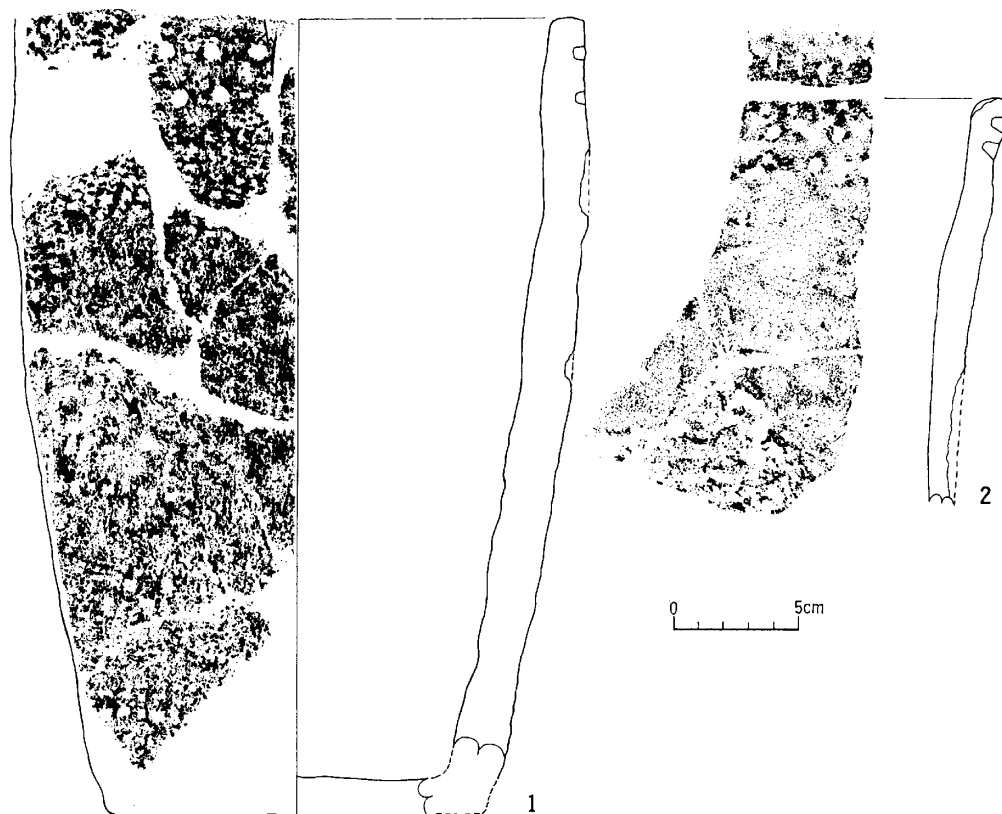
第243図 第Ⅷ層出土土器 (35)



第244図 第Ⅷ層出土土器 (36)



第245図 第四層出土土器 (37)



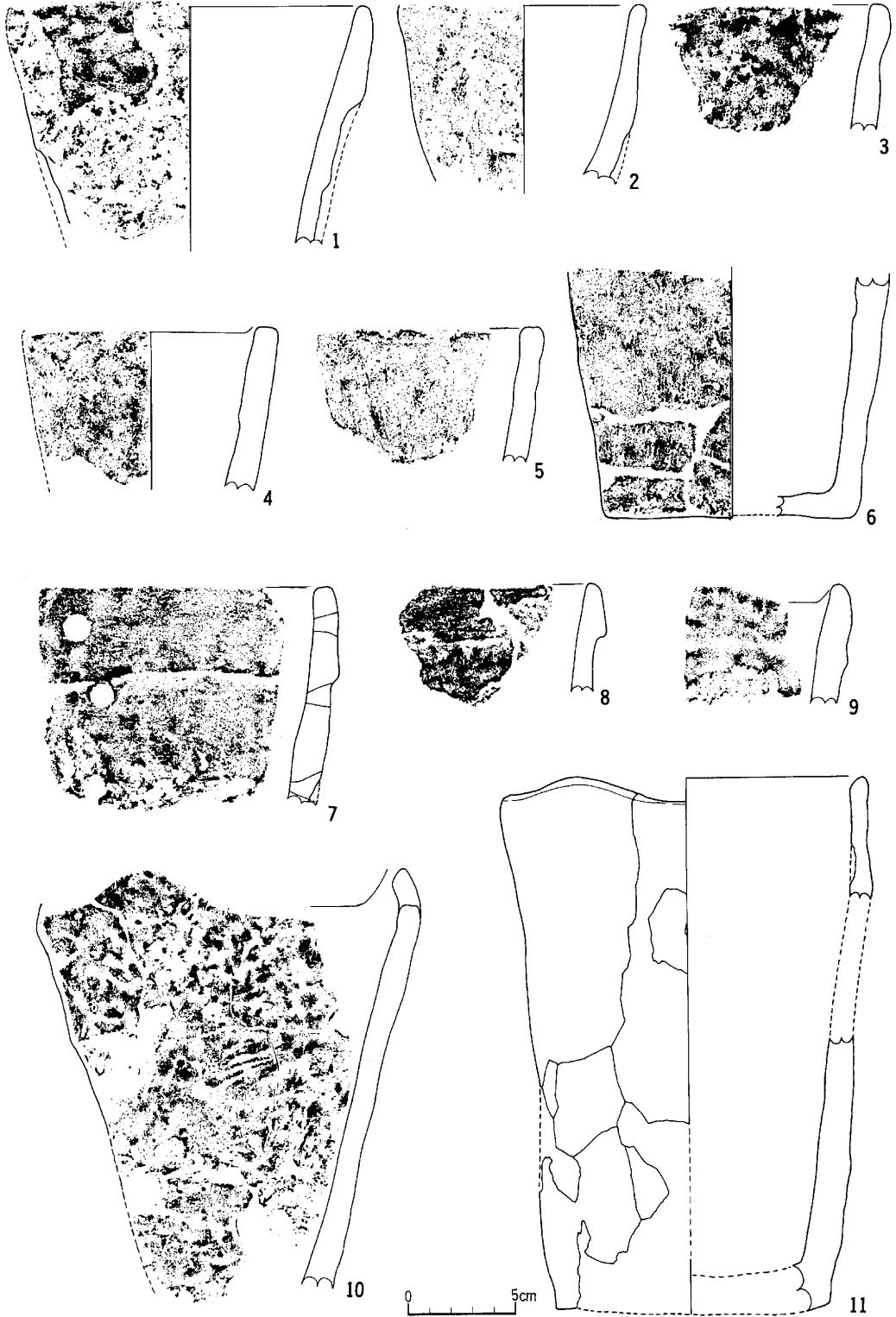
第246図 第Ⅷ層出土土器 (38)

第238図-1 (図版56-5) は口径29cm、器高40cm。2条の凹帯部と3条の円形文がある。縦位の矢羽根状文を4~5段にわたって施すもので原体幅は約6cm。押型文間に無文部を残す。

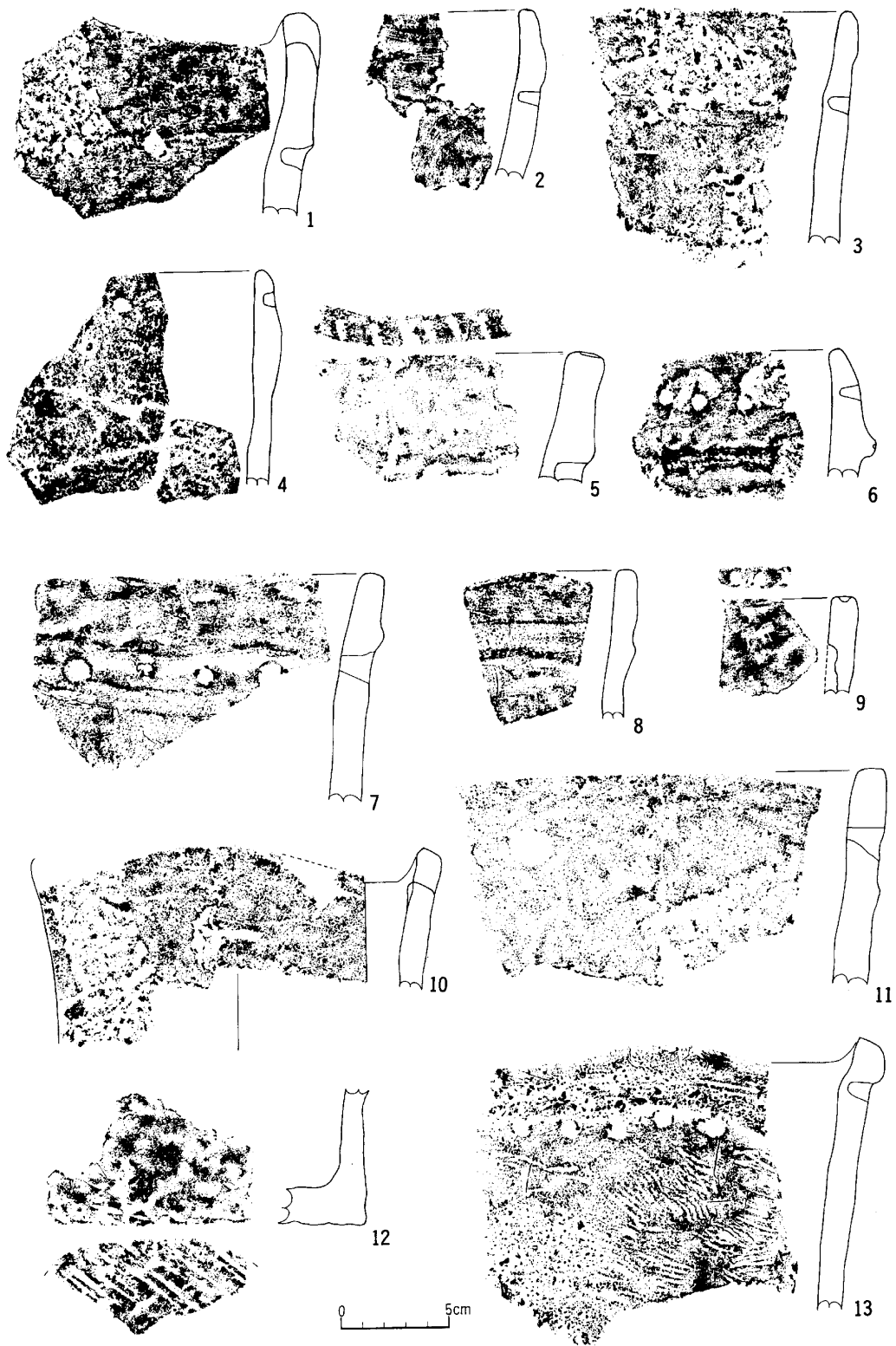
第239図-1 (図版56-6) は口径30cm、器高38cmで4個の山形小突起をもつ。小さな円形文のある頸部から僅かに外反する。器面は中空の円形文が連続し、胴下部では無文部が見られる。

第240図-1~5は同一の発掘区から出土した一括の土器群である。いずれも円形文がある。1 (図版57-1) は口径15cm、器高26cmで山形小突起をもつ。肥厚帯はやや肉厚である。幅広い無文地を残し、幅4cmの矢羽根状文の原体を施す。円形文は胴下部の無文部にも見られる。2 (図版57-2) は口径22cm、器高22cmの楯目文土器である。8本単位の楯歯と円形文が見られる。3 (図版57-3) は口径14cm、器高13cm。胴中央部は原体幅5cmの短冊文・菱形文・短冊文で構成され、口縁部と胴下部に無文部を残す。4 (図版57-4)・5 (図版57-5) は無文地に円形文がある。4は口径16cm、器高17cm。5は口径14cm、器高13cm。

第241図-1は横位の隆帯上部に刺突がある。2 (図版59-1・2) は楯歯のある肥厚帯下部に円形文があり、胴部は刺突を方形に区画する様に施す。3~7は刺突文系の土器。3の口唇



第247図 第Ⅷ層出土土器 (39)



第248図 第Ⅱ層出土土器 (40)

部は鋭い沈線が巡る。半截状の施文具をスタンプ的に浅く押し付けている。4は「一」状の施文具を縦・横に組み合わせ、丁寧に施文する。5は篋状、6は切り出し状の口縁部で三角形の施文具を利用。7は口径25cm。器面は大きく剥落するものの、口縁部と並行して2条の刺突列が施され、その下部に円形文が見られる。

第242図-1は口径30cmの大型土器。口縁部とその下部に幅1.5cm程の横位隆帯がある。円形文は口縁部の隆帯下部で等間隔に配列される。刺突文は横位、口縁部の小突起では縦位に施される。2は櫛歯を縦位に流したもの。

第243図-1～7は刺突文系の土器であり、1～4は円形文がある。1は極めて薄い肥厚帯をもつ様である。下方から2～3本単位で刺突される。3は断面三角形の細い隆帯がある。8は櫛目文系の土器で張出した肉厚の肥厚帯の下部に円形文が連続する。櫛歯は縦位で胴部は無文部を残す。

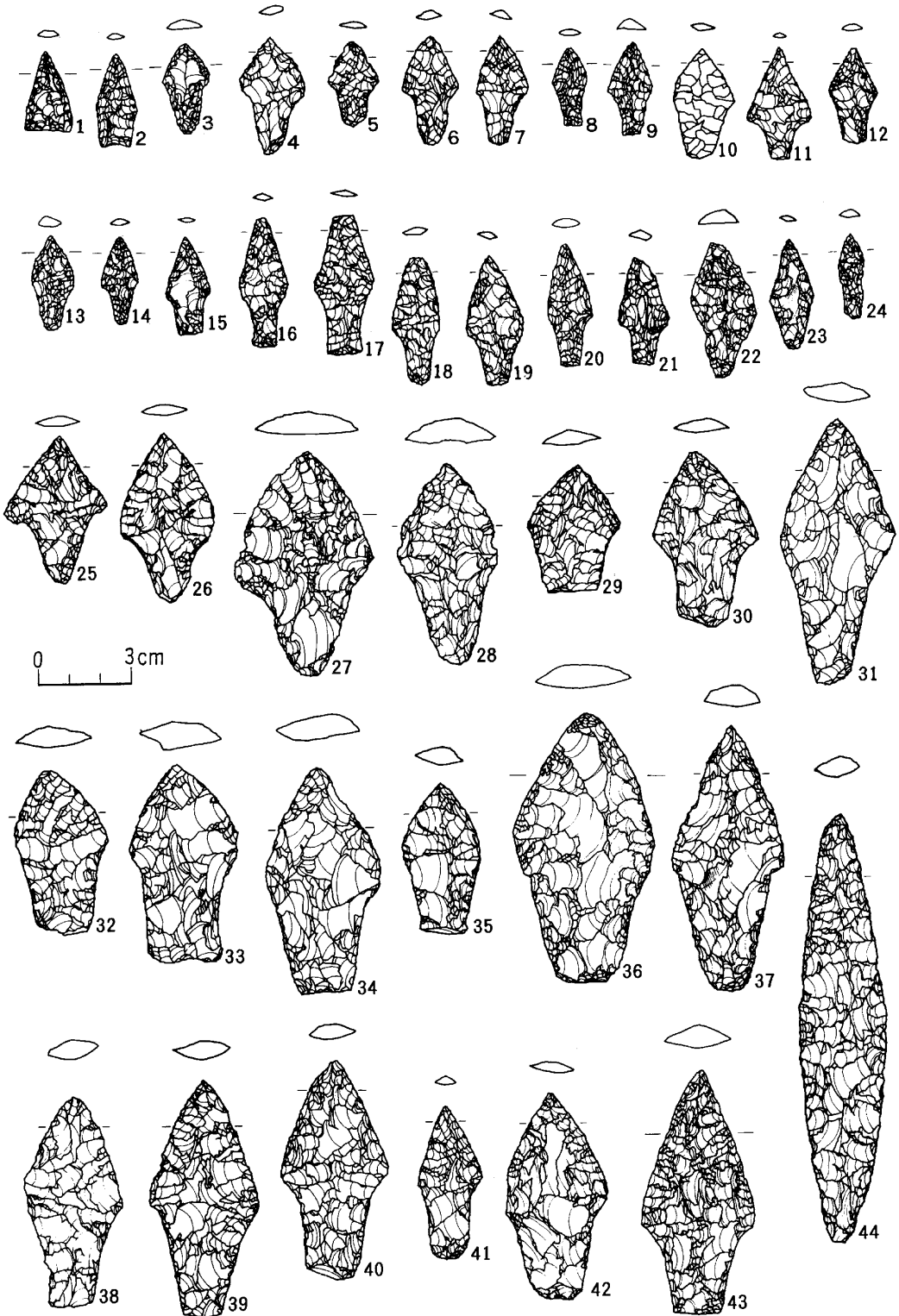
第244図-1～8は櫛目文系の土器。1は口径32cm。波状の口縁部で幅狭い肥厚帯をもつ。10～14本単位の櫛歯を口縁部で縦位、胴部で横位に施す。2は口径28cm。6～9本単位の櫛歯を口縁部で縦位、胴部で横位に施す。3は薄い肥厚帯を持ち8～11本単位の櫛歯が縦・横位に施される。4(図版58-5)は口径18cm、器高19cm。小波状の口縁部下に縦位の隆帯があり、並行して円形文がある。櫛歯は10本単位で横位に施される。5・6の本数は不明。7は10本。8は底部で7～8本の櫛歯である。

第245図-1～6は櫛目文系の土器。1(図版58-1・2)は口径22cm、器高31cm。2つの極めて緩い波状口縁をもち、底部は張り出す。4本単位の縦位の櫛歯を地文に円形文が施される。2・3は肥厚帯の下部に円形文がある。2(図版58-3)は口径18cm、器高25cmで7～8本単位の縦位の櫛歯を地文とする。3(図版58-4)は口径18cm。7～9本単位の縦位の櫛歯を地文とする。4は4本、5は7本、6は8本の櫛歯である。

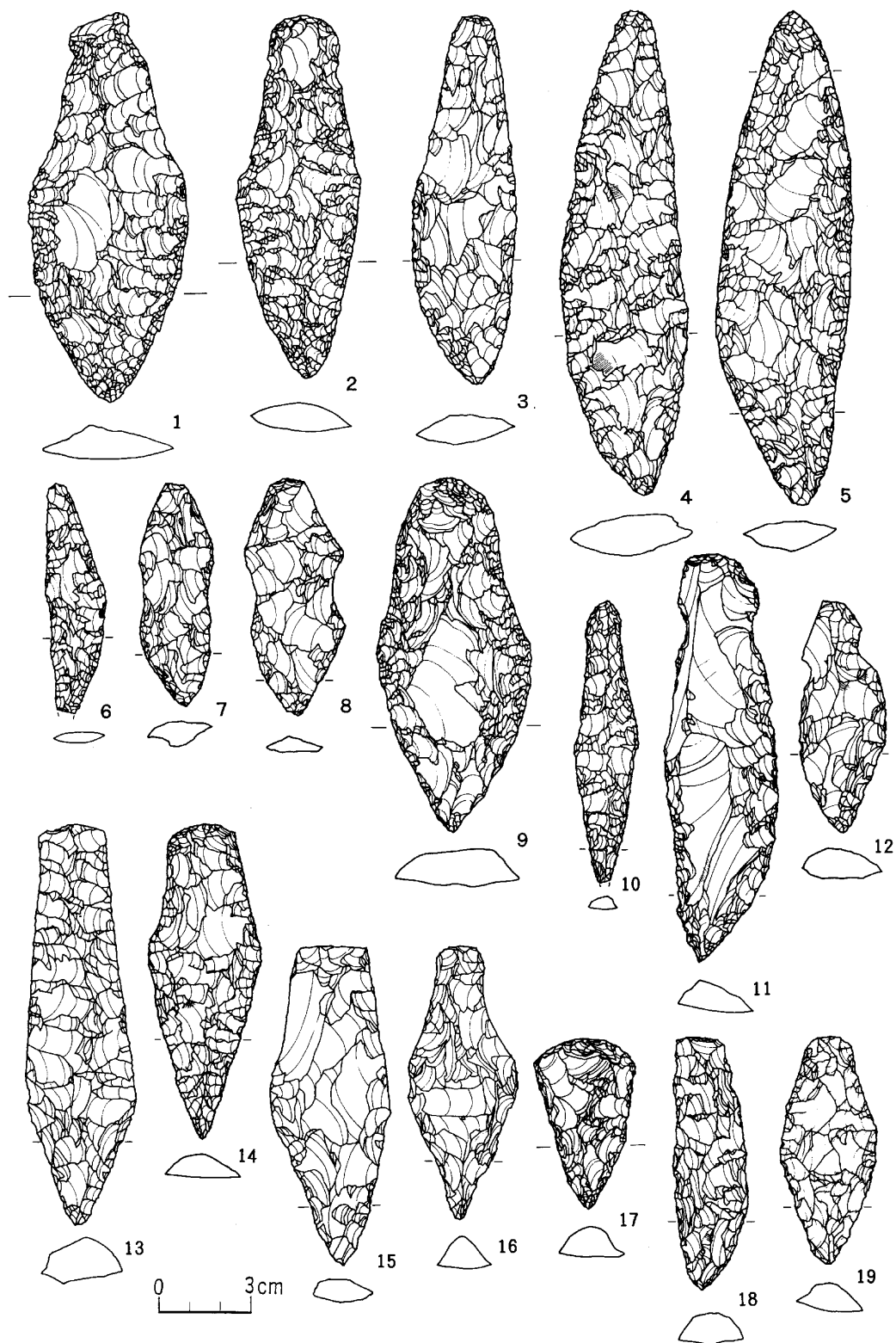
第246図-1(図版59-5)は口径25cm、器高34cm。器壁は底部を除き肉厚で、ほぼストレートに立ち上がる。口縁部と底部周辺、胴部の一部に方形状の押形文があるが、施文後に擦り消しを行っているため胴部は特に無文地となっている。2は無文で口縁下に2条の円形文、口唇部に半截状の刺突がある。

第247図-1～11は無文土器。1は口径18cm。2は口径12cm。4は口径12cm。7は薄い肥厚帯、8は切り出し状、9は凹帯を口縁部にもつ。10(図版59-6)は口径19cm。胴中央部から朝顔状に開き、内屈気味の山形突起がある。11(図版59-7)は口径18cm、器高27cmで波状口縁をもち、底部からほぼストレートに立ち上がる。

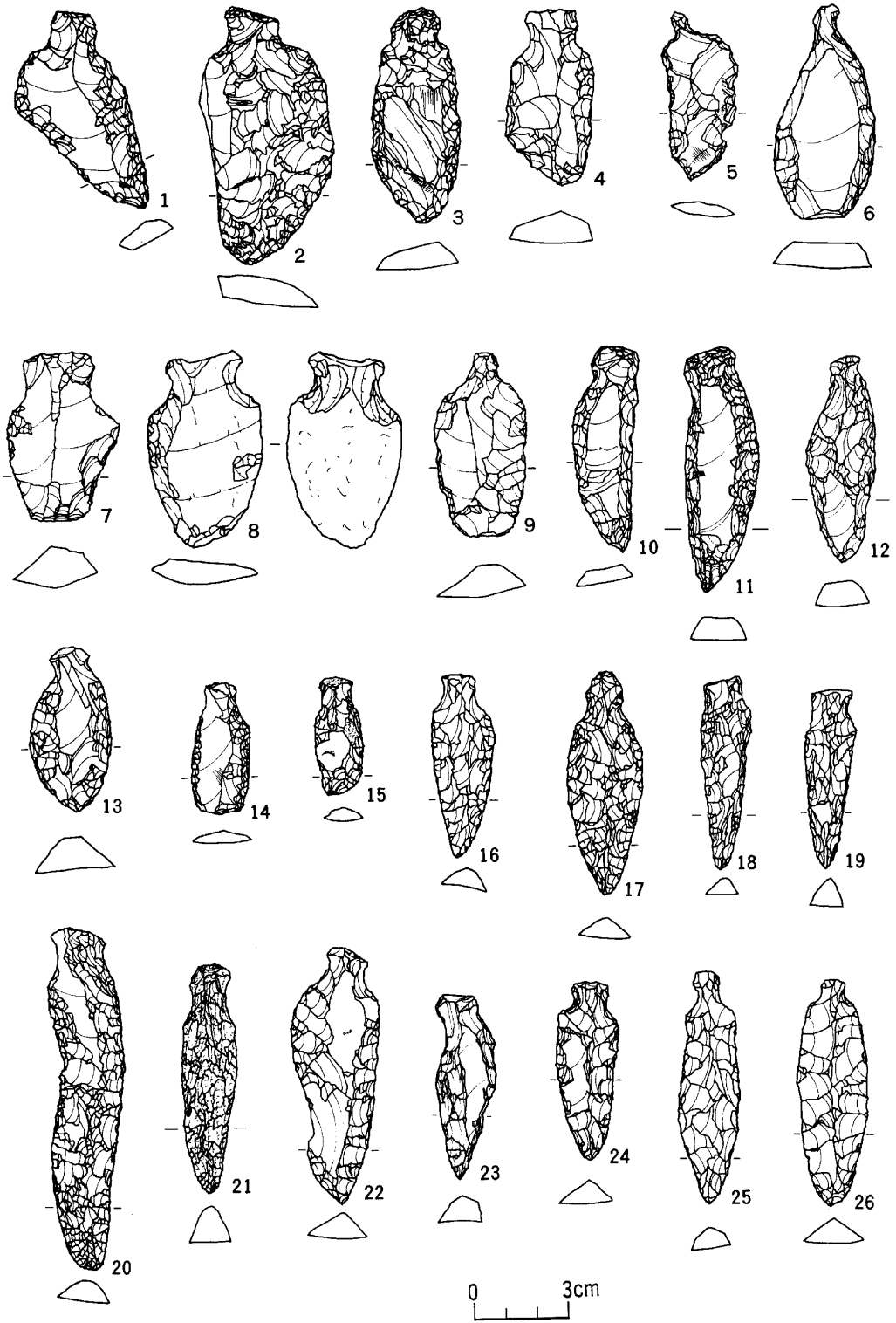
第248図-1～11は無文土器。1は山形突起と薄い肥厚帯をもつ。器面は横位の擦痕が見られる。2は横位の隆帯、3は2個1組の円形文がある。5は幅広の無文帯は凹状を呈し、6は横位の細い隆帯に縄線が施される。7・8は凹帯のあるもので7は円形文がある。10は弧状の口縁部。12の底部には細い沈線文が見られる。13は波状口縁部に幅狭い肥厚帯をもち、円形文が



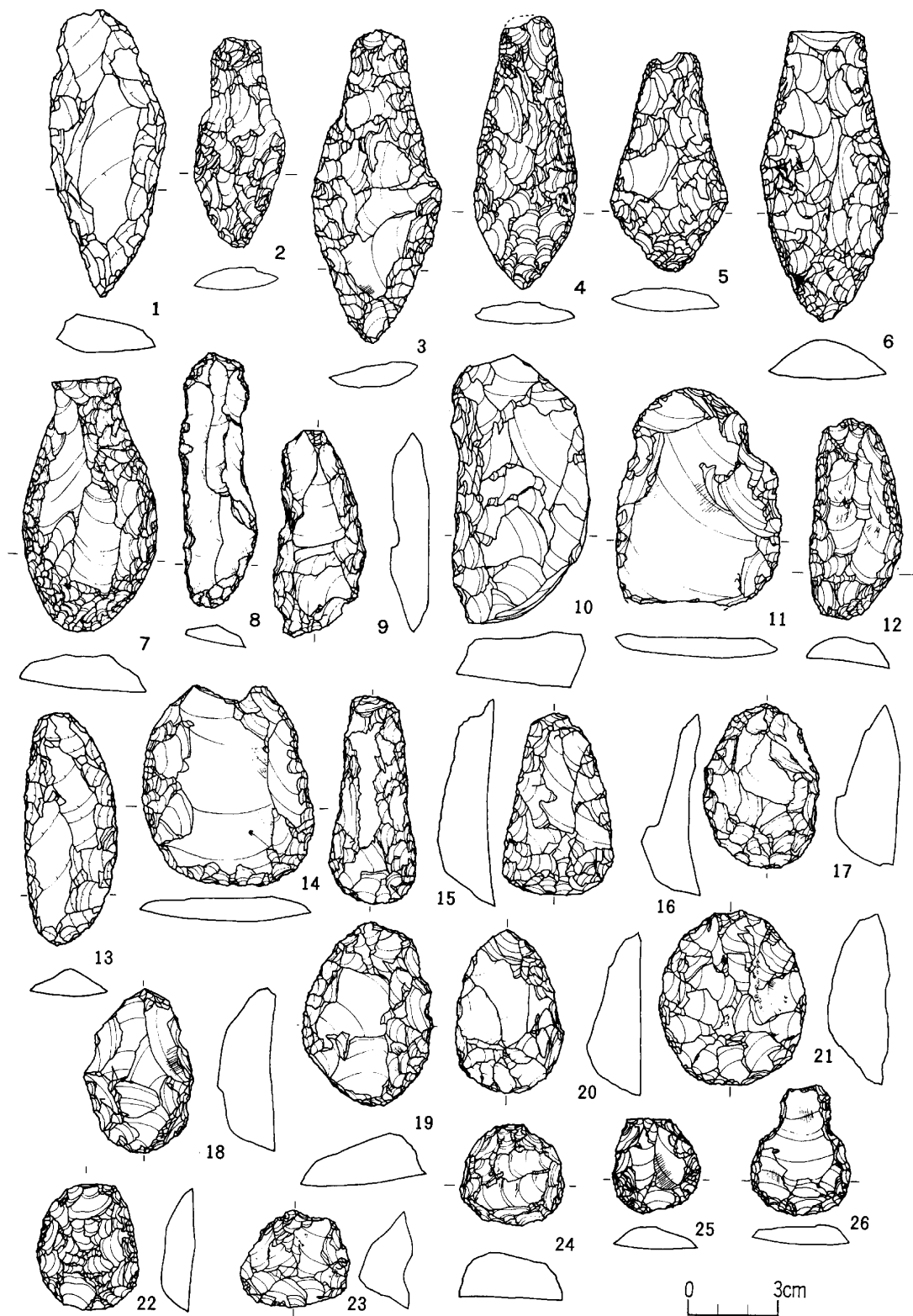
第249図 第Ⅻ層出土石器(1)



第250図 第四層出土石器(2)



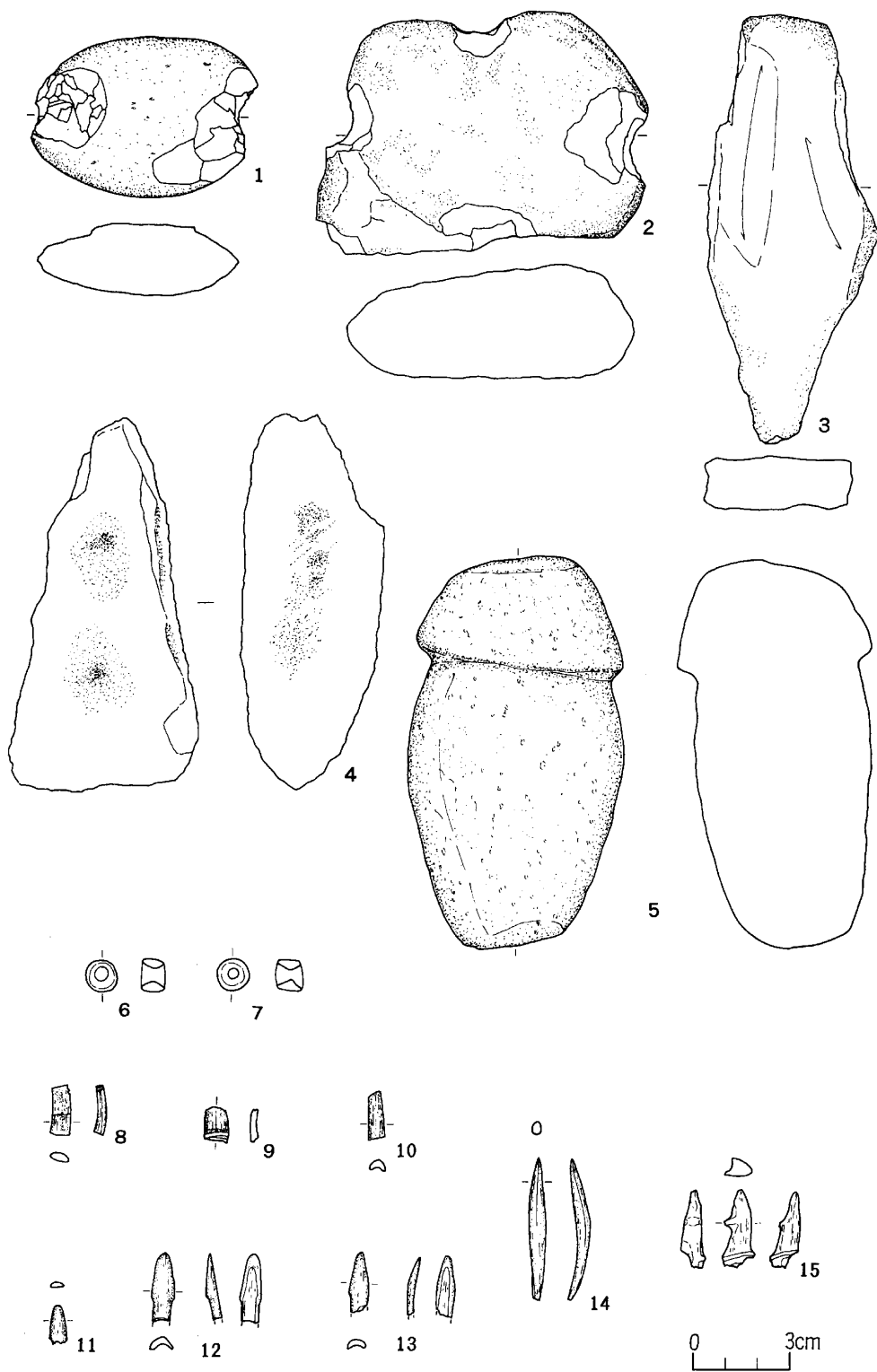
第251図 第Ⅷ層出土石器（3）



第252図 第Ⅶ層出土石器(4)



第253図 第Ⅳ層出土石器(5)



第254図 第四層出土石器(1~4)・石棒(5)・飾玉(6・7)・骨角器(8~15)

あるもので器面は横位の捺糸文が施される。

(2) 石器 (第249図・250図・251図・252図・253図・254図、図版61・62・63・64・65)

第249図－1～24は石鏃。1は三角形、2は五角形状の無茎石鏃。3～12は鏃身部が正三角形、13～21は二等辺三角形形状の有茎石鏃で16・17は基部が張り出す。22・23は菱形。24は棒状。25～44は石銛・石槍。25～35は先端部が正三角形、36～43は二等辺三角形形状、44は柳葉状。全て黒曜石製。

第250図－1～6・10・12～19は先端部が尖る両面加工ナイフで1・2・10～12は基部に小さな抉入部がある。5・6はブーメラン状を呈する。7・8は中央の両側に大きな抉入部のある両面加工ナイフ。13～14は方形の柄部が作出される。11は片面加工ナイフ。15・16は頁石製。他は全て黒曜石製。

第251図－1～26は石匙。1は横形に近く他は縦型である。特に2～9は幅広である。1は裏面にも急斜な刃部がある。1～5は黒曜石製。8は原礫面を広く残す。15はメノウ。6・7・9～14、16～26、は頁岩。8は安山岩。

第252図－1は安山岩製の片面加工ナイフ。2～6は両面加工ナイフ。7は片面加工されるものの先端部は入念に加工され急斜な刃部を持つ。削器と搔器の併用型。8～14は削器。15～26は搔器。7は硬質頁岩製。13は硫紋岩製。他は黒曜石製。

第253図は磨製石斧。1～5は撥状を呈する。1～3は両刃、4・5は研磨調整された片刃磨製石斧。6・7は側面が敲打調整された片刃磨製石斧。8～10・11も全面研磨されている。12は刃部が作出されていない。原石面に使用痕がある石斧状の磨石。安山岩製。13～16は細身で研磨調整された磨製石斧。1～6・14は青色片岩。8・13・15は緑色片岩。9は硬質頁岩。7・10・11は泥岩。12・16は安山岩。

第254図－1は安山岩を素材とする2箇所打欠きの石錘。2は砂岩製の4箇所打欠きの石錘。3は砥石。裏面に溝を持つ。4は凹み石。5は石棒。長さ12cm。先端幅4cm。胴部6.8cm。丸みのある楕円形状の軽石を素材に頭部を男根状に作出する。この石棒は石囲み炉群から離れたG'71グリッドから出土した。6・7はJ'55グリッドから第240図の土器群(図版51-2)と伴に出土した装身具。2点とも両面から穿孔する。硬質頁岩製。

(3) 骨角器 (第254図－8～15、図版60－3～10)

第254図－8～10は焼土・石囲み炉から出土した。骨鏃片であろう。8はシカ骨と思われる。9は不明。10は陸獣骨であろう。11～13は骨鏃の先端部と思われるもので12・13はアグ状の張出しがあり、裏面は柄を装着するための凹状溝がある。14は先端部が鋭く加工された骨鏃。15は先端部が尖り、左側には2個の小突起をもつ。最下端部は丸みをもった隆起部が作出されている。動物意匠の骨角器であろう。

第Ⅳ章 ま と め

1

従来、平底押型文土器の編年上の位置づけは縄文前期末とか中期初頭と称されいまひとつ明確にできない状況であった。それはこの土器群が層位関係から捉えられるような遺跡に恵まれなかったことと遺構、遺物の稀薄性に要因が求められる。常呂川河口遺跡はこれらの点を補える土器群が層位的な裏づけをもって出土した。

本遺跡からは間層を挟む第Ⅷ層と第Ⅸ層から平底押型文土器が出土している。先に層位的に分かれるこれらの土器群のうち第Ⅷ層を常呂川河口押型文Ⅰ群、第Ⅸ層を同Ⅱ群とするとともにトコロ6類及び第Ⅹ層出土の(古)トコロ6類の位置についても概要を報告したことがある。その後の調査で第Ⅹa・Ⅹc層から北筒式系の遺物包含層を確認した。

第Ⅷ層からは第Ⅹ章に示す通りトコロ5類、同6類、(古)6類土器等に混じって平底押型文土器も出土する。この平底押型文土器の特徴は器形が大型なことである。底部から口縁部まで完全に復元できたのが第143図、第144図、第145図-1、第147図-1、第148図、第149図、第151図、第152図、第153図、第160図の10個体。底部から胴部にかけて欠失するものは第146図-1、第150図-1・2、第155図-1・2、第156図-1、第154図-1の7個体である。完形品から見ると第143図-1は出土土器の中で最も大型なもので器高53cm、口径31cmあり、最小でも第160図-1が器高30cm、口径22.5cmである。他の大部分は破片と下層の第Ⅸ層から出土している押型文土器である。

完形品と半完形品の17個体の土器の特徴は口縁部の断面が切り出し状を呈するものが13個体と多く、角形状のものは4点と少ない。切り出し状の口縁部が多い傾向性が窺われる。口縁部には4個の山形突起とそこから派生する細い隆帯が垂下する。第150図-1は1cm程度の幅広い隆帯を鋸歯状に施しているが、他は全て縦位の細い隆帯である。器面には刺突列を加えるものもある。第148図のものは隆帯を刺突で現わしているように思われる。刺突は全例とも口縁上部にある。刺突の方法は下方から抉り取る様に施されたもので、刺突具は筥状・半截状を主体とするほか第153図は竹管を利用するものがある。器面に沈線を施す例は少なく第144図の横走る隆帯上部に山形沈線が連続するものがあるだけである。この沈線文を施文するものが美深町楠木遺跡の遺構外出土土器に繋がるのであろう。短沈線が不規則に施文された第147図-2、刺突の間隔が狭い第146図-2、第148図、第153図、第154図などは沈線を意識した施文手法と考えられる。第143図、第146図-1、第149図、第153図、第155図に見られる横位の沈線は両端が凸部のある施文具を用いたためのものであり文様としての沈線とは異なる。ただこの事から施文具幅数が5cmであることも確認できる。

道東部において口縁部が切り出し状を持つ例は常呂町岐阜第2遺跡10号竪穴、10Q号竪穴埋土がある。切り出し状と刺突列があるのは同じく10号竪穴、同10A号竪穴、栄浦第二遺跡11、12号竪穴埋土がある。山形小突起から垂下した隆帯と胴部の横位隆帯が連結する例は朝日トコロ貝塚Eトレンチから出土した第10類に分類されている土器がある。第10類土器の口縁部は切り出し状かそれに近似する断面を持ち、押型文原体は単一が多い様であり本土器群とも類似する。層的にはトコロ6類を包含する貝層の下層から出土している。道北部では名寄市日進33遺跡発掘区土器は口縁部形態、隆帯、刺突列などから本土器群と類似した特徴を持つ。本土器群を含めこれらの遺跡からは刺突文系、櫛目文系の土器が相伴しないことも大きな特色として指摘できる。

押型文は菱形文や格子目文、連続山形文など単一の文様を施すものが13個体と多く、複数の文様のある原体は4個体と少ないことも本土器群の特徴であり、常呂川河口押型文I群として型式設定を考えるものである。

第Ⅷ層からは実に多量の土器が出土している。第Ⅷ層出土の押型文土器が大型を基本としたものであるのに対し、本層のものは大型に中型・小型が加わる。完形品で器高30cm以上のものは第209図、第210図、第211図、第212図、第213図、第214図、第217図、第218図、第219図、第220図、第223図、第229図-1、第238図の13個体あり、底部と胴部が欠失したものを含めると27個体、第Ⅷ層からも同型式の土器が出土しておりそれらを含めると40個体以上に及ぶ。器高20cm以上29cm未満の中型土器は第224図、第225図-2、第226図-2、第228図-4、第231図-1・2、第232図-2、第238図-1、第240図-1、第246図-1の10個体であり、底部欠失のものを含めると20個体以上になる。器高19cm未満の小型土器は第231図-3、第232図-2、第235図-7、第240図-3の4個体あり、底部欠失を含めると11個体である。刺突文系・櫛目文系・無文の土器にも大型・中型・小型の土器がある。大型は第239図。底部欠失4個体の計5個体である。中型は第240図-2、第245図-1・2、第247図-11の4個体と底部欠失1個体の計5個体。小型は第240図-4・5、第244図-4の3個体と底部欠失3個体の計6個体である。

口縁部は第Ⅷ層出土の押型文が山形小突起をもつものに対し、本層ものは大きな波状、弧状、台形状、山形状など多岐に渡っている。器形は第Ⅷ層と同じで底部からほぼ垂直に立ち上がるものの他、口縁部で朝顔状に大きく開くものがある。口縁部の断面は角形状が殆どであり、第Ⅷ層に見られた切り出し状の例は第220図、第223図の2個体だけである。本土器群を特徴づける最大の点は口縁下部と並行して円形刺突文が施されることである。底部欠失を含めた大型・中型・小型土器の68個体（第Ⅷ層出土を除く）中48個体、71%に円形刺突文が見られる。第Ⅷ層の土器群に見られた刺突文や沈線文を施す例は無いが、第215図-1と第217図は下方から取り取る様な状態の刺突が加えられ、第215図-1は口縁下部が段状化するものがある。この種の例は斜里町シュマトカリベツ9遺跡ピット1出土のものと類似する。円形文の幅は比較的広いものが多く、藤本強氏が仮称する「岐阜IIA群」に見られる円形文とは相違する。隆帯を持つ

ものでは幅が比較的太い。特に胴上部で横走する第223図での隆帯は約3cmに及び、縦の隆帯も第Ⅷ層の土器と比較すると短く太い。さらに第211図、第214図では器面に幅広い無文帯を残し複段効果を持たせている。第217図、第218図、第230図-1、第237図-2の口縁部は凹状の無文帯を残す。第224図-1、第229図-1は凹部を作出後に円形文を施し、第238図では2本の凹部が見られる。第215図-2は幅3.5cmの幅広い凹状隆帯に円形文を施している。この点もまた本土器群の特徴として捉えることが可能であり、網走式の影響を受けたものと理解できる。押型文原体は多様である。「格子目文」、「矢羽根文」、「縦位山形文」、「連続山形文」、「菱形文」など単一の原体を使用するほか「縦位山形文+短冊文」、「格子目文+縦位山形文+矢羽根文」、「縦位矢羽根文+連続山形文」、「短冊文+菱形文」、「菱形文+連続山形文」、「短冊文+格子目文」、「三角文+縦位山形文+矢羽根文」なども見られる。特殊なものは第236図-4の「三角文」と「山形文」、第236図-5の「V」字状と「斜長方形」を組み合わせたものがある。原体幅も5cm前後のものが最も多い。

道東部において本群と同種の土器は網走市嘉多山4遺跡がある。この遺跡の6号竪穴床面からは常呂川河口押型文Ⅱ群と同型式で円形文をもつもの3個体と無文1個体が出土する。北見市開成遺跡や黄褐色粘土を円形に貼り、中央の大型の石囲み炉の周りに小型の石囲み炉を配置する遺構が検出された常呂町栄浦第一遺跡からも出土している。

第Ⅸ層出土の本群は角形の口唇部をもち、円形文は口縁下部の凹帯部に施される場合がある。各種の押型文を多様に駆使し、複段的に施文する。刺突文・楯目文系の土器群を伴うものであり、常呂川河口押型文Ⅱ群として型式設定を考えるものである。

2

平底押型文土器は常呂川河口遺跡の例から少なくとも2形式に区別されることが層位上から確認され、(古)トコロ6類、トコロ6類とも時間関係を掴むことができた。

縄文前期中葉の網文式と平底押型文については網走市大曲洞穴遺跡例で平底押型文が新しいことが確認されているし、平成11年度の常呂川河口遺跡においても常呂川河口押型文Ⅱ群の下層から網文式の包含層を発見しているため網文式と平底押型文(押型文Ⅱ群)の時間差は明確である。次に問題なのは網走式、シュブノツナイ式(楯目文)、刺突文の土器群である。これらの土器群は道北・道東方面を中心に散発的に出土する。シュブノツナイ式、刺突文土器は本遺跡第Ⅸ層の例からも平底押型文と共伴することは確実である。網走式と平底押型文(押型文Ⅱ群)の共伴例は無いが押型文Ⅱ群に無文の凹帯部が遺されるなど、網走式の特徴を持ち、多様される円形文は岐阜ⅡA群の影響を受けているものと推測することができ、押型文Ⅱ群は網走式・岐阜ⅡA群に後続する土器群と思われる。押型文Ⅱ群に見られる角形の口唇部や発達した隆帯は円筒下層d式から上層a式に比定されるのであろう。¹⁴C年代測定では4,360±60の数値

が出されている。押型文I群は隆帯はあるものの細く発達せず、沈線文に置き変わるもので円筒上層c式からd式に比定するのであろう。

トコロ6類・常呂川河口押型文I群を包含する第VIII層下部に第VIIIb層、第X層下部に第Xa・Xc層が堆積する。これらの層は堆積が薄いものの明らかに時間関係を現わしており、第Xa層からは第204図-1、第205図-1~3、第206図-1~4の土器が出土している。これらの資料に共通する特徴はこの様な横位の突引文が多様される土器について藤本強氏は栄浦第二遺跡東端貝塚資料とトコロ貝塚出土土器とを比較してトコロ6類よりもやや古い時期と指摘され、トコロチャシ2号北西部遺構出土の土器も類似資料として注目されている。また、第Xc層から出土した第205図-4は隆帯をもち、口唇部の円形文は連続しないまでも押引手法による。同層から出土した第206図-5の口唇部もまた不連続な個所もあるが押引文的手法による。この第Xc層出土土器は積極的に押引文的手法を取り入れていないまでも明らかに押引手法を駆使しており、上層の第Xa層の(古)トコロ6類土器に見られる連続押引文に繋がるのであろう。モコト式と第Xc層出土土器との関係は定かでないが、第205図-4の隆帯が四角形であり口唇部の円形施文具による押引文などはモコト式の影響を受けているものと思われる。(古)トコロ6類はモコト式とトコロ6類との間を埋めるものと指摘されていたが、第Xc層出土資料は(古)トコロ6類を包含する第Xa層より下層にあり時間関係は明らかである。

本遺跡の層位、型式上の観点で平底押型文からトコロ6類までは、縄文前期中葉網文式——後葉網走式・岐阜IIA群——末葉押型文II群——中期初頭モコト式——常呂川第Xc層土器——第Xa層出土土器——(古)トコロ6類——中葉押型文I群、トコロ6類、同5類という変遷が考えられそうである。

しかし、押型文II群は特色ある土器であるが道内各地にあるものでなく、網走式・岐阜IIA群に見られるごとく網走・北見の地方的な土器群として理解したい。その出自・系統について円筒式の地方形という考え方もあるが、本土器群の場合、楯目文、刺突文を伴うもので、円筒式にない施文方法を取り、大陸との関係も否定できない。

当初、本報告では押型文土器は縄文系土器群との関わり、特に宮本式などの成立やトコロ6類など北筒式土器群の編年についても考察する予定であったが、宮本式を実見する機会を得ることができず、北筒式土器に対する認識も薄い事などからこの様な事実を記載する報告にとどまってしまいました。本遺跡では第VIII層から網文式を包含する第VII層まで未発掘の区域が遺されており、これらは次の課題としたい。

本遺跡の発掘調査及び整理には新潟大学文学部教授藤本強、東京大学大学院教授宇田川洋、北海道教育委員会大沼忠春、田中コンサルタント豊原熙司氏など数々の方々のご指導、ご助言を頂きました。心よりお礼申し上げます。

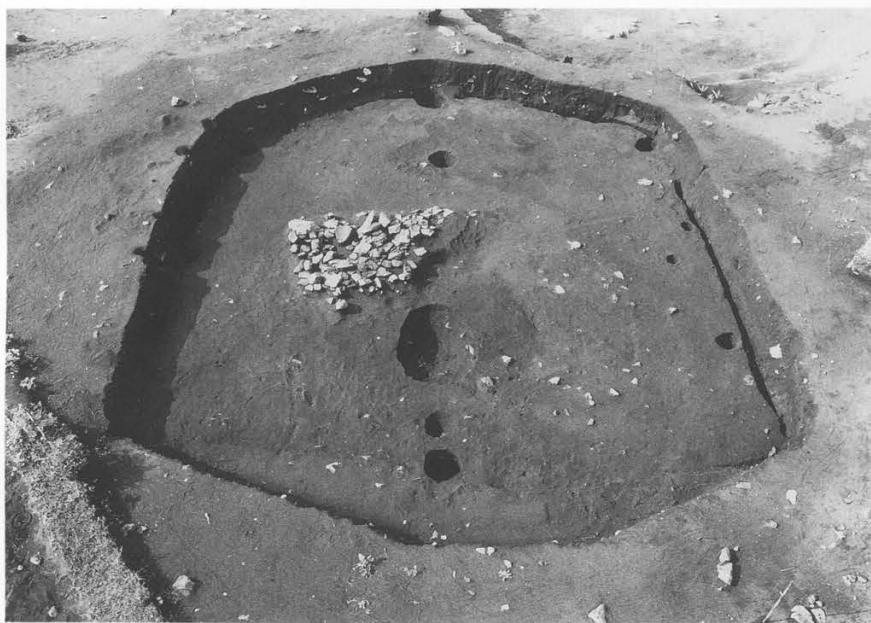
引用・参考文献

- 網走市教育委員会 1992年 嘉多山3遺跡・嘉多山4遺跡
- 近藤 忠 1965年 網走付近の櫛目文土器 北海道考古学 第1輯
- 常呂町教育委員会 1982年 岐阜第2遺跡
- 斎藤 傑 1989年 前期北海道押型文系土器様式 縄文土器大観1
- 宇田川 洋 1988年 アイヌ文化成立史 北海道出版企画センター
- 武田 修 1998年 北海道常呂川河口遺跡出土の平底押型文土器について 野村先生還暦記念論集 北方の考古学
- 武田 修 1995年 柴浦第二・第一遺跡
- 東京大学文学部 1944 オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 上巻
- 大沼忠春 北海道の押型文土器 考古学ジャーナル267
- 氏江敏文・鈴木邦輝 1988年 日進33遺跡
- 藤本 強 1980年 ライトコロ川口遺跡 東京大学文学部
- 熊谷 仁 1989年 押型文土器・刺突文土器・押引文土器について 納内3遺跡
- 〃 1993年 押型文土器の変遷と縄文文化への位置づけ 吉崎昌一先生還暦記念論集

圖 版



1. 44号竖穴



2. 45号竖穴



1. 46号竖穴



2. 46号竖穴土器出土状况



1. ピット301



2. ピット301遺物出土状況



1・2 ピット301床面出土土器 3～20 ピット301埋土出土石器



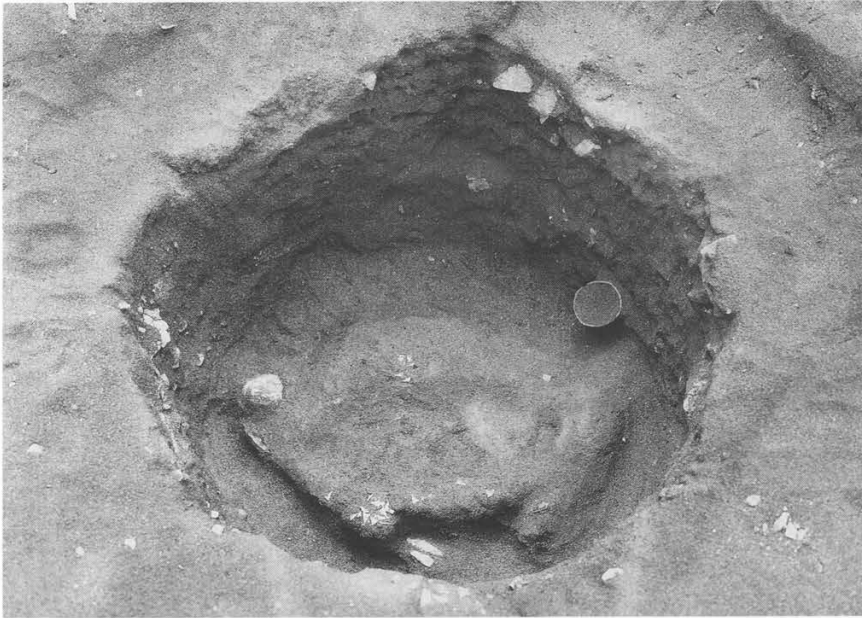
1. ピット303埋土出土土器



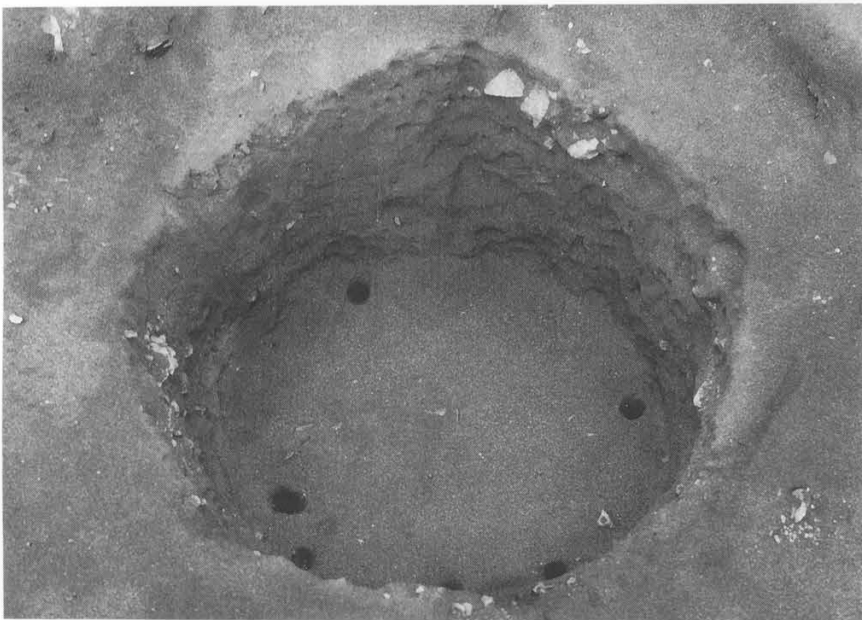
2. ピット305 a 埋土出土土器



3. ピット303, ピット303 a, ピット304



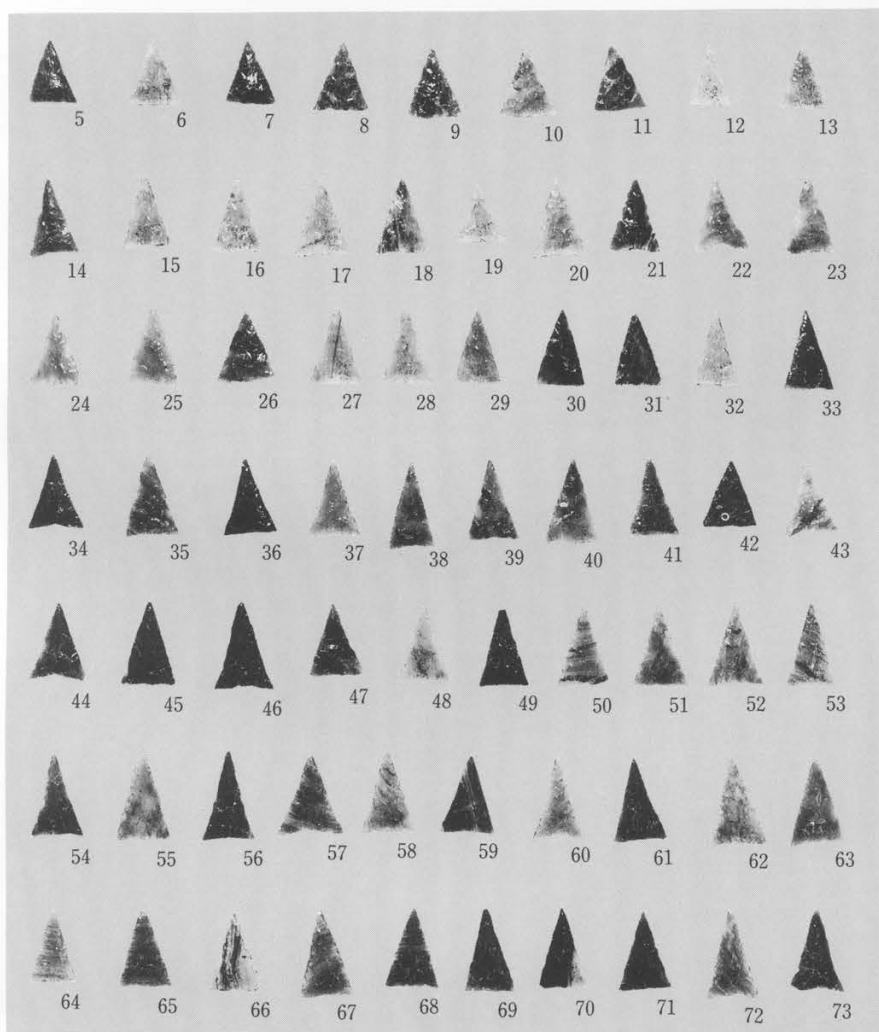
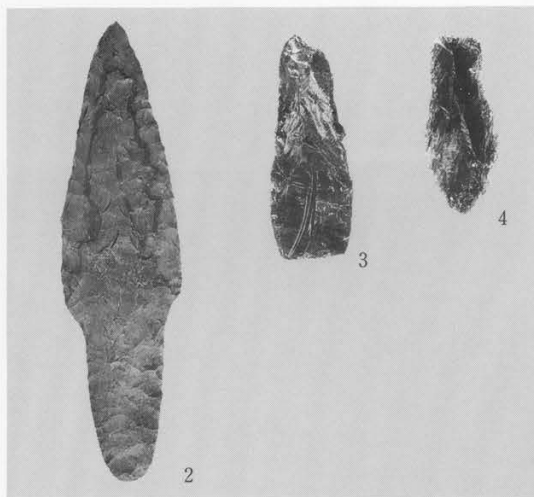
1. ビット306遺物出土状況



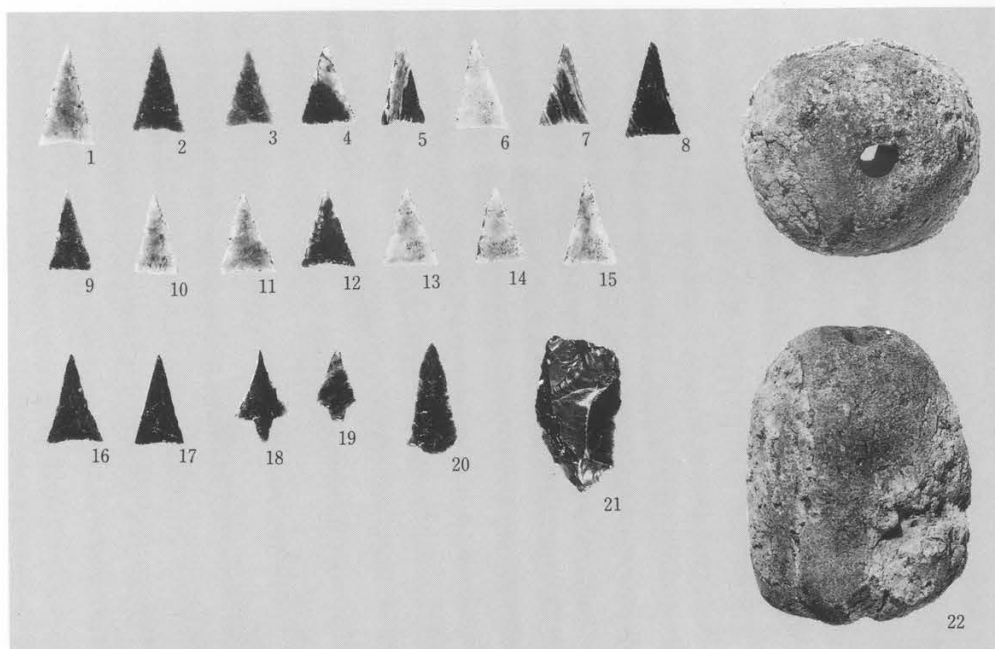
2. ビット306完掘状況



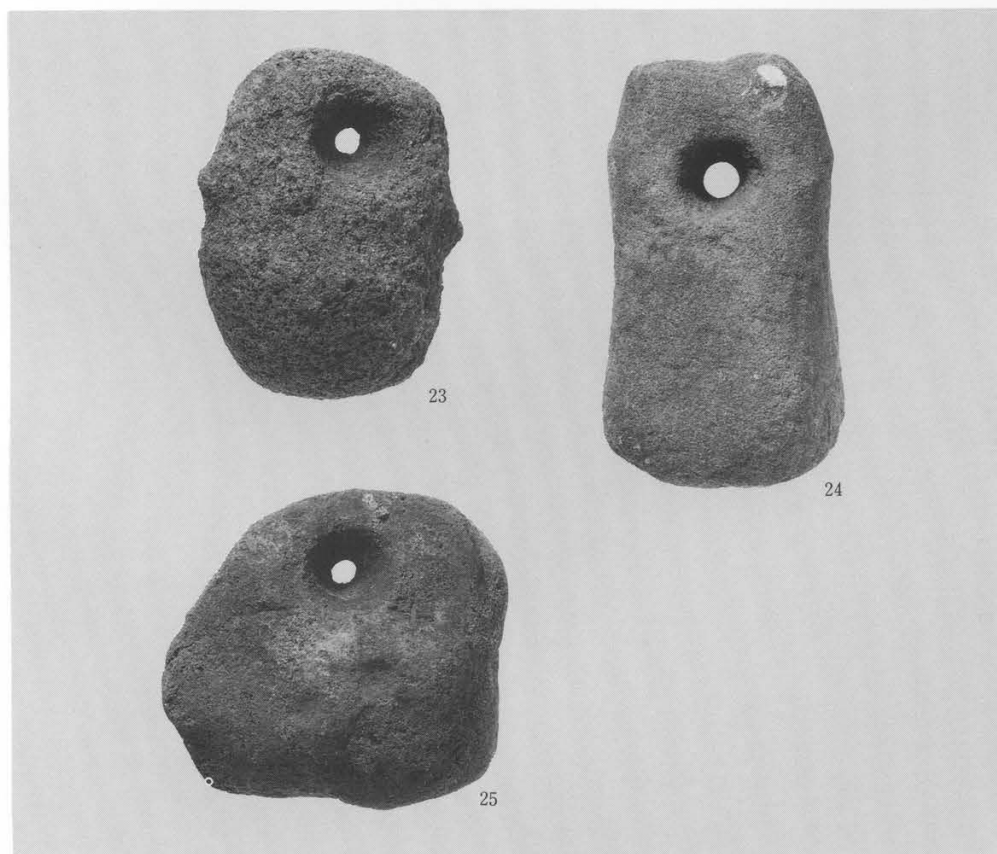
1. ピット306床面出土土器



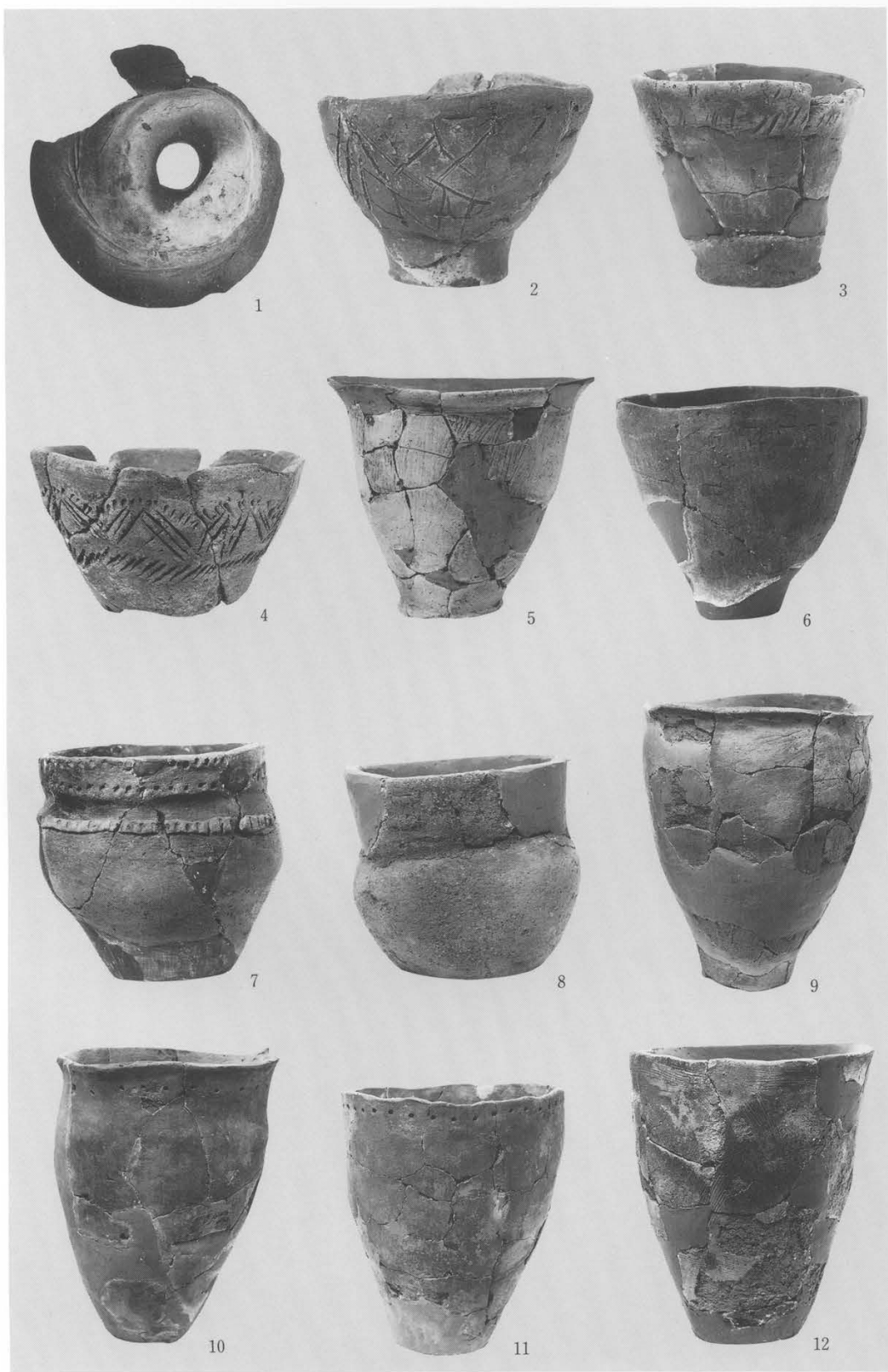
2 ~ 4 ピット306床面出土石器
5 ~ 73 ピット306埋土出土石器



1～21 ビット306埋土出土石器
22 ビット306埋土出土有孔粘土

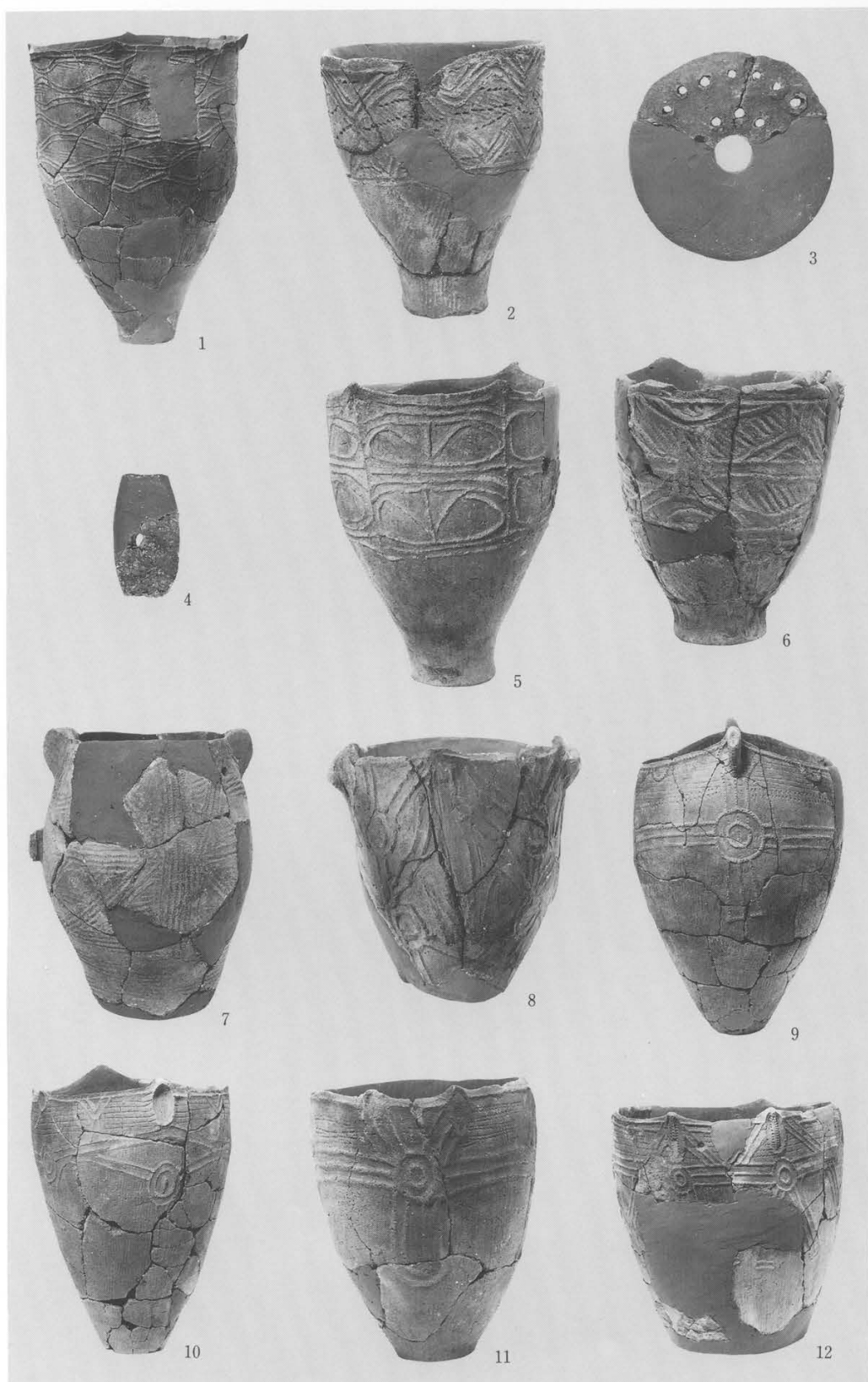


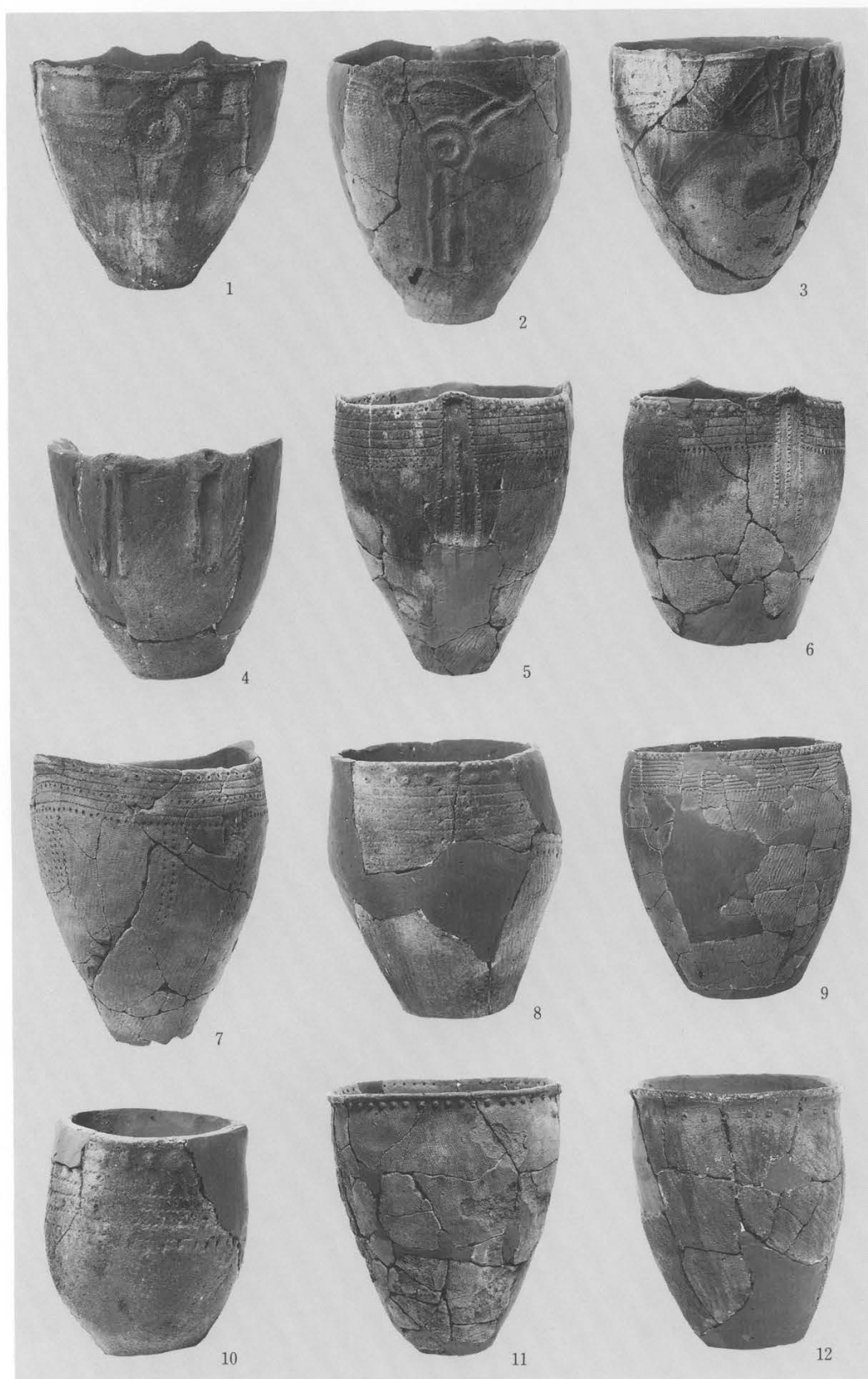
23・25 第I・II層出土有孔石錘
24 第II層出土有孔石錘

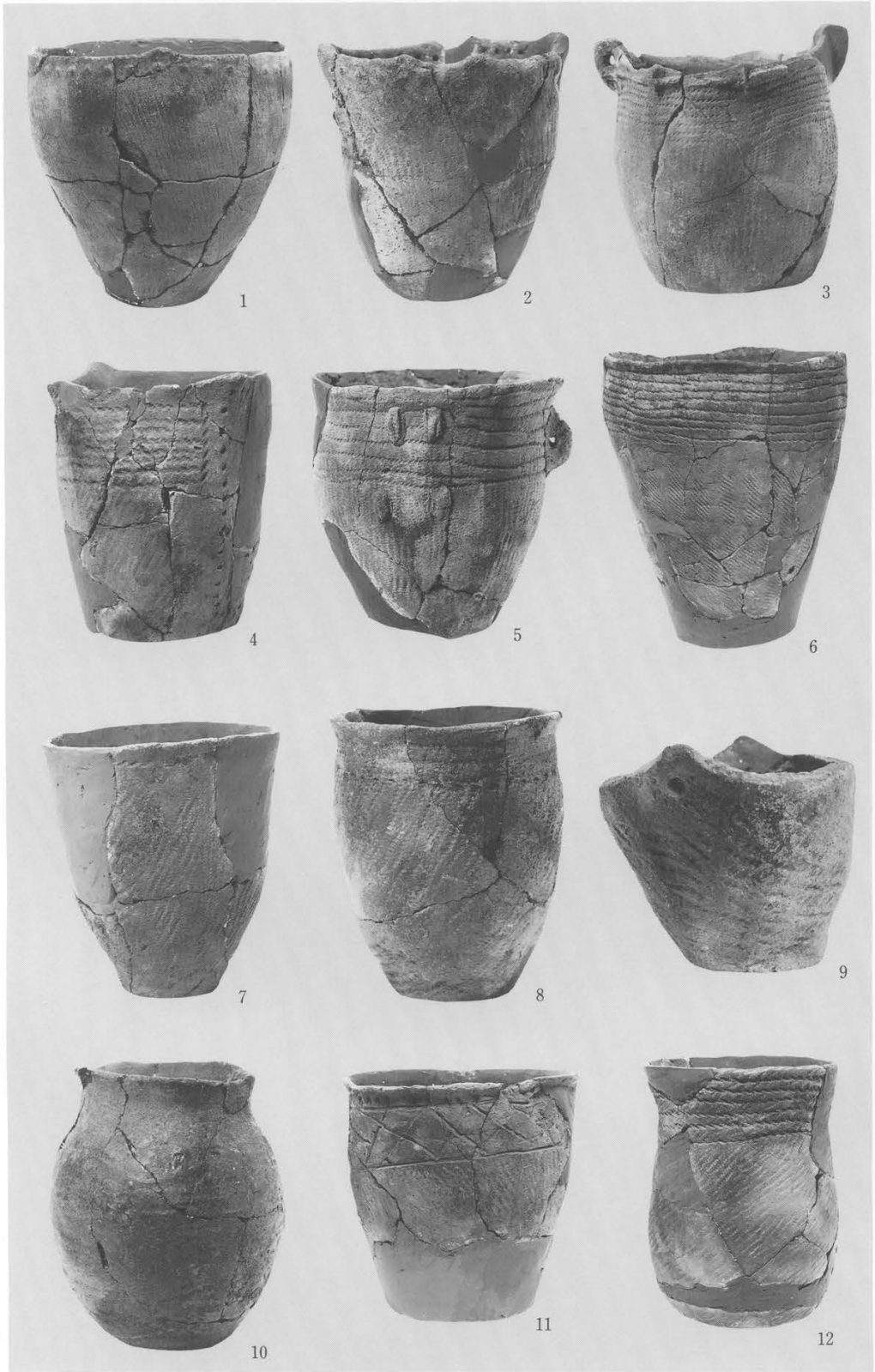


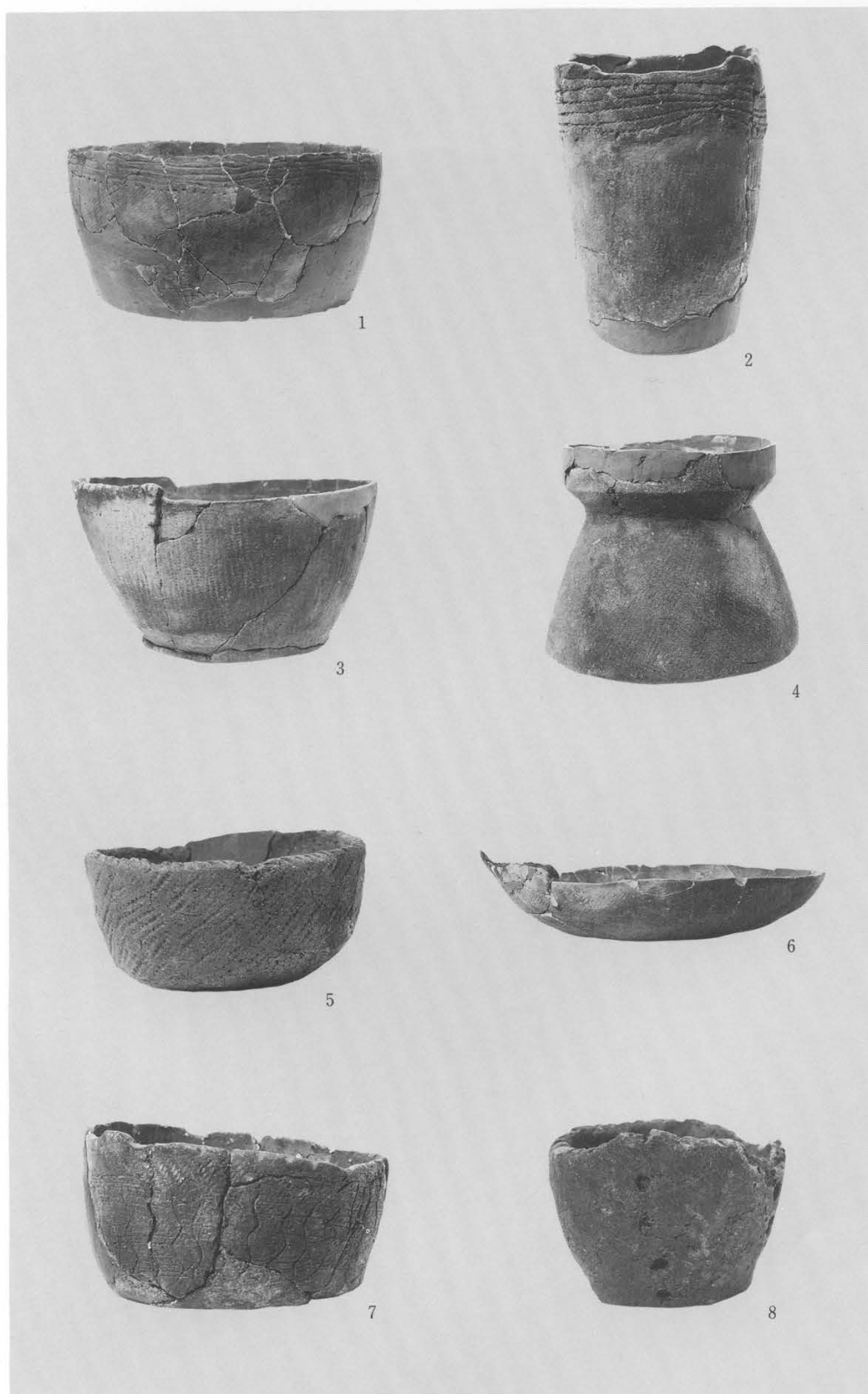
第 I · II 層出土土器 (1)











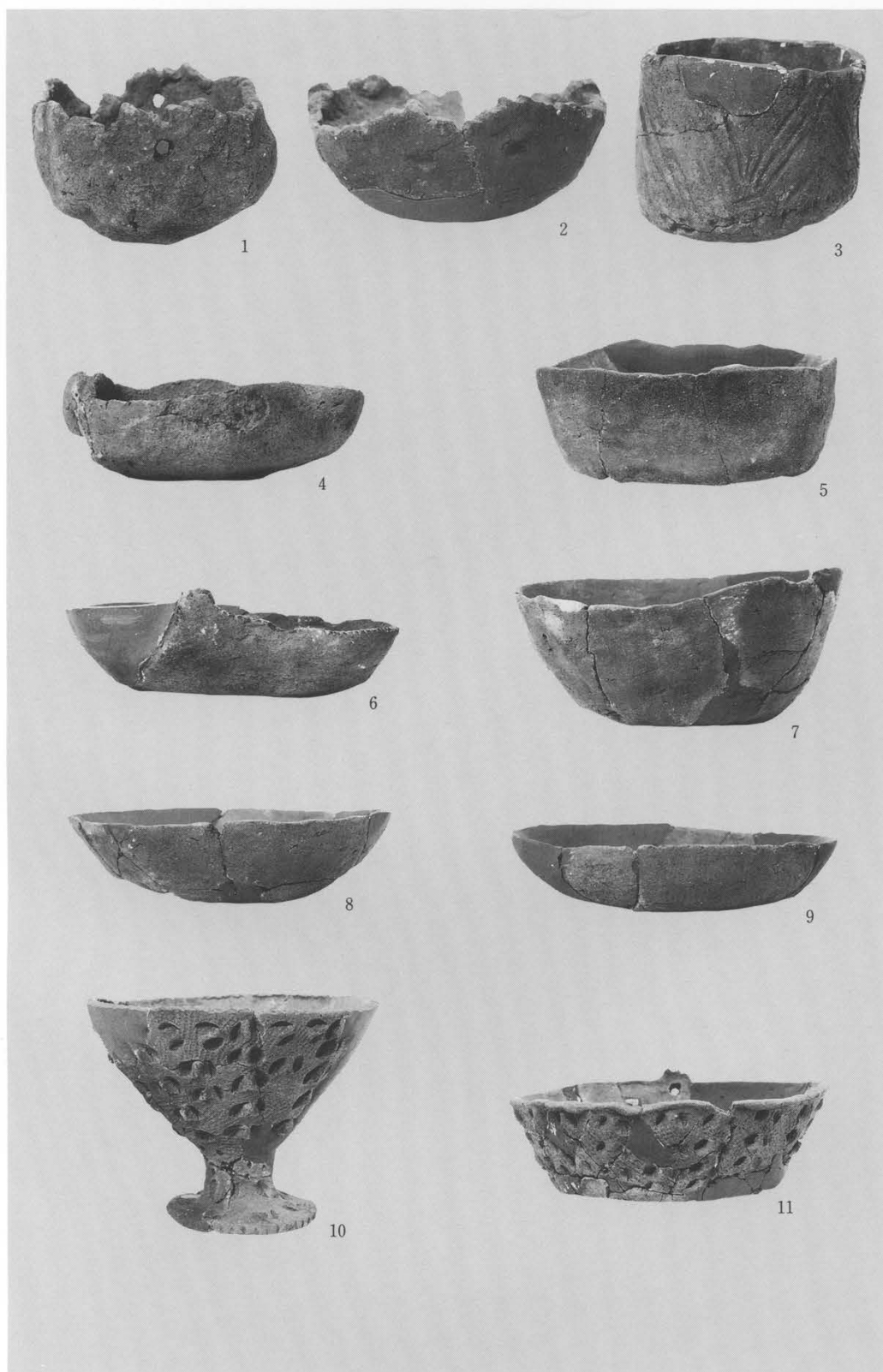
第 I · II 層出土土器 (6)

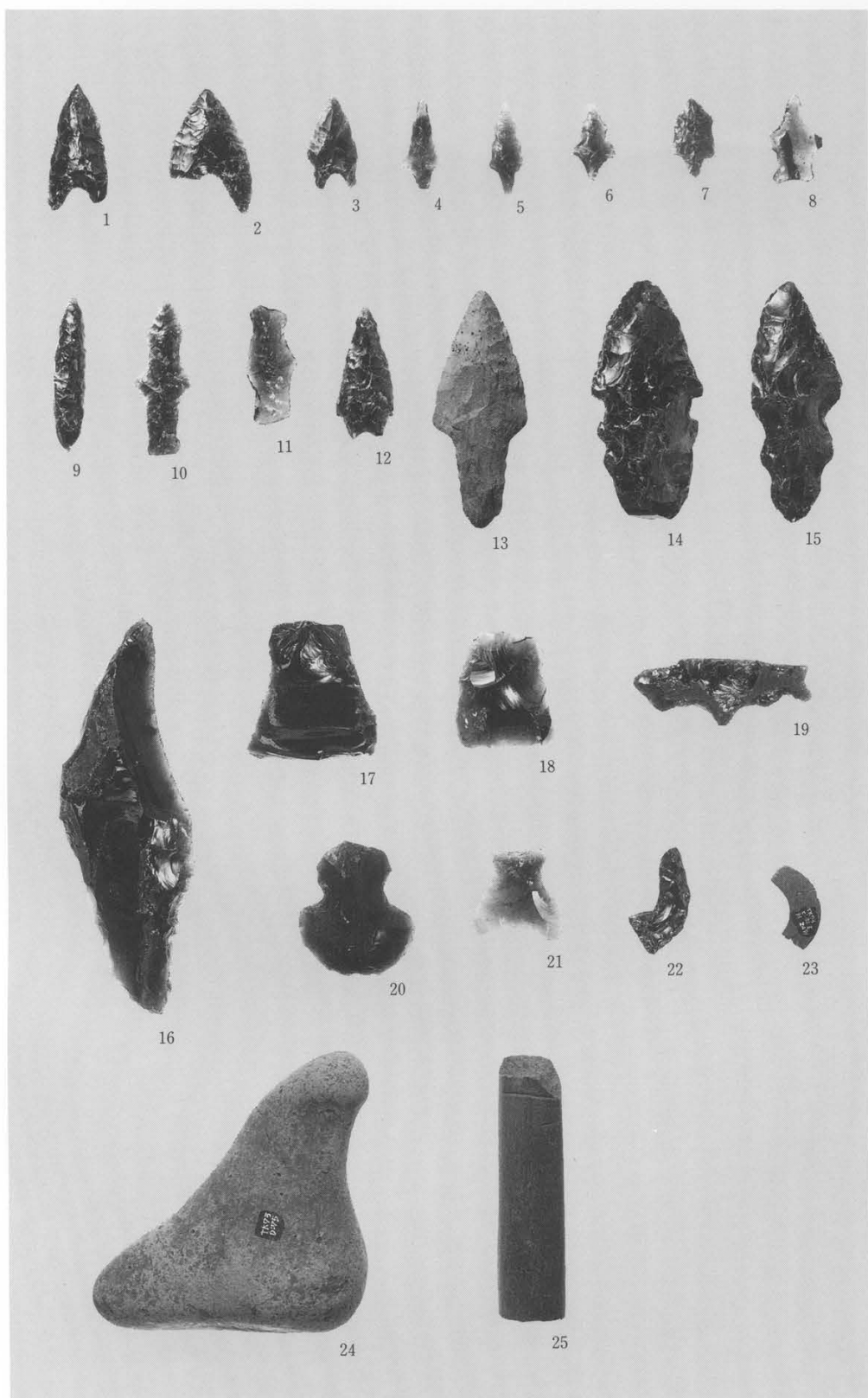


第 I · II 層 出土土器 (7)











第 I · II 層出土石器 (2)





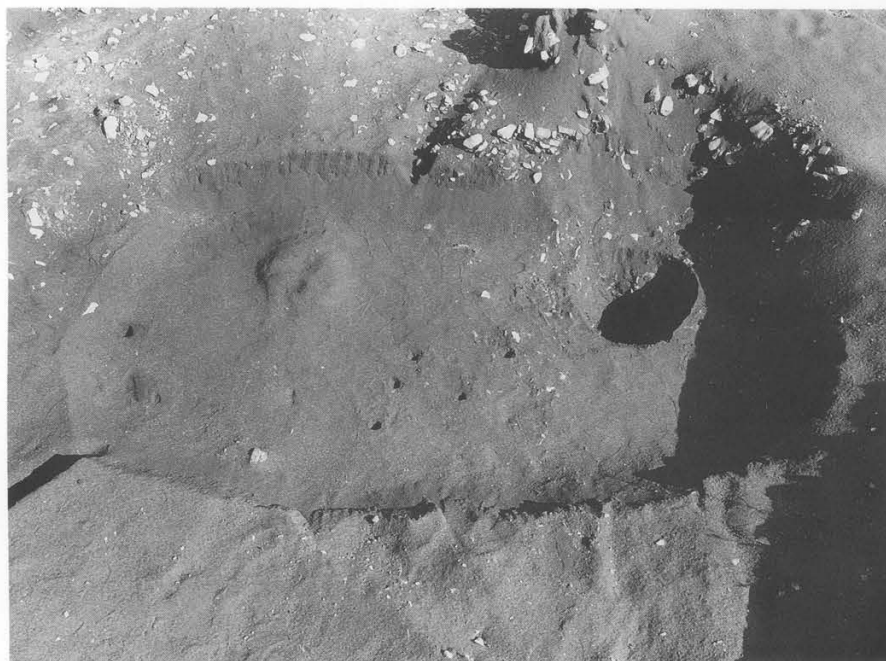
第VII層出土石器 (1)







1. 第Ⅷ層 1号竖穴



2. 第Ⅷ層 2号竖穴



1. 第Ⅷ層2号竖穴内ピット5



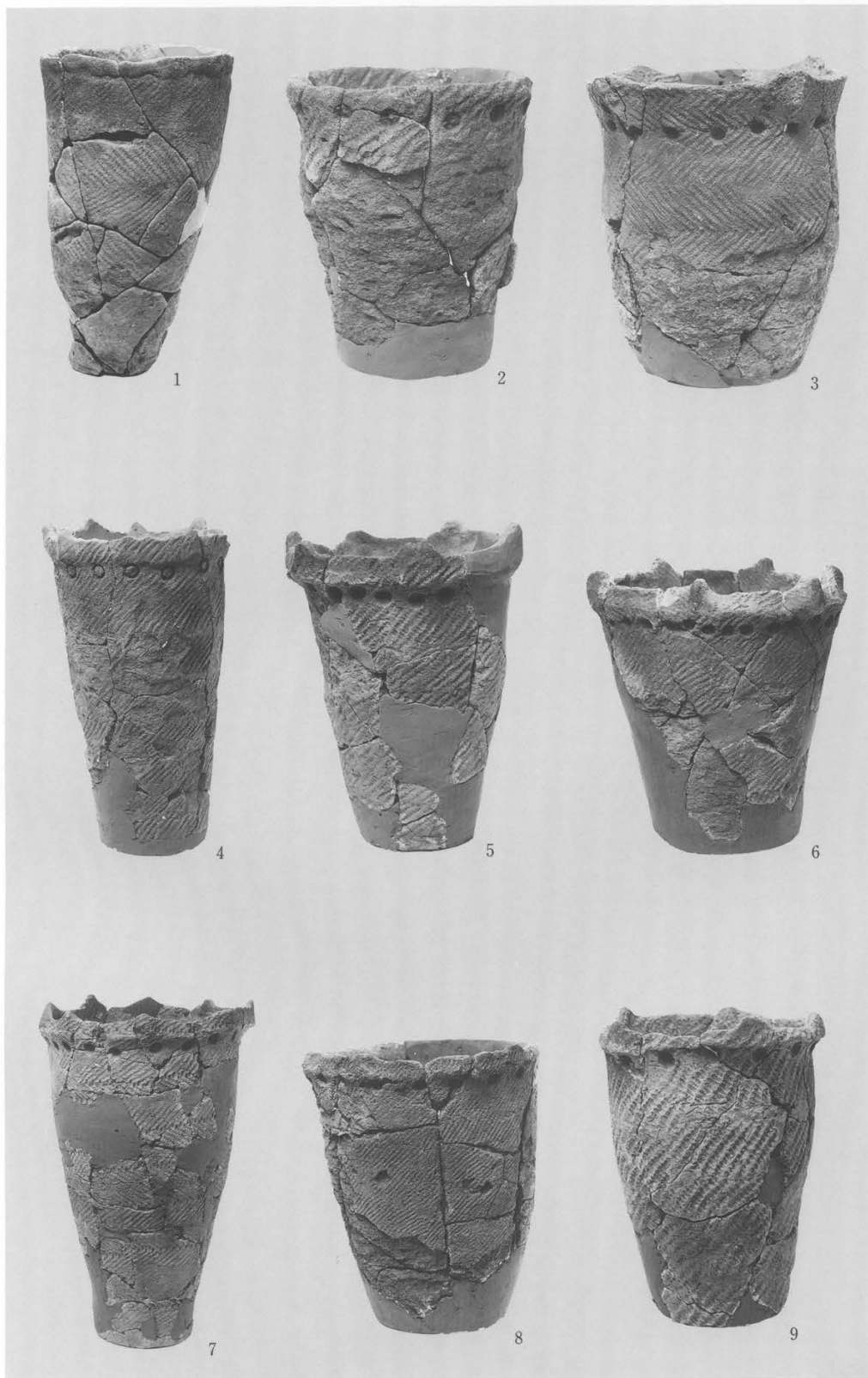
2. ピット6埋土出土土器



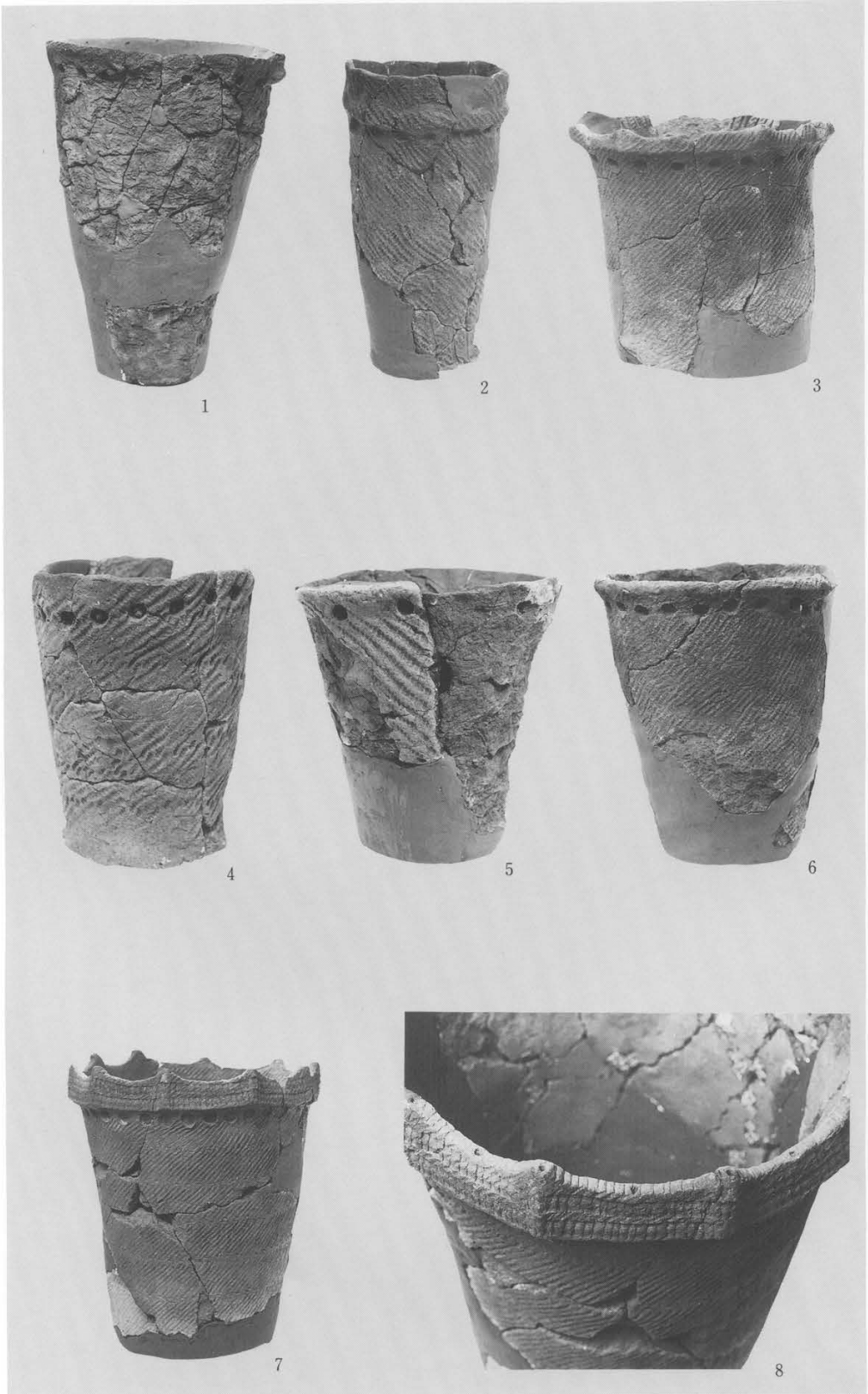
3. 縄文後期堂林式



第VIII層出土土器 (1)



第Ⅷ層出土土器 (2)

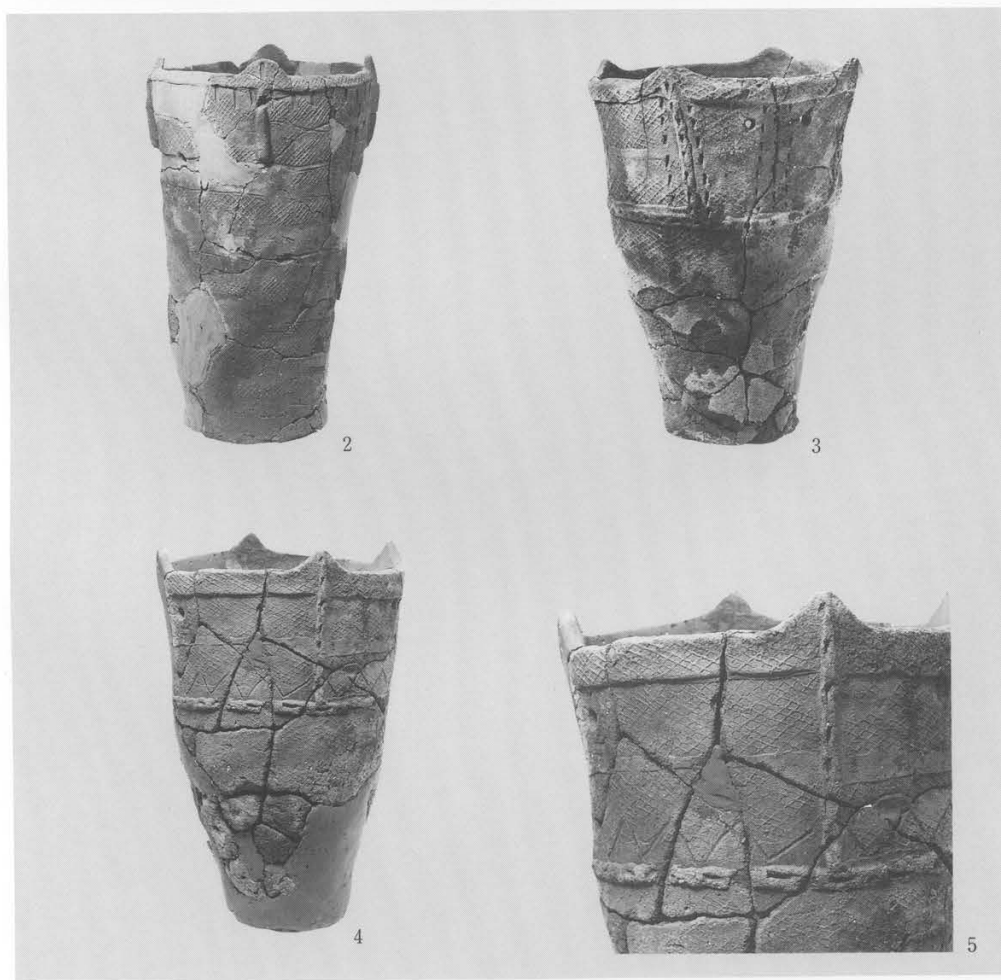


第八層出土土器 (3)

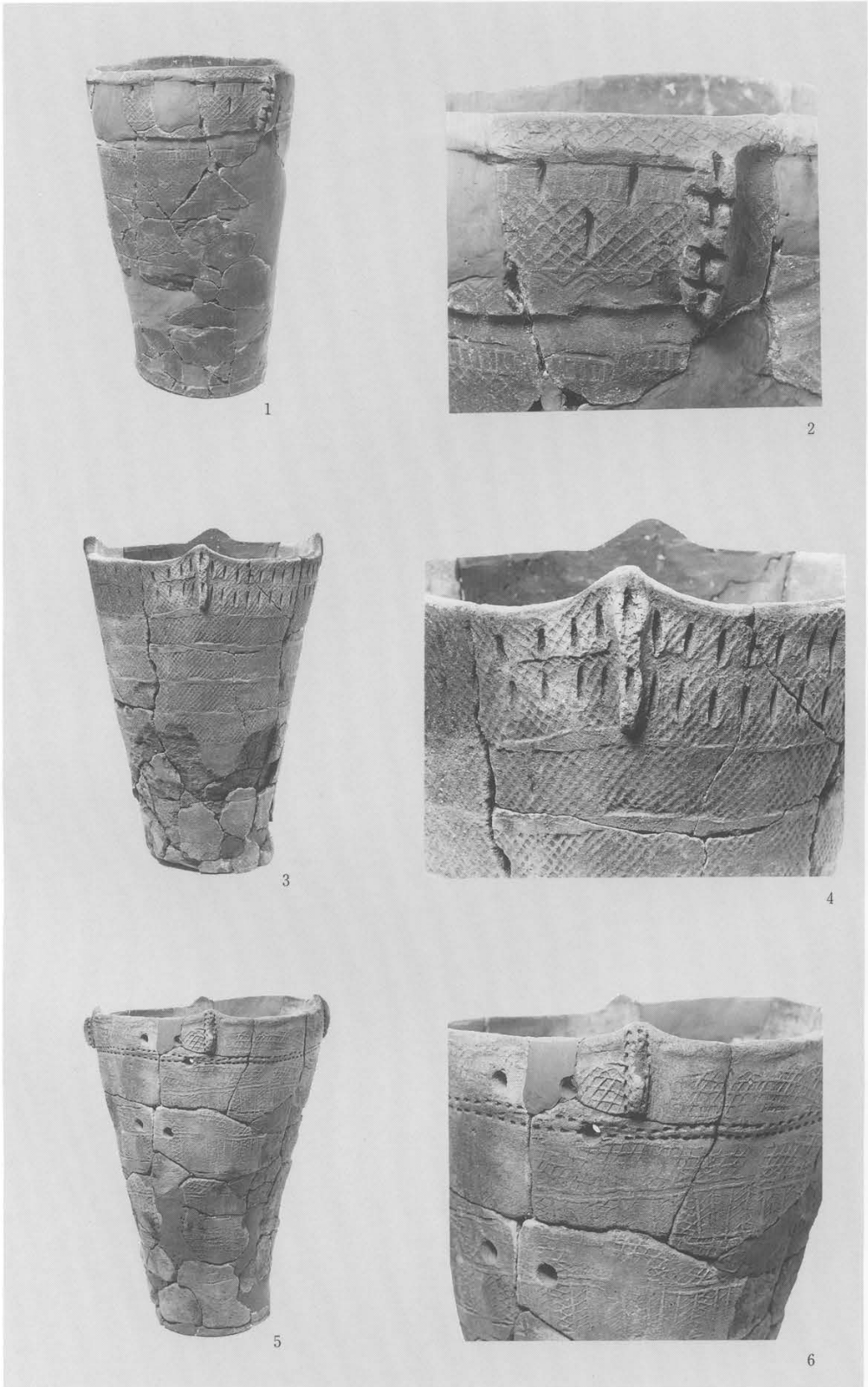


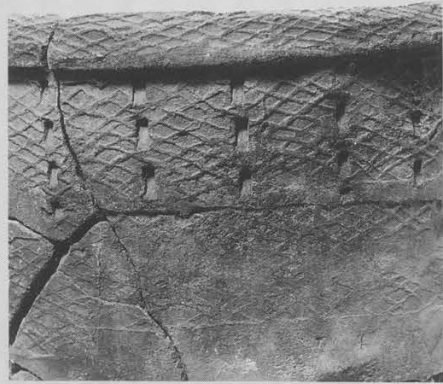


1 第Ⅷ層石囲み炉群



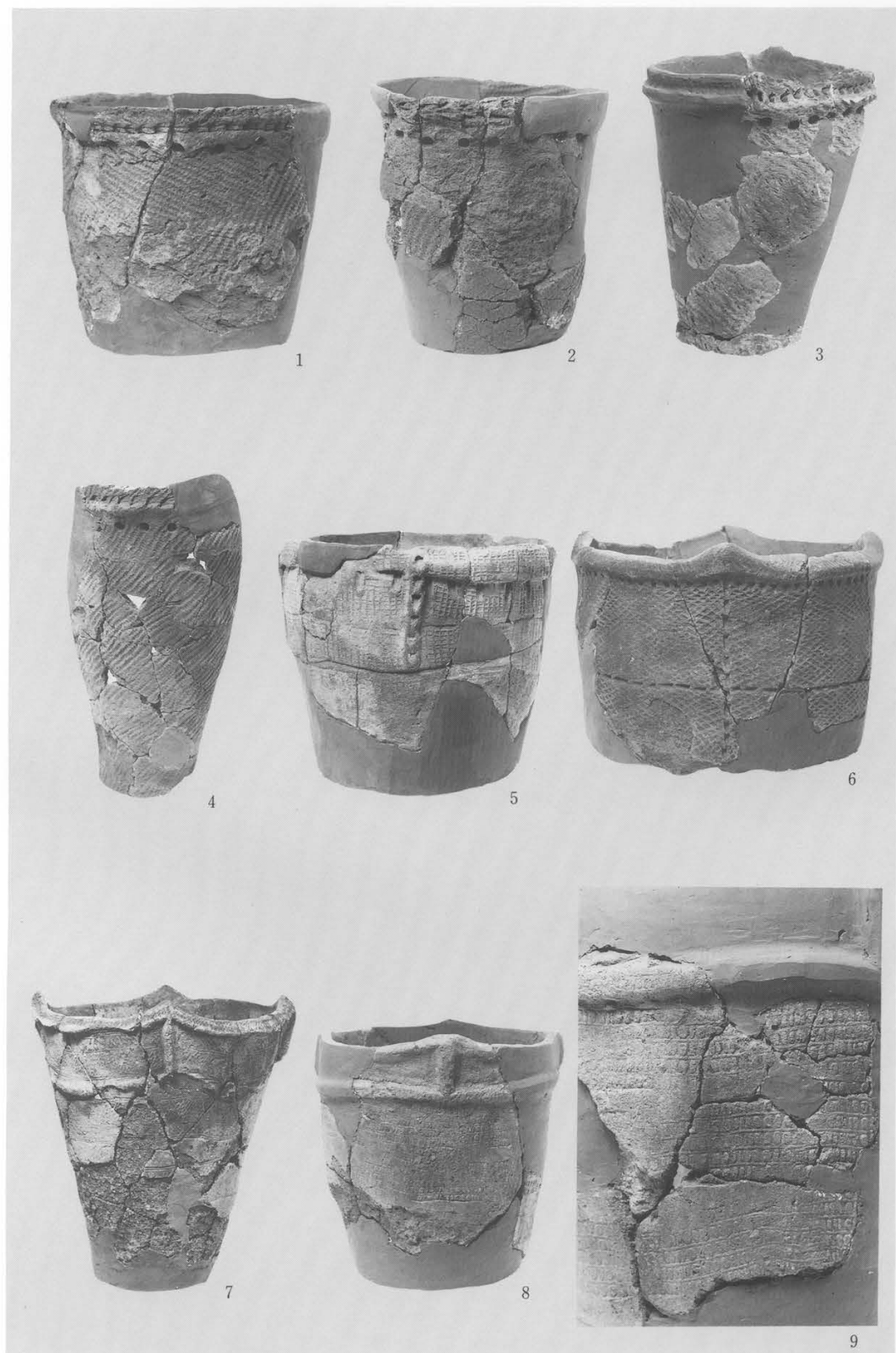
第Ⅷ層出土土器 (5)

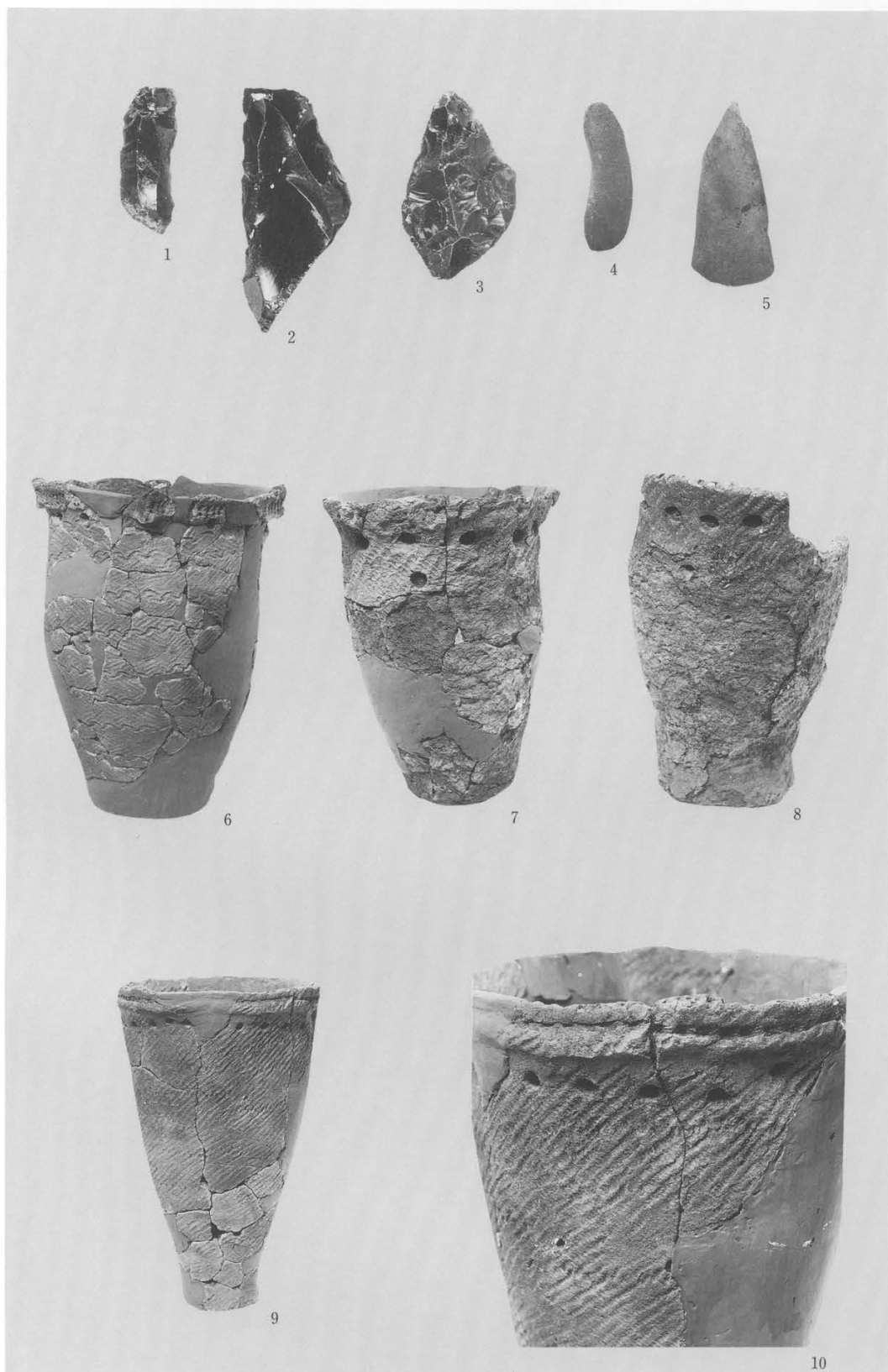


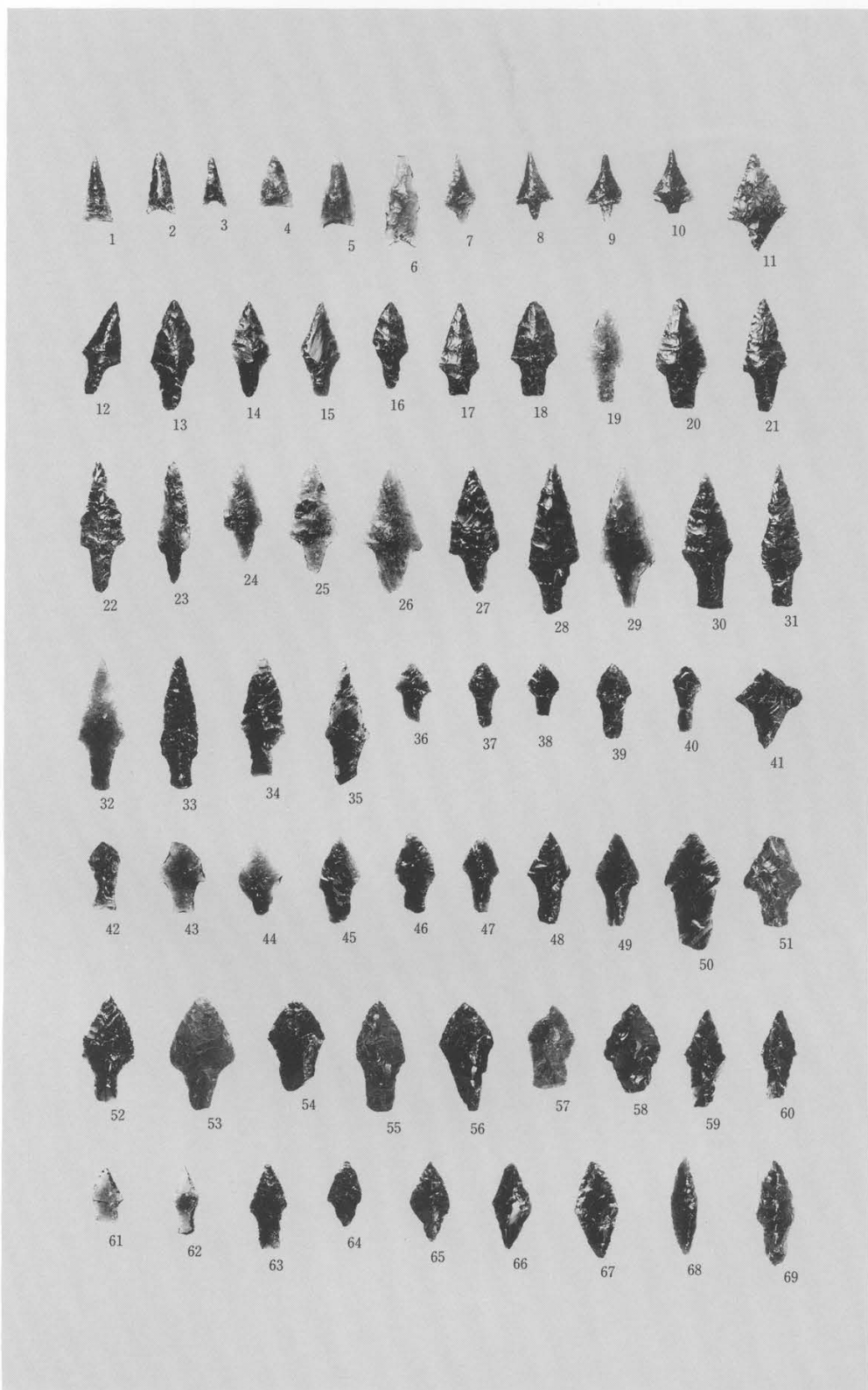


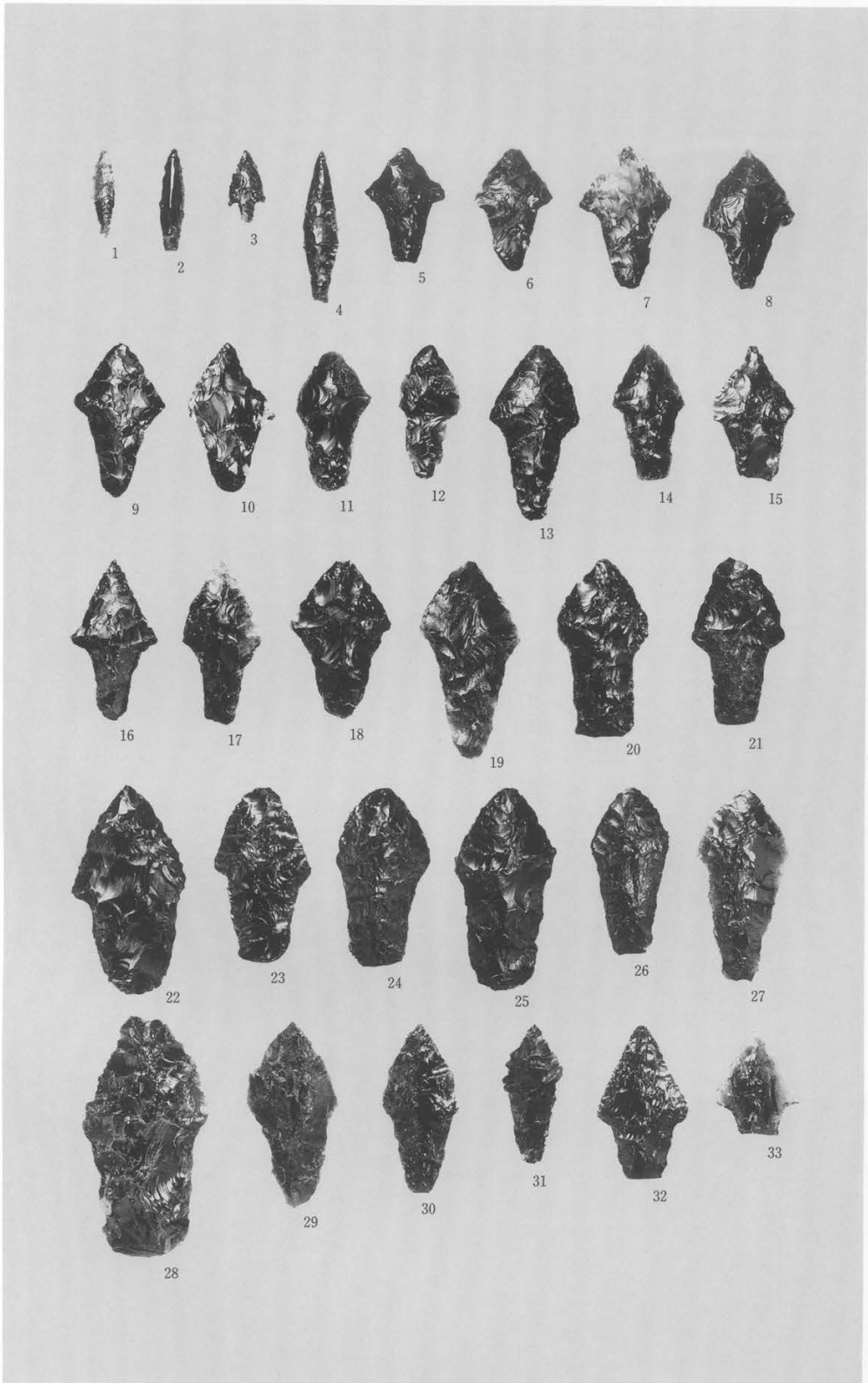


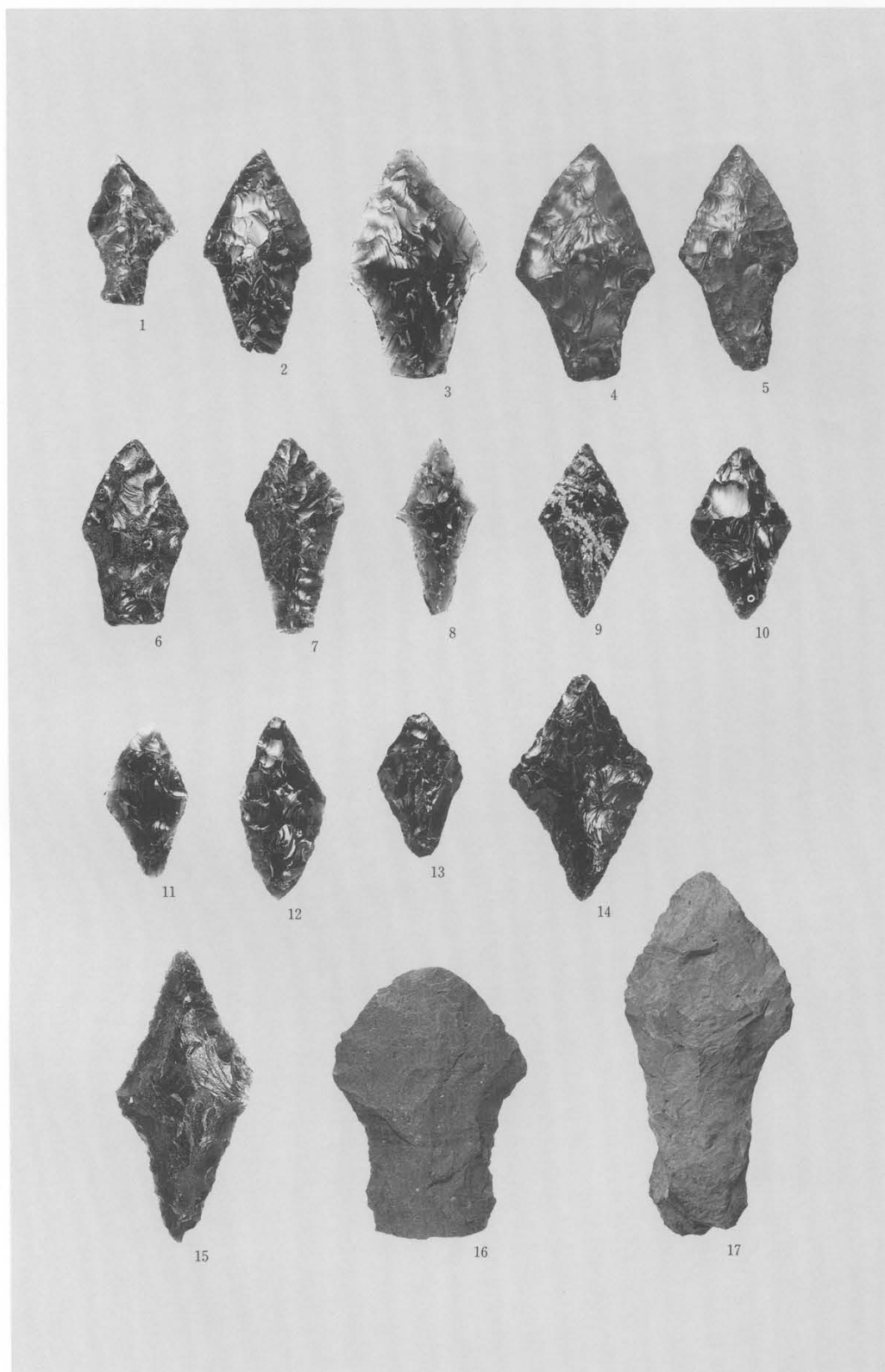






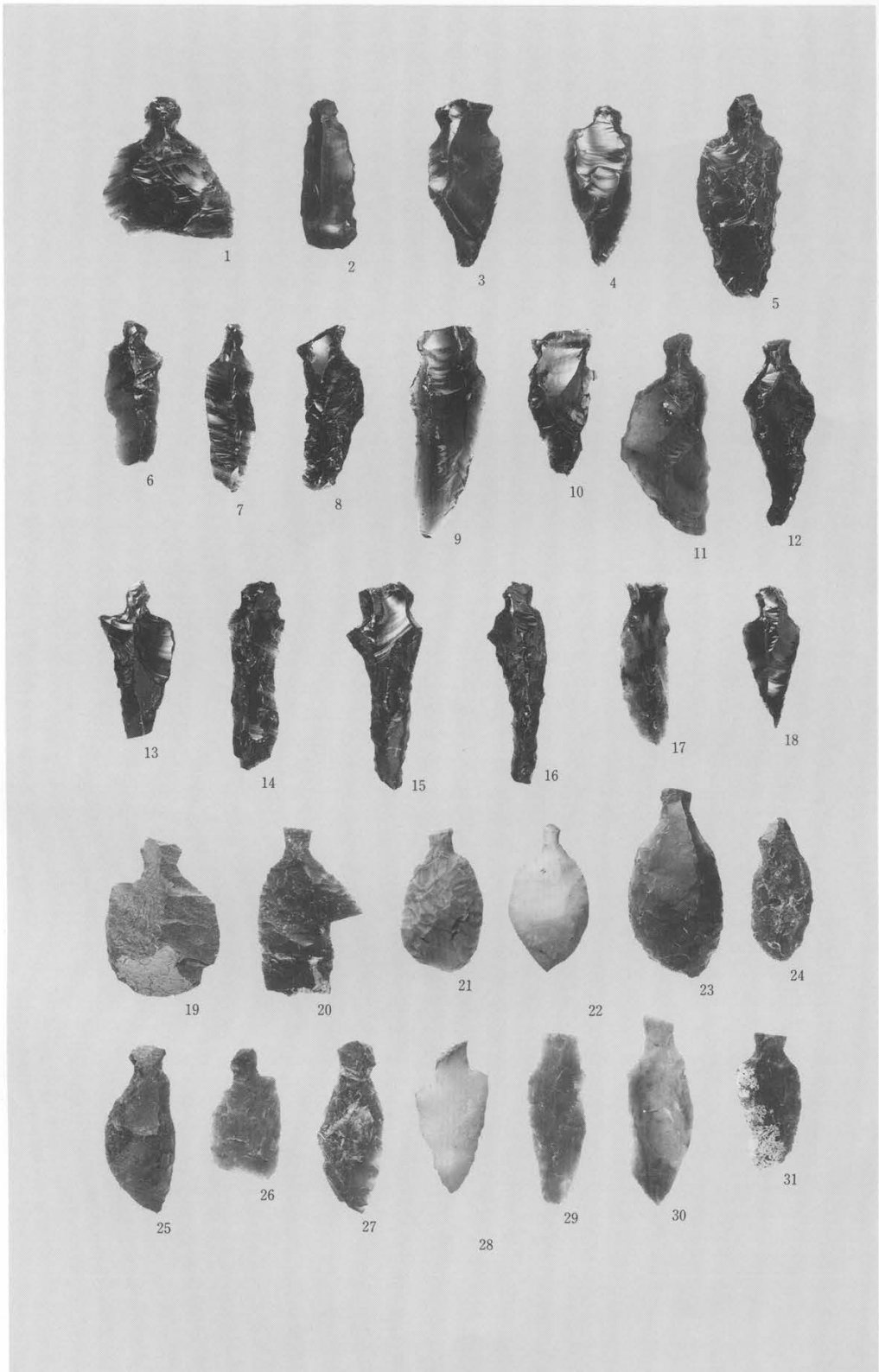


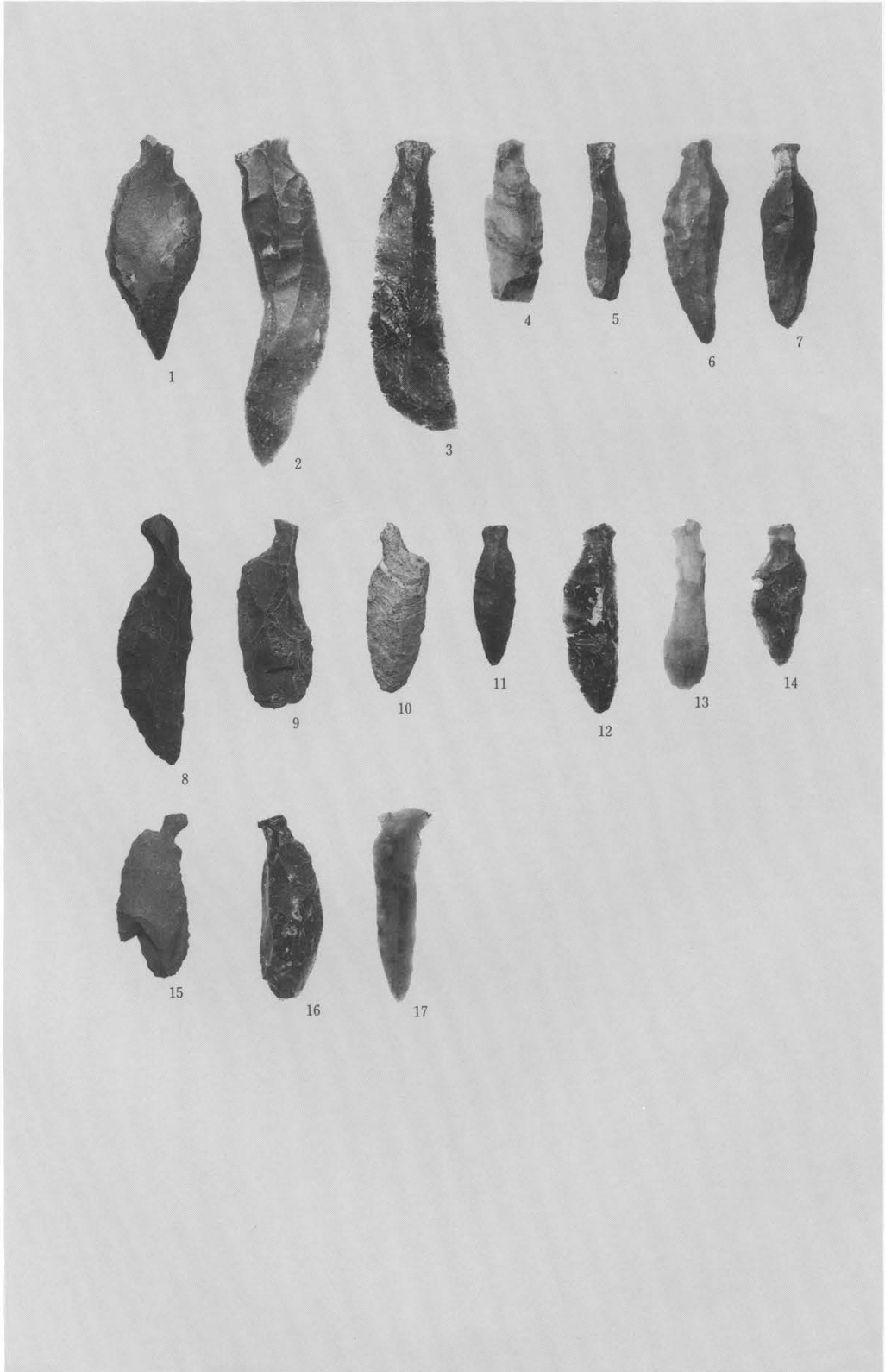


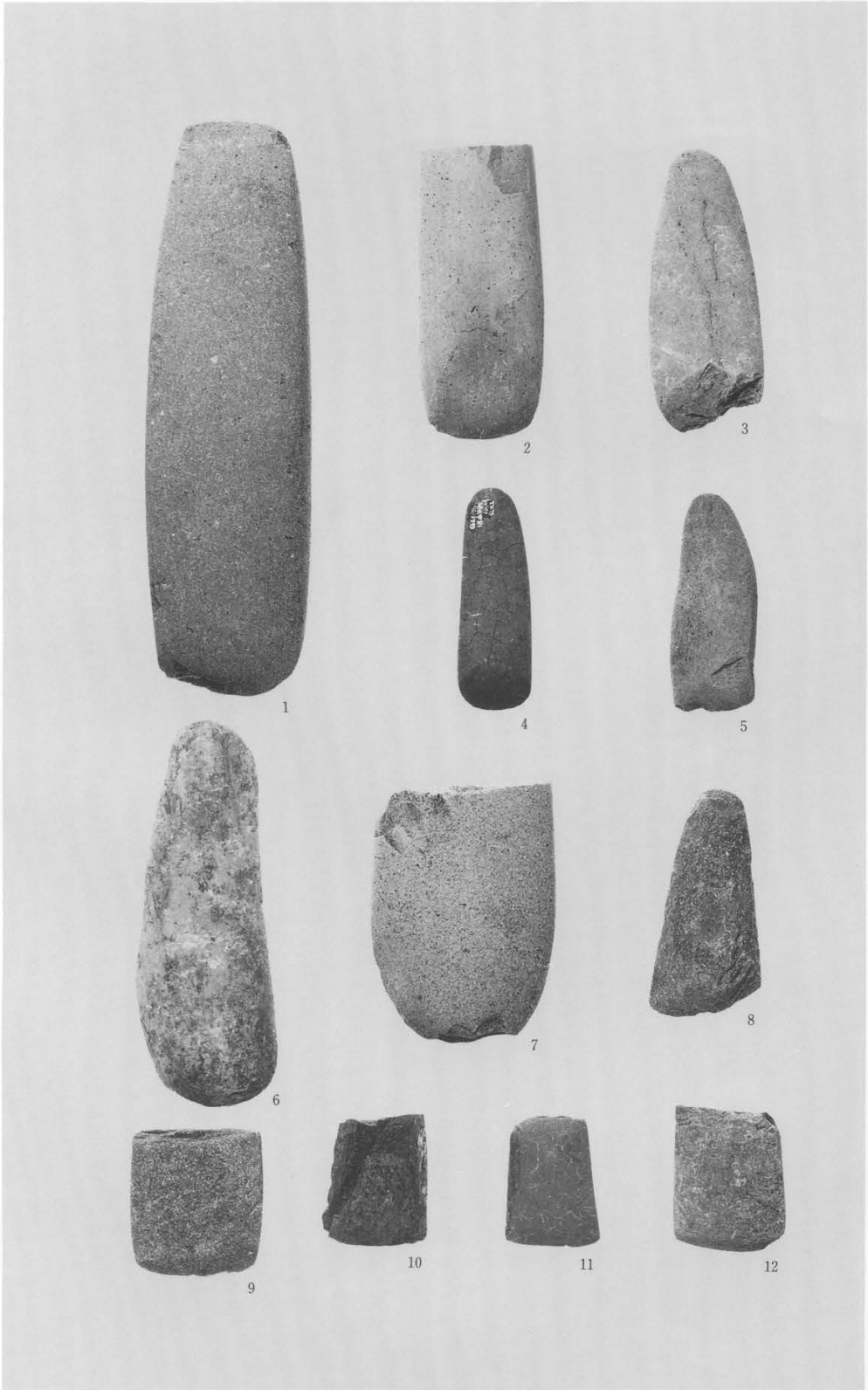




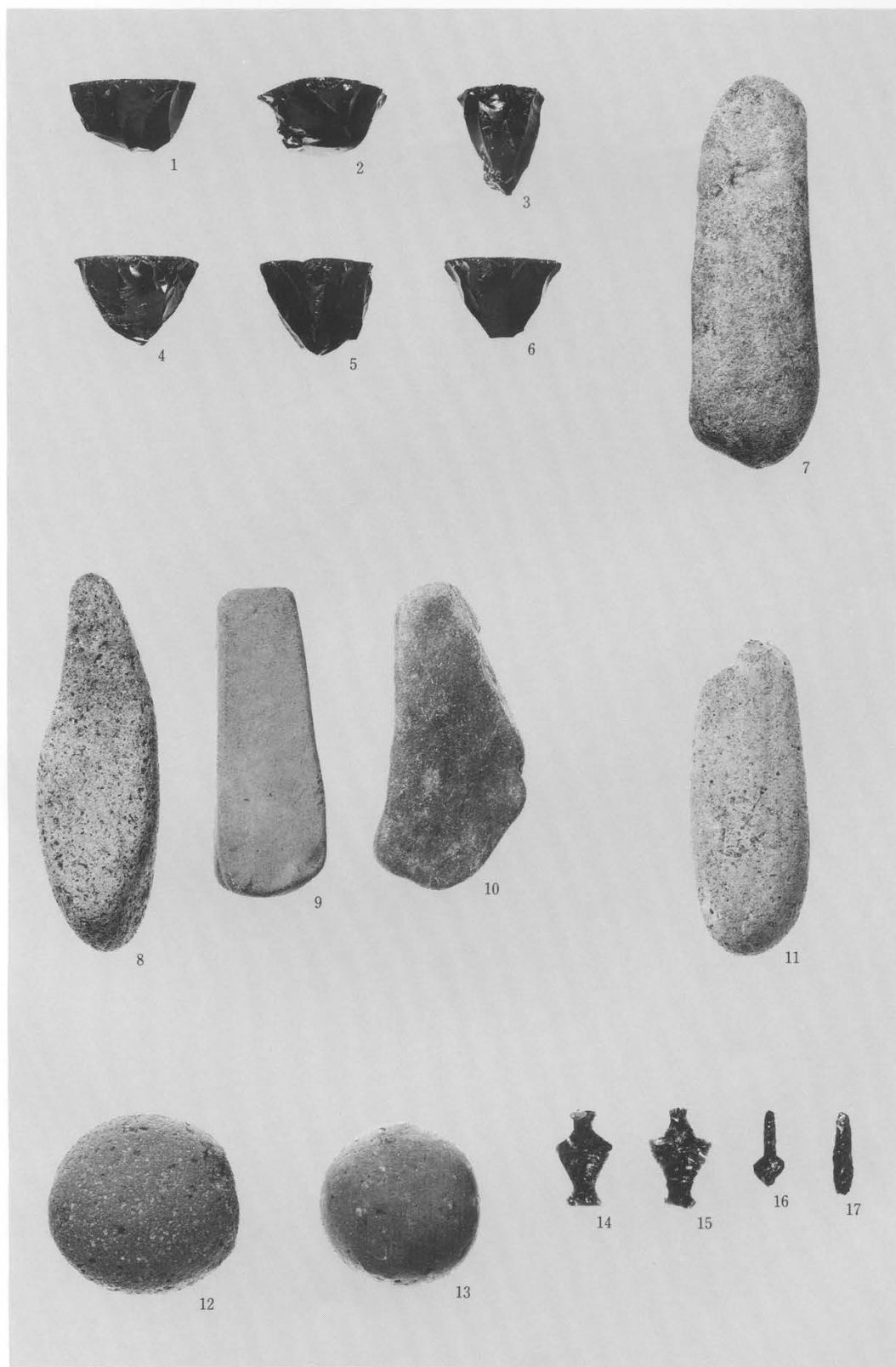
第VIII層出土石器 (4)

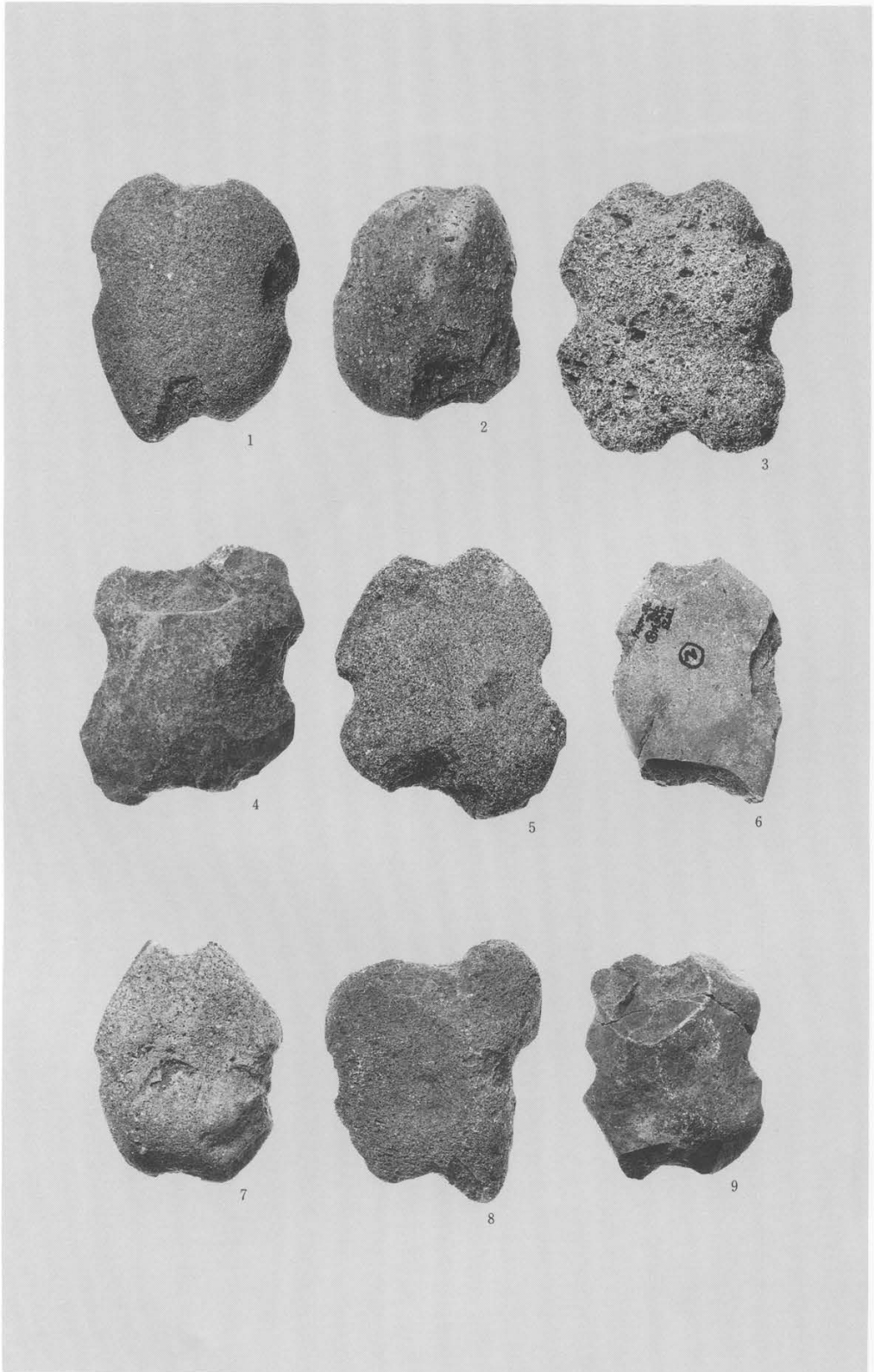




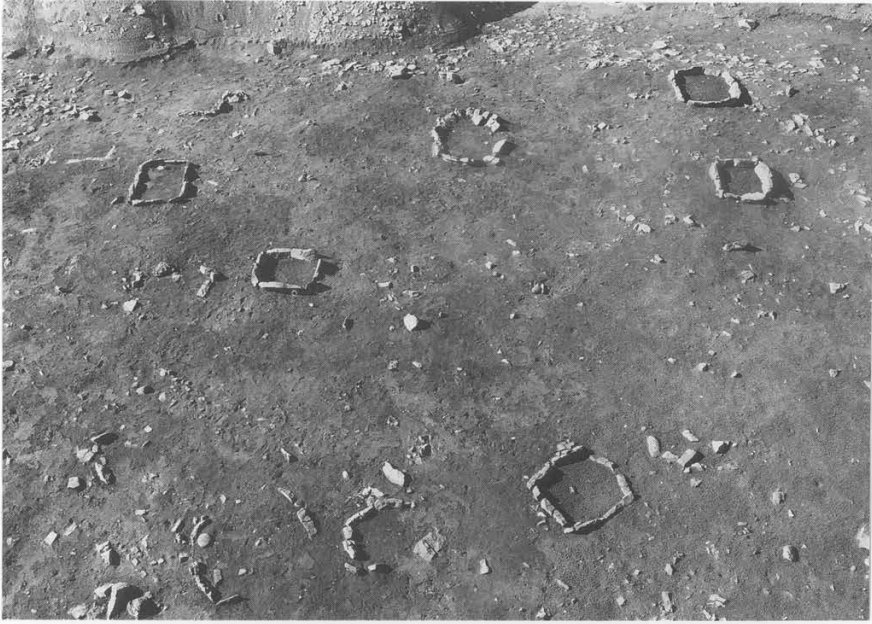


第VIII層出土石器 (7)









1. 第Ⅹ層石囲み炉群

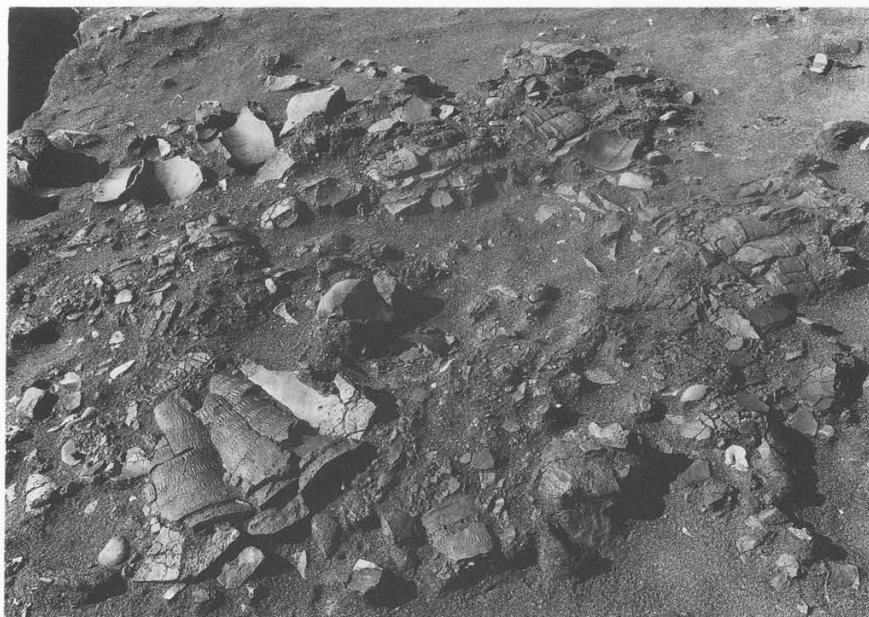


2. 第Ⅹ層石囲み炉群



第Ⅻ層出土土器 (1)





1. 第Ⅻ層土器出土状況 (H'65・66グリッド)



2. 第Ⅻ層土器出土状況 (I'57グリッド)









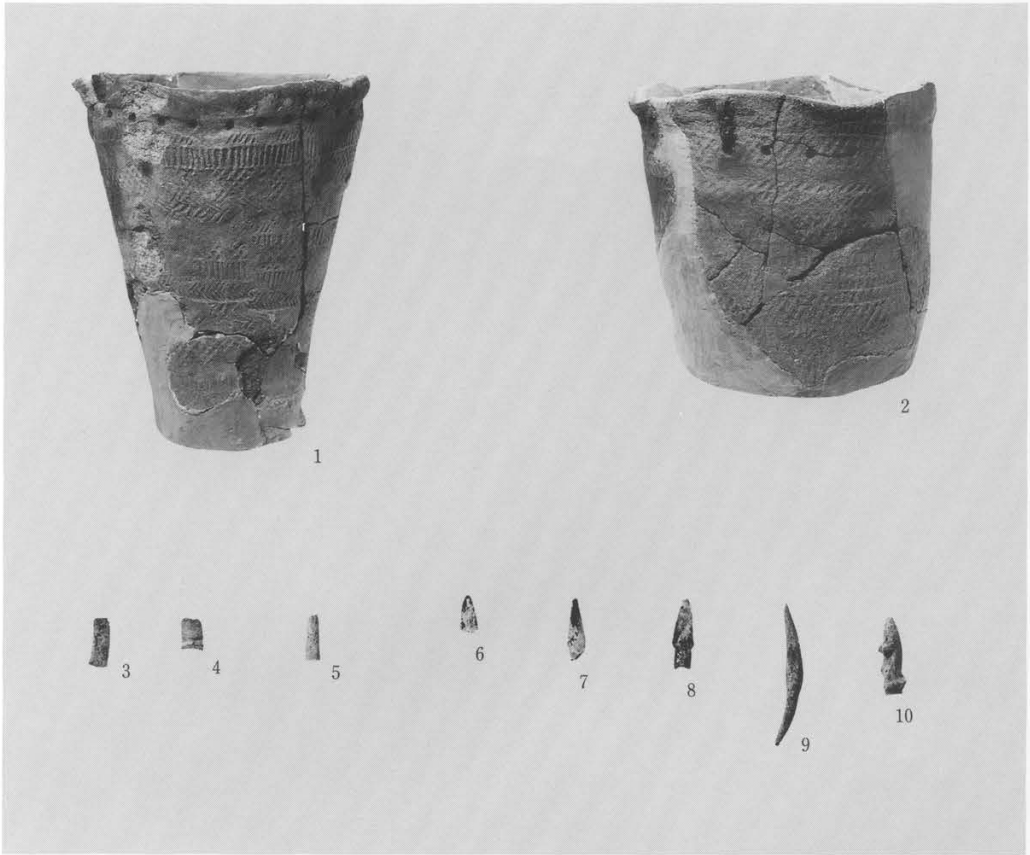
第Ⅳ層出土土器 (6)



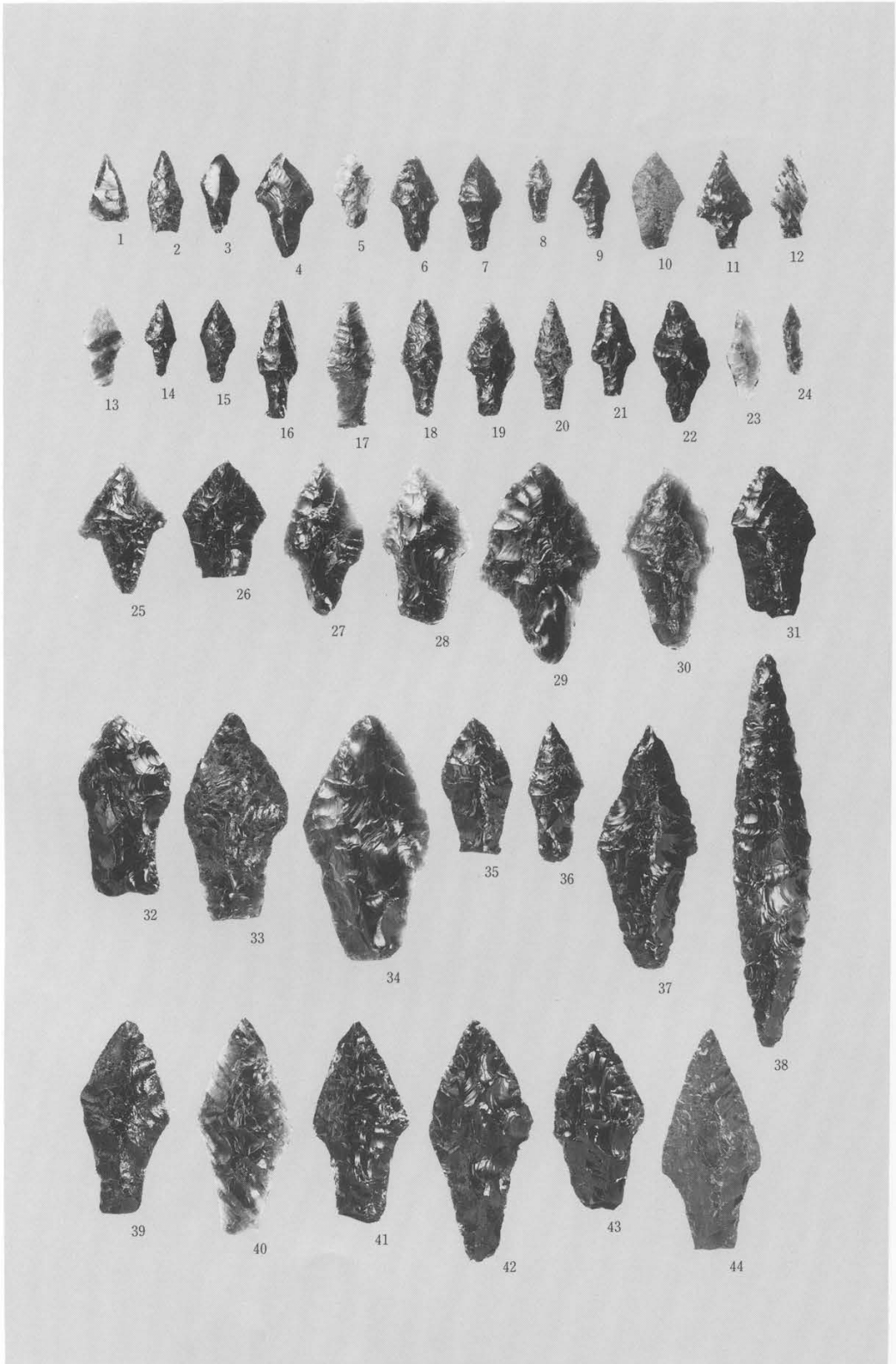


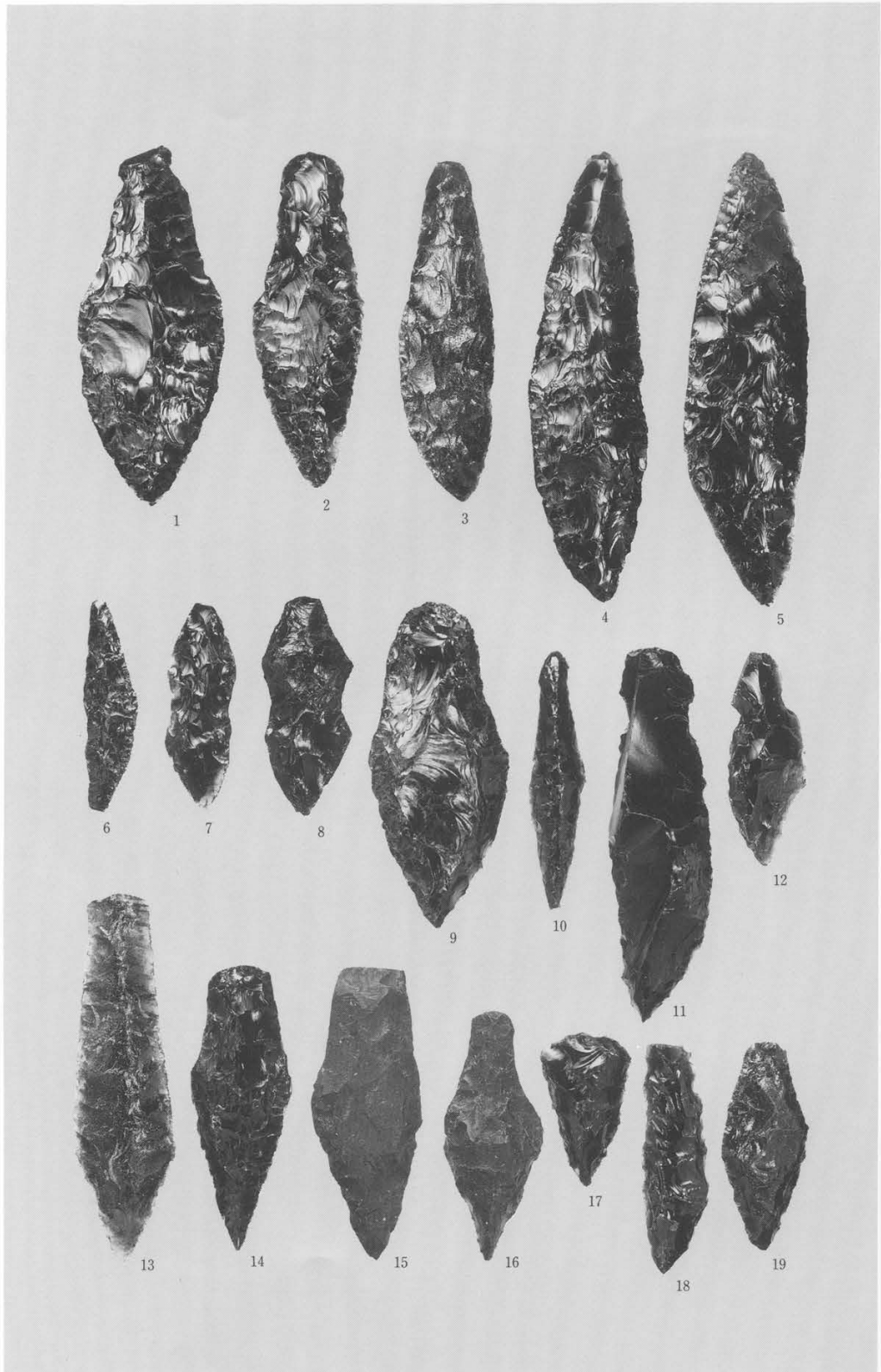




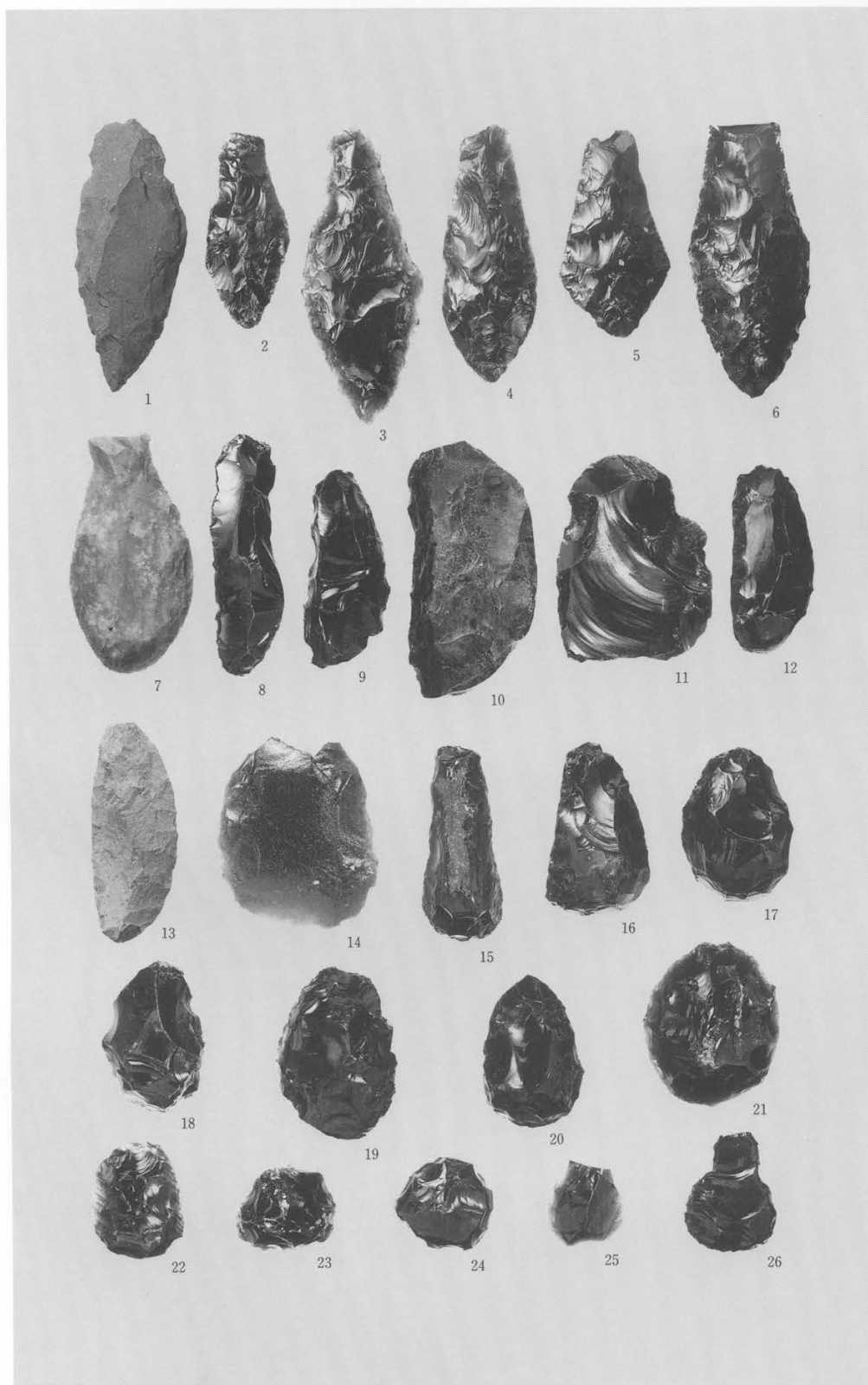


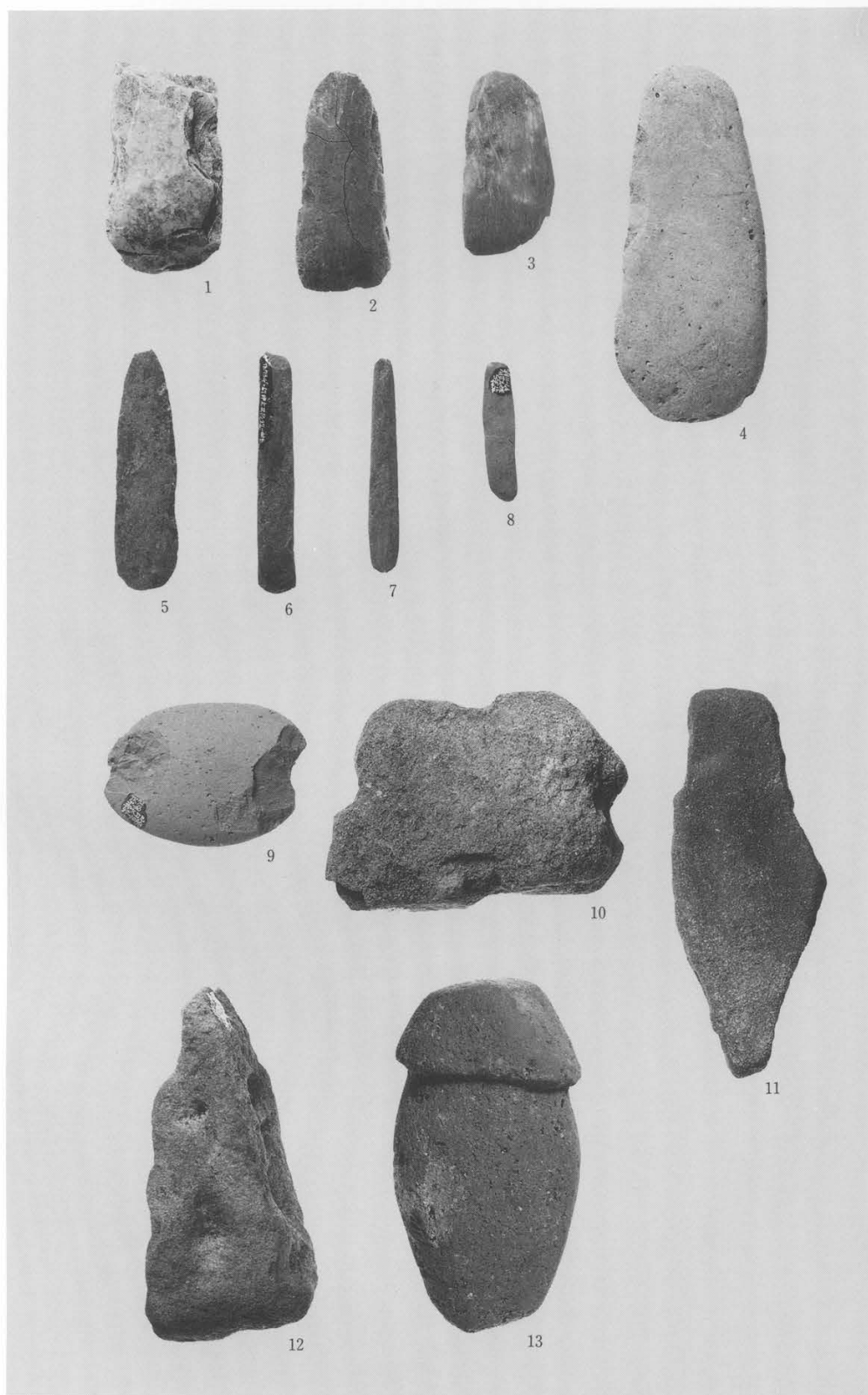
第Ⅻ層出土土器(11)·骨角器











報告書抄録

ふりがな	ところがわかこういせき				
書名	常呂川河口遺跡(2)				
副書名	常呂川河口右岸掘削護岸工事に係る発掘調査報告書				
シリーズ名					
シリーズ番号					
編著者名	武田 修				
編集機関	北海道常呂町教育委員会				
所在地	〒093-0209 北海道常呂町字土佐2-1				
発行年月日	西暦2000年3月23日				
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経
ところがわかこう 常呂川河口 いせき 遺跡	北海道常呂町字常呂	01553	I-16-128	44° 06' 58"	144° 04' 42"
調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	所収遺跡名	種別	主な時代
平成4年～ 平成10年	2,200	河川改修	常呂川河口 遺跡	集落 包蔵地	擦文 続縄文 縄文
主な遺構		主な遺物		特記事項	
住居跡, 土壇墓 石囲み炉群		土器・石器・骨角器・ 石棒		続縄文初頭の土壇墓から多量の琥珀玉が出土。縄文前期末から中期初頭の平底押型文は2期に別れ石囲み炉群を持つ。	

2000年3月10日 印刷
2000年3月20日 発行

常呂川河口遺跡 (2)

—常呂川河口右岸掘削護岸
工事に伴う発掘調査報告書—

発行者 北海道常呂町教育委員会
印刷所 株式会社 北 海 印 刷
北見市本町5丁目9-13